THE RECONSTRUCTION

改造

社會主義研究

新進創作家集

秋季特別號


GIFT OF SIDNEY M. EHRMAN
BEST MADE RED HAT WEAR GUARANTEED
赤帽印
滑(スリップ)ネクタイ
十人が十人
千人が千人とも
愛好する……
東京 南商店 大阪

新刊

◎山川菊榮著（四六版八ポイント組 約三百頁）

現代生活と婦人

定價壹圓四拾錢位 送料八錢

十月十五日頃發賣

■著者曰く■

本書は著者の第一論文集であります。著者は過去數年間の論文中より比較的研究的な性質を帶びたものを選んで本書に收めました。本書の諸論文のうちには、外國に於ける婦人運動、批判と紹介があり、一般社會問題に對する批評と感想とがあります。其觸るゝ所の問題は雜多でありますが、著者のこれに對する立場と論結とは、多くの論文を通じて一貫して居ることを信じます。現代生活と婦人に對する著者の見解は固より之に盡されたものではありませんが、著者は本書に依て、思想界に對する著者の功罪の問はれることを辭しないものであります。

武者小路實篤著 四版 **幸福者** 定價壹圓 送料八錢

ロンドン作 堺利彥譯 有島武郎跋 五版 **野性の呼聲** 定價八十錢 送料六錢

柳宗悅著 再版 **宗教とその眞理** 定價貳圓卅錢 送料八錢（滿鮮十四錢）

■有島武郎著作集■

第九輯 **或る女（後編）** 二十版 定價壹圓卅錢 送料八錢

第八輯 **或る女（前編）** 廿四版 定價九十五錢 送料八錢

第七輯 **小さき者へ** 十九版 定價五十五錢 送料六錢

第六輯 **生れ出る惱み** 廿四版 定價八十錢 送料六錢

東京牛込神樂町二丁目十一番地 **叢文閣** 振替貯金口座東京四二八八九番



改造秋季特別號目次

第六拾五回決算報告

貸借對照表

貸方(負債之部)

株金
諸積立金
社債
當籤償還未濟社債
配當未濟割賦金
未拂戰時利得税金
未拂金及買掛金
諸預リ金
鐘紡同志會預金
鐘紡共濟組合預金
故中上川氏記念奨勵資金
故朝吹氏紀念金
職工療養基金
職工衛生資金
使用人病傷老衰退職恩給資金
職工幸福増進資金
職工救濟資金
職工休養院及療養所建築費預金
戰後海外商工業視察費預リ金
前期繰越金
當期純益金
計

一七、四二七、六五〇・〇〇〇
一六、四三八、一九一・〇〇〇
六、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
六、八〇〇・〇〇〇
四四、二一六・七三五
三、六六二、〇〇〇・〇〇〇
六、九二六、九八二・六七三
六、五二一、一五八・一二七
八三、二一七・二二一
五九〇、二八二・一二〇
一〇五、二九五・〇〇〇
一〇四、七七三・五〇〇
八四、四二七・一四〇
一、七四二、四九五・四八〇
一、九四〇、一一七・三九〇
九三、八四五・五四一
六四、三三二・二六四
一七五、二五二・一五〇
四、三八〇、七五三・〇九〇
一〇、一三九、三九二・六七〇
七六、五二一、一七一・〇九二

借方(資産之部)

拂込未濟株金
土地
建物
器械
防火裝置
工場用具及什器
有價證券
淀川工場増設及
各店器械建物
増設勘定
預ケ金及現金
棉花爲替資金三
井物産會社勘定
職工立替金及假拂金
賣掛金及
運搬途中製品
小賣店賄所及
醫局勘定
原料製品仕掛物
屑物石炭荷造用
品及工場用品
期日未經過火災保險料
計

一、六四〇、六八〇・〇〇〇
二、四〇七、五八八・〇六〇
七、七二九、〇九一・九九四
七、四三八、七九三・〇五四
七六、一七一・六七一
五二、七三〇・二七二
四八六、四三九・三九〇
一、〇二〇、九一五・七五五
一九、九四七、八五九・九七六
一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
二、二三〇、〇八二・二二五
一、七六八、二五四・六四〇
五一五、五五三・三五一
一九、一二一、八三七・〇三四
八五、一七三・五七〇
七六、五二一、一七一・〇九二

損益計算

總收入金	二三、六七四、五四五・六三三
總支出金	九、五三五、一五二・九六三
差引	一四、一三九、三九二・六七〇
固定資産償却金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
戰時利得税引當金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
再差引當期純益金	一〇、一三九、三九二・六七〇
前期繰越金	四、三八〇、七五三・〇九〇
計	一四、五二〇、一四四・七六〇

内

株主配當金（但年二割）	一、五七八、六九七・〇〇〇
臨時株主配當金（但年五割）	三、九四六、七四二・五〇〇
諸種積立金	二、五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
職工幸福増進資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
從業員子弟教育貸費資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人職工臨時給與金	三五〇、〇〇〇・〇〇〇
役員賞與金	三〇〇、〇〇〇・〇〇〇
後期繰越金	五、二四四、七〇五・二六〇

右報告候也

大正八年七月

東京府南葛飾郡隅田村

鐘淵紡績株式會社

取締役會長日比谷平左衛門、專務取締役武藤山治、取締役藤正純、同長尾良吉、同前山久吉、同山口八左右、同橋爪捨三郎、同福原八郎、同望月榮作

右審査候處相違無之候也

監査役平賀敏、同野崎廣太、同清岡邦之助、同安田善三郎、同室田義文

追テ取締役前山久吉氏任期滿了ノ處再選重任セラレタリ


照明學會懸賞募集
一等當選
花霞
意匠登録第 14860
初秋の新裝
高尙なる御座敷には是非此の花霞を御取付け下さい其穩かな光りと優美なる形とは必らずや優雅なる氣分を御家庭に漲らせます
TEC
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎町
東京出張所 銀座尾張町 電話新橋
大阪出張所 西區阿波堀通 電話新町
門司出張所 西本町 電話
名古屋 仙臺 札幌 大連 上海

D-261

◼ 初秋の好讀物 ◼

前東京毎日新聞社長 山本實彦著 寫眞版三十餘頁

第五版

人を見よ山を見よ

新式總クロース
頗美本正價壹圓
郵送料八錢

序に曰く

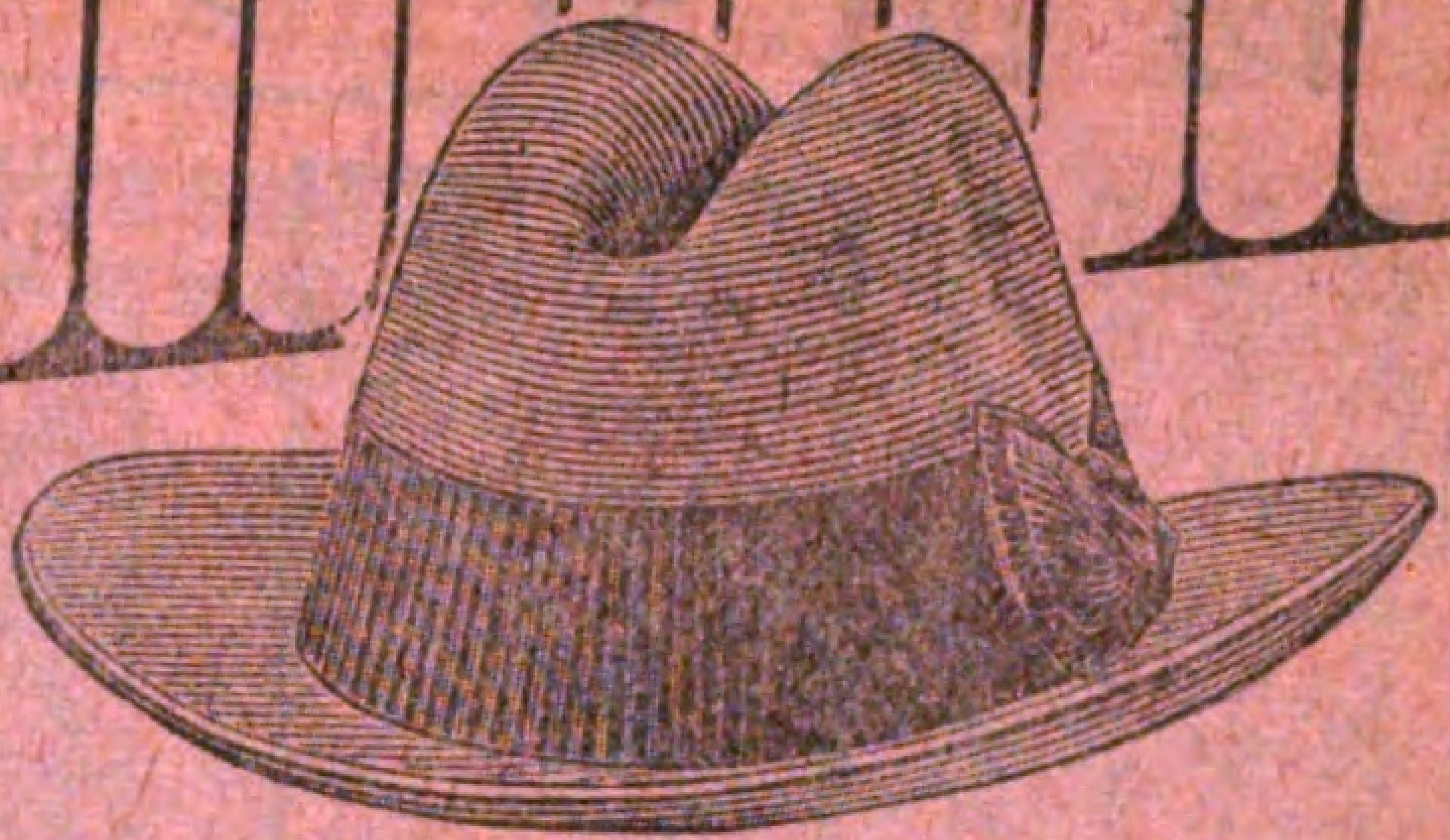
欠伸して一句。起きて一句。蛙が鳴いたで一句。世が綠になつたで一句。蚊がささぬうちに一句。みゝずのやうにのばしたこの一書。

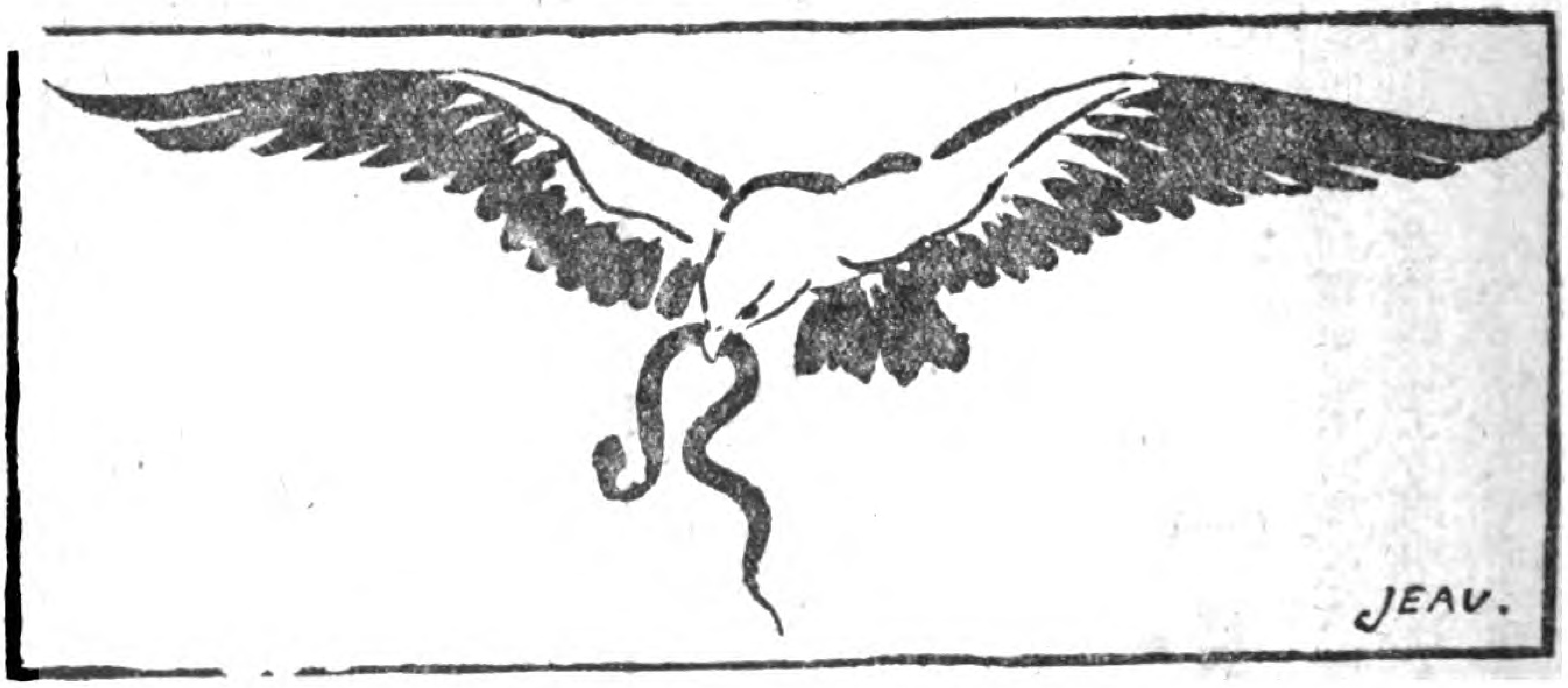
支那政界の大立者梁士詒を拉へて共和政に及第する目玉なるやと試驗臺に立ち、明石大將は豪傑試驗の落第者、水野前內相は探偵政治家の舊型、秋山中將は神經衰弱的天才なり、屈原は高士、雪舟は古今の人格者、鉢の木の常世が現代に慕はしいと欽し、佛法僧鳥を高野山頂に聽いて世界一の靈鳥なりと讃へ、濱口雄幸は、大宰相として適任なるやを評し、スコットの「湖上の美人」で名高いカトリン湖畔で半日の瞑想に耽れるを叙し、高知に民權婆さんを訪ねて民權論の當時を追憶し、頭山滿の情事を語る、巴里千尺の空中より歐洲の風雲を窺ひ、雪のウラル、月のスヱスに憧憬し、野武士の隊長、長曾我部元親の越へし四國アルプスを越へし記など全卷趣味溢るるが如し。

國民新聞 曰く人を見るにも山を見るにも一隻眼を有するは本書の著者り

東京朝日 曰く、人物評は皆着眼の他に類するを見ず蓋し近來の快著として江湖に推薦す

發行所 東京南品川東淺間臺二四六 **改造社** 電話高輪一一九〇 振替東京八四〇二





――《改造秋季特別號》――

赤の三等室

大いに曲つて解決された勞働委員、否資本委員の顔觸れを見れば、依然として、低調三等室の感がある。この人々を國費で遙々米國まで恥曝しに遣る政府も、國民も亦、巴里會議第二の屈辱に甘んぜなくてはならぬのだ。

委員の二三氏が世界的思潮を了解するにしても、勞働問題に於て、徹底せず、殊に人道的熱情を高唱して、各國委員を傾聽せしめ、首肯せしめ得る、識見と抱負を有するの一大雄辯家なきは遺憾の極である。

特に選出された委員の顔觸れを見れば、宣傳に巧みな人もなく、勞働問題に造詣深い學者もない。それ以上に失望するのは、一行の元氣のないことである。勇氣の缺げたことである。哲學的素養のないことである。雄辯家の缺げたことである。品よい（實は惡いが）お姫さんが米國のブッキラボーの醜男と對陣して何れ丈けの强味がある。人道的戰士に空虛なる一行を目して「赤の三等室」と稱する所以である。

委員の選出には失望した。これからは顧問の選擇に十分の力を注ぐことゝ國民の總てが自覺して、具體的案を提げて委員を督勵するにある。しかし、米國にせよ、英國にせよ、佛國にせよ、經濟上の先進でありながら、未だ、自國にさへ賃金時間の協定出來ぬものを、經濟組織の劣等なる小弱國と協調、締盟せんとするは、一見出來ぬ相談の如くである。亂暴極まる會議たるかの如くである。識者も、我政府者も、我が委員も、その無理なるを知る、英米勞働者の賃金を以て、印度、阿弗利加土人に同律で歩けと云ふの不可能なるが如く日本委員も初めから除外例を申出ることに極つて居る。

時間＝賃金＝これ等の問題は第二の問題である。第一の問題は、それ以外に勞働者の人格を認めるにある。會議の根本は時間問題でなく、賃金問題でもなく、人格を基本においての解決でなければならぬ。巴里會議には外交家が必要でなく、政治家が必要であつた。今回は眞の人間即ち人類の將來に心を潜む。人道的熱情家の手をからねばならぬのだ。

人類として生くべき道は一である。隨つて解決さるべき道も一でなければならぬ。そうして見ると日本も初から除外例を申出るの不合理、不徹底なることが分明する、この根本を中心として、積極的に能働的に勞働問題の解決を迫るがよい。始めからつまらぬことを氣にかけてクヨクヨせぬがよい。人道のため勇敢に前進する以外に何も考へる必要はない。

（九月十五日）

社會主義研究



如何に改造する

（勞働組合主義乎國家社會主義乎）

法學博士　河田嗣郎

（一）經濟組織改造の必要

社會問題の根本的解決は、現在に於ける經濟組織を改造することに依りてのみ、行はれ得る。元來社會問題は社會生活の一般に關係する問題ではあるけれども、主としては經濟生活に關する問題で、就中特に所得の分配に關する問題である。然かも問題は經濟の現組織が有する諸多の缺陷から發生するものであるから、其の缺陷のある限り社會問題は當

然に起らざるを得ない。而して其の缺陷たるや、現時の經濟が其の根本組織に於て之を有するものであるから、這間に生ずる社會問題なるものは、之を根本的に解決せむが爲めには、どうしても現時の經濟組織を改造して、更に完備せる新組織を造り出す工夫を凝さなければならぬことになるのである。

若し現時の經濟が完全無缺のものであるならば、其働として行はるゝ經濟生活は、また圓滿無碍なるものでなくてはならぬ。よし何等かの外來の障礙の爲めに、其働が圓滑に行はるゝを得ずして、這間に問題の生ずることありとしても、其の原因は外來のものであるから、之を救治するには、組織其者に手を觸れずとも、たゞ外來の障礙だけを取去ればそれで可いのである。然かるに、今詳かに現時の社會問題の發生し來る原因を講究して見ると、そは何れも現在の經濟組織そのものに固有なる缺點から生ずるものであつて、外來的のものでない。試に社會問題なるものを、所得の分配に關する階級間の問題として、之を資本主及び企業家と勞働者との利害衝突より起り又その利害衝突として表はるゝものなりとせば、そは畢竟、現今生產事業が企業として營利的に、私人又は私會社の手に依りて行はれ、企業家が生產の管理を爲し、從て分配を行ふの任に當り、勞働者は之に勞働を賣りて其の代價を得て生活するの組織になつて居るからのことである。即ち現今私的なる企業の行はれ、賃傭勞働制(ウエージ・システム)の行はるゝ組織となつて居るが爲めに、企業家は只管に自己の企業利潤を大にせむと欲して、勞働者の利害を無視し、之を絞り取ることとなり、玆に兩者は利害相容れざる相對立せる兩階級として、其間に反目と軋轢とを生ぜざるを得ざることとなるのである。

然るに若し現時の生產が、私の企業として行はるゝ組織になつて居らず、勞働は又賃傭勞働制の下に之を賣買するの組織になつて居なかつたならば、右の意味に於ける社會問題は發生するの餘地がない筈である。(社會問題の發生する理由に就いては、私は近著『社會問題及社會運動』に於て百五十餘頁に涉論して置いた。讀者は同書を參照せられむことを望む)

何れにしても、社會問題なるものが、現時の經濟組織に固有なる原因より發生するもので、或人々の考ふるが如く、

歐米傳來の流行品にあらざる限りは、之が解決の道はどうしても組織そのもの丶改造に任せなければならぬ。社會問題解決の爲めに勞働者自ら運動を起すにしても、又國家が所謂社會政策を行ふにしても、窮極する所は社會と經濟との現組織の改造といふことになつて來る。組織の改造に手を觸れずして、僅かに問題の發顯を抑ゆるだけでは、何程運動を起して見ても、何程施設をして見ても、問題の解決は行はれ難い。或派の人達は國家の行ふ社會政策の如きは、現組織を是認して、たゞ其の缺點を補塡し改繕するに過ぎぬ。彼の社會主義の如く、現組織を否認して其の改造を行はんとするものでない。是れ社會政策と社會主義との異る所以なりと主張するけれども、それは辯へざるものたるの譏を免れ難い。社會政策も亦、其の理想とする所は廣く社會主義の理想とする所に異らず。必竟は現組織を改造して、更に合理的なる新組織を造り出さんとするに外ならぬ。而して社會攻策は、そがたゞ膏藥貼りの姑息手段を弄する限りは、殆んど多く効果なきものであつて、根本的に組織改造の事業に指を染むるに至つて甫めて効果を擧げ得るものである。

かるが故に私は、社會問題を本當に解決しやうとするには、何れの道を行くにしても、結局は現制度現組織の改造を行ひて、新たなる制度組織を樹てる設計をせなければならぬと信ずる。又其爲めの運動が行はれなければならぬと信ずる。而して若し之を廣き意味に於ける社會主義の實現といふならば、社會主義の實行が即ち社會問題解決の道なりと信ぜざるを得ないのである。尤も社會主義といふ辭は、甚た廣汎にして複雜なる内容を有するものであるから、社會主義の實現といふに就いては、一通り其の意義を吟味して、如何なる種類の社會主義の行はるべきか、行はれさるべからざるかを講究してみなければならぬ。之を講究して見たる上に確乎たる方針を定め、之に向つて着々改造の事業を行ひ、新建設の爲めに盡力せなければならぬ。

然るに現今尙ほ我國に於ては、社會問題を論議する聲の甚だ喧しきに拘らず、此の大方針に關しては、未だ十分なる研究も行はれなければ、從て運動も行はれて居らぬ。是(これ)は洵に大いなる手落といはねばならぬ。或は、先づ喧しく社會問題の論議されたる上に於て、甫めて此の改造の方針に關する意見の定り、運動の行はるべくして、現狀はまだそれ迄

に至つて居らぬのかも知れぬけれども、私としては此の狀態に滿足することが出來ぬ。是非とも將來吾等の進むべき道を見出して、之に對する用意をせなければならぬと思ふ。玆には專ら此の將來に造り出すべき新組織に就いて、從來行はるゝ諸多の主義主張を叩き、我が國情と民俗とに鑑みて、其の選擇をして見たいと思ふのである。(其の選擇の必要と大體の方針とに就いては、最近大阪每日新聞紙上に「何處へ往く」と題して愚見を陳べて置いた。併せて讀むで戴けば私の主張と其理由とを明かにする上に好都合である。)

(二) 新組織の根本問題

現在の經濟組織は根本的に之を改造するの必要ありとして、扨て問題は、如何に之を改造すべきかに存する。現狀を打破するはさまで困難の事業ではあるまいが、打破して次に如何なるものを造るかゞ問題である。たゞ破壞之を能事とするといふのならばいざ知らず。又破壞即ち創造といふ見解を執り將來の計畫は樹て得べきものでない、たゞ現狀を破壞さへすれば、必ずや何等かの新しき組織が出來るといふが如き態度を以て、兎も角も現狀を破壞するといふのならばいざ知らず。苟も斯かる無責任を敢てせないといふのならば、必ずや將來に造り出すべき新しき經濟組織に就いては、大體其の計畫を建てゝ掛らなければならぬ。

此の將來の新組織に關する計畫は、現今色々に行はれて居る。而して其の計畫の相違は社會及び經濟生活に關する主義の異るに依つて生じ、其の相違よりして玆に廣く社會主義と呼ばるゝものゝ中にも、幾多の分派を生ずる次第である。私は今その諸多の主義主張に就いて、一々之を解說するの暇を持たぬから、玆にはたゞ吾等が將來進み行くに就きて、何れの主義に依りて、大體如何樣の計畫を樹つべきかの問題を決するに必要なる限りに於て、之を解說し、又批評して擇るべき所を定むるに止めて置く。

將來の新經濟組織に就いて考案を樹てるが上に、先づ第一に講究すべき問題は、新經濟組織の下に於ける產業の管理は之を如何にすべきやといふ問題である。又何者をして、其の管理の任に當らしむべきやといふ問題である。而して

産業の管理といふことは、解かり易くいへば、先づ何を生産すべきか、何程生産すべきかといふ、生産さるべき財貨の種類、品質及び數量に關するものであつて、何者かゞ之を決定せなければならぬ。次には、如何に之を生産すべきかといふことで、生産の方法及び過程に關し、之亦何者かゞ決定せなければならぬ所である。次には、如何なる條件の下に之を生産すべきかといふことで、勞働時間勞賃其他諸般の勞働條件の如きは、總て此の題目の中に入り來るのである。惟ふに右の三點に關する管理を如何に行ひ、又何者が之を行ふかといふことは、實に産業の組織と、其の活動とに關する根本問題でなくてはならぬ。

右の意味に於ける産業の管理をば總て企業家といふ私人や私會社に一任するのは、現在の經濟組織である。然るに之を企業家の手に一任するに於ては、企業家はたゞ自己の企業利益をのみ眼中に置いて、他の利害を顧るに暇なく、動もすれば、社會全般の利益を犠牲にして自己の利益增進をのみ計るの弊に陷り易く、又普通に、實際生産上の勞務に當る勞働者の利益を壟斷して顧みず、玆に社會問題を惹起せしめて、現今之を見るが如き社會的不安を釀成するを避け難い。玆に於てか、斯かる經濟組織は之を改造せなければならぬ問題となつて來たのであるから、此の産業の管理といふ事業はどうしても、私的企業家の手より之を奪ひて、他の何者かの手に委託せなければならぬのである。然らば之は何者の手に移したらよいであらうか。

元來生産は消費の爲めに行はるゝもので、消費は目的であり生産は手段たるに外ならぬものであるから、生産は消費者の利益の爲めに其手に依りて管理せらるゝを至當とするといふ見解がある。彼の集産主義（普通に謂ふ社會主義）の主張の如きは之である。卽ち消費者に依りて地方自治體の作られ又國家の造られ、其の自治體なり國家なりが全般の人々の利益の爲めに生産を管理し、何物を、何程、如何にして、如何なる條件の下に生産すべきかを決定し、自ら諸般の産業を管理して生産を行ひ、併せて分配を行ふ組織を建てんとするものであつて、國家自ら之を行ふ場合には所謂國家社會主義となるのである。此の組織の下に於ては、資本の私有と營利の爲めにする私的企業とは禁止せられ、資本は國

家又は地方自治體の有とせられ、生産事業は、國家又は地方自治體の經營に移さるゝこととなる。而して國家や地方自治體は、自ら産業管理の任に當るものであるが、生産は固より直接には勞働者に依りて行はれ、勞働者は國家又は地方自治體に雇はれて、勞働に從事するものとなるに外ならぬ。從て此の組織の下に於ては、生産は消費の目的の爲めに行はれ、國家や自治體に於ける全體の消費上の必要の見定められ、其の需要に對して之を滿すが爲めに必要なる種類の財貨が、必要なる分量に於て生産せられ、其の生産を如何なる條件の下に如何樣に行はしむべきかは、國家や地方自治體が之を決定することとなるのである。されば此の組織は、消費者本位の組織といふて大過なきものである。

然るに、之に對して彼のサンヂカリズムの主張する所のものの如きは、純然たる生産者本位の組織である。即ち生産は實際其業に當る所の勞働者自らが、之を管理するのが至當である。たゞ勞働者が自ら之を管理し、自らの事業として之を行ふに於て甫めて、勞働は自由たり得べく、又獨立たり得べきのみ。たとへ國家といへども、其の管理の下に生産が行はれ、勞働者は之に雇はれて勞働する分では、やはり勞働者は其の勞働を賣つて生活するものたるに外ならず、不自由と從屬とは、現時の經濟組織の下に於けると、多く異る所がないであらう。特に國家や地方自治體が、消費者の團體として産業を管理するものたる限りは、生産者の利益は消費者の利益の爲めに犠牲に供せらるゝを避くるに由がない。然るに、元來財貨は其の生産の行はるゝに依りて甫めて消費の行はれ得べきものなれば、生産利益は消費利益に先立たなければならぬ。少くとも直接に生産の勞務に當る者は、何物を何程如何樣にして生産すべきか、又其の生産を行ふに當りて、其の諸條件を如何にすべきかに就ては、自ら之を決定するの權能がなくてはならぬ。他の利益の爲めに他に依りて支配せられ乍ら、其の生産に與はるといふは不合理である。人が人に支配せられ、之に從屬するといふが已に不合理なる上に、他の利益の爲めに生産の勞務に服するに至つては、更に不合理を重ぬるものである。されば、將來の産業は勞働者自ら之を管理する組織とならなければならぬ。其爲には、勞働者は團結して組合を作り、各組合は自主的なる自治體として産業管理の任に當るを必要とすると主張するのである。そが飽迄生産者本位なるを知ることが出來

る。

國家や地方自治體が、社會全般の利益の爲めに、自ら產業を經營管理するの組織を建てやうとする集產主義は、獨逸や英國などに於て、從來最も勢力があり、勞働者が自主的組合を造つて、產業の經營管理を行はんとする主張は、從來佛蘭西や伊太利などに於て行はれて來たのであるが、近時は英吉利の如きに在りても兩者の主張が、並び行はれて、互に勢力を競はんするの勢を呈し來つた。私は今此の兩主張を比較論究して、其の主張の長短を明かにすると同時に、將來我が日本の問題として、右何れを採るべきか、乃至は兩者を如何に調和して我が組織を定むべきか等の問題を、攷へてみることの、甚だ興味多く、又必要已み難きものなるを思ふ次第であるが、それを爲すに先ち、今少しく、此の兩主張に就いて理解を得る爲めに、說明的筆を進むるを適當と考ふる。

（三）改造計畫の重點

普通に社會主義といへば即ち集產主義（コレクチヴイズム）を意味するほどに集產主義は、學說としても實際運動としても、最も勢力を張つたものである。其の好く勢力を張つた所以は、其の理論が簡明で、何人の頭にも入り易く、唯物論的推理の下に、經濟の組織に議論を集中して、何人にも理解の出來、又尤に聞ゆる批評と立論をしたことと、今一つには、其の主義の宣傳運動が有能者に依つて熱心に行はれたこととに存する。而して現今に至るも、其の勢力は拔くべからざるものであるけれども、然し近時何となく世間は、之に對して飽足らざる思を爲し、其の信仰者の熱心は、前ほどではなくなつて來たやうである。

英吉利などに在つても、かのフアビアン協會が全盛を極めた時代に在つては、其の勢力は實に飛ぶ鳥を落すといつたやうな有樣であつたが、近時はサンヂカリズム流の見解が却つて喜ばるゝの風がないでもない。フアビアニズムの唯物的見解に飽足らず、又其の純理論的態度に不滿足を感じたる人心は精神的要素に富み、特に直覺的熱情に訴へて事を爲さんとし、ペダンチックな臭味なくして、直情徑行的な態度を以て直ちに人心の奧深く潛ぐり込まんとするサンヂカリズム

が歡迎せらるゝの氣運が少からず動いて來たやうである。而して英吉利に在つては、彼の佛蘭西流のサンヂカリズムが大體共鳴に於て歡迎せらるゝといふよりも、佛蘭西に比すれば遙かに勞働者の組合團結の發達せることとて、之を基礎として、英國一流の職工組合主義（トレード・ユニオニズム）の擴張に依り、新たなる勞働組合運動と共に新たなる勞働組合主義を建設せんとするの風を呈し來つた。彼のペンチー等のギルド、ソシアリズムや、雜誌新時代（ニュー・エージ）一派のナショナル、ギルツや、乃至はコール等の大組合主義（グレーター・ユニオニズム）の如きは、何れも此の新氣運を示すものである。其の主張は大同異曲、大抵相似たもので、つまりは佛蘭西流のサンヂカリズムと呼應して、勞働組合本位の新社會組織を樹立せんとするに存する。特に此等がフアビアン協會派の集產主義に對抗して、新しき哲學の下に新しき主張を揭げ、新しき運動を試みつゝある點に面白味もあれば、又其の主張や運動の意義も在るのである。

然しそれは兎に角として、我國に於て吾々が現にぶつ突かつて居る問題の解決に對して參考となることは、前述の如く、集產主義が消費者本位なるに對して、佛蘭西流のサンヂカリズムは生產者本位であり、之に對して英吉利の組合社會主義は右兩者が一方に偏倚して居るのを避けて、生產者の利益と消費者の利益との調和を計り、其の調和の行はれ得る新組織を建てんとするの點に存する。即ち彼のナショナル、ギルツの如きは、生產上の管理は主として勞働者の自治團體たる勞働組合（新しき基礎の上に立つギルド又はツレードユニオン）の手に依りて之を行はしむべきであるけれども、それと同時に、國家は常に消費者全般の利益を代表して之と協調を計るを要すとする。されば新しき組織は、生產上の事は之を勞働者の組織する機關に一任し、然かも國家は之と相並びて產業以外の多くの公共的任務の爲めに機關を有し、勞働者の自主的自治團體たるナショナル、ギルツと國家組織とが相併存して、然かも相互の協調を計り、或種の事務は共通に之を行つて、生產利益の偏重を避け、又消費利益の偏重を避けんとするのである。此點は洵に重要なる點で新組織を講究する場合には、十分考慮を要する所と謂はなければならぬ。

現今の組織の下に於けるが如く、企業家に依りて產業管理の行はるゝが爲めに、生產者としての勞働者の利益も、消

費者としての一般社會の利益も、共に無視せられ壟斷せらるゝ組織は、組織として實に不完全なもので、言語同斷の話であるが、さりとて又サンヂカリズム流にたゞ生產者としての勞働者の利益のみ顧慮せられて、一般社會の消費者としての利益が絞り取らるゝの恐ある組織も、決して完全なる組織といふことが出來ぬ。一般社會は獨り勞働者の社會ではない。現今資本主や企業家が跋扈して、社會の利益を壟斷することの堪え得べからざるが如く、勞働者が跋扈して天下を我物顏に振舞ひ、自己階級の利益の爲めに、社會一般の利益を壟斷するの狀態も、等しく又堪え得べからざるものである。されども亦國家が社會一般の利益といふ名の下に、實際生產の勞務に當る勞働者を奴隸扱し、現今企業家が雇主として其の利益を絞り取るが如くに、國家が雇主として勞働者の利益を壟斷したり掠奪したりするが如きことゝなつては、之れ亦實に不都合千萬な話である。

何れにしても、或者が他者の利益を壟斷し掠奪するは怪しからぬことである。其の行はれ得る組織は、不都合な組織である。不完全な組織である。されば今不完全なる經濟の現組織を改造して、完全なる新組織を造らんとするに當つては、此の利益壟斷の行はるゝ餘地のない組織を建てることが必要で、其の好く行はれざる限りは、改造は徒勞に終らざるを得ない。一の暴君を亡ぼして、他の新たなる暴君を迎へる分では、何の爲めの改造だかわからないことになつて終まうのである。

（四）産業管理と組織

然らば將來に造り出さるべき經濟組織に於ては、其の產業の管理を如何にしたらばよいか。之を攷ふるに就いては、やはり前に述べたやうに、何を何程生產すべきか、如何に生產すべきか、如何なる條件の下に生產すべきかの各項に涉る問題を別々に講究して見ると便利とするであらう。

先づ如何なる種類の物を、如何なる品質に於て、何程の分量だけ生產すべきかの問題に就きて其の決定を與へ、此點に關して生產管理の任に當るべき者は、生產者たるべきか、將又消費者たるべきか。私は之はやはり消費者でなければ

ならぬと思ふ。若し生産なるものが、消費に關係なき事實であるか、然らざれば消費には關係ありとも、兩者を比較して見て生産が消費よりも人生に取りて重要な事柄であるならば、生産は消費を支配し從て生産者は消費よりも重要の地位を占め、少くとも生産者は生産に關して、何物を何程生産するとも、全く自己の自由裁量に委かすことゝして差支ない筈である。其の場合消費者はたゞ生産者より與へられたる物を得て、滿足すべき筈である。然るに事實の眞相は決して右の如くなるを得ない。生産は元來消費の目的の爲めに行はるゝもので、消費の目的を拔きにしては、生産の意義は成立ち得ない。消費といふ事實は人の生活と離るべからざるもので、實は生活其者を形造る一要件である。從て消費は行爲としてはそれ自身一の目的行爲である。然るに生産といふ事實は消費といふ事實あるが爲めに之に關聯して甫めて意義を有し、消費と連繫して甫めて人生に必要缺ぐべからさるものとなり、人の生存の一要件を爲すものである。されば生産は、それ自身一の目的行爲ではなく、消費の目的の爲めにする手段行爲たるに外ならぬ。

事情斯くの如くなりとせば、今生産の行はるゝに當りて、如何なる種類の物を如何なる品質に於て、何程の分量だけ生産すべきかの決定を與へ、此點に於て生産の管理を爲す者はどうしても消費者でなくてはならぬ筈である。生産者は消費者の決定に從ひて、其の必要とする物を必要の分量だけ生産すればそれでよいのである。若し之を轉倒して、生産者が獨り生産の管理を爲し、其の生産を、財貨の品質及び分量に於て自由に決定することになれば、生産は常に必ずしも消費上の必要に適合するを得ず、其の結果、目的たる消費が、手段たる生産の爲めに左右せらるゝこととなるを免れ難いのである。此の事情は、現時の資本主義組織の下に於ける企業生産に於て、表はれて居る弊害であつて、其の弊害の爲めに一般社會は甚だしく惱まされて居るのである。食料問題の如きは、就中特に顯著なる例である。されば、此誤りを再びせざるが爲めには、將來の經濟組織に於ては、生産の行はるゝに際して、財貨の種類、品質分量等を決定する者は、消費者でなくてはならぬ。況んや生産者なる者も、實は一面に於ては消費者たるに外ならさるに於てをや。

であるから私は、將來の組織に於て此の方面の産業管理をする者は、一般の消費利益を代表する國家が地方自治體な

らざるべからずとする主張を執る者であつて、此點に關しては、集産主義（コレクチヴィズム）の立場は正當だと考へる。

次に産業管理の第二の點、即ち如何に生産を行ふべきかといふ、生産の過程や方法に關する問題に就いて考へてみやう。此點に於ては私は、それは大抵の所まで實際生産の任に當る者の自由に委かすべきだと思ふ。而して生産の實際に當る者は主として勞働者であるから、勞働者の團結を認め、其の發達を促し、又其の自治を許して、彼等をして自己の判斷に從て、自由に生産の方法を選定實行せしむるが正當である。現今の組織の如く、此點に關しても企業家の獨裁的管理を許し、如何なる方法を以て、如何に生産するかといふことまで、企業家が之を定め、勞働者は否應なしに之に從ひ之を奉じて、勞働をせなければならぬといふ組織は、不都合な組織である。されば將來の經濟組織に於ては、此點に關する現狀の弊害は之を除去するに努め勞働者をして自治的に之が任に當らしむるの組織とせなければならぬ。尤も一般消費者は財貨の品質分量等に關しては、前述の如く決定權を有たなければならぬのだから、生産の方法も亦、必要の財貨を必要の品質及び分量に於て生産するに足るものでなければならぬといふ點に於ては、之に容喙するの權能を持たなければならぬ。從て生産の過程に關する管理も全く之を勞働者團體の自治に放任するわけには行かぬのであつて、此點に關しても亦國家は其の決定の至上權を持つて居なくてはならぬと考へらるゝ。

斯るが故に私は、生産の過程に關しては之を勞働者團體の自治に一任せんとする勞働組合主義者や、ナショナル、ギルヅ論者の主張には、大いに理由があると思ふけれども、その理由ある所を容れて、大抵の所までは之を勞働者團體の自治に一任するの仕組さへすれば、必ずしもナショナル、ギルヅの主張の如き組織を造らずとも、やはり集産主義（コレクチヴィズム）の主張に依り、國家が産業の全管理を行ふの組織でやつて行けると思ふ。特に我國などの問題としては、英國や獨逸に於ける集産主義者の主張を、其儘に採用せなければならぬ必要はないのだから、此點に於ては大いに之を緩和して、勞働組合主義者の主張を容れ、國家が管理上の至上權を失はざる範圍に於ては、勞働團體の自治を認めて然るべきだと考へる。國家自ら生産業の管理に當り乍ら、其の生産に當る勞働者の團體を發達せしめ、生産の方法に關して大抵の所まで

其の自治を許すことは、決して行はれ得べからざる所でない。

而してギルド、ソシアリズムの或人々の如く、機械使用の制限を行はんとするが如きは、愚の極である。人が機械を使用するのではなくて、機械が人を使役するが如き種類の機械は、其の使用を廢止せんとするの議論には、尤に聞ゆる所もあるけれども、機械が人を使役する如く見ゆる場合にも、實はやはり人が機械を使用しつゝあるのである。たゞ現今生産の組織が企業組織で勞働者が雇主たる企業家によつて絞り取らるゝの仕組になつて居るが爲めに機械使用といふことが、勞働者の絞め道具となるわけである。だから勞働者が自主的に生産を行ひ得る仕組にさへなれば、機械の使用はどんな機械でも、やはり人が自然を征服する道として、勞働者に取りても其勞苦を省き勞働功程を大ならしむる所以である。何れにしても、機械の使用を廢止若くは制限せむとするが如きは、愚策たるを免れぬ。

次に生産管理上の第三の問題たる、生産の條件の決定に關する點に就いて考へて見るに、私は此點も亦、第二點と同様に考へらるゝと思ふ。即ち一般消費者は、其の必要とする財貨が必要とする品質ゝ分量とに於て、都合よく供給せられ、又必要とする時期と場所とに於て供給せらるゝ限りは、其の生産の過程が如何様に行はれやうとも、多く關知せざると同様に、其の生産の條件も亦、如何様に定められやうとも、彼此云ふべき理由はない。されば此點に關する決定も亦、大抵の所までは、實際上生産の勞務に當る人々の自由に委かせ、其の自治的決定によらしむべきである。たゞ併し乍ら、勞働の條件中に在りても、勞賃の如きは總て生産せらるゝ財貨の價格に影響するもので、結局は消費者一般から之を支拂ふこととなるものであるから、其の決定を全然勞働者に一任するわけには往かぬ。此等に關しては、消費者一般の利益を代表する國家は、やはり之に容喙し、決定の至上權は之を國家が持つて居なくてはならぬ。たゞ現今企業家たる雇主が、勞賃を低くして企業利潤を大にせんと欲し、爲めに勞働掠奪の弊害を見ることの甚だ不都合なるが如く、將來の組織に於て國家が雇主として、やはり勞賃を絞り、勞働者をして共生に安んずるを得ざるが如きことあらしめては、それ亦、大いなる曲事である。されば勞賃の決定に關しては、國家は常に人道上の見地よりして、之が決定を行ひ、又

勞働者の團體と常に協調を遂げて、苟も勞働掠奪の譏を被らざるやう、心掛なくてはならぬ。

けれども、將來の組織に於ては、國家はよし自ら產業の管理の任に當り、其の經營を行ふとも、それは決して現時の如く、企業として營利の目的の爲めに之を行ふものではないのだから、現時の如き勞働掠奪の行はるゝ恐はない。特には、現時に於ける此の弊害を除去せんが爲めに、組織の改造を行ふのであるから、苟も掠奪といはるゝが如きことは、獨り勞資に於てのみならず、何れの方面に於ても行はれてはならぬ筈である。而して之を行はさらしむるが爲めには、國家を組織する者の中には、勞働者も加はり居ることだから、國家の意思を決定するにつけ、又之を實行するにつけ、常に勞働者の利益も公平に顧慮せらるゝの組織を造り、かゝる國家組織となすことが必要となつて來るのである。此點に關しては後にまた詳論するであらう。

ともかく產業管理に關しては、私は右に述ぶるが如き組織を立てたいのであつて、それは大體に於て、集產主義(コレクチヴィズム)の組織に據りて、之に勞働組合主義(ナショナル、ギルヅやサンヂカリズムやを含む)の主張を加味した組織が、最も完備せる有效の組織だと考へる。

(五) 國家社會主義と其の要件

我邦に於ける將來の經濟組織としては、私はやはり國家を中心とし、國家が產業の經營管理を司る組織が最も適當な組織だと考へざるを得ない。國家的なる社會主義組織に對しては、色々の杞憂を懷く者が少くないのであつて、ファビアン協會の集產主義(コレクチヴィズム)に對しても、種々其の欠點を指摘するものがある。特にギルド、ソシアリズムの一派は、猛烈なる反駁や論難をして居る次第である。而して其の杞憂の主なる點は、國家は到底其の組織を以て產業の管理經營の大任に當り得る能力を有するものでなく、又其の能力は之を有するとしても、集產主義的な國家社會主義の實現されたる曉に於ては、例の形式主義と官僚風とは、產業方面に於ても遺憾なく發揮し來つて、人々は到底其煩に堪えず、世を擧げて拘子定規の世の中となつてしまうであらうといふに存する。從て其の恐を避け、眞に有效完備なる組織を建てんが爲め

には、國家の仕事は之を産業以外の普通行政に限り、産業の事は、一切之を勞働者の組合團體に委任し、其の自治に委かすべしとせられるのである。

國家社會主義に對する此の杞憂は、サンヂカリズム的臭味を有する主義の何れも之を有する所である。而して彼等は此憂を避けんが爲めに、勞働組合を基礎とする新經濟組織の採るべきを主張するのであるが、今我國に於ける實際問題としては、私は此の恐と非難あるに拘らず、やはり國家社會主義の行はるべくして、勞働組合主義(サンヂカリズムにせよ、ナショナル、ギルヅにせよ)の容易に行はれ得べからざるを信ぜざるを得ない。其故如何にとなれば、我邦の國情民俗は、英吉利などに於けるとは頗る其趣を異にし、我が國民は建國以來國家的生活に慣れ、人民は現今に至るも尚ほ國家の後見を必要とするの狀態にあるに加へて、彼の中世手工業組合組織の如きも、我國に於ては英吉利や獨逸に於けるが如き發達をしたのでもなければ、又現今勞働者の組合運動もまだ漸く運動を始めたばかりで、海のものとも山のものとも見當がつかず、到底之を基礎として、其の自治的管理に依る産業の新組織を建設し得べき素地を有つて居らぬからである。

英吉利の如きに於て、近者却つて國家社會主義の主張が其勢力を失ひ、サンヂカリズムやナショナル、ギルヅなどの主張の擧げらるゝに至つたのは、理由がある。卽ち英國は近世國家組織と經濟組織との成立して以來、國家は産業に對しては彼の自由放任の政策を採り、殆んど全く之に干與せなかつた爲めに、國家と經濟とは何となく別々た發達を遂げ少くとも經濟は國家の後見を離れて獨立なる發達を遂げ得た。それに一方に於て勞働者等は、英人本來の氣風たる自治の精神に依つて、自然的に勞働組合としての發達を爲し、今や其の勢力は事實に於て、國内の主要なる産業を支配するに足るの狀態に在る。斯かる實狀ある英吉利に於ては、從來經濟的には餘り施設する所なく、産業の實地經營には殆んど何等の經驗を有せざる國家をして、今俄かに産業管理の全責任を負はしむるが如き新組織を主張するとも、其の實行は甚だ心元なく感ぜられざるを得ない。それと反對に、之を國家に行はしむるよりも國家は産業以外の普通行政を司るものと

して存續し、産業の實地管理は之を勞働組合の手に於て行ひ、多數組合が國内に於て大團結を爲し、以て國家組織と相併立せる産業組織を造りて、兩者相提携して進み行くべしとするナショナル、ギルツの主張の如きが、却つて容易に實行され得べく又有効なる組織なるが如くに感ぜらるゝのである。

されば、英吉利に於て斯かる主張が行はれ、國家社會主義よりも却つてナショナル、ギルツや其他一般に勞働組合主義の力が、更に合理的に問ゆる事情あればとて、英吉利とはまるで實際の事情を異にする我國に於ても、やはり同樣に考へらるゝを得るものとすることは出來ぬ。我國に於ては、前述の如く、從來却つて國家が産業管理の上にも經驗を有し、主要大産業の國營を行ふとも、相當に有効に其任を果し得べき見込のあるに加へて、勞働者の組合は職工組合(トレード、ユニオン)としても、又彼のインダストリアル、ユニオンとしても、殆んど見るに足るものなきの有樣であるのだから、國家社會主義の主張は勞働組合主義の主張よりも、遙かに實行され得べき望が多いのである。此點は現在の實狀より推して多少合理的に考ふる者は、誰も否認し得ざる所と思はるゝ。尤も國家社會主義の制度の下に於ても、勞働組合は大いに發達し得べき餘地を有し、又是非とも大いに發達せしめられなければならぬのであるが、其事と勞働組合主義に依り、之を基礎とし、其の自治に依る産業管理の行はるゝ經濟組織を造り出すといふこととは、別問題たるを忘れてはならぬ。

事情右の如くであるからして、私は我邦將來の經濟組織はやはりどうしても國家社會主義の組織に據る外はないと考へるのである。けれども、それと同時に必要な事は、現今の國家組織は現狀の儘では、とても産業の直接管理の大任に當り得べき資格のないものであるから、必ずや之は改造されなければならぬと是である。彼のギルドソシアリズム一派其他の人々が、國家社會主義實現の曉に於ける形式主義や官僚政治を恐るゝのは、國家の現狀を見、現在の國家を此儘にして、之に産業經營の任を負はしむるものとして考ふれば、洵に尤も至極な憂慮である。將來の國家組織をして此弊害を免れしめむが爲めには、改造は政治的に先づ必要である。而して其の改造たるやつまり國家を思切つて、デモクラシーの組織にするを目的とするもので、立法に於ても行政に於ても、國民の意思が直接に國家の意思決定に參與し、

常に多數の爲めに多數に依る政治が行はるゝものとならなければならぬ。それが爲めには先づ以て選擧權を擴張し、普通選擧制を實施して、現時の如く國民中の或少數者の意思に依つて、國家の意思が決定され、又國民中の或少數階級の利益の爲めに、國家の政務が行はるゝ如き狀態を速かに除去改善せなければならぬ。

國家に關する此の政治的改造の先づ以て十分に行はれざる限りは、國家社會主義の實行せらるゝとも、それに依つて殆んど多くの事情の改善を見ることは出來ぬであらう。現在之を見るが如き國家が直ちに主要產業の國營を行ひ、國家社會主義を實行するに於ては、勞働者の如きは、依然として其の利益を壟斷せられ、一般社會も亦常に少數なる權力階級の爲めに犧牲に供せらるゝを免れざるは明かである。たゞ現在に於ては資本主や其他の權力者が直接に之を爲す代りに將來に於ては國家の手を經て間接に之を爲すに至るに過ぎぬ。斯くては、折角の國家社會主義制も、何等多數國民の利益を伸張し其の生活の安慰を增す所以とはならぬのである。されば將來社會主義を實行すべき國家は新しき民主制の國家でなくてはならぬ。之が前提必要條件である。改造が政治的にと經濟的にと相携へて行はれなければならぬ理由は此所に存する。

（六）時代精神改造の必要

以上述ぶる所は總て經濟の組織に關することであるが、併し現組織を改造して、上に示すが如き新組織を建立するに就いて、是非とも必要なることは、同時に精神的改造の行はれざるべからざること是である。

從來改造を說き社會主義を唱道する者が、兎角、組織の點にのみ着眼し形而下の問題にのみ熱中して、形而上の問題を冷眼視し、若くは明白に其の方面の問題を考慮するの必要なきを說いたことは、少からず改造の理論を不徹底ならしめ、又其の運動を香氣なく熱なきものたらしめた。例へばマルクス一派の社會主義が、餘りに科學的ならんことに腐心し、然かも唯物論の根據に立ち、唯物的史觀より出發して、社會主義の理論を建設したとは、一時は大いなる成功なるが如くに見へたけれども、實は決してそうでなかつた。マルクス一派の社會主義に對する其後の反動は、其餘りに唯

物論的にして又理論一點張なるに飽足らず、一般思想界に新しき唯神論的傾向の漲り來れると共に、倫理観の加味せらるゝを必要とし之に對する大いなる憫憐の行はるゝに至つたことである。元來社會主義は一の理論たると同時に又一のポリチツクスであるから、そはたゞ單純なる理論を科學的に造り上ぐるのみでは、人心を滿足せしむるに足らず、又運動として盛なるを得ない。現代の人心を滿足せしめ、又其の運動に熱を持たしめむが爲めには、どうしても之に倫理観を加へ、精神的要素を容れなくてはならぬ。獨逸に於てマルクスを棄てゝカントに歸らんとするの傾向と運動の表はれ來りたるも、之が爲めである。佛蘭西に於てサンヂカリズムの勃興し、ミースに依りて鼓吹されて、熱情的運動の起り來れるも之が爲めである。英吉利に於てサンヂカリズムの迎へられ、組合（ギルド）社會主義の主張の擧げらるゝに至りたるも、之が爲めである。洵に之れ現今に於ける時勢の要求である。人心の希求である。

前にも一言したやうに、英吉利に於て一時フアビアン協會一派の集產主義が、天下を風靡するの勢ありしに拘らず、近時佛蘭西流のサンヂカリズムが多少ともに地步を容れんとするに至り、又彼のベンチー等のギルド、ソシアリズムや、ニユー、エージ誌一派のナショナル、ギルヅや、乃至はコール等の所謂グレーター、ユニオニズムなどが、盛に唱道さるゝに至りて、少からざる反響を起しつゝある所以のものは、人心終にかのフアビアニズムの唯物論的立場に飽足らずして精神的要求を容れたる改造の必要を思ふの切なる際に恰も其の要求を顧みたる改造の計畫の表はれ來つた爲めである。而してサンヂカリズムや、ギルドソシアリズムの人々が、無遠慮にフアビアニズムの理論上の缺點を指摘し、特に其の唯物論的立場の不徹底を論難するに至つたことは、從來の集產主義者に取つては、洵に手痛き打擊であつた。

今や世間は社會改造のプログラムとして、組織の方面に於ては國家社會主義を妥當とする者も、かのギルド、ソシアリズムの人々が從來の集產主義の唯物論的立場の不徹底を攻擊する議論には、大いなる同感を禁じ得ざるの有様である。現に私の如きも我邦に於ける實際上の改造のプランとしては、組合社會主義（ギルド・ソシアリズム）の如きは到底之を容るゝの素地なく、

我邦に於ける勞働組合主義の建設は當分見込なきものと信じて居るけれども、さればとてかの從來の集產主義の唯物論的立場には到底共鳴することが出來ぬ。從て經濟組織改造のプランとして、組織の方面に於ては上に述ぶるが如く、國家社會主義の組織を建つるの外に道なきを思ひ乍ら、組合社會主義者等の唱道する精神的改造の必要は、十分に之を認め、彼の組織と併せて、此の精神を容れ、社會改造の大事業を成就せんが爲めには、形而下に於ける組織の改革を行ふと同時に國民の精神的革新を行ひて、社會の人心を一新する工夫を凝すの必要をしみじみ感ぜざるを得ないのである。而して私は、此の精神的革新の行はれざる限りは、組織を如何に改造して、如何に整へる如何に美しき制度を立つるとも、吾等の生活は個人的にも社會的にも、決して圓滿になり幸福になり得るものではないと確信する者である。

然らば、其の精神的革新とは如何なることを行へばよいか。問題は比較的簡單であるが、實行は中々容易でない。然し實行の難易は兎も角として、其の必要なる點を云へば、つまりそれは、吾等の社會生活は其の組織さへ之を改造して善美のものとすれば、精神方面のことはどうでもよいと考ふるが如き、そんな考へ方其のものを先づ革めて、改造は物質的にと精神的にと兩方面を併せ行はなければものにならぬと考へる風に、社會一般の氣風を變ずることに存するのである。今の世は餘りに極端に物質尊重に走り過ぎて居る。物質的生存條件を以て人生に最も貴重なるものと考ふるが、現時の一般の傾向である。而して物質を代表して其の價値を現はすものは貨幣なるが爲めに、現時に在つては、貨幣を以て人生最も貴重なるものゝ如くに考ふるの風が、實に社會の隅々までも行渡つて居る。此考が盛なる爲めに、社會改造の必要を唱ふる者までが、物質的の生存條件さへ整ふれば社會を改善し現在の弊害を救ふことが出來ると思ふのである。

然し此の氣風はどうしても革めなければならぬ。なぜならば、吾等の精神がたゞ物慾に捉はれ、只管に物質を尊重し貨幣價値をのみ重んじて、何事も何物も之に依つて其尊卑を測定するやうでは、如何に人々の生活を物質的に豐かにするとも、人心の滿足と安定とは得られないからである。人々が只管物質を尊重し貨幣價値を重んずる限りは、人々は必ず

貨幣の量の多少に關して人と人との間の比較を試み其の比較は常に財産や所得の額の多少に於て表はれ、其の比較に於て少きを有し少きを得る者は、常に多きを有し多きを得る者の幸福を羨むで、心の安慰を得ることが出來ぬ。斯くて人々は、いつでも人の價値を定めるにも、其人の人としての價値を考ふよりも、先ず其人の有する所の多少に依つて其の價値を定むることとなり、現今之を見る如き殺風景なる所有や所得の競爭は絶ゆるの時期なきこととならざるを得ない。斯くては折角國家社會主義の組織を造り出すとも苟も各人の所得に大小の區別ある限りは、競爭と不平とは依然として存續して、やはり現今之を見るが如き問題は、這間に起り來らざるを得ないのである。

次には又、現時の如く人心が個人主義的な競爭心に、捉はれて居ては、たとへ物質的には共產主義の社會組織を造つて見た所で、社會といふ共同生活は圓滿であり得べき望がない。されば將來に於て、吾等の社會生活をして住み心地のよい、愉快なものたらしめんとならば、組織の改善と同時に、どうしても我利的な競爭心を亡ぼして共同一致の精神を養ひ、相互協助の氣風を育成せなくては駄目である。此の精神的改造の行はれざる限り、吾等の社會は依然として殺風景なる修羅場たるを免れぬであらう。

何れにしても吾々は、物質以外に貴いものを持つて居なくてはならぬ。物質以上に、金錢以上に、貨幣で測り得べきもの以外に經濟價値以外に、貴いものを持て居なくては駄目である。同じ生產を行ふにしても、たゞ貨幣利得の爲めに、唯だ勞賃所得の爲めに之を行ふ分では、なるべく時間を省き勞力を拔きて、間に合せの物を造るといふことになるを避け難い。報酬を顧みずして腕の譽れの爲めに之を造り、自己の責任として之を造る分で甫めて、立派な物が出來るのである。造る物が何であらうとも、それは敢て問ふ所ではない。大事な物でも、些細な物でも總て責任觀念を以て之を生產するに於て、質のよい物が出來るのである。此點に於ては、昔の人は金錢以外に大切なものを持て居た。たゞの職人にしてからが、さうであつた爲めに、昔の人の造つた物には美事に出來上つた物が多かつたのである。美術品は勿論のこと、日用普通の品に至るまでがそうであつた。此點に於ては吾々は昔の人に學ぶべき多くを有する次第で、かゝる氣風

は今一度之を獲たいものである。之を新しき精神の上に恢復するに於て、吾等は改造の大事業に甫めて能く成功するを得るであらう。（此等の事情に關してはギルド、ソシアリズムの人達の云ふ所には大いに傾聽すべきものがある。讀者は經濟論叢第九卷第一號所載拙稿『ペンチーの組合社會主義論』と第二號『カーペンターの社會改革意見』に就いて其の議論の主旨を玩味せられむことを望む）

此の問題に就いて細論を試むる段になると、別に一論文を書かなければ足らぬことになるから、私は此上多くを云ふことは止めて置くが、兎も角、私は社會改造の大事業は有形的の組織と併せて精神的の改造を行ふに依りて、甫めて能く其功を奏し得べきものなることは、忘れてならぬ所だと確信する者であつて、吾等の精神が物質欲に捉はれ黄金の鎖に依つて縛られたる限りは如何に有形的の組織を整ふとも、吾等は解放せらるゝ見込がない。吾等と吾等の社會とを解放せんとならば、宜しく先づ黄金の縛を釋くべし。吾等の精神が先づ解放されて、そこで甫めて吾等の社會生活上の萬般解放は行はれ得るのである。乞食の根性を以て金殿玉樓に住むでみた所で、それが何になるか、王者の心を以て陋屋に住む方がまだましである。況んや、王者の心を以て金殿玉樓に住むことをや、吾等は勇往邁進して精神的にと有形的にと改造の大事業に當り速かに吾等の王國を建設せなければならぬ。（終）

咬豆茶話

△巴里會議中での花形は、ウ、ロ、クの三人だつたが、日本委員中で研究の中心人物は、ハウス大佐だつた。彼は議席についたまゝ、開會の始めから閉會まで何時間でも、何日間でも一直線に睨めつけて決して横を向いたことはないそうだ。何處までも東洋的に落ちつきのある一英雄であつた。

△クレマンソウは、一番喧嘩好きで、そして喧嘩上手、ウイルソンは宣傳の第一人者、ロイドヂョージは討論會の議長、バルフォアは意滿ちて熱足らず。珍田の剛情も可なり評判がよく、牧野は非常に努力をした。牧野と珍田とは管鮑も不啻であつた。

△西園寺の自を任ずるの高き、聊か滑稽の感もしたが、しかし和何あるに依つて、牧野も、珍田も充分（?）働けたのぢやとは某委員の巴里土産そのまゝ。

△加藤高明は部下の狂噪を制止して、熱柿主義に出でゝ、旨く原の後釜に据ろふとの横着な下心であつたが、内閣側では、朝鮮でも、府縣會議員選擧でも、隨分辛辣の限りを振舞ふので、加藤もとう／＼我慢しきれず、今回熱柿主義を棄てゝ猛然と敵本主義に出ることになつたそうナ。今頃の悟道とは矢張り高明も拙作の旗頭カナ。

△砲兵工廠事件は意外の所に、深い反響を見せて來た。東京大學でも、京都大學でも、當局のアマリの辣味過ぎるを非難するもの多く、殊に東大は猛然蹶起するの策を進めつゝあるが、コウなつては、陸軍もます／＼旗色が悪くならふと痛氣を病む官僚もおる。

△そして、近頃内務省の神經過敏なるは驚くべきもので、發賣禁止の雜誌が頻々として現れてくる。この問題に對しても近いうちに大學對當局との間に一悶着が起る筈である。發行禁止なぞは内閣の末路には、免れぬものぢやが、原や床次も少々血迷ふて來たのか。

△現在の政黨員の薄つぺらで、政友會にせよ、憲政會にせよ國民黨にせよ、第二國民を指導し得る國士の無いのは困まつたものだ、「改造同盟會」にせよ、頭の訓練が不足であるのと、勇氣の出し方がチビ／＼の小出しであるから、折角の時局にどれ丈けの貢獻が出來るか。

△床次や、中橋は人氣取りに腐心して居るだけ、何か目先きを換へたい考だろうが、腹中無一物の連中だけに大した收獲も出來まい。此連中のやり方は總てに於て齒の浮くやうなことばかりだ。そこになると山本達雄が鈴木文治に油を絞られる所なぞは、根が正直の山本だけに氣の毒の感もする。

△何がサテ、國民思想轉移の一大活機を捉へながら、院展がどうの、日本畫がどうのとシミッタレた爭鬪を繼續する阿呆もないもんだ。それよりか大阪商船にノシつけて返上した方が國民の利益だ。

基督教と社會主義

慶大教授　高橋誠一郎

一

「社會主義は勞働階級の經濟哲學である（フォン・シェール）」。此意味に於て私は社會主義を以て純然たる近代的性質のものと觀る。此點に於て社會主義は有ゆる時代、有ゆる國家に於て存在すると說いたポール・ルロア・ボリユーの言には誤解を招き易い不精確が潜んでゐる。古來の夢想的共產主義や均分主義と雖、固より皆其基礎を財產權に對する批評に置いてゐた。然しながら彼等は孰れも皆眞の經濟的立脚地から問題の焦點に向つて到達せんとすることがなかつた。彼等の間に社會主義の始源を見出さんとする者は明かに現代社會主義の企圖及び其發生を促した眞個の原因に對する其無識を物語るに過ぎない。彼等は其共產主義に對して些も經濟的及び物質的根柢を要求することなくして、一の倫理的及び政治的理想として之を表現したものに過ぎない。斯くて基督教の教旨に含まれた社會主義的分子も亦其本質に於て近代の社會主義と何等直接の交渉あるものではない。近代社會主義の主張は決して抽象的なる基督教的同胞主義と等しく神學的形而上の基礎の上に立つものではない。而して近代の所謂「基督教社會主義」が純然たる社會主義でないことは固より復說するの要を見ない所である。

然しながら靈と肉とが密接なる關係を有する以上、支配階級の信仰心を滿足せしむるの必要以外に、被支配階級、若しくは虐げられたる多數民衆をして安心眞如の妙義に到達せしむるの必要を見る以上、基督教及び其他の宗教は往々にして社會主義的色彩を具現することを免れない。人間の生活は不可分なる渾一體としてのそれが在るのみである。縱し假に經濟的生活と宗教的生活の兩者を區別し得たとしても、特殊の「宗教人」の存在しないと等しく、特殊の「經濟人」も亦存在することがない。セリグマンの言ふ樣に宛も亞米利加の企業家と雖、自己の

物質的利益のみに動さるものでないと等しく、「僧侶と雖、物欲を有するものである」。勞働階級と雖單なる胃の腑の滿足、純然たる肉體的安慰又は有形的生存のみを以てして猶ほ不安と畏怖との存する時、彼等は必ず心意の歸趣を決定し、一切の憂苦より解脫して不等不變の域に安住せんことを欲しなければ止まぬであらう。是と同時に基督敎の敎化せんとする人間が「麪包のみにて生るものに非ざる」と共に、「唯だ神の口より出づる總ての言葉に因つて」生くるものにも非ざる以上、其神聖なる敎義にも亦物質的經濟的方面の伴ふを免れない。

二

遊牧時代に於けるイスラエルの民は彼等の間に於ける重要貨物たる畜類を以て財産の標準と看做し、其頭數に基いて彼等の富を計量するの常であつた。撒母耳前書第二十五章第二節にマオンに一箇の人ありて、其富は三千の羊と一千の山羊とを有する迄に大なりしことを誌してゐる。卽ち其社會的存立の初期に在つては農業又は定住的生活を營まんとするの傾向なく、土地耕作を重視するの風がなかつたのである。而も軈て彼等の間に於ける人口の增加は彼等を驅つて次第に農業に依賴するの傾向を助長せしめ、漸次土地に對して密接なる關係を生ぜしむるに至つた。

希伯來の征服者が初めて豐饒なるカナンの地の耕作に着手したる當時に在つては、農業の進歩は土地所有權に對する峻嚴にして煩多なる制限の爲に著しく阻害せられて居つた。けれども時代の趨勢は永く共有共用の實を許さず、所有權は此處に最も急速なる發達を遂げて、既に創世紀に於ては家族財産の存在せるを認め得るのである。而してカナンの地が征服せらるゝやそは頗る不平等なる方法を以て分配せられ、或貴き一族に對しては全都市をすら割當てたるの事實が存するのである。然しながら當時に於ける家族財産は讓渡し得可からざるものであつて、イスラエルの子孫は各皆其父祖の所有權を繼承す可きものであつた。男系の絕えたる場合には女子之を相續す可く、女子は獨り共同族中に於てのみ配遇を選ぶの權利を有し、同族以外と結婚することを得なかつたものである。而して不動産遺贈の權は原始的法理の承認せざる所であつたが、後に至つて單に有ゆる親族が死滅して其相續者を發見すること能はざる場合のみに限つて之を認めたのである。

而も家族又は種族財産の制度は永遠に繼續す可きものではない。イスラエル民族と雖亦一般所有權發達の例に漏れずして、軈

て個人所有權の制度を採るに至つたものであるが、個人財産權が鞏固なる基礎の上に樹立せられたる後と雖敬虔なる宗教的精神を有し、且つ一方に熱烈なる性情に富むと共に、他方に愼重細心なる性質を失はざる彼等民族は一般貧民の利益を尊重し、弱者の保護を以て目的とせる諸般の神法的規定を認めて居つた。卽ち是等の規定に就きて觀るに被傭者と雖決して無告の境涯に在るものではない。利未記第十九章第十三節其他に據るに彼等は必ず日沒前に其勞銀を受くるの定めであつて、又申命記第二十三章第十五節及び第十六節に見ゆるが如く自己の主人を避けて逃亡したる被傭者は之を其主人に交付す可からず、之を保護給養して其選ぶ所に從つて居住せしむ可きを命ぜられてゐる。出埃及記第二十三章第十二節に據れば「汝六日の間、汝の業を爲し、七日に息む可し」と做し、斯くて其使用せる牛馬奴婢をして休息せしむることを命ぜられてゐる。而して休安の時を有するものは單に如上の生物のみに止らず、土地も亦休養の年を有し、之が所有者は六ケ年間は同一土地の上に播種し、收穫するの權利を有するも、七年目には必ず之を休養せしめて耕作を廢止し、而して同年内に土地の生産したるものは主として之を貧民の權利に屬せしむ可きものと定められてゐる。斯くの如きは獨り普通の耕作地のみに止らず、葡萄畑橄欖等の栽培地も亦其例に漏るゝことがなかつた。

其制度は初め土地にのみ適用せられたものであつたが、軈て其適用の範圍を擴張し、申命記第十五章第一節以下に從へば債權者は總て七年目毎に其債務者を放釋す可きを命ぜられてゐる。卽ち斯くの如き神法の目的とする所は是に由つて同民族間に於ける貧困窮乏を根絶し貧富の隔絶を阻止せんとするに在つたことが明かである。加之、神の命ずる所を遵つて富める者は皆無酵麪包の節禮、稔時の節禮及び收藏の節禮等に際しては屢々大饗莚を催して、其親族の全部並に近隣の貧民を招致するの常である。彼等は又貧民及旅客の利益を慮つて其所有地に生じたる穀物を收穫するに際し、田野の隈々に至る迄悉く之を穫取し、又は遺穗を拾取し或は果樹園に實りたる果實を取盡し、若しくは園内に落ちたる果實を斂得するを禁ぜられて居る。

安息年の制度と並んで希伯來民族特有の制度と視る可きものはモーゼの法制に現れたる所謂ヨベルの年である。此制度は利未記第二十五章第二十三節に示されてゐるが如く、神は有ゆるイスラエルの土地を所有するものであるが故に、永久に之を貧

却することを許されない、人は單に神の地上に旅客又は寄寓者として神と共に存在するものに過ぎずと做すの思想に發したるものである。而して希伯來の立法者は此思想に基いて富の不公平なる發達を禁止し、古來の社會制度たる家族及び種族財産の制度の消滅するを防止し、其人民をして彼等の土地に固定せしめんことを努めたのである。ヨベルの年は利未記第二十五章第八節以下に明かなるが如く、安息の年を七回數へたる後に到來すべきものであつて、鳴り響く喇叭の音と共に神は此第五十年を聖め、國內一切の人民に自由を宣せしめ、各其産業に歸り各其家に歸る可きを命じてゐる。卽ち此ヨベルの年に於ては田園に播種し、天然に産生したる物を穫取し、又は修理を加へずして實りたる果物を收得することを禁ぜられたのみならず、イスラエルの子孫は悉く皆其原所有地を恢復するものと定められた。是に由つ之を觀るに當時に在つては土地賣買は一種の貸借關係以上に出づること能はずして、其價格の如きも第五十年節の遠近に由つて差違ある可きものであつた。然しながら此第五十年節の規定が果して如何なる程度迄實行せられたるやに就いては吾人は信賴す可き解答を有してゐない。

有ゆる原始的立法に據つて絶對に不正なるものとして排斥せられたかの徵利貸借は希伯來民族の間に在つても亦嚴重に禁止せらてゐた。債權者は啻に債務者より利子を徵することを禁ぜられたるのみならず、特に貧しき債務者に對しては苛酷に之を待遇し、又は殘忍なる債務徵收の方法を取ることが出來なかつた。而して又他方には貧困者に對し慈善的貸附を命令し奬勵するの風が存してゐた。汝の手を閉づること勿れ、必ず汝の手を貧しき人に開き、必ず其求むる物を之に貸與へて之が乏しきを補ふ可しと云ふが如き是である。其外貧困者保護の目的を以て質物として受理す可き物件に制限を加へ、其收受の方法又は還附の時期を規定せるの例も亦舊約全書中の各所に散見する所である。總て這般の規定は當時の社會に於て猶ほ一致共同の精神堅固なるを示すと共に、個人所有權の早熟的發達が非常なる社會上の不平等を釀しつゝありしを物語るものである。

富と商業との發達並にタイル及びサイドンの豪華がイスラエルの地に輸入せられたる一事は國民の大多數が深き悲しみを以て眺めたる所であつて、かのダビデの子ソロモンの誘起した經濟の習慣は敬虔の精神に違背し、國民の自由を危うからしむるものと認められた。而して實にイスラエルの倫理的自信の根柢たる其强力は著しく動搖を感じた。バビロンでは早くから幾多

の商取引が發達し、利息の法も亦久しく行はれて居つたのであるが、ソロモンが同地方より歸來するや、彼の施設は愈々舊法の精神から離るるに至つた。其遊牧時代に於て農業を輕視して居つた希伯來民族の間には今や農業を推賞して新興の商業を卑むの思想を生じた。商業は大なる利潤を與ふ可きも而もそは瞬時にして悉く失はるることのある可きものである。然れば決して土地を購ふに於て躊躇す可らずとは猶太古聖の教訓であつて、箴言第十二章第十一節に已れの田地を耕す者は食に飽くと云へるが如きものは皆這般の消息を傳ふるものである。而して他方に「彼はカナン人（商賈）なり、其手に詭詐の權衡（はかり）を持ち、好んで欺き取ることを爲す」と言へる何西亞書第十二章第七節の所言と對照し來れば明確に尙農排商の思想を親知することが出來る。

ソロモンの時代に於ける外部的光彩は蓋し其内部に於ける不平等の横溢せる結果に外ならないものであつた。前代に於ける自由民の尊い誇は失はれて、彼等の大多數は奴隷の境涯に墜ちた。富人の存在は又他方に於て貧民の存在を見た。斯くて永却の戰闘は開始せられた。昔の父權的同胞主義は全く其跡を絕つた。而して斯くの如くにして成就せられたる革命の純利は果して何物であつたか。エルサレムの都は最も華麗なる外觀を以て裝はれた、而して猶太の行坑にも、レバノンの森林にも、オーマン海の船舶にも、單に一部少數の飽滿せる人民が便利なる住宅を供給せられ、エルサレムの市が閨房の玩具を供給せられ得る爲に、數千の民衆は憔悴しつゝあつたのである。人民は痛切に貧富の懸隔が將來永く二個の相異れる社會階級を構成することのない優良なる組織を有する社會的體制の闕缺を感じた。而して古の族宗的生活、集合財産の制度に復歸せんとするの熱望は彼等の心胸を支配した。數世紀の間イスラエルを擾亂し而して偉大なる基督の革命の路を開いて之を可能ならしめたるものは私有財産の制度を採用するに於て早急に過ぎたる一國民の此純正にして熾烈なる意向、此強固にして本能的なる必要であつた。西紀前第九世紀の交から社會的平等を宣傳する豫言者は日毎に彼等人民の間に現れたのである。洵にルナンが其 Histoire du peuple d' Israël の序文中に謂ふが如く「イスラエルの豫言者等は吾人が今日社會主義者又は無政府主義者と呼ぶ可き者と同一型の熱烈なる政論家であつた。彼等は熱狂的に社會の公正を要求し、而して若し此世界にして正しからさるか、若しくは正しからしむると能はずとしたならば、寧ろ之を破壞するに如

かずと絶叫した。例へば現時に於ける露國の虛無主義の樣な有ゆる絶望的の敎理と同じくそは英雄心と人間の力の非常なる激勵を來したが故に、最も虛妄な而も最も所產の多い觀察の仕方であつた。是等豫言者の直接繼承者たる基督敎の創始者等は不斷の祈求に由つて世界の終末を斷定した、而して摩訶不思議にも彼等は事實之を變革したのである」。基督と同時代の豫言者も亦全人民を吸引した此急迫せる必要に促されて居つた。聖ヨハネは貨物の共有を宣傳し、彼は貧者が神の王國に於て第一位を有す可きを說き、而して富者が其財富を配分するの義務あることを主張してゐる(ニッチ)。

以西結書第十八章第七節以下に從へば、何人をも虐げず、質物を還し、物を奪はず、其食物を飢ゆる者に與へ、裸なる者に衣を着せ、利を取りて貸さず、手をひきて惡を行はず、眞實の判斷を人と人との間に爲し、我法憲に步み、又我律例を守りて眞實を行ふ者は是正しき者である、「彼は生く可し、主ヱホバは之を言ふ」と示されてゐる。猶太の敎義に從へば人の生れて艱難を受くるは、當に火の子の上に飛ぶが如きものである。而も之が爲に勞働は又十分に報償せらる可きものと爲るのである、有ゆる勤務の提供は補償に値するが如く。有ゆる勞働は其勞銀を價するものである。從つて Ecclesiasticus (不經書) 第三十四章第二十六節の言ふが如く勞働者より其工賃を詐き取る者。汗に依りて取得せる麪包を奪ひ去る者は彼に取りては宛も其隣人を殺害する者と等しきなりと論せられたのである。」

三

「社會主義究竟の目的たる共產主義は基督が山上の垂示に表れたる主張と酷似せる社會經濟の一形體である」と稱する社會主義者(ケア・ハーディ)在ることも必ずしも異とするに足らぬ。吾人は新約全書中に於て幾多の共產主義的言說を發見することを難しとしない。卽ち山上の垂訓に曰く、「人は二人の主に事ふること能はず。そは此を惡み、彼を愛み、此を親み、彼を疎む可ければなり。汝等神と財に兼ね事ふること能はず」(馬太傳第六章第二十四節並に路加傳第十六章第十三節)と。而して又彼に向つて限りなき生命を得んが爲には如何なる善事を行ふ可きやを問へる少者に答へて曰く「全たからんことを欲はば往きて汝が所有を賣りて貧者に施せ、然らば天に於て財あらん、而して來りて我に從へ」と。聖書は更に物語を續けて言ふ「少者此言葉を聞きて憂へ去りぬ。彼の產業大なりければなり。イエス其弟子に曰ひけるは、誠に汝等に告げん、財を持む者は天國

に入ること難し。又汝等に告げん、富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却つて易し」と（馬太傳第十九章第十六節及び第二十一－二十四節並に馬可傳第十章第十七節及び第二十一－二十五節）。「爰に富める人あり。紫袍と細布を衣て日々奢り樂めり、又ラザロと云へる貧者あり、甚く腫物を患みて富める人の門に置かれ、其案より落つる餘屑にて養はれんと欲へり、又犬來りて其腫物を舐む。貧者死したれば天の使者等に依りてアブラハムの懷に送られたり。富める人も死して葬られしが、陰府にて痛苦を受け、其目をあげ、遙にアブラハムと其懷に在るラザロを見て、喊叫して云ひけるは、父アブラハムよ我を憐みラザロを遣して其指の尖を水に蘸し、我舌を涼さしめ給へ、我此火焔の中に苦しめばなり。アブラハム曰ひけるは、子よ汝は生きたりし時に汝の福を受け、又ラザロは其苦を受けしを憶へ、今彼は慰められ、汝は苦しめらるゝなり」（路加傳第十六章第十九－二十五節）彼等の間に在つて渉らんとするも得ざる深淵は唯だ一方が其生時に於て富裕にして他が貧困なりしに由つて生じたものである。洵に「汝等貧しき者は幸福なり、神の國は即ち汝等の所有」であると同時に、「汝等富める者は禍難なる哉、既に安樂を受くればなり」である（路加傳第六章第二十節及び第二十四節）。

基督の直接の弟子の中で今も猶ほ富者階級の耳に戰慄す可き叱責と威嚇の聲として響く可き言を作したものはヤコブである。「我が愛する兄弟よ、聽け、神は此世の貧しき者を選みて信仰に富ませ、己を愛する者に約束し給ひし所の國を嗣ぐ可き者と爲さしめ給ふに非ずや。然るに汝等貧しき者を藐視せり、汝等を凌虐し、又裁判所に曳く者は富める者に非ずや」（雅各書第二章第五、六節）と云ひ、更に又「富める者よ、汝等既に來らんとする禍害を思ひて哭き叫ぶ可し、汝等の財は朽ち、汝等の衣服は蠹食ひ、汝等の金銀は銹腐れり。此銹鉎を爲して汝等を攻め、且つ火の如く汝等の肌肉を蝕はん、汝等此末の日に在りて猶ほ財を蓄ふることを爲せり。視よ、汝等が其田を穫らせし雇人に與へざる値は叫び、其刈りし者の呼ぶ聲は既に萬軍の主の耳に入れり。汝等地に在りて、奢り樂み、屠らるゝ日に在りて尙其心を悅ばせり。汝等正しき者を罪に定め、且つ之を殺せり、彼汝等を拒がざりき」と獅子吼してゐる。

然しながら吾人は聖書が共産主義と全然其主張を等しうせりと做すの所論に與することは出來ぬ。最初の基督教徒と雖、決して共産主義を實行したものではない。洵に使徒行傳第四章第

三十二節及び第三十四、五節は說いて曰ふ「信者は皆心を一にし意を一にして、誰一人其所有を己が物と云ふことなく、凡て之を共に有てり、其中に一人も窮乏者なかりき、そは地所或は家を有てる者は其を賣りて其賣りし所の價を挈ち來り、使徒等の足下に置く、之を各の用に從ひて分け與へしが故なり」と。而して又其第三章第四十四、五節は「信者は皆一處に會りて諸物を共にし、產業と其所有を鬻りて、各人の用に從ひ、之を分け與へぬ」なる章句を揭げ、更に第五章第一節以下には「其妻サッピラと共に產業を鬻り、其價の幾分を藏し、餘の幾分を挈ち來りて使徒等の足下に置ける」アナニアに對する聖ペテロの叱責を記してゐる。而も以上の記述の如きは單に一部分の人々が共財產を賣却して、其賣上高を彼等の貧困なる同胞の間に分與したることを說くに過ぎないものであらう。貧民等は疑ひもなく其收受したる所のものを以て自己の所得として取扱つたのであらう。古代に於ける所謂基督敎的共產主義は固と好意的のものであつて、唯だ單に慈善心に由つて指導せられたるものと見る可きである。而して縱し其贈與が強制的に行はれたとしても、其間に眞個の共產主義を認めることは出來まい。而してペテロがアナニアに曰つた「地所未だ賣らざる時は汝の有ならずや、已に賣りたりとも亦、汝の權に屬するならずや」（同第四節）の言は明かに其贈與が強制的のものでなかつた事實を示してゐる。

聖パウロに至つては再び共產主義の植民地を設けんとすることなく、唯だ「エルサレムの貧しき聖徒」の「大なる貧」を救濟するが爲に各所に財物を集めたるの事實は羅馬書第十五章第二十六、七節、哥林多前書第十六章第一—三節、同後書第八章並に第九章に見るが如くである。彼は「安靜ならんことを務め己の事を行ひ、手づから工を爲し」而して「己のパンを食せんことを我儕の主イエス・キリストに託りて命じ且つ勸め」（帖撒羅尼迦前書第四章第十一節及び同後書第三章第十二節）、更に又「我儕汝等の中に在りし時、人若し工を作すことを欲まずば食す可らずと汝等に命じたり」（同第十節）と說き、而して「工を作さずして專ら餘事を務め、妄なる事を行ふ者」を難じてゐる（同第十一節）。然しながら是等の章句を基礎として直ちにデヴィドソンの如く「使徒パウロは社會主義者にして基督は共產主義者なり」と斷ずるは固より大早計たるを免れない。

四

然しながら初期の基督敎は貧民の宗敎であつた。其周圍に聚

集し得たる信徒は多く貧窮なる職人、卑賤なる苦役者及び奴隷であつた。富商及び地主の階級は殆ど皆異教の信者であつた。而してニッチの言ふやうに經濟的爭鬪に化成した宗教的爭鬪は單に本來相敵視せる二個の階級間に於ける憎惡を增大するに過ぎなかつた。從つて初期の教父等は商業を憎み、財の共有を主張して居つた。クインタス・セプチミウス・フロレンス・テルツリアヌスは言ふ「貪慾去らば利得を求むるの理由なく、利得を求むるの理由去らば商業の必要なし」と(De Idolatria, 11)。又曰く「有ゆる物は婦人を除き吾人に共有なり」と（Apologia, xxxix.)。聖ユスチヌス亦曰く「吾人は吾人の所有する有ゆる物を吾人の身邊に所持し、而して貧民と共に總ての物を分つ」(Apologia, i,14.)と。斯くの如き基督教の私有財産に關する意見は同教がコンスタンチヌス一世の下に西紀三百二十四年に羅馬帝國の國教と爲り、治者階級並に富者階級を抱擁するに至つて著しく其面目を改むるに至つたのである。即ち羅馬教會は私有財産を以て末世必然の罪惡として之を許容せんとするの態度を持したのである。

教會法　(Corpus juris canonici)　は其の初めに規定して、凡ての人類は二種の法に依りて支配せらるゝものである。一は自然法であつて他は慣習法(naturali jure et moribus)である、民法及び教會法は後者の二分岐である、最も愛す可きものは物の共有である(Dulcissima rerum possessio communis est.)。自然法に從へば私有財産なるものゝ存在することなく、有ゆる物は皆有ゆる人に共有である(jure naturali omnia sunt communia omnibus.)と說き(Decretales Gratiani, ii, c. xii., qu. i., c. ii.)、第一世紀の後半に於て羅馬の僧正たりしクレメンス・ロマヌスが「凡そ此世に在りと有ゆる物の使用は有ゆる人に共通なる可きものなり、而も一人が此は我物なりと謂ひ、他は又其は我物なりと稱して、人と人との間に區別を立つるに至れるは罪惡なり」と做せるの言を援用し（Decreti II. causa-12, quaestio 2.)、而して又「吾人が他の財産を侵略せざる限り、吾人が力を盡して吾人の物を保管するに何の不正か是有らんや」と謂へるに對し聖アムブロジウスの答へたる「無恥なるかな、言や、汝は我物と云ふかそは何物ぞ、如何なる秘密の場所より汝は是を此世に齎せるや、汝が初めて此世の光に浴したる時、汝が汝の母の子宮より出でたる時汝は汝と共に如何なる富を齎せるや」云々の言を掲げてゐる(Decreti I. distinctio 47. c. 8.)。

アムブロジウス又曰く「土は富める者にも貧しき者にも共同に與へられたり。噫、汝等富める者よ、汝等は何故に不當にも獨り汝等自身の爲に要求するや」(De Nabuthe israelita, c. i., 2.)「自然は有ゆる物を萬人の使用の爲に共同に與へたり、横領は私權を創設せり」(De officiis, lib. i., c. xviii.) と。聖クリソストモス曰く「吾人が富める者貪婪なる者に就きて有す可き思想を見よ、彼等は眞に天下の公道に立ちて通行人を劫掠する强盜の如し、彼等は其部屋を彼等が他人の財貨を隱匿する洞窟と變ぜしむ」(De Lazaro concio, i. と。彼は又アンチオクやコンスタンチノプルの安逸遊惰なる富者に謂ひて曰く「汝等は相續に由りて汝等の鉅富を受けたり、夫れ或は然らん。然れば汝等は躬ら罪を犯すことなかりしなり、而も汝等は如何にして汝等の以前に犯されたる偸盜と罪惡の結果を享有しつゝあるに非ざるを知るや」(In Epist. i. ad Tim., 12.) と。即ち彼は幾千の勞働者及び貧民を設くることなくして蓄積せられた巨大なる資産の存在を認めることが出來なかつた。彼の意見に據ると富は單に商業上の詭計、獨占又は利子の徵收に依りてのみ獨り集積し得るのである (In Epist. i. ad Thess., 10; In Epist. i. ad Cor., 39; In Matth., 56, In Acta Apost., 42)。

クリソストモス一日聖サツルニナス及びアウレリアヌスの不幸を說くに際し、烈しく君府の富者を叱責して曰く「彼余に向つて『汝は將來永く富者を誹謗するを歇むるの意なきや。富者に對する此以上の呪詛を廢せ』と云ふ、而して余答ふらく『貧者に對する汝等の殘忍を廢せ』と(Homelia in verba David.)。然しながら當時の富者は曰ふ「貧民は當に其運命に値するものなり彼等は勞作するを欲するとすらなき懶惰者、寧ろ廢滅せしむるにしかざる有害なる寄生動物なり。其或者は單に人々の慈愛心に依賴する乞丐に過ぎず。否、神は貧者を愛することなし、即ち若し「彼」にして彼等を愛したりとせば、「彼」は其禍患を救濟す可き筈なればなり」と(De Lazaro.)。而もクリソストモスは最も峻烈なる語氣を以て之に答へてゐる、曰く「汝等は貧民が勞作せずと謂ふ、而も汝等は自ら勞作するや。汝等は無爲にして汝等が不當に相續せる財貨を享樂することなきや。汝等は汝等が勞することなくして他人が苦痛の成果を享樂しつゝある間に、彼等をして過勞の爲に疲弊せしむることなきか」と。

聖バジリウス亦富者に告げて曰く「汝等不祥なる者よ、汝等は「大審判者」に對して如何なる答を爲さんとするか。汝等は錦氈を以て汝等の壁を覆ふ、而して人々の裸形に衣を纒はしむ

ることなし、汝等は最も立派にして高價なる裝飾を以て汝等の駿馬を美裝す、而して襤褸を纏へる汝等の同胞を輕蔑す。汝等は其倉廩中に於ける穀物をして腐爛し又は害蟲の蝕盡するに委す、而して汝等は一片の麪麭を有せざる者に一瞥を與ふることすら爲さざるなり。汝等は汝等の富を蓄藏し、而して貧苦の爲に疲弊し壓迫せられたる者を注意せんとせざるなり。汝等は『余が余のものを貯藏するとせば、余は如何なる非行をか犯せる』と言ふなる可し。而して余は汝等に答ふ『汝等が汝等に屬すと思惟する物件は何れぞ、汝等は何人より是等のものを受理したる。汝等は劇場に在りて他の者の有す可き場所を奪ひ取り、總ての者の使用の爲に存す可き事を彼一個の用に充當し、以て自餘の有ゆる者の入場を妨害せんとする人の如く行動す』と。而して斯くてぞは萬人に共同なる可き物件の所有を取得する最初のものなりしに由りて、是等の物を自己に領有し、而して之を其所有に保持せる富者に存するなり、何となれば各人にして若し單に其生存の爲に必要なるもののみを取得し、而して其餘を貧困なる者に與へたりとせば、富なく又貧なかる可きが故なり」と(Concio de divitiis et paupertate.)。

而して法王の聖論中にもかのグレゴリウス大法王の「人の現れ、形造られし土は人々共同の所有に屬す可きものにして、斯くて土の生育せしめたる果實は無差別平等に各人に屬せざる可からざることを人々に知らしめん」と言へるものゝ如く、近代の社會主義者をして讃美し、引用するを禁ずる能はざらしむるものが少なくない(ワード)。同じ法王は復た曰く「他人よりして其所有物を掠奪せざるは毫も重大事に非ず、而して彼等は神が共同に與へたる財貨を獨り彼等自身の用に領有しながら徒らに自ら潔白なりと思惟するなり、彼等は彼等自ら收受せるものを他人に與へざるが爲に殺人の罪惡を犯せるものと爲るなり、即ち吾人は貧者の苦痛を緩和す可き物を自己の爲に保存するに止りて、彼等は日々其給養するを得可くして而も之を爲さざりし數に相當する人々の死を誘起するものなりと稱するを得可きが故なり、然れば吾人が貧困者に對して生活の資を給する時、吾人は吾人に屬する或物を彼等に與ふるに非ずして、而も當然彼等に屬する物を與ふるなり、そは吾人の遂行せる慈悲の行爲たるよりも寧ろ債務の支拂たるものなり」と(Regimen pastorle, c. xxii, p. 3)。

ペラジウスは基督敎の理想と私有財產制との調和の不可能を說き、アウレリウス・アウグスチヌスは財產は自然の權利に非

ずして、單に國權に基礎を有する後天的の權利なりと論じてゐる(In Evangelium Joannis, tract. vi., 25, 26.)。而して路加傳第十八章第二十二節に動されて貧困の祈誓を立てたアッシジの聖フランチエスコは特に現世の富を蔑視し。時の勢力階級に對抗して一種の共產論を主張した。而して。ピエトロ・ジオヴアンニ・デ・オリヴアは單に日常の生活に必須なる食物及び神事に使用せらる可き物品、日讀祈禱書並に法衣の使用のみを社中に許し、メンデイカン派の托鉢僧は基督も使徒も共に無一物であつたと稱して財產權を拒否し、ジョン・ウイクリフ、ジョン・ハス、ジャン・プチイ及び再浸禮教徒は皆福音書の教理を恢復せんと努めた。然しながら教會の主として把つて來た態度は僧侶は富を所有することを許さるゝことなく、又結婚を行ふことも出來ないが、俗人に對しては末世必然の罪惡として之を許容し、貧民の爲に之を領有し、而して貧民及び彼等に對する施物分配者として僧侶に其富を與ふ可きものと做すにあつたのである。

　而して實際經濟社會の必要に應じ福音書の教理を調和せしめんとするの努力は既に教父時代に於て亞歷山のクレメンスに依つて其著 Quis divis salvetur? 中に試みられた所であつた。「我等が「主」は或者の想像するが如く富者に對して其所有物を拋棄す可きを命ずるに非ずして、其心胸より生の本原を壓死せしむる總ての懸念と偏執と共に黃金に對する愛を排除す可きを命ずるなり。(中畧)。然らば「神の子」は此中に如何なる新事を吾人に敎ゆるか。多數の行へるが如き外部的の行爲に非ずして、更に高く、更に、完全に而して更に神的なる或もの、靈魂其者よりの慾情の根絕及び其本然に背馳せる總てのものの廢棄なり。人は彼が有形の財貨より自己を免れしむるも、猶ほ貪慾心と富に對する欲望とは依然として彼の心裡に熾烈なることある可し、斯くて彼は同時に其放財と其困窮とを追惜するが故に、二重の苦惱に患まさるゝなる可し。(中畧)。若し何人も施捨を行ふ可き資力を有せざらんか、慈善の事業は如何にして人々の間に行はれ得可きぞ。若し我等が「主」の教旨にして斯くの如き意義を有すとせば「彼」が莊嚴なる教義の多數に對し明白なる抵觸を爲すに至る可し。俗界の財貨は敬虔なる目的に供用せらる可く、之を巧妙に使用するの道を知れる者に依りて善事に轉用せらる可き資料及び用具として思料せらる可きものなり」と云ふもの是である。(cap. xi-xiv.)。

　而してスコラ哲學全盛の時代を代表して立ち、中世紀の思想

界を征服し盡せるの槪あるアクイノのトマスは古來私有財產に關して幾多の教父に由つて說かれたる意見と直接背馳することなくして、私有財產の制を正當視せんとしてゐる。先づ彼は第一に從來一般に認められた自然法なる文字の意義を離れ、絕對に自然なるものと、結果から觀て自然なるものとの間に區別を置いて說明を下してゐる。第一の意義に於ては一農園が或人の所有に屬し、他の者に屬せざるの理由は存しないのであるが、第二の意義に於ては此種の所有權は正に其土地の有利なる耕作並に其收益の平和的享得に取り、如何に必要であるかを考察する時は之を自然のものと稱することが出來る。加之、自然法は決して私有財產を否定するの意義を有するものではなく、單に其觀念を輸入することがなかつたに止るものである。而して之が輸入は人知の發明に係る人爲法に基礎を有するものであると做してゐる。次で彼はアリストーテリーズの所說に準據して、私有財產制度の有利なる結果を指摘し、而して財產は之を別個に分有す可きも、而も共同の善の爲に使用せらる可きものであると說いた此希臘哲學者の箴言に於て、教父等の意見と一致するの觀ある區別を見出したのである (Summa Theologica, Secunda Secundae, quaestio lxxvii. articulus 3, q. lxvi. art. 1, 2.)。

聖フラチエスコは「聖貧」を主張し、貧困を以て其新婦として娶り、其教團中には教會財團に關してさへも甚しく之を攻擊するものがあつた。然しながらトオマスに言はせれば、貧困は其自體に於て目的に非ずして手段である。基督に歸依するが爲の手段である。依つて富は此目的に到達する途上に於ける障害たる範圍内に於てのみ獨り不正なる可きものである。而して外界の財貨も單に之を相當の點に限つて所有し、人間の生活を適當に支持するに必要なる點に止めたならば、必ずしも精神を攪亂することはないのである。若し其外界の財貨が或宗教團體の共同財產であつたならば、之が管理は乃ち慈善の事業としてさへ認められ得可きものである。而も此場合に於て物質財の望ましき程度は各個の團體の性質に依賴するものである (2a 2ae, q. 188, art. 7.)。而してトオマスに據るも仍ほ施捨慈善は固より神の命令に屬す可き事項、即ち debitum legale であつて、單に一層大なる圓滿の境地に到達する方便として神の勸告したものに過ぎざる自由選擇の範圍に屬す可きものではなかつた。然しながらそは正しき理性に依つて指導せらる可きもので、之に從へば人は非常の場合に非されば、其餘剩以上を與ふるの義務なきものである。而して餘剩とは自己の屬する生活上の地位を維

持し自己に從屬する者を扶持したる殘餘より成るものと定義せられてゐる(2a 2ae, q. 32. art. 5. 6.)。斯て原始基督教の本義は實際經濟社會の必要の前に降伏した。殊に這般の傾向を明示するものは其利子に關する意見の變遷であるが、吾人は茲に之を論述するの餘裕を有して居らぬ。(吾人は既に其一部を他の機會に於て述べた)。

五

斯くの如き傾向は殊に宗教改革時代に到つて一層著しくなつた。貧困は往時に在つては富よりも高く思料せられて來た。而して修道僧の瞑想的生活は我と我が勞苦に依つて我身を支へつゝある俗人の肉體的勞働に優つたものであつた。然るに今や貧困は其自體に於て望ましいものではなくなつた、而して勞働は最早輕んぜらるゝことがなくなつた)シュヴェグラー)。然しながら吾人はルーテルに依つて指導せられた獨逸の宗教改革を以て事實上同國に於ける富者階級の利益の爲に行はれたものと做すニッチの說に一致することは出來ぬ。ルーテルは決して「ブルジョアの法王」ではない。彼は百姓の子であつたが故に。商人階級に對しては特に不信の眼を見張り、大なる商業の中心地を目するに殆ど「盜賊の町」と選ぶ所なきものと做した。彼は時代の俗論に從つて、物價の騰貴を以て獨占及び新興の大商事會社に歸し、英國產織物の如き外國製品の輸入を以て、國內の金銀を奪ひ自國に一片の貨幣をも留めざるの窮狀に陷らしむるものと做した。彼は僧職の獨身に反對し、何人と雖自然的若しくは後天的に生殖不能なるに非ざれば妻帶せずして有德に生活すると能はずと說き、而して何人も自ら獨身を續くるに不適當なるを知覺せる者は直に準備を整へ、一定の仕事を得て而して後敢然として神の名に於て結婚的生涯に入る可きものである、青年は二十歲以內に於て、女子は十五歲より十八歲に至る間に於て結婚す可きものである。而して後、彼等は端正且つ嚴肅なる生活を維持し、而して神をして其子女を扶養す可き資源を供給せしむ可しと主張してゐる。卽ち彼の意見に據れば吾人にして勞作に努め。懶惰に逸せざらんか、吾人は衣食の途を缺くことのないものである(Predigten über die Ehe.)而して彼は後年に至つては、人性の缺陷に基いた不可避の罪過として利子の徵收を寬恕するに至つたが、當初は寸毫の假借なき其反對者であつた(ヴィスケマン)。

溫い同情の人であつた彼は自己を圍繞する幾多の社會的罪惡を痛切に感知して居つた、而して殆ど全く實際上の困難を顧慮

することなくして之に敎會の敎課を適用せんとしたのである。ニッチは當時富裕なる市民階級がカール五世を强要して從來資本の發達に取つて重大なる障害を成して居つた諸法規の廢止を得るに成功しつゝある間に「貧窮なる地方民は彼等の劫奪者に對して蜂起した。彼等は貴族の城を燒き拂つて、貧民の小舍以外何物をも地上に殘さゞる可きを誓つた。富裕なる中層階級は最初は彼等に黨するが如くに觀へた。而してストラスブルヒ、ニュンベルヒ及びウルムに於ては百姓は皷舞せられ、援助せられ又支給せられた。然しながら市民階級は幾許ならずして蜂起の範圍の擴大するに警告せられて、農業地方の叛亂を鎭定するが爲に貴族と共同の步調を取るに至つた。當時其勢力の絕頂に在つたルーテルは宗敎の名に於て蜂起するを非議し、庶民の隷屬を以て神聖にして且つ正當なるものと宣言した。彼は書して言ふ『汝等は汝等の身體及び其財物を自由ならしめんとを求む。汝等は此世の勢力と財物とを欲求す。汝等は如何なる虐遇をも忍受せんとせざるなり。福音書は之に反して毫も此種の物に對して顧慮する所なく、外界の生活をして苦難、不正の容忍、十字架、忍耐及有ゆる此世の事物と等く生活の蔑視より成立せしむ。惱めよ、忍べよ、受難よ、十字架よ、基督の敎ゆる所を見よ』と。支配者たる貴族階級の暴虐と貪慾とに對して叛起せる餓民に向つて信仰の名に於て與へられた是等の敎へは斯くて彼等の苦難が其援助として來らなければならなかつた宗敎の名に於て正當視せられた農民階級の將來に取つて致命的のものではなかつたか。ルーテルは小農民の要求を以て毫末も不正のものとして考へなかつた、洵に彼は彼等は『自然法にも公道にも背馳する者に非ざる』とを承認してゐる。然しながら市民階級の利益を代表する不知の使徒たる彼は直ちに附言して曰く『何人と雖、自己の主張に對して判官たるを能はず、而して權威に依りて行はれたる過失は叛亂を恕すと能はず。總ての人は罪人を懲罰するとを求められず。而して爰に聖書の權威は其の援助を貸與するなり。總ての精靈をして高き權力に從屬せしめよ。劍を把る者は劍に由りて滅びざる可らず』とて、勞働者側に於ける諸權利の有ゆる經濟的主張の敵たるルーテルは俗界に於ける中層階級的分子の利益の爲に聖職を劫掠するとに努めた。敎會の財產は俗用に供せられた。羅馬敎會は其所有して居つた巨大なる敎會財產を剝奪せられた。マゾオラの記するが如く、最後に貧困者に對して施捨の流れ出でた源泉は破壞せられ、而して貧民の扶助は全然敎會の職責の一部を形成するとなきに至つた」と稱してゐるが、斯くの

如きは正に宗教改革の遂行した感覺と精神との混亂の廢除から來た當然の歸結である。先づ第一にルーテルを支配したものは「不死の靈魂の幸福と基督的眞理の救濟」とであつた。然しながら貧民の救濟を敎會の手から奪つた彼は全然之を拋棄して顧みないものではなかつた。即ち一千五百二十年大窮乏の獨逸を襲ふや、ルーテルは各市をして其貧民を扶助するが爲に出捐す可きを說き、必要ある場合には近隣都市の援助を受く可く、而して異鄕の乞食又は浮浪者は之を寛恕す可らずと說いた。一千五百二十三年彼はライスニツヒの共同基金に關する制規を命令して下の如き原則を樹立した、貧民救助は敎會と何等の關係なき俗社會の權限內に屬す、何人も乞食することを許さる可らず、勞作するに適する貧民は之を强制して勞作せしむ可し、勞作に不適當なる者は援助せらる可し、物資の不足に由りて其業務を行ふこと能はざる職人は貸附に依りて援助せらる可きものなり、最後に若し此基金を形成する元本の枯渇するか又は不十分と爲りたる時は其組合員は彼等自身の間に不足額を募集す可きものなりと云ふもの即ち是である。

ルーテルに比して更に冷靜なる資質と學究的態度とを有して居たメランヒトンは更に基督敎の敎理と實際經濟社會との調和を企圖するとが多かつた。彼に從へば所有權は神權に據りて存立し、聖アウグスチヌスの敎へたるが如く單に國法に基礎を有する人爲の權利ではない。個人財産を拒否し若しくは制限するはイエス・キリスト及び使徒の敎義と敎旨に背馳すると爲る可きものである、何となれば私有財産は勿論其弊害はあるであらうが、啻に自然法に違反せざるのみならず、福音書の訓言に對してさへ矛盾することのないものである（Epistola i, iii.）。彼は又後期敎會法學者の說を採つて、資本の有利なる投入を得せしむる三個の方法（Contractus Trinus）を其最も自由なる形態に於て許容してゐる。チュネーブの宗敎家ジャン・カルヴアンに至つては私有財産の存在を以て道德的に必要のものであると做した。若し所有權の如きものが無かつたとしたならば正義と正直との標準はなくなるであらう（民數紀略第三十一章第二十八節註釋）。使徒行傳第二章第四十四節及び第四章第三十二節を引用して當時の放肆派は財貨の共同を唱へてゐるが、カルヴアンは斯くの如き財貨共同の未だ曾て存在せることなきを論證し、曾て行はれた共有は專ら貧民の必要物件にのみ關するもので、各人皆等しく其財産を拋棄す可きものではなく、それは又彼等の所有の全部を抱擁するものでもなく、而して萬人悉く均

等なる配分を收受し得たものでもなかつたことを主張してゐる。彼は財貨の共有に對すると等しく、自爲的貧困の稱揚に對しても反對してゐる。彼の意見に據れば富の不均等は實に神の命令であつた。而して彼が利子禁止の説に反駁を加へた論據は彼が其友人エコラムパディウスに與へたる書簡並に其聖書註釋の各所に於て明確に知悉することが出來る。斯くて資本主義の經濟思想は是等の宗教改革家に由つて其宗教的基礎を獲得しつゝあつたのである。新教が一般に個人主義又は自由主義の宗教と思惟せらるゝに至つたことも決して理由のないことではない。

六

斯くの如き基督教の教義と實際經濟生活との交渉を諒解する者は第十九世紀の中葉に至つて純然なる基督教的形態を備へた社會的教理及び福音書の教旨を其綱領の眞先に標示した社會思索家の諸派が構成せられた事實に逢着しても敢て之を奇とすることはないであろう。彼等が第一の目的はジードの言ふやうに社會主義の異端たることを立証せんとするに在つたのである。而して社會主義が次第に物質的と爲り、次第に非基督教的と爲るの傾向あるに伴れて其目的の本質は愈々益々明白と爲つて來た。此新しい信仰の追求から人間の精神を取り戻さうとすることが教會に取つて一の所願と爲つた。教會の發憤を喚起したものは人民——教會其者の人民が「非基督」の赤旗の下に集りつつあるを見るの恐怖であつた。新約全書は最早デモクラシーの教科書として認められなくなつた、基督は最早 bon sans culotte、人民の眞友として迎へられなくなつた。「曾て受難の標象であつた十字架は今や隷屬の標象と爲つた」。斯くの如く最も大膽なる社會主義運動の選手は激しく基督教の信仰に對して砲撃を放つた。斯くて基督教會其者の内面にも自省が蘇らなければならなかつた。教會其者は彼の基督を裏切りはしなかつたか天上の任務を默想しつゝある間に等しく其使命の一部を成して居つた地上の任務を忘却しはしなかつたか。「王國」の出現と日常の麪包の授與とに對して「主の禱詞」を繰り返しつゝある間に「王國」は地上に打ち建てられなければならぬこと、日常の麪包は慈悲にあらずして勞働の賃銀を意味することを忘れはしなかつたか。

謂ゆる「基督教社會主義」は決して社會主義ではない。彼等の間には獨斷的保守主義から殆ど革命的無政府主義に近いものに至る迄其性質は頗る多様であるが、其共通の特性を擧げ得ることは必ずしも不可能でない。彼等は自由學派と等しく單に自

然界のみならず、人間界の現象をも支配する自然法の存在を信じ之を自然的事實と等しく社會的事實をも亦支配する「攝理の法則」と名附けてゐる。神意の表象としての「法則」は彼等に對する久遠の歡喜の泉源である。然しながら此法則の作用は人間自由の行動に由つて著しく混亂せしめられた。今日の社會は神の期待した運命と相反するものである。神の計畫は人間自身の過失に由つて損はれた。彼等の眼に映ずる今日の人間は此自然の支配から逸脱した浮浪の徒である。彼等は到底自己の力で其本來の幸福なる狀態に復歸することは不可能である。彼等は獨り自己の力のみを以て失はれた樂園の道を發見することは出來ぬ。斯くて基督教社會主義は自由主義が調和を恢復し、進歩を確保するが爲に主張する自由放任の政策に信を置くことが出來なくなるのである。人々の間に存する不平等は餘りに大である。有ゆる其自然的及び社會的不平等の儘に人類を常住の競爭の渦中に投じて顧みず、而して有ゆる保護の手段を撤廢し去らんとするは是人道に背反せる罪惡である。勞働者に取つては自由は單なる愚弄に過ぎない。即ちそは我が勞働を最小の勞銀に對し商品として提供するか、若しくは其勤務に對して何等の所要の存しない場合には空しく餓死するかの孰れかより自由なるに存するが故である。

之と同時に基督教社會主義は亦社會主義と區別せられなければならぬ。同主義者は往々にして資本と現在の社會組織とを攻擊する酷烈さに以て社會主義を凌駕するが、而も物質的經濟狀態の變革のみに由る新社會の創造を以て十分なりと信ずるものではない。社會主義者に從へば、勞働階級は實に其上に現世の敎會が建設せられなければならぬ巖である。然しながら基督敎社會主義者に取つては、社會の安寧及び幸福を確保せんとしたならば、そは須く聖ペテロの巖の上に基礎を置かなければならぬ。眞の救世主は基督を措いて復た覓めることが出來ないのである。勞働者の解放は勞働者自身のみに依つて行はれ得るものではない。社會各方面に於ける唯物的傾向に對する消毒劑として更に高遠なる理想を承認せしむるに由つてのみ獨り我勞働文明は其敗滅から救はるゝことを得るのである。未來の生活に對する希望のみ獨り能く現世の生涯に於て全然更に幸福なる運命を期待することの出來ない最大多數の民衆をして彼等が現在の生活狀態を容認せしめ得可きものである。彼等をして欣然生活の業に從事せしむ可きものは基督敎的堅忍の意志であつて、社會的法則の器械的勢力ではない。基督敎に依つて敎へらるゝ

「愛」は粉碎せられたる社會的原子の單純なる外部的結合が實現することの出來ぬ所のもの、即ち眞に確固たる基礎の上に立つた共同の組織を成就し得可き結合力たるものである。洵にコント・ツ・ミユンの言の如く、彼等に取つては基督教（彼の謂ゆる加特力教）のみ獨り自由制度の廢墟の上に打ち建てられた社會主義に對抗するが爲に缺く可らざる凝聚と能力とを有するものである。自由、秩序、正義及び慈悲に關する神の法則は克く私有財產の限界及び個人に對する社會の要求を調整し、若しくは富者の利益と貧者の權利を擁護するを得るのである。

　國家は「汝に益せん爲の神の僕」であるが故に、彼等と雖決して其干涉を敵視するものではないが、而も「有ゆる俗界權力の命令は決して彼等のみを以て人間社會の劫症を療治し得るものではない。基督教的仁愛のみ獨り有效なる醫藥として現るゝを得るのである。「私有財產に關する基督教社會主義者の意見は固より同一ではないが、今姑くケッテラーに據れば、それは自然法及之を支配する永久不變の原則に基礎を有するものである。財產の不平等は堪能及び資質の不平等から生ずる自然の結果である。然るに國家は諸大學に於て唯物論を敎授するを許し、而して靑年をして懷疑的思想に長ぜしむるが故に、財產權並に之を支配する諸法則は共に、單なる人爲的制度に外ならないことを承認するの已むなきに至るのである。然らば國家は無一物の人民より成る多數が有產階級の資產に對して權利を主張するに至つた時、如何にして克く之を抗拒し得るか、即ち一切の問題は擧げて多數決に委せらるゝが故である。若し近代の諸國家が單に多數の權利のみを承認す可きものとしたならば、無一物なる而も明かに社會の多數を形成する貧民は何が故に斯くの如き多數の權利を財產の修正に適用することが出來ないか。然しながら神を信奉する者は多數の決議が決定の權力を有するや否やを問題として取扱ふことすらないのである。然しながら財產權は固より其限界を有するものである。加特力教の神學者は財產權を饑餓の危機に瀕せる(extrema necessitate) 人類同胞を虐ぐるの點に迄擴張することは能はざるを說くに於て悉く一致する者であると。而も等しく基督教に由つて感悟せられたトルストイ伯の如きに至ると激しく「人間が財產の權と呼ぶ野鄙にして獸性的な本能」に反對してゐる(一疋の馬の話)。

　基督教的精神に鼓吹せられた社會主義若しくは社會政策は何れも皆人間の勞働を以て需要供給の法則に由つて其價値を變ずる商品又は貨物と看做すことを拒否してゐる。人間の勞働は神

聖である。而して羅馬法と雖、神聖なる物件、(res sacræ) の交易を承認することを拒んだ。此點に於ては加特力教的社會政策も、革命的サンヂカリズムも(佛國勞働總同盟の宣言第二條)、而して亦最近の國際勞働法規の決議も悉く一致するものである。然しながら等しく基督教的社會政策を主張する者の間に在つても或者は三體の權威、即ち家族に於ける父、工場に於ける雇主及び社會内に於ける教會の勢力に依つて再び社會上の一致を見んとし、或者は國家的干渉に依頼し、政府の鋭意なる行動及び財政上の援助に依らんとし、更に或者は少數階級の權威に俟つよりも寧ろ之を各階級の團結に依頼せんとし、斯くの如き團結を得んが爲には組合的機關に依るとを最良とし、國家的干渉を全然排斥する譯ではないが一般に個人の能力を尊重するに努めてゐる。吾人は今一々共分岐點を叙述するの餘裕を有してゐない。要するに當然自己の利益、否、自己の特權をさへ擁護するの必要に驅らるゝが爲に、自ら保守的態度を抛棄することの出來ない治者階級の自發的行爲に過度の信仰を置くよりも社會問題の解釋上更に危險なるものは存在し得ないと云ふ確信は漸次一般に普及しつゝあるのである。特權階級權力階級は如何に他の利益の爲に行動せんとしても結局終にアナニアたることを免れないものである。

地上に神の王國の出現す可き日は遠い、曾ては基督教會の結束は死よりも強いものであつた。現在の社會を救ふが爲に神の福音は果して幾許の效果を有するであらうか。私は神の王國を以て貧富を超越した「富の世界」に於てのみ獨り創設し得られるものと信ずる。

(九月九日大磯に於て)

(附記)此小篇を草するに當つて參讀した書籍はかなりに多かつたが、殊に多大なる資料を受けたものは二ツチの「加特力社會主義」であつた。

マルクス 價値説・剩餘價値説及び其批判

高畠素之

マルクス經濟論の出發點

マルクス經濟論の目的とする所は、今日廣く行はるゝ資本家的生産方法であつて、一般生産行程の根柢に存する自然法の研究ではない。蓋し斯くの如き自然法は單に、經濟生活の技術的方面(即ち人間對自然の關係)にのみ働き物理化學の取扱ふべき問題である。經濟學は社會科學の一分科であつて、經濟生活の社會的方面(即ち自然を對象としての人間對人間の關係)を研究する科學でなければならぬ。そして經濟生活の此社會的方面を最も標本的に最も完全に表現したものは、即ち近世資本主義の生産方法である。

故に經濟學の研究は、先づ此の資本家的生産方法の解剖に始まらなければならぬ。

財貨と商品

資本家的生産は商品生産の、最後の且つ最も著しき歴史的形體であつて、其特徴は單なる財貨の生産を目的とせず、商品の生産を目的とすることである。換言すれば、資本家的生産方法に於ては、生産者は自己の使用(或は消費)を目的とせず、他人に對する販賣(或は交換)を目的として物を生産する。

そして此生産物が一度他人の手に渡つた後、その他人が果して之を使用するか何うか、又た使用するとすれば如何なる形式に於て之れを使用するか。それは生産者としては少しも顧慮する必要はないので、彼れは只だ自己の造つた(嚴密には造らした)物を他人に販賣すれば善いのである。

即ち生産者は自分の使用の爲に財貨を生産せず、只だ市場の爲に商品を生産するのである。さればマルクスが其不朽の大著『資本論』の冒頭に言つたやうに、『資本家的生産方法の弘く行はれる社會の富は、商品の尨大る集積として表面に現はれ、個々の商品は即ち其の富の單位形體を成す。故に我々の研究は、

商品の解剖から始まる。」

使用價値と交換價値

今、此商品の性質を調べて見るに、商品は元來これを使用する人の何等かの欲求を充たすと云ふ性質、即ち使用價値を有してゐる。然しながら使用價値は決して、商品にのみ限られた性質ではない。我々は空氣を使用し、日光を使用し、水を使用する。即ち空氣、日光、水は我々に取つて使用價値である。然し其れらは一般に商品ではない、單なる自然物である。

されば使用價値を有するといふことは、決して商品の特徵ではない。使用價値として見れば、商品は即ち財貨である。財貨が商品となり得る爲には、使用價値以外に尙ほ今一つ、交換に役立つといふ性質、即ち交換價値の附け加へを要するのである。

然し商品は何ゆゑ交換されるかと云へば、矢張り使用價値が其根柢を爲してゐるからである。即ち財貨であるからである。勿論、商品の所有者に取つては、使用價値の有無は問題ではない。彼等は只だそれを交換しさへすれば善いのである。(資本家制度のもとに於て、その交換の目的が剩餘價値の產出若しくは實現に在ることは、後に說く)。然し社會的に必要なる物件でなくては交換される筈がない。故に交換價値の成立し得る爲には、其前に先づ使用價値の成立を必要とする。使用價値の無い、只だ交換價値のみの商品といふものは考へられぬ。

されぱと云つて、使用價値と交換價値とは決して同じ物ではない。此兩者は寧ろ互ひに極力反撥し合ふ性質を有してゐる。物は使用價値としてそれを使用せざる人の手中に於てのみ交換價値である。それが使用價値として頭を擡げる時に、交換價値は反對に陰を潛める。物を商品たらしめるものは、其物の交換價値である。故に其物は只だ交換の爲の存在を續けてゐる間のみ商品なので、一度び消費の爲の存在に入るや否や、頓に其の商品性を失墜する。然るに使用價値は一方から云ふと、物の自然的性質それ自體、存在それ自體に固有の屬性であつて、毫も其物の生產の社會的形體如何には關はらぬ。如何なる方法で生產されても、其物は常に同一の使用價値を維持する。

使用價値は又他方に於て、物とそれを使用する人との間に於ける純主觀的關係である。山海の珍味よりもコップに盛つた冷水一杯の方が、遙かに有難いことがある。この場合、冷水一杯の使用價値は山海の珍味のそれよりも遙かに大きい譯である

が、それは畢竟、使用價値の大小が冷水や山海の珍味その者の客觀的性質に依つて決定されないで、それを享樂する人の主觀的狀態に依つて決定されるからである。

交換價値は社會的關係

使用價値は交換價値を制限する基礎的條件である。使用價値を離れて交換價値はなく、財貨を離れて商品はない。然しながら使用價値は決して交換價値の原因ではない。交換價値は使用價値といふ純粹の物理的、心理的關係の上に結晶した一定の社會關係である。

故にマルクスは言ふ『富の社會的形體は如何やうにもあれ、使用價値は常に、此形體と直接には無關係なる獨立の內容を有してゐる。我々は小麥を口にして其造り主が誰であるか、ロシヤの農奴であるか、フランスの小農であるか、或は又イギリスの農業資本家であるかを味ひわけることは出來ぬ。使用價値は社會的欲求の對象として存在し、隨つて又た社會的聯絡の中に存在して居るけれども、而かも何等社會的生產關係を表現しない。今、此使用價値としての商品の一例としてダイヤモンドを取る。我々はダイヤモンドに於いて、それが商品であることを識別することは出來ぬ。美術用にせよ、工業用にせよ、遊女の胸を飾る場合にせよ、硝子切りの手に握られて居る場合にせよ、ダイヤモンドが使用價値として使用される限りは、それは單にダイヤモンドであつて商品ではない。使用價値たることは商品の成立に必要なる條件のやうに見えるが、然し商品たることは使用價値の成立には無關係であるかの觀がある。斯くの如く經濟的形體に無關係なる使用價値、即ち單に使用價値としての使用價値は、全く經濟學の研究外に屬するもので、使用價値は經濟的形體を成す場合にのみ、經濟學の研究範圍に入り來たる。使用價値は直接には、一定の社會的關係の、即ち交換價値の依つて以て自己を表現する物質的基礎である。』

社會の富は曾て、單なる財貨の（即ち使用價値の）集積であつた時代もある。然るに資本家的生產方法の行はるゝ現代に於ては、富は純然たる商品の（即ち交換價値の）累積として表面に現はれる。

共通の第三者

斯くの如く、商品は直接には只だ交換（或は賣買）の爲にのみ存するものであるが、商品の交換に於て、我々の先づ氣付く

ことは、それが常に一定の數量に於て行はれることである。この數量比例、即ち一の商品と他の商品との交換比例は即ち交換價値である。この比例は固より時と場處とに從つて絶えず變動するが、然し一定の時、一定の場處に於ては、常に一定してゐる。

今茲に二種の商品、帽子と牛肉とを例に取る。此の二商品の交換比例は如何樣にあれは、それは常に或分量の帽子を或分量の牛肉と等しからしむる方程式、例へば1ダース帽子＝a斤牛肉を以て之れを示すことが出來る。此方程式は抑も何を意味するか。曰く同じ大さの或共通物が二種の異れる物件即ち一ダースの帽子とa斤の牛肉との中に存在すると云ふことである。故に此兩者は、それ自體に於て帽子でもなく、又牛肉でもなき、或第三者に等しい。隨つて此兩者のそれ〲は、それが交換價値である限り、此の第三者に約元し得なくてはならぬ。

マルクスは此關係を示すに、幾何學上の例を引いてゐる。彼れは言ふ。「我々は總ての直線形の面積を決定する爲に、それらを三角形に約解する。そして又我々は、此三角形それ自體を、其目に見える形とは全く異れる言現しに、即ち其高さと底邊との積の二分の一に約元する。之と同樣に諸商品の諸々の交換價値も亦、それらに依つて其大小多寡を代表される所の、一箇の共通物に約元することが出來る。」

交換價値と價値

此共通物は商品の幾何學的、物理化學的、若しくは其他の自然的性質であることは出來ぬ。商品の有形體性質は一般に只、それが商品を効用物たらしめ、隨つて又使用價値たらしむる範圍内に於てのみ問題となる。然るに商品の交換關係を明かに特徴づけるものは、正に其使用價値を抽象し去ることである。

そこで若し、商品から其一切の使用價値を取除いて了ふと、後には唯だ一つの性質、即ち勞働生産物たる性質が殘る。然し勞働生産物と云つても、我々は既に其使用價値を取除いて了つたのであるから、隨つて使用價値の成立に必要なる一切の物質的成分や形體も亦同時に除去されたものと見なければならぬ。されば勞働生産物はもはや帽子でもなく、牛肉でもなく、机でもなく、家屋でもなく、其他一切の効用物でもない。其使用價値を組成する一切の物質的性質は、既に全く抹殺し去られたのである。

斯くの如く一切の物質的性質を抹殺し去られた勞働生産物は

また最早製帽勞働の所産でもなく、牧牛勞働の所産でもなく、指物勞働の所産でもなく、建築勞働の所産でもなく、其他一切の具體的勞働の所産でもない。勞働生産物の効用性が消滅すると同時に、其勞働生産物に依つて表現せらるゝ種々なる勞働の効用性も亦消滅する。勞働の効用的性質が消滅すると云ふことは、卽ち勞働に附隨する一切の具體的形體が消滅すると云ふことである。かくて各種の勞働はもはや悉く、平等無差別なる人間勞働に約元されたことになる。

さて然らば、斯くの如く一切の形體的性質を篩ひ落された後の勞働生産物は、果たして如何なるものか。勞働生産物から其一切の形態的性質を取り除いてしまへば、後に殘るものは只だ『一樣の空幻的現實性』卽ち一切の具體的性質を離れた、抽象的意味での人間勞働の結晶のみである。此、一切の勞働生産物に共通なる、社會的本質の結晶を稱して、我々は之れを價値卽ち商品價値と云ふ。

此の價値が卽ち私の先きに指摘した、帽子と牛肉とに、隨つて又すべての商品に、共通の第三者である。交換價値は畢竟、かくの如き共通物が種々なる數量比例に於て、樣々の商品に現はれた具體的形體に外ならぬ。哲學的に云へば、價値は實體で交換價値は卽ち其種々の現象である。

されば財貨或は使用價値は、抽象的意味での人間勞働を體現して居ればこそ價値を有するので、人間勞働の結果でない財貨には固より價値は無い。

社會的に必要なる勞働

然らば此財貨の値價の大さは、如何にして之れを測るか。曰く、使用價値の中に含まるゝ價値形成要素の卽ち勞働の分量に依つて之れを測る。そして各勞働の分量は、勞働の繼續時の長短に依つて測られ、勞働時はまた一定の時單位、例へば時間、日等を目安として之れを測る。

斯く言へば、論者或は反對して言ふであらう。若し商品の價値が斯くの如く其生産中に消費された勞働の分量に依つて定まるとすれば、人が怠惰であればある程、或は不熟練であればある程、其生産した商品はそれだけ益々價値が多いやうに見えるかも知れぬ。なぜならば、それだけ益々多くの時を其生産に費すからであると。マルクスは此反對論に答へて言ふ。

『然しながら價値の本質を形成する勞働は、平等なる人間勞働である。同一なる人間勞働力の消費である。商品界の諸價値と

して顯現する、社會の總勞働力は、元來無數の個人的勞働力から成り立つてゐるが、玆では其れは一樣無差別なる人間勞働力として働く。そして之等の個人的勞働力の夫には、それが社會の平均勞働力たる性質を具備し、又た斯の如き社會的の平均勞働力として働く限り、隨つて又、一商品の生產に於て單に平均的に必要なる、若しくば社會的に必要なる勞働時のみを必要とする限り、いづれも皆な同一なる人間勞働力である。そして其社會的に必要なる勞働時とは、一定の時代に於て社會的に標準を成す所の生產諸條件を以てして、又其時代に於ける勞働の社會的平均熟練程度、及び其社會的平均强度を以てして、何等かの使用價値を產出するに必要なる勞働時の謂である。』

マルクスは更らに之れを例證して言ふ『イギリスに蒸汽織機を使用開始したる後、一定量の織糸を織物たらしむるに、多分從來の勞働の半ばを以て事足るやうになつた。他方に於て、イギリスの手織工は、此同じ仕事に對して實際、從來通りの勞働時を要してゐる。それにも拘はらず、彼れ自身の勞働一時間の生產物は、今や社會的勞働半時間を代表するに過ぎぬ。隨つて其從來の價値の半ばに低落したことになる。』

價値と生產力

斯くの如く、一の使用價値或は財貨の價値の大さを決定するものは、社會的に必要なる勞働の分量、若しくは其使用價値或は財貨の生產上社會的に必要なる勞働時に外ならぬ。されば同じ大さの勞働量を含む所の、或は同じ勞働時に於て生產され得る所の諸商品は皆な同じ大さの價値を有す。マルクスの言葉を借りて言へば『一商品の價値が他商品の價値に對して有する關係は、前者の生產に必要なる勞働時が、後者の生產に必要なる勞働時に對して有する關係に等しい。』

されば商品の價値の大さは、其商品の生產に要する勞働時が不變なる場合には、永久に不變である。之れと反對に、此勞働の生產力に變動ある每に、それと共に又變動するものである。所が此勞働の生產力は絕えず變動してゐる。そしてマルクスは其變動の主なる決定原因として、左の諸條件を數へてゐる。

勞働者の熟練の平均程度、科學及び其工藝的應用の發達程度、生產行程の社會的結合、生產機關の範圍及能率、並びに諸種の自然關係。

マルクスは之れを更らに次ぎの如く說明してゐる。

『例へば同じ分量の勞働が、豐年には八ブシエルの小麥となりて現はれ、凶年には僅かに四ブシエルの小麥にしか體現しない。又同じ分量の勞働が、豐坑に於ては瘠坑に於けるよりもヨリ多くの金屬を產出する。ダイヤモンドは地表に於て稀有のものである。隨て其發見には平均して多大の勞働時を要する。さればダイヤモンドは僅少の嵩に於て多量の勞働を代表してゐる。ヤコーブは金が曾て其充分の價値を支拂はれたることありや否やを疑つてゐる。ダイヤモンドに至つては尙更らである。エシユエーゲに依れば、一八二三年に於てブラジルの諸ダイヤモンド坑の過去十八年間の採掘總高は同國に於ける砂糖及び珈琲栽培事業の一年半の平均生產物の價格にも達しなかつた。而も前者は一層多くの勞働を、隨つて又一層多くの價値を代表してゐたのである。

『一層豐良なるダイヤモンド坑に於ては、同じ分量の勞働は一層多くのダイヤモンドに體現し、隨つてダイヤモンドの價値は、低落するであらう。又若し僅少の勞働を以て、炭素をダイヤモンド化することが出來るとすれば、ダイヤモンドの價値は煉瓦以下に低落する場合もあらう。一般に勞働の生產力が大なるに從つて、物品の生產に要する勞働時は益々小さく、其物品に結晶する勞働量は益々小さく、かくて其價値は益々小さい。之れに反して、勞働生產力が小さければ小さき程、物品の生產に要する勞働時は益々大きく、其價値は隨つて益々大きい。されば一商品の價値の大さは、其體現する勞働の分量に正比例して、又其體現する勞働の生產力に逆比例して變動する。』

勞働力は商品

以上說く如く、商品の價値は、其生產に（嚴密には再生產に）費す社會的に必要なる勞働の分量に依つて定まる。然るに此原則は單に、人間勞働の生產物たる一般商品に當嵌るのみならず、又それらの商品の源泉たる特殊の商品、即ち人間の働く力、換言すれば勞働者の勞働力に對しても同樣に當嵌るのである。

勞働者の勞働力を商品と視ることは、かの空理に立脚する人道家（姉崎博士の如き）や、階級的利害のために只管ら社會の眞相を隱蔽せんとする資本家、權力者（ウヰルソン、澁澤男爵の如き）に取つては甚だ好ましからぬことであらう。然しながら好ましくても、好ましくなくても、事實は何處までも事實として尊重しなければならぬ。

勞働者は一定時の間、自分の勞働力を資本家に提供し、資本家は又、勞働者に一定の賃銀を支拂つて之れを自分の工場內で生產的に消費する。安ければ買ふし、高ければ買はぬ。高ければ賣るし、安ければ賣らぬ、或は一層高く買ふ所に賣る。一方は成るべく安く買はんとし、一方は成るべく高く賣らんとする。他の一切の商品が人間勞働の所產である如く、勞働力も亦人間勞働の產物である。他の一切の商品の價値が其生產に要する社會的勞働の分量に依つて定まる如く、勞働力の價値も亦、其生產に消費する社會的勞働量に依つて定まる。他の一切の商品が其所有者に取つて使用價値でないと同じく、勞働力も亦其所有者たる勞働者に取つて使用價値でない。他の一切の商品が他人の使用の爲に存在すると同じく、勞働力も亦他人の使用の爲に存在する。

之れらの何づれより見るも、勞働力は實に一個の立派な商品である。勞働力と他の一般商品との間には、其商品たる意味に於て、微塵の差異もないのである。

勞働力の商品と資本主義

勞働者の勞働力が一の商品として交換され消費されることは、單に近世資本家制度の特產であるばかりでなく、又實に其の出發點たりしものである。近世資本家制度以前の如何なる社會に於ても、人間の勞働力は未だ曾て一個の獨立した商品と見做されたことはない。人間の勞働力は人間の身體の一部分である。人の身體と勞働力とは、迚も之を分離して考へることは出來ぬ。自由人としては、人間の勞働力は彼れ自身の所有物である。彼れは自由に思ふ儘に、之れを處分することが出來る。之れに反して奴隷となれば、彼れの勞働力はもはや彼れ自身のものではない。彼れの身體が主人の所有物であると同じく、彼れの勞働力も亦主人の所有物である。いづれにしても、人間の勞働力は其身體と別々に考へることは出來ぬ。人の容貌が人の身體の一部であると同じく、人の勞働力も亦其身體の一部である。近世資本家制度以前に於ける勞働力は、正に斯くの如きものであつた。

然るに資本家制度の出現と共に、人間の勞働力は全く其身體から抽象されてしまつた。人の身體と人の勞働力とは、全く個々別々の存在なるかの觀を呈して來た。そして此單に勞働力としての勞働力、即ち斯くの如く抽象化された勞働力は、又全く一個の獨立した商品として公然と一般的に賣買されるやうにな

つた。此一種特別なる商品の出現が即ち近世資本家制度の歷史的に既べあり、又結果である。

勞働力の價値

資本家は勞働者から其勞働力を買取り、之れを自分の工場に於て生産的に消費し、其結果として一定の生産物を得る。

勞働力の價値は、他の一般商品の價値と同じく、其生産に要する社會的に必要なる勞働の分量に依つて定まる。然るに勞働力と云ふものは、事實に於て勞働者の生存と別つことの出來ぬものであるから、勞働力の生産に要する勞働量とは、畢竟勞働者の生活を産出する爲に要する勞働量でなければならぬ。勞働者の生活は、生活資料の消費に依つて産出される。故に一日の勞働力の價値は、結局勞働者の一日の生存を維持するに必要なる生活資料の價値と同一に歸する。そこで資本家は勞働者から其勞働力を買ひ取り、其代價として、此生活資料の價値を勞働者に支拂ふのである。此價値の貨幣に現はれたものが即ち賃銀である。

勞働者の勞働力は、一旦資本家の手に渡つて了へば、もはや勞働者のものではない。資本家のものである。資本家は最初の雇傭契約に違反せぬ限り、之れを如何やうにも處分することが出來る。

利潤の出處

そこで資本家は自分の最も適當と思考する方法で、之れを勞働として消費する。其結果として資本家は一定の生産物を得る。此生産物の價値は、資本家が勞働者に支拂ふ賃銀と、消費した生産機關部分の價値との總和、即ち生産費よりも大きくなつてはならぬ。資本家は道樂に生産事業を營む譯ではない。又其根本の動機に於ては、國家の爲とか人道の爲とか云ふ、謂ゆる高尙な目的の爲に生産を行ふものではない。資本家が生産事業を營む第一動機は營利である。即ち生産費以上の價値を獲得することである。

然らば此生産費以上の價値、即ち資本家の利潤は、果して何處より生ずるか。商品の流通行程よりか。それとも又その生産行程よりか。換言すれば、資本家は高いものを安く買ひ、安いものを高く賣ることに依つて利潤を得るのか。或は資本家の生産物は流通行程に入る前に、既に生産物として利潤を含んでゐるのか。

利潤は勞働の生產的消費より生ず

高いものを安く買ひ、安いものを高く賣るといふ事は、曩に述べた價値の本則と矛盾する。なぜならば、商品相互の交換は、原則としては、只だ同一の價値の交換としてのみ行はれるからである。

そこで利潤の出處は、結局これを生產行程の中に求めなければならぬ。然し生產行程の中と云つても、生產機關その者は決して利潤の原因にはならぬ。生產機關は只自己の有する價値を其まゝ生產物に移轉するに過ぎぬからである。そこで利潤の原因は、結局勞働力の中に之れを求めるの外はない。

資本家は勞働者に賃銀を支拂つて、其勞働力を買取る。卽ち價値を以て價値に換へるのである。原則としては、同一の價値を以て同一の價値を購ふのである。故に資本家と勞働者との取引は、資本家と他の資本家との取引、若くは資本家と他の一般消費者との取引と同じく、原則としては寸毫も不正な點はない。資本家は決して勞働者から、より大きな價値をヨリ小さな價値で買ふ譯でない。勞働者が資本家に引渡す勞働力は、原則としては、資本家が其代價として勞働者に支拂ふ價値以上の價値を含まぬ。

故に價値として商品として見れば、勞働力は決して利潤の原因とならぬ。勞働力が利潤を生ずるのは、商品としての勞働力でなく、既に資本家の手に渡つた後の使用價値としての勞働力である。資本家は勞働力を勞働として使用する。勞働は卽ち勞働力の使用價値體である。それは恰も石炭といふ商品の使用價値體が熱であるのと同じ理窟である。

然るに勞働力の使用價値體としての勞働の分量は、勞働力の生產に費された勞働の分量よりも常に大きい。勞働力の價値は、此小さい方の勞働量に依つて定まり、其の使用價値は此の大きい方の勞働量となつて現はれる。此の大小勞働量の差額が、卽ち資本家の贏得する利潤基礎體であつて、マルクスは之れを剩餘價値と呼んだ。產業利潤、利子、地代等とは、此剩餘價値の樣々の顯現體に過ぎぬ。

剩餘價値と可變資本

以上の筋道を簡單な數字で說明すると、資本家は先づ80の價値を有する生產機關を準備し、更に20の價値を賃銀として幾人かの勞働者を雇傭し、それらの勞働者から一定時の間勞働力を

受取つて、之を右の生產機關と共に消費する。さうすると其結果として120の價値を有する生產物が生ずる。卽ち20の剩餘價値を得る譯である。此剩餘價値は、前記の生產機關卽ち80から生じたものではない。80は80として其まゝ生產物に移轉する。然るに20と云ふ賃銀は、單に20として生產物に移轉するのみならず、その上更に他の新らしき20を產出する。卽ち勞働者が資本家に引渡す勞働力の生產に要する勞働量は本來20であるが、こ其勞働力が使用價値として消費されると、今度は40として現はれるのである。

そこでマルクスは右の80(卽ち生產機關に相當する價値)を『不變資本』と呼び、賃銀に相當する20を『可變資本』と呼んだ。利潤の發生は全く此可變資本の力に依るのである。

必要勞働と剩餘勞働

今、說明の混雜を避くる爲に、資本家に雇はれる勞働者の數を單に一人と假定する。資本家は此勞働者の勞働力を十時間消費し其代價として賃銀20を支拂ふ。然るに此勞働力は實際之れを使用して見ると、旣に五時間にして右の20を回收し、更に殘りの五時間にて過剩の20を產出する。されば勞働者から云へば、前の五時間は自分が資本家から得た賃銀を回收する爲に働かねばならぬものであるが、後の五時間は實は何うでも良いのである。そこでマルクスは右の働かねばならぬ方の勞働を『必要勞働』と言ひ、何うでも良い勞働を『剩餘勞働』と呼んだ。必要勞働を代表する價値は『必要價値』である。剩餘勞働を代表する價値は卽ち『剩餘價値』である。剩餘價値は賃銀勞働者から云へば無くもがなのものであるが、資本家から云へば是非ともなくてならぬものである。剩餘價値は資本の原因であり、又その唯一の目的である。

勞働時間と賃銀と剩餘價値

剩餘價値の大小は先づ勞働時間の長短によつて定まる。卽ち勞働時間が長ければ長い程剩餘價値は大きい。前記の十時間を十二時間とすれば、剩餘勞働時間は五時間から七時間に伸びる。

次に剩餘價値の大小は又、必要價値の大小と正反對に伸縮する。例へば勞働者の生活標準が向上して、賃銀が增騰し、必要勞働時間が五時間から六時間に伸びたとすれば、剩餘價値は五時間から四時間に低落する。それと反對に、勞働の生產力が一般に向上したる結果、賃銀が低落し、必要勞働時間が五時間から

四時間に縮小したとすれば、剩餘勞働時間は反對に五時間から六時間に增伸する。

これらの何づれより見るも、資本家と勞働者との利害は絶對に衝突する。資本と勞働とは、其の性質上、互ひに極力爭ふべき筈のものである。

流通行程は剩餘價値を實現す

斯くの如く、剩餘價値は全く生產行程の中に於て產出せらるるものであるが、生產物は決して生產行程を出ると同時に消費者の手に渡る譯ではない。生產物はその最初の生產行程を出發して、最後の目的點卽ち消費者の手に達するまでには、流通行程を經過しなければならぬ。生產物に含まれる剩餘價値は、其生產物と共に生產行程內で產出されたものであるが、それが具體的に利潤として實現されるのは、生產物が右の流通行程を經過してゐる間の出來事である。剩餘價値は生產物が商品として此流通行程を經過してゐる間に、徐々にキレ〴〵に實現されてゆくので、最初生產者の手を離れた時、全部實現されて了ふものではない。

流通行程は單に剩餘價値を利潤(及び利子、地代)として實現するに止まる。其實現せらるゝ剩餘價値は既に生產行程に於て產出されてゐるので、社會全體に就て云へば、流通行程に於て實現される利潤の總和は常に、生產行程に於て產出される剩餘價値の總和に等しいのである。

マルクス批評家の特徵

マルクスの價値及び剩餘價値說の大要は以上紹介する通りである。之れに對してマルクス批評家側からいろ〳〵の批評が提出されてゐるが、其大多數は一方に於て經濟學者としてのマルクスの偉大を嘆賞し、他方に於てその價値及び剩餘價値說を單なる獨斷、若しくは時勢に適せぬ陳腐の學說として擯斥することに一致してゐる。換言すれば、マルクスは偉い學者だが、其學說はつまらぬものだと云ふのである。

マルクス批評家のうちで、マルクスの經濟學說を最も廣く包括的に批評し、且つ一般批評家の間で此方面の最大權威を以て目されてゐる者は、オーストリヤの經濟學者ベーム・バヱルクである。そこで私は、玆では主として此バヱルクの批評を紹介し、更らにそれをマルクス說の立場から再批評して見る。他の批評家の立場は、大抵このバヱルクの大きな立場の中に含まれ

て了ふのである。

一般的效用と價値

バエルクはマルクス以前に於ける勞働價値說の主張者たるスミス・リカード、ロドベルドウス等の所論を一瞥して、彼らは何づれも勞働價値說を假定したに過ぎず、毫もそれを立證しやうと試みなかつた。之れに反して、マルクスは單に此說を主張したばかりでなく、又それを立證しやうと努めた。此點に於て、マルクスは確かに其先驅者等に對して一頭地を拔いてゐると言つて居る。

然し彼れに依れば、マルクスの與へた說明その者には感服できぬ點が多々ある。例へばマルクスは、商品の効用性が交換價値に及ぼす影響を無視してゐる。

マルクスは、『使用價値としては、諸商品は第一に異れる性質のものである。交換價値としては、其れは只異れる分量たり得るに過ぎぬ、隨て寸分の使用價値をも含まぬ』と云つて、商品の使用價値を悉く抽象し去つた。又商品生産勞働の種々なる効用的形體をも抽象し去つた。そうして其れらの抽象の最後に殘る一般的人間勞働の中に、價値の本體を捕捉しやうと努めた。

之に對してバエルクは次の如く言つてゐる。『勞働と効用との差異は何處にあるか。成るほど、交換される物品の特殊の効用性が、商品の交換比例に關係しないことは事實である。然し諸商品の一般的効用性は抽象し去られない。それは寧ろ總ての商品に通じて存續してゐる。商品が食物として使用されるか、それとも衣服、住屋いづれのものとして使用されるかは、敢て關はらない。然しそれが何かに使用されると云ふこと、一般的効用を有してゐると云ふことは、無視する事ができぬ。然らば何故、交換價値の原因及尺度として効用を排斥するのであるか。何故、それを抽象し去るのであるか。マルクスは勞働に關して、商品に含まるゝ勞働の特殊の種類を抽象し去ることを餘儀なくされた。斯くて總ての商品に通じて殘存するものは、一般的勞働、抽象的意味での勞働といふことになつた。それと同じ意味で、總ての商品に通じて一般的効用性が、抽象的意味での効用性が殘存することにならねばならぬ。然るにマルクスは何故、効用性に對して勞働を爾かく偏重するのであるか。勞働と効用との間に斯くの如き區別立てをなし、勞働を價値の唯一の原因及び尺度となして、此現象に對する一切の影響力を効用に與へぬ理由如何。』

我々は此質問に對して、先づ資本家的生産の目的から調べて

掛らう。何人も知る如く商品は交換される前に、既に生産されてゐる。然し商品は、交換及び交換に依つて實現される價値を目的として生産されるのである。又た交換その者に於ては、商品が如何にして生産されるかと云ふ問題は、其價値決定の上に非常な關係がある。然し生産物の效用性といふとは問題にならぬ。資本家は聖書の代りにルーデサックを造つても善いのである。しかのみならず、資本家的商品生産の目的は利潤を獲得することにあるのだから、若し此目的さへ達せられるならば、資本家は絶對に無效用な物でも造る。資本家が實際斯くの如き無效用物を造らないのは、そんな物を造つたのでは、買ひ手が得られぬからである。

そこで何うしても效用物を造らなければならぬ譯であるが、然し資本家自身としては、自分の造るものが實際效用物であるかないかに頓着しない。

又、自分の造つたものが、何人かに對して何かの效用がありさへすれば、即ち賣れる品物でありさへすれば善いので、それを效用的たらしめる事柄に對しては一向に無頓着である。何んな型のものでも、何んな色合でも、何んな柄でも、賣れるものなら何でも造る。赤でも黒でも、丸い物も四角の物も、柔かい物でも固い物でも、兎にかく賣れさへすれば善いのだ。

所が勞働になると、其んな呑氣な事は言つては居れぬ。資本家は注文に依つて何んな品物でも造るが、それを造るに要する勞働の分量に關しては頗る神經過敏である。一定の價格に對して、例へば十日間百人の勞働が適當と思へば、其勞働量の範圍内に於て資本家は如何なる種類性質の品物でも造ることを辞せないが、其同じ價格に對して一人でも一時間でも勞働の増量することには頗る憶病である。

と言ふのは、交換比例といふものは元來分量關係である。分量關係は同じ種類性質の物にのみ考へ得られる事である。隨つて、互ひに種類を異にする物の一般的效用性の大さを測ることは絶對に不可能である。我々は百斤の牛肉と二打の帽子とに含まるゝ、夫々の效用の分野を如何にして測るか。一般的效用性は、到底その分量を測ることの出來ぬものである。分量の測れない物は。價値の尺度となることは出來ぬ。價値の尺度となることの出來ぬ物は、價値の原因となることは出來ぬ。なぜならば、我々は價値の尺度に現はれた價値變動を見て、價値の原因を判斷するからである。我々は只、價値の尺度に依つてのみ、價値の存在を發見することが出來るからである。

要するに一般的效用性は、其分量を測ることの出來ぬものであるから、價値の尺度となることは出來ぬ。隨つて價値の原因となることも出來ぬ。所が勞働に於ては然らず。商品に含まるる特殊の勞働を抽象し去るといふことは、勞働の種類性質を抽象し去るのであつて、決して其分量を抽象し去るのではない。抽象的、一般的勞働は只その分量のみを測度し得るものである。隨つて、それは價値の尺度となり、原因となることが出來る。

效用は價値の制限

斯く云へば、マルクスは效用性の交換價値に對する影響を全然無視したかのやうに聞えるが、事實は決してさうでない。效用性は交換價値の尺度でもなく原因でもないが、然しそれが交換價値成立の一條件であることをマルクスは拒まない。即ち效用性は交換價値を制限するものである。

曩に述べた如く、マルクスに依れば價値を造るものは、個々の特殊の勞働でなく、『社會的に必要』なる勞働である。そして、此『社會的に必要』と云ふ概念の中には、既に社會に對する商品の一般的並びに相對的效用性が含まれてゐる。其效用性の課する限界内に於てのみ、一般的人間勞働は交換價値の尺度となり原因となるのである。さればマルクスが價値の條件として、使用價値を無視したと云ふ非難は當らない。マルクスは只、價値の尺度及び原因の範圍から使用價値を締出したに過ぎぬ。

富に對して自然を無視せず

バエルクは又、マルクスが『財貨の生産』に對する『自然の關與』を否認したことを攻撃してゐる。

然し之れは飛んでもない感違ひである。マルクスは價値の原因としては自然を問題外に置いたが、財貨、即ち商品の自然體(或は使用價値としての商品)の要素としては、明かに自然の働きを認めてゐる。彼れは商品體が『二つの要素、即ち自然物質と勞働との合成である』ことを主張し、『人類は其生産に於て、只だ自然それ身體の爲る通りに振舞ひ得るに過ぎぬ。即ち只だ物質の形體を變更し得るに過ぎぬ。しかのみならず、此形體變更の勞働に於ても、人類は常に諸々の自然力の支持を受ける。故に勞働は其所産たる使用價値の、即ち物質的富の唯一の源泉ではない。ウヰリヤム・ペテイの言ふ如く、勞働は物質的富の父であり、土地は即ち其母である』と言つてゐる。

一八七五年、ゴータに開かれたるドイツ社會黨大會は一の政綱を通過した。此政綱の書き出しは『勞働は一切の富及一切文化の源泉なり』といふのであつた。當時マルクスは遠地より書を寄せて、此一句の修正を求めた。彼れは言つた。『勞働は總ての富の唯一の源泉ではない。自然も亦同じく其源泉である。否、勞働自身が實は自然力の一部たる人間勞働力の發現である』と。

斯の如く、マルクスは富、財貨、或は使用價値の生産に對する自然の『關與』を少しも『否認』しなかつた。彼が勞働を唯一の原因と云つたのは、財貨でなくて價値である。價値と財貨とは月と鼈である。價値は歷史的概念であつて、只商品生産の時代にのみ當嵌る。それは一個の社會的關係である。之に反して財貨は全く物質的のものである。それは一切の社會形體を超絕する。されば勞働が財貨の唯一の原因でないと云ふことと、價値は勞働のみから生ずると云ふ斷定とは少しも矛盾しない。

需給と價値とは沒交涉

バエルクは更らに、勞働以外、自然以外にも、尚ほ交換價値を決定する要素があると言つて、需要に比べる財貨の稀少なること。財貨が需給の目的であること、及び其れが人類に領有されることの三ケ條を擧げてゐる。

右の中、第三の財貨が人類に領有されると云ふことは、自然が價値の原因でないと同じ意味に於て價値の原因となることは出來ぬ。商品生産の發生以前財貨は既に長い間人類に領有されてゐた。然るに價値は、商品生産に伴ふ歷史的の現象である。隨つて領有は、價値の必然的原因となることは出來ぬ。

次ぎに右の第二と第一とは、要するに同じ事を違つた言葉で言ひ現したものに過ぎぬ。財貨が需要に比べて稀少であると云ふことは、財貨が需用供給の目的物であると云ふことと、同じ內容を意味してゐる。いづれにしても、需給が價値の一原因を成すと云ふのがバエルクの主張である。

然しそれは謬論である。元來、需要と供給とは反對の方向に働く、そこで假りに需給が價値を支配すると云ふバエルクの見地から出發すると、供給が增加する時には價値が減少し、供給が減ずれば價値は增加する。需要に於ては、それが丁度反對になる。

そこで玆に問題となることは、需給が平衡を保つた場合、即ち其双方が一致した場合は、何うかと云ふことである。其場合には、價値は必然に消滅しなければならぬ。然るに商品は需給の一致するとしないとに拘はらず、常に一定の交換價値を有し

てゐる。それは何う云ふ譯であるか。

マルクスに依れば、價値は元來相對的のものであつて、交換に依つて始めてそれを確めるとが出來る。我々は或商品の價値を考へる時、必ずそれを他の何物かを比較する。交換（或は販賣）は必ず一定の比例に於て行はれる。今假りに卓子と椅子とを例に取る。そして其双方の需給が平準を保つ場合双方の交換比例は一に對する二であるとして見る。即ち卓子一箇に對して二脚の椅子が交換される。所で此双方の相對的價値は抑も何によつて定まるか。需給關係は双方とも平準を保つてゐるのだから、其交換比例は正に一に對する二でなければならぬ筈である。

所で假りに双方の供給が五割づゝ増加したとして見る。若し此場合、他商品の需給關係に變化なしとすれば、卓子と椅子との『價値』は、バヱルクから見て當然低落しなければならぬ筈であるが、而も其双方の相對的價値は依然として同である。其交換比例は依然として一に對する二である。之れは供給の代りに需要が増加した場合に於ても同じ事である。つまり需要供給の如何なる狀態のもとに於ても、卓子と椅子との相對的價値は一に對する二の比例を保つてゐる。されば需要供給の如何に拘らず其相對的價値を不變ならしむる何ものかが、卓子と椅子との兩者に含まれて居なければならぬ。それが即ち勞働であつて、此勞働の分量の大小が双方の相對的價値を決定するのである。需給關係は只だ一商品の價格が何ゆえ其價値を中心として上下するかを說明するに過ぎぬ。其價格の上下する價値の決定原因は、勞働價値說を外にしては、何うしても之れを說明することが出來ぬ。

「自然物」の價値

自然が價値の原因を形成せざることは、先きに述ぶる通りであるが、茲に又實際論として次ぎのやうな批評が提出されてゐる。

總ての自然物に價値があると云ふ譯ではないが、然し勞働を少しも含まない自然物でも若し其分量に制限がある時には、價値を有することになる。バヱルクは言ふ。天界から隕星として落下した自然の儘の金塊、或はまた偶然發見された銀山といふやうなものは、少しも勞働を含まないが、それでも價値を有するのは何う云ふ譯かと。また教授クニースは、一コータアの小麥が一コルドの木材と同價値なる場合、人工を加へた森林から得られる木材と、原始的森林から得られる木材との間に差異が

あるかと言つてゐる。更に教授マッサリック言ふ『處女地は何ゆえ賣買されるか』と。

以上、諸教授の謂ゆる自然物なるものは、之れを二つの種類に大別することが出來る。一は勞働なしに獲得されると云ふことが全く偶然である物、他は勞働を用ゐざることが其唯一の獲得法である物。前記の天から降つて來た金塊や、偶然に發見された銀山は前者に屬し、土地や原始的森林は後者に屬する。

そこで先づ前者に就て考へて見るに、之れらの自然物が他の勞働を費した物と同じく價値を有することは、少しもマルクス説と衝突しない。我々が天から降つて來た金塊を無價値のものとして放擲しないのは、天がいつも金塊を雨降らさないからである。金塊を得る一般の方法が、必ず勞働の消費を意味するからである。隨つて若し偶然に落下し來つた金塊を放擲してしまふならば、後にそれが必要になつた場合に勞働を費さずしてそれを得ることは出來ぬ。

つまり偶然發見された金塊は勞働を含まなくとも、他の金塊は皆な勞働の結果であるから、其偶然に發見された金塊も矢張り他の金塊と同じ價値を有することになる。偶然に發見された銀山の場合も矢張り其通りである。

次に前記の第二種類に屬する自然物は何うかと云ふに、之等の自然物には價値が無い。土地にしろ原始的森林にしろ、勞働を費さないと云ふことが其獲得の原則である物には價値がない。然らば斯やうに價値のない例へば土地の如きものが、事實上一定の價格を以て賣買されてゐるのは何う云ふ譯かと云ふ疑問が起る。

マルクス説に依れば、斯くの如き價格は價値を代表しないで、價値以外の或物を代表する。マルクスは地代が土地の價値の結果でないことを主張してゐる。地價即ち土地の價格なるものは實は此地代を資本化したものに外ならぬ。地價は地代に一定の年數を乘じた結果である。此年數は一般の金利歩合に依つて定まる。換言すれば、土地に對して支拂はるゝ價格は、其土地の價値を代表しないで、其地代の價格を代表する。土地の賣買なるものは、畢竟地代の割引に過ぎぬもので、本質上、年金の賣買と少しも違はないのである。

剰餘價値説反對論の類別

マルクス價値説に對しては、右の外尚ほいろ〳〵の反對説が提出されてゐるが、茲で一々それらを検分する餘裕がないから、

價値說の方は先づ此位ゐで切り上げ、終りに剩餘價値說に對する批評を一瞥して筆を擱く。

マルクスに依れば、剩餘價値は商品の流通行程からでなく、生産行程から生じなければならぬ。之れは先きに述ぶる通りである。

然るにマルクスの剩餘價値說に對する批評の殆ど全部は、剩餘價値の出處を流通行程内に求めてゐる。そして其れらの批評は之れを三部類に大別することが出來る。

即ち第一は價値と使用價値とを混同する說。第二は商品の交換（或は賣買）が、一般に同じ大さの價値の取引でないと云ふ說。第三は或一部の商品所有者が、其商品を價値以上に賣ると云ふ說。

福田博士の帽子の喩

右の中、第一說は最も廣く行はれてゐる。其言分は『自分に價値の少ない品物を提供し、それに對して、自分に一層價値の多い品物を受ける』と云ふことである。此說の最も手近かの代表者は、お馴染の福田徳三博士である。

福田博士は其著『國民經濟講話』に於て、帽子の例を引き、『私は一圓で帽子を買ひ、帽子屋は一圓で帽子を賣ります。實は帽子屋は一圓で無い帽子を一圓で賣り、私は一圓以上の價を持つてゐる帽子を一圓で買ふのです。帽子屋の賣る一圓の價は必らず彼の費した價よりは大である。私が拂ふ處の一圓の價は、之れを買はんと欲する價よりは必らず小であります。物の賣價は賣物の價より必らず大であり、買物より必ず小であります』と言はれてゐる。

即ち博士に依れば、物の賣買は、一方に『賣手の剩餘』を生ずると同時に、又『買手の剩餘』を造る。博士は此『買手の剩餘』を說明して曰く『一圓の金を今此處に持つてゐる。其持つてゐる。一圓の金の用と、買ふ一圓の帽子の用と私に取つて全く同じであれば、其帽子を買ふことは無駄であります。其帽子を一圓出して買ふと云ふからには、一圓の金で持つて居るよりも、一圓の帽子を買つて被つた方が今役に立つからである。』

つまり博士が『剩餘』と言はれてゐるものは、マルクスの言ふ『價値』の剩餘でなく、『用』の剩餘である、使用價値の剩餘である。そこで私は曾て博士の此說明を批評して言つたことがある。『パン屋は四錢のパンを五錢に賣つて、一錢の剩餘を得る。今にも餓死しやうと云ふ人に取つては、其五錢のパンは恐

らく千萬圓の金殿玉樓にも優るであらう。そこで博士の論法を借りて云へば、此人が買手として得る剩餘は、實に九百九十九萬九千九百九十九圓九十五錢に當る譯である。之では天下空腹に優る金儲はない事になる』と。斯の如き奇抜な結論に達するのも、要するに博士が價値の一般的體現たる(即ち純社會的、客觀的關係たる)貨幣と、其貨幣で買つた帽子やパンの使用價値の分量(即ち純個人的、主觀的關係)とを混同した結果である。

博士は又、其の名著『勞働經濟講話』の中で、剩餘價値の生ずる所以は、物の『費用價値』よりも其價値の方が大きい、結果であると說いてゐる。其說明として博士はまた帽子の例を引いて曰く、

『私が一圓出して帽子一箇を求めるときは、此一圓は即ち一の費用價値でありますが、帽子の價値の全體ではありません。帽子は私にとつては一圓以上の價値があります。』と。私は曾て此說明を批評して次ぎの如く言つた。

『假りに此帽子の價値を一圓二十錢とする。すると、私は此帽子を買ふことに依つて二十錢の剩餘價値を得る譯である。所が福田氏の說によると、費用價値よりも價値の方が大きくなつては剩餘價値が生じないのであるから、帽子屋の方から云へば、一圓の費用價値ある帽子を一圓以上、例へば一圓二十錢に賣らなくては剩餘價値が得られぬ譯である。之れを一圓二十錢で賣れば賣手は二十錢の剩餘價値を得るが、それと同時に、買手の二十錢はフイになつてしまふではないか。』

私は更らに念を押して『それとも買手は一圓二十錢の價値ある帽子を、例へば一圓十錢で買つて、双方同時に十錢づゝの剩餘を得ると解して然るべきものにや。若し然りとすれば、福田氏が先きに『私が一圓出して帽子一箇を求めるときには、此一圓は即ち一の費用價値であります』と云つて、買手が常に費用價値に從つて物を買ふやうに云はれたことがお可笑しくなるではないか』と。

私は福田博士の混同說に對して、此の上尙ほ蛇足を加へる必要を感じない要するに價値を使用價値から解放しない以上は、剩餘價値は永遠に闇でなければならぬ。

社會全體に價値の剩餘なし

次ぎは商品の賣買が一般に同じ大さの價値の取引でないと云ふ說。

マルクスに依れば、交換は原則として同じ大さの價値の間に

行はれる。彼れは此原則のもとに剰餘價値の存在を可能とした。然るに此第二の反對論に依ると、剰餘價値の發生は右の商品交換の原則が破れた時に始めて行はれる。卽ち商品所有者が剰餘價値を得るのは。其商品を實際の價値以上に高く賣る結果だと說くのである。

例へば此處に洋服屋がある。彼れは何かの手管で實際五十圓の價値に相當する羅紗服を七十圓に賣りつけることが出來た。斯くて彼れは二十圓の儲けを得る。それが卽ち剰餘價値であると言ふのである。

なるほど其れは儲けに違ひない。然し世の中に買ふことなしの賣り手と云ふものはない。洋服屋は其原料を羅紗問屋から買はねばならぬ。彼れは更らに其賣上げで種々なる生活品を買はなければならぬ。そこで若し商品交換の原則が一般に破壞されると云ふことになれば、問屋は彼れに安い羅紗を高く賣り、味噌屋も米屋も皆な低い價値を高く賣りつけるから、結局彼れが賣り手として得た『剰餘價値』は、買ひ手として皆な他の賣り手に取られてしまふことになる。かくて社會全體から云へば、」剰餘價値を得るものが一人もなくなり、結局利潤存在の事實を說明することが出來なくなる。

泥棒の剰餘價値

そこで今度は第三の珍說が持出される。卽ち總ての商品所有者でなく、或一部の商品所有者が、價値以上に賣り、價値以下に買ふといふのである。

例へば或商人が農夫から百圓の價値ある馬鈴薯を九十圓で買つて、それを百十圓で洋服屋に賣る。すると結局、彼れは二十圓の利益を占めることになるが、然しそれが爲に價値の總額は微塵も増加しない。卽ち最初は100圓（農夫）+90圓（商人）+110圓（洋服屋）=300圓であつたが、此取引の結果も矢張り90圓（農夫）+110圓（商人）+100圓（洋服屋）=300圓であつて、全體の上に剰餘は一文も生じない。

尤も之れによつて右の商人は二十圓儲けることになるが、然し其儲けは價値增加の結果ではなく、却つて他の取引當事者の有する價値が減少した結果である。かくて前の場合と同じく社會全體の價値は微塵も增加しない。

そこでカウツキーは、若し此商人の儲けを剰餘價値と云ふならば、泥棒の得物は悉くみな剰餘價値でなければならぬと言つてゐる。

（九・十一日、バエルクの部は主としてブデーンに據る）

社會主義と教育

稻毛詛風

一

最近の我が國に於て特に注目すべき一個の事象は、思想界が頓に活氣を呈して來たといふことである。勿論、嚴密な見地から見れば、思想界が活氣を呈して來たことはやがて思想界が實社會に接近して來たことであり、隨つて思想内容が低級になつたことであるから、これは欣ぶべきことであるよりも寧ろ憂ふべきことであるといはなくてはならないが、而かも本來思想界と實社會又は思想生活と實生活とは作用的區別であつて本質的區別でなく、隨つて兩者が融合調和（勿論前者が主となり中心となつて）した狀態が生活の理想的樣式であるといふ點から見れば、我が思想界の現狀は決して一概に悲觀すべきものではない。斯くいへばとて、私は勿論思想界の現狀を讚美するものではない。否、端的にいへば、私は、思想界の現狀に對して尠からざる不滿と憂慮とを感じつゝあるものである。少くとも私は、現今の我が思想界が依然として混亂を極めつゝあると共に、依然として低級幼稚であり、依然として獨立の境地に達し得ないことを衷心憂慮しつゝあるものである。而かも私が、斯くの如き多大の不滿と憂慮とを感じつゝあるにも係らず、我が思想界の現狀に對して兎に角にも肯定的態度を取らうとするのは、要するに只其處に一道の光明と一脈の生氣とを認めたがために他ならない。混亂の間に統一の曙光があり、低級幼稚の奧に進歩發達の萌芽があり、阿附摸倣の陰に自由獨立の源泉があることを認め得たがためである。少くとも、件の混亂は暗黑の凶兆ではなくて光明の豫告であることを認識し直觀し得たがためである。そして、この觀察論斷は、單に私一個の主觀的偏見ではなくて十分な客觀的妥當性を有するものであることは、苟くも聰明な理會力を有し且我が思想界の現狀に注意するものゝ何人も直ちに首肯するところであらうと信ずる。この意味に於て、私は、我が思想界（隨つて我が國民生活）の前途を祝福す

ると共に、思想家の自覺と奮起とを要望して止まないものである。

私から見れば、今日は正しく我が國民思想獨立の時であり、思想家の奮鬪し活躍すべき時である。國民思想の獨立がやがて國家的文化の獨立であり、思想がやがて力であり、思想家がやがて生活の革新者であるといふ論理の眞實性を、事實に於て十分に證明すべき時は正しく今日である。そして、この目的を達成するには、何よりも先に思想家其の人が卓越した批評的精神を涵養し助長すると共に、これを最も有效に活用しなくてはならない。換言すれば、思想家が最も自由に思索し最も自由に論議するやうにならなくてはならない。思想界乃至言論界に自由の要素を出來るだけ多分に加味するやうにしなくてはならない。そして、これは勿論主として思想家其のものゝ力に俟つべきものであるが、而かもこの他一般社會の力、殊に最も多く政府當局の力に俟つべきものであることを忘れてはならない。在來我が國の思想界が兎角に囚はれ勝ちであり、随つて我が國民思想の本質的發達が甚だしく遲かつたのは、勿論主として思想家の實力と誠意とが足りなかつた結果ではあるが、この他、政府當局者の思想に對する態度方針に間然するところがあつたことも亦其れの一大原因であることは否むべからざる事實である。

然るに、最近に至り、政府當局者の思想に對する態度を見るに、其の本當の動機が何であるかは勿論不明に屬するが、兎に角これまでに比べては少くとも一段の聰明を加へたことはたしかに欣ぶべきことである。就中、過般の議會に於て、在來口にするだに危險視された社會主義が、公然と而かもかなりに熱心に論議されたが如きは、論理的に見れば極めて當然のことであり、随つて平凡他奇なきことではあるが、これを實際的に見れば、たしかに特筆に値する事件である。特に、偶然にもこれが動機又は主なる原因となつて（この他所謂「過激思想」なるものが世界の問題となつたことも亦一大原因である。）爾來社會主義が思想界は勿論一般社會の注意を惹き、随つて日常の會話に於ては勿論、雜誌に新聞に將た單行本に於て社會主義を論議するものが次第に增加し、今日に於ては、社會主義が思想界言論界の一中心主題となり、甚だしきは社會主義專門の月刊雜誌の發行を見るにさへ至つた點から見れば、原内閣の對思想政策が、少くとも在來の内閣に比してたしかに一段聰明であるといふことは、必ずしも阿附の論斷ではないと信ずる。

但し、斯くいへばとて私は、社會主義が思想界の最大問題で

あるとするものでもなければ、勿論社會主義を歡迎すべしとするものでもない。要は、私は單に社會主義ばかりでなく、凡そ思想乃至思潮に對する最も聰明な方策は、其れを徹底的に研究することによつて其れの眞相―本質及び長短を闡明し、且これを最も有效に利用する方法を講ずることであり、殊に社會主義は、我が國に於ては在來かなりに永い間自由討究の便を得ず、隨つて一般には其れの眞相が理會されてゐない―寧ろ甚だしく誤解曲解されてゐたために、其れの本質上我が國民生活に對して有する危險性が益々多くなると信ずるが故に、當局が社會主義の自由討究を許したことを推稱するのみである。然り、私の信ずるところに從へば、社會主義に危險性が多ければ多い程、これを研究する必要が多いのである。蓋し、理會はやがて超越であり、不明はやがて危險の母だからである。この意味に於て、私は、政府當局が、社會主義の自由討究を許すといふことより、百尺竿頭更に一歩を進めて、社會主義に關して造詣の深い多數の專門家に委囑して、其れを徹底的にそして統一的に研究させると共に、其れに對する最も有效な利用法を考案させるやうにすることを要望し慫慂して止まないものである。尚この點に聯關して一言思想家言論家乃至心ある一般社會に對して警告の必要を感ずるのは社會主義の自由討究は極めてよいことであるが、これは、本來我が國民生活に對する危險性が其の他の思想や思潮や主義に比して特に顯著であることを十分に理會し記憶して、この主義に關する自己の見解を發表する際には十分の注意を拂ひ、言辭形式に缺陷があるために案外の惡結果を生み出すやうなことがないやうにして欲しいといふことである。

二

改めていふまでもなく、狹義の社會主義は、主として經濟上政治上の樣式であるから、其れが直接に且最も多大な影響を及ぼすのは經濟的方面及び政治的方面である。我が國民生活にとつて社會主義の危險性が最も多いのも亦この兩面（殊に政治的方面）である。隨つて、社會主義に對して最も深い注意を拂ひ、最も熱心に研究すべきは、經濟方面及び政治方面の人達である。

併しながら、更に一歩を進めて考へて見るに、廣義の社會主義は、生活のあらゆる方面に關係を有し、隨つて生活のあらゆる方面に影響を及ぼすものであるから、社會主義の勢力のかなりに強い今日に於て苟くも自覺的に生活を營まうとするものは、

何人と雖も社會主義に對して相當の理會を持つと共に其れの利用法を講ずることが必要である。就中、教育者―國民教育者は特にさうである。何となれば、教育者―國民教育者は、要するに國民生活の改造を以て任務とするのであり、且社會主義と教育との間には密接な本質的の關係があるからである。

これを詳言するに、第一に、國民教育者は國民生活の改造を以て任務とするものであり、そして、この任務を十分に盡すためには、常に自國はいふまでもなく世界全體の生活の現狀と將來とに注意しなくてはならない。何となれば、生活の改造は、其れの對象たる生活の現狀―本質長短を正しく理會することゝ、適切な理想を樹てることゝを根本條件とし、且生活の將來精しくは將來への傾向を理會することは、適切な理想を樹てるにも、また件の理想を十分に實現するにも極めて便宜なことであり、極めて必要なことだからである。殊に今日の如く、世界を通じて「生活の改造期」ともいふべき重大時期であると共に、生活の現狀が混沌紛雜を極めてゐる時に於ては、苟くも生活改造を任務とする教育者がこれに對して正しい理會を持ち、これに對して適切な態度方策を定めることは極めて必要なことである。就中、社會主義といふやうな、本來我が國民生活に對する危險性の顯著なものに對しては、特に周匝な用意を以て對することが必要である。

然るに、我が國の教育者の中には、時代の趨勢又は生活の現狀や將來などといふことに對しては、殆ど風馬牛相關せざるが如き不聰明な態度を取るものが少くない。殊に外國の新思潮などに對して、其の內容の如何を問はず、單に其れが外來的であり、單に其れが新思潮であるといふだけの理由でこれを無下に排斥するものが少くない。斯くの如きは、偏に保守的消極的精神と没理會不聰明の致すところであり、隨つて極力非難すべきものであるが、私は、この點に關しては既に幾度も詳論したことがあるから、これだけに止めて置いて、こゝでは單に社會主義に對する教育者の態度だけに就いて一言することゝする。

改めていふまでもなく、教育（少くとも國民教育）といふことは由來穩健中正といふことを眼目とするものである。即ち、主に凡人又は尋常人を中心對象として健全な中庸な人間を造ることを主眼とするものである。隨つて、教育者の性情や思想や乃至生活も亦一體にして穩健中正であるべき筈であり、事實また穩健中正である。否、教育者は單に其れの職務の性質に制限されるばかりでなく、更に職務に伴ふ種々の忌むべき情弊や訛

ふべき因襲に制限される結果、彼等の性情や思想や生活が穏健中正を通り越して寧ろ甚だしく臆病卑屈因循姑息保守退嬰となり、随つて、幾分でも危險な要素のあるものには近寄らないことを習とし、又強ゐてさうすることに努めてゐるのである。そしてこの點から見れば、教育者が、我が國に於ては、少數一部の同主義者又は同好者を外にしては、殆ど何人も危險視する社會主義を排斥するのは極めて當然のことである。併しながら、更に一歩を進めて考ふべきことは、彼等は果して徹頭徹尾社會主義を排斥し、衷心至情これを嫌厭してゐるかどうかといふこと、眞にこれを排斥し嫌厭し切ることが出來るかどうかといふことである。何となれば、社會主義殊に經濟上の社會主義は、本來下層階級に歡迎さるべき主義であり、且我が國の教育者、少くとも、初等教育者の大部分はいふまでもなく下層階級の人達だからである。そして、こゝに識者が嚴肅に反省すべき重大事がある。

教育者が社會主義を無下に排斥することは、勿論聰明な方策ではないが、少くとも社會主義に危險性が多い限り、これを無下に歡迎して其れの惡感化惡影響を受けるよりも害毒は少いのである。然るに、私から見れば、教育者の大部分が、自覺的に有意的に社會主義を排斥し、これから遠ざかりつゝあるにも係らず、少くとも其の一部分には、暗々裡にこれに共鳴し、不知不識の間にこれに接近しつゝあるものがないとは限らないのである。そしてこれは、遺憾ながら私一個の憶測ではなくて否むべからざる事實である。

嘗て十數年前のことであるが、今は物故した某社會主義首領が、或る人に告げて、社會主義を宣傳する上に最も都合のよいのは小學校教員であると語つたさうである。そして、實際當時某縣には社會主義にかぶれた小學校教員がかなりに多數あつたのである。これは十數年前のことであるが、私は今日に於ても或は前記社會主義者の言が依然として眞實でないかといふことを惧れるものである。否、時としては、今日こそ却つて小學校教員（及び中等學校教員）の中に社會主義的傾向が一層強いではないかといふことを衷心惧れるものである。何となれば、今日は、諸多の理由から教育者（否實は人間全體）の神經が頓に過敏になり、其の精神が著しく動搖し、生活の現狀に對する不滿不安が甚だしく強いのに加へて、社會主義を肯認するやうな傾向乃至思潮が世界を通じてかなりに顯著になりつゝあるからである。そして、私のこの推斷が決して誤謬でないことは、苟くも

我が教育者の現狀に注意し且これに就いて相當な理會を持つもの々何人も首肯し得るところであらうと信ずる。これ、私が識者の反省を促さうとする所以に他ならない。

但し、斯くいへばとて私は、社會主義を以て徹頭徹尾有害危險なものと思ふものでないと共に、また社會主義的傾向のある教育者が全然教育者として不適當だとするものでもない。要は、社會主義には、一體にして有害危險の要素が多く、且教育者がこれに感染するのは、社會主義を十分に研究し、其れの眞相を正確に理會した結果又は合理的理由からであるよりは寧ろ一知半解の結果又は好惡乃至個人的利害心からである方が多いばかりか、その結果は、長所の利用よりも寧ろ短所の惡用又は穩健中正よりも寧ろ極端過激に傾き勝ちであり、隨つて彼等の教育者としての生活を損傷するやうになるからである。

以上要するに、教育者は、其の他の主義や思潮に對するよりも一層綿密に注意と嚴肅な態度とを以て、即ち最も十分な意味に於ける批評的態度を以て社會主義に對し、第一に先入的乃至主觀的偏見を一掃して合理的客觀的にこれを見、第二に其れの眞相を正確に理會し、其れの長短を明晰に剖判し、然る後に其れの長所の利用法及び短所の匡救法を具さに考案しなくてはならない。

尙教育者が社會主義に對する利用法を考案する際に特に注意すべきことがある。それは、利用法を自己に對する利用法と、被教育者に對する利用法と、社會に對する利用法との三つに別ち、且其れ〴〵に適切な方法を講ずると共に、三者の間の區別を明らかにすることである。何となれば、單に社會主義ばかりでない、凡そ一切の主義思潮を教育者が最も有效に利用するには、第一にこれを自己の生活―所謂「人」としての生活をよりよくすることに利用し、第二にこれを被教育者の生活をよりよくする―教育の效果を高めることに利用し、第三に社會と協力して件の主義思潮を最も有效に教育上に利用すると共に、件の主義思潮其のものゝ本質的發達を促すやうに努めなくてはならないからである。殊に教育者は、第一點と第二點との間の區別も明らかにすることに注意しなくてはならない。

改めていふまでもなく、教育者自身にとつて有益なものが必ずしも被教育者にとつて有益であるとは限らない。隨つて社會主義に於ても、教育者自身の生活にとつて價値があるといふことが明白な部分でも、直ちにこれを被教育者の教育に應用する―教育内容とするやうなことがあつてはならない。然るに、教

育者殊に中等教育者以上の教育者の中には、この重大な點を忘れて、あるものが自己にとつて有價値だと思ふと直ちにこれを被教育者に紹介したり鼓吹したりするものが少くないのは甚だ遺憾なことである。殊に社會主義の如き年少者には理會し難く、隨つて誤解誤用し勝ちであるばかりか、本來危險性の多いものは、たとひ其れの長所と雖も、これを教育上に利用する際には、十二分の注意が必要であることを忘れてはならない。

三

教育者は社會主義に對して抑も如何なる態度を取るべきかといふことは前記の論述によつて略々明らかになつたことゝ思ふから、更に一歩を進めて、主題の中心點たる社會主義と教育とは如何なる本質的關係を有するかといふことを攻覈し、以て主題の意義を闡明することゝする。

社會主義と教育との關係は種々の方面から考察することが出來るが、其れの主要なものは發生的見地又は事實的見地から考察するものと、論理的見地又は價値的見地から考察するものとの二つである。前者は、社會主義と教育との間には如何なる因果關係があるかといふことを考察するものであり、後者は、社會主義と教育との間には如何なる價値關係があるかといふことを考察するものである。以下この二つの見地から極めて簡單に私の見解を披瀝することゝする。

第一に、兩者の間には果して心理的及び社會的に先後關係があるであらうか。若しあるとすれば、それは何れが先であり將た何れが後であらうか、そしてそれは必然的關係―眞の因果關係であらうか、或は偶然的關係―單なる先後關係であらうか。

私から見れば、社會主義と教育との間には因果關係があり、そして件の因果關係は、其れの原初に於ては教育が先―原因で社會主義が後―結果であるが、一旦兩者の因果關係が成立した後には兩者は交代的に原因となつたり結果となつたりするのである。これを詳言するに、社會主義は個人の教養と協力を豫想するものであり、隨つて社會主義は自己の理想を實現するには必ず教育の進歩に俟たなくてはならないのである。事實に於て、嚴密な意味に於ける社會主義(社會主義的生活ではない)は、教育の進歩した近世―十九世紀以後の産物である(「社會主義」といふ言葉は英國近世社會主義の始祖といはれるロバート・オーウエンが社會主義的運動を始めた以後に於て作られたものでそれの嚆矢は千八百三十五年前後だといはれてゐる。)と

共に、獨逸の社會主義の成立と發達とは教育の進歩—教育の普及の結果である。併しながら、これと共に社會主義が一旦成立すれば、自己の目的を達成するために必ず教育に力を注ぐから、社會主義が勢力を得るに從つて教育の發達を促すこととなるのである。この間の消息は、最近に於ける露國の過激派が、其の主義を宣傳するために用ゐた一主要方策は主義者の教育—養成に努力したことに徴しても明らかではないか。そしてこれは國家社會主義に於て特にさうである。前に引用したやうに、社會主義者が教育者を感化しようとするのは、感化が比較的容易であるといふことが其れの主因であることは改めていふまでもないが、この他に、教育の力に俟つことが社會主義の目的を達成する上に最も便宜であるといふことが、其れの一因であることも亦疑ふべからざる事實である。これ私が、教育者及び識者の注意を喚起した所以である。

　これを要するに、社會主義と教育との關係は或る點から見れば必然的因果關係である。少くとも社會主義及び教育を廣義に解する限り、教育の進歩は必然に社會主義の出現を促すものであると共に、社會主義は又必然に教育—殊に社會教育・普通教育・補習教育・實業教育等—を奬勵し其れの力を利用するやうになるのである。但し、この點に關して注意すべきことは、社會主義の奬勵し利用する教育は必ずしも特殊の内容のあるもの即ち社會主義的思想を直接に注入し啓發するものではなくて、寧ろ單に民衆乃至下級民の人間としての自覺を喚起して其れの自律力を陶冶することを主とするものである。これは、教育主義に於て特に「社會主義」といふものが存在しないことによつて理會し得るのである。勿論、教育上にも「社會主義」といふものは存在するが、そしは個人主義と對立するところのいはば社會本位の教育といふべきものであつて、所謂「社會主義（ソシアリズム）」とは似て酷だしく非なるものである。そして、實はこの點こそは教育者及び識者の深く注意すべき點なのである。何となれば、社會主義が教育を奬勵し利用する際に何等か特色の明白な教育に依るならば、其れの害毒を妨止する方法を講ずることが容易いけれども、さうでない時には、有效な害毒防止策を講ずることは極めて困難なことに屬するからである。

　第二に、社會主義と教育との價値關係に就いて見るに、よい意味の社會主義（たとへば國家社會主義中の或るものゝ如き或は自由平等の精神の如き）は、生活上の主義として相當の價値を有するものとしたなら、將來は、我が國民生活の長所を阻害

しないかぎり、これを教育上に取り容れるとは考慮して見るべきである。殊に大まかにいへば社會主義の長所とするところはやがて我が國民生活の缺陷とするところであり、随つて我が國民生活を改造するには、必ずよい意味の社會主義—社會主義の長所を參考にし利用しなくてならないものであるから、十分愼重な態度を以て社會主義を研究して、教育上利用すべき點を明示することは我が國識者たちの焦眉の急務でなくてはならない。然らば、社會主義の如何なる點が長所—教育上有價値な點であらうか。この問に對して十分な解答を與へるには何よりも先に、社會主義其のものゝ意義と價値と種類とを具さに攻究し闡明しなくてはならないのに、これは到底この種の小論文に於ては不可能な—與へられた紙數の許さないところであるから、別な機會に讓ることゝして、玆には單に社會主義に於て教育的見地から見て價値ありと思はれる部分は、要するに個人主義・普遍主義・民本主義・自由主義・唯物主義等の有する教育的價値と脈絡貫通してゐることだけを一言するに止めて置く。

四

「社會主義と教育」といふ主題はかなりに困難な問題である。少くともこれまで殆ど等閑に附された問題である。そしてこの問題に對して徹底した解答を試み得るものは、只社會主義と教育との兩面に精通し、併せて卓越した批判力を具へたものゝみである。然るに私は、教育に關しては兎に角にも、社會主義に關しては全然の門外漢であるから、到底この問題に對して十分な解答を試み得る筈がない。只最近この點に關してひそかに思索し且痛切に憂慮するところがあつたので、本誌の慫慂に應じて大膽にも上記の見解を發表することゝしたのである。若しそれ私のこの一小論文が、幸にも機會となつてこの問題が旺に論議され、其の結果主題の徹底的解決を見るやうになつたならば(私は衷心さうなることを望んでゐるのであるが、)ひとり私一人のみの欣びではあるまい。そしてその際には私も亦必ず筆硯を新にして本論の不備を補ふだけの努力をするであらう。

社會主義と進化論の關係

賀川豊彦

1　變轉の哲學とマルキシズム

一般社會學が哲學と科學の基礎を求めんとする時に最も便利なものは進化論である。進化論によれば宇宙進化或は原子進化から人間進化に至るまでの連絡が取れるのみならず、社會狀態の變轉を進化論的に說明するに非常に便利で有るのである。それで一般社會學もスペンサーを初めとし、ワレース、フキスチ、キッド、ワード等近世社會學に貢獻ある社會學者は揃ひも揃ふて進化論の方から社會學の方へ近いて來た。

社會主義は必しも進化論の弟子では無かつた。ユートピアン、ソシアリストは時間の變化などを頭に入れて居らなかつた。彼等はたゞ、自由、平等、愛など云ふ固定的社會倫理を基點として出發したもので有つた。然しその中に。伊太利のヴヰゴーから出た歴史哲學派が、時間の問題を哲學系統に組み入れたのが抑もの起りで、ライプニッツのセオドシーとなり、カントなども、大分時間的世界觀の調和などに初めは頭を惱して居たのが、途中で認識論の方へ、そべてしまつて居たものだが、—カントが實在に對して、認識論的に頗る否定に傾いたものだから、フキヒテの主觀的觀念論となり、シエリングの表象的客觀主義となり、遂にヘーゲルとなつて、論理の煩瑣が反つて幸して、論理的形式の轉移に氣が付いて、流轉の哲學を觀念界に輸入した。そしてこの流轉の哲學と形象の論理が一時の流行となつて、十八世紀中半の諸社會科學でこの形式を取らぬものは一つも無いと云つても善い程になつた。そしてマルキシズムもこの流轉と形象の哲學から生れたのである。

即ちマルキシズムは社會事象を流轉の哲學で說明することによつて、今迄の社會主義より一層有利な地位に立つた。それは、社會事象は刻々變轉するものであるから、現在權力を握つ

て居る國家組織とその文化、或はその經濟組織などは、永久的のものでは無くて臨時的のものであるから、自然的に社會主義的の世界に運び入れられるものであると説明の出來ることで有つた。之は今迄のユートピアン社會主義者や、唯心的無政府主義者が、たゞ自己の力と革命によら無ければ社會主義の時代を持ち來らしめることが出來ないと考へたに反して大に便利で有つた。即ちヘーゲル的變轉が、運命的に固息な社會組織の偶像破壊をやつてくれると云ふのであるから、一種の樂天的信仰がマルクスの系統に編み込れることになつたからである。之はあれだけ血生臭いコンミユニスト・マンフエストを讀んでも我等の感じる一つの好感である。即ちマルクスはあの宣言の劈頭に持つて行つて『歴史は階級の爭鬪史である』と書いて居るが、彼の哲學から云へば、ヘーゲルの背反の論理發展史以上に何等意味の無いことである。

それから形象のことであるが、ヘーゲルは事象の裏に絶對觀念の實在を發見せんとし、客觀界の時間的發展を凡て、絶對者の言葉と相したに反して、その弟子は調度その逆倒に解せんとした。即ち、人間の觀念こそは事象の反射鏡で有つて、宗教も、科學も、何もかも、凡て腦髓の製造するものは、凡て唯物界の製造したものであると考へたのである。之がヘーゲル左黨の意義ある所であるが、形象の推移の跡を追ふならば確かにマルクスの樣に考へ得る權利も充分あるのである。

それで面白いのは、マルクスの『生産』Productionに經濟組織の大黒柱をおく所が全く、このヘーゲル哲學の、流轉と形象の二つを一つに集め得るからであるのだ。と云ふのは、生産は流轉である。人間の方から客觀の方へ働きかける運動である。又生産は形象である。即ち之は商品の製造を意味して居る。即ち彼はこの生産の哲學から勞力價値説と餘剩價値説を導き來り、資本主義文化の解剖を試みたのである。彼が消費を論ぜず、その意義を研究しないのは、彼の哲學と全く反對の方向を取るからで有つたであらう。私はこの立場から考へると、ヘーゲルとマルクスとの二つの立場は共に無理の無い理屈が立つと思ふのである。ヘーゲルから云はせるならば、宇宙生命を直覺する人間はその變轉の裏面に法の働くのを感受しないわけには行か無いのである。然し、ヘーゲルはこゝまでに止ることが出來なかつた。彼はその推理を餘りに遠方まで働かせ過ぎた。そして社會事象のことまでが凡て宇宙觀念の支配する處その表象であるかの如く説いたのである。マルクスがその逆倒を同じ

論理で云はんとしたのは誠に尤もなことである。で、マルクスは人間の文化は人間の産んだものである、その形而上的哲學も宗教も、要するにその實生活に於て經驗したことの反影にしか過ぎ無い。神も美術も要するに人間の創作したものであると云つてしまつたのである。之は經驗派の立場から出發した場合にはいつでも陷る論理の終點である。然しマルクスはヘーゲル哲學から出發したものだから、經驗派以上に强いことを云ふてしまつたのである。（マルクス資本論英譯第一卷九一—九三頁參照）然しマルクスとしては、ヘーゲルが失敗したと同じ理由で失敗した。ヘーゲルは觀念を實在に押賓して失敗したが、マルクスは、實在を觀念に押賓して失敗してしまつた。マルクスの樣に云ふと、折角、彼の組立てた哲學系統、社會主義系統もたゞ時の產物で有つて、眞理としては何等價値の無い客觀の影にしか過ぎ無いと云ふことになるのである。此處に新カント派などが附け込むので有つて、ヘーゲル哲學を根據としたマルキンズムは餘程困難な立場に立つたのである。

2　ダアヴヰニズムとマルキシズム

そしてこの苦しい立場を救ふてくれたものは、ダアヴヰンで有つた。スパルゴの記載によると、マルクスはダアヴヰンの『種の起原』が出版されるとすぐにそれを讀んで、これだと許り大に喜んで自分の著書と書翰を送つたと云ふことであるが、マルクスノ經濟學全體の組立てから見れば、直接にダアヴヰンズムを取り込んで居る所を發見することは餘程困難である。たゞ資本論の第二卷の資本『運轉論』は時間の問題を取り入れた點に於て、クラシックの經濟學に發見することの出來ない程新しい氣分を我等に與へるものであるが、之はマルクスがダアヴヰンを讀んだ後に書いたものであることは確かである。（『種の起原』は一八五九年十一月出版、資本論第二卷は一八六五年か七年かに執筆）然し全體に於てマルクスは矢張りその論理に於て辯證的形式（ダイアレクチック）を用ゐて居て、經濟歷史派の樣に事實の進化の形式ばかりを尋ねる樣な努力はして居らない。否寧ろ演繹的に數學的方程式を重ねて居る。それでマルクスの資本論に於て彼の革命的社會主義思想を汲まんとすることは實に困難であると云つても善い程である。

然し彼が資本論に於て敎へてくれたことは經濟組織が社會に於て、その根柢をなして居ると云ふことで有つた。そして之れがダアヴヰンの生存競爭論と新しく共鳴するものであることが

發見せられたのである。卽ちマルクスがダアヴヰンに共鳴する所の有つたのは、必しもヘーゲル哲學の形式によらなくとも、進化論と云ふ新しい科學によつて、變化の法則と、形態推移（モフロジカルトランス）の理論（ミューテーション）が唯物的に解き得ることを知つたからで有る。

殊にダアヴヰンに於て、後々起つて來た進化論の諸説などと違つて。食物攝取の方式が進化の基礎をなすと云ひ、生存競爭はパンの爲めに起るのだと、マルサスから受け繼いだダアヴヰンの一個の迷妄から『種の起原』を説明せんとしたものだからマルクスの賛成したのも至極尤もであると思ふのである。それでカウツキーの代になるとヘーゲルは全く排除してダアヴヰンに乘換へたかの如き觀がある。その最も露骨なのは、カウツキーの『社會主義倫理學』である。これにはカント哲學を排斥して、變轉の哲學を取り、變轉の哲學にはヘーゲルを排斥してダアヴヰンを取つて居る。

かく社會主義がヘーゲル哲學を排斥して、ダアヴヰンニズムに乘換へたのは善かつたが、進化論そのものが、進化するものであるから、ドグマの樣に信じて居るマルキシズムも進化の逆潮に修正せねばならぬ樣な破目になつたのである。それと云ふのも流轉の哲學の上に建設したものが萬世不變の眞理を包藏して居ると擔ぐのが元來の間違ひで有つて、マルクキシズム其のものが、社會進化の上に立つものとすれば、絶對眞理の上に立つよりか、ラムゼーマクドナルドが云ふ樣に『社會主義とは傾向なり』と云ふ樣に、序のこと、流轉の傾向の上に立てば善いものを、『資本論』が聖書だと云へば、宗教信者の樣にそれに嚙りついて居るのである。それで、ジャーレスで有つたか、『社會主義は最早や科學では無くして、一個の信仰である』と云つたのはこの邊の消息を傳へたものである。

3 生物進化と社會進化を混同する危險

ケロッグが『今日のダアヴヰニズム』に云ふて居たと思ふ。今日の社會進化論は、餘りに生物進化と社會進化を混同しすぎると。之はケロッグの樣な純粹な進化論者から見れば明白なことと思ふ。たとへば或る日本の社會主義の書物にこんな一句が有つた。

『新興商工階級の革命熱は、曾て生物學界にキュヴィーエの天地突變説を追出した。デ、フリーの變化説は正にそれと同じ意味に於て古き商工階級に對する新興勞働階級の要求に生れたものである。』

ベルグソンがソレルのシンヂカリズムの哲學に組み入れられて迷惑した樣に、デ・フリースはベルグソンに飛躍說を敎へたには違ひは無いが、生物學者としては頗る迷惑することゝ思ふのである。眞理は比喩では無い。宇宙の進化法則が、人間を含んで居ることは事實であるとしても、人間には自由意志が有つて、或程度まで、無意識的突變を心理的に自覺するのが人間である。卽ち社會進化には自ら、生物社會と違つたものがある。それを、自然界に起つたものが凡て人間界の事實であるとすることは頗る矛盾した話であるとせねばならぬ。

その最も極端な一例がダアヴヰンの生存競爭論である。ダアヴヰンは弱肉强食が進化の唯一の法則であるかの樣に云ふた然し實際人間社會に於ては必しも之が事實では無かつた。それで道德家と、宗敎家は辛じてその要塞を守つた。そして世の進化論者は皆舊式の道德家を罵つた。然しその後ピーター・クロパトキンや、ヘンリー・ドラモンドや、ジョン、フキスケが出て來る樣になつては、今度はダアヴヰン說とは逆倒に『相互扶助』が八釜敷云はれる樣になつた。そしてダアヴヰニズムを社會進化の中で主張するものは誰一人として無くなつた。之などが、社會進化と生物進化を餘りに混同することから起つたので有つて、カントが道德法から出發して、宇宙の實體をつきとめんと努力したのが、反つて哲學的に壽命長く、未熟な生物學や、進化論から、自然哲學など稱して、宇宙萬有の哲學を說明せんとして、反つて失敗したことを見てもよくわかるのである。

たとへば彼のヘツケルである。彼の如きは生物進化から、人間進化に及び更に社會進化に說き至つたものであるから、見事に頓挫した。今日になつて、彼の科學はその本領である胎生學（エンブリオロジー）に對する貢獻ばかりである。

進化論と云つても今日では、實に複雜なものとなつて居つて、とても一概に論ずることは出來ない。學說だけならべて見ても

一　ダアヴヰニズム——生存競爭陶汰漸進說
二　ラマーク說————個體組成說
三　個體部分競爭說（獨逸ルー說）
四　生殖線內競爭說（ヴアイスマン說）
五　器官陶汰說（ボールドウヰン）
六　隔離說（ジョン、ギユリック）
七　メンデリズム（正系遺傳說）
八　正系發生說（オオソゼネチツクエボリウシヨン）（ネゲリー、フエプエル、クツクパトン）

九 異系發生說（ヘトロゼネチツクミユテーシヨン）（コルシンスキー、ド・フリー、ロエブ）
十 ベルグソニズム（正系發生と異系を一諸にした樣なもの）
十一 除去進化說（ベートソン－完全單體より分化すと云ふ說）
十二 乘加進化（モルガン－單體の經驗を綜合するを進化とする說）

等色々あるが、之等の進化論の諸說に適當した社會學說を作り上げて行くことは到底不可能なことである。それで社會進化は社會進化として別に根本的の研究をすべきがほんとだと私は思ふのである。

4 社會主義と精神生活の進化

既に社會進化論を生物進化論と獨立させ其廣汎な社會的事實を基礎として、或は歷史的に、或は比較的に進化の形跡を研究する時に進化論は始めて、社會學に貢獻する所があるのである。たゞ社會進化論に於て人間の自由意志を計算に入れねばならぬのである、即ち自由意志の發生する歷史から、自由意志の活躍する範圍を研究せねばならぬのである。然るに、進化論は一個の超自由意志の運命哲學であるかの樣に解せられて來た爲めに、マルクス學派の如きも、自由意志の存在を少しも認め無いかの如くに論じて來たのである。之が私等と所謂純正社會主義者と稱する人々の學說の合は無い所である。

ベルグソンなどであると、自由意志の中に宇宙の運命が爆發して居る樣に見るのであるが、私は、自由意志を發生的に見て必しもベルグソンの云ふ樣な突變的なものとは見ないのである。本能の變移が、段々境遇に適應する爲め、又自己を發展さす爲めに必要になつて來たものが、自由意志で有つて、ベルグソンは本能を全能者の樣に云ひ、それを靜止的のものに見るが、私は本能をも推移的變轉的のものと見て、自由意志と連繫さすのである。即ち自由意志は必しも運命を超越したものでは無い。それは宇宙意志の外に立つものでは無いけれども、宇宙意志が、本能と慾望の中に覗き込んで來て、內的目的——即ち理想を植え、これに憧憬せしめ、飛躍せしめる場合に於ては、自由意志が即ち運命そのものであると見ねばならぬのである。

そして社會進化を研究する場合に、この點を我等が忘れてはなら無いのである。たとへばダアヴインが南米テル、デル、フユゴーで無道德無宗敎の人種があると報告した。彼は之が原始人だと考へた。然し之は大きな間違でその後研究すれば彼等にも精靈を拜し、道德を持つて居ると云ふことが解つたのである。

そしてたとへ、そんな原人種を發見したとしてもそれを原人狀

態とどうして云ふことが出來やう。原人種はヘンリ、フラワー・オズボルンの様に五萬年前にもクロ・モーゲン原人種に於てすら、一個の宗敎を持つたと云ふでは無いか、その優等人種から墮落したことが無いとも限ら無いのである。今日の希臘人を見てもよくわかるのである。今日の希臘人の中には、昔フアイアデスやプリスキラスが彫刻した立派な人間は居ら無くなつた。それはあまり希臘人が戰爭ばかりして居たものだから人種的に墮落したのと、他の民族と混血した爲めである。それを今日の彼等を捕へて、之れが希臘人の原種であると云ふならば、それは大きな間違ひである。單細胞から復細胞が進化したからと云ふても、今日のアミーバから人間が進化したと考へることは非常な間違ひで有つて、單細胞の中にもそれ自體の變形と進化が有つて、アミーバの如きは後世に出來たものであると云ふでは無いか！殊に數年前、單細胞が他の單細胞の形を取ることが明瞭に發見せられてからは、一層生物進化の上から見ても、現存せる生物を捕へて、之が原種であると云ふことが餘程科學的研究を經た後で無ければ云へ無いことになつた。今日哺乳動物の中で原種と少しも違はないのは南支那に住む豚の様なタピール Tapir 位である。五萬年も昔から少しも形態と骨格の構造をかへて居無い。それでタピールは『生きた化石』Living Fossil と云はれて居るが、社會進化を研究する時に、我等の研究に便利を與へる様な、社會狀態の『生ける化石』がどれだけあるであらうか、之が頗る疑問である。

たとへば財産の進化を研究する場合、ラフオルゲ Laforge の様に昔は共産的所有が常態であると彼の有名な著作『財産の進化』の中に云ふて居るが最近、シベリアの土人を研究した、リウキンスキー Jan St. Lewinski の『財産の起原』"Origin of Property" の如きでは、ラフオルゲの逆倒を云ふて居る。即ち所有權は初めは、勞働の加はつた個人的のもので有つたが、集團生活を始める必要が起ると共に群團的の方へ移つて行つたと云ふ風に説いて居るのである。ルノーの『財産の起原』論なども頗る有名であるが彼も主として、ラフオルゲの説に傾いて居る。社會主義の方から云へば、ルノーや、ラフオルゲや、クロパトキンの様に説明すると非常に都合が善いのである。然し此處に私はその社會主義的科學の危險を思ふのである。もし社會主義の爲めの眞理であるならば、實際共産的財産時代が、原始的なものであると説明することは善いことであらうけれども、科學を曲解して昔の共産的財産組織が今日の社會

組織には全くあてはまら無いものであるにもかゝわらず。たゞそれで騒ぐならば、それは實に非常識的なことだと思ふのである。

これは進化論を運命的に見んとするから、こんなになるので、過去に於て資本主義の時代が來ない時には、共產的で有つた、それで、資本主義を取り去れば、また共產的時代が科學的運命として來ると信じたいばかりに、共產主義者はラフオルゲの說に執着せんとする風がある。

私から見れば、過去がどうであらうともかまは無い。勿論歷史的發展は無視することは出來ないにしても、人間は人間であるから、現在の社會組織が惡いとするならば、根本的に改造せねばならぬ。それは共產的であるか、組合的であるかそれは問題で無い。兎に角自由意志を以つて、やれるだけやらねばならぬと考へるのが正當である樣に考へるのである。

社會主義の唱ふる自由戀愛卽ちウエルスやベーベルの主張する男女關係論がそうである。男女兩性の社會的關係は社會學的に確立した定論があるとは云へ無い。モルガンが發見したと稱する群婚時代と云ふものも、そんなものが有つたに違ひは無からうが、之も退化社會の一現象で無いと云ふ保證は出來ない。學者の間に色々と研究せられて之に對する反對論が多いのである。然し群婚時代が人間史の一時代を劃して居たと考へることは、ラフオルゲの共有財產時代と共通する處が有つて、社會主義には非常に都合が善いから、之を信ぜんとする傾向があるのである。然し私はこんな危險な假說の上に神聖な男女問題を礎くことを惧るものである。勿論ベーベルなどが今日の性慾生活と家庭を資本主義の壓制から解放してくれんとする努力には多謝せざるを得ない。然しそれと同時に今日の家庭が、全く資本主義のみの產物で有るとは私はどうしても信ぜられ無いのである。戀愛の進化は必しも、財產の進化と並行しないもので有ることは、ダアヴヰンが自然陶汰と雌雄陶汰を別個の者として取扱つて居るのを見てもわかるが、人間社會に於ても、戀するものが財產を無視して相愛するのは殆ど過去の文學の花で有つたと考へて善いのであるが、その財產の無視者でも、家庭を作ることに於ては矢張り變りは無いのであるから、私は勿論今日の家庭が永遠性のものであるとは云は無いけれども、たとへエレン・ケイの時代が來たとしても、相思の者は子の無い家庭を永遠に作ることに於ては、今日の聖い家庭を作つて居るものと餘り變りは無いのである。一夫一婦は藝術的作品で有つて、キリス

ト敎が之を支持するのは之が藝術的であるからである。唯物社會主義者が之を財產に捕へられた因襲だと云ふのは少し極端過ぎる行き方である。社會主義の時代が來て、戀愛を解放した處で、藝術的に愛するものは一人の女しか愛し得ないのだ。

唯物社會主義は社會進化論に就てもこの樣に色々な誤解を持つて居る。然し我等の忘れてはならぬことは、社會主義が、社會的事實を歷史的に研究し、境遇の感化が人間主體にどんな風に作用するもので有るかと云ふことを科學的に研究せんと努力して來たことは忘れてはならぬ點である。

たゞ此場合に於ても、社會化と云ふことが自我を社會的に組織すると云ふことを考へ無いで、唯物社會主義では、たゞ境遇の改善のみに心をそゝぐことである。即ち、宗敎を嗤ひ、哲學を無視する傾向があるが、之はその缺點であると許しても、『我』の責任を輕視する爲めに、その倫理的効果が少なからずある。即ちたゞ階級爭鬪と革命のみの手段によつて、社會を改善すれば善いと考へ、『我』の能力によつて――社會意識の倫理的覺醒によつて――所謂進化的に社會改造を試みんとはせずして、唯物的に改造せんとする點に於ては、マルキシズムなどは全く論理的缺陷があると私は考へるものである。辯證の哲學から出發して、進化論を採用したマルキシズムなどが、漸次的進化には滿足出來なくて、唯物的革命說を固守し、デ・フリースなどの趣異說を信ぜんとして居るなどは余程の窮策であるが、一方デ、フリースから出たベルグソンの生命飛躍說を信ずるソレルが唯心的に傾きサンヂカリズムの哲學を編むに至つては、社會主義と進化論の關係が一層複雜になつたことを證明するばかりでなく、進化論を信ずる以上、精神生活の進化をも社會主義が信じなくてはならぬことになつたことを事實上に證明してくれるのである。

即ち、進化論から出發する社會主義は、たゞマルクスの樣に唯物的經濟史觀を說くばかりで無く、心理的爆發の歷史を科學的に綴り、その進化の傾向が社會化に有利であると云ふことも研究し無くてはならぬことになつたのである。

修正派社會主義

室伏高信

一八九〇年代において社會主義の理論及運動のうへに二つの異端者が現はれた。その一つは『革命的サンヂカリズム』であり、他の一つは修正派社會主義である

修正派社會主義 Revisionism は獨逸の社會民主黨に非常な影響を與へた。『ベーベルの死後において修正派社會主義は獨逸社會民主黨の大半を征服した』。ベルトランド・ラッセルはその『自由への諸道』のうちでこう述べてゐる。(1)この運動を代表するものはエデュアード・ベルンシュタイン(Eduard Bernstein, 1850)である。ベルンシュタインは一九一四年三月そのブダペストに於ける講演のうちで彼れの修正社會主義説の或部分を撤回してゐるが。(2)その撤回と否とにかゝわらず彼れが修正社會主義説の代表者であることの事實を動かすことはできない。彼れの歴史的の著述『進化的社會主義』または『社會主義の前提と社會民主主義の任務』(Evolutionary Socialism, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozial-Democratie) はその代表的の著述である。(3)『この書物は全然獨逸社會民主々義修正派の理論及政治的傾向の解説として見ることができる』。ベルンシュタイン自身が一九〇九年その書物の英譯版への序文中でこう述べてゐる。それは一九〇九年までに獨逸において九版を重ね、英佛露の各國語に譯されてゐる。各國の社會運動に重要な影響を與へてゐることは勿論である。就中、この書物の發表とともに獨逸社會民主黨の内外に非常な動搖が起つた。『社會主義の反對者はこれをもつて社會主義の理論の不完全であることの辯解すべからざる證據であると論じた。またカール・カウツキーはこれをもつて科學的社會主義の基礎的原理及び觀念の廢棄であると非難した。獨逸社會民主黨は一八九九年十月のハノーペア會議においてこの書物についての討議を議題とし、三日半に亘る激烈なる討論を續けたほどである。

(1) Bertrand Russell, Proposed Roads to Freedom, P. 27

(2) Volkstimme Butapest, March 19, 1914

(3) ベルンシュタインは最初その意見を『新時代(ノイエツアイト)』において發表した。それの編纂されたものが『社會主義の歷史及び理論』(Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus, 1900).年である。またベルンシュタインの所謂修正主義について知るためには更に彼れの小著『如何にして科學的社會主義は可能なりや』(Wie ist Wissenschaftlicher Sozialismus Möglich?) について一讀するの必要あることは勿論である。

(一)

修正派社會主義または進化的社會主義は、社會主義そのものの立場において、マルクス主義の根本に大斧鉞を加へてゐるものである。だから修正派社會主義は社會主義を葬らんとする運動ではなくして社會主義を改革せんとする運動である。それはサンヂカリズムのやうに、社會主義の外部から社會主義を批評して別に新社會組織を導かうとするものではなくして、社會主義の内部から社會主義の改革を行はんとする運動である。『私は深く社會主義運動を信じ、勞働階級の前進を信ずる。それは一歩一步、商業的地主的寡頭專制の支配から、凡ての部面が、勞働し且つ創造する人々の利害によつて指導せられる眞實なるデモクラシーに、社會を變へることによつて、彼等の解放を遂行しなくてはならぬ。』ベルンシュタインは彼れの名著『進化的社會主義』の英譯判への序文中においてかう述べてゐます。ベルンシュタインは一九一四年そのブタペストにおける講演をなすに至るまで、彼れの修正社會主義の凡ての信條を變更することのなかつたごとく、また彼れは自ら社會主義そのものに對する信條をも變更することはなかつたのである。だから修正派社會主義はどこまでも社會主義の内部から社會主義を改革せんとする運動であつて社會主義そのものを轉覆せんとする意圖あるものではないことは勿論であるにしても、それの要求する改革はマルクス主義の根本についてのものであり、それは社會主義の立場においての、マルクス主義の轉覆を要求するものであるといふことができます。然り修正派社會主義の批評はマルクス主義の根本を轉覆するものである。從つてそれはいふまでもなく如何なる意味においても『マルクス主義の危機』である。これによつて近世社會主義が革命的の急變をうけたものであることは勿論である。社會主義は最早や決してマルクス主義そのものではない。マルクス主義と社會主義とは、マルクス主義と修正

派社會主義と對立するごとく、對立するものとされなくてはならぬ。修正派社會主義は近世社會主義の運動及び理論のうへにおいてかくのごとく重要な意義をもつてゐるものである。だから修正社會主義説の發表とともに、一面には社會運動のうへに、一大動揺を起したとともにまた他面において正統マルクス主義の信者から激烈なる非難を招いたことは當然でなくてはならぬ。

（二）

マルクス主義の原則とは何んぞや。修正派社會主義について研究するためには先づマルクス主義そのもの丶根本について一瞥することが必要である。カウツキーに從へばマルクス主義の重要なる原則は、唯物史觀、餘剰價値説、資本集積説、資本主義倒壊説、階級鬪爭説がこれである。この點は獨りカウツキーが認めてゐるところであるばかりでなく、一般にマルクス主義者によつて承認されたる『マルクス主義の要素』である。從つてまた修正派社會主義はこれ等の諸點について批評を加へることでなくてはならぬ。

（三）

マルクス主義の諸要素のうちにあつて、最も重要なる意義をもつてゐるものの一つは、謂ふところの唯物史觀 Die Materialistische Geschichtsauffassung である。エンゲルスはこの唯物史觀と餘剰價値説とをもつてマルクスの二大發見であるとなし、これによつて社會主義は初めて科學的となつたことを述べてゐます。エンゲルスの言葉通りにいへば、『彼等とともに社會主義は科學的となつた』のである。ベルンシュタインもまたこの唯物史觀をもつてマルクス主義の最も重要なる要素であるとなしてゐる。『マルクス主義の基礎においても最も重要なる要素、全組織のうちに浸透してゐるいはゞ根本法則が唯物史觀と稱せられてゐる獨特の歴史哲學であることは何人も反對しないところであらう』。ベルンシュタインは其修正派社會主義論の冒頭においてこう述べてゐる。(1)從つてベルンシュタインによれば、この點においてそのマルクス主義の誤謬はマルクス主義そのもの丶誤謬とされるのである。彼れの言葉に從へば『道理上マルクス主義はそれ（唯物史觀）とともに立ち、それとともに倒れる』ものである。ベルンシュタインはかくのごとくに唯物史

觀を重要視してゐるのである、その唯物史觀を重要視するの一點においては、卽ちそれをもつてマルクス主義の最も重要な要素であるとするの點においては、彼れはカウツキーともエンゲルスとも、其他のマルクス主義者とも、少しも異るところはないのである。然らば彼れは唯物史觀を如何に觀念してゐるや。彼れは先づその唯物史觀論の冒頭において次のやうに述べる。『歷史の唯物的解釋の正確の問題は歷史的必至の決定的理由の問題である』と。彼れはこういふ冒頭のもとに先づ唯物主義の性質について次のやうに述べる『唯物主義者であるためには第一に凡ての現象を事件の必至的運動に遡らしめることが必要である。唯物主義に從へばこれ等の事物の運動は徹頭徹尾機械的過程として各個の過程は先行の機械的事實の必至的結果として成就されるものである。凡ての出來事はそれが思想によつても、最後には機械的事實が決定する最後にそれは常に思想の形體及び意思の方向を決定する事物の運動である。またかくしてこれ等のことは不可避のことである。唯物主義者は神をもたないカルヴィン敎徒である』と(3)。ベルンシュタインは唯物主義をかくのごとくに解してゐる。從つてそれは機械觀的人生觀、機械觀的歷史觀であつてカントの謂ふところの彼れ自身に目的を具有するの目的觀と對立するものであることは明白である。

唯物主義、哲學的唯物主義をかくのごとくに解してゐるベルンシュタインは、更にこの唯物主義の歷史的解釋が如何なる意味をもつてゐるかについて次のように述べる『唯物主義を歷史の解釋に適用することは、第一に凡ての歷史上の事件及び發展が不可避のものであることの信仰を意味する。問題はたゞ如何なる方法においてこの不可避が人間の歷史のうへに成就されるや、如何なる力の要素が決定的の言葉を活すか、相違せる力の諸要素の間における相互關係如何、歷史上の如何なる部分が自然、政治、經濟、法的組織、思想の分前に歸するやだけである』と(4)。次いでベルンシュタインはマルクスの唯物史觀について批評を試みる。

(1) Bernstein, Evolutionary Socialism. (Socialist Library VIII, London) P. 5

(2) ibid, PP. 5—6

(3) ibid, PP. 6—7

(4) ibid, P. 7

マルクスの唯物史觀は『經濟學批評』Zur Kritik der Politischen Oeconomie の序文中に述べられてゐる。『物質生活における生產方法は一般に社會的政治的及精神的生活過程を決定する。人間の意識が人間の存在を決定するのではなくして、却つて是等は反對に人々の社會的存在が人間の意識を決定するのである。社會の物質生產力は、其發展の一定の段階においてそれ等のものがそれまで其うちに活動してきた現在の生產狀態又はたゞその法律上の表現であるにすぎない財產關係と衝突する。これ等の關係は生產力の發展の形式から束縛に變ずる。かくして社會革命（ソチアラアレヴオリユーシヨン）の時代に入る。經濟的基礎の變動とともに巨大なる全上部構造が遲かれ早かれ轉覆する。』以上はマルクス自身が歷史的發展における物質的關係を述べたものであつて、彼れの唯物史觀と稱せられるものゝ骨子であるといふことができる。ベルンシユタインもまた以上の說明卽ち『經濟學批評』の序文を引用したる後に、それについて批評を試みてゐるが、彼れの批評の最初の言葉は、マルクスの用語の獨斷的なるに驚くといふの一句である。次に彼れはマルクスの唯物史觀としての『經濟學批評』の序文中において、マルクス及びあまりに人間の意識と社會的存在とを鋭く對立させてゐることの事實を指摘し、かくのごとくしては、人間はたゞ『歷史の力の取扱人』であるに過ぎないものとしか思はれないといふことを論じてゐる。さうしてマルクスの唯物史觀を次のように概括する『これを要するに人間の意識及び意思は物質的活動の從屬的要因であるように見える』と。『經濟學批評』の序文において先づマルクスの唯物史觀を見たるベルンシユタインは次に『資本論』第一卷第一版の序文においてのマルクスの歷史觀が稍や妥協的であることの事實を指摘し、更にエンゲルスの解說に說及する。エンゲルスはこういふ『凡ての社會的變化及び政治的革命の最後の原因』は生產及交換の方法の變化において求められるものであると。ベルンシユタインはこのエンゲルスの言葉を引用したる後に、エンゲルスの謂ふところの『最後の原因』の意味を解說して、生產及び交換の原因が『最後の原因』であるとすれば、そのことからして、更に他の原因の存在するものであることを推定すべき理由となるべきことを指摘してゐる。從つてこの『他の原因』または『他の力』の存在を是認する以上、歷史の解釋のうへに、これ等のものを閑却すべきものでないことはまた直にベルンシユタインの論ずるところでなくてはならない。『低い程度の力であつてもこれを閑却することは、凡て數學者の知つてゐ

るとはり大きな過誤を含んでゐるものである。』ベルンシユタインはこう論じてゐるのである。(2)即ち物質的要素以外に歴史的發展の原則のうへにおいて、他の要素をも承認しなくてはならないと主張してゐるのである。

(1) Bernstein, op. cit., P. 9

(2) ibid., P. 10

（五）

ベルンシユタインは決してマルクスまたはエンゲルスが『非經濟的要素』を閑却してゐるといつてゐるのではない。却つてその反對である。その反對の實例は『無數に』列擧することができるとはベルンシユタインの述べてゐるところである。けれどもベルンシユタインはマルクス及びエンゲルスの歴史觀の矛盾については少しも假借するところはない。『マルクス及びエンゲルスは社會進化のうへにおいて、最初は非經濟的要素を非常に輕視した』ことを指摘し、さうして一八九五年 Sozialistischen Akademiker におけるエンゲルスの二つの書簡（一つは一八九〇年に書かれたもの他の一つは一八九四年に書かれたもの）をもつて、マルクス及びエンゲルスの最初の立場に修正を加へたものであることを論じてゐるのである。(1)『この書きはマルクスの所論とは稍や異つてゐることを自白しなくてはならぬ。』之はベルンシユタインがエンゲルスの前記の手簡を批評した言葉である。(2)こうしてベルンシユタインはマルクス主義においての唯物史觀なるものが終始一貫したものでないこと、即ちその最初に唱へられたものに對して屢々修正の行はれつゝあることの事實を論じ、さうして次のやうに述べる『今日、唯物史觀を奉ずる人々は、それの最初の形においてゞはなしにそれの最も發達した形においてゞあることを餘儀なくされる。即ち彼れは生産力及び生産狀態の發達と勢力とのほかに、法律、道德、各時代の歴史的及宗教的傳統、地理的勢力及び自然の他の事情についても充分に參酌することを餘儀なくされる』と。(3)そればかりではなく、ベルンシユタインはこの唯物史觀の基礎をなすところの經濟關係が社會進化の決定のうへにおいて次第にその勢力の割合を減少してゆきつゝあることさへ述べてゐる。『科學や藝術や、社會關係の凡ての連鎖は、今日においては、以前においてよりも、經濟に從屬することが遥に少ない。……この結果として技術的、經濟的進化と他の社會的傾向の進化との間における原因結果の相依關係は常に益々間接的となり、それか

らして前者（經濟的進化）の必要は著しく後者の形體を指導するの力を失ひつゝある』と。(4)ベルンシュタインは當時においので（一八九〇年代）唯物史觀なるものが、その最初の發見者によつてのものよりも別個のものであることを喝破し、更に『マルクスの天才をもつてしても尙ほあらゆる種類の誤れる結論を導いた』ことを痛論するに至つてゐるのである。(5)かくしてベルンシュタインは唯物主義の歷史解釋に反對し、マルクスそれ自身の歷史觀に對して非難を加へ、こゝに正統派の哲學的基礎に對して痛烈な批評を加へることに彼れ自身の立場、修正主義の立場を築こうとしてゐるのである。けれども彼れが唯物主義の歷史解釋に反對することは、彼れが歷史の發展においての經濟的進化の勢力と影響とを無視してゐることではない。彼れはその勢力と影響とを認める。けれどもまた彼れはこれをもつて唯物的、機械的歷史觀に贊成するものでないことは既に述べたとほりである。即ち一方に經濟的進化が社會進化のうへに重要な原動であることを認めつゝ、曾てそれ以外の要素が、社會進化のうへに重要な役目を演ずるものであることを認めてゐるのである。他の要素とはいふまでもなく理想主義的要素である。即ち彼れは社會主義においての現實的、唯物的要素とともに更に理想主義的要素を高調することにおいて、彼れの修正派の基礎を築こうとしたのである。この點が修正派社會主義の立場の第一點であり、また近世における社會主義運動のうへにおいて最も重要なる意義をもつてゐるのである。

(1) Bernstein op. cit., PP. 101
(2) ibid., P. 11
(3) ibid., P. 12
(4) ibid, PP. 15-6
(5) ibid., P. 16

（六）

前にも述べたとをり、エンゲルスに從へば、マルクス及びエンゲルスの社會主義がユートピアンでなくして、『科學的』であることは、それが唯物史觀並に餘剩價値說の二大發見のうへに立つがためである。その唯物史觀についての批評を加へたベルンシュタインの修正社會主義は、また『マルクスの二大發見』のうちの他の一つの原則としての餘剩價値說 Mehrwerttheorie に對しても深刻な批評を加へてゐる。『マルクス主義者の理論に從へば餘剩價値は資本主義社會における樞軸である』。ベルンシ

ユタインはその餘剩價値說の冒頭においてこう述べてゐる。さうして先づマルクスの價値論——餘剩價値說の基礎としての價値論について批評を加へる。『マルクスに從へば近世社會における商品の價値は時間によつて計量するところの商品のうへに費されたる社會的に必要な勞働から成立するものである。』けれどもてのことを分析してゆくと『第一には純粹交換價値が發見されなくてはならぬ。卽ちわれ等は特定商品の特定使用價値を放擲しなくてはならぬ。第二には——一般的または抽象的なる人間の勞働の觀念を組織して——われ等は特定種類の勞働の特質を承認しなくてはならぬ。次に勞働價値の標準としての社會的に必要なる勞働時間に達するためには、われ等は各個勞働者の勤勉、活動、準備においての相雜を承認しなくてはならぬ。さうして更に（價値が市場價値卽ち價格に變ずる問題になると）社會的に必要なる勞働時間を特定の商品に對して個々に承認しなくてはならぬ。‥‥かくすることによつて一個の商品について考究する時は、價値は凡ての具體的の性質を失ひて純粹なる抽象的觀念となる。けれどもこれ等の事情のもとにおいて餘剩價値はどうなるのか？マルクス主義者の理論に從へば、これは生產物の勞働價値と、勞働者がその生產に費したる勞働力に對する支拂との間における相違から成立する。それゆへに勞働價値がたゞ投機的公式または科學的假說として受取られることを要求することができる時に、餘剩價値は純粹の公式——假說の上に立つ公式となるのである』。(1)

『フリードリツヒ・エンゲルスは「新時代（ノイエツアイト）」において發表した論文（一八九五—九六年）のうちで歷史的考察によつてこの問題の解決をなすべきことを指摘した。‥‥けれど彼れは利潤率の昂騰及び發達を立派に說述したが、この論文は、價値の問題を論ずるところで證據力を信用せしめることに失敗した。エンゲルスの表現に從へば、マルクス主義者の價値の法則は、商品としての生產物の交換の最初（バビロンエヂプト等）から資本家生產の時代の初期に至るまで五、六千年間經濟上の法則として一般に支配した。パアヴアスは同じ年に多くの事實を提げてこの見解に反對した。勞働價値の基礎においての交換は、交換のための生產が單に產業單位の補助的なる分科である間は一般的の規律となることのできないことは明らかである。‥‥交換價値を含んでの勞働の問題及び價値併に餘剩價値の關連せる問題は、このやうな產業の階級においては、今日においてよりも明白を缺くのである。』(2)

『それ等の時代において今日においてよりも明白なるものは餘剰勞働の事實である。餘剰勞働が古代において行はれた時には如何なる價値觀念によつてもこれを隱すことはできなかつた。』(3)

『この勞働の賃銀と商品の價格との間における關係の明白なることは、資本家時代に入る時にも行はれた。……製造工業時代の初期において交換價値の尺度としての勞働について起つた理論は疑もなく勞働をもつて唯一の富の父であるとするの觀念から出發した。けれども直に餘剰勞働の觀念を明かにすることよりは寧ろ混亂に導いた。』(4)

『アダム・スミスの時から勞働價値は既に行はれてゐる現實からの抽象として考へられた。……スミスにとつては、資本家の世界においての、利潤と地代とは勞働または賃銀のほかにおいて價値の要素である。さうして勞働價値は、スミスにはたゞ勞働の結果による生産物の分前を明らかにするための概念であるに過ぎない。』(5)

『マルクスはスミスよりはもつと固く働勞價値の思想に執着した。さうしてそれをもつと嚴正に考へたが、それと同時にまたもつと抽象的形式に考へた。……各個の商品の價値は、それ等が生産の價格即ち生産費プラス利潤率で賣られてゐる以上は、何か全く第二義的のものとなつた。第一の位置を占めるものは、社會の全生産の價値であり、さうしてこの價値の、勞働階級の、賃銀の全額のうへにおける餘剰即ち各個のではなくして全社會的餘剰價値である。……けれどもこの餘剰價値の量は全生産と全需要即ち市場の購買能力との間における關係に比較してのみ考へられることである。……かくして價値は純粹に抽象的實在として考へられてゐるのであり、ゴッセンや、ジェボンスや、ボアム・ヴアヴェルク流の最終利用の價値と異らないのである』

『かゝる抽象複雜したる事象の觀祭においては自然免れがたきことである。……けれどもある抽象は論證の限定せる目的についてのみ許されることである』(7)

『ある時期においてある種の商品についての全需要に對する正確な標準が存在しないとしても。實際の經驗の教ふるところによれば、一定期間内において、凡ての商品の需要と供給は略ょ平均する。實驗は更に進んで次のやうに教へる。商品の生産及分配において、社會の一部のみ活動をなし、その他の部分は、生産に直接の關係なくして勞働の報酬をうけ、または全く勞働

することなくして收入をもつ。非常に多數の人々はかくして生産に使用される勞働によつて生活する。さうして收入統計の示してゐるところによれば生産に活動してゐない階級は、勞働的生産階級の分前についての人數の關係よりは遙に多くの全生産物の分前を專有してゐる。後者の餘剩勞働は經驗上の事實であり、演繹的の證據を必要としない。マルクス主義の價値説が正しくあつてもなくつても、餘剩勞働の證據には全く重要ではない。』(8)

『勞働價値説は、屢ゝ資本家によつての勞働者の實際の絞取の標準のやうに見えることにおいて誤謬である。前述によりてかかる標準は、人々が全體としての社會のうへに立ち、さうして勞働者の賃銀の全額をその他の人との收入の全額に對立させる場合においてさへ誤りであることは明白である。價値説は原子説が一片の彫刻の美醜に對してのごとくに、勞働の生産物の分配についての正不正に對して殆んど何等の規準をも與へるものではない。われ等は今日においては非常に有利の地位を占めたる勞働者「貴族主義」の會員を見る』(9)

『社會主義または共産主義に對する科學的基礎は、賃銀勞働者が彼れの勞働の結果たる生産物の全價値を受取らないといふだけの事實によつて支持されるものではない』(10)

ベルンシュタインはマルクスの餘剩價値説について以上のごとくに批評してゐる。即ち彼れはマルクスの餘剩價値説をもつて一定の現實の社會における事實を論じたるものでなくして、單に一個の思想上の抽象論に過ぎないものであり、價値に關する學説は毫も勞働の生産物の分配についての正不正の標準となるものでなく、また勞銀勞働者がその勞働の結果たる生産物の全價値を受取ると否とは科學的社會主義の基礎となすに足らないことを痛論してゐるのである。

かくしてベルンシュタインはマルクス主義の最も重要なる要素としての餘剩價値説についても大膽なる批評を加へマルクス主義の根柢を動搖せしめんとしてゐることを知る。さうして彼れは最後にエンゲルスの言葉を引用する。エンゲルスは『哲學の貧困』の序文中にいふ『マルクスは決して彼れの共産主義的要求をこの（餘剩價値説の）うへにおいたことはない。彼れは日日に益々われ等の眼前にもち來されんとつゝあるところの資本家生産方法的倒壞のうへに基礎を置いたのである』と。從つてベルンシュタインは續いて資本主義の倒壞説並に資本集積説についての批評にと移ることとなる。

(1) Bernstein, op. cit., PP. 28－30
(2) ibid., PP. 30－1
(3) ibid., P. 31
(4) ibid., P. 32
(5) ibid., PP. 32－3
(6) ibid., PP. 34－5
(7) ibid., P. 35
(8) ibid., P. 39
(9) ibid., P. 39

(七)

マルクス主義においての資本集積說 Akkumulationstheorie とは何んぞや、マルクスに從へば勞働者を絞取することによつて生じた餘剩價値は利子、利潤、地代等の名によつて所有階級の取得するところなり、その一部は化して資本となる。この資本はまた餘剩價値を生み、餘剩價値はまた資本に繰込まれかくのごとくにして資本は益々膨脹し集積し、少數の所有階級の手に集積されるのである。さうして企業家の間にあつても低廉なる生產費によつて生產しえられるもの即ち大企業家は競爭における優勝者となり、小企業家は漸次仆れ合併され資本の集積とともに經營の集中を見ることとなる。マルクスは資本主義の進化についてかくのごとくに考へる。

『倩、これは凡て正しいであらうか?』ベルンシュタインの修正社會主義はマルクスの資本集積說についてこういふ問を起し、さうして自らこれに答へる。『然り、また然らず。』ベルンシュタインは先づこう述べる。彼れは『傾向として』マルクス說の眞理であることを認める。彼れはまたいふ『原理の範圍においては、われ等は彼れの陳述に一致する』と。けれどもベルンシュタインは資本主義の實際について考査することによつて、マルクスの資本集積說の必ずしも眞實にあらざることを指摘する。

彼れは先づトラストについて述べる『一年ほど前(一八九九年に書いた)に組織された英國の裁縫絲トラストは一萬二千人を下らぬ株主をもつてゐる。これ等のうち六千人は六十磅の平均資本の元株の持主である。四千五百人は百五十磅の平均資本の優先株の持主である。一千八百人は三百十五磅平均資本の債券の持主である。また紡績トラストは五千四百五十四人の株主をもつてゐてそのうち二千九百〇四人は平均資本三百磅の元株持主であり。一千八百七十人は平均資本五百磅の優先株の持主で

あり、六百八十人は平均資本百三十磅の債券の持主である。棉花トラストについても同一のことを知る』。

『マンチエスタア運河會社の持主は四萬人、テイ・リプトン食糧會社の株主は七萬四千二百六十二人である』

『偖て、凡ての株主が資本家の名をうけるに足るものではない。……株主の數は急速に増加した。英國における株主の數は一百萬人超えてゐる』

『國富の分配は收入統計のうへからも明らかにすることができる。一八九三—四年の歳計年度において英國では百五十磅以上の收入をもつてゐるものが七十二萬七千二百七十人（一九〇七年には百六十磅の年收あるもの八十九萬四千二百四十九人）に達した。このほかに尚ほ地代、借家料等の收入者を數へなくてはならぬ。これ等のものゝ數は、前記百五十磅以上の年收あるものの數の二倍に近いであらう。』

『英國評論（イングリッシュレビュー）の計算に從へば、英國において年收百五十磅以上一千磅に達する家族、即ち中等階級、下級所有階級及び上級勞働階級の家族は、一八五一年に三十萬であり、一八八一年には九十九萬である。この間に人口は約三十パアセントの増加であるに對し、以上の收入ある家族の増加は二百三十三パアセント三分の一に達してゐる。キッフェンの計算によれば今日（一八九九年）英國における納税者は百五十萬人である。チオザ・モネーの計算によれば一九〇三—四年英國において百六十磅以上七百磅の年收あるものは七十五萬人に達する』

『ムーロルの計算によれば、フランスでは八百萬家族のうち、百七十萬は、ブルジョアの狀態（平均收入二百六十磅）にあるに對し、勞働者六百萬、富豪十六萬である。フロシアではラサールの讀者が承知してゐるとほり、一八五四年には一千ターラー（一ターラーは略々わが一圓五十錢に當る）以上の年收あるもの一千六百三十萬の人口中で四萬四千四百〇七人であつたが一八九四—五年には三千三百萬の人口中で三十二萬一千二百九十六人は百五十磅以上の納税をなしてゐる。一八九七—八年にはその數は三十四萬七千三百二十八人となつた。獨逸の最も發達した工業國でさへ次の統計の通りである』(4)

年收額	一八七九年	一八九四年
四十磅までの年收ある者	八二八、六八二人	九七二、二五七人
四十磅以上八十磅	一六五、三六二	三五七、九七四
無產者收入者	九九四、〇四八	一、三三〇、二三一

八十磅以上百六十五磅	六一、八一〇	一〇六、一三六
百六十五磅以上四百八十磅	二四、〇七二	四一、八九〇
四百八十磅以上二千七百磅	四、六八三	一〇、五一八
二千七百磅以上	、二三八	、八八六

ベルンシュタインは先づ以上のごとくに國富の分配について所有階級の數が決して減少せざること、否、それが相對的には絶體的にも増加してゐることとの事實を擧げてマルクス主義の立場に反對し、『若しも社會民主主義の活動と希望とが富者の減少のうへにかゝつてゐるとすれば、それは實に眠つてゐたであらう。けれども事實は反對である。社會主義の希望は社會的富の減少のうへに立つのではなくしてその増大のうへに立つものである』。ベルンシュタインはこう論じてゐる。(5)

さうしてカウツキーの駁論をもつてそれは資本と資本家との混同であるに過ぎないと論じてゐるのである。(6)

(1) Karl Marx, Capital (Kerr edition) I.PP.19—784

(2) Bernstein, op. cit., PP. 43—4

(3) ibid., PP.45—6

(4) ibid., PP. 46—7

(5) ibid., P. 48

(6) ibid., PP. 51—2

(八)

ベルンシュタインは次にマルクス主義の資本集積説を打破するために、生産及び富の分配上におけるエスタブリッシメントの階級について論ずる。彼れは英國における工場監察官の報告(一八九六年)について觀察する。それによれば英國において工場法の支配をうくる工場の從業者は四百三十九萬八千九百八十三人である。それは一八九一年の國勢調査(センサス)に從へば全產業勞働者の半數にしか過ぎぬ。この國勢調査においての數は運輸業を除いて九百〇二萬五千九百〇二人である。また工場法のもとにおける四百萬の勞働者は十六萬九百四十八の工場に分配されてゐるから、一工場における平均勞働者の數は二十七人乃至二十八人である。一八九五年の獨逸の國勢調査においても略ゞ同樣の數字を發見することができる。即ち一千五十萬の產業從業者のうちで約三百萬人は大企業に働き、二百五十萬人は中企業(六人から五十人)に働き、四百七十五萬人は小企業に働いてゐる。ベルンシュタインは更に佛、墺、瑞西等諸國の統計によ

りて次のように結論する『各種の狀態は小企業及び中企業の持續及び再生を許容する』と。(1) さうして次のやうにその論述を續ける『大工業は常に小工業を併合することはない。たゞ極小工業のみ關係的絕體的に衰滅しつゝあるに過ぎない。小工業及び中工業は増加しつゝある』と。ベルンシュタインは以上の論述を立證するために獨逸の統計から次の數學を引用する。(2)

	一八八二年	一八九五年	増加率
小事業（一人―五人）	二、四五七、九五〇	三、〇五六、三一八	二四、三
中事業（六―一〇人）	五〇〇、〇九七	八三三、四〇九	六六、六
中事業（一〇―五〇人）	八九一、六二三	一、六二〇、八四八	八一、八

この同じ期間において人口は十三パアセント半の増加であるがゆえに、小企業及中企業は人口増加率以上に増加しつゝあることとが證明されてゐるのである。彼れは更に土地所有者についてフロシアの例をとり、和蘭の例をとり、各種の精密なる統計に徵して次のように論結する『西部ヨオロッパの全部幷に合衆國の東部諸國においては農業地の小所有及び中所有が到所に増加しつゝあり、大所有及び極大所有が減じつゝあることは疑の餘地がない』と。(3) かくしてベルンシュタインはこの事實から出發してマルクス主義の批評に轉じ次のように論ずる『若し近世社會の崩壞がピラミットの頂點及び基礎の中間にある中等階級の消滅のうへにかゝつてゐるとすれば、また若しもそれがこの中等階級の最上級及び最下級社會に併合せられることのうへにかかつてゐるものとすれば、それの實現は、十九世紀の初代においてよりも、今日の英國、フランス、獨逸において、より多く接近してゐるものではない』と。(4) 即ちベルンシュタインは中等階級の消滅をもつて今日の事實に非ざることを證明し、これをもつて社會主義實現の基礎となすべからざることを論じてゐるのである。

(1) Bernstein, op. cit., PP 59—60
(2) ibid, PP. 62—3
(3) ibid, Pr 71
(4) ibid, 72

（九）

ベルンシュタインの修正社會主義は續いてマルクスの恐慌說 Krisentheorie について批評を加へる。マルクスに從へば資本

主義においての、無政府的生産制度においては、生産の經過は常に不規律を極め、生産過剰の結果を來し、屢々生産及び販賣の頓座を來し恐慌は頻々として起り、一部の企業は崩壊するに至るとされてゐる。ベルンシュタインはこのマルクスの恐慌説についてもまたその根柢を覆さうと企てる。こゝに彼れの所説を一々述べてゐることは避けるが、彼れは先づマルクスがこの點について資本論の第二卷において述べたるところと第三卷において述べたるところとが矛盾してゐることの事實を擧げたる後に、マルクスの恐慌説を解剖してこれを詳に批評し、さうして次のように論結する『各個の工業の歴史は、我等の恐慌が決して常に所謂一般的恐慌と同時に起るものでないことを示してゐる。マルクスは固定資本の加速度的更新の必要のうへに定時的の恐慌に對する材料の基礎を樹立することができたと信じた。恐慌に對する重要なる理由がこの點に發見せられることは疑もなく事實である。けれどもこれ等の更新の時期が各種の產業について同時に起るものであるとすることは正確なことではない』

『經濟的恐慌についてのマルクス・エンゲルスの説明は、引用したそれの事實との接觸において、恐慌の問題が二三の流行語によつて解決せられるものでないことを示すのに充分である。われ等はたゞ近世經濟の如何なる要素が恐慌のために働きまた如何なる要素がこれに反對して働くかを穿鑿することができるだけである。これ等の力の相互の終局關係またはその發展を先驗的に豫斷することは不可能である。……地方的及び部分的不景氣は避くべからざるものである。一般的不景氣は今日の組織及び世界市場の擴大、特に食糧品生産の非常に擴大してゐる狀態においては不可避のことではない。(2)かくしてベルンシュタインはマルクスの恐慌説をも一蹴してゐるのである。

(1) Bernstein, op. cit., P. 91

(2) ibid., P. 93

(十)

われ等は最後にベルンシュタインの修正派社會主義がマルクスの階級鬪爭説 Klassenkampftheorie 及び革命説 Revolutionstheorie に對する批評について見なくてはならない。マルクス及エンゲルスに從へば凡ての歴史は階級鬪爭の歴史である。此點は共產黨宣言の冒頭に書かれてゐる所である。否な『共產黨宣言』はこの精神をもつて一貫されてゐるのである。そう

して此階級鬪爭は近代の社會に於ては所有階級と勞働階級との鬪爭である。マルクスに從へば資本主義發達の結果中等階級は崩壞して、社會は生產手段の所有者としての所有階級 Bourgeoisie と何ものをも所有することなき無產階級 Proletariat とに分れ、この階級の對立に於て資本集積、及集中の結果、無產階級の數は益々膨張し、是れに反して所有階級の數は益々減少する。さうして無產階級の膨張とその窮迫との結果はこの甚大なる階級の自覺を導き、その一致團結は政治上の爭鬪において勝利を占める事になる。そこで無產階級は先づ彼等自身を支配階級として組織し生產手段を國家即ち勞働階級の手に集中する事が必要である。マルクス・エンゲルスはその『共產黨宣言』においてかくの如くに主張してゐる。これに對してベルンシュタインは論じていふ『若し私にラサールの型を用ゐることを許されるならば――結局マルクスを說服するものはマルクスである』と。先づベルンシュタインの『共產黨宣言に對する批評について見る。その批評は極めて深刻である。『夫は多くの點にをいて誤謬である』。ベルンシュタインは『進化的社會主義』の序文中に於てこういふ。云ふまでもなく彼は決して『共產黨宣言』に於ての社會進化の大體の傾向について反對してゐるものでないことは同じく彼れの序文中に述べられてゐるところである。[1]けれどもその進化の過程、進化の行はれる『時』の問題について彼れは猛烈なる攻擊を加へてゐるのである。『共產黨宣言』に於て敍述してゐるごとくに社會狀態は事物及び階級の銳き對抗を發展してゐない。この事實を隱蔽しやうとすることはたゞに無用であるのみならず、非常に愚鈍なことである。所有階級の數はより小さくはなく却つてより大きくなつてゐる。著しき社會的富の增大は資本家の數の減少を伴てはゐない。却つて各階梯の資本家の數の增大となつてゐる。中等階級はその性質を變ずるにしてもそれは社會のスケールから消滅するものではない。』[2]

『生產業に於ての集中は今日に於ても凡ての部面に於て、同一の度に行はれて居るのではない。非常に多くの產業に於て社會主義の社會批評家の先見は證據立てられてゐるが他のものにおいては今日においてもそれは遲々として行はれてゐるにすぎない。』

ベルンシュタインは產業進化の事實について以上の如くに觀察した後に彼れは近世資本主義のもとに於ける政治上のデモクラシーの發達に就て述てゐる。『凡ての進步した國家において資

本家所有階級の特權が漸次に民主主義的組織に讓りつゝあることを見る』と。ベルンシュタインに從へば工場法の如き、地方政治の民主化の如き、勞働組合の解放の如き、勞働標準の公定の如き是れ等の事實は、みな民主主義的組織のもとにおける勞働階級運動の勢力の影響でありさうして資本家的掠取に對する社會的反動を證據立てゝゐるものである。さうして近代國民の政治組織が民主主義化すればするほど政治上の大災厄（カタストロフェー）の機會は減少されてゐるといふのがベルンシュタインの立場である。(3)

この立場はいふまでもなく政治上のデモクラシーの重要性を信ずるの立場である。『デモクラシーは普通に考へられてゐるよりは遙に多く社會主義の條件である。即ちそれは唯に手段であるばかりではなくして本質である。ある程度の民主的組織または傳統が存在しなくては、今日の社會主義の主張は實行する事ができない。そこには勞働者の運動はあるであらうが、社會民主主義は存在しない。』(4)

社會主義と民主主義との關係を以上の如くに解してゐるベルンシュタインは社會主義を以て新しい思想、その新思想の產物であるとはなしてゐない。彼れはフランス革命の影響のうちに社會主義の成立を見出さうとするものである。政治上の權利の觀念なくして社會主義はたゞ原始的基督教に連結した人民の共產主義であるにすぎないものであるとなすのがベルンシュタインの批評である。

(1) Bernstein, op. cit., P. X
(2) ibid., PP. IX—XI
(3) ibid., P. X—XII
(4) ibid., P. 168

(十一)

デモクラシーの重要性を高調するベルンシュタインの修正社會主義は、デモクラシーを以て單なる政治上の形式であるとなすものではない。彼れはデモクラシーを以てあらゆる階級あらゆる特權に反對するの精神であるとなしてゐるものである。さうして『デモクラシーの思想は今日においては正義の觀念のうちに含まれるものである。』となすのがデモクラシーに就ての彼の正しき論結である。デモクラシーを以てあらゆる特權あらゆる階級に反對するものであるとなしてゐるベルンシュタインは、また同時に勞働階級の特權――勞働階級の覇權にも反對する。共產黨宣言においての勞働階級の覇權の主張はベルンシュ

タインの最も強く攻撃してゐる所である。彼れに從へばかゝる方法はたゞ恐怖 Terror の繼續する間だけしか行はれるものではないのである。素より彼は勞働階級によつて政權を獲得することに反對するものではないにしても、其の政權の獲得のためには政治的及び經濟的先行條件の發展によつてのみ社會主義は可能であるとするのである。彼れは斯ういふ『勞働階級によつての覇權は低級文明に屬する』と。(1)

かういふ立場をとつてゐるベルンシュタインの修正社會主義は『自由主義に對抗することにある制限』が必要であることを主張する。(2)

『公民的社會に反對し、またそれを廢滅する戰とは何ぞや？特にフロシアの如く吾等がまだ封建主義を驅逐するの必要甚だ大なるところに於てかゝる戰は何を意味するか？社會民主はこの社會(公民的)を打破することを欲するものではない：：：近代に於ける偉大なる自由の運動が資本家所有階級の利益のために振ひ起つた事は事實である。又それが資本主義の單なる衛兵であるに過ぎない事も事實である。：：：けれども歷史上の大運動としての自由主義については社會主義はその正當の相續人である。(3)

ベルンシュタインはかう述べて居るそうして社會主義をもつて『組織されたる自由主義』であると云つても差支えない旨をさえ述てゐる。(4)

さういふ立場からしてベルンシュタインは自由主義社會の完成に於て社會主義が存在することを主張してゐるのである。(5)

(1) Bernstein, op. cit., P 146
(2) ibid., P 148
(3) ibid., P. 149
(4) ibid., P. 154
(5) ibid., P. 153

(十二)

『勞働者は祖國をもたない』――マルクス・エンゲルスはその『共產黨宣言』のうちでこう述べてゐる。けれどもベルンシュタインに從へば、この宣言の適用しえられるのは一八四〇年代の勞働者についてゞある。卽ち政治上の權利を與えられてゐない公的生活から閉ぢられて居る一八四〇年代の勞働に對しては、ベルンシュタインもまた彼等が祖國をもたないことを認めて居るのである。けれども勞働者が公的生活から一切閉ぢられ

て居たのは一八四〇年代及びその以前においてである。その時からして、社會主義の運動に伴つて、勞働者は漸次政治上の權力を與へられる事となつてきた。ベルンシュタインの言葉によれば是れによつて勞働者はプロレタリアンから公民へと轉ずるに至つてきたのである。『勞働者はまだ充分な公民でないにしても、彼れは國民的利害が彼れに無關係であるといふ意味において、無權利者ではない。また社會民主主義は未だ政權を掌握しないにしても、それは既に勢力の地位――一定責任はそれに伴ふ――を占めるに至つてゐる。』ベルンシュタインは以上のごとくに論じてゐる。(3)従つてベルンシュタインの修正社會主義は熱烈なる普通選擧の要求とならざるをえない。彼れは『民主主義の第一歩』としての普通選擧によつて社會主義がその實現の道を歩みつゝある事を主張する。普通選擧は一時にビスーマクのトゥルとして奉仕するにしても、それはやがてビスマークをトゥルとするのであらうとは彼れの信じて疑はないところである。(2)普通選擧はベルンシュタインに從へば政治上のキャトストロフエーを避くべき方法である。革命から普通選擧へ。勞働者の覇權から議會政治へ。ベルンシュタインの修正社會主義はかう主張するのである。さうしてベルンシュタインに從へば勞働階級の覇權の主張は、マルクスもエンゲルスも後にともにその主張を擲つてゐる。即ちマルクス及エンゲルスは一八七二年に共產黨宣言の新版の序文中で巴里コムミューンの教訓によれば勞働階級は簡單に從來の國家を奪取しそれを彼等自らの目的のために運用することのできないものであることが明かにされたことを述てゐるのである。エンゲルスは更に一八九五年に『過去三十年間』の教訓は、彼等の期待に裏切つたものであることを明にし、さうして勞働階級のデイクテエタアシップ――『共產黨宣言』においての――に自ら反對してゐるのである。

(1) Bernstein, P 170
(2) ibid., P 144

(十三)

以上の説明によつてベルンシュタインの修正社會主義の大體を明かにすることができたと思ひます。私は最後に修正主義においての社會主義の窮極目的について見なくてはならない。マルクスの『科學的社會主義』に從へば『勞働階級は實現すべき理想をもたない』とされてゐる。即ちマルクスに從へば社會主義は進化の必至、歷史の必至によつて實現せられるものである

となしてゐるのである。これによれば科學的社會主義——ユートピアン社會主義に對して科學的社會主義であるとされてゐるのである。けれどもベルンシュタインは、前にも述べたとほり、既に唯物的歴史解釋に反對し、資本集積、資本集中、資本主義倒壞の諸說についてもまたマルクスと一致することができない。さうして勞働階級は實現すべき理想がないとするマルクスの立場に反對する。斯の如きは『自己欺瞞』であるにすぎないとはベルンシュタインの非難の言葉である。(1)ベルンシュタインは理想主義の重要性を認めてゐるものである。『カントに還れ』の聲はまた實にベルンシュタインの修正社會主義の要求である。『私は嘗てこの心をもつて社會主義の模倣的、常套語的、傾向——それは勞働階級運動において地歩を占めんとし且つヘーゲルの辨證法に安全な避難所を發見せんとしつゝある——に反對して、純粹理性の批評家、偉大なるキョーニヒスベルヒの哲人の精神に訴へた。私は社會民主主義がカントを要求したとするの確信においてこのことをなした。その人はこの意見を判斷し亦批評的に深い銳敏さをもつてそれを吟味し、何れにその見せかけの唯物主義が最も高い——またそれ故に最も誤解され易い——イデイオロジイであるかを示し、また理想を輕蔑し、物質的要因を進化の全能的要素であると見るまで擴大して將へることが、それを聲明する人々の行動によつて今日まで暴露されまた將來も暴露されるであらうところの自己欺瞞であることを警告するであらう。說明的な正確さをもつて何が價値あり何がわれ等の偉大なるチャムピオンの仕事に於て生命を有するか、また何が滅ぼすことができるものであるか或は滅ぼすべきものであるか、を指摘することのできる樣な思想家は縱令われ等に今日決定的のものと見られてゐる前提から出發しないにしても、尙社會民主主義が戰ひつゝある目的に貢獻するところの著述についてもつと公平な判斷を與へることができるのであらう。社會主義の批評がこの點において失敗してゐることは公平な思想家の拒まないところである。私はこの點について私の本分を盡した。從つて何人に對しても石を投げたのではない。けれども私はこの派（社會主義）に屬するが故に改革の必要を表明したとの正しきことを信ずるのである。私は私の書いたことが誤解されることを恐れなかつたとすれば私は『カントに還れ』を『ランゲに還れ』によつて代へたかつたのである。ただし丁度このモットウを支持する哲學者や研究家がそれによつてキョーニヒスベルヒの哲人の書いたものの文字通りの主張に還

らんとするものでなくしてたゞその批評の根本主義へを意味してゐるに過ぎないごとくに、社會民主主義もまた、フレデリック・アルバート・ランゲの凡ての社會的政治的見解に還らんとすることを考へてゐるものではない。私が心に思つてゐることはランゲにおいて勞働階級解放の戰における剛直にして且つ大膽なる戰士の性質と、僻見に囚はれることなくして誤謬を容認し新らしき眞理を認むる廣大なる科學的精神との顯著なる融合して居る點である。恐らくはランゲの文章においゐ見るような非常に廣大な心は、マルクスの様な先驅者的精神の寶であるところの滲透的鋭敏性に欠けてゐる人々にのみ見出すことができるであらう。けれども凡ての時代においてマルクスを產出するのではなくまたマルクスと同程度の天才の士であつても、その人をしてマルクスが歷史上に占めてゐる様な地位を占めしむるのには、今日の勞働運動はあまりに偉大なるものである。』

(1) Bernstein, op. cit., P. 222
(2) ibid, PP. 222—4

國家社會主義と勞働問題

山川均

一

國家社會主義(ステートソーシャリズム)とは、古くは獨逸に於けるビスマルクの社會政策、近くは濠洲及びニユジランドに行はれて居る勞働立法、社會政策等を指すものとせられて居るが、時としては別な意味にも用ひられて居る。

一八七九年以後のビスマルクの社會政策は、普通に國家社會主義として知られて居る。ビスマルクは一八七二年に謂はゆる文化戰爭を開始すると同時に、一方には社會黨の勢力を抑へ一八七八年には有名な社會黨鎭壓令を制定した。そして之と同時に國家社會主義の實行を試みた。そこでビスマルクの國家社會主義は、一面には之によつて社會主義の根據を奪ひ、他方面には普魯西王室の勢力を擴張する二重の目的を有して居た。

尤もビスマルクの國家社會主義は、必ずしも新らしい政策ではなくて、却つてホーヘンツオルレルン家の傳統的政策に復つたものであると云はれて居る。『乞食の王』たることは、フレデリック大王の最大の誇りとした所であつて、普魯西の法律は國家を以て貧民の保護者と見做し、貧困者に勞働と生計とを保障することを以て、國家の任務と認めて居た。そこで一八八四年三月七日、ビスマルクが帝國議會に、勞働者の勞働の權利を承認した時にも、其論據とした所は、この普魯西の舊法律の條項であつた。

その國有政策、專賣政策が、社會主義的色彩を有すといふ議會の非難に對して、ビスマルクは次ぎの如く答へたことがある。

『予が國土の大なる幸福の爲に採用した多くの政策は、社會主義的である。そして國家は尙ほ此上も少しの社會主義に習熟するの必要があらう。若し吾人にして、農民解放に關して、スタイン・ハルデンベルクの立法によつて示された智慧を誇示せんとするならば、吾人は吾人の必要を、改良的施設によつて社會主義の領域に充たさる可らず。土地を或一人より奪つて他人

に與へる事は社會主義である。專賣よりも强い形に於ての社會主義である。けれども予は斯くの如き社會主義の採用せられしことを喜ぶものである。何となれば、吾人は其結果として、自由にして極めて有福なる農民を有し得たからである。そして吾人は早晩、勞働階級の爲にも同一種類の事の爲されんことを望む者である』。

ビスマルクの國家社會主義は、社會主義的であると云ひ得るのと同じ强さを以つて、非社會主義的であるとも云ふことが出來る。少くとも現代勞働階級の社會主義と、何等の交渉をも有しないことは云ふ迄でもない。

二

ニユジランドの國家社會主義は、一八九〇年に初まつた。一八八四年はニユジランドの歴史あつて以來、不景氣のドン底に陷つた年であつて、破產の運命は此の新殖民地を脅かしてゐた。然るに恰かも此年を以て冷藏法が發見せられると、形勢は全く一變した。バタ、チーズ、肉類は非常な勢を以て倫敦市場に積出され、二十年ならずしてチーズの輸出は三百十一倍となり、バタは二百二倍となり、全然輸出を見なかつた肉類は、一躍して三百五十萬磅の輸出を見るに至つた。新農場は到る所に設けられ、勞働の機會は都會と農村とを問はず、到る所に開かれた。

然しながら此の好景氣の收獲を懷にして居るものが、少數の大地主であることは、間もなく痛切に感ぜられて來た。大地主の手に廣大な土地が荒廢に委せられて居る一方には、多數の移民は土地の無い爲めに本國に歸つて居た。僅かに土地を得て居る小農は、租稅の苛重に苦んで居た。更に若干の土地を得て、好景氣の配け前に與づからうとして居る中流以下の都會民に取ては、大地主は當面の障礙物であつた。都會の勞働者も亦、生活費の昂騰に比して、其賃銀の增加しないことを見た時に、地方の農民との間に利害の一致を認めざるを得なかつた。ヘンリイ・ヂヨルヂが講演旅行をしたのは恰も此時であつて、斯ような空氣のうちに、其土地單稅主義が電氣の如く傳はつたのは、怪むに足りないところであつた。一方には社會主義の宣傳も漸やく活潑となつて居た。

一八九〇年には有名な濠洲及びニユジランドの海員の大罷工が行はれ、勞働界に大なる渦卷を作つたが、其結果は慘憺たる失敗に歸した。此の罷工の失敗は、勞働組合の運動をして、其

進路を一變して經濟上の鬪爭から政治的鬪爭に向はしめた。此年を以て男子普通選擧と一人一票制の施行を見たが、之れ亦た組合を政治運動に轉ぜしめるものであつた。一八九〇年の政變は、組合勞働者が地方小農と提携して、自由黨を支持した結果であつた。以後の十年間は自由黨內閣の下に、幾多の進步的の立法の制定を見た時期であつて、ニュジランドは是等の立法の爲めに、全世界の注意を集める國となつた。

三

ニュジランドの諸制度中、最も重要なものは土地制度であつた。一八九二年には有名な立法の制度を見たが、此法律によつて、土地の獨占は高度の累進税の賦課によつて打破せられ、所有地の面積と讓渡しの自由とは制限せられ、大所有地は收容して分配せられ、永久所有に代はるべき長期借地權を設定し、土地を有せざる者には優先購買權を認め、且つ失業者と歸農を欲する手工勞働者の爲に、土地購入資金貸附の制度を設けた。一九〇六年には更に土地法を改正し、荒無地の地價を以て計算して五萬磅を超過する私有地は、超過面積を十年以內に强制賣却せしめ、一等地は千エーカア、二等地は五千エーカアを所有する者には、新たに土地の購入及び借地を禁止した。

是より先き、主として失業者救濟の機關として勞働局を新設し、續いて累進所得税法を制定し、一八九三年には婦人の選擧權を認め、翌九四年には鐵道の管理を鐵道局の手に移し、ニュジランド銀行を事實上國有となし、國有炭坑法を制定した。ニュジランドの國有炭坑は、全産額の約八分の一を供給して居る。一九一一年には簡易保險制度を開始した。

更に勞働者の傷害に對する從來の不完全な法律は、一九〇八年に一層擴張した勞働者賠償法となつた。工場法に至つては、早く一八七三年に始まつたが、現行の規定は、十四才以下の幼年は絕對に工場使用を禁じ、十四才以上十六才以下の少年は、健康證明書及び學校修業證を有する者に限り、婦人と同一の制限の下に使用が許るされて居る。卽ち婦人及び十六才未滿の少年勞働は一週四十五時間、一日八時間四分の一（羊毛工場は四十八時間）を限度とし、四時間半以上の繼續使用を禁じ、四十五分間の食事時間を與へ、夜業は一切禁ぜられ、規定時間外の勞働に對しては增割賃銀の支拂を命ずると共に、其時間も制限せられて居る。十六才以上の男子の勞働は、特殊の例外を除きては、一週四十八時間、一日八時間四分の三を限度とし、五時間

以上の繼續使用を禁じ、時間外勞働に對しては、同様の增割賃銀と制限とが規定せられて居る。商店法及び安賃銀自宅勞働取締法も制定せられて居る。ニユジランドの工場法は、世界各國に於ける此種の立法中最も進歩したものと見做されて居る。

然しながら、ニユジランドの勞働立法中、最も世界の注目を引いたものは勞働爭議の調停及び强制裁定制度である。是等の法律は一九〇八年（此の制度は一八九四年の立法に端を發し）一九一〇年及び一一年の修正を經て現行の改正の制度を見るに至つたものである。此法律によれば、全國を八箇の產業區に分ち、各區に政府の任命した調停評議會がある。爭議の起つた場合には、評議會は當事者双方の間より委員を選出せしめて妥協點を發見する。强制仲裁々判所は、最高法院の判事中より政府の任命した常任判事一名。傭主團體及び勞働團體より選出した各一名の代表より成り、後者の任期は三年である。仲裁々判の決定は絶決的であつて控訴を許るさない。

此の制度は、一八九四年に初めて採用せられてから、十數年の間、ニユジーランド產業的平和の時代を齎らした。ヘンリイ・デマーレスト・ロイドの『同盟罷工の無き一國土』によつて、ニユジランドは遍ねく勞働者の天國、產業平和の國土として知られて居た。

四

ニユジランドの國家社會主義が、種々なる點に於いて、ビスマルクの其れに一歩を進めたものであつて、一時　影響を有した　けれども少くとも最も重要な一問題に對しては、國家社會主義は　ことを證明した。そして重要な問題とは、勞働問題の解決であつた。

一八九〇年の政變は、　ニユジランドの政權を支配して居つた航海業の手から、之を農民の手に奪ひ還へしたものであつた。　政權の所在は移つたが、而も經濟上の組織そのものに至つては、從つて又た政治上の組織そのものに至つては、何等の影響をも齎らなかつた。此意味からすれば、當年の政變は、何等の革命的性質を有しなかつたとも見ることが出來る。

ニュジランドの　　が、勞働問題の解決に無力であつたことは、一九一三年の大罷工によつて　てら

れた。自由黨の執政は一九一二年迄で續いたが、此時自由黨の實質は一變して居つた。自由黨は最早や當年の農民を代表するものではなくて、新興工業と航海業との資本を代表するものであつて、一面には土地私有の制限に反對すると同時に、社會立法と國有主義を不便とするものであつた。

斯くて一九一三年の强制仲裁法の改正によつて、勞働者は事實上、全く罷工の權利を失ふと同時に、土地法の改正は前年の施設を根本から覆へして了つた。

一九一二年に於ける勞働聯合會の組織、翌年ウエリントン大會の結果として生じた社會民主黨の創立は、ニュジランドの資本と勞働との間に、　誘

ことを示して居た。一九一三年十月、

の幻影と强制仲裁制

度の　したものであつた。

五

近代の勞働問題は、資本主義經濟組織に必然に伴ふべき、內發的の社會的疾患であつて、資本主義の存續する限りは、勞働問題は永久の宿題として社會は回避することは出來ない。ニュジランドの國家社會主義が如何なる功績を齎らしたにしても、精密に勞働問題の解決に對して無力なことを證明したのは、謂ゆる國家社會が社會主義を距ることの、甚だ遠き所以を立證したものである。ニュジランドの國家社會主義が、社會主義の名を冠する資本主義の一形態に過ぎない事は、ビスマルクの國家社會主義の下に獨逸の資本主義が成育した如く、ニュジランドの國家社會主義の下にニュジランドの資本主義が發達し成熟した事實によつても知ることが出來る。

土地所有の事實に就いて見ても、ニュジランドの土地政策は獨立の農場數を增加しないで、却つて土地の抵當額を增して居る。一九〇五年に於ける土地の抵當額は一千一百萬磅であつたが、一九一三年には二千二百萬磅を超過した。斯くて多くの小農は、尙名目上の獨立農業者ではあるが、事實に於ては銀行の資本に倚附する被傭勞働者たるに過ぎないものである。

更に工業の方面に於ても、資本主義は謂ゆる國家社會主義の下に長足の進步を見た。獸肉業の生産額は一八九五年には百六

十五萬三千磅であつたが、一九一〇年には七百四十四萬二千磅となり、之に使用する勞働者は一八九六年には二千三十七人であつたが、一九一二年には三千九百七十八人に增加した。然るに賃銀の增加は僅めて僅少であつた、生產額に於ける五百萬磅の增加は、大部分資本家の掌中に歸して居る。製材業に於ては、一九〇五年には九千百十一人の勞働者を使用して、二百十二萬八千磅の生產物を出だしたが、一九一〇年には勞働者は六千八百七十七人に減じて、而かも生產額は二百六十九萬九千磅に增加した。

其他の產業に於ても、大抵に於いて同一の傾向を示して居る。此間に、賃銀は一般に幾分の騰貴を見たが、何等の騰貴を見ず、又は現に下落を見たものすらもある。農場勞働者は、一九〇五年には一週二十志乃至二十五志を得て居つたが、一九一二年にも同額の賃銀を得て居るに過ぎなかつた。牧羊者の賃銀は地方によつては騰貴した所もあるが、多くの場合は下落して居る。大工、石工、左官、煉瓦積工等の賃銀は多少の增加を見たし、一般勞働者、坑夫、裁縫師、海員等の賃銀も概して增加した。けれども地代及び物價を伴つて居るので、實際上の賃銀は何等の增加をもして居らぬ。然るに利潤に至つては此間に非常の增加を見た。

富の分配の傾向は、次の一事によつても明らかに觀取することができる。一九〇五年に於ける私有財產總額は二億五千八百萬磅であつたが、一九一二年には二億五千七百萬磅であつて、之を全人口に割當てると、一九〇五年には每一人二百九十三磅であつたが、一九一二年には減じて二百四十五磅となつて居る。卽ち此間に人口は十七萬百六十五人を增加した。然るに二萬磅以上の財產所有者は、此兩年度の間に著しく增加した。斯くの如く、人口の增加と事業の勃興を見たにも拘らず、社會全體の富と、一人に對する平均額との減少を來した事實は、云ふ迄でもなく、富の集中と貧困の增加とを物語つて居るものである。

要するにニユジランドに於ても、資本主義は國家社會主義の下に正規の發達をして居るものと謂ふことができる。

六

以上の事實は、主としてロバアト・ハッチンソン氏のニユジランドに關する記述に據つたものであるが、氏は其結論のうちに、ニユジランドの國家社會主義を評して次の如く云つて居る。「ニユジランドに於ける進步の二大特徵は、國有主義と社會的

立法とである。そして是等のものは資本家的所有を意味し、不平分子を默まらせるソップを意味し、跛の拐技を意味するものとなつた。一八八〇年にエンゲルスは、「××の××は其形式の如何に拘らず、根本に於て……從つてそれが生產力を支配することの多くなればなる程、」と論じたが、恰かも之がニユジランドの運命であつたことは、極めて明白である。最近の數年間に、資本家は其改革に社會主義的の商標を貼付して、眞の社會主義運動の氣勢を奪つたが、彼等の多數の企圖は、更に國有主義と人道的立法とを進めることに過ぎなかつた。

『勞働者に對する此の人道的の態度には、他の一面がある。屢々社會主義的と呼ばれた是等の社會改良が、全然資本家の利益の爲めに施行せられたものであることは、毫もの疑ひがない。備者等は、其持ち馬や牡牛を優遇するのと同じように、勞働者を優遇することは、大に引き合ふと云ふことを覺つた。現に前首相ジヨセフ・ウオド氏は年金基金に關して、「吾人は吾が國に於ける成年の價値を千五百弗と評價した。そこで事業の見地から、又た國民的の見地から、三十弗までの支出は相當と思はれる。何故ならば、國土に對する嬰兒の價値は其五十倍だからである。

『ニユジランドの勞働立法は、全く勞働組合の有力なる組織の結果なるかの如く思ふは誤りである。事實は斯うである。是等の立法は、單に、勞働組合側の攻勢的運動の必要に先き廻りをして、襲擊の誘引物を無くしたまでゞある。斯くて勞働立法は資本家の爲に產業上の平和を維持した。そして其結果は投資者の爲めに大なる繁榮を齎らした。資本主義は其支配權を失はないで、而かも多くの社會的改良を行ふことの出來るのは事實である……』

『ニユジランドの國家社會主義は、實は國家資本主義である。是等の產業は、資本主義が急速に發達して居る時期に際して國家の掌中に歸したものである。之が結果として、當初から政府を左右してゐた資本家は、單に若干の主要產業を直接に支配する代りに、國家てふ機關を通じて支配するに至つた。そして彼等は今や、其餘の國家の事務をも、彼等自身の目的の爲に使用すべき地位に上ぼつたのである』

『ニユジランドは他の諸國に比して、社會主義に近い、若くは

社會主義的であるとは、屢ゝ聞くところである。然しながらニュジランドの制度は、資本的方法によつて富を生產し分配することを許容する。そして資本主義の避く可らざる弊害を緩和せんが爲めに、姑息の方法を講じたものである。從つてニュジランドの實權を掌握して居る人々は、資本制度を根本的に變更すべき何等の企てをも有しないばかりか、却つて如何なる變更をも阻止すべき有らゆる企てを行つて居る。…地代、利子、利潤は依然として存在する。是等のものは、未だ甞て危うくされたことがない…』

七

地代と利子と利潤とは、剰餘價値の　を基礎とする賃銀制度を前提とするものである。そして賃銀制度の存續する限りは、勞働問題と階級間の　謂はゆる國家社會主義の下に於いて、ニュジランドに於ける　機運は益々切迫し來つて居るのは之れが爲である。

斯くて一九一四年には、勞働黨は議會の多數を占め、ヒューズを首相とする勞働黨內閣の出現を見たが、此の政變はニュジランドの形勢に何等の變革を來したものではない。ニュジランドの勞働運動は、自由黨の執政の下に進行し來つた如く、勞働黨の內閣の下にも進行した。此頃から濠洲の勞働界には、新しい潮流が現はれて來た。即ち在來の職業的、排外的の組合組織の代りに產業的に編制せられた　重要な勞働團體は續々として新運動に投じて　此の新思潮は戰爭熱の爲に姿を沒してゐたが、

戰爭以來、ヒューズ初め勞働黨の右翼は愛國熱に浮かされて、戰爭に血眼となつて居たが、左翼の方は初めから戰爭に反對して居つた。そして其勢力の却ゝ侮り難いものゝあつたことは、一九一六年にヒューズが强制徴兵制度の實施を計り、一般投票の結果見事に失敗した一事によつても知ることができる。之が爲にヒューズは他年の政敵として戰つた自由黨と提携した。此のヒューズの豹變は、勞働黨の政治運動と謂はゆるニュジランドの國家社會主義とに何ほ多少の

居る。

ニュジランドの資本主義は、國家社會主義の治世の下に發達し、ニュジランド　國家社會主義の治世の下に成熟した。

八

斯ように國家社會主義（ステート・ソーシャリズム）なる言葉は、現今に於いては專ら濠洲、ニュジランドの施設を指すものであるが、時としては一層廣義に解釋して、一層徹底した產業國有主義を指す場合もある。此意味に於ける國家社會主義は、一切の產業、若くは少なくとも大部分の產業を國家の有に移し、國家の經營に移さんとするものであつて、此種の國家社會主義は、何づれの國にも未だ實現を見たことは無い。けれども多くの論者は、今日の個人的資本主義の經濟組織は、現に斯くの如き方向に向つて、急速に進みつゝあると主張する。

エミイル・デヴィース氏は其著書のうちに、產業國有主義（乃至は市有主義）は次の如き幾多の勢力によつて、漸々として現實を見つゝあると論じて居る。

（一）產業の集中的傾向。

（二）國家が收入を增加せしむるの必要。

（三）廉價なる効力の必要。例へば或る都市に工業を誘致する爲めに、都市が自ら動力工業に從事して、廉價なる動力を供給するの類。

（四）私人の企業に適せざるが如き、大規模の機械の製造に從事する工業家は、勢ひ國家又は都市による事業を奬勵すること。

（五）公衆の安全及び健康に關係ある事業の增加。

（六）生活費の增加が、國家又は都市をして食料品の輸入及び販賣等に當らしめること。

（七）勞働爭議の頻發が、事業の國有又は市有を促すこと。

（八）電氣、瓦斯、交通機關その他の如き、直接公衆に奉仕する事業にあつては、私營會社の益々不評判なること。

デヴィース氏は、大様以上の如き諸勢力の結果として、現在の私人的資本主義は、國有主義（乃至は市有主義）に移つて居り、又た移る可きものであると主張する。少くとも戰爭の影響は、一時的にか永久的にか、各國の政府をして、斯くの如き意

義に於ける國家社會主義の色彩ある政策を取らしめたことは、否なむ可らざる事實である。獨逸は云ふも更らなり、英國の如き經濟上の個人主義と自由放任主義を傳統的の政策としてゐた國にあつてすらも、戰爭の必要は、廣き範圍に亘る經濟上の活動を直接國家の管理に移して居る。獨り生産上の活動のみならず、消費の領域に於いてすらも、國家が直接その管理に任じた實例は交戰國の殆んど何づれの國に於いても目撃したところである。現に主要食料品の消費は、今尚ほ國家の管理に屬せしめられて居るところがある。少くとも經濟上の活動に對する國家の任務に就いての、世間一般の思想に大なる變化の起つたことは疑ひのなき事實であつて、デヴィース氏の觀察は、必ずしも根據なきものとは謂はれない。

假りに此意味に於ける國家社會主義が完全に實現せられたなら、一切の資本は國家の有となり、一切の生産事業は直接國家(又は郡)市の經營と監理の下に移るべきものであつて、今日の如き一私人としての資本家は、最早や其跡を絶ち、私人的の營利企業は消滅し、從つて或る階級による、他の階級の剩餘價値の直接の搾取は絶滅するに相違ない。

斯くの如き意味に於ける國家社會主義は、今日の資本制度に伴隨する多くの問題を解決するに相違ない。けれども、國家社會主義が多くの問題を解決した跡に、尚ほ一個の重大な問題の殘こされることを忘れてはならぬ。そして其れは精密に、勞働問題である。

九

社會主義は、多くの人々によつて、資本私有制度の

資本公有制度の　　解せられて居る。然しながら

社會主義が、少くとも現代の勞働階級の社會主義が、資本私有の撤廢を主張して居る

私有の廢止と存置とは、固より社會主義の關知せざるところである。

マルクスの經濟學説によれば、剩餘價値の搾取は、勞働力が商品として賣られることに基因するものである。勞働力が商品として賣られるの間は、勞働者は生産行程の支配者ではなく、從

つて厳密なる意味での生産者ではなくて、單に原料や機械と均しく、生産費の一部分を構成する商品の交附者である。そして勞働力が商品たる間は、剩餘價値は正當に――詐欺又は掠奪の如き個人的の不正手段によらずして――生産者以外の收得に歸するものである。そして賃銀制度は必然に勞働力を商品と見做すことを前提としてのみ、成り立ち得るものである。從つて賃銀制度は必然に、剩餘價値の生産を意味するものである。そし

そこで此の最後の意味に於ける國家社會主義が、勞働問題を解決するか何うかと云ふ問題は、必ずしも單に國家社會主義の結果が、資本私有制度を撤廢するか否かと云ふ問題に止どまらない

社會民主主義によつて代表せられた社會主義の一派が、

社會主義的社會の實現をも意味するかの如き幻影を多くの人々の腦裡に養つて來た。けれども單にピラミットの頂上の一石を取つて、之を煉瓦に代へることは、必ずしもピラミット全體を變革するものではない。賃銀制度てふピラミッドの頂上を、一私人たる資本家から、國家てふ資本家に置き代へることは、賃銀制度のピラミットに何等の變革をも加へるものではない。

社會主義者の社會主義評

之は共産黨宣言中の一節でマルクスが社會主義各分派を批評したものである「社會主義者の社會主義評」と云ふ題は櫛田民藏氏の付けられたものであることを附記して置く

一、復古的社會主義

(A)封建的社會主義

英佛の貴族等は、其歴史的地位よりして、近代の市民的社會に反對せる、幾多の小冊子を發行するに至つた。一八三〇年七月のフランス革命、及びイギリスの改革騒ぎに於て之等の貴族は更にかの厭ふべき成上り者の爲に屈服せしめられ、爾後重大なる政治上の爭鬪は到底その望なく、殘る所は只だ文學上の論爭のみとなつた。然も其文學界に於てさへも、復古時代の如き舊時の叫びは、もはや再び之を聞くことが出來なくなつた。

彼等貴族は世の同情を博せんとして、表面自己の利害を忘れたかの如くにして、只だ掠奪された勞働階級に對して其罪を鳴らした。斯くて貴族は其新主人に對して譏の歌を歌ひ、將來の破滅に對する不吉の預言を其耳に囁き、かくして僅かに自己の復讐をした。

封建的社會主義は斯くの如くにして起つた。それは半ば悲愁半ば譏謗。半ば過去の餘韻、半ば將來の威迫であつて、時に其痛快鋭利なる批評を以て市民階級の心胸を刺す事あつたが、近世史の進運を解するの力に於て全く缺如してゐた。隨つて其の結果のいつも滑稽に歸するを免れなかつた。

彼等貴族は人民を其手に集めて再び陣立を爲さんが爲に、高く貧民救助の囊を掲げて其軍旗と爲した。而も人民は、屢々彼等に合して、彼等の内部に猶ほ舊時の封建的、武裝の存するのを見て、大笑しながら散じ去つた。

佛國尊王黨の一派、及び『英國青年』の如きは、即ち此の好例を示した者である。

封建黨は、彼等と市民階級との間に掠奪法の差あるを說示した。けれども、彼等は自己が掠奪を行ひし當時の狀勢が、全く

今日と異つたもので、今日に於ては既に廢物に歸したるを知らず。又彼等は自己の治世の下に於ては、近世の貧民勞働者の如き者のなかつたことを說く。然し彼等は近世の市民階級が、彼等の社會組織の當然の產出物たることを知らない。

其他に於ては、彼等は決して彼等の批評が復古的性質を有することを隱す者ではない。即ち彼等が主として市民階級を責むる所以は左の數語である。曰く、市民階級の統治の下に在つては、根となく、葉となく、社會舊來の秩序を刈除すべき、一階級を發生せしめつゝあること。

彼等が市民階級を責むるは、必ずしも平民を作り出すに非ず。只だ革命的平民を作り出すに在る。

故に、政治上の行爲に於ては、彼等は常に勞働階級に對する壓迫策に加擔し、其の日常生活に於ては、人聞よき平生の言葉にも似ず、彼等は產業の木より落つる黃金の果實を拾ふに勉め、眞理と愛と名譽とを以て、毛と砂糖と馬鈴薯の酒精とより生ずる利益に代へんことを勉めて居る。

僧侶が常に地主と手を携へて行つたやうに、宗教的社會主義も亦た封建的社會主義と相伴つた。

基督敎の禁慾主義に社會的色彩を附加するは實に容易の事である。基督敎は私有財產に反對し、結婚に反對し、國家に反對したではないか。そして其代りに、慈善と貧困とを說き、獨身主義と肉の斷滅とを說き、出家生活と『母敎會』とを說いたではないか。要するに、基督敎社會主義は、貴族の心中に於ける呵責の炎を淸くせんが爲に、僧侶の注ぐ聖水であつた。

(B)小市民的社會主義

市民階級の爲に亡ぼされたる者は、決して封建貴族のみではない。近世市民階級の空氣中に衰頽して、終に其の生存を失ひたるものは決して封建貴族のみではない。中世の市民及び小地主は近世市民階級の先驅であつたが、商工業の未だ大いに發達せざる諸國に在りては、是等の二階級は今猶ほ新興の市民階級と相並んで茂生するものである。

近世文明の十分に發達したる諸國に在りては、小市民階級と稱する一新階級を生じた。此階級は、無產階級と市民階級との間に遷轉し、常に自ら新陳代謝して市民階級の附屬分子を爲した。然るに此階級の個人は絕えず競爭の爲に無產階級に突落されつゝある。そして近世產業の發達に伴ひ、彼等は近世社會に於ける獨立の一部たる地位を失ひ、製造業、農業、商業等に於

ける監督者、執事、番頭等の爲に代はらるゝに至つた。

農民が人口の半分を占めた佛蘭西の如き國に在つては、無産者に與して市民階級に當るの文人が農民及び小市民を標準として市民階級の統治を批評したるは、實に自然の勢ひで、此の中間階級の立脚地よりして勞働階級を擁護せんと勉めたのであつた。小市民階級社會主義は斯くの如くにして起つた。シスモンヂは實に佛國及び英國に於ける此派の首領である。

此の一派は、近世的生産より生ずる幾多の矛盾を、最も精密に分析した。彼等は、經濟學者の僞善なる辯解をも剔抉した。彼等は、器械と分業とより生ずる惡結果、少數の手に於ける土地資本集中、生産過多及び恐慌等を、最も有力に論證した、彼等は、小市民階級及び農民の必然の零落、勞働者の悲慘、生産界の無政府、富の分配の著しき不平等、國家相互排斥する産業戰爭、舊道德、舊家族關係、舊國粹の解體等を説示した。

けれども、此の社會主義の一派は、其の積極の目的に於て、生産交換の舊法と共に、舊時の財産關係と舊時の社會とを回復せんとするか、然らずんば、生産交換の近世的方法と、舊時の財産關係の外殼（實は此の新方法の爲に既に爆發し、若くは爆發せんとする者）の中に押込まんとする者である。故に二者共に復古的にして空想的たるを免れない。

彼等の結論に曰く、製造業にはギルドの組合、農業には族長的の關係と。

然るに頑強なる歷史上の事實は、彼等の自ら欺いた幻影を一掃した。そして此の社會主義の一派は遂に儚なくも衰滅した。

(C)「眞」社會主義

佛國に於ける社會主義及び共産主義の文書は、既に權力を握れる市民階級の壓迫の下に生れ、其の市民階級の權力に對する反抗の表現たるものであるが、其の文書が獨逸に輸入せられた時、獨逸の市民階級は今や正に封建の專制主義に對し其爭鬪を開始せるの時であつた。

獨逸の學者先生は爭うて此の文書を攫んだ。けれども彼等は是等の文書が佛蘭西より獨逸に移る時、佛蘭西の社會狀態が之と共に移る者に非ざることを忘れた。獨逸の社會狀態に對しては、此の佛國文書は全く其の眼前實行の意義を失ひ、純粹なる文學的風姿を齎くるに至つた。斯くて十八世紀の獨逸の學者に取つては、佛國第一革命の要求は只だ一般普通の道理の要求に過ぎなかつた。革命的な佛國市民階級の意志の言明も、彼等の

目には只だ純粹な意志の發現、即ち意志自然の發現、一般普通なる人情の發現としてのみ映じた。

故に獨逸の學者の著作は、專ら佛國の新思想を自國古代の哲學思想と調和せしむるに在つた。或は寧ろ自家の哲學的見地を棄てずして、佛國思想を結合するに在つた。

そして其の結合は、恰かも外國語を反譯するが如き方法を以て行はれた。

彼の中世の僧侶等が、上代異教國の典籍を錄した古文書に依つて、カトリツク諸聖徒の愚傳を作つた事は、人の善く知る所である。獨逸の學者は佛國の文書に對して正に此方法を採つた。彼等は佛國の原書の下に自家の無意義な哲學論を書いた。例へば、貨幣の經濟的性質に對する佛國の評論の下に、彼等は『人情の離散』を論じ市民階級國家に對する佛國の評論の下に、彼等は『將官階級の廢止』を論じた。

佛國の社會主義及び共產主義文書は、斯くの如くにして全く去勢された。そして其の文書中の、階級相鬪ふの意義が、獨逸人の手中に消えた時、獨逸は自ら思へらく、我等は斯くて佛人の偏見を免れた。我等は單に眞實の要求を代表するに非ずして、眞理の要求を代表する者である。我等は平民の利害を代表するに非ずして人間性情の利害即ち一般に人の利害を代表する者であると。然るに、斯くの如き人は何の階級にも屬せず、實在の者にも非ず、只だ哲學的空想の雲霧中に存在するのみのである。

斯くの如く壯嚴なる兒戲を試み、賣藥的大言を以て其の貧弱を蔽ふた獨逸社會主義も、暫くにして漸く其の幼稚な衒學の氣を失ふに至つた。

封建貴族及び專制王制に對する、獨逸、殊に普魯西の市民階級の戰鬪、換言すれば、自由主義運動は、漸くにして切迫を加へた。

是に於て乎、謂はゆる『眞社會主義』は、其の社會主義の要求を以て政治運動と對立せしむべき、多年翹望の機會を得た。即ち、自由主義に對し、代議政の政府に對し、市民階級の競爭に對し、市民階級の言論の自由に對し、市民階級の立法に對し、市民階級の自由平等に對し、舊時傳來の呪詛を投ずべき機會を得た。而して更に民衆に向つては、彼等が此の市民階級の運動の爲に、得る所は一も無く、失ふ所は一切の物なる事を說法するの機會を得た。獨逸社會主義は、此の至急の時に際して、其の本家たる佛國の言論が、近世市民階級社會の存在を豫想し、之に伴ふ經濟事情と、之に適する政治組織とを豫想した

ことを忘れた。そして此の豫想せられたる者こそ、即ち獨逸が後れながら今之を得んと爭つた者である。

故に專制政府、及び其の附隨者たる、僧官、教授、地方貴族、官吏等より之を見れば、此の社會主義は、市民階級の來襲に對する、實に有益なる案山子である。

恰かも此時、政府は獨逸勞働階級の蜂起に對し、鞭撻と銃丸との苦き丸藥を投じたる後であつて、此の社會主義の運動は實に甘美なる口直であつたのだ。

此の『眞社會主義』は、斯く政府の爲に獨逸市民階級と戰ふの武器となれると同時に、又直接に獨逸中等階級の復古的利害を代表した。獨逸に於ては、十六世紀の遺物にして、爾後絕えず種々なる形狀の下に再生せる、小市民階級ありて、社會現狀の眞根柢を爲してゐる。

此階級を保存するは、即ち獨逸の現狀を維持する所以である。然るに、市民階級が、產業上及び政治上に權力を有する事となれば、一方には資本の集中の爲に、一方には革命的無產者の崛起の爲に、固より此階級の破壞を來す恐れがある。『眞社會主義』は一石を以て此の二鳥を殺す者の如く見えた。而して流行病の如くに蔓延した。

修辭の花をもつて綴飾せられ、病的なる感情の露をもつて浸されたる、此の空想の蜘の網の衣、此の浮世を超絕せる衣の中に、獨逸社會主義者は其の悲しげな『永久の眞理』の全身を包んだので、其の商品の賣行は實に驚くべきほど多大であつた。

斯くて獨逸社會主義は、次第に自己の職分を認識し、中等小市民階級の代表者として漸く其聲を大にするに至つた。

彼等は獨逸國民を以て模範國民と爲し、獨逸の小市民階級を以て標本人と爲した。そして此の模範人の卑汚賤劣な行爲に對し、其の眞相と正反對な、崇高不可思議の社會主義的說明を與へて居た。彼等は又、遂に力を極めて共產主義の『殘虐なる破壞性』に反對し自己を最上不偏の高きに置き、一切の階級鬪爭に對する輕侮を宣言した。今や獨逸に行はるゝ謂はゆる社會主義及び共產主義の出版物は、極少數の外、大抵、此の蕪雜にして薄弱なる文書の部類に屬してゐる。

二、保守的社會主義、即、市民的社會主義

市民階級の一部は、市民階級の永續を計らんが爲に、社會の害惡を匡正せんことを望んだ。

經濟學者、博愛家、人道家、勞働階級の狀態改善者、慈善事業の經營者、動物虐待防止會員、禁酒會熱心者、あらゆる種類の穴と隅との改良家等は、皆此派に屬するものである。そして此形の社會主義は、更に歩を進めて、一派の學說を作成した。プルードンの『貧困の哲學』の如きは、此形の一例として擧げることが出來る。

社會主義的紳士は、近世社會の狀態より生ずる一切の利益を取りそして必然之より生ずる爭鬪と危險とを免れんと欲す。彼等は社會の現狀より革命的及び分解的分子を引去りたる者を希望する。彼等は無產者なき市民階級を求む。市民階級は固より此世界に於ては最善者たる事を以て最上と爲すと謂つた。そして市民的社會主義は、此の都合よき考を種々に發展せしめて、多少整頓せる學說と爲した。無產者をして斯くの如き學說を奉ぜしめ、之に依つて直ちに彼の社會的新エルサレムに進ましめんと要するのは、實は只だ無產者をして現社會の埒内に止まらしめ、そして市民階級に關する一切憎惡の念を棄てしめんとするに過ぎぬ。

右に比すれば一層實際的にして、而も甚だしく理義の一貫を缺ける、第二の市民的社會主義は、勞働者の眼中に政治的改革の無益なるを示し、經濟關係より來る物質的狀態を變化するに非されば、彼等の爲に何等の利益なきを說き、之に依つて有らゆる革命運動を貶斥せんと欲した。けれども、此派の謂はゆる物質的狀態の變化とは、決して市民階級の生產關係を廢絕することを意味せず。其關係の廢絕は必ず革命に依らざる可らざるが故に、彼等は此關係の永續を基礎として、只だ其上に行政的改革を行はんと謂ふのみ。故に其の改革たるや、聊かも資本と勞働との關係に手を觸るゝ者でない。只だ市民的政府の行政事務を簡單にして、其の費用を節するを得れば幸ひである。

故に市民的社會主義は、只だ其の單に言語上の形式たる時にのみ、妥當なる意義を有す。

勞働階級の利益の爲に自由貿易を說く。勞働階級の利益の爲に保護稅を說く。勞働階級の利益の爲に監獄改良を說く。是れ市民的社會主義の最後の言葉にして、又眞面目の意義を有す、それが唯一の言葉である。

之を約言すれば左の一句に過ぎぬ。曰く、市民階級は勞働階級の利益の爲に市民階級たるものである。

三、批評的空想社會主義及

共産主義

吾人は今茲に、彼のバボーフ其他の著書の如き、有らゆる近世の大革命に際し、平民の要求に力を添へたる、これらの文書を評するものではない。

無産者が其目的を達せんとした第一の直接計劃は、封建社會が轉覆しつゝあるの際に、一般騷擾の間に起されたが、是等の計劃は無産者の狀態の未だ十分に發達せざりし爲と、其の解放に進むべき經濟事情の存せざりし爲とに依り、必然失敗に歸した。そして其經濟事情は、其時以後更に切迫せる市民階級の下に於て始めて産出せらるべき者であつたのである。されば之等勞働者の最初の運動に伴へる革命文書は、自然復古的性質を帶び、其說く所は、一般禁欲主義と、もつとも粗放なる社會平均論とであつた。

かくて、社會主義及び共産主義の學說と稱せらるべきもの、即ちサン、シモン、フーリエ、オーエン等の如きは、無産階級と市民階級との爭鬪が、前記の如く、未だ十分に發達しなかつた時代に起つたのである。

之等學說の創始者は當時の社會組織に於て、確かに階級對立の狀況、及び解體分子の活動を見た。然し無産者はまだ頗る幼稚であつて、何等歷史上の基礎なく、何等獨立の政治運動なき階級として、彼等の眼中に映じた。

其時以外、階級對立の發達は産業の發達と其步を並べたが、然し彼等が看取した經濟上の形勢は、尙ほまた無産者の解放を望むべき實力を彼等に示さなかつた。歷史的行動は彼等の自ら發明せる行動に從はなければならぬ。歷史的に作り出だされたる解放の條件は、彼等の空想の條件に從はなければならぬ。無産者の漸次に自覺して作る、階級組織は、是等發明家のわざと作つた社會組織に從はなければならぬ。將來の社會は、必ず彼等の設計の傳播と實行とに任ずべきでる。之れ實に彼等の考ふる所であつた。彼等は其設計を立つるや、主として當時最も多く苦しめる勞働階級の利益のためにすることを考へた。勞働階級は只だ最も多く苦しむと云ふ點に於て、彼等の眼中に存してゐたのである。

階級鬪爭の未發達狀態と、自己の環境とに依り、此種の社會主義者は自己を以て一切の階級對立より遙かに上位に在るものと考へた。現時もつとも幸運なる者の境遇をも、改良しやうとした。されば彼等は常に階級の別なく社會全體に訴へたのである。否、寧ろ治産階級を撰んで之れに訴へたのである。彼等は考へた、人若し一たび我說を理解せば此社會最善の狀態に對する此最善の設計を見あやまる譯はないと。

そこで彼等は、一切政治の、殊に革命的の行動を拒んだ、彼

等は平和の手段に依つて其目的を達せんと欲した。そして小さき實驗（多分失敗に了るべき）に依つて、其實例を世に示し、其力に依つて新社會の福音に其歩を進めんと勉めた。

斯くの如き、將來社會の空想的計畫は、恰かも無產者が尙ほ未發達の狀態にあつて、自己の地位を只だ空想的に思考するの時に畫き出された者であつて、是れ卽ち無產階級が社會全體の政策に對する。第一の本能的渴仰を發したのと正に相照應してゐる。

けれども、是等の社會主義及び共產主義の出版物も亦批評的分子を含まない譯ではない、彼等は現社會のあらゆる主義を攻擊する。故に彼等は勞働階級の敎育のために最も價値ある材料に充滿してゐる。又彼等は提出せる實際的方案、例へば都會と地方との區別の廢止。家族制の廢止、一私人のため產業を行ふ事の廢止、賃銀制度の廢止、社會調和の宣言、國家の職分を變じて生產事業の監督のみにする事、凡て之等の提案は、全く階級對立の消滅を指したものである。然るに當時にあつては、此階級對立は漸く正に發生しはじめた者であつて、それらの文書に於ても、僅かに其初期の不明瞭不確定なる形體に於てのみ、認識された。されば是等の提案は、純粹なる空想的性質の者と謂はなければならぬ。

此の批評的空想社會主義及び共產主義は、其義に於て歷史的發達と背反した關係を有してゐる。近世の階級鬪爭が發達して確定せる形狀を成すに從ひ、其鬪爭より離れたる空想的立脚地、及び其鬪爭に對する空想的攻擊は、全く實際的の價値を失ひ、全く理論上の根據を失つた。故に是等學說の創始者は、多くの點に於て革命的であつたが、然し其門人弟子等は必ず常に復古的の一定分派を成した。彼等は無產者の進歩的なる歷史的發展に反對して、常に其師の舊說を固守した。故に彼等は、其主義に從つて階級鬪爭を殺滅し、階級對立を調和せんと勉めた。彼等は尙其空想社會の試驗的實現を夢み、或は孤立せるフアランステレスを起すべしと云ひ、或は家庭殖民地を作るべしと云ひ、或は小イカリヤを立つべしと云つた。そして總て之等樓閣を空中に築かんが爲には、紳士閥の感情と財囊とに訴へざるを得なかつた。斯くて彼等は漸次に、前記の復古的保守的社會主義の部類に沈むに至つた。只、其異る所は稍々組織的の學理を衒ふ事と、其社會學の奇跡的効果を信ずるに迷信的である事との二點のみであつた。

故に彼等は勞働階級が一切の政治的行動を爲すことに極力反對した。彼等に依れば、斯くの如き行動は只新福音に對する無智不信より來るものである。かくて英國のオーエン派はチヤーチストに反對し、佛國のフーリエ派はリフオーミストに反對した。

佛教に於ける社會主義的思想

佛教大學教授　羽溪了諦

一

社會主義の先覺者といへば、誰しも指を佛蘭西の社會改革者サン・シモンに屈する。彼が專ら經濟的方面から社會の改善を企てたことは、現代に於ける社會主義運動の先驅をなせるものと謂ふべきであるが、社會主義の根本理想たる自由平等の觀念は彼よりも二千數百年以前佛教の教主たる釋尊によつて遺憾なく實現せられたのである。

釋尊當時の印度の社會は四姓の階級的差別によつて束縛せられて、當時の印度人は一般に職業の自由を奪はれてゐた。而して最上級の婆羅門族は神人媒介の地位を濫用して名利の獲得に汲々とし、其の多くは物質的享樂に耽溺してゐたに反して、最下級の首陀羅族に至つては享樂の自由や信仰の自由やさへも與へられず、個人の權威は全く無視せられてゐた。かゝる時勢に際して、小なりと雖も一國の皇太子として生れられた釋尊が、たゞ人間通有の苦惱を滅して常住不死の道を求めんがため、王宮を脫出して一衣一鉢の乞食沙門となられ、その後菩提樹下に於て自らの正念正智によつて、現實世界に在りながら一切の苦縛を離脫せる涅槃の妙境に優遊せられ、五蘊假和合の肉身そのものゝ上に常樂我淨の法身を體現し、而もその法身體現の可能性即ち佛性を一切人類の上に認められて、如何なる種族如何なる階級のものにも其の無上の法門を開放せられたことは、人格の解放を骨子とする民本主義の實行であり、また民本主義を手段とし、目的とする社會主義的精神の發現である。故に釋尊は世界最初のデモクラットであると同時に、世界に於けるソーシアリズムの先覺者であつたと言ひ得る。

二

釋尊成道後最初に五比丘を教化して、同樣の知見知慧を開發せしめられたことが古傳に記されてをる。この一事實に由つて觀ても、佛教の宏大な平等の精神を知ることが出來る。大體、釋尊は一切衆生が佛性を本具してをるといふことは、明瞭に說

かれなかつたけれども、釋尊の所謂成道は無明を破つて正智の開けることを意味するのであつて、而もその正智はその時外から入來るべきものでないから、佛となるべき性は吾等人類が本來具有してをることを確認してをられたに相違ない。かやうに釋尊は個人に對して絶對的偉大性を認められたから、釋尊の敎團には貴賤男女老若賢愚を擇ばず、如何なるものをも包容せられたのである。摩揭陀國王たる頻婆沙羅、釋尊の叔母にして其の養育者であつた瞿曇彌の如き貴族も、摩登といふ如き下賤な首陀羅族のものも、釋尊の會座に於ては、共に信仰の自由が與へられたのである。摩阿迦葉、迦旃延の如き上根上智の哲人も、周利槃特の如き下根劣機の痴人も、舍利弗目連の如き高德も、鴦掘摩羅の如き逆賊も、釋尊の法團に於ては、平等に法悅の自由が與へられたのである。

當時の印度社會に於ては、婦人の人格を無視して、極端に侮蔑したものであつて、マヘーブヘーラタには「貴族の家に女子が生れるとその家族の名譽を毀損する。」といふことが記されてをる。又マヌシヤサナパルヴには「女より罪の深いものはない。」とか、或は「女は生活を破壞する所の呪文の如きものだ。」とか、その他讀むに堪へない侮蔑の言葉が載せられてをる。かゝる時代に釋尊及びその敎徒は婦人の裡にも絶對人格に到達し得る偉大性の存することを悟つて、無上の尊敬を拂ひ、世の非難をも顧みず、釋尊は最下級の種族に屬する少女さへもその敎團に攝受せられ、長者の子善生に對して夫婦の道を說かるゝや、先づ第一に互に敬すべきことを訓へられた。

三

斯くの如く、釋尊は各個人の裡に佛性の光を認め、如何なる者も同一乘の修行によつて成佛し得ると信ぜられたから、その敎團內に於ける總ての人々を平等に取扱はれたのである。敎團內に於ける生活は師弟共に同樣であつて、衣食住に關して何等相逕する所はなかつた。

ジャータカ（本生經）といふ佛典の第七十八章の序文に、佛がその乞鉢に入れられてあつた一塊の食物を以て、初めその五百人の弟子を養ひ、然る後精舍の一切僧衆を養はれたにも拘らず澤山の食物が殘つて、それが門口の穴の中へ投げ入れられたことが記してある。福音書の中にも屢々之と酷似した物語が記されて居る。卽ち馬太傳第十四章第十五節以下に於て、馬可傳第六章第三十五節以下に於て、尙又路可傳第九章第十三節以下に於ては、イエスがその弟子の持つてゐた五塊のパンと二尾の

魚とを取り、天を仰いで祝福した後、パンを裂つて弟子に與へた所が、婦人と幼兒との外凡そ五千人のものが食ひ飽きたにも拘らず、パンの屑が澤山殘つて、之を拾ひ集めたところが、十二個の籠に盈ちたといふことが說かれてをる。之等兩者の傳說は少量の食を以て多人數を養ひ而もなほ食物が澤山殘つたといふ點に於ては一致してをる。そこでガルベ教授の如きは種々の理由よりして聖書の物語は佛典より借來つたものであることを論證してをるが、それは今の場合必要がないから觸れることを避ける。吾人はこの傳說を單なる奇蹟談として觀過してはならぬ。固より此の物語を物質的に解釋することは不可能である。吾人は之を精神的に味はねばならぬ。聖書に於ける物語の意味は今暫く措き、佛典に現はれてをる物語は釋尊が在俗の信徒より供養せられた一塊の食物と雖も、之を私することなく、弟子達に公平に分配してやられたからして假令小量の食であつて實際腹は脹れなくとも、精神的に滿腹してなほ食物が澤山殘るやうな氣分がするのである。釋尊の教團に於ては無產主義非蓄積主義であつて、金錢を所有することは言ふに及ばず、食物を蓄へることすら嚴禁してをられたのである。只必要に應じて他人の施與を乞ふて生活を營んで行くのである。而して教團内のものは公平な分配に與るのであるから、甚だ消極的ではあるが釋尊は少くともその統轄する教團内に於ては社會主義を實行せられたものといはねばならぬ。物質上かゝる消極的生活が當時の印度に於て修道上好都合であつたからである。

四

言ふまでもなく、釋尊は宗教家であつて社會改革者ではなかつた。只釋尊の宗教的自覺の中に健全な社會主義的思想の根本が包まれてゐたに止るのである。釋尊の體得せられた涅槃は佛教究竟の目的であつて、本來滅を意味する言葉であるが、絕對的滅無を意味するものでない。差別を泯した所には平等の世界が現はれ、繋縛を絕つた所には自由の大地が開かれ、我欲を滅した所には慈愛の精神が活躍する。平等自由慈愛が佛教の究竟理想であり、その理想を實現せられたのが釋尊であるから、釋尊は差別の現世社會に處するも、差別と離れぬ平等の相を觀てよく之と調和するのみならず、自由の力によつて社會を教化し世俗を清淨にし、慈愛の心に動かされて民衆を教導してその德を高めようとせられたのである。此の點に於ては釋尊は慥かに社會改革者であつたといつて可い。

但し、社會主義の世界觀は甚だしく唯物的器械論に傾き、又

其人生觀は概して單純な樂天的享樂主義に流れてをるが、佛教の世界觀及人生觀は全く之と相反する。佛教は徹頭徹尾精神主義であつて、物質的享樂の如きは心身を害ふものとして、却て之を排斥する。而して差別相の底に潜んでをる平等の原理に立脚して、自由な力を發揮して、自然を愛し、他人を愛し、社會を愛する無我の慈悲行を演ずることを根本理想とするのが佛教である。かゝる佛教の根本理想に生きて社會奉仕に一身を犧牲にした聖者は古來印度にも支那にも將た我國にも尠しとせない。

五

社會主義が自由平等の眞理に目醒め、勞働を以て倫理の中心となすことは妥當なことであるが、一般にあまり唯物主義享樂主義に走る結果、社會生活の整調を破り、延いては社會生活の進歩を害するに至るのである。

今次の世界大動亂の結果は、獨墺の官僚主義專制主義に對する英佛米の民主主義の大勝利となり、又今次の戰爭は資本の競爭でなくて物資の競爭であつたから、遂に聯合軍に勝利を得しめたものは資本家でなくて、物資を製つた勞働者である。そこで世界の社會主義者は此際一擧にして資本家を倒し、政治上及び經濟上に民主主義を建設せんと努力してをる。我國にも近來頻々として各地に同盟罷工勃發し來つたが、果して彼等勞働者は眞摯な自覺を以て資本家と對抗してをるのであらうか。從來資本家が勞働者の人格を輕蔑して、器械視奴隷視し、利益を壟斷して、公正な利益の配當を與へぬのは、所謂勞働掠奪者であつて、道德上よろしくないのは勿論であるが、勞働者が自己の能率の增進を計ることなく、産業の發達を念ふことなく、只自己の物質的享樂を滿さん爲に、無暗に勞働時間の短縮を迫り、賃金の値上を申込んで騷ぎ廻るが如きは、決して正當な振舞とは言へない。尙又勞働者の味方となつて働いてをる有識無産階級の人々が、多數の勞働者を煽動し、彼等を踏臺として自己の名利を攫らんとするが如きは、以ての外の仕打である。かやうな人達によつては、到底眞正の民本主義を基調とせる有益な社會政策を行ふことは出來ない。徒らに團體の整調的生活を攪亂するのみである。

かくの如き不健全な個人主義即ち小我主義を打破するには、佛教の無我主義即ち大我主義の眞理に基いて、社會全體を自我の内容として徹愛する心情を培養せねばならぬ。この心情を抱いてこそ初めて健全な平等主義に立脚して社會の改善を實行し得るのである。(完)

緊急社告

華盛頓に於ける國際勞働會議は目眉の間に迫れり。我が國勞働階級の死活は、一に本會議の決議に依つて左右せられんとす。而も我が勞働委員をして此大任を全ふせしむるには、充分に之を監視し督勵せざるべからざるものあり。仍て我社は玆に

在米國本社特派員　稻垣均

を華盛頓に簡派して、本會議の眞相を詳細に讀者諸賢に報ぜんとす。乞ふ刮目して俟たれよ。

本號の社會主義研究には、社會主義思想に關する凡ての問題を網羅する豫定なりしも、取急ぎたる爲め、左の原稿は、遂に本號に掲載するを得ざりしを遺憾とす、追て順次に掲載して補遺すべし。

ギルドソシアリズムに就て　北澤新次郎
ボルセーズムと　小泉信三
社會主義　堺利彦
國家社會主義と我が國體　北原龍雄

尙新進創作家集も頁數不足の爲め遂に左記創作を掲載すると能はざりしは呉々も遺憾とす。是亦次號より順次掲載すべし。

長篇 美しい町　佐藤春夫
泥沼　南部修太郎
牧師のボーイ　細田源吉
兵營時代　岡田三郎

生田長江氏全譯

マルクス資本論

第壹分册發賣

大版四四〇頁

定價	貳圓貳拾錢
特價	壹圓九拾錢
送料	拾貳錢

急峻なる角度を畫いて、急轉直下し去らんとしてゐる。

大勢はまさに――

來るべきは暗憺たる恐怖時代であるか、はたまた春風の駘蕩たるが如き理想實現の社會であるか。之を明らかにするものとしての「資本論」の研究は、社會問題勞働問題に對する一切の眞實なる解決方法のアルファアにして且つオメガアであらねばならぬ。しかも天才者の大なる獨創は常に、學究者流に取ての謎語である。マルクスの難解も亦、マルクスのほかに、社會主義のほかに、或は經濟學のほかに何物をも知らざるが如き一味學徒に取ての難解に外ならぬ。いまや本書の譯者生田氏に於て特に人意を強うするものは、氏が其尖鋭なる直觀と精嚴なる論理とを以てして、總ての科學及哲學に精通し徹底することの用意を具備しつつも、尚ほ且つ其部門の孰れにも偏落するが如きことなく、渾然たる全人格的努力を傾倒して、常に潑溂たる文化運動の指導者となつて來てゐる點にある。若くは文壇思想界の先覺として、忌憚なき社會批評文明批評の權威者として、日本の現代に重きをなして來てゐる點にある。そして氏は、氏が前きに個人革命の詩人ニイチエの推奬に於て貢献した所のものを、此度び更に社會革命の預言者マルクスの紹介に於て貢献すべく、昨冬以降萬事を放擲し去つて此一事に執し、最善の後に最善を盡して泣血の苦心を惜まなかつた。刊行者また、空前にして恐らくは絶後なるべき斯の如き壯擧に參加し得たことの大なる光榮を思ふものである。

第二分册以下刊行豫定

第壹巻全部――大正九年一月中
第貳巻全部――同　四月中
第參巻全部――同　八月中

大賣捌　東京堂・東海堂・北隆館　上田屋・至誠堂・慶文堂

東京麻布十番通り　**綠葉社**　振替東京三二七五二番　電話芝七〇一二番



勞働問題を描ける文學

厨川白村

一　問題文藝

現實生活の深い根柢の上に建てられた近代の文藝は、その一面に於て純然たる文明批評であり社會批評である。嘗てさう云ふ傾向の第一人者であつたイブセンによつて起された所謂問題劇は云ふまでもなく、また傾向小説、社會小説などの名目によつて呼ばれる多くの作品も、みな直接に或は間接に近代生活の難問題を捉へて題材とした。その最も甚しき者に至つては、思ひ切つて純藝術の境域をさへ蹈み越へてゐる。或作者は既に一種の宣傳者（プロパガンディスト）と化し、群衆を向ふに廻して頻りに大聲疾呼してゐる感さへあるのは、文學を以て今もなほ俳茶の讖と同じき一種の風流韵事なりと心得てゐる人を驚殺するに足る者がある。現存の作家に就て云へば、英國のショウ、ゴルズワアジイ、ウエルス、また佛蘭西のブリウの如き、この最も著るしき者だ。

昨年あたり一時は流行のやうになつてゐた民本主義の論議に續いて、今度は勞働問題が一世の視聽を聳てるに至つた資本家對勞働者の衝突は日本でこそ昨今の問題だが、歐洲の社會では前世紀以來の最大難問であり、從つてまた文藝家の中には早くから之を主題として取扱つた者があつた。いま假りにさういふ類の小説や戲曲の特徴を考へて見ると、先づ(1)個人の性格や心理を寫すほかに、多數者の群衆心理を描いたものがある。殊に戲曲の場合などは登場人物の數が無闇に多い。是等の點は題材の性質そのものが然らしむる結果だ。昔から劇などに群衆を用ゆる場合はあつた。しかしそれは

ゲエテの『エグモント』や沙翁の『ジュリアス・シイザア』に於けるやうに、或る個人が群衆を代表し、全體(マス)が個人の心理の法則で動いてゐるのであつた。個人心理と働きかたを異にしてゐる群衆心理そのものを舞臺に出す事は、近代劇のうちでも特に此勞働問題を主題とした作に成功したのがある。次にまた(2)多數者の騷擾などを描けば、勢ひ場面が賑かでセンセエショナルな、メロドラマ風の物が出來あがる。(3)描寫の態度から云へば、近代作家の常として、現實をその儘に描いて、此資本勞働の問題にも全く何等の解決を與へようとはせず、その悲慘な實際を描き問題を提示して、讀者自らをして此近代社會の一大缺陷に就て深く反省し思索せしめようとする行きかただ。(4)また結構から云へば、資本家勞働者の衝突事件のなかに男女の戀や家庭内の悲劇挿話を織り込ませて。作全體のエフエクトを強く深からしめる様な仕組みが普通だ。是は決して謂ゆる小說風の作り事拵え物でなく。實際に勞働運動のかげには、いつも何等かの意味で女性の力が働いてゐるからだ。(5)そして此種の作中には必ず資本家側に保守頑冥度す可からざる老人が居て、そこに新舊思想の烈しい衝突が現はされてゐる。日本でも近頃この問題を捉へた作物がだいぶ出たが、なかでも佳作の一つだと思はれた久米正雄氏の『三浦製絲場主』(中央公論八月號)のごとき、矢張り右に述べた最後の二つの點などは、西洋の近代文藝にあらはれたものと異曲同巧であつた。

二　英吉利文學

近頃同盟罷工問題が世を騷がすにつけ、西歐文藝の如何なる作物に之が描かれてゐるかを、私は二三の人々から訊かれた。それから思ひ付いて、今全く議論や理屈を抜きにして是等の諸作を紹介して見ようと思ふ。本來製造工業の盛なため一番早くから産業革命の難問題にぶつかつて居た英吉利では、詩人や小說家が此問題を取扱つた人が、大陸諸國に於けるよりも、ずつと早くから現はれてゐた。元來が英文學の特色として、佛蘭西文學のやうに純藝術の色彩が濃厚でなく、いつの時代にも宗教上政治上社會上の實際問題と文學とが緊密の關係を保つてゐる事も此原因の一つであつたら

う。最初かの勞働者の主張擁護の爲に普通選擧を叫んだチヤアティスト一派の運動に關聯して、前世紀の中頃から既に論壇ではカアライルの『過去と現在』『チヤアティズム』『後日評論』（ラタ・デイ・パンフレツ）出で、ラスキンも亦た藝術批評の筆を擲つて、勞働者に與へた書翰集 Fors Clavigera や、『此後至者にも』（石田憲次氏譯弘文堂出版の完譯あり）などを公けにした。詩壇に於ても、自ら勞働者であつた詩人ゼラルド・マッセイや、『幼兒の嘆き』（クライ・オブ・チルドレン）に少年勞働者の爲に同情の涙を濺いだブラウニング夫人の諸作が出たのも、此十九世紀中頃からであつた。

しかし純然たる創作の方面で最も早く此勞働問題を描いた名作は、チヤアルズ・キングスレの小說『酵母』Yeast（一八四八年）と『アルトン・ロック』Alton Locke（一八五〇年）とであつた。もとより當時の社會改造論は、後年に勢力を得たマアクス一流の物質論ではなく、道德宗教の思想を根帶とした舊式のもので、キングスレがこの二大作品に於て宣傳しようとしたのも、矢張り當時の英吉利に勢力のあつた基督教社會主義（クリスティアン・ソシアリズム）に外ならなかつた。卽ちモオリスやカアライル等の思想系統に屬するものであつた。

食料品の暴騰、賃銀の低廉、勞働時間の延長、就業難、さういふ色々の原因のために當時の英吉利の勞働者は非常な苦境に陷つて、地主資本家に對する一般の反抗氣分が白熱的になつてゐた。この不安な社會狀態は千八百四十八年更に對岸の佛蘭西に起つた第二革命によつて一層の氣勢を高めたのであつた。キングスレの此二つの作は勞働階級の窮狀を精細に描いて、先づ正義人道に訴へたものであつた。卽ちその根本思想に於て既に今日の唯物的な社會主義とはよほど立場を異にしてゐたと共に、文藝の作品としても亦た表現に於てなほ舊時代の浪漫的な色彩の甚だ濃いものであつた。殊に『酵母』（イイスト）の方は荒廢した田園の生活を描き地方農民の窮狀を寫したもので、主人公のランスロットといふ青年が獵に出掛けて行つて、怪我をして或寺院の門前で美しい長者の娘に救はれる、そして二人が戀に落ちると云ふやうな場面は、行き詰つた今人の生活を土臺にしてゐる現代文學とは、甚しく懸け離れたものだ。そしてまた一方には恁ういふ浪漫的の趣味と共に餘りに露骨に社會改造の主張を作中に織り込まうとしてゐる爲め、そこに甚しい不調和や不自然がある。

所謂「問題」小說の欠點を遺憾なく暴露したもので、藝術品として失敗の作であるのみならず、主義宣傳のためにも力が弱いやうに思はれる。今日から考へれば、此作が當時非常な好評を得た事は、全くその時の住宅の問題を取扱つたために、一時的に時人の視聽を聳てたに過ぎないものである。

之に較べると『アルトン・ロック』の方はすべての點に於て遙にすぐれた作だ。此方は貧民生活でなく、倫敦の勞働階級の境遇を寫し貧民窟の生活を細叙したもので、前者よりはずつと寫實的であり、また小說としても成功してゐる。裁縫店の職工アルトン・ロックの自叙傳として書かれてゐる。その生ひ立ちから、或書肆で見染めた大學幹事の令孃との戀を叙し、口に筆に勞働運動の宣傳に狂奔した揚句、官憲から或地方に起つた暴動の煽動者と睨まれて、三年の禁錮に處せられる。遂に社會改造の大業は柔弱にしてはじめて之を成し得可きを覺り、一方また失戀の結果遂に周圍の事情に餘儀なくされて、米國のテクサスに移住しようとする。やがて目的地に上陸しようとする前、船中に病を得て死ぬまでの悲慘な生涯の記錄である。純粹の小說といふよりは矢張り宣傳に重きを置いた事が隨分露骨に出てゐるが、それでも作者は平氣で、「娯樂のためにのみ私の小說を讀む人は此一章をお飛ばしなさい」(第十章)などとやつてゐる。

三　近代文學、特に小說

しかしキングスレなぞよりもずつと吾々に近い新しい時代の文學で、勞働對資本の問題を取扱つた小說界の大作を考へて見ると、先づ第一に擧げらる可きものは、佛蘭西のゾラの『芽月』(Germinal)（一八八五年)であらう。單にゾラ一代の最大傑作であるのみならず、歐洲の勞働社會に之ほど廣く讀まれた小說は他に無いと云はれてゐる。作者自ら熱心に研究し觀察して得た事實を土臺として炭坑勞働者の悲慘などん底生活を寫し、職工側の首魁ランティエが、暴橫な資本家の抑壓に反抗する慘劇を、精緻を極めた例の自然派の筆法で描いたものだ。坑夫の醜穢にして殘忍な、殆ど人間と思はれないやうな生活を寫したあたりは、日本でならば早速發賣禁止を免れないものだ。或人が此作を評してダンテ神

出』地獄界の物凄さを近代化した物だと云つたのは面白い言葉だ。同じ作者の『勞役』Travail（一九〇一年）も矢張り資本主義の暴虐、專横な富豪の家庭生活の亂脈を寫し、一方に之と競爭してラク・フロモンと云ふ男が資本勞働の本當の提攜で拵へ上げた工場の隆運をゑがき、この二つの明白な對照によつて、作者自らの社會改造の理想が後者に在る事を示したものだ。（ゾラは或一部の批評家が誤信してゐる樣な純客觀描寫のみの作家ではなく、彼には大きい理想主義が背後にあつたことは、此小說などにも現はれてゐる）。

英吉利文學の方では、ゾラの『芽月』と殆ど同じ頃に出たもので、單に小說としては話の筋が變化に富み場面の賑かなのは、ギッシングの『平民』Demos; a Story of English Socialism（一八八六年）である。貧家の育ちに似あはず、上品で氣立ての優しいエンマといふ女があつた。勤儉な物固い家庭に人となつた社會主義者のリチヤアド・ミユテイマアが此女と婚約をした。ところが此社會主義者が叔父の遺產相續をして鐵工所の事業に取掛つた。夫れがうまく行つて謂ゆる成金になる。職工の爲をはかつて淸潔な長屋を建てたり、購買組合や無料講演會などをつくる。ところがさうなるとおのづから成金氣質が出て、以前婚約のあつたエンマを見棄てて、他の良家の娘と結婚する。が、不幸にして此結婚生活はやがて悲境に陷り、財產も失くして了ふ。ミユテイマアは代議士候補に立つにも、社會黨からは出ずに他の黨派から出る、さう云ふ色々の事から人氣も落ち、或時ハイド・パアクで暴徒の襲擊をうけて命から〴〵逃げ出した。難を避けるべく或家に飛び込むと、偶然その家の一室はエンマの住居であつた。暴徒の樣子を見ようと思つて、ふと彼はそこの窓から首を出した。その時折惡しく飛んで來た石でひどく頭部を傷けられ、かつて已れが無情くも棄てたエンマの心こめた介抱をうけて、彼は最後の息を引取ると云ふのが、此長篇の荒筋である。

いつも好んで貧乏生活を題目としたギッシングには、かゝる勞働問題ではなしに、單に職人工女などの實際を寫實的に書いたもの、例へば Thyrza の如き類の作は他にもある、また西洋近代の小說で勞働者の生活貧富懸隔の問題などを材料に取つた作（たとへば米國工業の中心地市俄古を背景とし勞働者の慘狀をゑがき、一時は英米兩國の讀書界を風靡し

たアプトン・シンクレイアの『ジャングル』の如き類）は無限にあるが、單にこの勞働對資本の衝突問題に觸れた作だけでも十や二十ではなからう。なかでも英國の William Tirebuck の作 "Miss Grace of All Souls" 米國の或諸名作家の筆に成つた "The Breadwinners" また Mary Foote 女史の "Coeur d'Alene" 紐育の料理屋の給仕人（ウエイタアズ）の罷業を骨子にした Francis R. Stockton の "The Hundredth Man" など、いづれも同盟罷工をゑがいて最も成功した通俗小說として知られてゐる。

四　同盟罷工を描ける戲曲

次に戲曲の方で同盟罷工を主題とした作中最も有名な物は、ハウプトマンの傑作、シレシアの勞働者の激烈な反抗をかいた『織匠（ディ・ウエベル）』で、當時獨乙の官憲が上場を禁止したものだ。是は從來いくたびか獨逸文學の專門家によつて我國に紹介せられたものだから玆に說く迄もなからう。ビョルンソンの『人力以上』はその前篇だけ曾て森鷗外氏が譯されて『新一幕物』に收められてゐると記憶するが、あの後篇の方は、前篇の牧師サング程ではないが矢張り理想家である其息子と娘とを中心として、資本家ホルガアに對する職工の反抗運動を主題としてゐる。また英吉利文學では、サワアビイの "Rutherfold and Son" も罷工を背景にした劇であり、ジョン・オスワルド・フランシスの "Change" も同樣。またジョオチ・ムウアの "The Strike at Arlingford" は、詩人であり社會主義者である John Reid といふ男が同盟休業さわぎに、戀の葛藤と金錢問題との板挾みになつた結果、遂に失敗して毒を仰ぐに至る悲劇だ。作品としてはビョルンソンのよりも劣つてゐる。是等のほか、一時米國の人氣作者であつたチヤアルズ・クラインの "The Daughters of Men" 西班牙の現存作家フランコス・ロドリゲズの "El Pan del Pobre"（貧者の麪包）デイチエンタの作 "Juan José" 丁抹のヒアルマア・ベルクストレムの Lyngaard & Co.) 佛蘭西のブリウの "Les Bienfaiteurs"（慈善者）など、枚擧に遑なき程であるが、劇として最もすぐれた作で、ハウプトマンの『織匠』と比肩すべきものは、英國現代の最大の劇

作家ゴルズワアジイの『爭鬪（ストライフ）』である。

『爭鬪（ストライフ）』はトレナアサ錫器會社の同盟罷工をかいた物で、社長のジョン・アンソニイと云ふのは專橫で剛情で、貪婪飽くを知らざる男だ。職工の罷工すでに六ケ月に及んで、彼等の妻子が飢に泣いてゐるのを冷かに見ながら、頑として一分一厘と雖も讓歩しようとしない。之と對抗してゐる勞働者側の首領は、また激烈な革命主義者であるディヸッド・ロバアツだ。劇は此極端に利害の相反した――而かも其徹底的な態度に於ては兩者の間に一點相通ずる所ある二つの人物を中心として展開する。此二つの力の中間に立つものは、既に双方の衝突の爲に疲弊し困憊したストライキの職工と、勞働組合の役員とである。一方に倫敦の方から重役連が來て會議を開けば、職工の方でも別に集會を開いて妥協案を講じてゐる。ちやうど其矢先きにロバアツの妻が飢餓と寒氣との爲に死んで了つた。それを聞いた職工等のうち、以前から既に心中ひそかに矯激なロバアツの主張に不賛成であつた一部の者が急に勢力を得た。遂に或條件のもとに妥協していよ〳〵復業すると云ふ事に決し、此決議を齎らして職工側は重役たちを訪ねる。すると一方また重役連の方でも既に會議を開いてゐて、その結果あの頑冥な社長アンソニイは飽くまで妥協に反對して辭職してしまつたあとであつた。もと〳〵衝突の中心人物であつた双方の大將は揃うして倒れて了つた。第三幕の最後のところで、かの徒に自分の妻をまで犧牲にして奮鬪し最後には皆の者から背かれて了つたロバアツと、また重役連から裏切られたアンソニイと、二人は相對して、各々自分たちの此運命の皮肉（アイロニイ）を顧み、お互に同情する。

作者ゴルスワアジイは此作によつて資本勞働の衝突の無益なるを示さんとした事は云ふ迄もないが、それと同時にまた資本主義の現狀に於ては罷工さわぎの避く可からざる事をも十分に考へさせようとした。問題に對して何等の解決を與へないで、双方に十分言はせる丈けの事を言はせ、行らせる丈けの事をやらせて、この問題を現實社會の一現象として提示し暴露した。苟くも人生の問題を考へる人ならば此大きな社會問題に對して無頓着では居られないやうに吾々の眼前にまざ〳〵と夫れを見せて吳れた所に、此戲曲が英國社會劇の最大作たる意義が存する。或る批評家はゴルスワアジ

イの此作にハウプトマンの影響があると云ふが、かの『織匠』に見へる様な煽動的な點は此『爭鬪』の方には毫も無い。それだけまた落着いた思想劇としては、ゴルスワアジイの作の方が面白いのではないかと私は思ふ。最後のアイロニカルな場面は近代の現實主義の文藝の常として、わざと人生の皮肉を描いたもので、『織匠』の結末にも矢張り恁うした一種のアイロニイが現はされてゐた。

或者は算盤の上から、或者は感情から、或者は理屈から、血眼になつて騷き立ててゐる勞働問題も、大きい人生の批評家から見れば、そこに滑稽もあれば人情もあり、むくつけき髯男の怒鳴つてゐる蔭には、かよわき女性の笑ひや涙が見られる。冷かな溫性主義のお隣には却つて熱のある純理論が叫ばれたりする色々の矛盾がある。高いところ大きい所から達觀し觀照すれば、今人の社會的生活や個人的生活は果して何と見えるだらうか。それを文藝の作品は明鏡裡の影を捉ふる如くに、鮮かにまざまざと吾等に示して呉れるのだ。當面の問題解決を文藝に求めんとするが如きは、畢竟俗人の俗見に過ぎない。（終）

道德の勝利と世界思潮

文學博士　桑木嚴翼

一

此の如き題目を揭げると如何にも陳腐の觀があるが、本來道德といふ語を一方の人々の考へる如く固定的偏狹なものと見るとが誤まりなのであるから、道德の勝利といふとは必しも現今の時勢と進歩とを無視した退嬰的消極的道德觀の勢力を得るとを意味するのではない。然しとにかく道德である、人生の日常行爲に對する規範ではあるが、日常決して完全に實現されて居ないとは事實である。然るに此道德が人生に有力となつた、と今更らしく述べ立てるのは、何の理由によるのであるか。其は近來の政治經濟法律等實際的方面に於て著しく此傾向が現はれて來て居るからである。是等の方面は從來道德に比すれば遙かに後方に存して居たやうに見えた、隨て私自身の如く理想を好む者は、此の如き現實の方面に慊らない點が多かつたから、餘り此方面の議論に耳を傾けなかつたが、近來に至つて頓に私自身の趣味に變化を起さしめた點が多い。是卅中大學を說く如き迂儒の名を受くるを顧みずして敢て此題目を提ぐる所以である

所謂、政治經濟等の方面が道德的となつたとは如何なる意味であるか。私は此場合に於ても、依然として、是等の實際的方面が、其實際的施設若しくは實際的事變に於て、悉く道德的となつたとか若しくは理想的になつたとか言ひ得るのではない、といふとを悲しむものである、然しながら之を昔日に比すれば確かに一歩を進めて居ると思ふ。而して私が最も多く我意を得たと思ふ點は、是等實際的方面をかなり實際的なる見地より論評する人々の意見に於て著しく道德的色彩の顯れて居るとである。從來是等の論評に於ては多くジンゴイズム若しくはショーヸニズムの精神が支配して居たから、苟も其圏外に出でようとすると、迂遠若しくは非愛國とせられ、甚しきは非國民とせられ

るとさへあつた。然るに近時の論議中には堂々たる非ジンゴイズム論が唱道せられて、多くの賛同者を得て居るとは、殊に此種の問題に關する論議に對して常に不愉快の感情を以て接せざるを得なかつた私に取つては往々意外の感がある所である。

此の如き論議の中、最も顯著なるものは講和會議に關するものであるが、之を溯て戰爭中の諸論に及ぼすとが出來る、戰爭の目的に關しては種々の論辯が行はれ、其中にはやゝ如何はしきものもあつたが、大體に於て聯合國の主張する所は正義人道を眼目とするとであつた。或は初から假面なりとして終りに至るまで其觀察を撤回せざる者もある。固より其發端に溯れば必しも此の如き理想を存せず、たゞ自國保存若しくは自國增大の他に目的は無かつたかも知れぬが、次第に事件が擴大し世界の各國が參與するに至つては最早自國を云々するとは出來なくなつた。其故に初から道德的目的を以て戰つたのではないかも知れぬが、後には其目的を離れては此戰爭が意味を失ふと、猶他の一面に經濟的事情等を離れては均しく此戰の意味を失ふと同樣になつた。尤も公平に觀察すれば、聯合國の擧動が一から十まで正義人道に合したといふ譯ではなく、獨逸等も亦其戰爭の目的には文化宣傳といふとを標榜して居たのであるから、たゞ其旗印のみを以て實際上の是非曲直を斷ずるとは出來ないが、然し大體に於て聯合國の正義人道の聲の方が高かつたとを否定し得ないであらう。從來多くの戰爭にも敵國を非難するともあつたが、其眞意は單に自國の進步發展を窮極の目的として其見地から、戰爭を辯護して居たが、表面に正義人道を振かざす所は此戰爭の一特色と言はねばならぬ。隨て之に關する各國政治家の言論が著しく道德的となつたとは敢て怪しむを要せず、更に其跡始末の問題に入つて依然此性質を保存すべきとは理の當然と言はねばならぬ。此の如くして先づ國際聯盟の議が出たとは此戰爭の目的に適合したとである。ウヰルソンが之を第一に說くとは決して順序を誤まつたものではない、然らざれば、戰爭の目的として揚言する所と矛盾するとになるからである。

私は前に政治上の實際的施設よりは寧ろ其評論に於て道德的色彩の顯れるとを述べた。此意味に於て、最も實際家たるべきキルソンを以て先づ此の如き評論家の方に編せざるを得ざる運命を悲しむものである。キルソンの訓言等は澤山あるが、私は初めまだ此種の問題に深く興味を有して居なかつたから十分讀んで居ないけれども、其後最近の諸說を見るに、彼の十四箇條といひ、國際聯盟の計畫といひ、皆堂々として確かに道德的政治

の理想を實現するものである。然しながら不幸にして其は結局多くは理想に止まり、實際の政治は依然理想に遠いものとならんとしつゝあり、ヰルソンは終に政治家たるよりは寧ろ政論家たるに至らんとしつゝある。世間の附和雷同者は此際氏を以て僞善の徒である如く說くことに傾くやうであるが、私は之に一致するを得ない。固よりヰルソンに何等政治家的術策も國民的偏見もないとは言はない。然し諸會議の際戰死者の墓前に試みたる演說はよく其心情を語るもので、而して同時に益其が實際政治家の圈外より脫せしめられたることを示すものである。私は此政治家をして政論家たらざるを得ざらしむる外國に平かならざるものがあると共に、たとひ政論に止まるとするも道德的政治論の此によりて世界に獅子吼せられたことを喜ぶものである。

國際聯盟案は種々修正せられ、殊に米國自身より頗る矛盾したる修正を施してあるが、とにかく從來の規約よりも恒久平和の希望に一步を進めたものであることは疑を容れない。之を次第に現實的としたのは發案者の考按ではなく、寧ろ之を圍繞する舊時の政治思想國家思想の結果である。其所謂舊式の國家思想なるものは自國の安全を欲求する點に於ては恕すべき所もあるが、一步を進めて多少でも侵略的精神を帶び無用なる脅迫を敵國に加へんとするものであれば、其れだけ政治の實際のなほ理想に遠いことを想はせるものであるが、然し其の實際を幾分なりとも理想的ならしめた所にやはり道德の勝利を認めなければならぬ。隨て此案に對して贊意を表する者は、其思想に於て既に道德的となつて居ることを示すものである。最近一雜誌(太陽)に於て國際聯盟加入の可否を諸家に問うたが、其答解中には勿論可が多かつた。然し否と答へた者も若干あり、又可の中にも否に近きものもあり、なほ答解せざる多數の意向には或は否の方が多かも知れぬが、とにかく其答解中には明白に道德的理由を附記して可なる所以を示すものが若干あつた。此の如き斷片的意見のみならず、精密有力なる評論に於て此種の調子を有する者が少なくない。私は其が嘗て豫想して居た政治論と雲泥の差があるのみを見て、竊に時勢の轉變を祝せざるを得ないのである。外交を掛引とし、外交官を國家的虛言者とした時代は全然實際界に影を潜めて居ないが、然し大に勢力を失つたことは事實である。今は政治も亦眞實の問題である。誠實なき外交は遂に終極の勝を制することを得ない。たとひ此事が未だ十分事實となつて顯はれぬにせよ、之を主張する論議が輿論を動かすに至れば終に實際を動かすに至ることを想像されるのである。

國際聯盟と關聯して目下人々の注意を惹くものは勞働問題である。而して此問題が單なる經濟問題でないことは頗る注意を價する、否、經濟問題が道德問題と明瞭に結合して來たことが此事實によつて示されて居ることに我々は興味を有せざるを得ぬのである。經濟問題といへば單に富の分配の問題に過ぎず隨て勞働問題も勞働者の賃銀を增加し慈善溫情を以て之に接すれば可なりと思はれて居た。然し賃銀を增すも溫情を施すもなほ一の缺くる所がある。蓋し彼等勞働者も亦一個の人間一個の國民として他の人類國民の享有する快樂等を自由に得たい希望がある。同一の饗應も窮屈に危坐して御辭儀の百遍もせねばならぬ場合にはさほど難有味を感じない。溫情慈善が十分人に滿足を與へない理由は此にある。然らば何か缺けて居るのであるか、曰く勞働者の人格を認めることが是等諸設備に存せざる限り、其不平不滿の根柢は決して除き去られないのである。是が近時勞働問題に就て論ずる人々の根本的意見であるやうに見える。而して此精神を貫徹する爲に要求する所のものは卽ち勞働時間の短縮と勞働組合の設立とであるといふ。私は豫てより勞働者其他下級吏員兵士等に對する人格尊重の切要を認めて居るものであるが、多くの場合に於ては其は言ふべくして行はれざる空論であるやうに認められて居た。然るに今之を實際問題として論究する聲の高いのを見ては、竊に空谷跫音に接する感なきを得ない固より此場合に於ても政治上の場合に於けると同じく、まだ全然實行者の方面から其の承認を得て居る譯ではない。所謂資本家階級が虛心平氣に人格主義を實行し得るかはなほ疑問に屬すると共に、勞働者階級も亦必しも論者の述べる通り理想的精神に富む者ではないから、單に利益の增進を以て滿足する者もあるべく、又た勞働時間の短縮は徒らに遊惰の氣風を增長し、組合の設立は無意味な不當な同盟罷工を生ずるに過ぎないこともあり得る。故に實際上に於て人格主義の道德が全然勢を得たとは言へないが、然し政治上の場合に於ける如く此の如き論議が屢繰返さるゝ中には自から實際界に影響を及ぼすことは豫期せられる。尤も其論議が我々の如き初から空論視せられる者から發したのでは餘り利目がないと思はれるが、實際の事實を論據として行くべき道を示したものに對しては如何なる理屈嫌ひの人も自から耳を傾けぬ譯に行かぬであらう。

二

以上二例の他、種々の事實を擧げることが出來る。例へば法律

の如きは既に早く道德との接近を示し人格主義的見解に傾くものが少くない。其他デモクラシーの論議や婦人問題の解釋や、其根柢には皆人格尊重の道德主義を有して居ることを示すものである。我々は是等の事實を以て社會人心發達の必須な過程とするものであるが、是等は又一面に於て舊來の制度文物に對する批評となり破壞となるやうに解せられる。隨て舊來の狀態を維持せんとするものが百方之を抑壓せんとすることも理の睹易き所である。然も此際問題提出者の豐富嶄新なる專門的知識は到底舊思想家の敵するを得る所ではない。此場合たゞ一の且容易なる方法がある。卽ち反對論者が堂々として論ずる世界の大勢其ものを拒斥するのである。如何にして此の如き發擧に出ることを得るか。曰く、世界の大勢其ものを絕滅することは人力の及ぶ所ではない、其故にたゞ此大勢と我國の現狀との間に何等の關係がない、といふことを說いて此問題を雲烟過眼視し、而して論者に對しては徒らに外國の書籍見聞に依りて國情の異なる社會の事を論ずる者とし、更に進んでは外國の學說運動に盲從する卑劣の徒に過ぎずと嘲罵し、所謂世界思潮を云々するものは畢竟外國の思潮に屈從するものであるとするのである。

思ふに國情の相違を說き思想の自主を說くことは何人も異論のあるべき害はない。理想を說き或は空想を構へるにすら自己の左右に影響せられるのは普通である。況んや實際的施設の論議をなすに當て自己周圍の社會事情や演說や風俗を顧慮すべきことは論を俟たない。思想に於て自己を主とすべきことも固より多辯を要しないであらう。然しながら所謂國情なるものが絕對的に不變なるものであることは、何人も亦承認せぬことであらう。日本の社會が西洋の社會になることは出來ない、又望ましくもない。然しながら近世文明の結果として從來存しなかつた新しい制度文物が生じたとすれば、其所に同樣な變動が起ることは當然である。所謂產業革命の結果として生じた所の社會上の幸福を享有することを得たとしたら、均しく又之より生ずる社會上の缺陷を經驗することは避け得ぬことであらう。所謂西洋に於ても此樣の社會問題に對して耳を掩はんことを欲し、依然桃源の夢に憧憬する者も少なくない。私自身の如きも性質の傾向上から言へば、寧ろ此種に屬するものである。然しながら今は苟くも眼ある者の終に見ざるを得ざる變化が起りつゝあることに對しては、如何にしても眼を掩ふことは出來ない。而して是等の社會的缺陷に對する言說を聽けば、往々にして恰かも過去の手工家庭工業等を希望するものではないか、といふ如き感を抱かしむるものもある

が、然し固より之を今日に望むべきではないとも論者の熟知する所である。是に於て今日の產業組織を是認しつゝ其中より適宜に救濟の途を講ずるか或は今日の社會的利便を損することなくして新なる產業組織を採用するか、此二途に出なければならないことになる。其他に極端なる自然生活を鼓吹する者もあるが、是は一種の反動現象と見るべきもので、到底永久的勢力を得難いであらう。此意味に於て私は徒らに社會の秩序を紊亂することを是認するものではないが、然し秩序維持に名を假りて一切の改革を排斥せんとする者にも與することは出來ない。とにかく事情現に然りとすれば此の如き問題は同樣の文明程度に達せる國家社會の同樣に苦しむ所の問題であつて、之を西洋に限るべきものではない。故に產業組織の同樣なる社會方面に此の如き聲の起るのを見て、徒らに外國書籍の受賣に過ぎぬと壓迫し去ることは不當である。

然し論者はいふであらう。此の事情に對して徒らに外國の學者や實際家の意見施設にのみ盲從することは世界思潮に順應するのではなく、之に屈從するのである、日本には須らく日本獨得の意見施設なかるべからずと。固より然り、細點に至つては所謂西洋と雖も決して一定しては居ない。況んや風俗習慣の著しく異なつた我國に於て直ちに西洋の風俗を眞似ることの誤謬なるは言を俟たない。然しながら人情に古今變りなしといへるが如く、東西共通の點も少なくない。而して此根本的共通の性情が次第に外形上の一致を得ると共に益接近して來ることは見易いことである。例へば或期間の勞働の後休日を欲するは人情である、而して此休日が一般社會に於て日曜日に定まつて居る場合には自から職工勞働者も之に從ふを便にするに至ることは當然である日曜に休むことは耶蘇教國の習慣である、我國には古來一六の休日とか一日と十五日との休日とかゞある、といつても其は今日には不適の言であらう。此の如きことは些細の事であるが、例へば職工が一日と十五日との休日を便とする間は勿論此制度は繼續するが、漸次家族社會との關係上不便を感ずるやうになれば變更して來る譯である。此の如きことが他の更に大なる點にも生じ來るとすれば必しも西洋の學者に盲從する譯ではないが、一般の原理として之を採用することは怪しむに足らない、從來一部の人々は原理は西洋人の發明するものとのみ思つて、苟くも一般原理を口にすると、直ちに之を西洋的として非難するが。是れ反て甚しき自屈の精神といはねばならない。原理は天下共通である。之を採つて自國の社會事情に適用することが何故に屈從

であらうか。世界の思潮を云々するヿを直ちに屈從と思ふものは、自己の思想作用に對して甚しき自卑自屈の精神を有するものである。

三

今私は主として經濟社會の問題を例證としたが、其他平和論にも法律論にも同樣の論議を試みるヿを得るであらう。然しながら熟々思へば、是は畢竟人々氣分の相違であるから、如何に論議しても結局無効である樣にも考へられる。一方は世界思潮世界的一般原理といふ旗幟の下に新機運を導かうとするのであるが、他方は國情獨得を標榜して其保存維持の性癖を辯護しようとする。故に理屈では双方共に必しも謬りでもないが、たゞ其論議の目的と場合とによつて當否を判斷するの他はないヿになるのである。随て其大部分は感情氣質上の問題で永劫に相一致せず。又其所に適當なる牽制が行はれるのであるから、兩者は互に思想の自由を尊重して徒らに一方を抑壓するヿを避けなければならない。然し斯く言ふと又其自由適用の範圍に就て議論がある。我々は通常改革進步の意見に對する自由を重要視する傾向がある、而して又其方面の必要を認めるものであるが、一方に於ては又所謂保守退嬰の議論を主張する者の方からも自己の主張に對する自由を要求するヿがある。固より徒らに進步の美名を冒して反對說をして口を箝せしむるのは自由思想の精神に反することであるから、論者の抗議も一應の道理があるが、然し是も亦實際上の問題として論議せらるべきヿで、事實上法律其他の權威で現制改革の議論は現制維持の論議よりも障碍を受けるヿが多いのであるから、官憲の庇護のみならず、多數民衆の贊同を受け易い保守論者から、反對說に對して自由を要求するヿは一種の詭辯を弄するものたるに過ぎない。斯樣な理由で私は思想對立の場合には其根柢に存する精神感情を尊重して殊に其進步側の自由を認めるヿを要求するものであるが、其採決をなすに當ては此場合にも亦依然人々の感情が大勢力を有するものであるヿを許容し、随て所謂新舊思想の對立を絕對に絕滅するヿは出來ない、といふヿを認めて置きたいのである。

此の如く思想の感情的對立を許すと共に、一方には此對立關係を出來るだけ合理的にする手段がなければならぬ、而して是は批評的精神の發揮を措いて他にないと思はれるのである。批評的精神の意義と必要とに就ては屢他の場合に於て說いたのであるから、今敢て絮說しないが、事物の價値を輕々に論斷しな

いといふことを以て其根本的特色とすることを得るであらう。然るに今日一方に於て此精神の欠乏と悪用とを見ることは、頗る奇怪であつて又遺憾な事と言はねばならぬ。聞く所によれば、近來高等教育を受けんとする學生の中には思想問題宗教問題等に興味を有するものが少なからず、而も彼等の中には是等問題に對して明確な答解を與ふる者を喜び、其權威に服從して安立を求めんとするものが多いと云ふ。思想問題等に興味を有し來れることは固より喜ぶべきことであり、又適切なる解決を求めるとは尤もな事であるが、然し此に憂慮すべきことは彼等が解決を求めるに急にして解決の價値を研究せんと欲せざることである。解決は固より問題提出者の要求する所であるが、然し眞の解決なるものは果して與へ得られるものであらうか。或は萬一解決が既に出來たとすれば其で其問題は一切片付いたのであらうか。私は所謂解決を說く者に對して既に多大の疑惑を挾むものであるが更に此解決を他から求めんとするものの陋と自己の解決を他に傳へんとする者の暴とを考へざるを得ない。人は自己の思想を整理して之を他に傳達する瞬間、既に其思想に就て滿足するを得ざるに至るものである。若し然らざるものがあり、常に得意の狀態にある者があれば、是會々自家の固陋を暴露するに他ならない。此の如き固定した思想も、之を以て思索の材料とすることは出來るが、之によつて自己の指導とすることは出來ないものである。況して青年學生の如き人々から此の如き狀態を要求することは其生氣潑溂たる精神と全然背馳するものと謂ふべきものであらう。固より其反對の極端に奔つて一切の言說を信ぜざるやうになれば、或は煩悶となり、或は冷淡となり、共に進步發展を阻害するに至るものであるが、一二の人士に一切の解決を望む如き態度は、獨斷固陋の風を養ふものとして殊に排斥しなければならぬ事である。研究し批評し、躊躇逡巡僅に數步を前進すれば又若干步を退くが如き態度は簡捷に事務を處理する上に於て實益に遠いこともあるが、之によつて事物を深奥に解釋することを得る途を開くものである、といふことは看過してはならぬ點である。而して此精神を以て所謂世界思潮に對すればこそ、之に順應して屈從せざることを得るものである。

然しながら所謂批評研究とは、普通に所謂採長補短とか、他國の思想を目前の事情に適合せしめるといふのではない、此の如きは往々にして自己從來の先入主たる偏見を以て新知識を是非することに歸するから、結局は獨斷的常識的な折衷に畢ることが多い。我々の此に批評といふのは、單に事物を深く理會し研

究し觀察する所から自から生ずるもので、輕々に是非長短を決定するとの謂ではない。是に於て普通に批評研究の惡用せられることのある場合を注意しなければならぬ。一新議論の提出せられる時、之に公然反對せざる者は必ず口を研究調査に藉つて之が實行を延期せんとする。此の如き意見の生ずるが爲には既に相當の研究と準備とを共して居るとすれば、直ちに其を材料として討論すればよい筈であるが、正面から之を敢てするを欲せざる者は必ず公平を裝つて此研究を標榜するものがある。所謂世界思潮の浸潤に對しても亦此防禦策が講ぜられることがあり、其表面の理屈に至つては間然する所がないが、其の根本の動機を質せば、所謂大丈夫らしからぬ所が含まれてあることを認めるのである。固より附和雷同を可とするのではない、平生研究してあるべきことを事の起る毎にまた研究せんとする態度を非とするのである。若し平生に研究がないといふのであるならば、是れ世界の事情に關する理會を怠るものといはねばならぬ。私は既に屢其の必要を說いた所であるから、今は此詳論に入らうと欲はない。

私は劈頭道德の勝利を唱へて頗る樂觀的口吻を洩らしたが、其の必しも實際に於て完全に行はれるものでないと說くことによ

つて、既に其の幻影の一部は破滅せられた觀がある。然して其破滅の最大原因は、結局世界の新機運に對する理會が、實際家のみならず、思想家の中に於ても不十分であることに歸するのである、といふことを想はざるを得ない。然しながら實際家の一部にも既に多少其計畫が討議せられ、騷壇また之を認むる者多きを加へたことに對しては、結局道德の勝利を唱へざるを得ない。而して之によつて私が常に唱道する文化主義の實現に一歩を向けたものと信ずるのである。

大阪財界消息

■大阪の工業會は工業界の智識階級の集團だから大正三年創立以來大隈寺内兩内閣時代にも隨分思ひ切つた建議書を提出し兎も角も政府をして採用せしむる丈けの一寸徹底した押强い遣口をするので大分其權威を認められてる■然る處大日本紡績聯合會で八時間勞働制が今や勞働問題の眼目點となつた形勢を早くも看取して除外主張を貫徹せしむべく武藤山治氏を資本家側委員として國際勞働大會へ簡派せしむべく名乘を揚げた■之より先き鐵工職工で仲間の人氣男たる堂前孫三郎氏を招待して八時間勞働制の研究をするやらで大分勞働問題の研究に理解を持ち出して來た大阪工業會では武藤氏を紡績聯合會から資本家側委員として選拔したのに少からず面喰つたようだそれは武藤氏は八時間勞働に絶對贊成の資本家でないからである■大阪工業會が八時間勞働制を可決する點にはかなり議論もあつたクラブ洗粉の中山太陽堂氏などは除外要求論者で大分働つたようだが少數意見として葬むられた位に同會には何だか新しがりの氣分が横溢してるのだ■そこで武藤氏を招いて所見を叩かうと云ふので招待狀を武藤氏に出した豪氣の武藤氏は工業會の請待を是れ幸と早速應諾した■武藤氏が工業會の幹部連に說破されるか或は反對に武藤氏の所見を工業會が認むるか會見の日武藤氏は大分大童になつて工業會の領袖連と火花を散らすやうた論戰を遣つた■武藤氏は先年來鐘紡中津支店で八時間制を實施して其適不適を研究して日本職工の未だ八時間制に堪え得ざる統計を作り上げてると云ふ用意の周到なセンセイだから工業會の片岡安、栗本勇之助兩氏以下幹部連總出揃ひで武藤氏に勞働問題に關する各種の難問題を持出して質問なか／＼劇しかつたが武藤氏の之に對する實際から割出した意見には傾聽すべきものが隨分多かつたそうだ■武藤氏は最も眞劍なる態度で若し今次の勞働會議に一步を誤らば日本は産業上に大損害を蒙らねばならぬ然るに日本の産業は今日未曾有の好景氣に眩惑され勞働問題を餘りに輕々しく取扱ふ憾みがあると說き來りて工業會の研究調査の程度を承はりたいと皮肉に出られた時には片岡淺村なんどの資本家としての經驗のない人達は一寸間誤ついたそうな■併し多數の職工を使つてる新田皮革や日高大電其外には小工場ながら其所有主たる栗本中山阪本安中なんど の連中もあり隨分忌憚なき反駁も皮肉も現はれたそうだ■併し日本の勞働者と外國勞働への能率は僅かに二と一の差がある、若し之を外國並に取扱つて勞働時間を短縮すれば日本は産業的に劣敗者たる事を覺悟せねばならぬと二十七名の工業會の中心人物を相手に八方睨みをしゝ武藤氏の武者振は見事なものであつたら■特に中山太陽堂君が武藤氏に質し日本職工の能率低く列國と對抗する能はずば國家の爲に今暫らく隱忍して機械も職工も俗に能率を發揮し得るやう準備と訓練の爲に除外例を要求するも可ならずやゝ八時間說を固守する工業會側の少數意見の代表者が現れたので工業會の態度は頗る亂れて來た■片岡氏が癪に觸つたやうな顏で日本職工の能率が劣るならナゼ高める工風をせぬか今日は現狀維持の時代でない若し貴下が資本 を代表せらるゝならば紡績以外の産業家とも代表する事を記憶されたい■資本家の團體たる大阪工業會の資本家らしからぬ態度武藤氏の自家主張を托げぬ言論ぶり近頃妙らしい語り草である。

経濟時評



凡ての價値は勞力が生む（マルクス）

關西勞資界の傾向

本社關西特置員　近藤泥牛

勞働者を優遇するの必要を資本家が自覺し、勞働者また仕事に對する責任を自覺し、双方が理解を有し、同情を有し、妥協調和を保ち、資本家に横暴なく、勞働者に我儘なく、相親相して双方それ〳〵に其立場を異にすとはいへ、産業の發展進歩なる同一の目的に向つて進むとゝなれば、是れ資本家と勞働者の妥協調和を遂げ得たるものとして少くとも勞働問題の一角面を解決し得たるものとして多少滿足なき能はずと雖も、而も是れ其一角一面のみ、其立體の全部にあらず、其平面の全面にあらず。

阪神地方に於ける資本家は其事業の經營に際し、利益の增進を圖る方法として勞働者に幾多の有利なる條件を提供し、所謂利を以て勞働者を釣り、彼等をして身體の續かん限り勤勉努力奮闘せしめ、勞働者を利すると俱にそれ以上比較すべからざるの率を以て資本家は巨利を占めつゝ、斯くて戰時は工業の旺盛其極に達し、以て休戰後と雖も其情勢は之を持続するに左程の困難を感ぜず、左れば阪神地方に於る勞働者の大部分は、資本家より其事業上より齎せる利益の幾分を配當せられつゝありしものにして、經濟學者社會政策家等の唱道する利益分配制は、其方式をこそ異にすれ其實質に於て略ぼ同一と認むべき程に實行せられ事業上の利益莫大なればなる程其從業員に對する利益分配は夥しく、割增、臨時、特別等諸種の名稱の下に分配を獲得したるなり、從つて彼等は何等の不平もなく、其分配の豫想以上に多大なるに滿足し、層倍の努力を以て層倍の能率を發揮し其仕上げは期日より早められ、其製品の出來榮も漸次認めらるに至りしなり、現に大阪商船の如き、大阪鐵工所の如き、川崎造船所の如き、其利益配當は紡績會社以外に見る能はざる高率を保ちつゝあるが、其莫大なる利益配當は從業員並に重役に其莫大なる賞與交際費等を割取したる殘餘利益の配當なり、故に三五割なる好配當を受くる株主と同樣に、勞働者一般使用人

に對する配當をもなしつゝあるなり。

○

然れども、人は物資のみにては滿足するものにあらず、旣に物資上の滿足を得たる勞働階級は、何等か物足らぬ空虛を感ず、是れぞ彼等の一大進境を示せるものにして、勞働者は物資の充實と倶に生活安定し更に進んで智識の慾求となり、人格の向上となるなり、物質的の滿足は延いて精神上の滿足を要求せざるべからざるに至れり、奴隸的屈從的廢殘的境遇に多年慣れたる彼等も、精神上の慾求崩すと倶に不合理なる壓迫より脫せざるべからざるを覺り、人格の自由を資本家に認識せしめんとするに至れるなり、近時大阪商船社長堀啓次郎氏、同副社長にして大阪鐵工所長たる山岡順太郎氏並に川崎造船所長松方幸次郎氏等、收益莫大なる大會社の經營者が其使用人（勞働階級を含む）を優遇するに到らざるなく、其利益の分配も多大なるとのよなり、而して是れ温情主義に基づくにあらず、使用せらるゝ人の正當の權利なり、與へらるゝは權利にして與ふるは會社の義務なり、與へらるゝ側は堂々として取得すべく、與ふる會社は職務に忠實勤勉なりし使用人に對する義務の履行に外ならずと說明せるが如き、有力なる資本家側に勞働に對する敬虔なる考量の生るゝに至りたるは、吾人の寧ろ意外に感ずる所なり、資本家の多くは未だ無識無智にして勞働者使用人を奴隸視し、威嚇を加へ、脅迫を試み勞働組合の組織を勞働階級の資本家に對する迫害なりと公言し、賃銀の値上げ、勞働時間の短縮は、勞働者側の二大目標にして、勞働組合の組織は此二大目的を達成せん爲め威力標示の團結なりと信じ、ソレ以外勞働階級の倫理的並に社會的向上進步なるものは如何なるもの乎、是等に對して全然無理解なり。

巨大なる收益ある大會社の利益の幾分を割きて、之を社會的に有効なる方面に使用すべしとの意見は之れなきに非ず、今日の株主は慾呆け揃ひなれば、會社の利益大なれば增配運動をなし、日本一の暴利會社たる日本郵船の大株主代表者が、曾て近藤社長に迫りて目的を達せし惡例は、延いて他の幾多會社に及び、之が爲に會社經營上の堅實なるべき基礎を破壞せられたるもの頗る多き程也、故に暴利會社の利益を社會的に分配せしめんとするには、豫め定欵に其條項を設定し置くか、或は國家の力を以て之を强制するか（利得稅其他稅制上の相當理由ある名目を以て）の外に手段方法のあるなし、然れども斯る方法の行はれんか、會社は其利益を隱蔽するの手段に決して遲疑ならさるべし、例へば財產面の切下を行ひ、或は機械償却積立金とか配當準備積立金とか、其他の名義を以て利益金を保留する等、其他幾多の方法を以て株主配當の減率を行ひ、以て利得稅の賦課を能ふ丈け小額ならしめんと企つなるべし、大阪亞鉛鑛業、大阪窯業、日本兵機諸會社の如き、戰時中何十割の配當をなせし成金會社も、一朝悲運に際會せば急轉直下奈落の底に沈み、會社

肉體が生死の巷に低迷しつゝある位なれば、株主の貪慾性も斯くなりては發揮しやうなく、大阪窯業の總會席上百四十四萬圓の缺損發表せらるゝや、殺伐なる氣分議場に漲り、慾張株主の咆哮して重役を罵る聲耳を聾せんばかりなりき、されば心事の醜陋なる株主を滿足せしめんが爲に、幾多の誤謬も罪惡も行はれ、基礎の薄弱を期せんより株主の滿足を買はざるべからず、

たゞ茲に一つの問題となるべき性質の所有者は大阪商船會社なり、彼は日本郵船と倶に國庫補給の下に事業を經營せるものなり、其航路補助金額の多寡は問題にあらず、苟くも國家の補給を受くる以上は、自然之に伴ふ社會的施設なかるべからず、利益多ければ隨ふて之を分配すると云ふは、一種の時代錯誤たらざるなきか、然れども以上は國庫補給に議論の基本を置ける純理論なり、其補給は實際に於て收支相償はざる航路に補助せられたるものにして、今や其航路が收支相償ひ若くは若干の利益を生むに至りたるにせよ、其航路に於ける會計上の安定を得る迄の會社の勞苦一通りならざりしことを無視する能はざるべし、此故に郵商船が何等顧慮するなく分配高の多きを誇るをは誤れる態度として非難するの是非は、尚議論の餘地あるべし。

○

一割二分配當の大阪電燈株式會社が、株式界に一流株として權威ある地歩を占むる點より云へば、一割二分は平和時代に於て好配當といはざるべからず、阪神地方は郊外電鐵の成功を以て聞ゆ、而も其配當は一割以下に過ぎず、それ以下八分の配當をなせる阪急電軌の如きすら物價騰貴に伴へる社員の増給臨時手當等行はれ、半期賞與も生活安定の必要を充たさん目的の下に支出せられつゝあり、即ち配當未だ經營者の理想率に達せず、利益分配の社會政策を實行する資格なき會社と雖も、實際に於て使用人に利益分配を行ひつゝあるの狀態なり、然れども事業の縮小若くは閉鎖に際し、勞働者の解雇に殘忍暴虐なる態度を採れるもの少なからず、又大阪の銀行家は勞働階級に對して些の同情心も理解も有せず、銀行家が、勞働階級に對して豺狼の心を以て沒情誼なる態度を憚らざることは、大阪造船所の職工勞銀仕拂の不能が銀行の無同情無關心なるに依れることの暴露せられたるに依りて明かなり、業務上の氣品高く文化智識の深き銀行家にすら勞働尊重の理解なし、況んや野獸性を帶べる滔々たる資本家に於てをや。

○

過日大阪市主催にて勞働懇談會開かれ、大阪市内外二百名以上職工使用の工場主及工場責任者五十八名の會合せるありしが日本の社會問題勞働問題の中心地にして其解決の端緒は少くとも此地に於て開かれざるべからざるに拘はらず、集まれる資本家側の無智無識無定見無理解は、傍聽者側に在りし勞働者側をして痛く失望せしめ、斯くては理論や情義や其他平和手段にて到底彼等を濟度し得ず、吾等は勞働權を提げて資本家に對抗的態度を採り、勇健なる突擊を試みざれば、彼等の迷夢を覺

ます能はずとまで思惟せしめたり、大會社經營の資本家が寧ろ異様に感ぜらるゝ位の理解を有せるに拘はらず、中小資本家階級の頑迷は想像外のものあり、例の物質的温情主義を抱持し比較的金錢待遇の良好なりし大阪電氣分銅株式會社に於て、手當制を日給本位制の增額に改め、以て生活上の安定を得んとの勞働者側の希望は、勞働者側の精神的物質的兩面の向上に改善の第一歩たるべきものと思惟されしも、會社は之に承諾を與へず、正々堂々たる陣容を張り、穩和靜肅なる態度を以て對抗せし勞働者側は、同盟罷業上の模範を天下に示したるも資本主を屈服せしむる能はず、幾百の職工は敗戰の末離散するの已むなきに至れり。此一例は一般勞働階級に痛く職業上不安の念を與へ、勞資協調者の理想を裏切ること特に甚しく、勞働資本は對等ならざれば、若くは勞働資本對抗ならざれば、今日の頑迷無理解なる資本家に當る能はざるの觀念を勞働階級に懐かしむるに至れり然れども之に依り一部の資本家は著しき覺醒を促され勞働階級の優遇を現實に行ひ、利益分配制定を明確に發表して勞資双方の協調を謀らんとせる會社もあり、一面に於て勞働時間の短縮は却て能率を增進せしむるものなりとの理解ある思想の下に、我國久しき間の慣習たる一日十五日の休日に代ふるに日曜休日を斷行せる住友伸銅所の如きあり、更に進んで八時間勞働制を實行せんとし、其方法の研究に取掛りたるもあり、四千人の職工を使用せる合同紡績會社が固定資本を休止せず、職工三分の一を增加して八時間制を採用せんとし、又日本亞鉛鍍金株式會社は、從來の勞働時間十時間を八時間短縮に決定し、增築工場の完成次第之を實行すべく、即ち晝夜二回の交代を晝夜三回交代制とし、之に依り製產能力の增加を期せり職工側もまた八時間制の我國工場に於る最初の試みに、必ず幾分幾割かの能率を增進せしめ、以て頑冥なる工場主の蒙を開き勞働階級豫ての理想の一部を首尾能く達成せしめんと意氣込みつゝあり、勞働者側に之れ丈けの理解あることを、日夕彼等と接近しつゝある資本主側が知り得ずとは抑も何たる無自覺ぞ、此一事を以て徴するも勞資双方間に精神上何等の親和なきこと瞭かなり、絕緣用特別高壓碍子並にS、C、P化學用磁器の松風工業、カーチス、タービーの川崎造船、K、S印住友型銅の住友伸銅所等が、斯る世界的優秀品を製出して我產業界に優越せる名譽ある地步を占むるの理由は如何。精神的理解に依る職工の工業製作が最優良品を製出するの原則と何等相關する所なしと云ふを得ざる也。

經濟時評

■東洋製鐵の建株

東京株式取引所は、東洋製鐵會社株式（總株數八十萬株、一株に付三十七圓五十錢四分の三拂込濟）を同所の定期建株たらしむ可く目下之が手續中なるが、東洋製鐵は休戰と同時に鐵價大暴落の痛手を蒙りたるも、其後漸次市場の復活と共に、市場難に際し、同社の製品は北海製鐵一號品に降らざる優良品なると、價格の格安なる點に於て、一般に氣受けよく加ふるに本年末迄若しくば來春早々三百噸熔鑛爐の据付を完成す可く、隨つて其出銑量も漸次増大す可きにより、同社株式定期上市の曉は、其活躍目覺しきものある可く一般に期待され居れり。而して同社建株の期限は來る十一月二十八日也。

■京濱土地の前途

大正七年二月中資本金百萬圓を以て創立せる京濱土地株式會社は、歐洲戰亂の影響を享けて土地は著しき騰貴を來たし、土地の買收容易ならざる而已ならず、建築諸材料暴騰の結果は貸家建築に非常なる不利を來たし第一期に於ける事業は悉く失敗に終れり、即ち昨年四月に買入れたる府下大崎町の宅地二千八百坪は之を他に轉賣して多少の利益を見たるも、翌五月に買入れたる大森町の宅地一千八百坪、同年十二月に買入れたる牛込富久町の宅地三千九百坪は、建築材料騰貴の爲め何れも其儘に抛棄されてある。隨て同社が創立當初に發明せる三割強の配當目論見は全然畫餅に歸し、殊に本年上半期の決算を未だに爲さざるに加へて、過般突如として監査役中川三郎氏の辭任申出であり旁同社の内情は著しく懸念すべきものが存するが、同社當事者は大戰も終了し漸次物價も下落步調を辿つて居る故に、次期には富久町の土地へ貸家數十戸を建築して相當の利益を擧ぐる豫定であるから其前途は敢て悲觀するに及ばぬと聲明して居る、果して聲明通りに行くや否や、暫く其成行きを觀察することとする。

■多摩川水電進捗

目下創立計畫中なる多摩川水力電氣株式會社（資本金一千萬圓四分の一拂込）は、既に其許可願書は東京府に提出し府は更に内務省に申請中である、同社は第一期に於て古里村棚澤より三田村に至る工場を完成して、二千三百餘基ワットの馬力を出し、第二期工事は氷川より棚澤まで、第三期工事は北河内村より氷川に至る迄の工事を完成し、總馬力一萬四千九百餘馬力を出さんとするの計劃である、而して同社は第一發電所たる三田村より烏山に送電し此處より各需要家に供電せんとするものであるが一基ワット一ヶ年間百十圓の計算として、其第一期には一ヶ年の純益十五萬圓を擧げ五分の株主配當を行ひ、第二期以後は優に八分以上の配當を行ふ豫定である、故に事業の前途は可成りに有望視されて居る。然るに東京市會は例の鬼怒川水電の關係から同社の此計畫に反對氣勢を示して居るが、一方内務省も鐵道院も許可方針の意嚮を漏して居るから不日許可されるものと見て佳いであらう。而して同社は指令あり次第直ちに正式に準備を進め總株二十萬株中一割乃至一割五分を一般公募に附する方針なりといふ。

■銀行會社合同と課税

銀行會社の合同集中は休戰以來一種の流行なるかの觀を呈し來たりたるが。今後益々頻繁なる可き形勢なるに鑑み大藏省に於ては、豫てより銀行の合同に當り在來障害視され居れる通知催告、

及び登記手續の簡便並に積立金の性質に關し調査研究中なりしが、今回前記兩問題は法律の解釋に依り解決し得るを以て別に新規の方策を必要とせざれども、積立金に對しては之を新會社の利益として課税するを相當とするか、然らずとして免税す可きかに對して議論ありしが、積立金は舊會社に於て利益金として一度び課税されたるものなれば、之を合同の際新會社の利益金として課税するは妥當ならずとの解釋に決したれば結局課税せざる事に決定發表ある可し。

■東京信託增資計劃

本年上半期に於ける業績良好なりし結果前期より一分增加の年八分の配當を爲せる同社は、財界の好況と相俟つて其主要事業たる貸附金の如きも益需要增加の傾向にあり仍つて同社は現在資本金百五十萬圓を一躍五百萬圓に增資するの案を樹て既に臨時總會の承認を得たれば、新株七萬株中の六萬株を本年十月末日現在の株主に對し舊一株に付新二株を割當て殘餘の一萬株の募集方法は取締役會に於て決定する事になつて居る、而して重役は目下之が方法に就き考慮中であるが、成可く緣故募集を迎る意嚮らしく、或は其中の幾割かを割愛して一般公募に附するやも知れず、右增資計畫は本年下半期末迄に實現せしめ來る十二月の上半期より大活動を開始する豫定なる由、その結果は多少注目に値ひするものがあらう。

■不成立が反て幸福

豫て創立計畫中であつた石油乳劑石鹼株式會社は、前衞生試驗所技師本橋善之助氏の有する專賣特許權及之に附帶する事業の一切を買收繼承して、石油乳劑並に粉末石鹼の製造販賣を營む方針であつたが、其後當事者間に意見の相違を來たし今日では不成立に終る可き形勢である、蓋か元來同社は米價の騰貴に鑑み殊に政府の調節米が兎角姑息的なるに感じ、此際有力なる殺蟲劑を製造し以て年々之が蟲害に依る六百萬石の減收を豫防するに若かずと做し本企劃を目論見たのであるが、計劃が進むに從つて種々の稻虫殺虫劑のある事が判明し、殊に寶田石油會社の製劑は越後川沿岸にて顯著なる成績を擧げ居れる爲め、假りに本劑を製出するも從來慣用し來つた各種の殺虫劑に比して果して販價に提供し得るや否やと云ふ疑問が生ずるに至つた、其結果總株式二萬株中一萬五千株は東京側にて引受け五千株は大阪方面で引受く可しとの當初の計劃が動搖し、利に聰い大阪側は當分形勢觀望とあつて創立事務所の看板を撤して了つたので、東京側の計畫にも頓挫を來し前途成立至難に陷つたのである、之は要するに周圍の事情を能く調査もせずに企劃した無暴の結果であつて創立總會を開くに至らずして中止となつたのは、經濟界の爲め欣ぶ可きことである。

■中華紡織近狀

揭題株式會社は目下名古屋市外枇杷島に買入れたる敷地二萬五千坪の整理及び埋立工事中なるが、機械は既に米國へ錘二萬五千錘は注文濟みにて、明年五月到着の豫定なるが其他織機三百台は最近内地工場に注文す可く目下調査中なり。

■山下炭礦出炭額

山下炭礦會社は最近約七十萬圓にて福岡縣中津原炭山（七十餘萬坪）を買收したるが、同山一日の出炭量は平均百五十噸にして年額約五萬噸を超ゆる筈なるが、之にて同社の出炭年額は百餘萬噸を算するに至れり其所屬山炭別を示せば左の如し

△北部炭山部四箇所（奔別）（歌志内）（新歌志内）（奈井江）約五十餘萬噸△福島炭坑廿五萬餘噸△九州宮尾十二萬噸△九州大谷十五萬噸△九州中津原五萬噸△合計百七萬餘噸

日本社會主義運動史

山口孤劍

三十八年前の東洋社會黨

近頃、白髪の老人が、麹町八丁目に社會主義者として知られてゐる堺利彦を訪ね、其の懐から『銀行國有論』の原稿を出し、之れを堺の知れる雜誌か新聞に公にせんことを依頼した。此の白髪の老人は今から三十八年前、即ち明治十五年に於て天草四郎の名に於て記憶される肥前島原で東洋社會黨を起した樽井藤吉其の人であつた。

東洋社會黨とは如何なるものか其の綱領は示して曰く

第一章　我黨は道德を以て言行の規準とす

第二章　我黨は平等を以て主義となす

第三章　我黨は社會公衆の最大福利を以て目的とす

と書いてあるが、社會黨の根本理想たる土地資本其の他生產機關の私有を禁ずることは入れてない。而して其の手段は演說に依りて四方に奔走し、又平易なる和文、漢文の雜誌を作つて之れを朝鮮、支那にも及ぼさんとしたのだが、東洋社會黨は未だ活動するに至らずして社會の安寧秩序を紊亂するものとして禁止された。

樽井は大和の人で、材木屋の主人であつた。而も彼は[illegible]を積んで自ら滿足せんとするものでなかつた。天下の憂に先つて憂ふるの心を以て、經國濟民の事に任ぜんとし、自ら案出したる社會政策を以て時の宰相岩倉公に進言して、容れられなかつ

た、其後奈良縣より代議士となり、一時鐵道國有論を呼號したこともあつたが、社會問題に對する知識の貧しい當時は時流に挺然たる卓見も一笑に附せられて、眼高手低の誚を買つて、空しく世路の窮途に老いた。

東京の車界黨と地方の借金黨

明治十六年、鐵道馬車廢止を目的として都下の人力車夫を糾合せんとする『車界黨』といふ一派が起つた。之れは鐵道馬車の布設に依りて其の職を奪はれんとする人力車夫が當の敵たる馬車鐵道會社に當らんとしたものであつたが、而も亦、世の中の富豪、分けて三菱の如き、富の壓制を國民に加へんとする金權者流に一泡吹かせんとしたもので、三菱を改進黨の金庫として敵視した自由黨の靑年に依りて起された。奧宮健之、植木枝盛栗原亮一などは其の中堅と目せられ、神田明神に數千人の車夫を集めて、運動の火の手を揚げた。

其の頃から海内の人氣險惡であつた。加波事件の暴徒が刑せられ、愛知事件の連累者が捕縛された、明治十七年の秋から多にかけては、危險思想は地方農村に流布してゐた。

▲山梨縣北巨摩郡六山、中田、駒井、各村の小作人、收穫三分割引を要求すべく、山上に篝火を焚き、早鐘を撞きて人を集め、地主に強談す

▲大和國宇知郡野原村の小作人、同村天神の森に集り、穩かならざる風見えしより五條警察署より警官を急派して解散せしむ。

▲豆州田方郡の借金黨、遠州一圓の借金黨連署して銀行の借金又は借金支拂の延期を强請し、銀行業者を困惑せしむ。

▲越後西蒲原郡地藏町の小作人相集まり、土地の大根畑を荒らし、地主をして小作米の二分輕減を實行せしむ。

之れは當時の新聞に散見する記事であるが殊に此の內でも借金黨と稱する恐喝團は、日本各地の農村を惱して、遂に其の歸する處、德川時代より長脇差の巣窟として、尤も難治とされてゐた秩父地方の農民土地の俠客田代榮助、井上傳藏を首領として高利貸征伐、地租輕減を名として一揆を起し、大宮警察を占領し、富豪、素封家の家を燒き兇暴當るべからずして、遂に東京鎭臺步兵一大隊をして之れを鎭壓せしめねばならなかつた。

民友社は社會主義の發祥地

此の秩父暴動の背後には、大阪事件の大井馬城が潛在して、首領井上傳藏などは自由黨に籍を置いた。又、大阪事件に繫喩的の力士を以て待たれたる氏家直國は、暴徒と大井の間を往來

した信使であつた。

當時自由黨の首領板垣伯の思想は、階級的意識に於ていかなる内容を有してゐたか知らないが、已に一代華族論を唱へて、又、洋行歸朝後、大に貧富の懸隔を痛嘆したので、『板垣伯は社會黨化せり』として、自由黨中の地主連、富豪連に眉をひそめしめたものであつた。

併し自由黨の機關新聞は、西洋の事情を報道するうちに、露國に於ける革命運動は多大の興味を以て讀者を喚び、知らず識らず『社會黨』『虚無黨』の名は、日本人の幼き頭腦に印象された。

德富蘇峰の『國民の友』は明治二十年二月初めて發行されたものであつたが、此の雜誌は當時に於て海外思想紹介の唯一の代表者とされてゐた。而して此の雜誌の上に於ては佛蘭西學者として、中江兆民の門下生として曾つて民權論に於て、官僚學者都築馨六と抗爭したる酒井雄三郎の『社會問題』『五月一日の社會黨』等の文字は、歐洲に於ける社會主義の内容、運動等の知識を供給するに充分であつた。而して

國家社會主義の行はるゝは、民主社會主義を鎭壓する所以に非ずして個々眞の努力を助長する機會を與ふること、之れを獨逸の近狀に照らして之れを上述記述する處に徴して、明白疑を容れずとせば、民主社會主義何んぞ我國 起るの日なしとせんや。

三十年前の酒井の豫言今日に於て眞に首肯せしむるものがある。酒井は後、早稻田專門學校の講師となり、佛蘭西に遊んで狂を發し、階上より街路に墜落して死んだ。中江兆民の遺鉢を繼ぐべき民本主義の好學者は、壯齡有爲の才をもたらして異域に死んだ。

社會主義の著者司法大臣秘書官

『國民の友』は、サンシモンを論じ、ヘンリージヨーヂを論じ社會問題の興味を國民に普及するに力めたが、此の雜誌に筆を執り民友社の新進論者山路愛山は後年、中村太八郎等と國家社會主義を組織するの人となつた。『現時の社會主義』を著はした人見市太郎は後、後藤男に愛せられ、男の口添へにて神戸の鈴木商店に入り、歸朝後同店の幹部となり、今は福岡縣大里に製粉所所長を勤めてゐる。又、『最暗黑の東京』を著はして、貧民研究家として名を知られし乾坤一布衣、松原二十三階堂は、長く博文館の女學世界の編輯主任として、傍ら貨殖の道に耽り、今は本郷林町で立派な大家樣となつてゐる。嗚呼人間の運命—

思はざる後半生を送らしめるものであるが、兎に角、民友社の編輯局が、勞働者に同情のある熱心な社會問題の研究者の多かつたのは事實である。

而して奇なる因緣ともいふべきは民友社の『現時の社會主義』は幸德秋水、西川光次郎に初めて社會主義のいろはを敎へたものであつた。

其の頃から社會問題、社會主義に對する論文が、ちらほら政治雜誌に現はれるやうなことがあつた。立憲自由黨の機關新聞『自由』に、大道和一（情死の研究の著者、京都日之出新聞主筆）は『社會主義』といふ一文を書いた。『自由』の主筆小松三省はヘンリージョーヂの『社會問題』を飜譯して一書をなした。又、博文館からは森山信規といふ人が『新舊社會主義』といふ本を出した。慶應義塾の卒業生で、後、神奈川の代議士として、司法大臣の秘書官となつた福井準造は『近世社會主義』の大冊を公刊した。

社會問題研究會の品川子

明治三十年、社會問題研究會が生れた。其の會員の中には信州の素封家で、普通選擧運動に家産を蕩盡し、其の名前の自由黨の志士中村八太郎と紛はしきより、常に狼狽者の官憲に同一人と間違へられて其の後を附けられた中村太八郎、前記東洋社會黨の開祖樽井藤吉、自由黨の辯士として、三菱征伐時代に懸河の雄辯を揮つて海內を遊說した西村玄道が其の幹事で、獨逸公使としてビスマークの國家社會主義を學び、其の門下生、平田東助に信用組合を調査せしめ、又、富豪の橫暴を憤つて、三菱征伐の先驅となつた、品川彌次郎を筆頭に、三宅雪嶺、陸羯南、高橋五郎、中井錦城、石川半山、松村介石、根本正、和田垣謙三等は其の會員で、後藤伯の秘書として、ヘンリージョーヂの『進步と貧困』を飜譯せんとした安岡雄吉、自由貿易論を以て而も尙ほ土地國有論を信じてゐた田口卯吉などの學者があつた。

併し之等の會員の中、尤も社會問題の知識に富めるものは往年『國民の友』に大に社會主義を論じたる酒井雄三郎、幕府の遺臣として秀英舍の社主として、東京印刷業者の牛耳を執り、而も其の江戶つ子俠骨、好んで人の急に赴き難に投ずるの美點に富みし佐久間貞一と、其れから小島龍太郎と片山潛であつた。

小島龍太郎は中江兆民、西園寺侯、光妙寺三郎と其の名を齊うして、佛蘭西歸りのハイカラで佛蘭西の趣味と知識を齎び、

共に巴里の花月郷に風流を競つた才子であつた。彼は歸朝後、西園寺侯等と官途に就き農商務省や、衆議院に書記官であつたこともあるが山林自由の氣を喜びて卑闇の煩に堪えざる彼は職を辭して浪人となつた。そして藝者上りの細君にやらせてゐる赤坂の待合花月の主人として數年前病死した。元來閑雲野鶴の飄逸を愛して名利を厭へる彼は、其の死ぬる時にも遺言して二三の友人にしか、其の死亡通知を出させなかつた。併し社會主義に對する熱心はあつたので。往年幸德秋水、堺利彦が平民新聞を發行する時、其の資金を融通したものは彼であつ。

片山潛と單税太郎ガルスト

片山潛は何人ぞや

彼は美作の人で、若くして米國に渡り、苦學力行してエール大學を卒業し、年不惑に近からんとして日本に歸つた人である。五分刈の頭、薄痘痕の顏、短い髯、古い背廣に頑丈な體格、見るからに勞働者上り質朴粗野の風は蔽はんとして蔽ふ能はず、其の鐵のやうな意思で、自己の運命を斬り開いた「強い人」といふ印象は深く人の胸に刻まれる。

彼は世のハイカラ歸朝者と異つて、西洋文明的方面を謳歌する人ではなかつた。海外に於ける十數年苦の艱難に憤慨の涙を絞つた彼は、日本に歸つた時は社會主義の信者であつた。彼は勞働期成同盟會を起して、勞働組合の糾合を圖り、神田三崎町にキングスレー館を開いて社會主義的思想の布及に力めた。

彼が社會主義者として社會問題研究會に其の籍を置いたのは大に異彩を放つたもので、彼は勞働懇和會の席上に於て、金井博士、桑田博士を向ふに廻はして資本勞働調和論を痛撃し、勞働者の爲めに萬丈の氣焔を吐いた。

尚ほ社會問題研究會に異彩を放つた人があつた。其れは米國の宣教師ガルストであつた、彼は浸禮を正式とする基督教會の宣教師（宮崎湖處子、青柳有美は此の派の牧師であつたで、道を傳へる爲めに米國の傳道會社から日本に派遣されたが、基督教の傳道はお留守にして、ヘンリージョーヂの單税主義を高唱し、此の傳道をのみ專門にし、自ら單税太郎と唱へて、東奔西走に寧日がなかつた、すると本國の傳道會社が其聯職を絶つて送金をさしとめると、彼はパンと水のみに乞食のやうな生活し早稲田專門學校の前などに立つてボロ〳〵の洋服姿、片言まじりの日本語で、單税主義の説教をしたものであつた。後年社會黨のチャンピオンとして勞働者渇仰の中心であつた。西川光次

郎などは、當時早稻田の生徒で、此の學校前の乞食姿の單税太郎ガルストの演説に動かされたものであつたと。

五千四百人の鐵工組合

社會問題に對する知識慾の滿足が學者階級を動かさんとしてゐる時一方に學説の唱道のみに甘心せざる實際的運動は現はれた。

大阪事件の小林樟雄が『勞働者保護』の一項を自由黨の綱領に收むべしと叫んでより以來、星亨との權力の爭奪に失敗して、政界に意を得ざる大井馬城は日本勞働協會を起し、普通選擧期成同盟會を起し、共に其の會頭となつた。此の二つの團體に共に主任として大井を輔佐し、社會運動の戰場に勇ましき戰闘をつゞけたものは鰕洲抑內義之進であつた。彼は札幌農學校の出身で、西洋の知識をも解し、文章にも巧であつた。後、大井の大阪に移り、滿洲に去り勞働運動の手を引くや、彼も大井と別れて、やまと新聞に入り、宮崎新聞に轉じ、遂に九州の片田舍に老いた。

日清戰後、戰爭に依りて暴富をなしたる資本家の膨脹よりは物價の騰貴となり、生活費の增加となり、資本、勞働の反目漸く大ならんとして、日本鐵道に、王子製紙に、白河製糸に、上州製糸に、深川活版に、佐賀煙草に、ストライキの頻々として勃發するや、勞働運動の烽火は所在に起つた。

横濱なる外紙アドヴアタイザーの記者高野房太郎（法科大學教授高野岩三郎の兄で、日露戰後大連で死んだ）の職工義友會は起つた。高野を股肱として片山潜の勞働者期成同盟會は起つた。島田三郎、佐久間貞一等は之等の團體の顧問格で、此の有力なる紳士を後援として鐵工組合は組織され、鐵道工場に、造船所に、其の勢力を扶殖して、明治三十三年には四十二個の支部を以て、五千四百の組合員を抱容する程であつた。

此の鐵工組合に、高野、片山の勢力は大を爲すや、更らに活版工組合の發達を促して、勞働者の奮起は自己の立場に鋭敏なる感覺を有つに至つた。

社會主義を止めた名士

所在勞働運動の勃興は、社會の人心をして、社會問題研究會に滿足せしむることは出來なかつた。而して社會問題研究會は社會主義研究會となつて、芝三田四國町の統一教會を本部とすること〻なつた。

『社會主義の原理と、それを日本に應用するの可否を考究す』といふ目的を以て作られたる社會主義研究會は、左のやうな會員を以て網羅された。

河上清、豐崎善之助、岸本能武太、神田佐一郎、佐治實然、金子喜一、村井知至、安部磯雄、片山潜、幸德秋水、杉村楚人冠、木下尚江、中村太八郎、

河上清は青山學院の卒業生で河上翠陵の名に依りて、赤新聞時代の萬朝報には椽大の筆を揮つて縱橫に社會問題を論じた年少論客で彼の未來は社會主義の戰士を以て待たれたが、故近衞氏、後藤男、ユニテリアン、オーソドックスなど掻き集めの寄附金にて、米國に行つてからは社會主義者も遂に帝國主義者に宗旨換へをしたやうで、社會主義の社の字もいはず、今は米國婦人と結婚して、何とかいふ外字新聞の社長として納つてゐるといふ。其れにしても彼が昔翻譯して、田島博士の著書に收めた、イリー博士の譯本が『近世社會主義論』、田島博士譯で、社會主義流行の當節引き眉毛の二度の勤め、譯者と出版業者の德義問題を起させたなどは世の中は面妖なものである。

豐崎善之助は、關西學院の卒業生で、松村介石の腰巾着で、耶蘇教界でも新知識を以て知られてゐた。彼が村井知至の名に、依つて公にした『社會主義』といふ小冊子は社會主義の傳道用として多くの社會主義者を製造したものであつたが、彼は英國留學より歸朝するや、社會主義反對論を統一教會にて講演し、社會主義を止めて、自由競爭を金科玉條とする、マンチヤスターの學徒たることを告白した。彼は其の後統一教會を去り、日佛銀行の秘書となり、宇宙を統一する神樣に反して、黄白の光まばゆき錢神に仕へてゐる。

社會學者として、社會學の著書さへある岸本能武太は、河上清が土地制度、豐崎善之助がプルードンを講演したやうに統一教會の講壇から、サンシモンを講演して、社會主義を讃美したが、之れも一寸の浮氣であつた、何時の間にやら社會主義と別れ、著書の印税に貯金の増加靜座法の研究、布袋樣のやうな腹をして、小石川藤阪の家に無病息災を喜んでゐる。

コハゼ賣りならぬ賣談僧

同じく社會主義研究會に好んで市政を論じたる佐治實然は、もと播州邊の眞宗寺の坊さんで、本願寺でも一かどの知識あつたが、ユニテリアンに身賣りして、コハゼ賣りならぬ說教師となつた。其後は麻布の區會議員、市會議員で、宗教と政治を兩

股にかけ、おまけに高利貸を内職にして、財産をこしらへた還俗僧である。一時社會主義運動勃興の時、貧しい勞働者迄尚ほ財嚢を傾けて平民社の同志を助けたが、彼は巨萬の富を擁し、平民社の會計顧問でありながら、一錢の金錢も此の運動に投じなかつた。そして華族の娘を養女にして、頻りに利子の勘定にのみ耽つてゐた。其後社會主義の人氣の惡い時は見向きもせぬ癖に、近頃社會主義の景氣がよいと、のこ〳〵しやあと罷り出て『將來社會主義の内閣が出來たなら、我輩は内務大臣位にはなれさうだ』と反りかへる處は虫のよいにも程がある。

佐治の相棒として其の貨殖の技倆には佐治と難兄難弟の神田佐一郎は社會主義研究會會員でも社會主義もへちまもあつたものではない、頗る非社會主義的な性質で後、統一教會の金錢問題で佐治と喧嘩し、二人ながら教會を去つた。

金子喜一は十年前、米國から歸朝して、沼津の病院で亡くなつたが、彼れは河上清の譯したイリーの原本を讀み、初めて社會主義の信者となつた。彼は一面文學者で、彼れには人の涙を誘ふべき失戀的悲劇がある。彼が米國で結婚した夫人は、社會主義の新聞に詩を書いてゐた金髮の女詩人である。

村井知至は社會主義の演説には熱烈な辯舌を揮つた人であつたが社會主義者としての看板を出すことが、一家の生活に不便な爲めか、彼の名を以て公刊した(實は豐島善之助が書いた)社會主義の本は世上に流行してゐるにも拘はらず、彼は社會主義の運動から引退し、罪のない英語の先生で、謠曲を道樂に頭髮の白きを添へた。

安部磯雄と木下尚江

社會主義研究會時代から今日迄社會主義者として一貫してゐるのは安部磯雄である。

丸刈の頭にふくよかなる肉の頬、一目眇して、平忠盛か、伊達政宗でも見るやうに、何時でも背廣服一枚で押し通す彼は、元來組合教會の牧師で京都の同志社の教師であつたが、新神學を信じてユニテリアンの人となつた。彼がトルストイ主義の無抵抗論者であることは久しいもので、明治二十七年の日清戰爭の時でさへ、彼は岡山の牧師として非戰論を唱道した。彼は長く早稻田の先生でベースボール以外に何の道樂もない、詩を解せず歌を解せず、極く散文式の人であるが、市政問題に通じて都市社會主義の知識に於ては注目すべき一人である。

當時幸徳秋水は萬朝報の記者であつたが、社會問題の論文を

公にして村井、片山の二人に知られ、二人の勸誘に依りて社會主義研究會に入會したものであつた。

此の會に將來文壇に雄飛すべき二人の天才が潜んでゐた。其れは木下尚江と、杉村楚人冠であつた。二人は後『いかにして社會主義者になつた乎』といふ疑問に答へて、之れを平民新聞の紙上に語つた。木下は曰く

余は初め少しく法律を學びたり、而して全く之れを信じたり、既にして法律權威の淵源に向つて懸念湧出するものあり。偶然にも從來厭嫌せる耶蘇教を通して「神」てふ思想を得るに至り、一段の安慰を得たりし也。斯くて余は四海同胞主義の熱心なる信者となりしも、生存競爭の地上の劇は、神學の解釋すべき處に非ず。天地の矛盾は新に發見せられて心中の煩悶殆んど名狀すべからざりしものありき。之れを慰藉したるものは、即ち社會主義の經濟論也。斯くて後顧みて耶蘇を繙けば、一切の疑問は基督の人格中に溶解せられ、其の言論行動の中悉く説明せられつゝあるを見、愕然として驚き、欣然として喜べり故に余の信仰は「基督教共産主義」にして「共産主義的基督教」なり。

杉村は之れを説明して

僕が三才、母が二十三才の時、僕は父を失つた。其の以後二十幾年といふものは、天にも地にも僕と母と唯二人きりで世を經つて來たが、其の間に受けた世間の虐待、親類縁者の輕蔑、其の他さま〴〵の背徳が僕をして早くから社會の○○○○○ましむるに至つたのである、處が二十三才の秋になつて今の北米南デコタ大學總長となつたドロウパース教授の○○○○の講義を聽くに及んで、僕は○○○○○○○○○○な事もあるかと感じたのが、そも〳〵○○○○○○○○するに至つた因縁である。

二人ながら其の社會主義者になつた意氣込みは、壯烈なものであつたが、今はどちらも社會主義から絶縁した。

社會民主黨禁止さる

社會主義研究會の發達は遂に、明治三十四年、社會民主黨は創立された。而して其の發企人として、之れに與つたものは、安部磯雄、木下尚江、河上清、幸德秋水、片山潜、西川光二郎の人々であつた。

我等は茲に多數人民の休戚を負ふて生れたり。然れども貧民を庇ふて富者を敵とするが如き狹量なるものに非ず。而して其の志す處は我が國の富强を謀るにあれども、然も外國の利益を犧牲に供して顧みざるが如き唯我的のものに非ず。若し直截に其の抱負をいへば、我等は世界の大勢に鑑み、經濟の趨勢を察し、純然たる○○○○と○○○に

依り、〇〇の〇〇を打破して、全世界に平和〇〇〇〇〇を得せしめんとするにあり。

とし、尚ほ其の實際運動の綱領として

一、獨占的事業を市有とすること
一、高等小學卒業迄を義務年限とし、其の費用を公費とすること
一、勞働局を設置して勞働に關する一切の事務を調査せしむること
一、日曜日の勞働を廢し、日日の勞働時間を八時間に制限すること
一、普通選擧法を實行すること
一、公民選擧法を採用すること
一、死刑を全廢すること
一、貴族院を廢止すること
一、治安警察法を廢止すること
一、新聞紙條例を廢止すること

之れを今日より見れば詭激、兇激、社會の秩序を紊亂する亂臣賊子の言とする程のものではなかつたが、其の內務大臣の末松謙澄子の英國がへりの、西洋文明の知識に乏しからざる人を以て尙ほ此の社會民主黨は其の宣言を發布した日に於て禁止され、日本に於ける社會黨の誕生は遂に流産に了つたのだ。

社會主義協會の幹事

よし政府の一蹴に社會民主黨を禁止しても、源泉滾々として晝夜を舍てず、海內に磅礴瀰漫せんとする社會主義の思潮は、遂に其の團體を作らねばならなかつた。此處に政社の組織を斷念して社會主義協會といふ。社會主義者の團體は生れた。此の團體の會長は安部磯雄で、幹事たるは西川光二郎と、齋藤兼次郎の二人であつた。

西川光二郎は淡路の人、札幌農學校より早稻田專門學校に學び小山田劍南、倉辻白蛇、井上雅二などゝ同窓であつた。彼は學校を出でゝ、阪井犀水、安孫子貞次郎等と內村鑑三の東京獨立雜誌に筆を執り、後、社會主義の運動に投じた。彼は社會主義者となつた動機を語つた。

札幌農學校に社會主義を口にする二三の學生ありしが、余は彼等の口から始めて此の語を聞きし時、電氣に打たれしものゝ如くなり。余の滿身の好奇心は凡て此の語に集注するかの如くなりしかば、彼等の一人に向つて社會主義に關する書物なきかを聞き、民友社出版の「現時の社會主義」を借りて熱心に愛讀し、次いで博文館發行の森山信規譯の「新社會主義」を熟讀したり。二書の余を益せしこと決して少なか

らざりき今にして思へば民友社と博文館が余を社會主義者たらしむるの最初の手引きとなれるは奇といふべし。新渡戸稻造氏は農學校の教授なりしが、先生は社會主義に趣味ある人なるより、時々斷片社會主義のことを語り余を益せられたり。

齋藤兼二郎は舊小笠原侯の御家人の子に生れ、青年時代、憲兵を勤めたこともあるが、官を辭して金椎職を渡世とし、任俠氣を負ふた江戸つ子として、好示多讀の珍らしい職人として知られてゐた。年壯にして滿頭禿し、身幹雄大、堂々たる風采を有してゐる、社會黨中の名物男である。

流を趁ふて舟を行る

社會主義協會の本部は神田三崎町の片山潛の家にあつた。片山潛は雜誌『勞働世界』(後社會主義と改稱)を發行して、社會主義者の機關とし、西川は此の雜誌に筆を執つた。

片山は筆に、口に、手に、足に社會主義の傳道に寧日なく、西川及び松崎源吉(薩摩の人にして米國に學び、濃飛孤兒院の事務員であつた)と共に關西を遊說した。當時大分の新聞記者であつた今日官僚系の代議士で先月迄二六新聞の社長であつた兒玉篤南などは、片山、西川の遊說を迎へて大に盡力したものであつた。兒玉は當時社會主義者を以て自任し、日露戰爭には『社會主義者としての開戰論』といふ演說をさへしたことがある。

當時、板垣伯は煮え切らぬながら、社會改良を叫んでゐる。大井馬城は資本勞働調和の古い奴でも尙ほ勞働問題を論じてゐる。矢野文雄は『經國美談』に昔とつた筆鋒を磨して『新社會』の一書を作り、社會主義實行後の、幸福平和なる理想郷を描寫し、自ら門下生田川大吉郎等と社會問題講究會を起し、社會問題の趣味と智識を供給してゐる。此の時、紛々たる調和論、妥協論より、徹底的にして、直截簡明、之れを聽いて人心を快にする社會主義は、天下の人心を捉ふるに餘りあつた。されば片山、西川等の社會主義の演說會は到る處に成功した。

況んや、當時人心を刺戟し、人心を躍らす社會問題は、政治問題以外一世を鼎沸した。二六新聞は富豪三井の奸惡を擊ち、岩谷天狗の不義を詰り、女奴を解放せよと叫んで自由廢業で吉原遊廓と戰ふてゐる。萬朝報や、毎日新聞は馬蹄銀事件に武人愛錢の醜を暴露し足尾鑛毒問題に、政權と金權の握手提携を攻擊してゐる。一代を舉げて鑛毒問題を叫んで起ち、帝都の學生は大舉して鑛毒を視察する。文部省が憂慮して學生の身を以て

此の種の運動に與るべからずとして、鑛毒視察を禁止したのは此の時代である。明治天皇、帝國議會開院式還幸の途次、前代議士田中正造が封書を右手に捧げ、車駕を擁して直訴せんとして捕へられたのも此の時代である。東京地方裁判所及び區裁判所の判検事六十五名が、貴族院にて復活されたる司法官增俸費目が、兩院協議會にて削除されたるを憤つて同盟辭職したのも此の時代である（仲小路廉も此のストライキの仲間であつた）其他向島の勞働者看櫻會の禁止、教科書事件の疑獄、哲學館のミユツヘツトの倫理書問題事件相次いで簇出した時、此の間に社會主義を設くことは、眞に流を溯ふて舟を行り、風に乘じて帆を揚げんとするものであつた。

非戰論と平民新聞の發行

斯くて日露戰爭の日は來た。戰爭將に開かれんとする時に於て、戰爭可否の論、天下を沸騰した。當時、新思想の梁山伯を以て見られたる萬朝報の、內村鑑三、幸德秋水、堺利彥は前者は基督教の立場より、後者は社會主義の立場より、戰爭を非とし、主戰論者たる黑岩周六、圓城寺淸等の同人と容るゝ能はず遂に袂を拂つて萬朝報を去つた。此の外斯波貞吉は、幸德、堺と同じく社會主義者にして非戰論を信ずるものであつたが、彼は當時翻譯記者で、論文記者でなかつた爲め、主戰、非戰に社の態度を決する時、論文記者に倣つて退社する必要を見なかつた。

萬朝報を退きたる、幸德、堺の二人は、明治三十六年十一月平民社を設立して、平民新聞を發行して、社會主義を宣傳することになつた。幸德、堺彼等二人は素より嚢中貯へなき窮措大であつた。此の時新聞に資金を給したものは、幸德の師中江兆民の友人にして、而も社會問題硏究會の一人で、社會主義に多くの趣味を有してゐた小島龍太郎と、京橋木挽町の加藤病院の院長加藤時次郎の二人であつた。加藤は獨逸がへりのドクトルで『萬兵衛胃藥』として舊幕時代に鳴らしてゐた、出雲橋際の町醫者加藤萬兵衛の養子で、獨逸留學時代に學びたる社會政策を先づ日本に試みんとし、自費を抛つて貧民窟の兒童を鎌倉の海水浴に伴つたこともある位で、社會主義には同情を有つた人であつた。されば一議に及ばず新聞發行の資金を給した。尤も此の加藤と幸德、堺をとり持つたのは、大阪事件の女傑福田英子（舊姓景山）で、當時福田は幸德、堺と郊外角筈に住み、朝夕往來してゐたのであつた。

『平民新聞は人類同胞をして、他年一日、平民主義、社會主義、平和主義の理想郷に到達せしむるの一機關に供せんとす』と宣言して、明治三十六年十一月十五日を以て此の新聞は發行された。社會主義協會の幹事であつた西川光二郎は、當時二六新聞の記者であつたが、二六を止めて平民新聞の人となつた、萬朝報に在りて幸德、堺を友とし善く、黑岩社長の秘書を勤めし石川三四郎と萬朝報を止めて平民社に入社した。石川は埼玉の人、福田英子の家に寄寓して書を讀み、法學院と、哲學館の卒業生で、精緻なる法理的頭腦に多少の哲學的智識を有し、一面熱心なる基督教徒として、多情多恨の才子として、瀟洒たる美貌を以て知られてゐた。

お山の大將堺利彦

堺利彦は社會主義者としては、社會主義研究會の會員でもなく、尤も遲く其の名を出した人であるが、萬朝報の記者時代は、言文一致の唱道者として、茶代廢止論者として、『家庭夜話』『家庭の新風味』の著者として、一箇好々の家庭先生のやうであつた。

併し平民新聞を起すに至つて、其の舊殼を蟬脫して、志士的、戰鬪的の氣分を帶び、圓くして棘あり、温かにして而も屈すべからざる氣節を以て、將來日本に於ける社會主義運動を統率すべき器となつた。

山路愛山が曾つて堺を『青年の駕御に長ず』と評したが、堺の青年を駕御する事に巧なる、善き意味に於ける『お山の大將』たる天分は、平民社に氣を負ひ情に激する多くの青年を吸收した大杉榮、荒畑寒村、白柳秀湖、安成貞雄、安成二郎等は眞に多くの青年間、錚中の錚々たるものであつた。

大杉榮は名古屋の人、陸軍將校の子に生れ、陸軍士官たるべくして陸軍幼年學校に在り、日露戰爭に戰死したる乃木大將の子等と同窓であつたといふが、學校の規律の煩に堪えずして、士官學校入學を斷念して、外國語學校に佛蘭語を修めてゐた。彼は當時基督教を聽き、海老名彈正の本鄉教會に籍を置いたが、社會組織の缺陷を痛感した彼は、基督教に滿足することは出來なかつた。彼が外國語學校在學中は、平民社出入の常連で幸德、堺、西川、石川の講演に傾聽した一人である。彼が濡羽色の頭髮を綺麗に分けて、容儀を修飾し、風流瀟洒たる處、平民社中『ハイカラ大杉』の仇名があつた。

荒畑は大杉と其の出身を異にして、學歷などは殆んど有して

ゐない、恐らくは小學卒業位のものであらう。併し彼は泥中に拾はれた珠玉であつた。彼は横濱遊廓内引手茶屋の子に生れて、横須賀造船所の職工となり、或は大連に行き、紀州に行き、少年時代より獨立してパンを求めねばならぬ境遇に置かれたのは、早く社會の缺陷に泣き、人生の不義に激する熱情を養つた。彼が社會主義に對する智識は平民社の一員となり、堺を師として學んでからの後であつた。

白柳秀湖は早稻田文科哲學科の學生で、日本郵船會社專務取締役岩永省一の家に寄食してゐた。彼は年十三、遠州の田舍より青雲の志を抱いて東京に出で、岩永家の食客となつて郁文館中學を卒業し、其れから早稻田大學を卒業した。流石に十年、人の奴僕となつて苦學した人丈けあつて、社會主義に對する熱情は學生時代から其の全身を支配してゐた。

安成貞雄、安成二郎は共に骨肉で、兄は早稻田大學文科に、弟は金尾文淵堂の編輯局にゐた。兄弟共に秋田縣小阪銅山に生れ、父は銅山の事務員であつた。されば少年時代より坑夫が悲慘な醜惡な生活を見聞してゐたのだから、彼等が社會主義運動に投ずべき道は開けてゐた。

傳道行商と婦人運動家

平民社の運動は猛烈であつた。堺は先づ新聞界名人として獄に繋がれ、西川、幸德次いで投獄され、演說會は中止解散され、新聞や著書は發賣を禁止される。恰度ど昔、自由黨が藩閥政府と抗爭した政治運動は、今や、社會運動として再現した。

片山潜が日露兩國の干戈を交へつゝある間に在つて、萬國社會黨大會席上、露國の代表者と握手したと海外電報が報じて、片山は非國民也、國賊也、鼓を鳴らして責むべしと痛罵されたが、而も平民社に於ける非戰論は却つて之れに依りて火を加へた。

荒畑寒村は徒歩、箱車を曳いて、水戸を經て東北の野に社會主義書類の傳道行商を試み、小學教師を止めて平民社員となつた深尾韶、原子基は同じく峽中に入りて傳道行商した、其れから小田頼造、山口孤劍は又箱車を曳いて、東京より下關迄三百里の道を蹈破し、同じく傳道行商として社會主義の書類を賣つた。小田は下關に到つて山口と別れ、單身九州一圓を車を曳いて行商し、社會主義を傳道した。小田は周防の岡島地村（島地默雷を生みたる村）の人で、當時の青年中篤學を以て知られて

ゐたが、後社會主義を止めて伊藤證信の『無我の愛』に歸依し、叡山に上り、高野に行つて、天臺眞言の深甚微妙の佛法を研究してゐたが、近頃不朽の才を抱いて夭折した。

平民社は社會主義婦人講演を開いて、婦人の社會主義者を養成した。前記の福田英子、堺利彦夫人爲子、西川光二郎夫人文子、大杉榮前夫人堀保子、美顏術の技師として有名な小口みち子（舊姓寺本）、女流翻譯家西川松子（舊姓神川）などは、此の婦人講演に依りて社會主義の智識を養ひ、何れも熱心な傳道者であつた。

山路愛山の國家社會主義

併し當時の平民社は社會主義の名に依りて異種異樣の人々を抱容した。トルストイを信ずるものあり。海老名彈正流の基督敎を信ずるものあり。內村鑑三の門下生もある。されば之等の人々が正統マルクス派の社會主義と分離せざるべからざるは明白にわかつてゐた。

三十八年九月官憲の峻嚴なる迫害、遂に平民社を支へずして解散し、幸德米國に去るや、石川三四郎は、木下尙江、安部磯雄を擁して、基督敎徒の社會主義者を糾合して、雜誌『新紀元』を發行し、西川は堺、幸德の後援として純然たるマルクス流の社會主義を宣傳すべく、雜誌『光』を發行して對峙抗爭の形となつた。此の時堺は別に由分社を起して雜誌『社會主義研究』を發行し、社會主義に關する智識の供給に専心した。

此の時より日本の社會主義は數派に分岐した。又、平民社解散の前後、山路愛山、斯波貞吉、中村太八郎は國家社會主義を設立して政社の屆をして許可された。其の綱領は

日本國民の總體は一家族也。家人父子の關係を以て國體の本義とす。國家已に一家にして、皇室已に民の父母たらば、君民は喜憂哀樂を俱にせざるべからず。故に皇室の尊嚴と安民の德とは離るべからず。

といふのであつたが、國家社會主義の設立も畢竟平民社一派の運動に刺戟されて奮起したものであつた。

日本社會黨の結社許可

講和會議の失敗に依りて桂內閣は瓦解して、西園寺內閣は出現した。新內閣は前內閣に比して新思想に對し理解なきものではなかつた。されば明治三十九年二月、西川、片山、幸德、堺加藤、田添鐵二（米國歸りの社會學者で、長崎新聞の記者であつた）等の名を以て、日本社會黨の設立を屆け出ると、此の屆

けは受理されて、社會黨は一箇の政黨として日本國に存在の自由を得た。此の屆けを受理したる當時の內務大臣は現首相たる原敬其の人であつたのだ。

翌三月十五日、日本社會黨と國家社會黨は、別に田川大吉郎等を加へ、電車賃値上げ市民大會を日比谷公園に開くや、兇徒嘯集事件を起して、西川、大杉、岡、吉川、山口等其の被告人となつて鐵窓に繫がれた。此の時幸德は米國に在つたが、同志の難を聽いて故國にかへり、青森の人竹內平吉の資を投ずるに會して、社會黨の機關紙たる『光』と『新紀元』を廢刊して、日刊新聞を起すこととなり、保釋出獄中の西川等と、京橋新富町に日刊新聞として、平民新聞を發行した。此の時、日刊新聞に加はるべく岡山より參加したのは、今日論壇の麒麟兒たる山川均であつた。山川は京都の同志社と、松本君平の東京政治學校に學んだ人で、年十九、二六新聞の守田有秋と『青年の福音』記者として筆禍を購ひ、三年何ケ月の苦役を巢鴨の獄に送り、出獄して鄕里備中倉敷にかへつてゐたが、平民新聞の聘に應じて上京し、此の新聞の記者となつた。其の緻密明快の頭腦と、錐の如き針の如き尖銳犀利の筆は亦社會黨の新らしき實力に數へられた。

明治四十年二月、社會黨大會は錦輝館に開かれた。而して左の評議員を選出した

野澤重吉（人力車夫）藤田四郎（牛乳業）田添鐵二（新聞記者）幸德傳次郎（新聞記者）松崎源吉（賣藥店）椎崎重吉（廣告業）森近運平（牛乳業）深尾韶（新聞記者）岡千代彥（活版職）竹內余所四郎（藥劑師）幸內久太郎（鍛冶職）石川三四郎（新聞記者）西川光次郎（新聞記者）樋口傳（非賣骨董業）堺利彥（新聞記者）齊藤兼次郎（金物職人）安井有垣（青山學院事務員）安中逸平（煎餅屋）添田平吉（流行唄讀賣）山口義三（新聞記者）

而して席上田添鐵二の議會政策論と、幸德秋水の直接行動論は爭議の論題となり、討議の結果、幸德案は敗れて田添案の勝に歸したが、二月二十日に至つて、社會黨の幹事たりし堺、石川の兩人は社會黨の結社を禁ずるの命令を內務大臣より受けて此處に日本社會黨は安寧秩序紊亂の名に於て、存在を禁止された。

社會黨の春は來た

此の間に足尾銅山の大ストライキは、ストライキ視察の爲め足尾に到れる平民新聞通信員西川を兇徒嘯集の罪人として檢擧

する。平民社及び社員の家は家宅捜索を受ける。又新聞は發賣禁止頻々として、石川、大杉、山口等は新聞の署名人として、執筆者として入獄の運命は近づいて來る。かてゝ加へて新聞の資力乏しに久しく支ゆる能はずして、明治四十年四月十三日、新聞の發行禁止てふ第一審の判決に服從して、此處に新聞は廢刊した。

石川、大杉、山口の入獄して間もなく、西川は兇徒嘯集罪の保釋になつて出獄し、宇都宮から歸京すると、已に平民新聞は廢刊して、新聞の同人はちり〳〵ばら〳〵になつてゐる。社會黨の勢力が日に大を爲さんとする時に於て、社會黨の新聞遂になかるべからずといふので、折柄米國から歸つて來た片山と『社會新聞』を發行する。すると森近運平は、幸徳の後援を得て『大阪平民新聞』を發行して、一は議會政策を、一は直接運動を標榜して、社會主義と無政府主義の色彩は此の時から鮮明になつて來た。

明治四十一年七月十七日、山口の出獄歡迎會を、神田錦町錦輝館に開かれて、赤旗事件の裁判となり、堺、大杉、山川、荒畑等は被告人となり、西川、岡、吉川、樋口、山口、松永敏太郎(今日の夢の世界社長)等は電車事件の兇徒嘯集の保釋を取り消されて入獄し、其れからといふものは、日本の社會運動は火の消えたやうになり、一時頓挫するの已むを得ざるに至つたのだ。

併し社會黨の冬は去つて春は來た。明治の末年、堺の出獄して賣文社を開いて、同志の爲めに適當なる生活機關を設くるや社會主義の運動從つて勃興し、大正六年、堺は東京市より代議士の候補者として打つて出て、不幸にして落選したが、而も彼の機關紙とする新社會は優に一萬部を印刷し、彼と山川均の主筆たる平民大學發行の『社會主義研究』は發行部數八千を下らぬといふことである。

堺は山川と共に今や賣文社を去りて、山崎今朝彌、荒畑寒村等とマルクス流の社會主義に猛進せんとし、賣文社に居殘りたる高畠素之、遠藤與四郎、北原龍雄等は國家社會主義に新生面を開かんとしてゐる。

文藝漫語

日本畫壇の重鎭竹内栖鳳氏の息逸三君が、彩管などには振向かうともせず、頻りに音樂に浮身を窶して居るのに對して、故和田垣謙三博士の息良雄君が、駄洒落一つ言はずに勇猛に彫刻に向つて突進して居るのも對照が面白い◆聞けば良雄君は、父博士が過飲の結果でもあらうか、眼は博士以上の强度の近視眼で、二重眼鏡を懸けなければ物が見えず、猶ほ聾な上に而かも舌が旨く廻らぬと云ふのだから始末が惡い、畫で完全の所は觸覺だけであるが、良雄君は之を命の綱と頼んで、一心不亂に石膏の塊を執つた結果、漸く今日の成功を贏ち得た次第であると云ふ◆死んだ箕作元八博士は一八八六年獨逸に留學を命ぜられ、フライブルク大學に動物學を專攻したのであるが、中途から志望を代へて、チュウビンゲン、ハイデルベルヒ、伯林等の各大學に史學を修めて歸つたのである。故和田垣謙三博士は一八八〇年元の東京大學の文科及び經濟科を優等で卒業、後ち倫敦、劍橋、伯林の三大學に經濟學並びに文學を專攻したのである、これでは文學博士の箕作さんが理學博士に、法學博士の和田垣さんが文學博士に間違へられるも全く無理はない◆故箕作元八博士は極度の近視眼なるが上に非常なそゝつかしやで、嘗て伯林に留學中或る料理店に於て、傍なる大姿見に寫つた自分の姿を訪問客と間違ひ、握手せんものとていきなり鏡と衝突したと云ふ話は有名な話だが、博士は自分の研究以外の事に關しては頗る無關心な方で、途で友人などに會つても滅多に其の人の顔と名前とを一緖に思ひ出した例がないと云つて居た程である◆此の話で思ひ出されるのは、隱れたる言語學者として、洽く識者の畏敬を受けて居る、仙臺高等學校の栗野敎授の話である、敎授は赴任以來十七年餘りも仙臺に住んで居るが、未だ曾て東北學院の所在地を知らなかつたと云ふ話である、昨年仙臺の大火に或る門下生が同敎授を見舞つて、談偶々燒失した東北學院の事に及ぶと、栗野敎授は可怪な顔をして「へえ、そんな學校がありましたかねえ」と云ふ、それも其の筈、敎授が朝夕學校に通ふ途は十七年間一本路で、決して他へは足を枉げた事がなかつたからだと◆今月帝劇にかゝる露西亜のグランド、オペラの實際の出費豫算等は十五日間興行で以て二萬五千圓なさうだ、一日約千六百六十圓に當る、歌舞伎座が仁左衛門や雁次郎をかける場合には、其の滯在費や下廻り迄の雜費を一切加へて、二十五日間興行四萬圓の豫算を立てるさうだ、一日約千六百圓の見當である、これで一番上成績に行つて日當五百圓の純益しか見られないと云ふのだから、興業師も仲々樂じやない◆小說『失はれた指環』の作者中村星湖氏、某月某日鶴見の花香苑に於て、粹人三上於菟吉君と會しての即吟に、曰く『萬人の女を戀ひていち人の君に甜ふはさびしからずや』、於菟吉君の返しに、曰く『生姜の星湖いとしも魚をつり魚をつりつゝ小說を書く』、此丈の粹人自畫像に贊して曰く、（頬骨高く鼻底くければ）、『富士、筑波なかに武藏の鼻野かな』、文壇に誰かこれに奇拔な句を附ける連句師は無からうか◆日本畫家が住宅を建てたり、アトリエを作つたりする事は、餘りに有り觸れたことで、一向珍らしくも何とも無いが、中で唯一つ近頃での珍聞は、若手の日本畫家中、特に挿繪畫家として人氣のある吉田秋光氏が、千六百圓で以て惠比壽驛附近にアトリエを建てた事である、畫家廣しと雖も挿繪ばかりでアトリエを建てたのは、恐らく此の男を嚆矢とするであらう◆四ッ谷の大番町に俳號を黄牛と稱する、碧梧桐門下の一工學士が居る、姓は和田である、其夫人きん子さんも句作に就ては良人に負けぬ程の技倆を持つて居る、俳號は玉簾と云ふ、此のきん子夫人が交際上手なせいでもあらうか、此の家で催される句會には、美術家の秋野虎雄、高間惣一の兩君を始めとし、珍らしい素人俳人が出入りをする、女優松井須磨子なども曾ては此處の俳筵に侍つたものだと云ふ。

夜の五丈原

高須梅溪

（一）

渭水の秋は闌けた。

夜になると、冷たい風が、魏の陣營を吹いて、亡魂のやうに瞬く篝火が暗の中に淋しくゆらいだ。草叢のところどころに、虫の聲が、悲むやうに、呟くやうに聞えて、空から滋く降りる露がしつとりと草土をぬらして居た。

魏の大將司馬懿は、露に霑れた征衣の袖を拂ひ乍ら、何心なく、鋭い眼付で、水のやうな大空を眺めて居たが、何に驚いたのか、俄かに顏色を颯と變へた。

『孔明が近い中に死ぬ徴候が見えた。』

彼れは斯う呟いて、重く首肯きながら、急に士卒に命じて、部將の一人、夏侯覇を呼びよせた。夏侯覇は、何事かと思つて急いで司馬懿の許に來た。

『閣下、何の御用で御座います。』

斯う云つて、感慨深さうにしてゐる司馬懿の顏を、ぢつと見つめた。

『今、味方にとつて、都合の宜い徴候が現はれたのぢや。近々孔明が死ぬぞ。今夜、空を見あげて、靜かに天文を判じてゐると、急に其の地位を失つた將星が一つあつた。それは、慥かに孔明の病氣が重くなつて、命、旦夕に迫つた徴候ぢやと見て取つた。俺の判斷が命中つたか如何か。篤と君に樣子を探つて來て貰ひたいのぢや。』

司馬懿の命令を聞いて、夏侯覇は『あの恐しい孔明が死ぬな

ら、これからは味方の勝利だ。』と勇んで、一千餘騎の兵を從へて、そつと五丈原へ道を急いだ。

（二）

司馬懿が天文によつて、判斷したことは、確かに適中つて居た。當時、孔明は、身心共に非常に弱つてゐたのである。孔明は以前から心勞の病があつたけれども、此の秋になつてから、今迄にない身内の衰へを感じた。はり切つてゐた精力が、何となく、ゆるみを生じて來たのを感じた。食慾は、日毎に減少して、夜は、神經ばかり昂ぶつて寢られないことが多かつた。偶ま夢を見ると、それは恐しいものか、悲しいものばかりだつた。これではならぬと、自分で心に務つても、一向、元氣を回復することが出來なかつた。

秋の夜が、靜かに更けて、虫の聲のみ天地を領する時分、目も、心も冴えて來ると、いろいろの感慨が、彼れの胸に一時にこみあげて來て抑へやうとすればするほど、噴泉のやうに湧いて出た。

『先主（劉備）の遺命を受けて以來、自分がしたことを考へると、心淋しいことのみ多い。時は電光のやうに過ぎゆくのだ。それに自分のする事は少しも捗取らない。自分は心から天下を一統して、漢室を再興することを先主に盟つた。固く盟つた。而もそれが實現されない前に、自分が倒れねばならぬとは、何と云ふ殘酷な運命だらう。自分は、素から死を恐れない、悲まない。唯漢室を再興し得ないまゝで、死ぬのを恐れる。自分は、地下の先主（劉備）に逢つた時、何と申わけして宜いか、わからない。』

孔明は、此のことを考へ出すと、流石に其の頭腦が、混亂するやうに感じた。而して亡くなつた劉備のことが、いろいろ思ひ出されて來た。今から十數年前（建安十二年）自分が未だ若くて、意氣を負うて、臥龍岡の閑居に天下の風雲を睥睨し乍ら、悠然と横臥して居た時分、劉備は、ささわざ自分を三度迄も訪問して、其のひろい度量と人物を愛する心とを明かに示された。あの大雪の中を、切るやうな寒さに惱み乍ら、來られた時、又た長い間、わが儘な自分が目をさます迄、根氣よく、待ち續けられた時、自分は、つくづく、其の度量と意氣とに感激した。最大のインスペレーション！　これが先主（劉備）と自分とを結び付けた最初の楔子だつた。それ以來、自分は、身も心も、其のすべてを劉備に捧げつくした。劉備も亦、日毎に自分と食卓を一緒にして熱心に天下の政治を論じたり、策戰のことを話された。自分は、斯うした快い君臣の關係を未だ他に見たことがなかつた。自分の感激は、始終、火のやうな勢を以て、自分を励ましてくれた。蜀が、今日、天下を三分して、魏と呉の二强國

に對峙するやうになつたのも、先主と自分との心と心とが一つに結び付けられて、强く働いた結果だつた。

『その賢明な先主も今はもう居ない。唯病に衰へはてた自分が、影法師のやうに殘つてゐるばかりだ。』

此迄、考へつめて來ると、孔明は、人知れず、瘦せた頰を曇らして、眼に涙を浮かべた。冷たい夜風は、心の髓に沁み込むやうに吹いた。孔明は覺えず、身をすくめた。

（三）

バサリ、バサリと神秘の囁きのやうに、孔明の前に落ちたものがあつた。それは、秋風に搖落した黃いろい木の葉であつた。秋が來て、散り去るのはひとり木の葉ばかりではない。自分の運命も亦恰度、此の木の葉のやうだ。いつ散り去るかわからない。孔明は、斯う考へて、ぢつと、明滅する篝火を見やつた、すると、先主の臨終の光景が、ありありと浮んで來た。あの時、孔明に傳へられた遺言が、再現されて來るやうに感じた。

『自分の歿後、唯賴みにするのは、君ばかりぢや。自分は決して、子孫の繁昌を願はうとは思つて居ない。唯四方の叛賊を平定して、漢室を再興したいばかりである。若し自分の子が暗愚で、部下を支配するだけの實力がなければ、君自ら進んで蜀の主となつて下さつても、少しも異存は無い。』

斯う打開けて云はれた聲は、今も尙ほ耳の底にある。それからと云ふものは、自分は、一意、後嗣（劉禪）のために、肝膽を碎いて來た。建興三年には、瘴煙にとざされた南蠻の地深く分け入つて、蠻夷を平らげ、その首領孟獲を七度捕へて、七度解放してやつた。又た呉と結んで、魏の勢力に當つて、其の名將司馬懿を抑へて、常に優勢を維持して來た。蜀の勢力は、劉備の時代に比較して、一段の强さを持つた。けれども未だ天下を一統するに至らないのである。殊に再三、出師表を上つて、六度祁山に出て、魏の軍勢を根本から打破らうとし乍ら、司馬懿のために妨げられて、目的の一半をも達しないのに、自分の生命は、はや衰へて消え行かうとするのは、何と云ふ淋しい運命だらう。先主の遺托に背く心苦しさは、自分の骨に喰ひ入るやうだ。

孔明は、靜夜、こんなことを思ひつゞけて、到頭、眠ることが出來なかつた。

『若し自分が亡くなつた後に？』

此の事を想像すると、ぞつと背に冷水を浴びたやうな心持がした。素より孔明に代るだけの人物は何處にもない。孔明ひとりの力で、蜀の勢が大方支えられて來たのであるから、孔明が亡くなつたら、その次ぎに來るのは、蜀の滅亡であらねばならなかつた。

『もう其の事は、思ふまい。

孔明は、痛む胸を抑へ乍ら。帳外に出て、水の流れるやうな秋曉の空氣を吸ひ入れた。疲れ切つた頭が、それと共に、明澄になつて、未だ何處かに、薄紙のやうに、殘存して居た精力が、強く働き出したとを意識した。

その日、孔明の氣分は、一體に重く沈んで居た。殊に大勢を制する上から、一時、掘手した呉の大軍が、魏のために、ひどく打破られたと聞くと、意外の事に烈しく、神經を刺戟されて、覺えず、地上に昏絕した。

孔明は、半時ばかりの後、人々に助けられて、吾に歸つた。けれども其の顏色は、全く青ざめて、此の世の人とは、思はれなかつた。唯その眼には、尙ほ力があつた。

『もう自分の生命は、長くあるまい。』

斯うはつきりと、腹心の姜惟に向つて、告げた。姜惟は、此の言葉を聞いて、強ゐて慰めやうと力めたが、何事も知りぬいて居る孔明には、何の功もなかつた。孔明は、その死期の近いことを銳く直覺したやうに見えた。

その淋しい暗欝な日も暮れて、又た寂寞な夜が來た。

孔明の眼には、萬象が悉く悲しく見えた。吹く風も、蟲の聲も、散る木の葉も、皆悲しいシムボルであつた。強ゐて弱りゆく心を勵まさうとしても、身內の衰へは、反撥力を弱めて了つて、吐く呼吸さへ苦しいやうに思はれた。胸のあたりが銳い劍で抉ぐられるやうに痛んだ。食慾は、殆ど無くなつて、ぢつと橫臥した儘、もう消えてゆくのではないかとさへ思はれた。けれども孔明の意識は、身心の衰へを超越して、明鏡のやうに澄んだ。

彼れは、強ゐて人に助けられて、帳外へ出た。而して靜かに空を見上げて、天文を考へやうとした。突然、孔明は、アツと云つて蹌踉となつて、倒れやうとした。人々は、驚いて、孔明を陣中に助け入れた。

孔明の顏には、明かに決心の色が動いて居た。

『直ぐ姜惟を呼んでくれ。』

斯う命じて、形を改めた。やがて姜惟が飛ぶやうに急いで來ると、

『殘念ぢやが、もう自分の生命は、旦夕を保し難い。』

と確信した聲で云ひ放つた。姜惟は、悲むよりも、寧ろ餘りに、其の言葉の唐突なのに驚かされた。

『丞相は、何故、そのやうな心細いことを仰せられます。未だ御生命は大丈夫です。私は、閣下が、萬年の壽を保たれるやう、心から祈ります。』

孔明は、姜惟が斯う云ふのを打消して、天文によつて、其の死期の切迫したことを、知つた事を述べた。

『今夜、自分が、空の星を見上げてゐると、三臺の星の中で、客星ばかり光りが明かぢやが、主星の光が殆どうすらいで、色を變へて居たのぢや。それは、天が明かに自分の生命がつきたのを知らせたものだと思ふ。確かに自分の判斷は正しいやうだ。』

姜惟は、此の言葉を耳にして底の知れないやうな悲みに沈んだ。呉にも、魏にも、孔明のやうに明哲な頭腦と鋭い機略とを持つた巨人は、一人もない。その死は、明かに蜀の大きい損失である。取り返しのつかない損失である。何とかして、丞相の壽命を、今二三年でも延ばせる丈維持させたい。姜惟は、斯う決心して、祈禱を以て、その厄を攘ふやうに孔明に勸めて見た。孔明は、その祈禱さへ、どれ程の功があらうかと危ぶんだ。けれども今、先主に對する自分の盟ひ、漢室再興の目的、それ等が、悉く打くづされて了ふのを思ふ幻滅の淋しさに堪えなかつた。彼れは、兎も角も、祈りを以て、その生命を延ばせる丈、延ばせて見やうとした。

(四)

その夜、孔明は、嚴かに身を潔めて、白衣をつけて、帳中に入つて、七日間、祈禱を續けることになつた。帳外には、鎧をつけた四十九人の兵士を置いて、白い旗、白い衣を纏はせて、孔明の修法を守護させた。

『自分が帳中で、七日間、祈つてゐて、最終の日迄、主燈が消えなかつたら、自分の生命は、尚ほ十二年間延びるかも知れない。萬一、主燈が消えたら、もうそれきりである。君は能く此の事に氣をつけて、無用の人物を帳中に入れないやうにして下さい。』

孔明は、斯う姜惟に命じて置いて、帳中に入つた。彼れは、自分で、恭しく香を焚いた、花を捧げた。壇上には大きい七盞の燈明をとぼしてその周圍に四十九の小燈をつらねた。而して其の中央に、本命の主燈一盞を置いて、北斗の方を向いて心こめて、祈りを籠めた。

『私の生命は、旦夕に迫つて居ります。だが、先主の遺命をはたす迄、如何しても、死たくありません。奸雄を誅し、逆賊を亡ぼして、漢室を再興してから、快く死たいと思ひます。上帝よ、何卒、孔明の上に力を與へて下さい。』

彼れは、熱心に祈りを續けた。その夜も明けて、朝になると、孔明は、夥しく血を吐いた。その衰弱は、一層、目立つて來た。けれども孔明は、ぢつとしては居なかつた。晝は姜惟などゝ一緒に軍略のことを懸命に考へた。夜は、一心に祈りを續けた、彼れは、只管、主燈が消えないやうに心がけた。孔明の眼は、唯主燈の方にのみ注がれてゐた。風が吹いて、ゆら〳〵動いてさ

へ、胸を轟かした。斯うして、主燈は消えずに、黄いろく、淋しく、瞬いて居た。

突然、陣外に吶喊の聲が起つた。それは、魏の夏侯覇が戰ひにかこつけて、孔明の樣子を探りに來たのである。姜惟は、士卒に命じて、樣子を見させやうとしたところへ、身方の猛將と云はれた魏延が狼狽したやうに這入つて來た。

『魏の軍勢が押よせた。』

斯う續けて呼ばはり乍ら、陣中を馳せ廻つた拍子に、不圖、主燈を踏み消して了つた。

『あつ。』

孔明が絕望したやうな叫び聲を喉中から發すると、どつと血を吐いて、床の上に倒れた音がした。主燈の滅したことは、やがて孔明の死が眼の前に逼つたことを暗示したからである。

姜惟は怒つて、魏延を斬らうとした。孔明は、よろめき乍らそれを押し留めた。

『すべては運命ぢや。』

孔明は、沈痛な聲で、斯う云つた。彼れは眼前に迫つた灰色の死を前にして、靜かに姜惟に死後の事を托した。その中には、全部二十四篇、十萬四千一百十二字から成る軍書があつた。それは、八務、七戒、六恐、五懼の法を述べたものである。最後に、孔明は、後主劉禪に先立つて逝くとの遺表を述べた書を作つて、ほつと吐息した。うすら冷たい秋風は、孔明の生命を刻一刻、縮めて、其の昔、奸雄曹操を苦め、豪傑孫權を惱ました巨人も、眠るやうに、呼吸を引き取つた。五丈原の蟲の聲は、その悲壯な最期を弔ふ挽歌のやうに滋く聞えた。姜惟は、愁然として、此の巨人の前に跪いて、涙を垂れた。

* * * * *

司馬懿が、孔明の死を確實に知つたのは、それから、大分、日數を經過してから後の事であつた。それは、蜀の軍勢が、孔明の木像を造つて、一時、魏の人々の目を晦まして居たからであつた。司馬懿と夏侯覇とは、ほつと安心の胸を撫で下した。



山村哀話 何處へ

澁野行人

一

N――縣の、S――縣に近い或る國境の深山に、M――と云ふ製板會社の、大きな製板所があつた。此れは隨分昔からある古い製板所で、現に京作の家でも、京作は云ふ迄もなく、京作の父も、彼の父の父も、同じ此の製板所に働いて居た。京作も亦此處に生れて、此處に育ち、而して此處で働いて居た。京作の妻も同じく此處の勞働者の娘で、此の山で生れ、此の山で人となつて、二十歲の時に彼が妻となつたのである。夫婦の間に一人の男の子も同じく此處で生れた。

抑も此の製板所には二百人からの勞働者が居て、或る者は朝から夜遲くまで斧を持つて木を伐りに山深く出かけた。或る者は終日其の伐られた材木を、F――川の上流の水の助けを借りて、山から製板所に、製板所から麓に運ぶ爲に働いた。又或る者は、それ等の材木を挽いてはそれ〴〵の大きさの板にこしらへる事に勵んで居た。

さういふ、見た所、荒い仕事はして居たが、彼等は殆ど一年に一日の日も、爭ひ事らしいものをした事がない。まるで、かの沈默と勞働とを信條とする、トラピスト派の僧侶のやうな、靜かな平和な日を送つて居た。日が空高く輝いて、木々の綠の輝く時は、丁々と木を伐る斧の

音と混つて、山々や谷々に勇ましくも又寂しげな歌が聞かれた。又雨に明け、雨に暮れるやうな靜な日には、木々の葉を打つ雨の音と、小屋の中の木を挽く響が、如何にも暢かに調子を合せるのだつた。而して夜になると、彼方(あなた)の山の中、此方の谷の影、さては林の奥、森の中、思ひ思ひの處に、三軒五軒と疎らに立ち並んだ家々の中から、樂しげに父や母や子等の笑ひ且つ語る聲が聞えた。

實際、この山の中には、京作が四十三になる迄、一日として不足らしい聲の聞えたことはなかつた。否、彼が生れない前の五十年も、恐らくは百年も、矢張り人々はこんな風に平和で、こんな風に睦まじく、暮して居たに相違なかつた。

二

其の製板會社の主人は東京に居て、月の中に一度か二度位は必ず此の山に見廻りに來るのが例であつた。彼は誠に性質の温厚な、思ひ遣りの深い人だつたので、山の勞働者達は、知るも知らぬも、皆信服して居た。彼はもう可成りな年輩であつた。彼れには法科の學生であつた、唯一人の男の子があつたが、女との間違から、五年前に行方不明になつて居た。其の時息子の拐帶して行つた少なからぬ金などは、彼には少しも打撃でもなければ、何の煩ひでもなかつたが、その子の居なくなつたと云ふ事が、一夜の中に彼の頭に霜を置かした程の、痛手であつた。だから、彼はその後ともに、放蕩なその息子の行方を探す爲には、少しも金錢を惜しまなかつた。從つて、夢のやうな手掛りでさへも、彼は其れに莫大な金を費して、自らは無論のこと、人をも數多賴んで、息子を家に呼び戻すために、此れ迄にも幾度無駄な骨折をしたか知れなかつた。

彼はその時以來、彼の家の唯一の財産である所の、諸所の製板會社の事をも、殆ど支配人任せにしてしまつて、ほんの形式だけに一ケ月に一二度、保養の樣なつもりで山へ出かけるに過ぎなかつた。而して、自分は一切の俗事から離れて、一人息子の身の上の事、彼の行方に就いて、さては自分が一樵夫の子より身を起して、巨萬の産を興すに至つた過去の經歴の事、(M——製板會社は、今から二十年程前に、先の經營者から彼が買收した物なのである。)など、其れから其れと廣く「人生」に就て、思をめぐらす樣な人になつて了つた。

彼は家出した息子に就て考へた。——もしあの子が、世間普通にあるやうに、唯女が出來て、金を持つて家出したと云ふだ

けなら、恐らく又一年と經たない中に、金につまつて自分の元に歸つて來るに相違ない。其れが一年たち、三年過ぎ、最早五年經た今になつても、一つの消息もないのは、死んだのか、それとも…。けれども、親として、例へ今家に居ない者にもせよ、死んだ者と考へたくはなかつた。處で、死なずに、而も生きて居るとしたならば？…考が其處迄行くと、彼は途方に暮れねばならなかつた。息子が今何をして居るだらう、何處に居るだらう？——その見當がまるで附かなかつた。

然るに、最近になつて、息子に就て驚くべき噂が彼の耳に這入つた。彼の行方不明になつた息子が、社會主義者の群に交つて居ると云ふのであつた。彼は其れ迄にも自分の息子の其の後を察するのに、死んだのでないとすれば、世間一般によくある放蕩息子の辿り方と違ふのが不思議だとは思つて居た。其處で、何か自分の息子の身の上に世間並でない、「或るもの」を豫想して、而もそれを所謂親の慾目を以て、善きものに解釋しようとして居た。

善きもの處か、社會主義者の群に交るなどとは、彼に取つては「寢耳に水」以上の驚きでなければならなかつた。で、彼は如何かして息子と會つて、彼をそんな外道から救ひ出さうとして百方奔走して居た。そんな所以で、山の方へも、ほんの形式丈けの見廻りだが、二ケ月許り主人は顏を見せなかつた。

三

——其の間の出來事である。主人の親戚で、M——會社の、此の山の製板所の取締をして居る男が、主人から一切の權限を任されて居る事をかさに被て、山の勞働者達の取扱に不公平な事をした。元來、この取締人は、今から五六年前に東京から來た者で、彼は主人とは違つて、山の人々の間に餘り評判がよくなかつた。

事の起りは別段大した事ではなかつた。無論、こんな山の中のことであるから、物價騰貴の爲に來す、生活難なぞと云ふやうなものは、此處まではそれ程響いては來なかつた。だから、原因は謂はゞ其の取締人の人格に對する批難といふに過ぎなかつた。其處で、兎に角、長い間、神代のやうに靜かであつたこの山奥に、排取締人の罷業運動が起つたのである。二日も三日も、人々は何を聞かれても、牛の樣に沈默して了つて、一切の仕事に手を觸れなかつた。

處が、中に取締人に心から服して居るのではない迄も、つひ

氣が弱かつたり、目の前の利害に心を動かされて、取締人方に内通するものが出來て來た。その事が又勞働者側に知れないで居る筈がなかつた。其處で、今迄は勞働者側は唖牛のやうに默つて、仕事を休んで居た丈けだつたが、そんな事が知れ渡ると共に、妙に一種の不安な空氣を醸し出した。何十年となく平和であつた山に、一つ間違ふと、激しい喧嘩でも持上つて、血を見ねば止まらない様な不安な氣分が漂つたのである。

然し乍ら、其の事は時を移さず取締人から東京に電報された。若し、其の時彼の人望ある主人が自ら山に來て、穩かに取鎭めたなら、恐らく何事もなかつた以前のやうに、事件は收まつたに相違ない。が、先に云つた様な理由で、主人が如何しても來られなかつたので、東京在住の、S——會社の支配人がやつて來ることになつた。其れを又彼が穩便に、一人で來れば良かつたのを、大袈裟に警察などに盡力を頼んだので、數人の巡査が武裝して、彼と共に遣つて來た。此れは恐らく支配人の罪ではなくて、其れを大袈裟に報告した山の取締人の罪でなければならない。

その結果、罷工は直ぐに治まつた。一々深い事情などは聞かれなかつた。最先に取締人に反對した者達、即ち此の罷工の煽動者と見做された人達を、嚴重に調べることになつて、其れ等は追つて處罰されると云ふことになつた。斯うして表面は兎も角も大した騒動にはならずに濟んだのである。

四

京作も其の罷工の主謀者と見做された一人であつた。

或晩、彼は一人で静かに考へた。——無理は此方になくて先方にある。其れは確かな事だ。だが、資本家と勞働者の喧嘩に理を以て曲直を爭はうと云ふのは、爭はうと云ふ事其の事が既に非だ。今となつては、何をか云はう？何れは何方が正しいか分る時が來れば分るのだ。又神様は知つて居られる。

其れにしても……と彼は考へ進んだ。斯う云ふ風に、東京の支配人とか、警察の人達とか、謂はゞ他人が仲に這入つて事を治めた以上、此の儘明日の日から今迄通り何事もなかつたやうに、仕事を續ける譯には行くまい。惡いと、理が非でも定められた方の者は、一人殘らず罪せられるに相違ない。自分の家は父の父の代からこの山の世話になつて居る者だ。自分が一つ此の不祥な事件の犠牲になつて、恩返し——誰への恩返しか？山へか、人へか、神様へか——をしても、決して先祖を辱す事

にはなるまい。左様だ。多勢の人々に爲り代つて、自分は年長者の義務として、自分一人に罪を引き被つて出よう。——斯う彼は決心すると共に、其の翌朝、「今度の事は自分が頭に立つて人々を煽てゝした事である。」と名乘つて出た。

山の取締人や、其れに東京から取り鎭めに來た人達は、京作の此の言葉を聞いて、本當にさう思ひ込んだのか、それとも「此の男は自分一人で罪を背負つて出たのだらう。だが、多勢を罪しては此方の仕事にも差支へが出來る、と云つて罪しないで居ては此方の威嚴にかゝはる。此れは幸ひ一人で事が濟んで丁度良いとでも思つたのか、其れは神樣でなければ分らないが、兎も角表面上、非常に腹を立てた風を裝うた。彼等は京作を口を極めて罵つた許りでなく、殊に事の起りの山の取締人は彼を手を上げて打ち、足を以て蹴りさへした。

京作はからだの痛みを堪えながらも、斯程迄に非道な扱ひをしなくても良さそうなものだ。と無念さうに歯嚙みをしながら取締人の顔を見上げた。數へて立れば數へ立てる程、彼は此の取締人の不都合な行ひを、此れ迄に見聞きして居た。京作には現に今年廿歳になる娘があつた。去年の事である。取締人は立派に妻もあり、二人の子さへある身でありながら、京作に賃錢を上げるからとか、特別の手當をするからとか、特別の扱ひをするからとか云つて、彼の娘を自分の物にしたいと申し出た。京作が斷り、彼の娘が斷り、彼等が拒む程、取締人は其事を迫るので、終に親子申し合して、或夜密かに娘を山から免れさした。娘は今頃、知人の少ない、薄情な人々の多い都會で、如何な憂き苦勞をして居るだらう？ 京作は其れを思ふ毎に、此れも皆前の世の約束事とは思ひながらも、取締人を恨まないでは居られなかつた。取締人は取締人で、其れ以來、目に見えて京作に辛く當り出した。……

此の憎らしい男！ 寧その事、此處で、多勢の人々の居る前で色ゝの事を、彼れや此れやを、洗ひざらひ云つて遣らうか、と餘程口の先まで出かゝつたが、待て待て、彼の優しい主人の爲に又長い間、祖父の代から養つて與れた此の山の靜かな平和の爲に——斯う思つて、彼はならぬ堪忍だが、堪忍して默つて居た。

斯うして、彼は父の代、父の父の代からから住み馴れた。寂しい併し乍ら懷かしい、思ひ出多い此の山を、其の日限り追はれる事になつた、妻子を連れて、誰一人友達に挨拶することさへ許されないで、其の晩彼は此の山を立ち退くようにと、嚴しく云

ひ渡されたのである。

「せめて親しい友達に別れの言葉丈けは……」と京作は賴んだ。

「どうして、お前のやうな危險な人間に、そんな事を許したら、此の上又如何な騷動の元になるかも知れない。滅多になるものか！……」斯う取締人は意地惡く、憎々しげに云ひ放つた。

京作はもう其れに何の返す言葉をも云はなかつた。

三

其の晩――月の明るい晩であつた。京作の一家は、わざと誰にも知らさずに、彼の取締人の命を受けて、一行を山から追放する爲に附いて來た二人の役人に送られて、長い思い出の多い住家を出た。

成る可く人目に觸れないやうにとの注意から、裏山の細い路を辿つて、附いて來た男の一人が最先に立ち、京作が其の次に十三歲になる男の子が其の後から、續いて京作の妻、最後に附いて來た今一人の男と云ふ順で、麓の方へと靜かに進んだ。月は其の水のやうな冷たい光を、そゝぎかける樣に一同の背中を照らした。或時は又彼女は、木々の影に遮られて、縞のやうな光をばら〳〵と撒き散らした。或時は又彼女は、森の蔭や谷間の爲めに、黑い黑い墨のやうな影を畫いた。其の中を京作と、京作の妻子と、護衞の者は、無言で步み續けた。

今一つ低い山を越すと、愈よS――縣に出ると云ふ所に、瀑つ瀨をなして流れて居る、可成り廣い谷川があつた。此の谷川迄の深い山々が、M――製板會社の持地なのである。一行が此處迄來た時は既に眞夜中を過ぎて、時は午前三時に近かつた。

月はもう傾いて居たけれども、谷川は其の薄れて行く餘光に染められて、暗い木々と眞黑な山々の中に、恰も銀糸で織り出したやうに、青白い色に光りながら、淋々と寂しくも又物凄い音を立てゝ流れて居た。其處に一本の丸木橋が架つて居た。其の橋から一丁程下手に、大きな水車が流れの音を刻むやうに、がたんごとんと吠えて居た。此れは、今では伐木の爲にだん〳〵山奥へと進んで行つた製板所が、ずつと以前に鋸を用ふ爲めに役立つた水車であるが、その頃は殆んどもう廢物にされたものである。

京作の一家は此處迄送られることになつて居た。此の送られると云ふのは、取りも直さず監視されることを意味するのは無論である。さて、此の谷川に架つて居る細い丸木橋は、町の人

ならば男でも渡り兼ねるやうな物であるが、流石に山に育つた人達だけに、女子供も割合に恐れる風もなく、靜々と渡り始めた。然し、時が時、場合が場合とて、流石に親は子を、夫は妻を、省り見勝ちに、細い橋のことであるから、殊更に歩みを緩めて歩いた。谷川とは云ひ條、大木の丸木を五本もつないである程の、廣い川であつた。

六

丁度一行五人の者の姿が、二三尺づゝの間を置いて、谷川の上の此の細い丸木の上に、黒く影畫の様に浮んだ時のことである。一番後から來た彼の附添の男が、何用を思ひ出したのか、突然足を早めて、其の細い橋の上で京作の妻を追ひ越し、次いで小さい男の子を越さうとして、其の傍を通り抜けようとした時のことである。わざとしたのか、あやまつてしたのか分らないが、兎に角すり抜けやうとする拍子に、男のからだが小さい男の子のからだに突き當つたのである。一たまりもなかつた。あツ！と云ふ間に、男の子の姿は渦つ瀬をなす谷川に呑まれて了つた。

あツ！と云つて、父も母も、其れから監視に附添つて來た者も、餘り突嗟のことなので、手を下す術を考へて居る暇もない中に、谷川に呑まれた男の子の姿は二三度も流れる水の面に、浮きつ沈みつして見えた。而して再び一同があつと叫んで居る瞬間に、男の子のからだは彼の下手の水車に引つかゝつて、がら〳〵と一二度廻されたかと思ふと、其のまゝ永久に水に呑まれて了つた。

處が又も其の瞬間であつた。悶絶する様な叫び聲が橋の上に起つた。其の聲の主は京作の妻であつた。彼女の小さい女ごゝろは、其の二三日來の悲しい出來事にさへ、旣に幾度か破れようとしたのだ。其の傷ついた心が未だ癒えない中に、今再び此の悲慘な事件に遭つては、最早や女ごゝろは堪えられなかつた。而して彼女は橋の上で、鋭い呻き聲と共に悶絶したのである。彼女の不意に倒れたからだを、誰も支へる暇がなかつた。よし其の暇があつたとしても、其んな丸木橋の上で、倒れる人のからだを支へる事は、倒れる人と共に、助ける者も一諸に川中へ落ちることに外ならなかつた。

さうして哀れな母親は、其の子の後を追ふやうに、再び人々のあツと云ふ叫び聲に送られて、激流と共に流れて行つた。激流は母と子とを同じ所に連れて行つた。唯、前の場合と違つ

たのは、彼女のからだが例の水車の下に流れ込んだ時、如何したのか、今迄廻つて居た水車が突然其の廻る速力を緩めたかと思ふと、ぴつたりと何者にか固着したやうに動かなくなつた。

其れだけの間はほんの一瞬間であつた。然し又實に長い時間のやうでもあつた。ほツと我に返ると共に、京作はからだ中がぶる／＼と震へる程、腹が立つとも何とも云はれぬ、勘忍の出來ない氣に襲はれた。生れて四十何年の間、荒い職業に似合はず、大きな聲で云ひ爭ひをした事もなく、まして人に向つて手足を上げると云ふ樣な亂暴などは一度もしたことのない京作である。が、其の京作の勘忍の緒が切れたのだ。

いきなり、彼は腰に下げた斧に手を掛けた。而してわが子を又其れが間接の原因になつてわが妻を、水に落した男と、彼はふら／＼とした、而し確かりした足取りで、丸木橋の上を後戻りして、一尺と隔たらぬ距離で向ひ合つた。

……あやまつて、此の男は自分の子供を落したのだらうか？ 其れにしても……。或ひは橋に差し掛つた時、先頭の男に何か用事の話をしようと思ひ立つて、それで自分達を通り越して、其の男の傍に行かうと思つたのだらうか？、然し乍ら、然し乍ら、何の爲に、わざ／＼此んな細い橋の上を渡つて居る時に限つて、自分達を追ひ越して、前へ行かうとしたのだらう？ ひよつとすると、始めから斯ういふ手順にするやうに、彼の憎むべき取締人から云ひ付けられて居たのではなからうか？ それにしても、何故に、何の爲に、彼の罪もない小さい子を？ 其の爲めに、罪もない妻を？……

斯う思ふと、京作の頭は怒りの爲に、ふら／＼と焔のやうに燃え上つた。四十何年の間忍んで來た血が一時に頭にかツと燃えた。而して、一瞬の間に、斧を頭の上に、彼の男に向つて、目を怒らして振りかざした。

七

唯一打ちに！……と斧を打ち下さうとする其の又瞬間に、京作は思つた。――だが、果して罪は此の男にあるか？ 若しあるとしても、自分が今此の男を讐として、一思ひに打ち殺して了つたとて、死んだ子や妻が生き返つて來るか？……

其處で、彼は一瞬にして思ひ返した。彼は其男に向つて打ち下す斧を、斜めに、瀑つ瀬をなす川――彼の子を取り妻を奪つた川に向つて、投げ込んで了つた、而して又一瞬間が經つた。

此れも亦、一瞬間と云へば、凡ての事はほんの一瞬間の出來事であつた。然し乍ら其の間に、人々は長い長い、百年も千年もの時間が經つた樣な氣がした。京作は斧を山川の流に打ち込むと共にくるりと踵を返して、靜かに、何事もなかつた一分間前と同じやうに、彼方の岸に向つて歩いて行つた。二人の監視の附添人も唯茫然と氣を失つた人の樣に、その前後に歩いて行つた。

　京作の子を、故意か偶然か、川に落した男は言ふ迄もなく、今一人の附添の男も、向ふ岸に着くと共に、無言のまゝで、交る交るに、恰かも許しを求めるかの樣に、京作の手を握つた。京作も無言のまゝで彼等の手を握り返した。それから、彼等は申し合したやうに、依然として無言の儘で、多分取締人から渡された物であらう、懷中から各々一挺の短銃を取り出したかと思ふと、一齋に其の銃先を谷川の向ふに向けた。而して續け樣に六發づゝ射ち終ると、其れを谷川に向つて投げ捨てた。

　其の有樣を、默つて感慨深さうな目をして見て居た京作は、やがて彼等に向つて、無言のまゝ輕く別れの挨拶をして、一人で麓へ差して道を行かうとした。

「何處へ？」と其の時彼の子を谷川に突き落した男が、追ひ縋るやうに京作の袖を取つて尋ねた。「あなたはこの土地を追はれて、これから何處へ行かれる積ですか？」

「其れは自分にも分らない。」と京作は答へた。

「どうか、私達にもお供をさして下さい。」と二人の男は同時に叫んだ。

「其れは不可ない。」と京作は靜かな、落着いた聲で答へた。「君達は別に追はれた者ではないのだから、出來るだけ彼の山に居給へ。彼の山を出て、何處にあれよりも平和な所がこの世にあるものか？　だが、自分は其の平和な、自分の生れた故鄕に居たくても、今は居られない身分になつたのだ。而して……此處で京作の目は俄かに曇つて來た。だが、彼は泣かなかつた。而して言葉を續けた。「自分は生れ故鄕の代りに、これから「心の故鄕」を求めに行くつもりだ。左樣なら、無事に暮し給へ！…………」

・・・・・・・・・・・・・・・

だが、京作は其の「心の故鄕」を何處に求めたのだらう？　彼は心の故鄕を、一年前に別れた、彼の娘に見出さうと思つたのではないだらうか？

左樣だとすると、彼は更に更に彼の心を痛ましむべき事が、

彼の前途に待つて居たことを知らなかつたのだ。

實に彼の娘は様々の浮世の浪にもまれて、心ならずも所謂淪落の淵に落ちて居たのであつた、處が、更に不思議なことには彼女は京作の主人なる。M――製板會社の、行方不明になつた一人息子と深い戀仲になつたのである。其れ迄は未だ良かつたのである。

處が、京作が山を出る一週間程前に、社會主義者の群れに、居たまらなくなつた、かのM――會社の社長の息子は、京作の娘と共に再び人々の目から消えたが、それから三日目に東海道H――驛附近で、鐵道心中をしたのであつた。

此の物語は、全然事實に基づいて書いたものではあるが、其れ等の事を餘り詳しく書いて居ると、事實其のもの丶餘り不思議な爲めに、架空談の如く見える恐れから、及び制限された紙數も丁度盡きたので、又後日を期して此處では省くこと丶する。

其處で、京作は山を下りて、娘の死、主人の息子の死を知ると共に、彼の所謂心の故郷を、誰も同じ、靈水に求めたと丈け話して、此の物語の筆をおかう。――此れは今から二十年餘り前、明治三十年頃の話である。

かの谷川の水車は、其時以來、今も何者かに抑えられて居るかの如く、瀑の瀬をなす谷川の中に、石の様に動かぬま丶にあるさうである。

(了)

國際勞働委員評――委員に對する要望

理解せよ

慶大教授　阿部秀助

近く實現せらる可き國際勞働會議に派遣せらるゝ政府、資本家及勞働者の代表者に對して論者の希望する第一の條件は相互の間に於ける理解を充分ならしむるにあり、蓋資本家と勞働者とは一見其利害關係を異にするが如きも然かも國民經濟の組織者たり創造者たる點に於て兩者に輕重のある可き理なし、又政府の如きも、以上兩者の利害關係を調和する點に於て一種の國民經濟の組織者と云ふを妨げず、斯くて以上、三種の代表者は常に自己の立場を考察するに國民經濟の廣き見地を以てし、其間、眞の理解と互讓とを以て各自の使命を果さんことを希望せざるを得ず、何んとなれば勞働問題の根本的解決は鬪爭の産物にあらずして調和の所産なりと信ずればなり。

更に論者の希望する第二の條件は以上の代表者が徒らに問題の提供者を以て任ぜざることとなりとす、想ふに米國は問題の製造國として、特に

日本に對する問題の製造國として轉日驚目の狀態にあるものなれば出來る丈け彼れに好個の餌を與ふるが如き態度に出づることなからんことを希望せざるを得ず即ち山東問題以外に國際的波瀾の種子を蒔くが如きは我等國民の欲せざる處なり、特に鈴木氏の高潔なる精神に訴えて其自國政府に對する反感を移して彼れをして口實を得せしめ少くとも我邦の誠意を疑はしむるが如き態度に出づることなからんことを希望す。

何も彼も相談づく

某省參事官

御答へします。

今度の勞働者の代表者選出は始めから政府が書き下した芝居の筋書を其儘に實現したと云ふに過ぎますまい。――と世間一般に思はせる樣な結果になつたのは、勞働界の前途の爲めに殘念です。本多博士も高野博士も、何だか道具に使はれた樣な氣持がすると、世間で疑て居るのは好いとはないと思ふ。

世界改造の鍵鑰を握れ

惠美東臺

嚴肅なる人文史的意義より觀察せば、這次の國際勞働會議は其實質に於て寧ろ巴里の講和會議よりも重大なる價値を有するものである。所謂世界平和の名の下に恣らアングロサクソンの勢力と利權とを擁護し伸張する事に成功したる不合理極まれる國際聯盟をして、若し幸に多少にても人類の歷史に貢獻あらしめ得べき可能性ありとせば、それは疑ひもなく國際勞働會議の任務が完全に行はれた時である。少くとも國際聯盟に含まるゝ幾多の錯誤と對獨條約中に强制せらるゝ幾多の過失とが合理的に矯正し改善せられて世界改造の實に副ひ得べき機會ありとせば、先づ一に國際勞働會議に指を屈しなければならない。

西園寺、牧野兩委員の歸朝を歡迎して凱旋將軍に對するが如き榮譽を與へたる日本國民が、今や勞働會議に出席すべき代表者を米國に送らんとするは寧ろ大なる皮肉である。國際聯盟と對獨條約とを勝利の表徵とし人文の光輝として盲目的に調印せることが何の躊躇もなく、又何の反省もなく歡呼に價ひするならば、政府と資本家との外に、勞働代表者を華盛頓に派遣するは無用の沙汰ではあるまい乎。然り、政府と資本家の外に、勞働會員より成る國際會議を開くといふことは、それが國際聯盟の實質的改善を意味して世界改造の合理的運動を要求するものたるや言を俟たぬ。故に巴里の講和會議に滿足せずして其撞着矛盾を明確に認識し獲得するものゝみが這次の國際會議に臨みて敢て使命を辱しめざることを得るのである。

巴里會議に於て與へられたる主要なる議題は勞働時間の限定、夜業の禁止、婦人少年工の制限等極めて平凡なる――其平凡なるものすら日本に在つては頗る重大なる――ものである。併し此等の問題は專ら政府と資本家とを代表する人々によつて提出商議せられたるものに過ぎない。從つて國際勞働問題が單に此の如き範圍に局限されてゐるのでは無い。否な此の如き事項のみに局限されてはならない筈である。旣に人種問題に敗れたる。我當局者が國內に於ける差別的待遇の撤廢――即ち勞働者に對する何等の施設をも有せざる時代錯誤の事實――に反省する所なくして依然として無用意、無方針、無理想の態度を以て其代表者を送るが如き事あらば、吾人は其委員の頭腦如何に拘はらず、絕對に之に信賴することが出來ない。

勞働は商品に非ずとの原則は決して勞働時間の制限や物質的待遇の厚薄や、婦人小兒の保護等に依て充實さるゝものでない。端的にいへば勞働の人格化である。卽ち人間としての存在と價値とに資本家と勞働者との差別を容認せず、其故にデモクラシーの徹底を要求するものである。歐米近時の勞働運動――鑛山國有、生產管理の要求等――は蓋し物質的待遇問題を超越したる人文的、道德的原理の上に立つてゐるのである。換言せば人が人としての自由を確保すべく、資本と勞働とに依る差別を

非認することが最近勞働問題の焦點となりつゝある。而も我政府及資本家の代表者は這般の新思潮に對し何程の理解がある乎。八時間勞働や夜業禁止に除外例を求めて止まざる人その頭腦に上記の趨勢が適當に了解せられてゐるだらうか

人が人としての自由を要求する上に於て國別的なる差別は禁除である。デモクラシーの合理的發現は必ず世界的であらねばならない。故に勞働は商品にあらずとの原則は總て人の移住民種の無差別を確保すべき國際的原理を築き上げねばならない。是れ即ち巴里會議に失敗せる人種差別撤廢主義を貫徹し、移民の自由を承認せしむべき絶好の機會を國際勞働會議に附與するのである。曾て呼號せられたる海洋自由經濟的障壁撤去等の世界的公理が英米の妥協に依りて極めて曖昧に葬り去られし事を記憶するものは、「人が人としての自由」を要求し確保せんとする國際勞働會議に於てのみ如實に之を復活し得るのである。前に吾人が國際聯盟の錯誤を匡正し對獨條約の過失を改善すべき眞の人文的貢獻を國際勞働會議に期待せざるべからずといふは之が爲である。

此故に、若しも我國の代表委員が國際勞働會議の實質的價値を善解し、歐米最近の思潮に就て深く會得する所かあつたならば、巴里會議に於ける失敗を回復するが如きは寧ろ問題では無い、更に進んで國際聯盟の不合理なる箇條を修正し、英米の妥協に由る資本的帝國主義の非違を打破せなければならぬのである。借問す日本の委員に果して是れ丈の理解と自信と用意とを備ふるものありや。

吾人の尊敬すべき鎌田榮吉氏は最近の勞働運動に對して何等の知識を有してゐる乎。吾人は常識博士の稱名を有する鎌田氏を知り、資本家の子弟を最も多く收容しつゝある慶應義塾々長としての鎌田氏を知り、併せて貴族院に於ける政友會系の一勅選としての鎌田氏を知るに過ぎない。それは曾て早稻田大學の學長たりし高田博士が大隈内閣の文相となりしと同樣の意味に於て原内閣と慶應との關係を緊密親厚ならしむる効果があるかも知れない。併しそれが國際間の人知識と政府の訓令とに依て活動すべき代表者の名聲を何程高め得るだらうか。

更に資本家の代表者たる武藤山治氏に至つては、最も熱心なる勞働時間及夜業禁止等の除外例主張者として選出せられた人では無い乎。同氏は多年勞働問題を研究し、且同氏の管理しつゝある鐘紡は職工保護法の比較的に完備せる會社として傳へられてゐる。此點によりいへば同氏は他の何人にも優れた好代表者であらうが、先頃同氏の名に依て公表せられたる鐘紡の營利辯護論を一讀せるものは、日本の實業界に於て最も人格高邁の評ある同氏の如きすら、如何に其頭腦が頑強なる資本家主義に依て堅められてゐるかを痛感せずに居られなかつたらうと思ふ。資本家の眼を通して見たる世界的と人生觀との外に、何の哲學、何の論理が該論文の中に發見される乎。人としての武藤氏は溫良なる紳士であり斯業界の學者であつても、資本家としての武藤氏には知識が其性情に襲むつてゐる。斯くして我政府の資本家の受取れる任務の前には内的差別を固執しつゝ世界的なる人種的差別撤廢を主張せる巴里會議の代表者と同一

の運命が待設けてゐるのである。

とはいへ、吾人は別に勞働界の代表者を有してゐる。國際勞働會議は政府と資本家とを中心とするのではなくて、勞働者を主人公とする會議である。國家の名に依る委員の會議ではなくして、國家の差別を撤せる勞働階級の會議である、巴里會議は横斷的に各國を聯ねたる會議であつたが、華盛頓會議は縱斷的に勞働者の對世界的事業を目的とする會議である。政府の資本家代表者は縦斷會議の脇師であり、參考人である。脇師や參考人は如何にともあれ、希くは我勞働界の代表者をして卑怯なる時代錯誤に陷らしむる勿れ。そは單なる勞働者の榮辱浮沈に止まらずして世界改造の鍵鑰を握るものたるが故である。(九、一五)

官選勞働委員の愚

鈴木文治

國際勞働委員の選定に際して、予の執れる態度に關しては、世上二樣の議論がある。一は是認にして一は否認である。否認せる人々の議論の根據が那邊に存するやは、聊か諒解に苦しむ所であるが、尠なくとも國際勞働會議本來の目的と精神とを理會して居る者であるならば、今回政府の執りたる委員選定の方針が、全然是認すべき性質でないことが明白となるに相違ない。其理由として予は左の各項を擧げて他日の爲めにしたい。

地方委員の官選 元來勞働者を代表すべき委員は、其國の勞働團體を基礎とするを元則とすべきであるが。日本は未だ勞働組合存在せずとの理由の下に、政府は現に各種の勞働團體の在るを無視して、各地方長官をして各府縣工場主に對して代表者の選定を一任した。政府は果して其當初に於て眞に勞働者の代表者を選定すべき方針の指示を爲したりや否や、予の知る所を以てしては、殆んど政府と地方長官との相談づくにて地方長官は更に資本家と相談ずくにて自己に都合よき委員を選出することに苦心した、其爲めには干渉をも敢てした。現に新潟、兵庫北海道其他數縣に於て、政府干渉の實證を予は入手して居る。斯くして選ばれたる七十五人の代表者が、其三分の二は官選代表者にして、且資本家の代表者であつたと云ふことは當然の結果である。

資格審査を爲せるや 更に此等の地方選出委員に對しては、政府は其資格を審査すべきが當然であつた。七十五人の代表者は果して勞働階級を代表する資格ありや否やは、政府當局に於て當然審査せねばならなかつた。然るに政府に於ては地方地官の報告し來れる協議員に對しては、何等の資格審査をも爲さず、其儘有資格者として受け容れ、勞働者の代表者として待遇し特權を附與したのである。是れ全く官選代表者たることを裏書するものなると共に、政府に都合よき資本家代表者が協議員として送られたる順序であつたのである。斯くの如きは果して國際勞働規約の目的と精神とに合致する所以なりや否や。

國際勞働の精神とする所は國際勞働の民主化である。然るに日本の政府が全然此精神に裏切つて、官僚的、專制的態度を以て此問題に對し、殆んど此精神と目的とを沒却して恬然たるは驚くべき大膽なる行爲なると共に、又驚くべき反世界思潮的行爲である。由來日本は官僚主義、軍國主義、專制主義の權化と稱せられ、五大國の一として連つた資格の大部分は、其軍隊の力に在つたとさへ云はれる現狀を以てしては、飽迄此現狀を打破して國際的誤解と恐怖とを除去するに力めねばならぬ。然らざれば遂に孤立の窮狀に到着することは火を睹るよりも明かである。然るに今回の如きデモクラチツクな問題に對して、斯くの如き官僚主義專制主義を發揮して恬然たると云ふのは是れ世界の日本に對する誤解に對して、一層力強き裏書を自ら與へたるもので、其愚や蓋し及ぶべからずである。歐米の勞働階級——夫等の代表者が、此顚末を詳細に知るに及んでは、必ずや異常なる反感と、忌憚なき痛罵とを試みるに相違ない。其結果華盛頓の勞働會議に於ては、必ず日本の委員に對して非常なる反感と苦言とを見舞ひ、日本の委員は全然除外せらるゝの不面目を演ずることは、今日より明かなる所である。又對米國交の上にも、更に排日的氣勢を煽り、米國上下の感情は次第に日本と疎隔を來すべきことは、今日より想像するに決して困難ではない。

斯くの如き重大なる、而して國家的に一大損失を來すこと明かであつたが故に、予は飽迄正當なる主張を固守して政府の反省を求めたのであつたが、遂に省る所とならなかつた。邦家の前途の爲め、特に世界思潮に逆行せんとする日本國の爲めに、眞に歎息せざるを得ない。（九月十五日）

「紺屋のあさつて」掛り

山本實彥

外見だけで評せば、堂々たる鎌田榮吉君、武藤山治君、それ等の人々が「紺屋のあさつて」掛りの任務を帶びて渡米することを、國民はポンヤリ坐視して送らねばならぬことになつた。(1)國民は大使の勞働問題に對する意見を知らざること即ち今回の派遣が國民と沒交渉となること(2)勞働會議に於ける日本の主張なきこと。ありとするも日本一般の主張と相容れざること(3)主張、主義なきものに眞劍の態度を見ること至難也、眞劍にあらざる勝負は列國に誤解を招き、隨つて日本勞働運動を挫折せしむ。

以上の要點を具備せずして人道上の最大問題を解決せんとするは不可能也。日本國民總ての後援と、正義の念より發する強き信念とを兩々相持して、正々の陣を張つてさへ、資本の偉大なる暴力には打克つことが至難なものを、國民の後援もなく、自己に經綸もなくして、華盛頓三界まで出掛けた所が、それは單に紺屋の番頭の役目しかつとまらぬ。まして、武藤君にしても、鎌田君にしても、協調主義とか云へる政府の「助け船」で出かける人に於ておやだ。日本人は米を喰つて、私服を着

て茅舍に住んで阿彌陀佛のありがた宗に歸依しておるから、資本家をも神佛と思つておるのか知らん、資本家から見れば奴隷同様だと考へておるのか、兎に角八時間制賃銀問題等一切の問題に延期を申込む豫定だ。その豫定が既に勞働者の人格を認めていないことになつておる。そんな人物に對して、何等の期待もなく、別段の興味も起らないのは當然ではあるまいか。そこに眞劍に主張さるゝ人道上に根柢のあるものならば、無理な註文もするし、熱心な希望も陳べるが總てに對して罪である委員諸君に對しては苦情のつけやうも、註文の仕様もない、パンを喰ひ横文字を讀む勞働者だけが、資本家と對等の權利に生きて、我が勞働者が協調主義てふ慈善袋に入れらるゝものならば、弱きに味方して好んで喧嘩に就く江戸つ子は勞働者の爲めに大に戰つてやらねばならぬ時である。府縣に勞働者の人選を頼んだり、そしてその代表者から選定された勞働委員には遺憾ながら論評を避けたい。農商務省に於ける選定會議に於ける純勞働者の活動は、目醒しいものもあつたが、しかし駄々兒の戰見たやうに訓練が缺けていて、知識の著しく低いことや、政府者の勞働問題に對する態度の幼稚の事から考察して未だ日本の勞働運動は前途遼遠であると思はせた。

我が勞働者代表者團に送る

山田わか

巴里の平和會議に於て議せられた諸問題のうちで最も重要なるものは三ツであつて、そして、其れは戰爭ノ責任者、戰爭中に行はれた罪惡の責任者、及び、國際勞働立法であつた此の平和會議中、國際聯盟に關する問題は第二回目　會議迄　議題にのぼらなかつたけれども、國際勞働立法の問題は第一回の會議に於て討議された。これによつても國際勞働立法問題が如何に重要視されてあつたかゞ了解出來る。

此の國際勞働會議の形式は勞働者が主であつて、勞働者の提案を資本家に認めさせ、そして其の方針に從つて政府者に施政をとらしむるため、勞働者代表者と共に資本家代表者政府の代表者を出席せしむるのだと云ふ事である。然しながら、此の國際勞働會議の設立の動機は何であつたかをたとつて見るならば其れは少なくとも一部分は bolshevism に對する解毒藥であると云はれてゐる。もし、勞働者が不滿を續づけ、資本家並びに政府に對して激昂して居るならば、又、國際間の從來の經濟上の競爭が勞働者の保護を破壞し再び其の競爭が復活するならば、平和は到底不可能になるに相違ない。其處で勞働者の要求に對して資本家が讓歩策を講ずる事が此の勞働者の不滿を一掃するに必要であると云ふ事になつたのである。故に、此の國際勞働會議の種は巴里に蒔かれて、そ

して、其の芽が此の十月ワシントンに於てふくわけてある。

此處に我々が注意しなければならぬ事は、bolshevismの存在、及び、其の益々盛んになろうとする傾向と、そして、勞働者の不安殊に戰爭中一層烈しく釀造された勞働條件の不滿とによつて國家其の自身が可なり危險に瀕してゐた事や、又、戰爭中に政府が勞働者に誓約した事實の存在する事によつて此の國際勞働會議は成立した事である。そして、其れは、勿論、英、米、佛、伊、及びベルジアム等であつて、そして、日本は其れ等の國と同じ程度に此のbolshevismに對する防禦策の必要を感じてゐるものではない。故に本當は彼等と一樣に論ずるわけには行かないのである。我が國の勞資の問題は歐米各國と比較すれば非常に不安全ではあるけれども、併し、此のbolshevismの防禦に關しては歐米が感ずる程ひどく感じてゐないのである。

けれども、前記諸國の餘波を受けて、唯、模倣的に幾分か其の傾向が我が勞働界に見えるのである。歐米各國に於ける程、我國にblshevismの起らなかつたのは勞働者の無自覺によるか、それとも勞資の自然の調和が歐米の其れに比較して宜しきを得てゐるのか、其の點はしばらく讀者の批判に任せて置くがとにかく我が勞働者が他の先進國の勞働者、殊に、英、佛、伊、の勞働者と比較すると、外面はどうであれ、實際は都合よき狀態にある事は爭ふべからざる事實である、其處で我が國が此の國際勞働會議の委員に任命されたのは、いはゞお相伴を仕つたのである、丁度、たとへて見ると英、米、佛、伊は火事の類燒者で我が國は近火に遭つたのである。此の類燒者と近火に遭つた我が國が一所になつて火事の善後策を講じやうとしてゐるのである。利害が一致しないのも無理はない。

處で、此の勞働會議は國際の見地から勞働の條件を研究し、其の條件に影響するあらゆる事柄に關して共同行爲をとるの必要は國際的手段を、國際聯盟と共に國際聯盟の命令に從つて講じやうと云ふわけである、國際聯盟だけでは未來に於ける國際間の困難を充分に防ぐ事は出來ない。どうしても產業上の不正義に對して相當の救濟法を講じて置かない事には國際間の平和も並びに一國の平和も保てないと云ふ考へから出立したものである。勿論、一度に其れ等の產業上の不正義を除去し得るとは彼等は思つてゐない。其れ等の不正義を除去するに付いて國際的に努力し得る機關を造ろうと云ふ事らしいのである。

產業上の不正義に對抗する勢力を世界は缺いてはゐないと云ふのが彼等の信仰である一地方的に成功した進步を一般に及ぼさしめやうとする時に其の機關を缺いて居ると云ふのも亦彼等の信じてゐる處である

又、產業上の競爭に於て勞銀の高い先進國は勞銀の安い後進國によつて絕えず其の進步を妨げられてゐると先進國の資本家並びに勞働者は信じてゐる。隨つて、此の國際勞働會議に提出されやうとしてゐるカケ條は後進國の產業狀態が先進國の產業狀態を害してゐるから、其れを改良しやうとして草案されたものである。云ひかへれば、我が國の如き產業國は彼等にとつては强敵なのである。此の强敵をして彼等と競爭なし得ざ

ど程度に壓迫しやうと云ふのだ。彼等の表面の云ひ分は何であれ、彼等の精神に違ひないのである。

如何となれば眞に世界の勞働者の幸福を計ろうとするならば各國に平等なる權利を與へ義務を負はせ其の結果として各國勞働者の自由、職業の自由、又は、歸化權の自由、人種の偏見に對する感情の撲滅等から建設してかゝらねばならぬ筈である。しかるに此の勞働會議の發意者なるそも〳〵米國がそう云ふ不正義を平氣でなしてゐて、そして、此の勞働會議の條項を各國に、殊に、我が國に行はしめやうとして居るではないか。

如何なる事情のもとに我が政府がこれを承諾したかは知らないけれども、我が國の此の會議に參加する代表者達、殊に勞働者代表者達は此の點をしつかりと腹に押へて置かなければならない。

一體、今日の勞働問題の核となつてゐるものは、最も穩健に見つもつて勞資の關係を對等にしやうと云ふ處にある。して見たならば此の原則をあの九ケ條の第一條に置くべきであつた。我が勞働者代表者は第一に其處を力說しなければならない、前にも一寸云つた通り此の勞働會議は殆んど米國の發意によるものであるからして、これは米國が第一に實行しなければならぬものである。しかるに米國では我が國の資本家と勞働者を對等に扱つてゐない。則ち、日本の資本家は自由に米土に踏み得るに反し、勞働者の入國は禁ぜられてある。此の不平等な取り扱ひは米國の勞働者の要求であつて、そして、其の勞働者の代表者はゴンパース氏である。我が國の勞働者を極力排斥してゐる、我が國勞働者の敵と見ても差し支へない其のゴンパース氏に、やゝもすれば打電をするとか訴へるとか云ふやうな事を、我國の勞働者の利益を計ろうとするものが云つて居るのはどうした事であろう。一國の事は一國で仕末をつけるが當然である。しかるに人もあろうに日本の勞働者を極力排斥して、殊に、日本の資本家と勞働者を對等に扱つて居ないゴンパース氏に國內の不平を訴へやうとはどうしたものであろう。

最も此の勞働會議は國家を超越して、各國の勞働者の利益を計るためだとあるけれども其れは名のみであつて實際には決して國家を超越できるものではない。もし、又、國家を超越して勞働者の利益を計るのだとするならば、そんならば、猶更、米國勞働者も日本勞働者も對等に扱はなければならない。そして、我が勞働者が米國へ入國出來ないなどゝ云ふ事は以ての外の不正義である。ゴンパース氏に賴らうとする人にこゝの處を考へて貰ひたいと私は思つて居る。

今回の提供されてゐる九ケ條はベルン會議の延長たる事は明らかであつて此の條項は確かに勞働者を瞞着した文句であるが、それはそうとして、かやうな國際勞働立法を如何に執行すべきかは最も困難なる問題である。先づ、國際勞働會議の立法と行政とを考へて見やう。立法に於ては英國や米國の勞働者が相像しがちであるやうに、何處の國へもすッぱり合ふやうな法律がありやう筈はない。一般デモクラシーの名によつて各國と同じ條件を强ゆるなどと云ふ事が出來る筈のものではない、そう

單純に事が運べるものではない。

成程、何處もかしこも同じやうにしやうと云ふ事は正しい考へに相違ないけれども、列國を一ッの平面に載せやうと云ふやうな事は出來るものでない。むしろ、列國の狀態は階段のやうに考ふべきである。云ひかへれば各自の平面と云ふ事が世界共通の大原則でなければならない。勿論、もし我々が進歩の平均率を最大限度に持たうとするならば則これがもッと具體的に云つて、世界の勞働狀態を平等にしやうとするならば、單一の條件のもとに各國の勞働狀態を律するのではなく各國内に平面を造る事であらう。これをもう一度云ひ直せば英國は英國内で最上な條件を、米國は米國内で最上　條件を、日本は日本内で最上な條件を一般に行ふ事である。

決して、米國の平等を日本に行ふ事でも、日本の平等を英國に行ふ事でもない。各國の習慣、氣候、直接の經濟狀態を無視する事は有害であり、又、不可能である。一國内の法律ですら南方に行はれて北方に適用出來ない、東方に有効な法律でも西方に役に立たないではないか。そう云ふ例は合衆國内にはかたッぱしからある。

就業時間に關しても各國は各々其の國の目下の事情にてらして決定すべきである。勿論、過度に長時間な勞働は確かに有害に相違ないけれども、これは一時に改良出來る問題ではない。これを一時に改良しやうとするならば、却つて其の目的が破られてしまうと云ふ事は私が此處に說明する迄もない。賃銀に關しても、違つた氣候違つた人種の間に於ての必要品は習慣が違つてゐるやうに違つてゐるから賃銀の購買力も自ら違つてゐるわけである。たとへば、大抵の伊國の勞働者のために非常に都合のいゝ最少限度の賃銀も英國に於ては無意義であらうし、又、英國に於ける公定の賃銀が合衆國に於ては惡賃銀であるかも知れない。勿論、最高率の賃銀を各國内に於て實行するやうに國際勞働會議は奬勵する事は出來る。併し、其れを實際に直ちに行はせる權利もなし。又、無理に行はせるならば其れは大變な有害になる。

英國の經驗によると、勞働法の執行には檢分と刑罰が最も安全で有効な方法であると云ふ事であるが、併し、同じ法律を執行するに當つても國々によつて大變な相違がある。勞銀局を設けるに付いて佛國は英國にのッとッた第一の國であるが、けれども佛國の勞働者は最少限度賃銀率を請求する權利があるけれども、もし、請求しなければ、たとへ、雇主が其れを拂はなくても其れは勞働者の手落ちだと云ふやうに考へられてゐるに反し、英國に於ては其れを拂ふのが雇主の義務になつてゐて、雇主はきびしい檢分を受け、もし、其の最少限度賃銀が拂つてない、場合には雇主は告訴され罰金に處せられるのである。こう云ふ風であるから、たとへ同じ法律を各國のために造つてもいよ／＼これを實行する場合には違つてしまはなければならない。そんならば始めから其の國其の國に適した進歩的な勞働法を造つた方がましてある。

其處で我々はとれだけの抱負をもつて此の勞働會議にのぞむ事が出來るであらうか。第一に資本と勞働を對等な位置に置かねばならぬ事は前

にも云つた。これは各國內に於て勞働者と資本家が對等な扱ひを受けるのみならず、國際間に於ても此の對等の扱ひを受ける權利を認めさせなければならない。たとへば、我が國の勞働者が米國へ行くと假定する。今日に於ては移民法のもとに米國は全然これを禁止してゐるのであるが。米國が我が資本家に對して何等の制限を用ひてゐないやうに勞働者に對しても其の禁止を解かなければならない。我國の勞働者が米國の勞働者間の規約を守る以上は我が國の資本家が米國人から受ける取り扱ひを受ける權利がある。

如何に國內の事情に違ひがあつても對等の取り扱ひを與へる事は何處の國でも可能であると私は考へる。しかるにこれをなすをがえんじない以上は、彼等の良心を疑はざるを得ないのである。

前にも云つたが、各國の國內の事情は同じものでないから、同じ法律が行はれる筈が無い事を我が代表者は力說して我國に不利益なる立法には極力反對される事を私は望む。そして、これは普通の外交とは違つてかけひきのありよう筈はないのであるから、事實と眞理とによつて出來る問題で、正直な人である以上は誰にでも出來るわけである。もし、これを贊成しない委員があるとすれば其等の委員は必ず私の利益の上に立つて居るものであると見て差し支へないものであらう。

婦人に對する立法に付ひて委しく述べたいと思つて居たのであるが時間が切迫して來てゐるから、簡單に少し計り云つて置かうと思ふ今日の婦人勞働は決して自然の發達ではない。從つて、今日の婦人勞働の狀態を基礎とした婦人勞働法は決して健全なものではない。現に米國の如き婦人勞働の盛んな國に於て、最近に、最も進步した最も着實な男女の思想家のうちから婦人の使命は屋外勞働以外に存すると云ふ聲が現はれ、殊にカルホン博士の如きは米國建國以來の家族史を現してこれを立證してゐる。

婦人の大なる使命は單なる勞働以外に存する事を認めて、現在の婦人の勞働狀態を改善し、近き將來に於て、婦人は婦人の眞の使命を果し得るやう、則ち、男子に對する婦人としての位置を勞働者としての資格以外に認めさせるに妨げとならないやうな條件を提出しこれを國際勞働法案として實現せしむるやう努力させる事を私は婦人顧問に希望する。

則ち、婦人のマタニチーを保護する事が婦人立法に關する最大なる要點である事を私は此處に云つて置く。

大正八、九、十八



院展二科展の行脚

岡本一平

▽院展の見物に行く人は今年は誰によりどんな菜で一番鋭く快く驚かされるだらうか、こんな新歸朝の手づま遣ひに對するのと同じやうな樂しみをあらかじめ心に用意してそれからあの海老茶色の垂幕が漂はすいやに勿體振つた深刻そうな會場の入口へするりと入つて行く。尤も、餘り面喰はされても馬鹿々々しいから兩手は相應にかたく握り乍ら、それから、はら〳〵して面白がりに行く自分の耽奇の心をすさなしと笑ふ唇邊の微笑をあながちに捨て去らずに。入つて行く。

▽明治の名僧であつた南隱といふ和尙が今の坊主はみんな虫熟菓（むしいろみ）の坊主ばかりだと云つた言葉を記憶する。赤くなる時期でも無いのに虫が喰つた加減で菓物が色付いたと同樣に赤くなるこれが虫熟菓。時節因緣の到來をも待たず、修業の肥しを充分に遣りもせず無理に早く悟りの熟味をつけて仕舞ふ坊主は虫熟菓と同樣だといふ和尙の意味である。若しこの和尙に院展の日本畫を見せたら、なんだ虫熟菓の流行は坊主許りでは無かつたといふ事だらう。

▽列んだ畫には利巧ものが澤山多い。古人が一生がゝりで自然をあゝでも無いこうでもないと段々らんぴきにかけて、蒸溜したエッセンス、——畫技の成る丈け目に新らしい處だけ無斷借用に及んで、露骨に云へば泥棒して洋畫風の心にタッチするといふ膠をたつぷりまぜて思はせ振りに塗り並べる。それでやんやと來る。自然から自分の手で新らしくらんびきする藝術の第一根本義。その勞を厭つて人のらんびきしてあるものを人知れず物して來る者が新人でその年の流行つ兒だ。物するのを怠つて、少し〳〵自分の見解で描かうとしたものは直ぐにお里が知れて、見物口を揃へて「あいつも頭が古くなつて行き止りだ」云々といふ。

▽第一室から片つ端しに話して行かう。小川芋錢氏の『樹下石人』は

現在一升六十二錢の價段の米の厄介に成つて居乍ら、霞を吸ひ花を食つて生きてると妄想する妄人の拵だ。山村耕花氏の「玄奘三藏」は引延しの勞を多とする。原圖は嘸よいものだつたらうを萠く生命無きものにするには可成り骨が折れたらう。近藤浩一路の「夕の日」―「霧」―「朝の日」は、新人の新鮮さがあり自然をちらと睨めた處がある。玉村方久斗氏作平家物語の「燈籠大臣」「〇」、「夢」、「沒落」繪卷物中の人物を未來派の說明の仕方に運び入れて物語を動かす價値の多少に從ひその人間に大きな小さな甲乙を付けて描き分ける思ひ付きは昨年は受けた。その手を今年又出したは、いつも柳の下に泥鰌は何とやらだ。川端龍子氏作「安息」「土」金泥を具最に和へて亞洛掘つた塗沫繪の具がたまつて「安息」の中の家やもろこしが涙を垂れてるやう。「土」と題して麥畑の麥の蔭に烏天狗の子のやうな雛が巣に居るは觀者に書解きを求め筆者の安心の在る處を誇示する女學生がやるやうな謎を投げかけるは幼ない。筆谷等觀氏作「[illegible]」は私は相變らず大觀先生の摸倣者であつて先生は進んでるのに私は未だこの摸倣に、停滯してますと明に白狀して居る繪。非上白揚氏作「雨霽」凡味。橋本靜水氏作「五十鈴川」凡味、

▽第六室の富田溪仙氏の嵯峨八景は松の木だのお宮だの橋だのが空白に散漫に抛り出され當惑して浮かぬ顏だ。荒井寛方氏作「雪山の瀕婆」「薫風」道具立てと、押しの強い色調で何ものかを觀者に受取らせやうと何ものも無いのを無理に懇直に口說いてる。長野草風氏作「宵謝」構圖の大膽をもつて驚かそうとして驚かし損ねた。

小林古徑氏作「麥」最美しく最手ぎわよき、虫勢實の代表者だ。氏の出世作「阿彌陀堂」にたゞよひ居りし異端的の暗影が、麥を扱く夏の六月にも此繪にもたゞよふて居る。前田青邨氏作「燕山之巻」誠心無き、筆の先きで、横長い一幅の中に豆の如き駱駝を行列させたり大雨を降らせたりする藝はキネオラマ跣足だ。横山大觀氏は「羅浮仙」、「喜撰山」「八仙花」「山窓無月」在來新路を開拓し來りし描法の中で四種を撰んで更に分類的に描いて見たといふやうな作。投資した金の利子で樂に喰はうといふその料簡悪るからう。大將がこの邊で蹲踞んで仕舞つては後の眞似手が困らう。中村岳陵氏作「潮鳴」凡味。丹阿彌岩吉氏作「牡丹」氏は大觀氏の玄關番にして入撰の榮を得しといふ由緒に相應する丈けの作下村觀山氏作「東坡先生」足は一處に釘付けにされて居て氣のみ進まうとあせつて居る作だ。氣の毒乍らこの大家は藝術の研究とか進歩とかいふものの穿き違ひをして居る。屏風一双二人の人物を除き一面に、薄紅い樣な薄黃ろいやうな不愉快な模樣が塗られあるは、實は木の葉の影が地に投ずる。痕を描いたもので頗る新らしい試みだと筆者自身非常に得意なのだ相なが、觀者には何やら得體らしく描いてるなといふ事だけがうなづかれて描いてあるもの丶何かは一向見當付かぬ。さう云へば屏風一双全面に書畫屋、阿附するもの、旦那に取卷かれて、盲目になつてる大家が、一番描いて見せてやらうといふ意氣だけを動機に無生命の五月人形のやうな二箇の人物を點出し來つた、尨大な無智な在來の日本畫家の大家氣質は見てるとべらぼうで恐ろしくなる。木村武山氏作「彌陀

來迎」筆者はこの畫を描くに就き佛眼の描き方を菩薩の眼の描き方と描き方が違ひますといふ風な苦心談をしてるが、佛眼の描き方を苦心するより宗教畫として筆者の眼のつけ方に生命を吹き入れねば到底彌陀三尊は畫面に親しく來迎して來るものではあるまい。

▽斯くて院展數十の日本畫中唯一の眞道黎明氏の「春日山」を擧げて、兎も角も藝術の正路を踏むもの親しく自然の香氣に薫習され來つて出來上つた愛すべき眞人の製作として推賞致し度い。これ又本年畫壇有識者の一般に認むる所のものその褒め言葉は方々の新聞の批評中に競爭して書いてあるから見たい人はついて見られよ。

▽院展の洋畫といふものが頗る意味をなさぬ。若し二科會と同席しても其處にどのやうな。不都合と主義の相容れないものが發見出來るだらう。皮肉に云へば彼等は院の日本畫の世間へ通りのよい評判に縋つて俺れの通りもよくしやうとする底意があるとも云へる。或は二科會の畫家達と個人間の關係に於て、面白からぬ爲め作品の方向は同じくとも別の住居を作つたのでは無いか。日本畫と切瑳して一の境地を拓こうと僅に試みつゝある、跡の觀えるのは小杉未醒氏の壁畫「出關老子」と片多德郎氏の數作である。そして惜いかな取り入れるものに事を缺いて前者は日本畫よりその纏めるに都合のよい安易（イージー）な猾計と隱者的な氣分と後者は捌けた筆觸と第二義の風流韻致といふものとを受容した丈だ。惜しむ。

▽新歸朝者足立源一郎氏の諸作は切尖の左程鋭くない手丈夫な例の近代畫家の畫だ。山本鼎氏の貧相を描く主張に相應はしい材料を扱つて、「ダリヤの花」と「町長の肖像」は一歩間違へれば月並のとんだお茶番に墮する所に踏み堪へ嫌味なく仕上げた處には專門家で無くては解せぬ、技群の技倆と信念が覗える。長谷川昇氏の甘い例の裸體この畫人は畫のある工匠と云へる。森田恒友氏の「初夏の川筋」を描いた小品狹く小さく謙つて自然と良心の前に吐息を洩す眞純の姿が見られる丸くつて點々で分厚で强くて愛嬌のある山脇信德氏の諸作。茶づけで干魚を食ふやうな、なつかしみと日本人の特質には適當なといふ安心のあるうま味と、安價に滿足する、足るを知るといつた風な儒教的の忍從との籠れる。倉田白羊氏作房州の風景の諸作。貧乏しても自然に噛りついてる態度を愛す。

▽二科會の幹部諸君は二科會創立當初の意氣込みと目的を忘れたやうに見ゆる。畫の出來よりも畫に對する勉强の熱意をお互に胸算用し合つて薄めて行くやうだ、彼奴があの位だから今年は俺れもこの位でよからうと、斯くて彼等の畫は年々、内容は投遣り分量と畫材の撰擇が貧弱になつて行くやうだ。ある畫家は數年前洋行した際の舊作を出品して僅に責をふさいで居るやうだ。

▽正宗得三郎氏が印象派より出立して元來大根で興味が放漫でとても物になつてなかつたがこの二三年非常なる力を出して來た。想ふに氏の迷信的な、自然な時刻の印象描寫が刻々効を積んでこの大をなさしめたのであらう。氏の畫の前に立つと總てを抛つて自然に陶醉してる姿に自分も醉はされる。甘き芳烈な、ペルモツトのやうな醉だ。安井曾太郎氏の

二三年來の作品の推移に西洋の妙齢の女の肌を見てそれから追々東洋の君子國のお婆の肌に眼を移して行くやうに感じられる、澁くひすばつて來たが、日本人の觀者に取つて安心を與へる。石井柏亭氏の諸作は柔道で云へば型を遣つて見せてるやうなもの、隙は無いが試合ひ程の熱と油氣が無い、飛び付いて描いたといふ感興の一點も見出せぬ。有島生馬氏の作は如何にも二科會員として出品畫を鑑別する人らしき畫だ。齋藤豊作氏の派手な模樣のやうた諸作は繪を描いたと云ふより繪模樣を置いたといふ方が適當だ。東郷青兒氏の立體派は日本人としての解釋を少しも狹んで無い。

▽二科會の新歸朝者黒田重太郎氏のお土産畫は院展の足立氏に比して鈍重だ。山下新太郎氏のは納まつて追ゝ疲勞して來た。

▽二科會に出品する青年畫家等、硲君と同列の諸公の畫は少くともこれからの日本の繪畫の眞面目な中堅となり得る素質を持つてる。彼等は所謂印象派の色彩に囚へられず所謂後期印象派の形體の解剖の癖に囚へられず、在來の洋畫の如く觀者に御機嫌ようをやらず。年々國民數が殖えて追々生活が逼迫し行く、六千萬同胞の中の一人に生れて日本民族の有つ希望と苦痛に照して有態に自然を見る。その澁辛く哀愁の中に力も慰めも籠り居る心持ちが比較的ピチユーメンを多く遣つた彼等の畫の諸作の中に男らしく、塗り込まれて居る。謹んで祝福する。



見たまゝに

鍋井克之

今私の書かうとするものは美術批評にはならないかも知れない。一つ一つ品定めをしておしまひにその採點をする樣な批評は幸にもこの雜誌の注文でもないので、會場をゾロリ〳〵と歩き廻つて勝手なおしやべり丈けを書く事にする。

元來繪の批評と云ふものは一々分類をしたり、作者自身が知らない樣な大層もない崇高な美學論などを喰付けるのは、作者に取つては何の効能もない事で、私などより云ふと、この作品は嘘か、眞か、嘘なら何處が嘘か。眞ならどこが眞か、たゞそれだけで案外片がつきそうに思ふ。若しその繪からいろ〳〵な面白味を引き出して來て感心する仕方で行けば、誰れがしたとてその方法では仲々公平な判斷がつくものではない。日々繪に苦勞して歲月を積めば積むほど段々にその好みも變つて來る畫家の方ではなるべく人の氣付かない樣な樂しみを一人で悦に入りたがつたりする。つまり畫家が終ひにはクラシックの味を求めて來るのもこゝの事である。如何に見巧者な批評家でも筆を持つ者の眞底の心は十分に汲めないであらう。それが文學者などになると批評そのものゝ論說に淫し過ぎて六ケ敷い餡子でものゝ解りを何惡くして居る樣な場合さへ往々にしてある。すぐに引合ひを泰西の古名畫にもつて行く樣な學校仕込みの批評もあまりあてにはならぬ。私の希望ではそれが野菊であるか、牡丹であるかを云ふ人があればいゝので、野菊には野菊の眺め方があるから、菊にダリアを接木して喜ぶ眺め方を排斥さへすれば、野菊に牡丹の艶麗を求める必要がない譯である。それにしても兎に角批評は萬全を期し得られないものとして私はあまり心に留めないのであるから、私の云ふことも穴勝ち諸氏が氣にする必要もない事を申し添えて置く。

今私は日本畫に就て云ふ餘裕を持つて居ないが、只一つ近藤浩一路氏の繪の前では聊か感あつた事を告白する。且つ岡本一平氏の川端龍子論なるものに感服した私は、亦最近の近藤浩一路論（共に中央美術所載）なるものに熏れて敬服した次第である。それに依ると『近藤も今は漫畫の畑に潜んでゐるが、日本畫で風が切れるやうになると早速飛び立つ鳥じゃ無いかね』と云つて、これは嫉がらせであると斷つて居るが、終にこの嫉がらせが嫉がらせではなく近藤氏を尊すことになつた次第のあまりに早やかつたのに驚いたのである。そのあまりに早やかつたと云ふ點で近藤氏の日本畫としての技巧に何人も面喰つた樣である。私とてもその新技術が他の陳列された日本畫に比して遜色がない計りでなく、技あつて心空しき僞め贋のもちぐさりに苦しんで居る滑稽畫より見れば今はまだ氏の技術と着想の上に空虛がなく、腕と心とがアエギ〳〵登らうとして居る處を多としたい。然しながら私のヒョンな心もちは若し後世物好きあつて、岡本一平氏の文章を掘くり出す人がある時、當代人氣役者

の日本畫が果して何處にどうして居るものであるかを想像したい好奇心をもつ。一平氏を引合に出したついでに川端龍子氏の作に一言すると、昨年石井柏亭氏が龍子氏の作は徹頭徹尾ケレンであると斷定したのに私は賛成するものであるが、その後の一平氏の龍子論は恰之を裏書きするの如き感あるものであつた。然しながら龍子氏のケレンは時代を提つた大ケレンであつて單に尋常一樣の凡才ではない事は明である。從つて氏の作品は少し頭のいゝ人が論旨を立てゝ追窮すれば可なり急所に突き入ることも出來るし、又繪の賢い處を取り立てゝ云へば人を感心させる事も出來る。近來洋風を取り入れた日本畫家でこれ程賢明な人はなからうと思ふ。然し今私が氏の作品に批評めいた事を云つたのはその作風の善惡を云ひたいが爲めではない。それはケレンであると斷定した柏亭氏が、この一言を云つた柏亭氏なるが故に、智略一世を貫いてよく時代に出會つた龍子氏の聲望よりも遙に時代に好遇されない質素なる柏亭氏の藝術が、その實永遠の生命を贏ち得ることを云ひたかつたのである。猶引いて云へば、一見人を魅する處の力ある龍子氏の作に然も交遊ある一平氏が畫題の眞情が作者の心にない事をいち早く說破したのは、これも一平氏の新聞漫畫家丈けで藝術界から押し込められて終ふ人ではない事を附言しておきたい。

餘談はこれ位で、さて兩展覽會の洋畫を見渡したところ今迄の洋畫の大きな潮流からその反對の方向に大きな流れに反いて走らうとして居る小數の流れを私は發見する事が出來る。その大きな流れを假りに舊と呼び小さい流れを新と呼ぶとすれば、その舊の中で最も新に近い處にあるのは片多德郎氏の上高地風景と題する小品その他の六點である（際）。との二の小品畫に就てあまりとやかく云ふのは氏の爲めに氣の毒である感もするが、一方これ等の繪の特質は矢張氏の力作にも共通して居るものであつて、たゞ大作の方がこの缺點が少いと云ふ迄の事であるから作者には損ながら評者には利益なこの二の小品に就て一二愚見を云つて見る。甚だたち入つた事を云ふ樣であるが、かくも色彩を驅使してそれ等にいゝ氣な享樂を味ひながら作製したと思はるゝこれ等の風景畫は、作者の頭は（精神は）その場合やはりそれで終止して了つて居ると推察するより外はない。よく人が例へる南畫の本領とは（或は東洋風を意味するものと云つてもよい）この如き心境のものを云ふのではない。そこには稚々たる筆の先のきまり作者の訴ふる心もちが流露したものがあるが、片多氏の場合は僅かなる筆が作者の畫家たらんとする思わくのみを物うるさくも語つて居るに過ぎない。然しこれを全部として氏を評することの酷なるは前にも云つた通りで、氏の力作に就ては畫術の諸法則に於ける妙技と美術史家が好んで迎へる處の或流派の重鎭たらんとする丈けの强みは確に氏の手中のものに違いない。結局一口にして云ふと氏の風景畫では凡て眞に生きたところがない。若しも氏のものは思しげな色彩と或調和を含んだ筆の綾とに眩惑されて之を學ぶものがあるならば、それは片多氏に取つては作畫上必然であつても、他に移し以て美點とすべきものではない。以上片多氏に就て述べたところを參照されるならば

佐竹德次郎（森の中。院）江藤純平（白樺の森。院）二氏の技法が甚だ片多氏に相似通つた點を私が遺憾に思ふのも自然と明瞭になることであらう。

次に後期印象派に影響を受けた一種の色彩派を擧げたいが、これは學說的に分類される程迄にこれ等の諸作の根柢が凝つて居ないので、繪描き仲間から見れば大抵一度はこの所謂色彩派から出發して行く者が多い樣に思はれる。可なり質のいゝ繪や、才智のある繪がこの一派中に多く認めることが出來るので、これ等の諸作を列記して見ると栗田堆（風景、院）木村義男（早春の川堤のはぜの並木、八月、院）棚橋秀吉（クロキシニアと果物、院）鬼頭鍋三郎（志摩風景、院）蘇明柏太（風景、二科）椎塚猪智雄（靜物、二科）里見勝藏（靜物、二科）國枝金三（卓上靜物魚見櫓の立つ丘、二科）以上の諸氏を大體に於て擧げる事が出來る。勿論上述の諸作はそれ〳〵色彩も獨自な點はあるが、果してどう進んで行くかに可なりの希望を以て見るべき樂しみがあるのである。且て兩三年前に同じくこの如き期待をかけて居た海老名文雄（上海の川岸、雨後の海景、海に浴する女、二科）濱田葆光（緣蔭、二科）芹川弘吉（千鳥ケ淵、二科）保田龍門（熊野風景、院）の諸氏などは未だにそれ程の驚きも見られない樣であるのは待ち遠い氣がする。

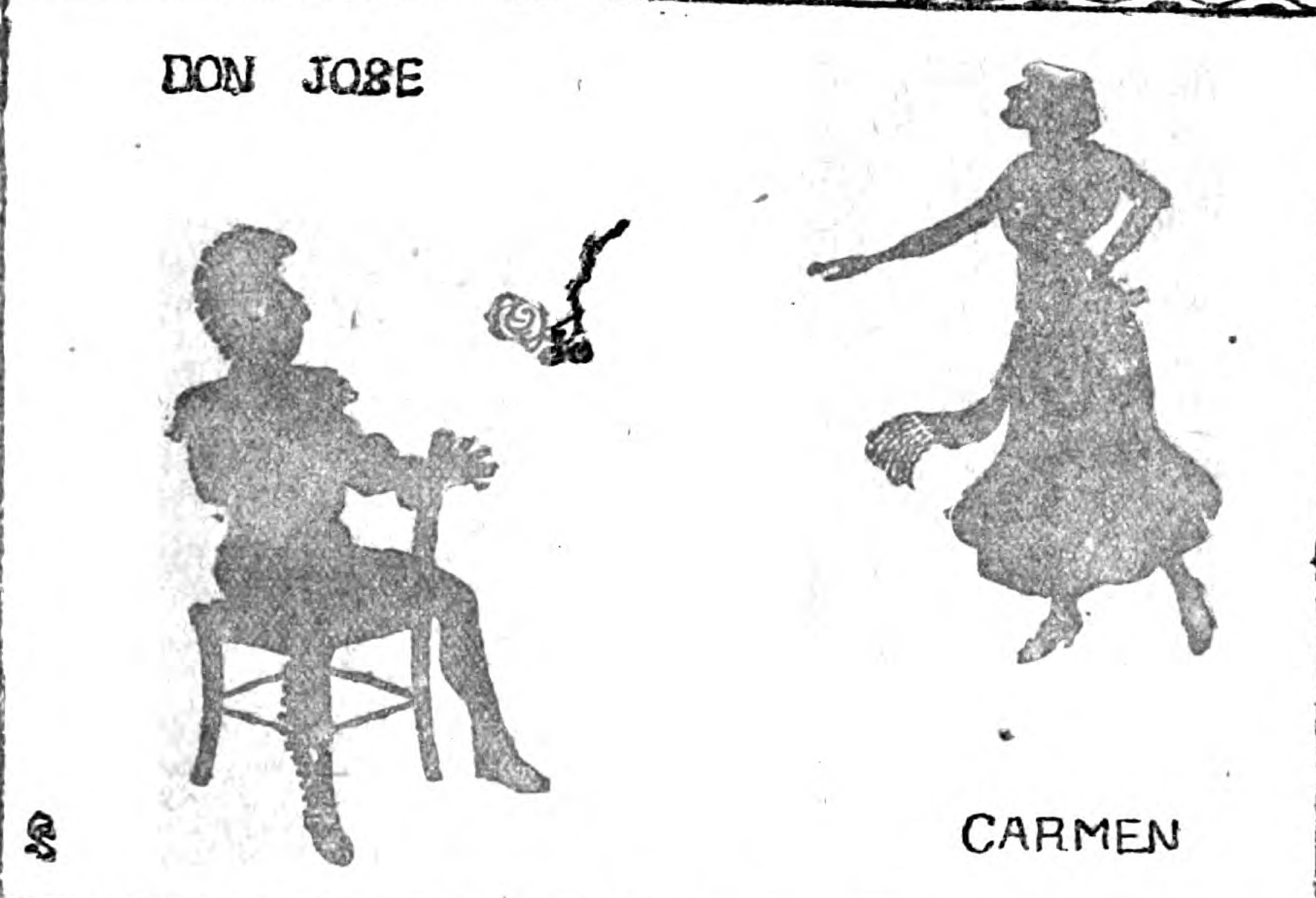
木村莊八氏の九點は院展の洋畫部を引きたてゝ居るものに違ない。壺は圍める果物などの物體の排置の形の上に或るリズムがある事も感ぜさせられるが、リーチ氏作かとも思はれる白き陶器を圍める果物の圖はその構圖に就て岸田氏を連想させられるのが甚だ觀賞の妨げとなるのを惜しむ。これは特に木村氏のみに就て云ふのではないが、近來岸田氏が靜物畫の上に特殊なる排列法を創造して、それに一種の新しき構圖美を持たし得たのは、從來の舊形式の靜物畫から脫しやうとした人々の中より獨り岸田氏をその先驅者に推すべきものであらう。古來靜物畫と云へば何の味あつてか、洋酒の空瓶とリンゴが夫婦づれのやうに組み合はされて居るが、これからは又ウネ〳〵とつくねたる布が流行にならなければ幸である。一寸靜物畫の爲めに話がそれたが木村氏の風景畫では大崎驛附近。東京郊外の秋等は落ちつきのあるものである。前田嘉三郎氏の（初夏の郊外、院）は純朴な繪で二科の福堀角次郎氏の細き道と共に擧げたい。その他小柳正氏（つたちやんの肖像、北海道のある道、院）清水多嘉示氏（風景、カルタ、二科）等の作風に興味を持つ。横井禮市氏（玉黍の畑、向日葵、靜物、その他、二科）の諸作は小林德三郎氏（鯛、院）と相似た歯切れのよい日本風の色感を味ふ事が出來るが横井氏の諸作はその基調が趣味にある樣で私は今俄に贊同も出來難いところがある、然しその靜物には獨特の色彩と筆觸から來る空氣がたゞよつて居る。

院展の木村氏と同じく二科の硲伊之助（池袋附近、沼の岸、その他）中川一政（監獄裏の日沒、下板橋の川邊、その他）林倭衞（少女、秋、その他）の諸氏は初めに述べた所謂新しき潮流の人としてその諸作を記憶すべきであらう。單に繪の上手下手を云ふのではない。その自然の切り方、（畫にする場面の撰擇）その趣味、凡てが全く多くの凡作家とは同

國の好みが無いと云へる程判然と獨立して居る。それを私は心よく大變愉快に思ふ、但し林氏の中少女丈けはあのヘナ〳〵な内容が飽き足らなく思ふが他の二點の風景畫は中川一政氏の下板橋の川邊などと共に、之を日本畫の繪具に燒き直して新裂邦畫などゝ稱する人達が出て來ないとも限らぬほど新味に富んだものである。

足立源一郎（背き眼の女外十九點、院）黒田重太郎（セエブルの秋、外十四點、二科）小出楢重（Nの家族、靜物、竹林、二科）の三氏に就ては特に新傾の人として世人の注目を引いたもので、殊に何か角力の見立てをするかの如き感を新聞紙上で呈して居た足立黒田兩氏の新歸朝土産には諸々で詳細の批評も出た事であるからこゝでは黒田氏の作が從來の技法に從つて割出せば随分練達もされて居作ら何故かその風景が動いて居ないのを恨みとすることと丈けを云つておく。造られたる、土像に早く息をふきかけて自在に歩ける様にせられん事を祈る。足立氏の作には感情はあるが時に甚だ輕薄に流れるそしりを免れない、數點の人物は悉く私の贊同出來ないもので、その危かしさは如何に趣味の高雅、色調の豐麗、を認めても取り換への出來ぬ弱身であらう。から云ふと大變氏の惡いところのみを摘出した様であるが、これ程に形容せなければ均り合はぬ程一方に氣のきいた頗る要領のいゝ美點があるからである。然しながら兩氏の作に就ては今假に斷定的に云ひたくはないので、次の日本に於ける作を期待する事にして預りとしておく。小出楢重氏の作品に就ては氏の研鑽實に古きを知つて居る私には今更驚かれるものではないと云ひたい位である。曾てその作品は兩三回院展に出陣された事があるが終にあまり何人の記憶にも殘つて居ない様であるし、亦それが當然であるとも云へる。若しも今度もNの家族が菡れて居なかつたならば或は又何人の注意も引かずに濟んだものかも知れぬ、一概に云ふと小出氏の特質は實にあのNの家族に依つて初めて氏自身が浮き上つたものと云つても差し支へのない程氏には永年期待したものが、Nの家族であつたのである。然るに他の二點(竹林、靜物）の繪畫的技巧はNの家族と同一の手腕のものであり乍ら、それ等のものはあまり光彩を放つて居ない。これは氏の作品が今迄終に注目を呼び起さなかつた所以のもので、獨りかのNの家族は繪の上で諸種の欠陥を持ちながら何人に迫るものがあるのは即ち氏ゝ愛すべき老豁不遜の如き骨節のある漫畫味が畫面の裏からのぞき込んで居る處に興味があるのである。その技磨けども何の甲斐なかつた風景の諸作に比し、その技の如何を問ふをまたずして觀者がNの家族に現れたる作者獨得の人間味に捕へられた事丈けは何と云つても人の爲めに認めなければならないと思ふ。作品は凡て如何なる場合にもその技を問ふ前に必ず人の胸に響いて來るものがなければ駄目だと私は信じて居る。

この外にまだ幾倍もの注意すべき力作佳作に乏しくはないのであるが、こゝで筆を擱くの止むないことを殘念に思ひながら、初めにお斷りしたとは申せあまりに勝手氣儘に漫然と書き流して諸氏の力作に禮を欠いた處をお詫して置く。


DON JOSE
CARMEN

改造秋季特別號新進作家集



耕右衛門の改名

宇野浩二

或朝、彫塑學生本田陽はその友達久世勇からの葉書を手にしたまゝ、顔色を變へて憤慨した。

この前にも彼はこの久世のために恥をかかされて、下宿屋に居堪らなくなつたので、丁度金のない時だつたが、友達中を嘘をついて金を借り集めたり、色々とひどい工面をして、その下宿屋を引越したことがあつた。

事の起りはいつも彼の姓名からなのであつた。元來、彼は本名を本田耕右衛門と呼ばれた。まつたく、何といふ百姓臭い名前を親父は附けてくれたものだらう！　だから、彼は國を出る時、東京に於いては全然その名を秘するつもりで、本田陽と名乘つて來たのであつた。(彼は始め陽村といふ雅號を附けてゐたのであつたが、それでは如何にも流行遲れの雅號らしいのと、それに陽村の村といふ字がやつぱり百姓に縁があるのとを嫌つて、その後陽と一字に改めたのであつた)。が、美術學校の入學試驗の時、その他の時に、つひ本名を人々に知られてしまつたのであつた。

彼がこの前にも久世から、用もないのに、その本名の本田耕右衛門と

いふ名を宛てられた葉書を送られたために、大きな恥をかいて、ひどい工面をして下宿屋を引越したといふのは、その頃のことであつた。

「頼むから、久世君、」と彼はその時早速後者を訪問して言つたのであつた。「どうぞ僕の本名を呼ばないでくれ給へ。これは何かの親父の思ひ違ひだつたのだ。今に僕は戸籍の上からすつかり陽と變へてしまふつもりで、今その手續きをしてゐるんだから……。」……

それだのに、この朝も久世は何を恨に思つてか、この別に大した用事でもなささうな葉書に、本田耕右衛門と宛名した上に、今度は姓の本田にわざ／＼赤インキで「ほんでん」と振假名をまでも附けて、送つて來たのであつた。彼は今までは唯「耕右衛門」といふ名の方ばかり氣にしてゐたのであつたが、今この友達の振假名に依つて、姓の「本田」までが百姓臭いのを敎へられた譯であつた。彼は一人で赤くなつて、葉書の裏をかへして見た。

それには唯、しばらく會はないが、どうしてゐる、一度遊びにやつて來ないかと言ふやうな事が認められてあつた。が、そこにも、葉書の面の半分以上に、「今年は秋になつてからの天候不順で、」と彼は赤インキで書かれてあるのを讀んだ。「稻作は一回毎に豫想が惡くなつて行つたらしいが、昨日の僕の父からの手紙に依ると、昨年と比べると、もつとも昨年は豐年であつたが、今年はその半分しか收穫がないさうだ。君の御親父は僕のと同じ村で、同じ年頃ではあるが、僕の父などと違つて、そんな愚痴な手紙を寄越されはしないだらうが、何にしても今年の天候は我々小作人の子等にとつては大打擊だよ。」

讀んで行くうちにも、彼は餘りのことに、腹立たしさに嚇としてしまつて、終まで讀みつづけられなかつた程であつた。これは一體何といふことだ！　彼の家は愛知縣で、久世の家は東京で、彼の父はその縣の屈指の豪農で、そして久世の父は陸軍大佐である。卽、この葉書の赤インキの部分は全然作り事で、つまり宛名の「本田耕右衛門」に對する嘲弄を加勢するための文句に過ぎないことが明らかなのであつた。

「何のために、何の恨があつて、一度ならず彼は俺をこんなに恥づかしめるのだらう？」と本田耕右衛門の本田陽は考へた。が、いくら考へても、唯頭がカッカッと燃えるばかりで、判斷がつかなかつた。そのうちに彼の考はいつの間にか飛んで、その恥づべき自分の名前のことに集中して行つた。彼は立つてもゐても堪らない氣がして來たので、故鄕の母に宛てて次の手紙を書いたのであつた。もつとも、この種の手紙はこれが始めてではなく、これ迄にも度々書いたことはあつたのだが、今度は一層力をこめて書いたのである。

「斯ういふ事を申し上げますと、母上樣、」と彼は書いたのだつた。「名前を附けて下すつた父上母上に對して、どんなに皆樣のお氣持を惡くすることかと恐れますが、これ迄にも度々申上げました通り、私が耕右衛門といふ名のために、どんなに屢々恥づかしい思をしてゐるかといふことは、多分その十分の一も母上などにはお分りにならないことゝ思ひます。現に、いつかも一寸父上への手紙の中で申上げたかと思ひますが、それは學校の試驗を受けた時のことですが、先生が私の名を呼んでくす／＼と笑ひました。そしたら、數多の入學生たちが一度に私の顏を見ました。穴があつたら入りたいといふのは、本當にあのやうな時の氣持を言ふのでせう。私は見る見るうちに、自分でもそれが感じられる程、眞赤になりました。

「母上樣。これは確に人の顏を赤くさせる名前です。子が親に對して斯ういふ言葉を言ふのをお許し下さい。しかし、これは本當の事なのですから。私はこの後とも、この名前のためにどれ程の苦勞をしなければならないか分りません。それだけならまだしも、この名前のためにどれだけ人に輕蔑されなければならないか知れません。母上樣。人はその名前のためにさへ、こんな苦痛を忍ばねばならないものでせうか？　私はこの名前のために、確に何年かの命を縮めるに違ひありません。そして私はこの名前のために一生人に頭が上りません。その位なら私はいつその事今のうちに死んでしまひます。母上樣。人はその名前のためにさへ、命を捨てなければならないものでせうか？」

故郷の彼の母は、東京の長男からの手紙を見て、非常に驚かされた。父親に相談しても、とても駄目だとは思ひながらも、彼女はその事に就いて一應彼に相談しないではゐられなかつた。事實、彼女はその息子の手紙の中で、これ迄からも一度ならず言はれてあるやうに。隨分彼がその名前で苦勞してゐるだらうとは同情しながらも、なる程その十分の一も分つてゐないに違ひないと思つたのであつた。

「それ程苦勞してゐるのですから、」と彼女はその夫の目の色を窺ひ窺ひ言つた。「どうかして名前を變へてやる方法はございませんでせうか？」

「あの馬鹿野郎が！」と父親は、年の割には少しも皺のない、てかてか色澤よく光つてゐる顔を上げて、吐き出すやうに言つた。「お前までそんな馬鹿な事に加勢するといふ法があるか？　一旦親が附けて役場へ屆けた名前を、今更變へる譯に行くと思ふか？　變へたければ勝手に變へてゐればいゝ！　大體お前かそんな事を一々取上げてゐるからいけないんだ。きつぱりと叱りつけておしまひなさい。」

「ですけれど、」と母親は、（彼女は色が黒い上に皺が多いので、年以上に老けて見える方で、髪だけは奮式な白髮染で頭の地まで眞黑に染めて、年の割に大きな髷を結つてゐるが、それさへやつぱり少しも若く見せることに役立たないのであつた。）心から心配さうに言つた。「ですけれど、それでは通用しないといふではありませんか？　あんな變屈な子ですから、もしやそれを苦にして、間違ひでもし出かすやうな事がありますと、私が御先祖に對して……」

「何が御先祖だ！」と父親は、彼女の言葉を皆まで聞かずに、引取つて、叫んだ。（言ひ忘れたが、彼の頭は完全に禿げてゐて、その禿の部分と顔の色とが殆ど同じなので、どうかした拍子には、ばかに顔が長く見えることがある。）「何か言ふと、お前はすぐ御先祖御先祖といふが、お前にも先祖なら俺にも先祖だ！　なる程、俺は養子だ。だが、俺は假りに、種馬になりに、養子に來たのぢやない。俺だつて、死んだら、やつぱり本田家の先祖の一人になるんだ。お前にも先祖なら、俺にも先祖だ！」

この言葉は、機會がある毎に、この夫婦の間に、今迄幾十回幾百回となく、くり返される口論なのであつた。

「抑も耕右衛門といふ名前は、」と父親はつゞけた。「お前も知つてるだらう、曾祖父さんの名前を取つたのだ。それを改名するのに讃成するお前こそ、御先祖に對して濟まない譯ぢやないか？」

「あなたはすぐ私の言ふことをそんな風にひがんでお取りになるから……」と彼女は半分泣聲になつて答辯した。「だけども、全體あの子の妙に氣の弱い、それでゐる氣狂ひめいた程我儘なとこのある、一風も二風も變つた氣性は、あなたの通りぢやありませんか？ その子のために私が頼んでるんぢやありませんか！」

「何を言ふんだ！」と彼も次第に興奮して顔を赤くしながら言つた。「俺はまだ自分の名前を嫌つて、變へようと思つたことなどは一ぺんもないぞ。彼奴の變挺な氣質はお前に似てゐるんだ！」

斯うして二人の爭は、果てしがなく、飛んでもない方へばかり反れて行つて、結局始めの原因の話に歸つて來なかつた。

母親はその晩眠らなかつた。

すると、その翌日の、昨日と同じ時刻に、又東京の長男からの手紙を母親は受取つた。彼女はそれを今度は父親の目にふれない所で、開いて讀んだ。

「私は昨日あれから、ぢつと下宿に落着いてゐられませんでしたので、あの事をもう一度調べて見ようと思つて、圖書館に行きました。といふのは、去年も一度調べたことがある事なのです。

「それはこの日本では、一町以内のうちに同姓同名の者が二人出來た場合だけ、改名を許されるといふことになつてゐるといふ事です。昨日調べ直して見ましたが、やつぱりさうなのです。父上樣は何かと言ふと、そんなに自分の名が變へたければ、勝手に變へておけと仰言いますが、それでは駄目なのです。戶籍の上からすつかり變へないと、學校とか、交番とか、さういふ表向きの所で飛んだ恥をかくの

です。それに僞名は法律上の犯罪行爲ださうですから、とてもさう言ふ事は駄目なことです。

「今も申しました通り、これは去年から思ひ付いてはゐたことなのですが、さすがに面と向つて切り出し兼ねましたので、つひそのまゝになつてゐたのですが、と言ふのは、先に申した同姓が、國に歸れば一町以内に澤山あるといふことから思ひついたのです。今年の夏、私が國に歸りました時、たしか作右衛門の女房が大分大きなお腹をしてゐたやうでしたが、彼女がもう生む時分ではありませんでせうか？　で、どうぞ今のうちに彼の一家とその話をつけて置いて戴きたいのです。私の言ふ意味がお分りになりますか？　といふのは、作右衛門の子に耕右衛門と言ふ名は丁度適當ですから、是非いくらかの手當をやつて、彼の子にさう命名さして欲しいのです。作右衛門の手當は極く僅でいゝだらうと思ひます。勿論、私たちの家の名前を以てすれば、手當をやらなくても聞くでせうが。兎に角、その極く僅な手當で、私が生きるか死ぬるかの境から救はれるのですから。そして私の方を「陽」といふ名に改名屆を出して欲しいのです。それは直でなくても宜しい。餘り直だと、役場で變に思ふといけませんから。役場ぐらゐなら何でもありませんが、郡役所、郡役所はまだ何でもないとして、裁判所などに知れると大變ですから。

「それから「陽」といふのは一字名前で、母上などには、失禮ですが、よくお分りにならないかも知れませんけれど、これは實に新しい、そして私が將來彫塑家として立つに、有名になれさうな名前なのです。現に今日本で一二と言はれてゐる文學の大家に、「本多純」といふ方が居られます。私も、ですから、それに因んで、「本多陽」とするつもりです。（本田といふのは「ほんでん」などと讀まれる恐れがあります）。もつとも、戶籍の方だとて、本田を本多とまでも改める譯には行きませんが、これは自分で手紙を取りやりする時に、いつの間にか本多と變へてしまへばいゝのです。その代り、どうぞ、これからは母上も私へのお手紙にはさう言ふ風に書いて下さい。これなども馬鹿馬鹿しいやうに思はれるかも知れませんが、決してさうではないのです。近頃は姓名學といふ學問まである位なのですから。」

この手紙を讀み了ると、母親はほつと安心の息をついた。が、彼女はもう父親にはそれに就いて何の相談をもしなかつた。その晩、彼女は小作の作右衛門の家に出かけて行つた。

「まあ、地主樣の奥樣ですか！」と作右衛門はその扑突な、四十歳の經面を上げて、何事が起つたのかといふやうな、驚きの表情をしながら言つた。

「一寸お前に賴み事があつてね、」と地主の奥樣は、平常なら汚なさうに、一應そこらの塵を吹き飛ばしてからでなければしないのを、その時は例外で、いきなり上り口の端に腰を下して、「ところで作右衛門。」と彼女は呼びかけて、自分の腹を指さしながら、「おかみさんは今月かい、來月かい？」と聞いた。

正直で、單純な作右衛門は、何か惡い事をしたのを尋問でもされる時のやうに、唯わけ分らずにおどおどしながら、「もう、今月中でせう、と思つて居りますんですが……」と途切れ途切れに答へた。

「賴みといふのはね、」と彼女は切り出した。「その生れて來る子に、私が名前を附けさして貰ひたいんだがね。」

作右衛門は彼女の意を汲み兼ねて、益々おどおどしながら、「どうぞ御遠慮なく……」と答へた。が、直、そんな風に答へてよかつたのか惡かつたのかと心配し出した。

「さう、それぢやね、」と彼女は、少しも間を置かずに、懷から書付を取出して、「こゝにちやんとその子が生れた時に、出す役場の屆を書いておいて上げたからね。子供の名前もちやんとこの中に書いてあるよ。」それから彼女は、作右衛門が唯もぢもぢして答へる暇もないうちに、一封の金包を出し添えて、「それからこれは少しだけど……」と言ひながら、上り口に窮屈さうに、股引を穿いた膝をそろへて坐つてゐる作右衛門の前に置いた。

「あの、それは……あの、それは……」と作右衛門は吃つてしまつた。

「ぢやあ……これは旦那には内所だよ。……ぢやあ、さよなら！」と言ひ捨てて、地主の奥樣が歸つ

てからも、老小作人は長い間、ぼんやりと無言のまゝで、しかし旦那から借りてゐて、まだその利息さへ滑らしてゐる二十圓の金のことなどを、突嗟の間に思ひ浮べながら、彼は彼女が腰かけてゐた跡を見詰めてゐた。

作右衛門の子供は今月中に生れるやうである。その子に耕右衛門といふ名を附けさせる手續を、作右衛門は無筆者だから、その屆書の類の世話までを、すつかり終つた。從つて、來月からは公然と本田陽或は本多陽と、お前の好きなやうに名乘つていゝ譯だ。――といふ知らせが、早速、折返して、故郷の母から東京の息子の元に報ぜられたことは言ふまでもなかつた。

彼はその通知に接すると、子供のやうに喜んで、その翌日俄に荷物をまとめて、今迄の下宿屋を引越した。彼は、これ迄も、いつでも變つた下宿屋に越して來て、名前を屆ける時には本田陽と名乘つてゐたが、（その度にいつでも少し後目たい氣がしたが、）今度といふ今度は、新しい室に坐る間も待遠しくて、彼の方から宿帳を請求した位であつた。

ところが、その下宿屋の女中は、彼が宿帳に書き終つた名前と彼の顏とを、不思議さうに見比べて、「あの、お國の所はこれで宜しいのでございますか？」と、變なことを聞いたものであつた。といふのは、この新らしい下宿屋では、始めに彼が明間を探しに來た時以來、彼の和服を着てゐる姿を一度も見たことがないのが一つ、（それは近頃彼が、その持前の神經的な性急な氣質から、急に書生らしい紺絣の着物が厭になつたので、先頃家に注文してやつた着物がとゞく迄、當分洋服ばかりで押通すつもりだつたので）、それから彼が一體に言葉附の丁寧な男で、それに妙に國訛りの拔けない、舌もつれのした物の言ひ方をするのが一つ、今一つは彼の名前が三字名前なのと、最後に彼の容貌が可成り支那人らしいのとで、彼を支那人か朝鮮人と誤つて信じ切つたのであつた。しかし、この彫塑學生には嘗てそんな疑を受けた經驗がなかつたので、夢にもそんな事とは氣が付かなかつたのであつた。

「お國の所つて？」と、そこで、彼はこの百姓女中め、俺を百姓だと思ひやがつたのかと、飛んでもない方に邪推を廻しながら、「私の所は田舍ですが、田舍ですが、百姓ぢやありませんよ、」と少し吃りながら答へた。彼は、そんなことの警戒にもと、父の肩書を平民農としないで、平民無職として置いたのであつた。

「それぢや、」と相手の、縮れ毛の、鼻の赤い女中は、無遠慮に、「それぢや、支那の方ぢやありませんの？」と言つたかと思ふと、突然起つた笑を隱すために、しかし隱し切れずにはあ〳〵笑ひながら、逃げるやうに室を駈け出して行つた。

彼は眞赤になつて、暫くぼんやりと消えて行つた女中の後を見送つてゐたが、やがて何のつもりか、「もし〳〵」と呼んで見たが、もうその時は女中の足音さへ聞えなかつた。

「はて？」と彼は考へた。俺の名前が三字だもんだから、それで、無智な奴等といふ者は仕様がないな、俺を支那人だと思つたんだな。」

彼は斯う考へつくと、前後の考もなく、急に腹が立つて來たのか、飛び込むやうに帳場に出かけて行つて、主人に面會して自分が支那人でないことを辯解し出した。それだけで何足りない氣がしたので、

「あなたの所では、」と彼は言つた。「支那人を嫌くんですか？　支那人がゐるんですか？　支那人がゐるんなら私は直引越します。」

木綿の紋付の羽織を着て、顋髭を生やした、その癖立てば身長五尺もなからうと思はれる、小柄な、五十歳のこの家の主人は、この男も本田と似た氣の弱い、少し吃り癖のある男だつたが、至つて眞面目な顏をして、それは女中の粗忽で、彼自身は決して本田を支那人だと思つてゐないこと、現に彼の家には外に一人も支那人を止宿さしてゐないことを述べた。

この「外に一人も」云々といふ主人の失言が、又一層本田を不安にした。で、彼は益々躍氣となつて、「現に陽といふのは僕の（この時始めて彼は僕といふ言葉を用つた、それから無暗にこの僕を連發し

た、)雅號だつたので、僕の本當の名は、」と彼は言つた。そして「しまつた、大變なことを言つてしまつたぞ！」と思つたが、もう遲かつた。「僕の本當の名は本田耕右衛門といふのです。しかしそれが餘り日本の（變な所へ『日本の』などといふ餘計な言葉を用つたな、と言つてしまつてから後悔した。）百姓らしいので、僕は今度、而もやつと、僕は一昨日陽と改名したばかりなんです。僕はあなたにそれを言つて置かうと思つたんですが、つまりそんな譯ですから、僕の所へは未だひよつとすると、本田耕右衛門で手紙を寄遣す人があるかも知れません。（これはうまい事が口から出たぞ、と彼は言ひながら思つた。）そしたらどうぞ僕にとつて置いて下さいね。」

これで漸く相手をも納得させ、自分も氣が濟んで、話にけりが着いたと安心すると共に、先の「しまつた！」といふ氣持が彼に復活して來た。そのうちに、耕右衛門の方がいゝのか、陽の方がいゝのか、何が何だかさつぱり分らなくなつて來た。すると、彼はぢつと室の中に落着いてゐられなくなつたので、俄に思ひ立つて久世を訪問した。

久世は相變らず、その本職の畫を勉强してゐる風もなく。と言つて讀書をしてゐる樣子も見えず、きちんと片附いた、彼の畫室兼書齋なる八疊の間に陽を案内して、そのまん丸い顏のまん中の、小鼻の區別の分らないやうな、團子細工めいた丸い、その癖始終つまらしてゐる鼻をくすくす言はせながら、鯨のやうな細い目を一層細くよぢらして、「どうだい、近頃は、元氣は？」と、天眞爛漫な無邪氣さを以て尋ねた。

ところが、本田はそれには答へないで、

「君、今度僕は愈々戸籍上から改名したので……」といきなりその話をし出した。

「ふむ、その報告に來たのか、」と久世が早飲込をして斯う言ふと、

「いや、ところが、」と本田は、でこぼこした、彼自身が近頃の彫塑そのものゝやうに見える顏の上に、わざと鏝で縮らして、鷄のとさかの樣に掻き上げた髮の毛を、彼の癖で、そつと女が結ひ立ての髮を觸

る時のやうな手附で撫でながら、「その改名祝といふ譯でもないがね、改名と共に早速引越したと思つてくれ給へ、……」そして今し方の、支那人と間違へられた次第を友達に話した。

相手の久世は、心持が愉快になつて來ると、これが又彼の癖で、例の鼻をうるさい程くすくす言はせるのであるが、今もそれをやりながら、「それや、面白いね！」と思はず膝を乘り出した。が、相手が自分の言葉に忽ち不快な顏をしたので、さすがの彼もはつと氣が付いて、「それや、怪しからんね！」と言ひ直した。

「變な事ばかりいつも僕は言ふやうだがね、久世君、」と本田は一層眞面目な聲で言つた、「こんなことを言ふと、君は又僕を變な、氣の小さい奴だと嗤ふかも知れないがね、」こんな風に、變に、廻りくどい言廻しをするのが、これ又彼の癖なのであつた。「支那人と言はれたのが、僕は心外で心外で堪らないのだ。で、君に賴みといふのはその事なんだがね、裏には何の用事でもいゝから、小作百姓の話でもいゝよ、何か一寸した文句を書いて、そして表に、表が肝心なんだよ、表になるべく大きく、目に付くやうに、本田耕右衛門様と書いて、はがきを出してくれないか？」

「よし、よし、」と久世は相變らず鼻をくすくす言はせながら、嬉しさうな笑顏をして答へた。

「君はこれ迄二度も三度も僕に名前で恥をかかしたのだから、」と本田は益々眞面目な顏をして、くり返し賴んだ。「今度は是非僕の名譽回復のために骨折つてくれ給へ、ね。」

「よし、よし、承知した、」と久世は相變らず、畫にかいた戎様のやうな目付をして、笑ひながら受合つた。

ところが、その翌朝、本田が未だ寢てゐる所へ、

「本田さん、」と女中が入つて來て呼びかけた。「これはあなたのですか？」と言つて、彼女は變な微笑を頰に浮べて、例の赤い鼻に皺を寄せながら、一枚の葉書を彼に渡した。

そして女中がくつくつ笑ひながら、逃げるやうに、廊下を走つて行く足音に彼はぼんやり耳傾けて、

「あの鼻赤女中め、何といふ厭な奴だらう！」と思ひながら、渡された葉書を、何氣なく、眠い目を開けて讀んだ「中華民國人、本多陽殿。神田區猿樂町、中華民國友朋會。」

一瞬間、彼は本當に中華民國友朋會から來たのかと思つた位であつた。裏を返すと、彼にも一見して分る手蹟で、出鱈目に漢字ばかり十行程並べて書いてあつた。疑もなく、それは久世勇の仕業に違ひなかつた。

「どうして、何の恨で、久世は斯う一度ならず、二度ならず、俺に祟るのだらう？」と彼は思つた。

彼は忽ち寢床の上に坐り直つて、恰も重大事のやうに考へ込んだ。

——一年程前のことであつた。或時、本田陽は靴を盜まれて、急いで一足新調したことがあつた。ところが、その靴が出來上つて來ないうちに、どうしても洋服で出かけなければならないことが彼に起つたので、ふと考へてそれを久世の所に借りに行つたことがあつた。久世は心よく「いや、遠慮はいらない、この二三日僕は外に出る用事がないから。」と言つて貸してくれた。お蔭で、その日はその靴に依つて、彼は目的の通り洋服で外出することが出來たのであつた。そして、その日の晩には、漸く彼のあつらへておいた靴も出來て來たのであつた。ところが、その翌日生憎雨が降つたので、彼はどうにも新調の靴を穿いて出るのが惜しさに、やつぱり友達の靴を利用した。それが癖になつて、それから二三日つゞいた雨の日にも、彼はつゞいて友達の靴を利用して、自分の新調の靴は箱に入れたまゝ、床の間の隅に飾つておいたのであつた。

或雨の日、彼がそのやうにして歸つて來ると、下宿の女中が「お客樣が先程からお出でになつて、お部屋で待つてゐらつしやいます。」と言つた。何氣なく、誰だらうなどゝ思ひながら、彼が自分の室に歸つて見ると、客は卽ち久世なのであつた。彼は忽ち眞赤になつて、うろたへた。そして挨拶するのも忘れて、

「あの、靴はね、昨日漸く出來て來たんだ。今日返しに行かうと思つてゐたんだが……」とそこ迄言

つた時、彼はふと今自分がこの雨の中を外から歸つて來て、新しい靴は箱入のまゝ床の間に飾つておいて、而も自分が洋服を着て外から歸つて來たことに氣が付いた。卽、この雨の日に、當然久世の靴を穿いて外出したことを曝露してゐた譯であつた。そこで彼は益々あはてたのだつた。で、しどろもどろに斯う附け足した。「實際、君の靴は非常に穿きいゝね、僕の奴は折角出來て來たのだが、どう間違へたのか、大き過ぎて靴の中で足が躍るんだよ。で、僕は造りかへさせようと思つてゐるんだ。」

久世は愛想笑をした。彼は極めて愛想のいゝ男であつたが、一體が無口な方なので、その笑には何の意味もなかつたのであつた。その證據に、これ程白々しく見える筈の本田の嘘をも眞に受けて、「君に大き過ぎるのなら、僕にいゝ加減だらうから、少し値段を引き給へ、そしたら僕が買はう。僕に引くだけ、君はさう言つて靴屋に負けさしたらいゝんだ、」と言つた位であつた。

しかし本田陽にはそれが「何をごまかすんだい。君は自分の靴を雨の日に穿くのが惜くて、僕のを今日もさうして穿いて出たんぢやないか？　それに大體あの靴屋は僕が君に始め紹介してやつた家ぢやないか？　あの靴屋は、僕の方がよく知つてゐる、決してさう無暗に期日を違へたり、注文を間違へたりするやうな家ぢやない。分つてるよ、多分ずつと前に、恐らく僕の家に君が靴を借りに來る前から出來てゐたのだが、否、恐らく君が前の靴を盜られたなどゝいふのも嘘で、たゞ君は雨天用として僕の靴を借りに來たんだらう。」と言ふやうに見えたのであつた。——

「あゝ、あの事だ、あの時の事を彼は恨に思つてるに違ひない！」と彼は獨りでうなづいた。久世はあの時の事を蛇度根に持つて、俺をこんな仕方でしば〳〵恥をかゝすのに違ひない！」

それから十日程後の一日、一方、久世男は彼の父の室に呼ばれて、これ迄にも幾十回となく聞かされたことを、聞かされてゐた。

「男が二十六歳と言へば、もう立派に一人前の年ではないか！」と彼の父は、彼が子に傳へたところ

の丸い顔と、丸い、小鼻の區別のない鼻の下の、顔ぢゆうで一番見事な、從つて存在を主張してゐるところの、大きな灰色の髭をひねりながら、言つた。「俺は飽く迄反對であつたのだが、死んだ母親が泣かんばかりにして俺を攻めるし、お前も命がけの熱心だといふし、するから漸く美術家になることを許したのだ。ところが、お前はたつた一度、美術學校の入學試驗をやり損なつただけで、やれ學校などは何にもならないとか何とか言ひながら、その後お前自身一向何等の成績を擧げた模樣がないぢやないか？文展などゝいふものも、俺が聞くたんびに、お前はやれあんなものは俗物の寄合だの、やれあんなものは古いのと、譯の分らぬことばかり言つてゐるが、大體日本の美術家であつて、日本の文部省の展覽會を無視するといふことが間違つてるぢやないか、例へばぢや、日本の軍人が日本の陸軍省海軍省を無視して……」

　彼の息子に對する休職陸軍大佐の、斯ういふ訓誡とも訊問ともつかない話は、一度始まると、それが何處までつゞくか、誰も豫測し得るものがないのであつた。實際、これ迄幾度となくこれを聞かされてゐる息子の畫家でさへ、大抵その中途で來客があつたり、手紙が來たり、でない時は前者が話の最中に便所に立つた間に後者が逃げ出したり、或は又後者に都合よく友達が尋ねて來たり、屹度何かの故障が起つて、完全にその終まで聞いたことがないのであつた。今日も亦、今に切り上げる機會が來ないものかと、そればかり待たれるので、無論息子は相手の話などには少しも耳傾けてゐなかつた。ところが、幸にもそれが來たのであつた。彼は歩いて來る女中の足音を聞くと共に、彼女が唐紙を開けてその姿を見せない前に、「來た、來た、何か來たぞ！」と心の中で手を拍ちながら、待つてゐたのであつた。丁度父が「……陸軍省海軍省を無視して……」と言つてゐた時、

　「あの勇樣、」と果して女中が室の唐紙を開けて、彼の方に手をついて言つたのであつた。「本田樣のお使がお見えになりまして、玄關にお待ちになつて居られます。」

「さうか！」と、何か吉事の知らせででもあるやうに、彼は、父に挨拶するのも忘れて、玄關にとつ

て行つた。

本田の使といふのは車夫で、彼は勇の顔を見ると、「あなたが久世勇さんと仰言いますか？」と聞いてから、「これを、」と何か箱のやうなもの丶新聞紙包を手渡しながら、「これをお届けしましたので、御返事はいらないさうでございますが、どうぞ私にお受取の印を……」と言つた。

彼は不思議に思ひながらも、兎に角渡された包を自分の部屋に持つてはひつて、中をあらためて見ると、それは一對の編上靴であつた。そして靴の入つてゐる箱の中に、「粗末な品なれど雨天用として御履捨て下され度候。本田」と認めた紙切が入つてゐた。

一瞬間、彼はその何のために贈られたか分らないものを、收めておかうか、返さうかと迷つた。が、忽ち彼の顔がにや／＼と笑つて、例の父に讓られた丸い鼻をくす／＼言はせながら、「兎に角、受取の印だけは捺いて、使はこのまゝ歸さう」と獨言つた。

さて、彼はその通りにして、再び自分の部屋に歸つて來て、贈られた靴と、それに添えられた紙切と、殊にわざ／＼圏點を施してある雨天用といふ文字とを見ながら、色々と考へた。けれども、極端な神經質な、「彼に於いては身體中の各々の神經線が混線してゐるに違ひない、」と友達仲間に言はれてゐる程の本田のこの贈物の意味を、「彼の神經は彼の鼻のやうに丸くて、鈍い、」と言はれてゐる久世に、幾ら考へても解ける譯がなかつた。が、よくしたもので、久世はその意味が解けないと言つて、少しも苦しまなかつた。彼は直そんな事をくよ／＼と考へることを止めて、その處分法に就いて彼獨特の工夫を考へ始めたのであつた。

その翌日、下宿屋の出入口の、すぐ眞上に位置してゐる彼の部屋で、本田が、それは昨日車夫を使にやつた時以來、否久世に靴を新調して贈らうと考へつき、その靴を注文した日以來、相手がそれをどんな風に受取るだらう、それを受取つてから相手の彼に對する態度がどんな風に變るだらう、とそんなこ

とばかり考へてゐた時に、(だから、その間彼は一歩も外に出なかつた、從つてその間日に幾人となく異下の玄關に尋ねて來る客の名前から、尋ねられる客の名前まで、悉く覺えてしまつた程であつた、)ふと玄關で、例の鼻赤の女中を相手に、

「ホンさん、いらつしやいますか？　ホンさん、いらつしやいますか？」と、確に支那人らしい聲で尋ねてゐる聲を聞いた。

「え？　どなた？」とそれを又、眞面目になつて、鼻赤の女中が幾度も幾度も同じことを聞き返してゐるのであつた。「ホンさん？　ホンさん？　誰だらう、ホンさんつて？」

すると又相手の支那人も、支那人獨特の性質と見えて、「ホンさん、ホ＝ン＝さん、ホンさん、いらつしやいますか？」と同じことばかりくり返してゐるのが、煩さく聞えた。

何のことで、無論、誰のこととも分らないが、所謂混線してゐる本田の神經は、それを聞いてゐると、無暗にいら／＼して來るのを覺えた。

やがて、漸くのことで、

「うちにはそんな方はいらつしやいません、」と鼻赤女中が答へた。「うちには支那の方は一人もゐらつしやいません。」

ところが、それでやれ／＼相手は歸ることとか、と他人のことながら頻りに二階で氣に病んでゐた本田が、ほつと安心したにも拘らず、相手の支那人はそれでも聞かずに、

「ホンさんゐます、ホンさんゐます、」とくり返してゐるのであつた。

本田は堪らなくなつて、どうせ見えないとは知りながらも、念のために窓の障子を細目に開けて、顏を長くして下目を使つて窺いて見ると、顏は見えないが、風は支那服であつた。一人の支那人が表の門札を指しながら、

「ホン＝デン＝ヨウさん、ホン＝デン＝ヨウさん！」と言つてゐるのが見えた。

そこへ鼻赤の女中も、下駄を突つかけて下に下りて、（彼女は姿は全然見えなかつたが）相手の指さす門札を見に來たらしい樣子なので、本田はそつと障子を閉めて、元の机の前に坐つた。その瞬間彼女の、

「あゝ、本田さんですか？」といふ頓狂な聲に、彼は飛び上る程驚いた。

「あゝ、又久世だ！」と彼は呻つた。「彼は何といふ奴だらう！　俺を困らせるために、今日はわざわざ支那人をたのんで來たんだな……」

彼は玄關に駈け下りて行つて、呶鳴りつけてやらうかと思つた。が、又、支那人などを相手にして、この上にも恥の上塗りをするやうな事になつてはと思ひ返した。しかし、このまゝぢつと坐つてゐて……と考へると、仲々机の前に落着いてゐられないのであつた。さうして、玄關に出て行かうか、女中が取次いで來たら何と答へようか、などとやきもき考へながら、室の中を縱橫無盡に步き廻してゐるうちに、どうやら客の支那人が歸つて行つた樣子なので、彼は忽ち跳ね上るやうに坐を立つて、今度は思ひ切つて窓の障子をがらりと開けると、彼が外を見るのと、下宿屋を出て五六間步き出した支那人が音のした彼の窓を振り向くのと、ぴつたり顏を見合した。

「やあッ！」と彼は叫んだ。「久世君！」

しかし、支那服を着てゐた久世は、誰に敎はつたのか、二言三言支那語らしい言葉で、聲をかけたまゝ、すた／＼と逃げるやうに行つてしまつた。

「ちえッ！　何といふいま／＼しい男だらう……」と彼が窓に突立つたまゝ、齒嚙みをしてゐる所へ、例の鼻赤の女中が、その赤い鼻に皺を寄せて、にた／＼笑ひながら、明らかに昨日彼が久世に贈つた靴の箱を持つて、入つて來た。

「あのキユウさんといふ方が、」と彼女は言つた。「これをお渡ししてくれつて持つていらつして、お歸りになりました。」

「キユウ?」と言ひながら、彼はその箱を受取ると、箱を包んだ紙に、「本殿」と上に書いて、その下に「久　世勇」と、わざ〳〵久の字と世の字の間を離して認めてあつた。

常にはくどい程何事にも辯解する癖の彼も、今はその餘裕も勇氣も失つて、呆然としたまゝ、唯だまつて受取つて、だまつて女中が部屋を出て行くのを見送つてゐる外はなかつた。しかし、身體は熱病にでも罹つたやうに、止め度もなくぶる〳〵と震へて、無念さに齒までがた〳〵と震へて止らなかつた。一度ならず二度ならず斯ういふ所を見られたからには、自分は實際は支那人ではないけれども、下宿の主人や女中に對して、さうではないといふ辯解の最早やしやうがないと彼は思つた。さう思ふと、彼は一刻もぢつとしてゐられなくなつた。で、彼は何處といふ的もなく、帽子も被らないで、いきなり戸外に飛び出したのであつた。

下宿を出てから、二三町行つたかと思ふ時分に、彼は一年ももつとも會はなかつた同郷の友人で、（同郷と言つても、中學が同じだつたといふだけで、彼の方が相手よりも三年も下だつたのと、郷里に於いても彼の家と相手の家とは五六里も離れてゐたので、實は彼等は東京に來てから、第三者に紹介されて知り合つた間柄に過ぎなかつた。）去年美術學校の日本畫科を卒業した木谷といふ男と遭つた。

「よう、本田氏どちらへ？」と木谷はその特長の突き出た頤を更に突き出して、おまけにその尖に突き出て生えてゐる山羊のやうな髯を、前方に向つてしごきながら、持前と見えて老人のやうな言葉附で斯う聲をかけた。「暫く御尊顔を拜しませんでしたな。如何です、その後は、御健在ですか？」

頤が突き出てゐて、額がおでこで、それに顔の中央がぐつと凹んでゐるので、そんなに低い鼻ではないのだが、結局その頤と額との一線以上にも出てゐないそれの下に、明確に八の字を畫いてゐる畫像の天神様のやうな口髭を生やしてゐる木谷の顔を見ると、本田は「この男こそ唐紙などに書いてある支那人そつくりだ」と思つた。これ迄にも三四度顔を合したことがあつたが、その時は支那人とは思はなか

つたが、然し何となくその若いとも年寄ともつかない顏の感じなり、わざとらしく聞える老人めいた物の言ひ方が氣に觸つて、彼は餘りこの男に親みを感じてゐなかつたのであつたが、今日はこの男にも縋り付いて、以後親友になつて貰ひたいと頼みたいやうな氣さへした。

「暫くでした。その後は大變御無沙汰してゐます、」と本田は云つた。「一度お伺ひしたいと思つてゐながら、つひお所を聞き洩らしてゐたものですから、」と出鱈目のお世辭を言つた。

「これから何處かへお出かけですか？」と木谷は言つて、唯散歩にといふ本田の答を聞くと、「ぢや、小生の宅へ是非お立寄り下さい、色々藝術上の談話でも交換しませう。」

やがて「こゝです」と木谷に案内されて、御影石の柱の立つた門をくゞると、一間ばかりの石疊を行つたところが玄關になつてゐて、頭の上に「晩成畫房」と彫んだ木の額の掛つてゐる下に、小さな鐘が吊られてある。木谷がそれを二つ三つカン／＼と鳴らすと、忽ち正面の障子が開いて、女中が手をついてお辭儀をした。

「お客人をお連れ申した、」と木谷が嚴かに言ひ渡した。本田は恐縮しながら彼に從つて座敷に通ると、高さ一尺以上の土の焜爐がその中央に据ゑてあつて、その上に素燒の土瓶が掛つてゐる。木谷の說明に依ると、濁つてゐるので有名な支那の黃河の水をこれで沸かすと、水分中の泥土はすつかりこの土瓶の底に吸ひ込まれて、後に殘つた水は無色透明で、而も何とも言へぬよい味がして、これで以ていつも茶を飲んでゐると、とても水道の水を沸かして入れた茶は飲めないとのことであつた。だから、木谷の家でも、わざ／＼近所の溝の水を汲んで來て、これで沸かして飲むのだと言ふ話であつた。

床の間に掛つてゐる軸は言ふに及ばず、唐紙の畫、それから主人が畫きかけの畫、目に觸れるものは悉く支那人或は支那の風景を現したものであつた。こんな風に、見るもの聞くものが、悉く本田を驚かせたが、彼はそれ等のものを輕蔑しなかつたのみならず、これは久世などとは、同じ畫家ではあるが、似てもつかない、餘程變つた趣味を持つた、藝術家に違ひない、何故自分はもつと早くからこの人と友

選になつておかなかつたらうと、後悔したほどであつた。

　彼は何かの話の切れ目に、「今年も文展にお出しになりますか？」と聞いて見た。そして、ふと久世から、「あの男は毎年毎年唐美人ばかり畫いて文展に出品して、毎年毎年落選してゐるのだが、ちつとも腐りないでやつぱり唐美人ばかり畫いてゐるんだよ。何でもあの男の畫ばかりは、若い新しい審査員にも、老人の古い審査員にも、誰にも分らないんださうだ、」と言ふやうな事を聞いたことがあるのを思ひ出して、これは飛んだ恥をかゝせるやうな質問をしたと後悔した。

　が、相手は恥づかしがるどころか、寧ろ得意らしく、頤の山羊髯を前方にしごきながら、「無論、出すつもりです。だが、どうも小生の畫は俗人の目に入らないでね……」と言ひながら、床の間に掛つてゐる掛軸を指さして、「小生はあの讃を坐有の銘にしてゐるんですよ。」

　その讃といふのは、何でも松柏は彫むに後れ、大器は晩成すると言つたやうな言葉であつた。そこで、

「あなたの晩成と言ふ號はそれから出たのですか？」と本田が聞くと、

「さうです、それから出たのです、」と相手は如何にも得意さうに、語勢を强めて答へた。

　それから又話を變へて、本田が下宿で支那人と間違へられたことから、久世が彼のことを「ホン」と呼び、自分のことを「キユウ」と言つて、靴を届けて來た話をすると、

「ほおー　それは大出來ですね、」と案外にも木谷は讚成の意を表した。「なる程、君たちは三字名前だから羨ましいですな。で、君はホン＝デン＝ヨウといふんですか、そして久世君はキユウ＝セ＝ユウといふんですね。小生も大抵上の「木」の字を削つて、谷晩成と名乗ることにしてゐますよ。……」

　本田は、自分がそれに非常に不滿足で、それどころか、そのために自分の部屋に落著いて坐つてゐられなかつた程不快を感じて、今し方戶外に飛び出したのだと言ふことを、相手が餘り獨合點におちて、勢込んで話すので、言ひ出す機會を失つてしまつた。

「全く、支那といふ國は素的ですな、」と木谷は相手の心持などには少しも頓着なく話しつゞけた。「何

處が文明國だと言つて、世界中で支那程の文明國はありませんよ。古い國ですからな。それに日本などと違つて、如何にも大國らしい、大樣な所が何とも言へませんわい。日本人は何かと言ふと、支那人をぼんやりしてると言ひますが、あのぼんやりしてる所が身上ですよ。日本人がいくら力んだ所で、あんなゆつたりした人間になれないぢやありませんか？　ですから、昔、荻生徂徠といふやうな立派な學者までが、物徂徠と變名して、支那人にあやからうとしたのも無理がありませんよ。例へば支那人の惡い道樂だと言はれてゐる、あの阿片の喫煙ですな、あれなども小生に言はせると、あんな物を嗜まうといふ國民は支那人の外にはないのです。あれは丁度人間で言ふと、からすみとか、このわたとか、子供のうちには身向きもしなかつたやうなものを、大人になると好きで堪らなくなるのと同じ理窟です。大體、支那人の煙草のすひ方からが素的ぢやありませんか、あの長い煙管で、（あれは西洋人の煙管のやうに決してポケツトの中などには入りませんよ、）日向ぼつこをしながら、ぷかりぷかりとやつてゐる所は！あれは意識、無意識に拘らず、古い文明と、古い藝術の夢を見てゐるのです……」

斯ういふ話が果しなくつゞいたのであつた。本田がそれに合槌を打つ、間もなかつた程、そしてこゝに始終を書き盡されない程、長々と雄辯に物語られたのであつた。

本田は木谷の家を辭して歸る途々、なる程今迄は全く無知識でゐたが、聞いて見ると、支那といふ國はさういふ大した國なのか、支那人といふものはさういふ大した人種なのか、と木谷に話された通りに受取つて、頻りに感心した。彼の本職である所の、彫刻に於いても、西洋などとは違つた、素晴らしいものもあると木谷が言つたことを思ひ出したり、かと思ふと、木谷の言ふ所に依れば、料理なども世界中で支那程凝つたものはない、一例を擧げると、一皿の料理を作るのに、二週間の間晝夜通しで煮つゞけるものさへあると言ふことだが、一體どんなもので、どんな味のするものだらうなぞと考へてゐるうちに、いつか自分の下宿に歸つて來た。

ところが、忽ち自分の下宿の門をくゞつて、自分の顏を見ると、すぐ赤い鼻に皺を寄せてにやりと笑

ふ女中の顔を見ると共に、今の先までいゝ氣持になつて考へてゐたことが、何處かに吹き飛ばされてしまつて、木谷に會つて、木谷と氣持よく話したことなどは忽ち一場の夢のやうな氣がされて、久世に拭ふべからざる恥をかゝされたことと、從つて長い年月かゝつて漸く改名した自分の名前が、支那人らしい名であると言ふことなどが、一度に生々と思ひ出されて、又々胸を搔きむしられるやうな不快に襲はれ出した。

そのうちに、女中の運んで來た夕食の膳を見ると、彼がふと氣がついたことは、今し方自分が外から歸つた來た時に、隣室に運んで行つた膳に鷄卵が附いてゐたのに、（あの鷄卵を食べないで、夜風呂に行く時に持つて行つて、久し振りで頭を洗つてやらうと思つてゐたのに、）自分の方に持つて來られた膳の上には、それが附いてゐないことであつた。

「これは可笑しいぞ、」と彼は思つたが、さすがにそんなことは女中に聞き兼ねた。しかし、愈よそのまづい食膳に向つて箸を下してゐると、又頻りに「俺を支那人だと思つて、飽く迄虐待してゐるのに違ひない、」と考へられて來て、それが五分十分と經つて行く時間と共に、彼に益々我慢がならなくなつて來た。しかし又、女中が膳を下げに來た時にも、半分口まで出かゝつてゐながら、若しそんなことを言つて、あべこべに恥をかゝされたら？と思ふと、又つひそのまゝになつてしまつた。が、一人になると、襲はれるやうにいら〳〵して來て、堪らなくなつて、彼は夢中で帳場に駈けこんだのだつた。

「あの、あの、」と言つて、急き込んだ彼が二の句がつげないのを見て、

「はあ、はあ、」といつもながらの、木綿の紋付の羽織を着て、鯰髭を生やした、少し吃り癖のある主人は、おろ〳〵しながら答へた。

「あの、あの、」と徇くり返しても、彼は漸く「こゝの家では賄料に等級があるんですか？」と、もうその時は、それ程腹は立つてゐなかつたのだが、心にもなく、強い詰問するやうな調子で尋ねた。

「いや、」と主人は、彼の不意な質問の意味を解し兼ねて、「いや、決して等級などはございませんが……

……」

「すると、僕は變なことを聞くやうですが、」と言ひながら、あゝ、俺は怒ることに事缺いて、何といふ卑しい問題を持ち出したのだらう、何とか外の話に變へられないものか知ら？　と突嗟の間に思つたのだが、もうどうにもならなかつた。「今日の夕食に、僕は確に僕の隣の部屋には卵が附いて行つたのを見ましたが、（丁度僕が外から歸つて來た時に、女中が隣の部屋に持つて入るところが目に付いたのです、決して氣を付けて見てゐた譯ではありません、）それに僕の方には附いて來なかつたのはどう言ふんでせう？……女中が忘れたのならかまひませんが……若し賄料に等級があるのなら、僕もその一等のにして貰ひたいものです！……」

「いや、それは、それは、その……」と髭の、紋付の主人は、更に一層吃りながら、「それは、そのお隣の方は今日お晝をお上りにならなかつたものですから、それで、それでその、卵をお附けしましたやうな譯で……決して、決してその等級がある譯ではございませんので……」と言つた。

「ヤッ、實に失禮しました、」と本田も眞赤になつた。が、相手の主人も赤くなつてゐた。「その、僕は今夜お湯に行つて、頭を洗はうと思つてるものですから、あの、そんなら、その、僕にも卵を二つばかり持つて來て下さいませんか……」

斯う言ひ捨てゝ、逃げるやうに自分の部屋に歸つてからも、彼は長い間かつかと火照る顏を机の上に俯伏せにしてゐた。

「あゝあ、俺は一體どうしたらいゝだらう？」と彼はその晩寢られないまゝに、色々それからそれと、取止めもなく考へ耽つた。「考へて見ると、俺は少年の時から二十六の今日になる迄、俺のしたことで、一つとしてそれが恥にならないで、自分の身に返つて來なかつたことがない。これから俺は五年十年、何年生きるか知らないが、俺は生きてこの世に接して行く限り、恥をかき又恥をかき、恥の上塗りに口

を送るに違ひない。あゝ、人に恥といふ感情がなかつたら、どんなにこの世は渡りよいものであらう！」

彼はふと晝間會つた、突出た顋に突出た山羊髯を生やした、木谷のことを思ひ出した。審査員の誰にも分らないやうな、而もそれが新しいためではなくて、古い支那畫を毎年の展覧會に出して、毎年落選しながら、少しも恥ぢずに、人の思惑などを些も顧みないで、自分の趣味ばかりに耽つてゐるその男のことを考へると、羨ましい氣がした。が、すぐ心持が變つて、又無暗にその無神經さが輕蔑されて、どうしてあの時あんなに感心したのだらうと、不思議な氣がして來た。そして彼の言つたことが急に馬鹿々々しくさへ思はれ出した。

眠られないまゝに、彼はいつか夜店の古雜誌屋から買つて來た、枕元にあつた「現代」といふ雜誌をとつて、小説や雜錄の書出しの二三行づゝを讀み飛ばしては、頁をはぐり〳〵して行くうちに、釜田權太郎といふ名を見出した。釜田權太郎といふのは、彼と郷里は二十里ばかりも隔たつてゐるが、やはり同郷で、彼よりは三四歳年長の、洋畫家であつた。釜田は本田のみならず、木谷とも久世とも友人同志で、現に本田とは久世の紹介で、二三年前に知り合つた間柄であつた。本田はかね〳〵釜田が洋畫家であつて、同時に詩人であるとは聞いてゐたが、彼の詩を見るのは始めてゞあつた。

試みにその一つを讀んで見ると、こんな詩がある。

弟も妹も、
みんな來い、みんな來い、
この兄が大きな風呂敷を持つてゐる程に――

悲みも苦みも、
みんな持つて來い、持つて來い、
(どうせ、おんなじこつた、)

この兄が一人で背負つてやる程に——
もう一つ別なのを讀んで見ると、——
「何と言ふお前は
子だらう——」と、
少年の頃、俺は
父母に叱られる度毎に、
いきなり庭に飛出して、
（廣い芝生のまん中に
名も知らぬ一本の大木があつた、）
泣きながらその木の周りを、
竹切で叩き叩き、
「生んだの償へ、
生んだの償へ！」と
叫び廻つたものだつた。

今もその大木はあるだらうが、
父母はもう夙にこの世にゐないが、
俺が今も尚竹切を振廻して、
時々叫びたくなる心に變りはない、
「生んだの償へ、
生んだの償へ！」

詩として、いゝ詩か惡い詩か分らないが、本田陽はそれ〳〵感心してしまつた。彼は、その詩の作者釜田權太郎とは、木谷などから思ふと、ずつと親密で、今迄二三度訪問した經驗があるので、時が夜中でなかつたら、すぐにも訪問したい氣がした程であつた。

漸く明け方にうと〳〵として、次に目を醒した時は、もう十時を過ぎてゐた。で、朝と晝とを兼ねた飯を食つて、彼は釜田をその下宿に訪問すると、相手は未だ床に入つてゐた。

「暫くですね、」と釜田は、十分掌の幅ほどもあるやうな廣い額の下の、恰好さうな、寧ろ狡さうにさへ見える目を、ちよろ〳〵と二十日鼠のやうに働かせながら、「僕、今起きますから、どうぞ、その邊に坐つて下さい、」と床の中から會釋した。しかし、仲々起きさうな模様もなく、床の中から呼鈴などを押して、女中に火や茶を命じてゐた。

本田が、昨夜町を散歩して、釜田の名に引かれて夜店で買つて來た古雜誌で、（そのことは勿論口から出まかせであるが、）

「君の詩を拜見して、非常に感動しました、」と言ふと、

「僕の詩ですか、」と相手はくしや〳〵に寢亂れた頭の毛を搔きながら、「なあに、與太ですよ、」と答へた。そして忽ち話題を變へて、

「久世から聞きましたが、君は今度愈よ改名したさうですね？」と聞いた。

「その改名に就いてですがね、」と本田は頭を搔きながら言つた。二人とも同じく頭を搔くのが癖であるが、釜田の方は殆ど相手が氣が付かない位の程度で、さうするのに引きかへ、本田の方は肘を眞正面に突張つて、首全體を抱えるやうな恰好をして、心から恥かしさうにやつた。「もつとも改名は二年も三年も前からしてゐたんですが、今度は愈よそれを戸籍の方からすつかり手續をして、變へてしまつたのです。ところが、」とつゞけて、彼は重ね重ねその名前に就いて、久世に惡戯をされたことから、下宿屋で支那人と間違へられたことや、最近の久世の靴の事件に至るまで、詳しく話して、「思ひ思つて漸く變

へた名前が、妙に厭になつて來たんです。」

斯う訴へる樣に話してゐるうちに、彼は、弟も妹もみんな來い、みんな來いと歌つた相手が、その風呂敷とやらに、自分の苦勞も一緒に包んでくれさうな氣がして、段々訴へるやうな調子を强めたのであつた。

「大體僕は君の改名說には、昔から反對だつたんですよ、」と釜田は、本田の哀願の調子にも拘らず、反對の口調で言ひ出した。「僕は陽などといふ名前より、耕右衛門といふ方が、遙に日本的でいゝ名前だと思ひますがね。例へば今後君が有名になつて、君の名前が羅馬字で外國人などにも紹介されると言つたやうな場合にも、陽といふより、耕右衛門といふ方が、餘程その字面から言つても、字音から言つても、いゝぢやありませんか？」

座談の面白いのと、出鱈目話が巧みなのとで、友人間にも定評のある釜田は、寢床の中から得意になつて、こんな風に喋り出したのであつた。彼は言葉をつゞけた。「陽などと言ふのは、支那人と間違へられるのも無理はありませんよ。支那人と間違へられるなんて、名譽ぢやありませんからね。それから思ふと、耕右衛門といふのは、寧ろ歐羅巴人らしくてハイカラぢやありませんか？　現に、佛蘭西にはグウルモンといふ文豪がありましたし、又此間露西亞から來た詩人にもパリモンドと言ふ人があつたし、モンと言ふ音は僕など實に好きですよ。右衛門、左衛門などといふ名は、一面に於いては日本的で、一面に於いては西洋流で、そして何處か優美で、何となくハイカラぢやありませんか？　僕も以前は釜田の釜といふ字が厭で、『荷滿田』として見たり、權太郎といふ名が嫌で、『權』と一字にして見たり、色々馬鹿な眞似をしたことがありますがね。結局、名前といふものは符牒に過ぎないんですからね。『權』といふ字や、『耕』といふ字が厭だといふのは、畢竟僕たちの考が囚はれてゐるからなんですよ。却つて、これは我々の先祖の、土に働いた人々が好んで付けた名だと思へば、麿だとか、公だとか言ふ貴族的なのより、遙に、近頃流行のデモクラシイで、いゝぢやありませんか？」

本田は、木谷とは違つて、何處か言ふことから、調子から、詩などを作るだけのことがあつて、ハイカラな相手の話に、木谷の時とは比較にならない程、更に遙に感動してしまつた。

「あなたの、」と（最早や釜田に對しての彼の尊敬の念が、「君」と言ふ言葉を口にさせなかつた、）本田は興奮して言つた。「あなたの『生んだの償へ』といふ詩は、實に感心して拜見しました。僕にもあれと同じやうな事があるんです……」

「いや、つまらないものですよ、」と釜田は頭を掻きながら、相手の言葉を引取つて、益々調子づいて、「人間といふものは、いや、人はどうだか知りませんが、僕などはいつ何を考へ出すか、何を言ひ出すか、自分ながら分りませんよ。それで、昨日言つたことも本當なら、一昨日考へたことも嘘ぢやなし、と言つて今日してゐることもつともだと言つた風で、自分でもどれが本當なのだか、何が何だかさつぱり分りません。だから、一度くらゐしか會はない人は、或人は僕のことを非常に眞面目な男だと言ふかと思ふと、或人は又あんな出鱈目な不眞面目な男はないと言ふし、或藝者はあの人は氣がさつくりしてゐていゝと言ふかと思ふと、或女はでれ／＼してゐて氣障な奴だと言ふし、それでみんなの言ふことが、それ／＼本當だから驚くぢやありませんか？　だが、僕にはそれがちつとも不思議ぢやないんです。ね、同じ人間ですもの、人のすることに何でも出來ないことはない筈だし、又人の持つものなら、善人の心だつて、惡人の心だつて、それ／＼自分の中に入つてゐますよ。……」

そして釜田の話は果てがなかつた。詳しくこゝにそれを叙する煩しさを避けるが、兎に角この話に依つて本田の心持がすつかり變つた程、彼を驚かし、且つ印象したのは事實であつた。

本田は彼の下宿に歸る途々、（釜田は本田が歸る時まで、遂に床を離れなかつた、）やつぱり元の通り自分が生れた時、父が附けてくれたまゝの本田耕右衛門を名乘らうと考へた。

下宿に歸ると、思ひがけなくも、故郷の母からの手紙が彼を待つてゐた。

「あゝ、取返しの付かないことが起つたよ！」と母の手紙は冒頭に於いて既に彼を驚かすに十分であつた。「私は生れて未だこんな苦しい、こんな恐ろしい（死ぬより辛いとはこれ以上のことを言ふのではない！）目に遭つたことがない。この三日といふもの、一口も物を食べない、物が喉を通らないのだよ。漸く今思ひ切つてこの手紙をお前に書く。人目さへなければ、私は今直にもお前の所へ飛んで行きたいよ。（十里の汽車にも乘り兼ねてゐる私だが、今は汽車の中で死んでもよい、二百里が三百里でも行く。斯ういふうちにも隙さへ目付かれば、いつ何時お前の所へ行くかも知れないよ。）

「その事件といふのは斯うなのだ。――

「例の作右衛門の一件だが、委細のことを、さいはひ新家の治助が役場に出てゐるものだから、彼にすつかり打明けて、作右衛門のところから出産屆が出たら、此方の改名屆を出すやうにと頼んでおいたのだ。作右衛門の家は御存知の通り、彼と後妻のお梅との二人暮しの上に、死んだ先妻には子供がなかつたし、始めての子のことだから、さあ女房が産氣がついたと言ふと、彼は嬉しまぎれに、と言つて自分は手離せないものだから、産婆の所への使も、役場への屆も、一緒くたに甥の與吉に頼んでしまつたものだ。

「それで、まあ、無事にお梅が安産した迄はよかつたのだが、何と言つても無人で手が廻らないから無理もないのだが、とは言ふものゝまるで手傳人がないぢやなし、何とお産があつて三日目に家に挨拶に來て、

「『奥樣、お陰樣で、』と作右衛門が言ふぢやないか。『お陰樣で無事に生れました。お陰樣で役場の方の屆も何も彼もすつかり濟ましまして、やつと片着きました。ところで、あの附けて戴きました名前は何と申しますか、それを伺ひに參りましたので…どうも、折角附けて戴きましても、伺つて置きませんと、不便なもので…』

「そこ迄はまだ笑ひ話なんだよ。もつとも生れたと言ふことは、その晩に小作男の勝藏から聞いてもゐたし、その前の日には役場の歸りに治助が寄つてくれて、作右衛門の方の出産屆を子が生れた朝與吉

が持つて來たので、昨日此方の改名屆も無事に濟ましましたと知らしてくれてもゐたので、私の方はすつかり承知してゐたものだから、まあこれで、流産などしなくて、お蔭でお前の名前の方も都合よく行つたと、安心してゐたんだよ。そこへ作右衛門が來ての、遲れ走せに、そんな呑氣な調子だもんだから、本當に大笑ひだつたんだよ。

「ところが、お前、それからが大變なことになつたんだ。あゝ、何といふことが世の中にはあるのだらう！　お前に想像がつくかい？　そこで私が何氣なく、本當に何氣なく、

「『男の子？　女の子？』と聞いたとお思ひ。

「『へえ、御蔭樣で、』と彼は持前の薄馬鹿のやうな笑ひ方をしながら、『御蔭樣で女の子で……』と言つた。

「『女の子だつたか、』と私はまだその時も氣が付かなかつたのだよ。『まあ、しかし、どちらにしても達者なら結構だね。』

「『で、奥樣、』と作右衛門が言つた。『あの附けて載きました名前は……』

「はつと思つた、その時の私の驚きを想像して御覽……それから……それから……それから……何も彼も滅茶苦茶だ。

「正直な作右衛門はおう〳〵と聲を上げて泣き出して、『私の始めての子を、私のたつた一人の子を……女の子に……耕右衛門……女の子に……耕右衛門……』と叫びつゞける。

「翌日になると、役場の治助が飛んで來て、『私は免職になります！　免職になつて、その上に惡くすると、懲役に行かねばなりません、』と彼も亦私の顏を見るなり泣き出すのだ。

「こんな騷が父上に知れない譯に行かない。父上は怒つて、一時間ばかりの間といふもの、手當り次第のものを投げつけて壞されるやら、まるで氣が狂つたかと心配した程だつたよ。『俺の顏に泥を塗つた！』と彼は叫んだ、『俺はもう村中に顏向けがならない。俺はこの元の起りの耕右衛門（この耕右衛門

はお前のことだよ。)を東京へ行つて殺して來て、それからお前を殺して、俺も死ぬ!」そして又「誰も彼も底の知れない程の馬鹿者共だ。耕右衛門（この耕右衛門もお前のことだよ。)の大馬鹿は言はずと知れたことだが、それに加勢するお前は勿論、男の子だか女の子だか分らない子供の名をつけて貰ふ奴も貰ふ奴だ。作右衛門の拔作め! 又治助の奴も治助の奴だ、そんな馬鹿な改名屆などを、迂濶に受付けるといふ頓馬な法があるもんか!」

「斯うして文字に書くと、何でもないやうだが、それはそれはお父樣の權幕つたら、ないのだよ。治助には泣き込まれる、作右衛門には訴へられる、父上には奴鳴られる、そして村中では私一人が、子の可哀さに引かされて、惡の張本人のやうに噂する。私は取付く島がないのだよ。

「あゝ、この今の有樣、今の私の心持を、何と現し得よう? こゝに書いたのはほんのその千分の一、萬分の一にも當らないのだよ。筆にも口にも盡せぬとは愚、現在この有樣を見た者、現在私の心持になつた者より外には、到底筆や口では傳へやうがない程だよ。

「鬼に角、手紙はこれで擱く。私はいつ何時、この手紙がお前の手に着かない先にでも、蹤があり次第お前の所へ逃げて行くかも知れないよ。」

本田はこの母の手紙を讀みをはつて、少なからず驚いた。だが、一寸の間、彼は斯う考へた。——丁度それはよかつた。幸、俺は元の耕右衛門になりたいと思つてゐた所だ。それに、陽と言ふのは女の名前にもつて來いだ。今度は逆に俺の名とその子の名とを交換すればいゝ。さうだ、早速さう言つてやらう。しかし、これは少し變だぞ——と彼はすぐ氣が付いた。——無論、それは變な筈であつた。さう簡單に、一度役場に登記した名前を、交換が出來るものなら、前の時にあんな苦勞はしなかつた筈であつた。これや俺の母が心配するのも無理はない、と彼は思つた。

そのうちに、彼は母の心配を心配すると言ふよりも、今にもあの白髮染で頭の地まで眞黑にした、色の黒い、一見田舍者らしい、要するに餘り體裁のよくない母親が玄關に現れさうな氣がして、(さうする

と、俺がこの下宿で支那人と間違はれたことが、取消せる譯だな、と一寸思つたが、「あゝ、俺は支那人と間違はれた方がいゝ、日本の百姓の子と思はれるよりは、と思ふと、自分を生んだ母が、その母の來ることが、ひどく厭に思へて、苛々して來た。

そこへ玄關に「電報！」と言ふ聲がして、「本田耕右衛門といふ人が居りますか？」といふ聲に、彼はぎくりとして飛び上つた。そして直「あゝ、又久世が惡戯をして來たな、」と思つたので、ほつとしてそのまゝ坐つてゐる所へ、鼻赤の女中が駈け込んで來て、

「本田耕右衛門さんと言ふのは、」と例の如く赤い鼻に皺を寄せながら、「あなたでしたね、」と言つて、一通の電報をさし出した。

しかし、さすがに蟲が知らしたか、その時は鼻赤女中などは尻目にもかけず、胸に動悸させながら、震ふ手でそれを開くと、「ハハキトクスグカヘレ」と讀まれた。

本田が泡喰つて故郷の家に歸つて行つた時、母は奥の十疊の間に寢てゐたが、別に大して危篤と言ふ程惡さうにも見えなかつた。

「もう何でもないんだよ、」と彼女は唯それだけ言つて、苦しいと言ふよりは、氣まりの惡さうに目を閉ぢて、それ以上何にも言はなかつた。そこへ外出してゐた父が歸つて來て、案外機嫌のいゝ顏をして、

「あゝ、二度目の電報は見なかつたのだな？」と言つた。

……この本田にとつて、狐にでも憑かれたやうな事件は、便宜上、作者が簡單に說明すると、斯うなのであつた。——

彼の母は、彼女の手紙にもあつた通り、四方八方から板挾みになつた苦しさから、東京の息子の元に逃げて行かうにも、その隙が目付からなかつたので、思ひ餘つて、その「死ぬより苦しい」と言つた苦しさを、やつぱり死に逃れようとしたのであつた。言ひ換へると、彼女は厠の中で首を吊らうと試みた

のであつた。

突然、次男の彌次郎が、厠の中に唯ならぬ叫聲を聞いて、急いで駈けつけて窺いて見ると、母がその中で窮屈さうに首を吊つて、悶掻いてゐたのであつた。それから！　家中が大騒になつた。父親は、その時、早速先に述べた、東京の長男へ宛てゝの電報を、下男を走らせて打たせたのであつた。が、彼女は、村の人々に、「あれは狂言だよ、」と言はれた程、難なく命を取止めたのであつた。

「ハハゼンクワイカヘラズトモヨシ」と言ふ二度目の電報は、長男が故郷に向ふべく下宿を出てから、間もなく着いたものに違ひなかつた。

事實、本田が故郷の家に歸つた時、寢床の中にゐた母は、普段と同じ狀態に復してゐたのであつた。けれども、彼女は目を閉ぢて、寢床の中に入つてゐたゞけなのであつた。

以上のことを、彼が茶の間で父から聞き了つた丁度その時に、突然呼吸を切らして、作右衛門が入つて來た。

「旦那様、」と彼は何の前置もなしに慌しく叫んだ。「旦那様、みなさん、色々御心配をかけました。お蔭様で、……お蔭様で……耕右衛門が死にましたので……」

「えッ、何？」と父親と長男とは一緒に斯う叫んだ、彼等には作右衛門の言ふ意味が分らなかつたのであつた。

「お蔭様で、」と作右衛門はくり返した。「お蔭様で……耕右衛門が……娘の耕右衛門が……」と言ふうちに、おう〳〵と泣き出した。

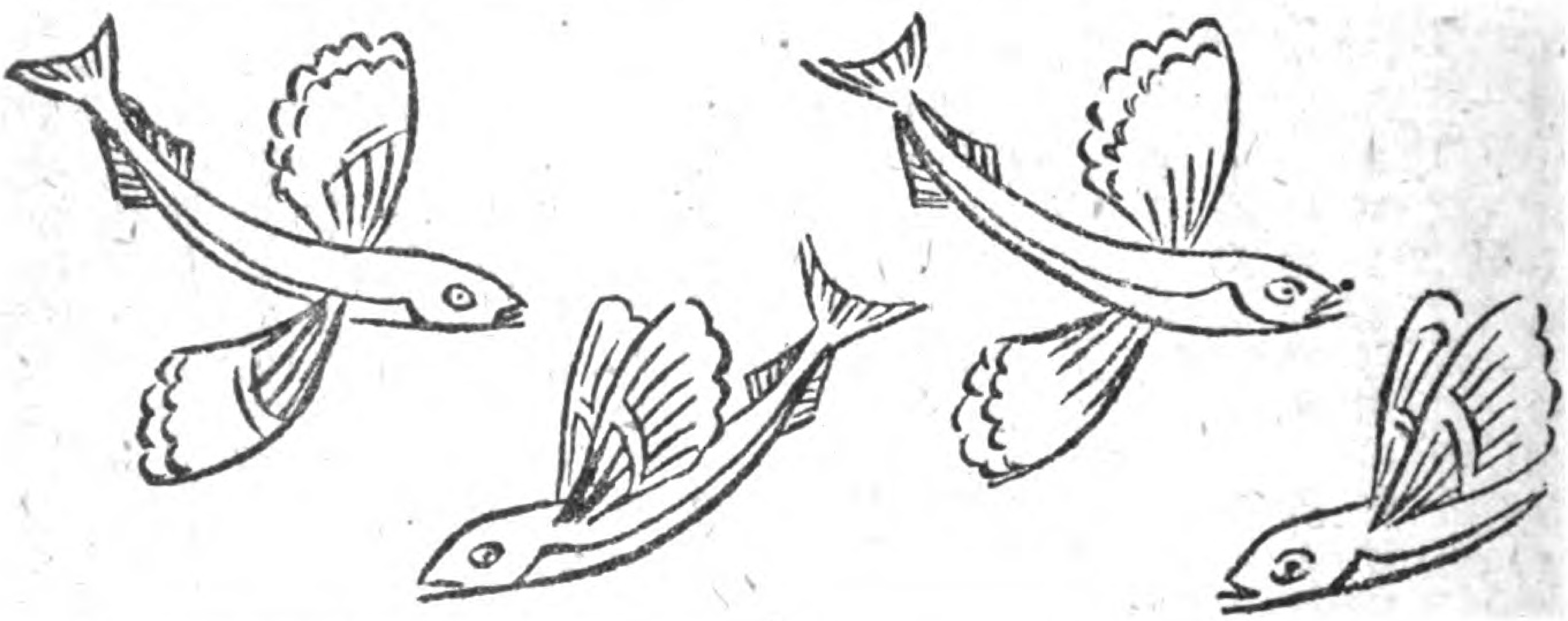
「何、赤ン坊が死んだのか！」と始めて、相手の意味を悟ると共に、父親が叫んだ。

いつの間にか、そこへ、奥の間に寢てゐた母親も、寢間着のまゝで出て來て、彼等の傍に坐つた。

「まあ、亡くなつた者が仕様がないぢやないか、」と父親は泣いてゐる老百姓をなだめるやうに言つた。

「又こしらへたらいゝぢやないか？」

——斯うして、僅な間に、二人の耕右衛門は亡くなつたのであつた。そして本田陽は又どうかして、陽といふ名を變へたいと考へ始めたのであつた。



一つの存在

舟木重信

一

甕井素助は、毎日、憂鬱で、妙に物悲しくつて、そのくせ退屈で、しかも苛々してゐるのである。——

南向の窓の下に据えられた机の上には、いつものやうに原稿紙が載つてゐた。素助はその前に座つて、昨日のやうに、又一昨日のやうに、更に又十日前のやうに考へ込んでゐた。彼の右手は時々動いて、その度毎に紙の上の字が幾つかづゝ殖えて行つた。が、どの字も彼の氣に入らなかつた。どの文句も、うそで、空虚で、馬鹿々々しくつて、出鱈目のやうな氣がした。その上、ペンが引掛つたり、インキが紙の上に跳ね散つたり、字が書き誤られたりした。彼はその度毎に顔を顰め、原稿紙を引裂き、兩手で丸めて、室の隅に投げ棄てた。そこにはもう既に、幾多の丸められた原稿紙が、朝からころがつてゐるのだつた。——素助は又、新しい紙の上に、改めて最初の文句を書き附けて考へ込んだ。結局、彼の原稿は一枚も進まない。そして、最初のその文句はいつもから始まつ

てゐた。

――「彼は、憂欝で、退屈で、悲しかつた。彼には、室の中に留まることがもう不可能だと思はれた。で、彼は苛々して外に出た。……」

素助は小説を書いてゐた。それは、憂欝で、退屈で、何を見ても面白くなくつて、どこに出掛けるあてもない主人公――つまり四五年前の彼自身の生活を基礎とした小説だつた。實際、その頃彼は、憂欝で、退屈で、悲しくつて、面白くなかつたに相違なかつた。だが、「で、彼は苛々して外に出た。……」と書いてしまつても、彼には、主人公がそれから先どこに行くのか分らなかつた。主人公には全然行く所がないやうに思はれた。彼自身の書くことも亦全然ないやうに思はれた。そして、彼の小説はそれでもう終つてしまつたやうな氣がした。しかし、彼は續けなければならなかつた。で、彼は考へて、迷つて、悶えて、益々憂欝になつて行つた。……

落ちて行く太陽は、西の空と雲とを焼いて、赤い光を投げてゐた。風はなかつた。そして、素助の室は益々蒸し熱く、益々息苦しかつた。

『何と云ふ暑さだ。……今日も亦書けはしない』

彼は、體全體の皮膚の上に湧き出る汗を感じながら、溜息と共に悲しく呟いた。同時にその言葉は、「書いた所で……」と云ふ暗い自嘲を呼び起した。

彼は、頭を振り向けて本箱を見た。そこには、幾多の本の間に、彼によつて書かれた幾篇かの小説を載せた雜誌が入つてゐた。それらの小説――彼の長い努力の結果である――は、彼の友人の世話によつて、雜誌社の手に置かれたのだつた。しかし、それは殆んど誰にも讀まれずに葬られた。最も幸福な場合さへも、「器用に書けてゐる」とか「相當なうまさを持つてゐる」とか、なほそんな種類の言葉を、月評子の數行の勞力のうちに贏ち得たに過ぎなかつた。彼の友人達も云つた。「良い所はある。だが、もう少しだ」そして、彼自身も亦、それに就て云つてゐた。「いや、こんなものに價値はありやしない。これ

はほんの試みなのだ。もう暫くたてば……」だが、それらの雜誌は棄てられずに、彼が移り變る下宿屋のどこにも持つて行かれた。

二

彼には友人が少かつた。行くべき所を持たなかつた。彼は毎日下宿屋の一室に引込んで讀書した。讀書しながら、彼は常にその作家等に驚嘆と畏敬との叫聲を投げた。「トルストイは偉大だ！」「ドストイェーフスキーは崇高だ！」「シェーキスピヤーは人類の魂だ！」「ユーゴーは良心の火花だ！」「ゲーテは精神の糧だ！」それらの作家等の一句々々は、彼の胸の中に、昂奮の火炎を渦巻き起した。彼の心臟は力強く烈しく鳴つた。「何と云ふ偉大な作家だ！」彼は心の中で云つた。その時、彼は、彼自身がトルストイであり、ドストイェーフスキーであり、シェーキスピヤーであり、若くは何か彼等と同等或はそれ以上の作家であるやうな氣がした。「今に見ろ！」片手に本を持つて疊の上に寢ころびながら、枕の上からの視線を窓の外の青空に投げつゝ叫んだ。それは、世界の文壇に對する挑戰であり、世界の人々の良心を呼び醒す叫聲であるやうに思はれた。彼の體の中には、ドストイェーフスキーとシェーキスピヤーとトルストイとが住んでゐた。其他なほ幾多の偉大な作家等が住んでゐた。そして、彼等は、彼の頭の中に巣を造つて跳ね廻り、彼の胸の血を勝手に亂した。……

彼の室は、下宿屋の二階の一端にあつた。それは、彼の標語の一つである『自己を淨化する』觀念によつて支配されてゐる。總ては、一點の不秩序もなく取り片付けられて、彼の潔癖を證明してゐるのである。――机はいつも正しく南向の窓の下にあつた。その上には、必ず新しい原稿紙と充分にインキの詰められた萬年筆とが横はつてゐた。本箱は、根を生やした木のやうに、規則正しく同じ場所を守つて一分も動かなかつた。その中には、彼によつて愛讀――と云ふよりも寧ろ畏敬されてゐる澤山の本があつた。しかも、それらの本も亦、各々一定の位置を持つてゐた。シュニッツレルとチェーホフとはいつも並

んで置かれなければならなかつた。トルストイとゲーテとの間には、必ず誰かもう少し小さいと思はれる作家が必要だつた。「この二人の偉大な作家を並べるのはぎごちない」と彼は云つた。ゴンチャロフの三部作は、メレヂユコフスキーの三部作と並んで、共に年代順に置かれてゐた。その横には、メレヂュコフスキーの評論「人及び藝術家としてのトルストイとドストイェーフスキー」「永遠の伴侶」があつた。ダンテとユーゴーとサーヴァンテスとは互に肩を並べてゐた。そして、その隣には、彼の好みによつて特別に製本された「エディプス王」と「ハムレツト」と「ファウスト」とが立つてゐた。……夫等の並べ方は、見る人々に不思議な感を惹き起した。素助は、それに對して說明するに飽きなかつた。しかし、それは誰にも理解出來なかつた。……一度定められた本の位置は、もはやどうしても變更することを許されなかつた。彼自身は、夫等の本の位置を總てそらで知つてゐた。彼は屢々云つた。「本の置かれた位置が間違つてゐるのは不愉快極まる」實際、友人の一人は、誤つて置かれた「アラビヤ夜話」を發見した彼が、不愉快げに顏を曇らせて、慌てゝその位置を改めたのを見て驚嘆した。

素助は、夫等の本を誰にも貸すことを好まなかつた。作の梗概を話された誰かゞ、「そりや面白さうだね。俺も讀んで見ようかな」と云ふと、彼は、恐怖に全身を慄はせて横を向いた。「貸してくれないか」友人の言葉は、雷のやうに彼の心臟を打つた。彼は絕望して、顏を顰め、眼を閉ぢて、自分の輕卒な行爲を後悔した。しかし、彼は、そんな場合にもどうしても、友人の言葉を拒絕することが出來なかつた。彼は、硝子戶を開いて、叮嚀に本を拔き出した。そして、友人は、彼の手からそれを渡し受けるまでには、更に再三借りる期日を確めて誓はなければならなかつた。——もしも、それが金錢或はその他の物であるならば、彼は數日の後、貸した相手も貸した事實さへも忘れてしまうのだつた。だが、本箱の中に出來た空席は、彼自身の體に與へられた傷のやうに、絕間なく彼を苦しめた。彼は後悔した。拒絕することが出來なかつた自分の心に鞭つた。本箱の中のその空席を見詰めてゐると、それがどんな本であらうとも、彼は、自分の總ての幸福が奪ひ取られたやうに感じないではゐられなかつた。

チェーホフの「櫻の園」が借り去られた時、彼は、最も苦痛に滿ちた數日を過さなければならなかつた。本箱から離れた「櫻の園」の人物達が、その間中、友人の室のうちで、苦役に驅使されてゐるやうな氣がされた。彼は、その戯曲の結末である、園の美しい櫻の木が切り倒されるあの悲しい音を、いつも自分の魂の奥底で感じた。彼は、悲しくつて、涙ぐんで、憂鬱だつた。彼には、一日々々の經つのが、むやみと長く思はれた。彼は、室に留まつて、本箱のその空席を見てゐるのが耐えられなかつた。彼は、外に出て、あてもなく方々を歩き廻つた。約束の期日が終つた時、彼は、朝から落ち着かずに苛々してゐた。夜になつた。だが、友人は返しに來なかつた。彼は、絶望と憤怒とに體を慄はせて外に出た。そして、初の六七頁目に紙片撚を挾んだまゝ、友人の机の下の紙屑籠の陰に投げ棄てられてゐた「櫻の園」を掴むや否や、彼は、直ちに下宿屋に歸つて、それを本箱の定められた場所に置いて、安堵の溜息を吐いた。——その夜、「櫻の園」を掴んで一言もなく歸つて行く素助を、布團の中で煙草を吹かしつゝ眺めてゐた友人は、彼がその間に幾分痩せたのを見て、彼が病氣であるに相違ないと考へた。……

机の前にきちんと座りながら、或は又盤の上に長い體を横へながら、秩序正しく取片けられた室、殊に一つの空席もなく規定通りに本の詰まつた本箱を、誰にも妨げられずに靜かに見てゐる——それは、彼にとつて最も幸福な時だつた。そして、彼は自分自身の生活に滿足した。

三

だが、彼には、更にそれ以上の幸福な瞬間があつた。——

彼は、一つの回轉椅子を持つてゐた。それは、この下宿屋の質素な一室の中で、太陽のやうに美しい光輝を放つてゐた。實際それは、どんなに華美な應接室に置かれても、決して恥かしいものでなかつた。濃い朱色の天鵞絨に被はれた椅子は、よく磨かれた金具と念の入つた彫刻とによつて、美しく飾られてゐた。バネは常に生々した彈力を持ち、天鵞絨は常に滑かで、座る場所は廣く大きかつた。彼の長い體

もその上では、丈夫でやさしい母の手に抱かれてゐるやうに、らく〳〵と休息することが出來た。そして、最も彼を喜ばせることは、それに腰掛けた彼が、疊に垂れてゐる自分の足を、少しの力を入れて横に踏張ることによつて、椅子の上部がくる〳〵と廻轉することだつた。その時、腰掛けてゐる彼の體が又くる〳〵と廻轉することは勿論だつた。――この華美な回轉椅子は、彼が初めて小説によつて原稿料を得た時、長い日の熟考の後買はれたのだつた。その時、彼は、故郷にゐる老年の兩親に手紙をやつて事件の顚末を報告した。父は、彼が初めて獨力によつて金錢を得たことを心から祝福した後、「回轉椅子などは必要のないものだ。それはもつと有用に使はるべきものだ」と警告して來た。彼は顏を顰めて、その手紙を友人に見せながら云つた。『何と云ふものの分らない父親だ！ これだから厭になつてしまふ！』そして、其後暫の間、彼は、老父に手紙を書く好意を投げ棄てゝ、それを、父の暴言に對する當然の刑罰だと考へた。

それが買はれた當座、彼は屢々回轉椅子の上で一日を暮した。彼は、それにらく〳〵と腰掛けて、窓の外を眺めた。本箱を見た。讀書さへも全くその上でなされた。その合間々々には、彼は、力を入れた兩足で疊を蹴つて、自分の體と共に周圍の世界までが、ぐる〳〵と回轉するのを見て喜んだ。――ちよびの下女は、恐怖のために兩眼を見開いて女主人に呟いた。『毬井さんは氣が變になつたんぢやないかしら』女主人は、足音を忍ばせて二階に上り、室の中央で一人回轉椅子に腰掛けつゝ、それをぐる〳〵回轉させて微笑する素助を、障子の破れ目から見て頭を傾けた。

回轉椅子に腰掛けつゝ自分の創作を讀む――それは、素助にとつて最も幸福な時だつた。室は秩序をもつて片付けられてゐる。本箱には一つの空席もなく、その中には、世界に於ける最も偉大な作家等の魂が呼吸してゐる。そして、椅子に腰掛けた彼の手には、彼の創作を載せた雜誌が置かれてゐる。それは、彼自身によつて書かれた創作なのだ！ さうだ。それは他の何人によつて書かれたのでもない！ それを書いたのは實に彼自身なのだ！――彼の創作は僅に三つに過ぎなかつた。彼はそのどれもに就て「價

値のない下らない作品だ』と云つてゐた。だが、彼は、それに對する友人や批評家の評價を殆んど忘れた。彼には、それらの作品は、ともかく三つの貴い傑作であるやうに思はれた。その作品のどれかを見ないで一日を送ることは不可能だつた。彼は、その何れをも、全く暗誦してゐた。だが、それを讀むことに飽きなかつた。讀み返す度毎に、そこに無限の意味が湧き出て來るやうに思はれた。『世間の奴等にはまるで何も分らないのだ！』彼は呟いた。彼の顏は輝いた。彼の心臟は昂奮のために音高く鳴つた。そして、本箱の中からは、偉大の作家等が叫んでゐた。『それは傑作だ。君は我々の友達だ。同僚だ。世間の奴等の言葉に拘泥してはいけない。君は自分の天才に自覺して、自分の創作を正當に評價するがいい』回轉椅子は、彼の足の命令に從つて、輕快に、滑かに、ぐるぐると回轉した。そして、彼の體をやさしく抱いて、現實化された夢想の中に導いて行つた。――彼は自分を幸福だと感じた。

そんな場合の友人の訪問は、地獄の硫黃の臭氣だつた。彼は、慌てゝ雜誌を懷の中に押し匿した。そして、額に手を置いて、思索に耽る哲學者のやうな態度に自分を裝つた。だが、幸福の夢想に浸つてゐる彼には、雜誌を匿すだけの時間がないことが屢々あつた。彼は顏を赤くして、無理やりに澁面を作つた。『僕は久し振りに……本當に久し振りに、自分の創作を讀んで見た。どこかに良い點がありやしないかと考へたのだ。だが、駄目だ。全く絕望だ。僕はこんな作品を書いたことをどんなに後悔してゐるだらう』さう云ひながら、彼は手にした雜誌を室の隅に投げ棄てゝ、益々眉の間の皺を深くした。その時もしも友人が『そんなことはないさ。それはそんなに惡い作品ぢやないよ』とか、或は又何かそれに類した慰藉の言葉を發するならば、彼は更に陰欝な聲で云つた。『いや、駄目だ。全く絕望だ』だが、彼の額にあつた深い皺はもう影を失つた。彼は明かに心の中で考へてゐた。『さうだ。そんなに惡い作品ぢやない。それに、あれはもう隨分前に書いたのだからな。此次に書く作品こそは……』そして、彼は手を振りながら、希望をもつて次の作品に就て話すのだつた。……

この華美な回轉椅子は、友人等の注目を引かずにはゐなかつた。誰かは、それに腰掛けた彼がゲーテ

の青年時代そのまゝだと云つた。他の一人は云つた。「さうではない。ゲーテではない。……いや、ゴーゴリ――「死せる魂」を書いたゴーゴリに似てゐやしないかな」彼は、それらの話を聞きながら、上唇を眼らせて微笑した。更に他の一人は、彼が餘りに回轉椅子から離れない故をもつて、それを彼の「戀人」と名附けた。まだ一度も戀をしたことがないばかりか、若い女、又幾分年取つた女とさへも、顏を赤くし眼を伏せずには話の出來ない彼に對して、「戀人」の名を用ひるのは少しく粗野で唐突のやうに思はれた。だが、それは、誰でもに――素助自身にさへも――最も適切で意味深いものとして承認された。そして、その名は、友人等の間に、更に又下宿屋に住む未知の人々の間にまでも擴がつた。「甕井の戀人！」――

四

夕陽の光は、でこぼこと建ち列ぶ都會の家々や屋根や路や木や歩く人やよろめく犬や――あらゆる物を赤く染めた。風はまだなかつた。そして蒸し熱さは前よりも烈しかつた。

素助の原稿は少しも進まなかつた。そこには、さつきの如く、昨日の如く、又十日前の如く「で、彼は苛々して外に出た。……」と云ふ最初の文句が殘つてゐた。彼は書いては消した。消しては紙を破き棄てた。だが、やつぱし進まなかつた。彼は益々苛々して、悲しくつて、憂欝になつた。ペンを置いて机から顏を上げると、自分の頭も體も、まるで空虚のやうな氣がされた。そして、そうしてぼんやりと外を眺めてゐると、自分の存在さへも朦朧として來て、總てのものに興味がなくなつた。

「元氣を出さなければならない。そして、自分の氣持を正直に書くことだ」

彼は、更に全身の注意力を集めて、原稿紙を凝視した。そこには、四五年前の彼の氣持が正直に書けてゐることは事實だつた。その上、書くことはもう少しもなかつた。彼の氣持の全體は、その僅な文字によつて、總て書かれてゐるやうに思はれた。そして、そこに書かれてゐることは、現在の自分にもす

つかり當て嵌るやうな氣がした。

「……憂鬱で、退屈で、悲しかつた。……」

彼は悲しく頭を振つて呟いた。

「あゝ、俺には進歩と云ふものがないのだらうか。……いや、そんなことの有りやう筈がない。俺はその間にどんなに勉强したらう。どんなに澤山の本を讀んだらう、……」

彼は援助を求めるやうに本箱を見た。だが、彼の讀破したそれらの本は、今日は少しの親愛の情も示さずに、冷然として彼を睨むやうに思はれた。その上、彼は、それらの內容を忘れてしまつたばかりでなく、讀破した際の感興も昂奮も讃嘆も失つてしまつてゐた。彼は悲しく眉を顰めて立ち上り、數冊の本を出して讀み始めた。だが、そのどれをも讀み續けることが不可能だつた。彼は本を投げ出して、疊の上に體を横へた。心の中は苛々してゐた。そして、眼に映る室全體が、馬鹿げて退屈に思はれた。——

彼はいつまでもさうして横はつてゐた。……

「……てめえ、又しやがつたな。……よし！今ぶん擲つてやるから……」

窓の下に、甲高い叫聲が起つた。續いて、子供の悲鳴が發せられた。素助の心臟はどしんと鳴つて急に縮んだ。そして、彼は、長い間の自己忘却の狀態から呼び醒された。

「……又か。……」

彼は悲しくさう呟いて、兩手の掌で疊の上に置かれた自分の頭を抑へた。

下宿屋の隣の地所には、澤山の長屋が建てられ、貧しい人々が住んでゐた。一言にして云へば、それは貧民窟だつた。机に向ふ彼が顏を上げる度毎に、その細い露路と兩側の家々とその黑いトタン屋根とが眼に入つた。露路の上には、薄汚い女房か、鼻垂らしの餓鬼か、瘦つぽちの犬か——ともかくそんな種類のものが、いつも必ずうろ／＼してゐた。不思議にそこには小供と犬とが多かつた。子供はどれも鼻汁を垂らし、頭か顏か頸筋か手か、どこかに腫物を着けてゐた。犬は皆肋骨を露はし、妙におづ／＼

して夜になると狼のやうに絶間なく吠えた。そして、女房は、男のやうな――と云ふよりも、男以上の容貌をして、野獸のやうな聲を持つてゐた。それが嘲る場合や小供を叱り飛ばす場合には、深い山奥に住む何か巨大な鳥を思はせた。――そこには常に嘲罵があつた。悲鳴があつた。怒聲があつた。叫喚があつた。大笑があつた。小供を叱ることがあつた。夫婦喧嘩があつた。女房同士、又は主人同士、或は又夫等皆の上に子供、犬をも加へた爭論があつた。その上に、どこからどうして起るか分らない物音があつた。――それは、貧困と無知との火炎によつて喧騷を醸す坩堝だつた。――素助は夫等の光景を見るのを怖れて、夫等の上に擴がる青空にのみ視線を注ぐ習慣を持つてゐた。だが、そこに起る騷音は、彼の耳に達しないではゐなかつた。――

一度叫聲を發した女房の聲はなか／＼やまなかつた。それは、戰鬪にまで諸軍を鼓舞し激勵する將軍を思はせた。だが、それは鼓舞するのではなかつた。激勵するのではなかつた。彼女は、餓鬼を叱り、餓鬼を嘲り、餓鬼を擲るのだつた。「この餓鬼は……」と云ふ叫聲が屢々繰り返された。そして、子供の悲鳴が、彼女の憤怒と叱責と打擲との威力を充分に證明してゐた。

女房は吠え續けた。子供は泣き續けた。女房の吠える聲と子供の泣聲とそれに加はつて起る粗暴な音響とは、互に入り亂れて、素助の耳を刳り全身の中に浸み込んだ。彼は彼等を見知らなかつた。彼等がどの屋根の下に住み、どこで何のために吠えたり泣いたりしてゐるのかも知らなかつた。だが、彼は、肥えた醜い女房が、子供を打ちのめす光景を想像した。想像に出て來る子供は、でこぼこした不恰好な頭に腫物の膿を出して、黄色い顏を歪めて泣いた。

素助は、心の中で熟知したその子供の顏を頭に思ひ浮べながら、おつと苦しさを抑へて夫等の音響に耳を傾けてゐた。子供の顏は、「皆はどうして自分ばかりを窘めるのでせう」と、涙に赤らんだ眼をあげて、彼に訴へるやうに思はれた。

「さうだ。擲らなくつたつていゝ。擲るなんて……」

彼は、自分の皮膚の上に、子供に與へられてゐる打擲を感じた。彼の胸は苦痛のために重くなつた。そして、その兩眼から湧き出た涙が、壁の上にぽた〳〵と落ちた。……

いつの間にか、吹鳴り聲も泣聲も消え失せて、そこにはいつものあの雜然たる喧騷があつた。その中で、鷄の聲が、自分を際立つて高く響いた。そして、それは夕方の近いことを知らせてゐた。

「今日も終つてしまうのか」

素助は、机の前に座りながら、眼を窓の外に向けて云つた。貧民窟を越した向ふには、數本の樹木が立つてゐた。空にまで高く梢を擡げたその頂に、太陽は今、最後の斜光を投げてゐた。そして、空は薄青く透き通つてゐた。

室の中はもう暗かつた。そして、室の隅には、丸めて投げ棄てられた澤山の原稿紙が、ほの白く見られた。

「駄目だ。絶望だ。……昨日も今日と同じだつた。一昨日も、その前日も、更にその前々日も……。每日々々自分は同じことをして日を送つてゐる。朝から晩まで、下宿屋のこの蒸し暑い空氣のみを吸つて生きてゐる。そして、小説はいつまでたつても少しも進まないのだ」

彼には、自分のこの小さい室とその中にある總てのもの——本箱も本も机も「戀人」と呼ばれる回轉椅子も——が、みぢめに彼の胸を押しつけるやうに思はれた。彼は立ち上つたが、どこに行く氣もしなかつた。で、彼の「戀人」なる回轉椅子に腰掛けて、漠然たる視線を窓外に投げた。

五

それは、どこから起るか、又誰によつて發せられるか、更に又何の故に鳴り渡るか分らない夕暮の騷音である。それは人の聲ではない。金石の響ではない。犬の遠吠ではない。鷄のときではない。木片の音ではない。木の葉の囁きではない。吹き起る風でもない。それは夫等の物ではない。いや、それは、

夫等の總ての物が、結合し、錯雜し、反撥し、合唱し、衝突し、交錯して、夕闇の底から天の高さにまで渦卷き起る都會の騷音である。——それは、家に歸る職工の手から投げ棄てられた槌の響である。それは、工場の門を潜り出る女工等の下駄の音である。それは、閉ぢられた商館の開き戸の聲である。それは、煤煙を吐き切つて沈默に耽らんとする機械場の汽笛である。それは、砂塵を卷いて疾驅する自働車をよける犬の悲鳴である。それは、明日の金儲に頭を惱ましつゝ闊歩する少壯紳士の靴の音である。それは、家庭と休息と安眠とにまで人々を送り返す電車の軋りである。それは、開館を報ずる活動寫眞の音樂である。それは、己を養ひ育てた者を苦しめつゝ母胎を飛び出す嬰兒の初聲である。それは、美貌と嬌態とに魅力を增さんと努力する三味線の音である。それは、餓えた胃袋を滿さんとする食器の響である。それは、勞苦してなほ食なき者の歎息である。それは、死に行く者の耳に殘つて、墓の中から他界に運ばれる音響である。それは、歡樂と陶醉とに急ぐ人々の豫感に慄へる心臟の鼓動である。それは、太陽の苦熱から身を脫し得た夜を喜ぶ家々の甍の微笑である。——それは、夜の都會の魂が呻吟する聲である。それは實に、都會のみが持つてゐる夕暮の騷音である。それは歡喜の聲である。落膽の聲である。德行の聲である。罪惡の聲である。憤怒の聲である。微笑の呟である。その時、風は凪ぎて翼を閉ぢ、暗い空氣はその動搖を止め、樹木は梢を休めて黑い葉を垂れてゐる。そして、既に沈んだ太陽の餘映を留めて淡く澄み渡つた空は、深い沈默を守つて、その騷音に耳を傾ける。それは實に、獨り自分の心を凝視する人々の胸に、あらゆる感情の波を靜かに湧き起す瞬間である。——

素助にとつても亦、その夕暮は、最も望ましい、價値ある瞬間であるに相違なかつた。彼は、「戀人」に腰掛けて、窓外の薄暮に浮き出し始めた燈火を眺めつゝ、都會のどん底から渦卷き起るその騷音を聞くのを喜んでゐた。それは、彼の魂の奧底を搖がせた。そして、それは又、常に彼にかう云つてゐるやうに思はれた。

「藝術に！藝術に！偉大な藝術に！……」

彼の胸は興奮で一杯になつた。彼の兩眼は涙に滿ち溢れた。そして、彼は、自分の一生を犧牲に捧げて完成さるべき大作のことを考へた。『貴い藝術の殉難者！』その考は、彼の眼を更に熱くした。

それは、『大都會の騷音』と題されなければならなかつた。それは、數多い「部」と更に數多い「篇」と更に幾多の「章」に區劃されて完成さるべきものだつた。そこには、あらゆる職業、あらゆる種類に屬する人物が現はれる。大臣もあつた。貴族もあつた。代議士もあつた。商人もあつた。哀れて心の美しい賣春婦もあつた。飢餓に迫られた勞働者の家族もあつた。勤勉に苦學する學生もあつた。主人に忠實な犬もあつた。過度の勞役のために脇腹を波打たせつゝ斃死する馬もあつた。……そして、何よりも必要なのは、そこに現はれる彼自身のやうに若い高潔な文學者だつた。彼は明かに、この大作のうちで主人公の役を勤めなければならなかつた。——彼は、若くて、美貌で、天才を持つてゐた。貧しい人々に自分の輕い財布を與へた。迷へる人々には、正義と人間の尊嚴とを說いた。友人からさへも認められず、世間からは超絕して、貧しい生活を續けつゝ創作してゐた。彼は、自分の短命を豫知して、富んだ美しい少女の熱い戀愛を拒絕した。その創作の最後の頁が書き卒へられた時、彼はその紙の上に血を吐いた。集つて來た人々の謝罪の言葉に對して、彼は靜かに云つた。

「いや、あなた方が惡いのではない。惡いのは、却つて私なのだ。私を許してくれ！……」

彼は、人々が泣くのを制して云つた。

「あなた方はなぜ泣くのか、地上には今、私よりも正しい人々が、私よりも烈しい苦痛に襲はれてゐるではないか」

それが彼の最後の言葉だつた。……

素助は、その『大都會の騷音』を頭の中で組立てるのに飽きなかつた。彼は實際、涙で兩眼を濕し、胸に興奮の炎を燃やして考へた。『僕はそれを書き上げるまでは、どんなことしたつて死ねないのだ』彼は屢々友人達に云つた。だが、それはまだ少しも書かれてゐなかつた。『さうだ。明日から書き始めよう』

さう思ひつゝ毎日が經つて行つた。――夢想する彼の足の僅な力によつて、「戀人」は輕快に圓滑にぐる〳〵と回轉した。彼は幸福だつた。自分を大藝術家だと確信した。そして、彼は屢々、さうした考に浸りながら、夜晩くまで「戀人」に腰掛けてゐた。

併し、最近一つの短篇を書き始めた彼は、かゝる幸福な時間を總て失つてしまつた。苦熱の朝と晝とが、憂欝と悲しみと退屈と焦躁とに滿ちてゐる如く、都會の奧底から騷音の渦巻き起る夕暮も亦、決して望まるべき幸福な時ではなかつた。その騷音は、彼自身の溜息のやうに、陰欝と悲哀と落膽と絶望とのみを鳴り響かすものと思はれた。

六

太陽は既に沈んでゐた。窓外の空は暗かつた。そして、室の中は更に暗かつた。そこには、ちよびの下女に運ばれた食膳が、さつきから取り殘されてゐた。だが、素助は、それに手さへも觸れる氣がなかつた。彼は、憂欝と悲哀と焦躁と退屈との憐むべき囚人(とりこ)だつた。そして、その事が又耐え難く苦痛だつた。

彼は立ち上つて電燈をつけた。そして、全身に漲るごた〳〵した感情の重荷を投げ棄てゝ、自分の元氣を取り戾すために、彼の創作を載せた雜誌を出して讀み始めた。だが、それは、馬鹿氣て、無意味で退屈な文字の連續に過ぎなかつた。そこには人間の血がなかつた。人間の魂がなかつた。人間の生活がなかつた。――彼の僅の元氣を支へてゐた最後の希望が消え失せた。彼は溜息と共に呟いた。

「駄目だ。絶望だ。そこには何等の人間の生活がない。――あゝ、俺は生活を知らないのだ。俺は生活したことがないのだ。……」

彼は自分の生活を考へ始めた。――

素助の父は官吏だつた。彼はあらゆる不秩序と中途半端と優柔不斷と無爲との敵だつた。彼が勵める

役所の家は、常に整頓され、規則正しい秩序があつた。官吏として勤勉な彼は、一家の主人として又勤勉な彼だつた。彼は家にあつても無爲に休息を樂しむことを好まなかつた。大工、植木屋、經具師……に任さるべき仕事は、總て彼の手によつてなされた。「自分の出來ることは何でも自分でするがいゝ」と彼は屢々云つた。ある用務で彼を訪問した下級の官吏は、襷をかけた彼が玄關の障子を張つてゐるのを目撃して驚嘆した。その時、彼は既に局長だつた。家には數人の下女と書生とがゐた。併し、彼はいかに些細な仕事でも、彼等の手になされるのを傍觀することが出來なかつた。「いや、さうではない。……かう……かうやるのだ」仕事は、書生、下女の手から奪はれて、彼自身によつてなされた。その習慣は、彼をしてあらゆるものに巧妙ならしめた。野菜の栽培、果樹の移植、養鷄、養蜂、障子の張り換へ、大工仕事、更に調理の方法——總てに卓越してゐた。彼は役所の外のどこにもゆかなかつた。休日には、庭に出て、小供等を菜園の仕事に手傳はせた。併し小供等のやり方も亦彼の氣に入らなかつた。彼は苛々して呶鳴つた。小供等の手から鍬や鋤や種子や苗が奪はれた。そして、父の手によつて、地が耕され種子が蒔かれ、或は苗が植え終られた時、菜園には一人の小供も見られなかつた。かくして、小供等は自分の勞力が少しも加へられずに、花が咲いたり、果實が熟したり、野菜が育つたりするのを見た。……

……併し、父は、小供等が菜園から逃げ去つたに對して、少しの叱責をも與へなかつた。

「徒足で土を踏むのは良いものだ」

さう云つて彼は夕食の膳に着いた。

「土弄りは食慾を増すものだ。どんな物も甘く食べられる」

父の膳に置かれた特別の食物は、いつも小供等に分配された。彼は常に粗食で滿足してゐた。

「あの方は小供達だけにはむやみと甘いのだから……」親戚の者等は、常にさう云つた。そして、その言葉は正當だつたに相違なかつた。彼は自分の愛を傳へるために、特別な言葉や行爲によつて小供等を愛撫しなかつたが、それは、彼の存在その物のうちに觀取された。

彼は、菜園の土弄りや大工仕事や其他の仕事の手傳に不手際や無能が示された時の外、嘗て一度も小供等に怒聲や叱責を加へたことがなかつた。小供等が成長して、變な身形をしたり、夜遊をしたり、幾分放蕩をした時さへも、彼は小供等を叱らなかつた。

「困つたものだ。これが社會の風潮なのだ」

彼は小供等を見て、眉を顰めながら悲しげに云つた。そして、それらの「不德」は小供等の罪ではなくて、社會の風潮に原因するものとして社會を鞭つた。

彼は總ての「閉潰し」の社交を嫌つた。上長に對する當然以上の追從や阿諛をも嫌つた。「正しく自分の全力を儘すること」――それが、官界に於ける彼の唯一の標語だつた。彼は又、親戚、知人との交際をも好まなかつた。「どうも人交際の惡い男だ」人々からさう云はれても、彼は少しも恐れなかつた。「人はどんな場合にもすることが澤山ある」彼は云つた。實際彼は、常に默つて何かをしてゐた。

素助は、母を涙なくして考へることは出來なかつた。小供等には「甘い慈父」だつた父は、役所に於ては嚴格な局長であり、妻に對しては口喧しい暴君だつた。素助は未だ嘗て、母に向けられた父の笑顏を見たことはなかつた。父の口が彼女に開かれる時、そこからは常に叱責と詰問と怒聲とが飛び出した。あらゆる場合、あらゆる事件――寒過ぎる天氣、ぬかるんだ泥路、役所での過失、小供等の惡戲、書生下女等の怠惰、食慾の減退、障子の破れ目……に對する不平と不快と不滿とは、烈しい怒聲となつて、彼女にのみ浴せかけられた。父の前にあつては、彼女は一個の奴隷だつた。奴隷以上の存在だつた。彼女は、その不當な父の怒聲に對して、未だ一度も口返答をしなかつた。不平の視線さへも上げたことはなかつた。そこには、常に絕對の服從と歸依とがあつた。父が少しも不機嫌でない時さへも、彼女は、彼の前で身を慄はし、言葉を吃らせた。……彼女の潔癖は、父と共通な點を持つてゐた。彼女も亦、總ての不秩序と不整頓との敵だつた。多くの小供がゐるに拘らず、家の中は常によく片付けられてゐた。總ての家事は、使用人の手に任されずに、彼女自身の手によつてなされた。掃除も洗濯も調理も、殆ん

ど彼女のみによつてなされた。役所の小使が、門内で草取りをしてゐた彼女を下女と見誤つて、「おい、奥様はお家かい。これをお渡しゝてくれないか」と云ひつゝ、局長の手紙を彼女に突きつけたのは有名な話だつた。併し、彼女は父と反對に、小供等をよく叱り、小供等に怒りの叫聲を加へ、小供等を打つことさへあつた。素助は、彼を打つた母の手に指輪があつたゝめに、彼の頭に小さい瘤が出來た幼時の記憶を、青年になつても度々思ひ起した。だが、小供等は、彼女の云ふことを聞かなかつた。「お父様が甘いから、うちの子供達は……」彼女は屢々云つた。併し、小供等に對する彼女の愛情は、父のそれに劣らなかつた。却つてそれ以上だつた。彼女は全身をもつて小供等を愛してゐた。彼女は、小供等がやや成長した時も、彼等に着物を着せ、顔を洗ひ、食事に注意した。學校に持つて行かれる本や文房具も總て彼女によつて鞄に詰められ、布呂敷に包まれた。

「遅れますよ。早くしないと……。もう少ししか時間がありませんよ。……忘れ物はないの。手拭は……？紙は……？お辨當は……？」

小供等が學校に行く前、その同じ言葉が、毎朝彼女によつて繰り返された。

彼等が學校から歸つて、「おやつは……？」と叫ぶのに應じて、小皿に入れられた菓子を渡すのは彼女だつた。夕暮まで近所に遊んでゐる彼等を迎へに來るのは彼女だつた。悪戯に傷いた手に繃帶を卷き、土弄りに汚れた手足を洗ひ、寒さに侵されて出來たあかぎれ、ひびに藥を塗り、彼等の寢床を敷き、彼等を寢衣に包んで床の中に送るのは彼女だつた。――彼女は數人の子女の母だつたがために、常に小さい乳飲子を自分の腕に抱いてゐたけれども、彼女は、「母」たる天才をもつて、それから總てのことを自分一人の手ですることが出來た。

彼女は、小供等の持物が、今どこに橫はつてゐるかを實によく知つてゐた。彼等は唯かう叫べばよかつた。「かあさま、帽子は……？」「かあさま、鉛筆は……？」「かあさま、お伽噺の本は……？」「かあさま、足袋は……？」「かあさま、トランプは……？」その聲に應じて、夫等の物は、常に彼女によつてすぐと

小供等の手に渡された。小供等が成長した時、彼女は彼等に云つた。「大きくなつてゐながら、まあ何だつて「かあさま！かあさま！」と呼んでばかりゐるの。少しはかあさまのお手傳もなさい。せめて、自分達のことは自分達でなさいよ」併し、小供等は爲すべき何事をも持たなかつた。家の中はいつも整頓してゐた。そして、彼等が取り散らしたものはすぐと彼女によつて片付けられ、彼等が欲するものは既に彼女によつて整へられてゐた。

彼女は學問がなかつた。正式の教育を受けてゐなかつた。もう長く都會に生活してゐながら、まだ故郷の訛り言葉を用ひてゐた。彼女は「ひゞの藥」を「へびのくすり」と書いた。彼女によつて書かれた物は、誰にも分らなかつた。外國名のついた品は、いつも勝手に發音された。「サイダー」を「サンダー」と云つた。「タカヂヤスターゼ」は「タカヂヤスタット」と云はれた。「アスパラガス」は「アスペロン」と發音された。……彼女は又、「ロンドン」「パリ」「ベルリン」がどこにあるか、「フランス革命」「米國の獨立」「ポーランドの分割」が何を意味するかを知らなかつた。「シーザー」「ナポレオン」「キリスト」「シェーキスピヤー」の名を知らなかつた。彼等の存在さへも知らなかつた。夫等の名が云はれても、彼女は總てすぐと忘れてしまつた。彼女には、夫等の名も存在も少しも重要ではなかつた。そして、交際嫌ひの父の妻たる彼女は、幸にしてそれらの無知と無教育とを、公衆の面前に曝す機會を持たなかつた。——彼女も亦殆んど外出をしなかつた。『芝居』『寄席』『交際社會』『流行』——それらの言葉は、彼女に、何等の感興を呼び起さなかつた。それは、嘗て實際に存在したこともない、痴人の夢だと思はれた。彼女の世界は、その門内にのみ限られてゐた。彼女の心に、感情の波を搖り起し得るものは、「夫」と「子供等」と「下女」と「書生」とだつた。子供等に飼はれてゐた犬は、彼女に名さへ覺えられることがなかつた。彼女は、犬の名や存在に心を用ひる餘裕を持たなかつた。小供等のことだけで、彼女には、心を用ひ、爲すべきことが充分あつた。そして、事實に於て彼女は、いかなる下女や書生よりも、常に數倍もよく働いた。——併し、彼女が、今彼女に暴君として君臨する父よりも、いくらか富裕で高位の士族の家に生

れたのは實際だつた。

彼女はいつも苛々して働いてゐた。彼女の笑聲は、晴々と家を揺がす輕快なものではなかつた。それは、悲しく、淋しく、暗い響を持つてゐた。併し、そんな笑聲さへも、小供等はめつたに聞かなかつた。彼等は膝の上に載せられた新聞紙の上に、首垂て泪ぐむ母を見ることが屢々だつた。そんな場合、彼等は常に、新聞紙の上に、「少女誘拐さる」「貧困の夫一家を鏖殺す」「子供の溺死」「虐待されて發狂した妻」……等の記事が載つてゐるのを知つた。そして、彼等は、その泪もろい母を笑つた。……

父を局長にまで昇級せしめた「正しく自分の全力を盡すこと」なる標語は、今は官界に於ける彼の進歩の障碍となつた。彼はその位置を放擲するより外なかつた。併し、小供等は、夫等のことが何を意味するか知らなかつた。又知らうとも考へなかつた。父は堅く口を噤んで、その異相を誰にも語らなかつた。不服も不滿をも云はなかつた。唯、母に加へられる怒聲が、その烈しさと度數とを增した。數月の後、父が、都會生活を棄てゝ、故郷に隱棲すると宣言した時、母も子供等もすつかり驚かされた。

その計畫は斷乎として實行された。——兩親は、素助の弟妹を連れて、都會を去つた。兄姉等は、各々その適當な地位に置かれた。そして、中學校を卒業するに近かつた素助は、寄宿舍に入れられた。

かくて、兩親を離れての彼の生活が始まつた。——

七

素助は、小さい時から、家の外では臆病だつた。小學校では、皆の虐待と愚弄との目的物だつた。血色が惡い故をもつて、「青瓢簞」或は「青茄子」と呼ばれた。彼は弱くあつたと同時に、他人に手を振り上げる粗野と血氣と無分別とを持たなかつた。人々が口論したり、格鬪したりするのを見るのは、彼の最も苦痛とする處だつた。中學校に入つてからは、比較的に良い、成績が、人々の虐待と愚弄とから彼を救つた。併し、學校では、彼は少しも幸福ではなかつた。數人の群の前に出ると、彼の心臓は自然に

妙に動き出して、咽喉の奥にいがらつぽい渇を感じた。教室で輪講に指命されることは、最も恐ろしい出來事の一つだつた。「甕井！讀んで！」その聲だけで、彼の全身の血を、頭にまで渦巻き上げるに充分だつた。彼の視線は、本の頁の上に慄へた。唇がひきつれて、兩頰の筋肉が板のやうに硬ばつた。そして、口の間から、押し潰されたやうな、錆びた齒車の軋る音のやうな、妙に高低の斷續した黃色つぽい聲が突走つた。教員は、微笑を漏らした顏を、本をもつて被つた。級友等は、無遠慮な誇張した笑聲を校庭にまで響かせた。

彼は、「ぶる〳〵」なる綽名を加へられた。——

彼は、あらゆる運動の競技に、不手際と不器用とを現はした。彼は友人を持たなかつた。級友からは「高慢な奴だ」と云はれた。「生意氣だ」と云はれた。「すましやだ」と云はれた。「意氣地なしだ」と云はれた。教員達も、彼の存在を少しも氣にかけなかつた。——要するに彼は、自分の存在を特別に明かにする何物をも現はさなかつた。

家でも彼は又、靜かな無口の彼だつた。家の誰とも仲が良かつたが、特別に誰とも親しくなかつた。

「粟助はどうも特別に陰氣でいかん。小供らしい快活さがない。……お前にそつくりだ」

彼は、自分に就て母に語られる父の言葉を聞いた時、少し悲かつた。そして、本當に母に似てゐて陰氣なのかを考へた。……彼は母を愛し好んでゐた。だが、それは、父に餘り烈しく叱鳴られると云ふ理由に原因するものに過ぎなかつた。彼は、母が無學で無教育で駄目だと考へてゐた。

彼自身は陰氣でも、少しも困らなかつた。彼は一人でゐても、孤獨の寂寥などゝ云ふものを、一度でも感じたことはなかつた。一人でゐることは、面倒でなくつて、五月蠅くなくて、却つて良かつた。……

一家が歸郷して、寄宿舍に入れられてからは、彼の讀書の力はその勢を増して來た。

彼には、「藝術」「文藝」「人生」「思想」などの文字が、金光を發するやうに思はれた。「人生は短くして、藝術は長し」「詩人は人類の良心なり」「トルストイは云つた。……」「ツルゲニェフはかう考へた。

……」……などの文句は、彼の胸に興奮の炎を燃やした。彼は、それらの文字を載せた本を讀まないでは、一日も落ち着けなかつた。一晩も眠れなかつた。歩いてゐる時も、彼の懐か手には、夫等の本の何かが必ず發見された。

『藝術に捧げられた一生!』それは、人間に與へられた最も幸福な一生だと思はれた。彼は、偉大な人々に書かれた本を手にして、校庭に喜戯する級友等に幾分の輕侮を交へた斜視を投げながら、自分の胸に自尊の湧き上るのを感じた。

中學校を卒へた彼は、高等の學校を選ばなければならなかつた。だが、彼は政治家を輕蔑した。實業家を俗凡だと思つた。工業家を無神經の鈍物だと考へた。醫者を野卑だと信じた。商人は物質その物だつた。彼は、自分の一生に就て少しも迷つてゐなかつた。

『自分の一生は、貴い藝術に捧げらるべきものである』

彼はさう堅く決心した。そして、その決心は、彼を絶へざる興奮に導いた。

父は藝術を好まなかつた。それは、金持の道樂息子の玩弄物か、或は何か閑人の閑事業だと思はれた。母には、藝術なるものが何を意味するかてんで分らなかつた。彼女は、そんなものゝ存在さへも知らなかつた。知らうとも思はなかつた。彼女は屢々素助に云つた。『又小說本を讀んでゐるのかい。そんな馬鹿らしい物を讀んで、何が面白いのかい。……』

彼は、兩親にその決心を言明するのに頭を苦しめた。父の失望を思つた。母の悲しみを考へた。……

彼の兄達は、既に一家を構へ、數人の小供を持つてゐるのもあつた。だが、彼等は、兩親に喜を與へ兩親を安堵せしめるよりも、却つて兩親を苦しめ、兩親の重荷を增すのみだつた。彼等は、殆んどの職業にも長く留らず、種々の失敗によつてその無能力を現はした。經濟上に於ても、父の援助なしには全然存在出來なかつた。そして、隱棲してゐる父は決して富裕ではなかつた。彼は郷里の地で農場を開き、百姓を使つて自ら働いてゐた。

素助は、夫等の事情をよく知つてゐた。だが、彼の心の靈は常に叫んだ。

「藝術に！藝術に！藝術に！……」

彼は決心した。そして、故郷の兩親に宛てゝ手紙を書いた。そのうちには、こんな文句が入つてゐた。

「……そのため、私が一生の間、物質上で色々困ることは知れきつてゐます。だが、それはすつかり覺悟してゐます。……私は、人間の生活はこれではいけないと思ひます。社會の狀態はこれでは不正だと考へます。……私は、人間の生活や社會の狀態を、本來の正しい道に返したいのです。そして、何よりも先に私自身の一生を、正しい基礎の上に置きたいと思ひます。私は物質の缺乏を恐れません。私は、基督たり、釋迦たり、孔子たらんと希望するのです。……」

彼は興奮して、自ら知らずしてあらゆる誇張を用ひた。彼は、基督や釋迦や孔子が、どんな人間であるか少しも知らなかつた。又そんなことを一度でも考へたことはなかつた。

彼は、父が反對する場合を想像した。

「……父が反對してもかまはない。俺は自分の決心を曲げることは出來ない。俺は、父と離れても藝術のために盡すのだ！」

彼は、自分が苦學しながら、自分の糧を自分で得ながら、創作する場景を考へた。それは、彼を悲壯な涙にまで導くほど、心を動かす場景だつた。

彼は、今でもその時のことを感激しながら友人等にかう話すのを常とした。

『兩親は激昂したのだ。悲しんだのだ。殆んど絶望したのだ。そして、以後の學資を送らないばかりでなく、一切の關係を絶つと云つて來たのだ。だが、僕は少しも驚かなかつた。僕の決心は少しも動かなかつた。だつて、藝術のためには……」

だが、事實はそれと全然反對してゐた。——父は直に、彼に手紙を送つて、いつもの無干渉の態度を執り、素助の決心を總て許容し、激勵の言葉さへも加へて、無言のうちにその愛情を示した。母も亦手

紙をくれた。それは、彼女の手紙の總ての如く、殆んど讀むことが出來ないものだつた。だが、そこには、小供の一人を、死によつて奪ひ去られた程の深い悲しみが現はれてゐた。「……しかし、お父樣もお許しのことに候へば、しつかりびんきようして（それは勉強の誤り言葉だつた。）えらい者になるやう、母も……」そんな文句もあつた。素助は、それを讀んで少し悲しくなつた。だが、彼はすぐ元氣になつた。

「藝術に！藝術に！藝術に！……」

彼は力强く叫んだ。そして、ある學校の文學科に入つた。

八

「因習を打破せよ。……個人の自我を尊重せよ。……あらゆる感情を解放せよ。……」

藝術は、人々にさう命ずるやうに思はれた。そして、素助は、その命令に從はなければならなかつた。

彼は下宿屋に住んでゐた。學校には出席しなかつた。「……學校は全くつまらない。生命のある學問をしようと云ふ奴がゐないのだからね。敎師も生徒もさ。……」。彼は、友人等とその同じ言葉を幾度も繰り反した。そして、毎日、下宿屋住ひの友人等と往復し、或は町をほつき步き、酒を飮むことを學んだ。

彼等は屢〻「ブルヂオアが……。ブルヂオアが……」と云つた。そして、それは、藝術を理解しない者と云ふ意味だつた。

「……あゝ、何て意味のない人生だらう。人生は、畢竟するに退屈で淚の多い墳墓なのだ。……」

醉ふと、彼等は手を振りながら、街路の中央で、そんな言葉を聲高く叫んだ。快活だつたり、晴々してゐたりするのは、恥辱であるばかりでなく、藝術家としての天分の缺如を意味するものゝやうに思はれた。誰もが、陰欝な顔を裝つた。

貞操を守る本能も亦、因習として打破されなければならなかつた。戀愛は最も尊重された。女を知ら

ないことは、最も烈しい輕蔑に價してゐた。怪しげな家々は、彼等が好んで行く處だつた。それは、lowest Paradise と呼ばれてゐた。そして、それらの場所に踏み入るのを躊躇する者は、許すべからざる感傷癖者(センチメンタリスト)と信じられた。

「あいつは感傷癖者(センチメンタリスト)だ！」

彼等にとつて、そして、素助にとつても亦、その言葉程恐ろしい物はなかつた。併し、その言葉の中に、枯木のやうな道德によつて、人々を支配せんとする教育家や社會などに對する反抗の叫びがあつたのは事實だつた。

「清淨な家庭」の外の何物をも知らない素助は、女に對する知識をまるで持たなかつた。その無識は、友人等によつて、殆んど犯罪者以上に輕蔑と嘲笑とに價するやうに思はれた。彼はそれを恐れた。その無識を陰蔽するに全力を盡した。そして、彼等に從つて、lowest Paradise にあつ／＼と幾日を費す自分を憐んだ。――併し、童貞を失つてからも、lowest Paradise の種々相を知つてからも、女に對する彼の知識は少しも增さなかつた。彼は「感傷癖(センチメンタル)な清教徒(ピューリタン)」と呼ばれた。

素助にとつて、「女」は、呼吸を塞(つま)らせる何か沼氣のやうな物を持つ怪物と思はれた。「女」とゐることとは、喜でないばかりでなく、却つて、退屈な、顏のやり場もない、蒸し熱い時間だつた。彼は獨りになると、大空に向つて、自由に深い呼吸をした。――

「……凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也。……」

それは基督の言葉だつた。そして又、トルストイ、ドストイェーフスキー、其他の偉大な藝術家等の高唱する言葉だつた。夫等の言葉を知つた時、彼は自分の過去を恥ぢた。自分を最大の罪惡者として鞭つた。

「あゝ、僕は、自分の肉體を汚すことによつて、自分の魂までも虐げてしまつたのだ。……あゝ、僕は恥かしい。僕は後悔する。……」

友人等は笑つた。だが、彼は恐れなかつた。トルストイが説いたと云ふだけで、その言葉は、動かすべかざる眞理と思はれた。彼は友人等を離れて、下宿屋の一室に引込んで讀書するに全勢力を傾倒した。彼はそれを、『魂を養ふのだ』『自己を淨化するのだ』と稱した。

彼の卒業論文は、『トルストイと藝術の本道』と題されてゐた。教師には、その論旨がどこにあるか少しも分らなかつた。そこには唯、泡を吹き立てるやうな焦躁と興奮とが見られた。そして、そこに何が考へられてゐるか、又何が書かれてゐるか——それは、彼自身も暫の後すつかり忘れてしまつた。

卒業しても、彼は、下宿屋の一室を世界としてゐた。彼は讀書しては興奮を繰り返した。そして、その間には、『大都會の騷音』を考へて熱い涙を流した。……

彼の父が郷里に開いた農場は、父の知識と活動とによつて、やゝうまく行つてゐた。幾分の利益さへもあがつた。だが、子供等は、そして、今は孫達をも加へて、やつぱし父の援助なしでは生活出來なかつた。父にはまるで餘裕がなかつた。——素助はそれを知つて、父を氣の毒だと考へた。少しの收入もなしに父の仕送りで生きてゐる自分を恥しく思つた。だが、彼は父の額に流れる汗を傍觀するのは、藝術家たる自分の特權だと信じて安堵した。——併し、彼は、最近郷里に兩親を訪問した兄からの手紙を受取つて、すつかり感動してしまつた。それはこんな文句だつた。

『……とうさまはよく働いてゐる。かあさまもよく働いてゐる。《彼等は今でも、兩親をさう呼んでゐた。》二人ともどんな百姓よりもよく働いてゐる。農作物はかなりの結果を示してゐるらしい。……とうさまもかあさまもすつかり歳をとつた。すつかり變つてしまつた。とうさまの髮は、過半が白毛になつた。かあさまの腰は曲つて來た。とうさまは、かあさまを少しも怒鳴らなくなつた。少しも叱らなくなつた。いつも二人で、野に出たり、豚に餌をやつたり、鷄舍を見廻つたり、山に行つたりしてゐる。かあさまもとうさまの前で昔のやうにおぢけたり、吃つたりしてゐない。……私は大變驚いた。そして、下女や下男達にそのことを尋ねて見た。彼等は、私の見る狀態が、二人の平常の生活だと斷言した。……

私はある日獨りで野に出た。その日は雨が降つてゐた。私は川の岸で、雨具を着たとうさまとかあさまとの姿を見たので、そこに行つて二人の後に立つた。二人とも私の近附いたのを知らなかつたらしい。そして、私の驚いたことにはとうさまとかあさまとが、川岸に並んで釣をしてゐるのだ。私は默つて二人の會話に耳を傾けた。

「釣れるかい」

「今、浮標が沈んだところですよ。……あなたの方は……？」

「私の方はさつぱり駄目だ。……さつきは隨分よく釣れたが」

「あゝ、釣れましたよ。釣れましたよ。……こんなに大きいのが」

「鮒ぢやないか。……私がさつき釣つた方が大きいよ」

「まあ、見て下さい。こんなに大きいのですよ。……いゝえ、あなたのに比べれば、これの方がどんなに大きいか知れませんよ」

「馬鹿な！……私がさつき釣つた奴は、珍らしい位に大きかつたぢやないか」

とうさまとかあさまとは笑ひながら、暫く云ひ爭つてゐた。どうさまが魚籃を開いて一番大きい奴を差し出した時、かあさまは高い叫聲をあげた。

「それごらんなさい。私の方がどれ程大きいか分りませんよ」

かあさまは笑つた。とうさまも笑つた。そして、雨は平和に二人の上に降つてゐた。

私は、二人に聲をかけずに、足音を忍ばせて靜に家に歸つた。……」——

もしもそこに、「とうさまは、昔のやうにいつもかあさまに呶鳴つたり、かあさまを叱つたりしてゐる」と書かれてゐたならば、彼は眉を顰めて、その手紙を破り棄て、直ちに總てを忘れ去つたに相違なかつた。だが、それは違つてゐた。それは想像さへも出來ないことだつた。——父は呶鳴らない。母は叱らない。そして、二人は、靜かに降る雨の川岸で、並び合つて笑聲をあげつゝ一緒に釣をしてゐる！

素助の兩眼から、靜かな涙がぽた〳〵と垂れ落ちた。彼はその夜眠られなかつた。父と母とが並んで糸を垂れてゐる光景が、心の底に烙き着けられて消えなかつた。その幻想が、彼の涙を更に新にした。そして、彼の胸は、喜と悲しみとその何れとも分らない感情とで一杯になつた。彼は時々考へて、泣いて、手紙を讀んで、考へて、又泣いた。……

その翌日、友達の一人が彼を訪問した時、彼はその手紙を友達の手に渡した。友達は、彼の兩身が雨の下で釣をしてゐる光景を讀んで、抑へきれない叫聲をあげて笑つた。だが、素助は、生眞面目すぎる程の聲で云つた。

「あゝ、僕にはまるで分らなかつたのだ。兩親は僕達を愛してゐた。僕達のために働いてくれた。いや今も僕達を愛してゐる。今も僕達のために働いてくれる。あの老年の兩親が……。だのに、僕達はまるで兩親のことなんか考へなかつた。ああ、僕は何と云ふ不孝者だらう。何と云ふ忘恩者だらう。……兩親はすつかり變つてしまつた。すつかり歳をとつてしまつた。あの口喧（くちやかま）しい頑固な父が……母と……仲良く笑ひ合つてゐる！釣糸に引掛つた鮒の大きさを競爭してゐる！……」

暫くの後、素助は又云つた。

「僕は怠惰者だ。僕の存在は、兩親の重荷に過ぎなかつた。僕は兩親を苦しめ通して來た。ああ、僕は自分の存在をどんなに恥ぢてゐるだらう。……」

更に暫くの後、彼は又始めた。

「さうだ。僕はすつかり決心した。斷乎として決心した。僕は小説を書くのだ。全力を儘して小説を書くのだ。それは無論、兩親に獻本（デディケイト）さるべきものだ。そして、僕はかねをとる。僕はせめて經濟上だけでも、兩親の負擔を輕くしてやらなければならないのだ。……僕は今後一切、經濟的に獨立するのだ。僕は全力を儘すのだ。……」

友達は、湧き上る笑を抑へて、彼を見詰めた。そして、彼の兩眼に、過去に對する懺悔と未來に對す

る希望とを現はす熱い涙を見た時、頭を振つて呟いた。『何のことだかちつとも分らない！』

併し、小說を書いて、經濟的に獨立すると云ふ彼の決心は全く堅いものだつた。――彼は、友達の一人を訪問して、自分の小說を雜誌に載せて貰ふ件を依賴した。彼はもう全く外に出なかつた。畏敬する本にも手を觸れず、『戀人』なる回轉椅子にも腰掛けずに、毎日机の前に陣取つてペンを動かした。だが小說は少しも進まなかつた。そして、彼は、毎日憂鬱で、妙に物悲しくつて、そのくせ退屈で、しかも苛々してゐるのだつた。――

九

數日間の絶えざる執筆と、小說が書けないことゝ、それによつて起る色々の心の激動とのために、素助の頭も體も神經も總てが、疲弊しつくしてゐた。だが、彼は、今想ひ返された彼の過去には、少しの生活らしい生活が全然ないことを承認しずにはゐられなかつた。そこには、『かあさま！……かあさま……』と意味のない自由と長い學校生活とそれよりも長い下宿屋生活と讀書と怠惰と興奮と回轉椅子と晝夜の區別もない夢との外、何物もないやうに思はれた。

『駄目だ。駄目だ。俺は生活を知らない。生活をしたことがない。……だのに、小說を書く！……駄目だ。絶望だ。……』

彼は、疊の上に、仰向けに引くり反つて、心の中で再び新たなる絶望の叫聲を發するのだつた。

その時、彼は、投げ出された脚に、烈しい痒みを感じた。そこには、二匹の蚊がとまつて、その一つは、長く血を吸つた體を、丸く脹らせてゐた。彼は、指を近づけて捉へようとした。だが、蚊は、指の達しないうちに皮膚を離れた。併し、それは、遠くに飛び去るには、體が餘りに重かつたに相違なかつた。蚊は、疊の上をすれ〳〵に飛んで、すぐに近くの壁にとまつた。素助は立ち上つて、平手で壁をたたいた。蚊の體はぺたりと潰れて、壁の上に黑い血の塊を散らした。彼の掌には、血に交つて、蚊の體

のかけらが附いてゐた。血を見たいつもの場合のやうに、彼の胸は變に重くなつた。そして、頭の中に重い體を引擦つて今しがた飛んでゐた蚊の形が浮び出た。

「ああ、俺は蚊を殺した。……だが、俺が蚊を殺したのは、蚊が俺を刺したからだ。罪は自分にはない」

彼はさう思つたが、同時に又かうも考へるのだつた。

「蚊は、生きるために俺の血を吸つたまでだ。……血を吸つて生きるやうに造られてゐることは、蚊の過失ではない。そして、生きてゐたいと思ふことも亦蚊の過失ではない」

彼は頭を振つて呟いた。

「だが、蚊が、俺の脚を刺したのがともかく惡かつたのだ」

だが、彼は落ち着けなかつた。その「ともかく……」に躓いた。彼は再び蚊の生活と存在とに就て考へた。併し、彼の頭は疲勞してゐて、もはや何も考へ續けることが出來なかつた。そして、その疲勞した頭の中で、何かこんなことを呟いた。

「……さうだとも、ともかく蚊が惡いのだよ。そして、お前に小說が書けないのも、ともかくお前が惡いのだよ。……お前は怒つたね。お前は蚊のやうに、人を刺したりしないと云ふのだね。お前は正しい生活をし、正しい生活を欲してゐると云ふのだね。だが、それはお前の己惚れだよ。お前は蚊と同じだよ。いや、蚊よりも役に立たない存在だよ。……まあ、お前の每日々々の生活振りを考へて見るがいい。朝寢坊に机に向ふことに讀書に回轉椅子に小說に……。その小說だつて、どうせいつ書き上げられるものとも分らないね。……」

その呟きはいつまでも續いてゐた。彼は益々疲勞して來た。自分自身が氣の毒になつて來た。

彼は座りなほして、室中を見廻した。そこには、何等の生々した物がなく、本箱と本と机と回轉椅子とが懶く眠つてゐた。天井も壁も疊も障子も——總てが、彼の無爲を物語つてゐた。そして、天井からぶら下つた電燈の光さへも、ぼんやりと薄暗くつて、退屈らしい瞬をした。——彼の兩眼は淚に溢れ：

「……毎日々々こんな室で、貧民窟の女房と鼻汁垂らしの餓鬼と、下宿屋の女主人と下女とに取り圍まれてゐて……其上、蒸し熱い空氣と蚊の化物とに苦しめられて……。ああ、駄目だ。駄目だ。……これは何と云ふ地獄だ！こんな地獄で、どうして生命や生活が分るのだ。……」

彼は、もはや一分間も、この室に留ることは出來なかつた。彼は、悲しげに、そして慌しく着物を着換へ、ステッキを持つて——彼が外出する時は、どんな場合でも、着物は着換へられ、ステッキが携へられた。——苛々して外に出た。

だが、彼には行く處がなかつた。彼の友人等はこの近所になく、その多くはどこかに夏の暑氣を避けてゐた。彼は、人通りの少ない暗い町を選んで、當てもなく歩を運んだ。月はなかつた。空は晴れてゐたが、星も見えなかつた。道を挾む兩側の邸宅には、涼しい風が木の葉を鳴らした。道はすつかり乾き切つて、彼の下駄の先に舞ひ上る塵埃が、街燈の光を透して白く見られた。——夜は靜かだつた。そして、その靜けさの中で、彼の下駄のみが淋しく響いた。……

友達の一人なる末浦が住んでゐる家の下に來て、その貸間に燈がともつてゐるのを見た時、素助の胸は、豫期しなかつた喜びのために蘇生した。彼は誰かと話したかつたのだ。そして、自分の悲しみと憂鬱とを喋舌つて、訴へて、慰めて貰ひたかつたのだ。

「末浦君！末浦君！君、居るのかい」

素助の聲が消え失せた時、二階の廊下に現はれた末浦が叫んだ。

「誰だ」

「僕だよ。僕だよ。……甕井だよ」

道の上からさう答へて、彼は格子戸を開けて家に入つた。

十

「大變なことになつたぢやないか。ロシアはもうかなりな處まで來てゐる。英國や米國だつて、良い氣になつてゐたら大間違ひだ。……考へて見給へ。樂天的な、お行儀の良い、××の君子國だつて、ともかく覺醒の徴候は充分あるのだからね。……」

椅子に腰掛けてゐた末浦は、棄助の姿を見るや否やさう云つた。その態度と聲との中には、何か威嚴を裝ふらしいものがあつた。棄助には、その言葉が何を意味するのか分らなかつたが、閾の上に突立つたまま、曖昧に答へた。「ああ、そりやさうだとも」

「まあ入り給へ。暫くの間ならばいい。もう四十分……いや、四十五分間は暇なのだ」末浦は時計を見ながら云つた。「……それからは用事があるのだ。君も知つてゐるだらう。今夜の演説會のことは……」

「ああ」と答へてしまつてから、棄助は脣を嚙んだ。彼は「僕は知らない。……君がやるのかい」と尋ねやうと思つてのだが、今からさう云ひ改めるのも可笑しかつたので默つた。

「どこでもかまはないから座り給へ。その布團の上にでも……。誰も無精で掃除をしてくれないから、いつもこの通り汚いのだ」

末浦は椅子の上から云つた。それは、この室に於ける唯一の椅子だつた。其他には客の腰掛ける物はなかつた。末浦の室は實際汚なかつた。「下宿屋なんかに住むのは、贅澤過ぎる」と主張する彼は、二階のこの貸間にあらゆる世帶道具を持つて自炊してゐた。室の中は不秩序その物だつた。七輪、土釜、鍋、德利、その他の物が疊の上にあつた。その他、本、手帳、紙、インキ、本立て……も、毎日その位置を變へて、勝手な場所に投げ出されてゐた。更に甚しい事は、夜具さへも殆んど片付けられずに、その長い醜い體を室の中央に曝してゐた。彼の机は、机の用をなすと同時に、俎ともなり、食膳ともなるものだつた。その上には、常に本や紙やインキと共に、食器と一緒に横はれる野菜類——馬鈴薯、白菜、茄子、南瓜——があつた。「二階の書生さんはかまはない方だ」と云つて、親切心から彼の室を掃除した婆さんは、いつの間にかその職務を押しつけられてしまつた。室が餘りに亂雜になつて、生活に不便を來

すと、彼は階下に叫ぶのを常とした。
「婆さん、掃除をしてくれないか」
その外のこと――茶椀や庖丁や箸が見えなくなつたり、使ひ歩きが必要だつたり、一寸した買物をしたい場合にも亦、容赦なく婆さんが呼びつけられた。「勞働は互に尊重さるべきものだ」彼はさう云つてゐたが、婆さんは、彼から一片の感謝の言葉さへも受けたことはなかつた。呼びつけられたり、使はれりたりすることが多くなつた時、彼女は階上にまで響くほどの聲で呟いた。
「二階の書生さんは、貧乏なくせに、何から何まで私にさせるんだ。自分では何もしやしない」
併し、「金持は、馬鹿なくせに、いつも横着なのだ。そして、吾々貧乏人は、烈しい勞働に從ひながらいつも少しの幸福さへもなく苦しんで居るのだ」と云ふ末浦の言葉を聞いたが、忙しさうに日に幾度となく外出する彼を見たり、又風采が立派だどこか威嚴に滿ちてゐる彼に接したりすると、彼女の不機嫌はすぐになほつた。そして、近所の人々に云ひ振らした。
「うちの二階の書生さんは、今時に珍らしい方ですよ。いつもよく勉强してね。それに、自炊していらしやるのですよ。お國の方では立派にやつていらつしやるのに。……それに親切な方でね。何でも大した仕事をしていらつしやるのださうですよ。何しろ學者だから、私などには少しも分りませんがね。……」
併し、末浦がどんなにして毎日を送つてゐるか、又末浦のその「お國」がどこにあるか、彼女は少しも知らなかつた。
彼は、寢衣の外一枚の日本着物をも持つてゐなかつた。それは、彼の兵隊生活から得た唯一の「良い習慣」だつたと同時に、「日本人は、洋服と日本服とを揃へてゐなければならないやうだが、そんなことしてゐては、經濟的に毛唐と對抗出來るものか」と云ふ彼の主張に基礎を置くものであつた。彼は、夏冬の二着の洋服で、どんな席上にも會合にも現はれた。その洋服の何れもが、或所はだぶついたり、ある所は窮屈に思はれた。彼の言に從へばそれは、「さうした方が便宜だから、わざとさう仕立てさせた」

のだつた。併し、洋服がよく身に合はない缺點を、彼の風采と容貌とが充分に補つてゐた。彼はあらゆる場合に堂々としてゐた。そして、彼の云ふ總ての言葉が、動かし難い眞實と正しさとを持つやうに信ぜられた。――

素助は、本や紙屑や皿やその他の汚ならしい物を掻き分けて、疊の本來の顏を現した席に座つた。彼は、室の中の空氣が蒸し熱いばかりでなく、酒の香を含んだ一種の臭氣を持つてゐたので、袂から出した手帛で鼻を抑へながら云つた。

「君、忙がしいのか」

「忙がしいよ。いつだつて暇な時はない。誰だつてすることは幾らでもあるのだ。社會は有用の人物が働くことを要求してゐるのだ」

素助は、その言葉に幾分躊躇しながら云つた。

「だけれども、僕にはすることが何もないのだよ。小說を書き始めたが、少しも進まないのだ。そして憂鬱で、悲しくつて、退屈で仕方がないのだよ」

彼は、疊の上から椅子に腰掛ける末浦を見上げつゝ、小說を書いて、同時に經濟的に獨立したいと云ふ計畫を說明した。

「君のおやぢとおふくろとが、雨の下で鮒の釣つこをしてゐたと云ふのだね」高い笑聲をあげた末浦の體が、椅子の上で烈しく前後に搖れ動いた。「君のおやぢを俺はよく知つてゐる。うん、よく知つてゐる頑固な人だが、官僚のうちでは物の分つた方だつた。それが……それが、おふくろと……雨の下で……

彼の笑聲は、更に新なる勢をもつて爆發した。そして、暫くの後云つた。

「かまはないぢやないか。おやぢとおふくろとが鮒釣りをしたつて。……君は小說なんか書くのをやめて、今まで通り『戀人』に腰掛けて、偉大なる人々の著作を讀むことさ」

「いや、そんなことは出來ないよ。僕のとうさま……僕のおやぢは非常に歲をとつたのだ。母親だつて

さうだよ。兩親は僕達を實に愛してくれるのだ。そして、實によく働いてくれるのだ。僕はもう見てゐるのに忍びない。僕は少しでも兩親の苦痛を輕くしたいのだ」彼は慌てゝ手を振りながら云つた。「……それに、僕は自分の生活に愛憎がつきたのだ。こんな生活は少しも正しいと思はないのだ。本を讀んだつて何にもならないことがすつかり分つたのだ」

十一

未浦は口を開いた。そこにはもはや笑の影はなく、彼はあの堂々たる態度を恢復してゐた。

「書齋に籠つて、社會を超越し、世俗を白眼視す——昔はそんな生活が尊敬されたのだ。そして、聖人など〻云はれたのだ。だが、社會は變つた。社會は進步した。社會は複雜になつた。人はもはや社會と離れて存在出來ない。社會の影響なしでは、個人の發達も亦ない。……「巷に出でよ」そんな言葉が數年前から云はれてゐた。だが、彼は巷に出て、何を叫ばうとするのか。社會人心を指導しようと云ふのか。哀れな勞働者の餓えた胃袋を無視して、色の白い自分の痩腕を懷にしつゝ、精神の自由と尊嚴とを說かうとするのか。……おゝ、頭のみ大きい一寸法師よ！だ。社會が問題とすることは、もはやそんなものではない。硝子で張り詰めたやうな心臟を大事がれ！——そんなことを、社會はもうすつかり知つてゐる。だが、社會はもつと切實な苦痛に惱んでゐる。社會はもつと刻下の要求に喘いでゐる。社會は夢見る暇を持たない。社會が動いてゐるのは、常に現實の地盤の上にある。……現在の社會の中心は經濟組織であり、現在の社會を支配するものは經濟能力なのだ。現在の社會に於ては、經濟上の獨立を持たない者は、完全なる自由を持たない。完全なる幸福を持たない。いや、そればかりではない。彼は何物をも持たないのだ。そこには、唯隷屬と汚辱と苦痛とのみがある。……併し、手足を動かし、一生を獻身し、全力を提供してゐる勞働者等——社會の心臟である尊敬すべき勞働者等は、果してその隷屬と汚辱と苦痛とに値してゐるだらうか。自分は「否！」と云ひたい。自分は斷乎として「否！」と叫びた

い。それは明に、社會制度の缺陷を示してゐる。これは速かに打破さるべきものである。そして又、事實として早晩顚覆するものである。……ヘーゲル……いや、コムト……コムトだ。……コムトは既に云つてゐる。初に於ては、普遍的にして單純なるものが科學の對象となり、最後に於ては、特殊にして複雜なるものがその對象となる、と。そして、彼は、社會學を、總ての科學の頂點に置いてゐる。……現在の如く進歩した社會に於ては……』

『だけども、社會は本當に進歩してゐるのだらうか。それは本當に進歩と云はれるのだらうか。工場が增したり、煙突の煤煙が濃くなつたり、自働車が砂塵を渦卷き上げたり、人がその歩みをあくせくと早めたり……そんなことが、本當に進歩の名に値してゐるのだらうか』素助は、相手の話を遮つて、低い聲で云つた。

『それは、君が社會を知らないからだ。生活をしてゐないからだ。それは單に、下宿屋の一室から社會を傍觀してゐる君の妄想にすぎないのだ。……君は、穩かに日の當る川岸から川の流を見て、水が波を起したり、泡を立てたり、渦卷いたりするのに、驚き怖れてゐるのだ。だが、それらのことは、流れる川にとつて最も自然の現象なのだ。そして、川の面やその中にある物にとつて——舟や魚や水泳者にとつて、それらの現象は最も自然のことであり、普通のことであり、なほ又必要なことでさへもある。流れる水にとつて、流れ行くことは必然である。必然なるものが、因から果に進むのは明に進歩である。……此世に於ては何物も停止することを許されない。社會は變化する。動いてゐる。そして、その變化、動きは、人間の本性に根ざしてゐる。吾々は、柔弱な美的神經からのみ社會を見てゐるのではない。吾々は全身をもつて社會に生きるべきだ。美が總てゞはない。此世には美以外に更に多くの價値あるものがある。その上、外に傍觀する者にとつて醜なるものも、社會の中に生きる者にとつては美なることさへあり得るのだ。……そして、人間の幸福は、受動的に物を享受することになくして、彼の全力をもつて能動的に結果の正しい仕事をすることにある。……』

「僕だつて何かをしたいのだよ。僕だつて、全力をつくしてわきめもふらずに何かしたら幸福になるのだと思ふこともあるのだよ。だが、僕には何も出來ないのだ。僕の腕は細い。僕の體は痩せてゐる。僕は本當に何も出來ないのだよ」

『出來ない……。何も出來ない……。それは君が自分の怠惰を辯護し、是認する口實に過ぎないのだ。……誰も初から活動する能力を持つてゐるのではない。總ての人が、生れた時に於ては一個の赤ん坊に過ぎなかつたのだ。動かぬ歯車は錆びて來る。動く歯車は白い光をもつて輝き出す。人は、行ふことによつて、あらゆることを爲し得る能力を獲得するのだ。僕を見給へ。僕を。僕は何でも出來るのだ」

末浦は、だぶ／＼した服の上から腕をたゝいた。――彼は實際總ての職業に從つたことがあつた。書生、牛乳配達、植字工、小學校の先生、會社員、雜誌の編輯、論說書き……。なほ又ある鐵工場に青服を着て働いたとも云はれてゐた。そして、現在彼が何をしてゐるのか、それは誰にも分らなかつた。

素助は、友人の言葉に眼を伏せながら云つた。

「併し、僕は恐ろしいのだよ。僕には分らないのだよ。……例へば、資本主と勞働者とが賃銀のためにいがみ合ふとする。兩方とも自分の利益のためを考へてゐる。そして、相手を自分の利益の下に屈服させようとする。そのためには、あらゆる方法を執つて恥ぢないのだ。兩方とも、血眼になつて、唾を泡立て、手を振り上げて、いつまでもいがみ合つてゐる。そして、兩方共、社會のためだと云つてゐるのだ。僕には、その脂ぎつた頸の太い資本主も、青服を着て眉を釣り上げる勞働者も――兩方とも氣の毒になつて來るのだよ。……」

『いや、そんなことはない。現代のかゝる紛糾は、過渡期の現象にすぎないのだ。そして、それを通過しなければ、到底新しい光明の時代は來ないのだ。勞働者等は既に自覺してゐる。總ての惡は、資本家の横暴――無知と愚昧とから來る横暴に基因してゐる。この誤つた經濟組織を打破しなければ……」

末浦はさう叫んで、室の一隅に視線を向けた。その壁の上には、數枚の寫眞が、糊で貼られたり、ピ

ンで留められたりしてゐた。それは、此亂雜な室での唯一の装飾品だと思はれた。それらの寫眞の人物を、素助は一人も知らなかつた。ある友人が、その一枚を指して、「これは誰だい」と尋ねた時、末浦は高い聲で答へた。「カルル・マルクス！」更に友人が「カルル・マルクスつて何だい」と尋ねた時、末浦は輕蔑と憤怒とを交へた視線を永い間相手の全身に投げた後、一言も答へることなしに、脣を歪めて横を向ひてしまつた。それ以來、素助はそれらの寫眞に對して質問を發しまいと決心した。

　素助は、末浦の言葉を聞き流して、前の如く顔を伏せながら話し續けた。

「……世の中には、わけの分らない睚み合ひと悲劇とが、絶えず起つてゐる。……叱る。嘲る。打つ。蹴る。呶鳴る。泣く。……そこでは電車と自働車とが衝突する。車輪の下から悲鳴が起る。血が流れる。片足が砂の上にころがつてゐる。……こゝでは又、人間と人間とが何のためか斬り合ひをする。そしてやつぱし血が流れる。……其他あらゆる種類のいざこざ！……僕は、カフエーの二階の窓などから往來を見下して、車が走つたり、人間が歩いたり、馬が嘶いだり、犬が悲鳴を上げたりするのを眺めると、僕はいつも涙ぐんで來る。人間ばかしでなく、車も犬も馬も、それから又木や空や地面や太陽までも、氣の毒になつて來る。僕は本當に世の中の總てが、氣の毒でたまらないのだ。……僕はよくこんなことを考へる。僕が電車に乘つて、ある人の足を踏むとする。足に傷が出來る。傷から……さうさ、何か丹毒のやうな物が入る。病氣がひどくなつて其人は死ぬ。殘された細君は悲んで發狂する。小供等は、兩親を離れて生きなければならない。そして、彼等は、不良少年になるか、泥棒になるか——ともかく、不幸な運命が彼等を待つてゐる。そして、又それから……それは全く不幸の連續なのだ。そして、かゝる數多くの不幸の原因は、用もないのに僕が電車に乘つて、他人の足を踏んだと云ふ偶然事なのだ。……これは僕の想像だよ。だけども、果してそんなことがないと斷言出來るだらうか。……人間は皆不幸なのだ。決して誰も幸福ではない。……僕が何かをするとする。いや、單に僕が唯少しの距離を動いたとする。そして、その時の僕の意志が何であらうとも、それは僕のみにでなく、他の多くの人々にと

つても、どんなに不幸な出來事を惹き起すか分らない氣がする。僕はさう思ふと、外に出ることすら出來なくなる。いや、單に僕が存在してゐる――それが又、他人にとつてどんなに不幸を釀すか分らないのだよ。……

末浦は高い笑聲をあげた後云つた。

「他人のことを、さうまで氣にかけるのは君の良い素質に基く美點に相違ない。だが、それは些末神經の尊重だ。おゝ、弱い心に呪ひあれ！だ。そんなことを顧慮するために、君の生活は益々萎微するのだ。あゝ、それは、救ひ難き心の弱さだ。……それに反して、君はその弱い心を幾分是認してゐやしないのか。そればかりでなく、君は、その感情を幾分尊重して、それを得意がつてゐやしないのか。君はその弱さを自覺しないで、自分は志操が高潔だなどゝ考へて、あの『戀人』の上で慨世の氣焔を吐いてゐやしないのか。……君は生活してゐない。世の中の一面しか見てゐない。社會とはそんなものではない。人間とはそんなものではない。……君はなぜかう考へることが出來ないのか。君がその痩腕……君のその痩腕を僅に動かすことによつて、どれだけ價値のある仕事が出來るか分らないと。俺が云ふことは想像ではない。それは事實なのだ。君は痩せてゐて力がなくても、君が出來ることは實に澤山ある。……町を歩いて見給へ。君は盲人を見る。君はその手を引いて、彼の前にある溝から彼を救ふことが出來るのだ。君は電車道に倒れた小供を見る。君はそれを抱き上げて、車輪に轢かるべき彼を、安全に母の手に渡すことが出來るのだ。君は汽車道に佇む女を見る。君は一つの言葉を與へることによつて、彼女を死から光明にまで導くことが出來るのだ。……それは唯僅な例にすぎない。だが、それらのことを君は實際に出來るのだ。……君は或は『そんなことをしたつてつまらない』と云ふかも知れない。併し、それも亦、君の生活をしないことに基因する。生活しない者にとつては、何もかも退屈で、下らなく思はれるのだ。そして、生活する者にとつては、あらゆる物に價値がある。彼は事實に接して、それから來る直接の感動に全身を慄はすのだ。そして、それは實際無意味ではないのだ」

「いや、僕は……僕は、それを決して……決して下らないなんて云やしないよ。あゝ、もしも僕にそんなことが出來たら……」

素助は、顔を上げて、眼を輝かしながら云つた。

十二

末浦は、擡げられた相手の顔を見詰めながら話し續けた。

「出來る。それは君に出來る事だ。もしも君が、小さい時からの習慣である「かあさま！かあさま！」と叫ぶその依賴心を棄てゝ、總てのことを自分自身の手でしようとするならば、そして更に、君が、あの退屈な穴倉――「戀人」の回轉する、馬鹿らしい書齋を離れてしまひさへすれば。……俺は、君の室の壁に「人生とは自己を淨化することなり」と云ふ文字が貼り付けられてゐるのを見た時、苦笑しずにはゐられなかつた。淨化とは何だ。書齋に燻ぶつて、讀書することが淨化なのか。それは單に「惡いことをしない」ことだ。いや、何事をもしないことだ。死人の呼吸だ。……又君はよく「人格の建設」と云ふ。だが、社會より離れて、誰が人格を建設することが出來るのだ。個人と云ふ立場、人格と云ふ立場から考へれば、社會は、あらゆる人間の能力を發達、進歩させる場所なのだ。横はる石は自分の力を知らない。石が自分の力を自覺するためには、周圍の何物かに衝突することが必要なのだ。人間も亦同じことだ。……よく云はれる「己を知れ」なる言葉も、「周圍を知れ」なる内容を含んで居る。自己の周圍を觀却して「己を知る」ことは絶對に不可能だ。人間が認識出來るのは對照によるのだ。……だのに、世間の思想家とか文學者とか云ふ者共は、社會に就ては何も考へない。彼は唯「精神！精神！」と叫んでゐる。そして、社會の諸現象をもつて、「それは形而下の問題だ。精神問題ではない」と云ふのだ。おゝ、精神！そんなものゝみに引掛つてゐる限り、彼等には人生は分らない。生活を生活することが出來ない。その上、その精神さへも分らない。總ては薤根の皮を剝ぐことだ。それは明に、エロスなどゝ云ふ幻の

美女を抱いて、觀念世界に嬉戲するプラートン以來の迷誤なのだ。……その間に、社會は彼等を追ひ越して遙かに進んでしまふのだ。彼等が自分等の迷誤に氣付いても、それはもう晩すぎる。社會は、そんな思想家や文學者を少しも必要としないのだ」

「さうだよ。僕も本當にさう思つたのだ。人間は生活しなければならない、殊に文學者は生活しなければならない。僕は決心したのだ。僕は社會に出る。そして、働くのだ。……」

素助は叫んだ。彼の顏は輝くやうに思はれた。彼は、社會に出て働く自分を想像した。退屈と憂鬱とが消え失せ、自分の前には幸福な意味深い生活が開けて、あの大作「大都會の騷音」を書く自分のペンが、車の輪よりも早く走る光景を想像した。――彼の心臟は胸の中で鳴つた。

末浦は、素助の言葉を聞き流して續けた。

「道德律も亦社會の影響を受けてゐる。いや、さう云ふよりも、それは社會によつて作られるのだ。一般には、道德律は不變にして絕對なるものであり、人間の內及び外にあつて人間の行爲を支配する力があると考へられてゐる。人間の認識が時間と空間との範圍に限られてゐると斷言したカントさへも、道德律は時間と空間とを絕した規範命令だと云つてゐる。更にゲーテ――君が崇拜し切つてゐるゲーテも亦、時間と空間との中にある物を正しく認識することによつて、夫等を越絕したものを少しでも認識したいなどゝ未練がましいことを云つてゐる。それは明に、鰯の頭に瑞喜の淚を注ぐ老婆の迷信と同列に置かるべきものなのだ。……道德律も亦決して不變のものでない。絕對のものでない。それは社會に順應して變化し進步する。これは幾多の事實が證明してゐる。モロッコ……いや、モロッコではない。エスキモーの社會に於ては、老人を殺すことが最も道德的と考へられたことがあつた。それを社會が要求したのだ。エスキモーの社會では、老人をも養ひ育てるだけの富の餘裕がなかつたのだ。……それは一例だ。だが、そんな例は外にいくらもある。……君は云ふかも知れない。併し、人間は道德律を感じ得る何物かを持つてゐると。そして、その事によつて、人間は絕對不變の道德律を持つてゐると推論しよう

とする。だが、それは、單に人間が社會的生活たるを證明するに過ぎないのだ。道德律は社會の存在に必要であり、人間相互の生活を保證するものなのだ。道德律が社會を支配し、指導する——それは轉倒されたる推論だ。……人間は生活慾を持つ。そして、社會意識の前に跪く。そして、更に社會全體を進歩させる。社會及人間の進歩の目標がどこにあるか——それは……それは……」

話し續けてゐた末浦は、忽に唇を動かしたまゝ、默つて手を振つた。そして、「それは……それは……」と吃つてゐた。だが、素助は、相手の言葉をさつきから少しも聞いてゐなかつた。彼は唯社會生活をする自分を考へて胸を慄はせてゐた。

「僕はもうすつかり決心したのだよ。僕は本當に社會に出る。ああ、社會に……君、何か社會的の仕事はないか知ら。僕は何でもやるよ。君が推薦してくれるものならば。僕はこの退屈な生活を投げ棄てるのだ。もしも君に心當りがなければ、僕は馬丁でも運轉手でも何でもやるよ。馬丁でも運轉手でも、僕の生活よりどれ程價値があるか分らないよ」

素助は高く叫んだ。その聲は、咽喉に引掛つて、妙な調子に慄へ響いた。末浦は、振り上げたまゝやり場に困つてゐた手を、机の上に置いてから默つて、素助を見下した。そして、暫の後重々しい聲で云つた。

「社會に出る。それは實に結構だ。俺は、君の決心を心から祝福する。職業は——有益な職業はいくらでもある」末浦は、兩眼を閉ぢて少しく考へるやうに見えたが、やがて机を力强く敲いた後云つた。「職業は澤山ある。俺は君をどこにでも推薦することが出來るのだ。だが、丁度俺は今ある仕事を持つてゐる。それは飜譯なのだ。併し、俺は今忙しいので……いや、それは實に有益な飜譯なのだ。俺は、それに多大の興味を持つてゐるのだ。俺は自分一人でやりたいのだ。だが、……だが、君がもしも手傳いたいと思ふならば……。俺は決して無理にすゝめはしない」

「飜譯……?飜譯つて何をするのだい」

素助は、氣がすゝまないやうに云つた。

「有益な飜譯なのだ。社會學と經濟學とに亘る有名な原書なのだ。それは單に讀むだけでも、學問にはなるし……。その上、それを飜譯して、社會に献げるとなれば……。君は飜譯などはつまらないと思ふのだらう。飜譯なんて社會的生活ではないと思ふのだらう。併し、それは君の誤つた考なのだ。飜譯は一種の立派な社會的事業なのだ。それがどれ程社會的な事業であるか、君がやり始めて見れば充分に分つて來る。君のやうに、やり始めないうちから、それはつまらなさうだと云ふ樣に考へては、何も出來やしない。それは、自分の怠惰と無爲とを繼續しようとする最も狡猾な口實なのだ。……その飜譯によつて、君は出版書肆とも關係が出來て、それらの生活も分つて來るし、印刷所の職工の生活も分つて來る。……だが、それは決して苦しい仕事ではない。……いや、俺は強いてすゝめるのではないが……」

末浦はもう一度机をどしんと打つて、鋭い視線を素助に注いだ。

「……いや、僕は飜譯を決して下らないなどゝ思やしないよ。だが……だが……。いや、僕はやるよ。僕は決心したのだ。僕は何でもやるのだ。世話してくれ給へ。僕はやるよ。僕は喜んでやるよ」

素助は、末浦の迫るうなや視線をよけながら慌てゝ叫んだ。

「やつて見給へ。やつてゐるうちに、君はそこに多大の興味と價値とを見出すことが出來るのだ。……もつとも、飜譯料は非常に安いのだ。だが、それでも君は、餓の釣つことをしてゐる兩親を離れて立派に獨立出來るのだ。……」

末浦の言葉を遮つて、素助は顏を赤くしながら云つた。

「そんなことはどうでもいゝのだよ。……かねのことなんか……。僕は唯生甲斐のある生活をしたいのだよ」

「さうだ。金錢上の問題は今重要のことではない。君は社會に出なければならない。生活を知らなければならない」

「……僕はやるよ。本當にやるよ。僕は何でもやる氣でゐたのだ。あゝ、僕は……僕は……」

素助はいつまでも興奮の聲をあげてゐた。末浦は、机の上に肱をついた手に頭をのせて、彼を默つて見てゐた。……

「……ああ、だが、君は行かなければならなかつたのだね。講演會に。僕は歸るよ。そして、明日でも飜譯する原書を取りに來るよ」

暫の後、自分に返つた素助は云つた。

「講演會！うん、さうだ 講演會！……」末浦は時計を見ながら云つた。「ともかく出よう。飜譯のことは俺がよく取計つて置く」

素助は、帽子を取上げた。その時、彼はごた〳〵投げ棄てられてゐる本の間に、自分の本箱に屬すべき一冊の本を發見した。彼の心臟はどしんと鳴つた。そして、彼は、それを手早く懷に入れた。

十三

暗い通りには、涼しい風が動いてゐた。末浦の靴と素助の下駄とが、乾き切つた道に當つて響を立てた。

空は晴れてゐた。そして、そこには澤山の輝く星が見られた。末浦は空を仰いで云つた。

「澤山の星だ。……詩人とか思想家とか云ふ者共は、空の星を見て、永遠とか神秘とか云ひ出すのだ。俺は、永遠とか神秘とか云ふ言葉ほど嫌ひなものはない。世の中には、そんなものは一つもないのだ。總ての物は、數理と科學とによつて説明出來るのだ。俺と雖も、此世にはまだ分らない事が澤山あるのを承認する。だが、それは永遠でも神秘でも何でもない。時間と空間との中に於ける一切のことは、人間によつて認識出來ることだ。そして、それ以外のことには、人間には縁がない。そんな物はどうでもいい！……詩人や思想家共は、いつでも永遠とか神秘とか云ひ出して、自分の怠惰な冥想と云ふ奴にもつ

たいを附けてゐる。そして、自分の無能と無爲とを涙でかくして、自分自身に甘へてゐるのだ。……」
末浦の靴の音が、更に烈しく響いた。
その時、彼等は、坂道を登る自分等の前に、一つの荷車が動くのを發見した。荷車の主は、明に疲勞し切つてゐるに相違なかつた。車はごと〳〵と音を立てゝゐるのみで、それは少しも進まなかつた。そして、荷車の主の喘ぐ呼吸を、彼等は闇の中に聞くことが出來た。
「さあ、もう少しだ。押すぞ」
末浦はさう叫んで、車の後に手を掛けた。車の輪は、更に烈しい音を立てた。そして、荷車の主の口から出た感謝らしい言葉を打ち消した。車は進み始めた。
「さあ、もう少しだ。もう少しだ」
末浦は時々さう叫んだ。
素助も亦、車を押さなければならないやうなあるものを、胸の中に感じた。彼は、車に近づいて、その後に輕く手を置いた。併し、同時に彼は、末浦に從つて車を押す自分が、馬鹿らしく、又恐かしく考へられるのを拒むことが出來なかつた。
荷車が坂の上に達した時、素助は手帛を取り出して、何よりも先に自分の手を拂つた。そして、顏を顰めて歩き出した。彼の全身は、飜譯事業によつて社會生活に飛び込む自分を考へつゝ、歡喜と希望とに一杯になつてゐた。――暫の後、彼は、自分の傍に末浦が居ないことに氣が附いた。そして、後を振り返つた時、急いで近附いて來る末浦の姿を發見した。
末浦は遠くの方から叫んだ。彼の手には、小さい手帳のやうな物が見られた。
「これも亦、資本家の橫暴の一例たるに外ならない。考へて見給へ。彼はもう六十歳を越えてゐる」末浦は手帳に眼を近附けてから又云つた。「いや、六十六歳なのだ。だのに、彼は朝の六時からあの荷車を引いてゐる。そして、もう二時間もしなければ、指定の場所には到着出來ないのだ。その上、考へるこ

とも出來ないほどの安い賃銀で……」

末浦は、荷車の主の口述を筆記した手帳を荒々しく振りながら叫んだ。併し、素助は、それらの事件に對しては少しの興味も感じなかつた。末浦の言葉さへも聞いてゐなかつた。彼は、自分自身のことを考へてゐた。

『君、こゝに寄らう、ほんの僅の間』

素助は、突然にさう叫ばれた末浦の言葉によつて自分に返つた。そして、自分等の前に薄汚い酒店を發見した。

『……だけども、君、君は講演會に行かなければならないのだらう、さつきから、四十五分どころかもう二時間も經つたやうだよ』

素助は云つた。彼は酒が飲めなかつた。この薄汚い酒店に入ることが厭だつた。そして、彼は、末浦と離れて、あの「戀人」の上に腰掛けつゝ、自分の未知の生活を想像する幸福を持ちたかつた。

『講演會……。いや、いゝのだ、ともかく入らう。ほんの僅の間のことだ』

末浦はもう暖簾の後に姿をかくした。

『總ての欲望を必要品以內に限るべし』と主張してゐる末浦は、『存在する物は、總て存在の理由と根據とを持つ』と云ふ理論を楯として、飲酒を喜ぶその常習者だつた。

素助は、周圍を見廻した後、末浦の後に從つた。

十四

『……俺はいつも勞働者の味方なのだ。おゝ、勞働者！勞働者！それは何と云ふ男性的にして意味深い言葉だ！……論據なき經濟組織を打破せよ。然らば、必ずや新しき時代と限りなき幸福とは來らん、だ。……ああ、勞働者！俺も亦實に一個の勞働者なのだ。自覺したる一個の勞働者なのだ。俺は、社會意識

の進み行く方向と目的とを知つてゐる。俺は人間を信ずるのだ。民衆の力を信ずるのだ。あゝ、俺は……」

酒店を出た後も、末浦は手を振りながらさう叫び續けた。彼の聲はその響を增して、街路の上に鳴り渡つた。そして、振り動かされる手の運動に從つて、兩足の上に載つてゐる彼の全身も亦、よろ〳〵と搖れ、よろ〳〵と進んだ。

「君、そんなに大きな聲を出すのはやめ給へ。人通りが澤山あるのだよ。……君、もつと眞直に步き給へ。そこは、君、溝だよ。溝だよ。……危い。それは、電柱ぢやないか。……君、君、步けるのかい……」

粂助は、末浦の一方の腕を掴んで、彼の進行を助けないではゐられなかつた。

「步けるとも。大丈夫だ。……俺は自覺したる立派な勞働者ぢやないか。その勞働者が……勞働者が……。大丈夫だ。……おゝ、新しき時代よ、か。……甕井、貴樣は決心したのだな。よし、貴樣も亦一個の勞働者だ。翻譯！いや、心配するな。翻譯だつて唯の翻譯ぢやない。社會學と……さうだ、社會學と……。貴樣は……感心な奴だ。俺は貴樣を尊敬する。うん、泣くな。悲しむな。人生は生活することだ。その外に人生はない。思索は生活ぢやない。思想は……思想は、人生の滓なのだ。……額に置かれたる手を働かせ。人間は頭の外に……。さうだ。頭が人間ではないのだぞ。手も足も胸も腹も胃袋も……。おゝ、泣くな。悲しむな。……」

「君、分つたよ。分つてゐるよ。君、何だつてそんなに大きな聲を……。ああ、人が來るよ。人が見てゐるよ。立ち止つて見てゐるよ。……そして、君、君はどこに行くのだい」

實際、町を行く人々は、立ち止つて彼等を見てゐた。或者は高い聲をあげて笑つた。

「……心配するな。笑ふ奴は……うん、手の白い怠惰者だ。尊敬すべき勞働者等は……」

末浦に引摺られながら、粂助等が道の十字路に來た時、末浦は、そこにあつた電柱に背を支へて急に

默つた。
「君、どうしたのだい。君はどつちに行くのだい。僕はこつから曲る方が近いのだが……」
素助は云つたが、相手はやつぱし默つてゐた。
暫の沈默の後、突然末浦は云つた。
「……貴樣は……貴樣はやつぱし淸敎徒か。……」
素助の胸はどしんと鳴つた。そして、顏に上る血の力を感じた。
「……僕は……僕は……」
彼はその先を續けることが出來ずに、烈しく動悸する胸を抑へた。
「さうか。やつぱし淸敎徒か。……」
「……僕は……僕はさうしてゐる方がいゝと思ふのだよ。そして、そんなところに行くことは……」
「おゝ、敬虔なる淸敎徒よ。貴樣は正しくないと云ふのだな。貴樣は感心な奴だ。……」
「君、歸つた方がいいだろ。一人で步けなければ、僕が送つて行くよ」
「淸敎徒！よし、貴樣は歸れ。歸れ。……俺は……。俺屋はゐないか。俺屋は。……」
末浦は、電柱を離れてよろ〳〵と步いた。
「君、歸る方がいいよ。君！……そして、飜譯のことは忘れないでゐてくれ給へ。僕は明日原本を取りに行くよ。……ああ、君は……」
素助は、彼の後に從つて、よろ〳〵と動くその姿を目映げに見ながら云つた。彼には、その姿が闇の中で形を大きくし、蝙蝠のやうな黑い羽根を、氣味惡く羽擊く如く思はれた。彼の全身は、恐怖の念で一杯になつた。
「……心配するな。よし、よし。敬愛すべき……敬愛すべき小倅子の……淸敎徒よ、か。…俺屋！俺屋！……貴樣は……歸れ。歸れ……おい、俺屋！俺屋！……」

末浦はよろ〳〵と走りながら、高い聲で叫び續けた。素助はもう彼に從ふことが出來なくなつた。そして、彼の姿が闇にかくれ、彼の聲が消え失せるまで、長い間悲しげに暗い十字路に立つてゐた。……彼は悲しくなつた。わけが分らなくなつた。憂鬱になつた。そして、道を曲つて、獨りとぼ〳〵と歩き始めた。

併し、彼の胸には、すぐとあの樂しい空想が浮んで來た。

意味深き生甲斐のある生活！

『さうだ。俺は明日から社會に出るのだ。あの退屈な下宿屋生活を永遠に脱するのだ。……ああ、俺はこんなに分りきつた理屈がどうして今まで分らなかつたのだらう。……社會に出て見れば、案外に社會はさう恐ろしい物でないかも知れないのだ。そして、俺は又案外に何か非常な能力を持つてゐるかも知れないのだ。……飜譯！俺は本屋の二階で毎日飜譯をする。そこには、色々な人が出入する。色々な新しい事が話される。そこには又、美しい女性……本屋の娘とか何か女事務員とか云ふ者がゐるかも知れないのだ。彼女は無口で、憂はしげな眼をいつも窓外に投げてゐる。そして、一人の有望な文學者の俺が、飜譯などをしてゐるのに對して、非常な尊敬と同情とを拂ふに相違ないのだ。……其外、印刷所の職工等！ああ、新しい生活！……社會に出てみると、今まで分らなかつた世界――自分に嘲笑と敵意とのみを持つてゐるやうに思はれた世界が、すつかり異なる光に照らし出される。それは、親しみのある明るい姿を現はすのだ。同時に、自分の心の眼が開けて來る。社會の意味、價値とそれに對する自分の位置とが分つて來る。……俺は下宿屋に歸つてからは、あの『大都會の騷音』に全力を傾倒する。そのどの一頁にも、生々した生命の感じが炎をあげて燃えてゐる。ああ、その時は、今まで自分の創作を批難してゐた奴共が、どんなにして自分の前に跪くことだらう！……』

素助の心臟は力強く鳴つた。彼は元氣よく地を踏んだ。そして、彼の右手に持たれたステッキが、輕快に急速にくる〳〵と回轉した。

總ての物が今、彼には、なつかしく、快く、意味があり、親しみ深く思はれた。空や星や樹木や吹き行く風や——そんな物ばかりでなく、店や家や軒燈や家の中の人々や通行人や車や自轉車や——それらの物も亦、愛らしく思はれた。

『さうだ。彼等の中にこそ生活があり、生命の發露があるに相違ない！』

彼は、一々の店、そこに座る人々、往來を行く通行人と車とに、愛と同情と好意とを交へた視線を投げた。

屋根と木の頂とをかすめて、涼しい風が吹いてゐた。空には、澤山の星が靜かに輝いてゐた。そして、それは秋の近附いたことを思はせた。

道は電車通に出た。——兩側の店は、段々美しいものになつて來た。店の中にも軒にも飾り窓にも、明るく、華かに、美しく、電燈と瓦斯燈とが輝いた。人通りは數を增した。彼等は、一人で、或は夫婦で、或は更に小供等を連れ、下婢を從へて、往來を歩いてゐた。そこは少しも夜更けを思はせなかつた。或者は店先に立つて、美しい呉服物に視線を注いで話し合つた。或者は明るい店に入つて、何かの買物をした。或者は、包みをぶら下げ、布呂敷を抱いて歩いてゐた。或者は笑ひながら、高い聲をあげながら道を進んだ。或者は小供の手を引張つて、甲高い怒聲をその小さい者の頭上に浴せかけた。そして、その群集の間を、俥、自轉車、電車、自働車が、やかましく、氣ぜはしく、慌しく走つた。下駄の音！車輪の響！鈴の音！人の聲！物と物との衝突する音！…併し、人々は、自分等の外には何が存在してゐるか、又何が起りつゝあるかに頓着しずに、自分等だけを念頭に入れて滿足してゐた。そして、彼等はこの群集の人混みの間に於ても、擦れちがう人々を互に眼敏く物色した。そして、その視線の中には、嫉妬、羨望と輕蔑と嘲笑との外には何にもないやうに思はれた。……

群集の波に押されて歩いてゐる素助の心は、重苦しくなつて來た。胸の底に何物かがかすかに疼き始めて來た。彼には、それらの群集と車共とが、自分とは全く緣のない怪物の一團のやうに思はれて來た。

彼は恐怖のために全身を慄はせた。そして又、それらの者共と一緒に自分の存在が、馬鹿らしく且つ物悲しく思はれた。

「何と云ふ貧乏臭い男だ！」

彼の眼に會ふ視線は、暗默のうちに總てさう呟いた。

索助の恐怖と物悲しさと不安とは、段々と色濃くなり始めた。彼は人々の視線を避けた。そして、彼の頭は自然と下り、彼の步調は自然と早くなつた。

「何と云ふ鐵面皮な不作法な人々だ！……ああ、これが社會なのだらうか。こんな人々と生きることが社會生活と云ふものなだらうか。……」

群集の間を押し分けて、暗い細道に遁げ延びた時、彼は、動悸する胸を抑へてさう思つた。そして、彼の新しい生活に對する希望と歡喜とは、暗い影に被はれた。

彼は、首垂れて靜かに步を運びながら、雨の下で鮒の釣つこをする父と母とを考へた。彼の兩眼に熱い涙が溢れて來た。……

空は晴れてゐた。澤山の星を浮べた天の河が、その晴れた空を橫切つて、長く靜かに流れてゐた。

——大正八年九月十一日——



ある手紙の返事　（感想）

島田清次郎

A君、

何年ぶりでの悦ばしき舊友を訪ねての、旅行のための旅行から歸つて來た自分は、その翌朝六錢を貼つた重いあの手紙を受取つた。實は、封筒を見ただけでは、可成り生活のある部面にわたつては健忘性な自分は君の名を想ひ出せなかつた。しかし封を切つて讀みはじめると、先日、—氏のお寺の講演會で—氏からあの興奮した群集の渦巻きの中で、紹介された、眼鏡をかけた、顔色のよくない君が自分の記憶に速やかに再現せずにゐなかつた。實はあの時、君が推察されたやうに、自分にはこゝにも拾ひ上げねばならない曠野の寶石があると云ふ感じがしたのだつたが、自分自身を救ひ上げることに急がしい自分は、そのまゝ、貴重な實感を、單なる實感として、何等か實行上に現はすことが出來ず、わづかに、注意して君の話を聽き、多少の感想を述べたにすぎなかつた。それが、現在の自分として、自分の實力の限界として、身柄を忘れない仕方であると自分には信じられてゐた。そして、君のことはわが意識界から忘却されてしまつて、ふたゝび「地上」の創作に沒頭しはじめてゐ

たのである。そこへ、今度の手紙が侵入して來たわけである。君は、このみすぼらしい一青年の自分を、特にこの自分を見込んで、一身の重大な秘密と樞機を披瀝し、急場の救ひとして五十圓丈貸してくれゝば「私は現在の自己の生活を根元的に改革し、」必ず生々した青年となり、のち〳〵はこの自分のために「片腕ともなる」人間になると言はれる。そのお手紙は、直覺的に總じての感慨を云へば、自分はありがたさを感じたことを自白する。自分ごとき無學で、年少で、取るに足らない者を、男と見込んで相談してくれることは、實に男に生れた生甲斐であると考へられる。しかしひるがへつて特に冷靜になつて觀察しなくとも、このことは、やゝ、滑稽の感じがないでもない。何故なれば、君の第一に求めてゐるものは五十圓の金であり、求められる自分は、現在の自分は、わづかにある人の好意によつて創作の時間の自由を獲得し、保證されてゐる人間に過ぎないからである。もとより自分は物質以外の世界を認識し、そこに東西古今を向方にまわしても、びくともしない內面的權威の體驗を知つてはゐるが、黄金の世界では、今のところは恐らく弱者中の弱者であらう。君のこの「無心」が、病氣の苦痛は病氣をしたものでなくては分らないと云ふ意味で、「貧乏」と云ふ病氣にとりつかれてゐる君が、この自分に發した絕叫であることは充分知つてはゐるのである。それにしても、自分は一切の理由や說明を省いて、五十圓の金は今、出來ない、と申し上げる。これは事實であつて仕方がない、もちろんあらゆる意味に於て仕方がないことだとは決して考へてはゐないが。實は君への返事はこれでいゝのだが、しかし、これだけでつゝぱなすだけの冷酷さ、ある意味に於ける偉大さを自分は今の場合持ちたくない。何故なれば、自分も、君と同じ十八の暮れには、君よりももつと切つぱつまつた心持で、もちろん、君が自分に於けるやうにそんな見當の人へではなくて、有數のある富豪へ、金の無心狀を書いたことがあるからである。自分はそれを出しはしなかつた。最後の批判をつかさどる最高の自分の意見がそれをさせなかつた。それで、その手紙は、今も自分のその頃の日記にはさまれて殘つてゐる。自分は君の手紙を受取つたとき、必然的に自分のその手紙を想ひ出し冷汗をかいたのだ。それを取り出してみると、朱の洋墨で

「あゝ汝、清次郎よ、汝もしえらばれたる者の使命を内に感ずるならば、再びこの愚をなす勿れ」と書いてある。自分は、君にその頃の手紙をうつしてお目にかけよう。自分の經驗ではこのことがずゐ分君の慰めになるはずだと考へるが、さうでないだらうか、殊によると、君は君自身のいとほしさにもう眼に涙をにじましてゐることかもしれない。

二十日に貴方をお訪ねする決心でやうやう家を出ましたが、途中で勇氣が碎ぢけ、それから二日間どうしたものかと惱みつづけてをりましたが、とうどう机に向つて手紙を書くことにしてしまひました、私は今は打ちくだかれた謙虚な心地がしてゐます、ほんとうに思つてゐることを僞りのないやうにすなほに申して、貴方に御相談申し上げます、どうぞお讀み下さつてもし私が間違つてゐたら「馬鹿奴」と唯一言仰つて下さいまし、私は金錢のことについて貴方に申し上げようとしてをります恐しくいへば金錢の無心について申し上げようとしてゐるのです、何の血緣上のつながりもなく、何の社會上の親密もない私が！私は當然恥ぢて死ぬべきでせう、それより前に私は貴方に如何にこの自分がくだらない奴であるかを告白しなければならない一事を犯してをります、それは今年の八月貴方に先輩Kの家で偶然にもはじめてお目にかゝつた時、既に私の胸に卑屈な意志が起きたのでした、大學へはいつて學生の生活をやつて自分をもつとすなほにのびのびと成長させたいと、どれ程希つてゐたことでせう、しかし母の手細い内仕事によつて養はれてゐる私にそれは全く不可能でした、去年の春、一度ある人が或る大阪の金のある人に賴んでやらうと申しましたがその時の條件があまりに見えすいた踏みつけ方でしたので私は大學へはいりたいのを我慢して斷りました、そのあとのやるせない寂しさと意估地な意地張りとは私の人格をしてますます變な反抗的なものにしてしまいました、今年の夏貴方にはじめてお遇ひしたとき、私は貴方が金のある方に似合はず氣もちの貝い方であるのにどれ程喜びましたでせう（これは言ふまでもなく半分はお世辭だ。）私は自分の情熱をどうするともできませんでした、自分の運命が貴方によつて

切り拓かれさうに思はれてなりませんでした、私はKに大學へはいりたいことを話して貴方に御相談していたゞけないものでせうかとお願ひしました、Kはその時「君はお大盡の息子のやうに勉强をしたがつてゐる」と申されました、しかし、私としては決してそんな浮薄な氣持からではありませんでした、(もつと明白に云へば、己はお大盡の息子のごとく勉强する資格があるのだ、と云ひたかつたのだ)貧、極度の貧によつて自分の生れながらの素質がすなほにのびることを知らないで、あまりに鋭く反抗的になつてゆく傷ましさに、水に溺れるものが一掴の藁にでもつながるやうな氣持で私はゐたに過ぎませんでした、それでも私は考へなほしました、他人の助力を請ふことはむろん男子として感心はしられない、殊に私のやうな性格、私のやうな仕事に生きようとするものがあまりに輕卒すぎる考であつたと思ひなほして私は幾分金をとるために新聞社に雇はれました、私のそのときの境遇は私が幾分でも金をとらなくてはやつてゆけないやうに、それ程切迫してをりました、もつと具體的に言ひますならば、母が東京よりかへるとき用意して來た多少の金も全部なくなり、母一人の手では人間二人の生活してゆけなくなつてをりました、私は新しい勇氣に燃えて働き、又勉强をいたしました、しかし、私は馬鹿です、じつと落付いて靜かにやつてゆくことを知りません、勞働を旺んにやるやうに勉强も旺んにやらうとしました、そしてそれが長くつゞかない主な理由でした、私はそれから貴方に失禮を犯して手紙を書きました、その時は私の心の中に二つのものが戰つてゐました、一つは貴方に事情を打ちあけて助力をお希ひすることでした、一つは決してそんなことをしてはならぬお前は男ではないか、飯がなかつたら喰はずに死んでしまへ、と云ふ心でした、路々、あの貴方の邸へゆく道のT川の長い橋を渡りつゝ私は心中で惱みつゞけてゐましたが、貴方のお宅の前にきたとき、不思議にも後者が力を得て、私は急に自分を天上天下に唯一人のえらばれたる者、と云ふやうな氣持になつてしまひました、恐らく貴方は堅く一生懸命になつてしまつた私を多少ユーモラスに考へなすつたことでせう、それでも私はどうにか貴方に事情をうちあけて助けをこふことの誘惑に打ち克つて家へかへることができました、しかし、家へかへれば

依然として母はひどく苦しがつて私を責めます、私も苦しくてなりません、貴方には想像もできないやうな苦しみなのです、それでも十一月一杯は英語の勉強をいたしました、私の肉體は衰へ、氣力もだん〳〵萎けてゆきます、そして何處から金のはいるあてもないのです、この苦しみは實に實に人間の生命を短くするものです、私がこの苦しみに堪えて平然英語の勉強をやつた一つの理由は丁度そのときある一流の雜誌に小説の募集がありました、恥ずかしい話ですが、私はそれに應募して幾分の金を得やうと考へました「他人の助をこふよりはいゝ」と私は思ひました、七十枚ばかりの私の作は六百ばかりの應募總數のうちの十篇の豫選に入りましたが、當選はしませんでした、私は失望と云ふよりも、もつとひどい、どうしてよいか分らなくなりました、當選した他の人の作をよんでみますと書いてゐる內容、表現しようとしてゐる實質そのものは實につまらないものですが、その表現の仕方は至極落付いたものです、私は自分の作の一本調子な力はあるがいらいらしたさまを反省しました。

「あゝ、もつと落付いて勉強したい！」叫ぶ言葉はかうであります、勉強するにも金はないのです、そしてあまりにひどく金がなさすぎるのです働いて金をとらうと云ふ元氣さへ出ないのです、どうしてよいか分らなくなりました、もう進退こゝにきはまつてゐます、あゝ勉強したい、適度の勉強と適度の運動はどんなにこの私を健全に生長さすことでせう、それが出來ないのです、いろ〳〵充溢してくる創作欲、その創作さへする元氣が貧乏は奪つてしまひました、私はこのまゝ滅ぶべきでせうか、あゝ、滅びたくない、滅びたくない、現在の私になし得ることは唯一つの自殺のみです、自殺してたまるものですか！生きたい、生きたい、しかも私はどうにも出來ないのです、手も足もでないのです、私は今では大學などとそんなことを思つてゐません、私は每日の飯さへ喰へればそれで充分だと思ひます、私は東京へゆきたいのです、もう此地には學ぶべき人もなく讀むべき書物も多くありません、――樣よ、私も、もう來年は十九歲です、十九歲の青年です。あゝこのむらがる勉強慾を充たしたいのです、東京へゆけば多くの人がゐます、又圖書館があります、しかも私は金がないばかりにこのまゝ、この貧里に朽ちて

死ぬべきでせうか、そんな私の生涯でせうか、「東京へゆきたければお前一人で勝手にゆくがよい」と仰るかも知れませんが、私にはそれが出來ないのです、私は勉强にゆきたいのです、むろんどんな勞働でもしたらこの自分一人生活できないことはないでせうが、しかしそれでは萬事は休するのです、私は十七のとき上京して、そしてひどい目にあつてきたのです。

——樣よ、どうか、ようく考へてみて下さい、私は意氣地なしです、私は新井白石の前には頭の上がらない人間でせう、しかし、私はそれでもかまひません、私は後世に何とかいつて輕しめられるかも知れません、しかし、それでもいゝのです、今むざむざと貧乏にこの生命をけづりとられて死ぬよりもましです、今この大事な自分の芽を枯らしてしまつては大變です。

——樣よ、月に十圓の金がこの意氣地ない男を救ふことができるのです、あゝ、吾れながら安い男です、月十圓に苦しみもだえてゐる私であります、私のさまざまな夢はこゝに消えてしまひました、私は自分の思つてゐた偉大な男でもなんでもないのでした、私はこれから築き直すべきでした、私は今極めて謙遜な平安な氣もちで貴方にお願ひいたします、この不甲斐ない私に月に十圓（その頃は未だ米は安かつたのだ。）だけ助けていたゞけませんか、十圓あれば、

米代（一斗二升足らず）三圓　室代（東京にて三疊もしくば四疊半）三圓　炭薪一圓　副食物二圓　其他一圓

と云ふ風に一人の男が喰ふだけのことは出來るのです、あゝ、喰ふだけのことがそれがたとへ一年でも半年でも三月でもいゝ、保證されたなら私はどんなに幸福でせう、それだけでも私は働く元氣がでるでせう、おかしい話ですが、今の狀態では働いて金をとる氣さへしないのです、あゝ、もしこの事が實現されたなら私は規則的な生活をすることができるのです、一人で自炊するのです、あゝ、一人で暮したらどんなに私は幸福でせう、私は東京へいつてどこかお寺の一室などを借りてつゝましくくらします、そして圖書館にゆき、又全日本のあらゆる方面の精髓に接し、又創作もするでせう、そうした生活を二

年、一年、半年でもつゞけたら、私はきつと生れ變つたやうな人間になるでせう、もつとすなほな人間らしい所もできてくるでせう、あゝ、一切はそれからです、今のまゝでは私は滅びるのみです。

――様よ、どれほど金のある方でも十圓と纏つた金をすてるやうな工合に出すことは決していゝと易いことでないことを私は知つてをります、私が、もし商人にでもなる資本をお借りするのですなら幾日の後何日にお返却すると申しあげることができるでせうが、何を云ふても金に緣の遠い惡くすると一生かゝつても認められずに死ぬかも知れないやうな仕事をやらうと云ふ自分のこと故、もしお借りしても何日必ず返すと云ふことは云へないのを悲しく思ひます、しかし、約半年の間このことについて惱みつゞけて今やうやくほんとうな心持になつて申し上げることの出來得た私です、恐らく、私は一生の間このことについて重い責任を感じるでせう、そしてこの責任感は私をして眞面目ならしめ、よい藝術を作るべく努力せしめることでせう、私は死んではならない、私は勉强がしたい、そしてそれには月十圓までの金が今どうしてもいるのです、どうかしていたゞけないものでせうか、八圓位でもやつてゆけるかも知れません、一年でも半年でもいゝのです、三月でもよいのです、でないと私はけづりとられて死んでしまひます、あゝ、ほんとうに三月でもいゝのです、その間にこのいぢけた私の內部の力がふきかへしてくることを信じます、私はかうした手紙を書くことを屈辱だと思つてゐました、しかし今は屈辱以上に超越する程に切迫してをります、尙これはつきりしたことは申されませぬがもしこの私の願がかなへさせていたゞけますならば私は今年の暮、もしくば來年のはじめに一大長篇を書かずにはゐられないだらうと思ひます、さうすれば、幾分お返し出來るかも知れません、しかし今は言葉通りに一文なしになつてゐるのです、書きたくともペンをとる元氣さへできません。

　どうぞ御返事下さい、もし御都合が惡るいか、又は私にそれだけの信任がございませぬようですなら、どうかはつきりと「それはできぬ」と仰つて下さい、恐らく私は失望するでせう、七日あまりも飯もくへないで寢てゐることでせう、さてそれからどうなるかは自分にも今の處分りません、今は唯この手紙

一つに希望をつないでをります、どうぞお願ひいたします、何んだか今年も未だ私には苦しい「試練」の年とみえます。

未だ未だ書きたりないことを今よみ返しても思ひます、私がどんな氣持で又私がこれを書くまでの苦しい複雑な心の戰ひは實に實に書けば一大長篇です、私はこの手紙を直ぐに出します、さうしないと、きつと私はこの手紙を裂いてしもふに相違ありませんから、そして、この手紙を裂いてしまつたあとの私は何うしてよいかさつぱり分らなくなる自分ですから、私は自分の思つてゐたやうにえらい人間ではないのです、いはゞ社會の不具者です、しかし、さういつてあきらめられぬあきらめてはならぬ、氣持が又この手紙を書かせてゐます、もし月に十圓か八圓だけづゝこゝしばらくの間お貸し下されば私は直ぐにも上京して根本から勉强をし直します、こんな木つ葉天狗の田舍天才に滿足してをられませんのです、どうぞ願ひます、私がこんなに一心な氣持で他人に願つたのは生れてはじめてです、私も貧乏なればこそこんな一生懸命な氣にもなれるのでせう。

私は直接貴方にお逢ひしますとこの手紙の三分の一も申し得ないことを知つてゐる故に、手紙にしました、しかし今は又お逢ひしたい氣もします、貴方が一目私を見なすつたら私を了解なさるでせう、——

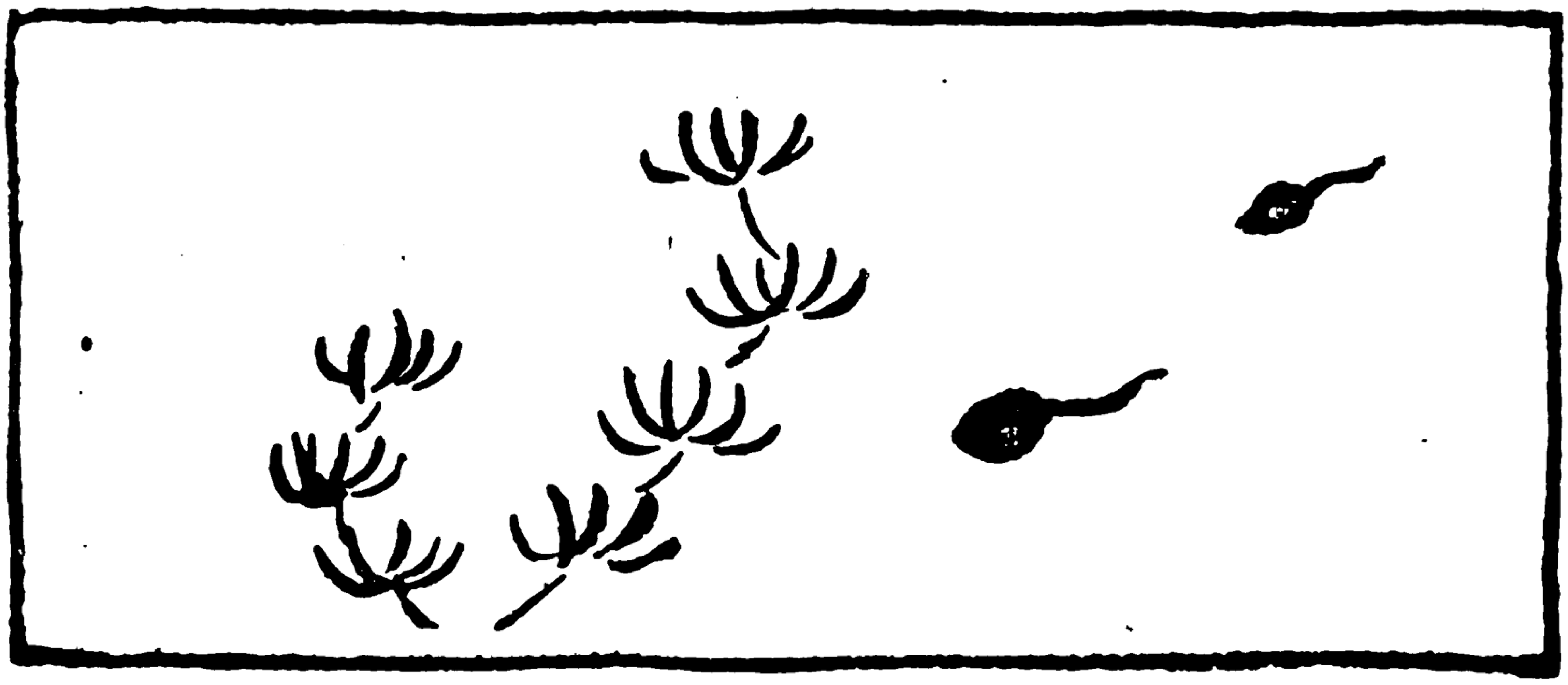
A君。

君は君自身の手紙とあまり似てゐるので苦笑してゐるかもしれない。しかし、かうした手紙を眞劍になつて書いた時が幾度となく自分にあつたのだ。恐らくこの後もあるだらう。これを書いたのは自分の十八の暮れのことだからさう遠いことではない。が、自分はいつも苦しいので、書くことは書いたが出さなかつた。事實に於て明日の米が無い時であつたが出させないある力が自分にめぐまれてゐた。出さないでよかつたのだ。自分は出さなかつたために、よけいな屈辱からまぬかれることが出來（出しても自分の望むどほり助けられはしなかつたに相違ない）たのだ。自分は、今もたびたびかうした手紙を書

き、こうした手紙を出したい誘惑にうたれる。たとへば、二十代のうちに自分は世界各國を一とほり廻つて勉強して來てをきたい宿望が高まつて來るとき、手近な二三の富豪や知人にむかつてこうした手紙を書かうかと考へる。しかしその度に自分はこの手紙のことを思ひ出し、自分に眞實な一念と、それにかなふ正しき努力とさへあれば、時がくれば必ずその願はかなへられるものだ、との信念がそれをおさへつけてしまうのである。實際、また、現在の日本は、たとへ自分が無學であらうとも、年少であらうとも、そのまゝ見すてゝ立去るわけにはゆかないやうな狀態にある。もちろん自分が日本にゐてもゐなくとも、ゆくべきものはゆき、來るべきものは來るであらう。しかし、眞にゆくべきものはゆくをみとどけ、來るべきものゝ來るをみきわめると云ふことは、かゝる人間の一人でもゐると云ふことは、言設以外に於て心强いことではなからうか。そしてかゝる人間がゐないと云ふことはずゐ分と心細い淋しいことではなからうか。——自分が今日本にゐなくてはならないのは、今日本に必要であるからであらう。もう少し時が來たとき、自分の海外留學視察の望みも自然に必然にかなへられることを、信じ、祈りつゝ、輕はづみをつゝしむでゐるのである。これは自分一人のよく云へば信念であり惡く云へば妄想であるから、他人に强ひる道ではない。分つてくれる人は分つてくれ、分つてくれない人は分つてくれないことゝ思ふ。

自分はもう一つ自白すれば、君のために、君の手紙を携へてある知り合ひの人に賴んでみようかとも考へたのだが、それも止めた。そんなことは喜劇の上に更に喜劇を加へることでしかない。要するに輕擧妄動である。たとへ、一人の君の急場を救ひ得ても、第二の君、第三の君、全日本の君、全世界の君をどうするか。自分は力をつくすならむしろ全日本の君、全世界の君が一どきに救はれる道をえらびたい。A君、もうしばらくの辛抱である。我慢してくれたまへ、辛抱してくれたまへ。今の自分の無力をゆるしてくれたまへ。もしいよ〳〵食ふものがなくなつたら、自分の宿へいらつしやい。自分の母は君一人の面倒位は見るでせう。さうなれば、自分にも何とか出來よう。今の世には、大學は各地に壯大

な建築と教師の多きをほこつてゐるけれど、吾等の學ぶべき大學は一つもないのだ。今の世にはいろいろの貸費制度や慈善事業はあつても、要するに乞食と家の子郎黨の養成機關でしかなく、眞實の生活者一人を助ける機關はないのだ。A君、いつまでこのまゝですむものではない。自分は無力でも、この自分の眼玉の黒いうちに、むざ〳〵有爲の我兄弟を見殺しにしたくなく、しないつもりである。吾々に力がついてくるのももうしばらくのことだと自分には考へられる、組織や團結の必要も身にしみて感じられてゐる。あゝ、かゝる時に普く(只忍ぶのではない)忍ぶものは貴む可き哉だ。よく忍ぶものはよく勝つことが出來、最もよく忍ぶものは最もよく伸びることが出來よう。いかなる伸び方をするかは吾々相互の胸に問ふよりほかはない。實は「地上」創作中のわづかな暇を見つけての走り書きだ。意に充たないところはゆるしてくれたまへ、お大切に。(一九一九、九、五)



二つの微笑

近藤經一

齊の景公の宮殿の奥深い一間では、今しも重大な秘密會議が開かれて居る。正面の席に着いた景公を始め、その左右に居並らぶ十數人の大官連の顔には、數時間の思考、議論につかれて既に幾分困却と疲勞との跡さへ表はれて居る。そして皆が互に誰か上手い計略を思ひ付いてはくれないものかと待つて居る。いや、必ずしも上手い計略でなくてもいい、とにかく何かものを云つて此の苦しい沈默を破つてくれないものかと待つて居る、待つて居る所ではない祈つて居る——何故なら、此の時には、もう景公の顔には單に困却の色だけではなくて、例の「かんしやくの破裂」の前に現はれる青い筋が見え出して居たからである。然し、誰一人として、口を開く者はない、皆默然として座つて居る。四邊にも何の物音もしない、たゞ時々初春の夜の深い闇を通じて、奥庭の彼方の大きな森から夜烏の鋭い鳴聲が聞えて來る、そして返つてそれが一層此の一座の「沈默」といふ事をそこに居る人々の頭に露骨に感じさせる。

そもそも此の秘密會議の目的とする所は外でもない、かの近時急にその國力が充實して非常な發展をして來た隣國の魯に對しての齊の外交方針を定め、併せてその隣國の發展を妨ぐ方法を合議案出しやうとするにあつたのである。

萬事につけて比較的に聰明な景公は、かの魯の定公が、その手腕や人格を知

つてか、知らないでか、とにかく微々たる一賤役にあつた丘といふ男を一躍中都宰の役に任じた時、既に人知れずまゆをひそめたのであつた、が彼はその時『よし彼の男が評判に聞いて居るに勝つた男であるとした所で中都宰位の役で何が出來るものか』と思つて自ら安むじようとしたのであつた。

然るに、それから漸く一年とはたゝない中に魯の國中の中都宰は總てその政治のやり方を孔子に眞似た。魯の地方政治は古今にない程立派なものになり、人民は幸福に、力强くなつて來た。後二年ならずして孔子は終に司寇の役にのぼり、つゞいて大司寇に任ぜられて、いよ〳〵魯の中央政府にその偉大な力をふるう様になつた。

景公は驚いた。驚いたといふよりも恐れた、そして今更の様に曾て自分がその丘といふ男を用ひようとした時、晏嬰といふものゝすゝめによつて、馬鹿々々しくもその決心を中止した事を悔ひた。が彼はまだ「たか」をくくつて居た。「何あに、いくら偉い男だからと云つて、どうしてあの生れ着き怠惰で臆病な魯の國民をどうする事が出來るものか、殊にあの馬鹿者の定公の生きて居る間は何を恐るる事があらう」そして彼がかふいふ風に思つたといふ事は、實を云へば無理もない事であつた。何故なら、その時分までもうづつと永い間魯の國運の衰え方は非常なもので、常に齊の壓迫の下に、勝手な事をされ通して居た。孔子が中都宰になる三四年前に魯は横暴な齊の兵の爲めに、その國の一地方を占領されて、しかもそれをも默つて忍ばなければならない様な事さえあつた。世の人々は「遠からずして魯は齊に併されてしまうであらう」と云つた。景公が、内心孔子を恐れながらも、なほ飽くまで魯を無視して居たのは彼としては理由があつたのである。

然し、此の彼の所謂『理由』は事實に於て理由とはならなかつた。彼のくくつて居た『たか』はたかとして終らなかつた。彼が『まさか』と思つて居た事が、彼が、否人々が誰しも思ひもよらなかつた程の短日月の中に事實となつて現はれて來た。一度孔子が大司の役についてからといふものは、かの一度は衰亡に傾きかゝつた魯の國勢は日に日に恢復されて來た。そして一年とはたたない中に再び數十年以前の如

き強大なる國力を中に蔵する様になつた。

人々は驚いた。それよりも景公は驚いた。彼は又繰り返し、繰り返して幾千回となく孔子を用ひなかつた事を悔ひた、そして終には幾度か心の中に人知れず恐ろしい決心をさゑするやうになつた、然し彼には何故かその決心をいざ實行する勇氣はなかつた。聰明なる彼は流石に孔子の貴さを感じたのであつた。

景公は困つた。どうしていいか分らないで黙つて居た。その時夏齊の太夫黎鉏といふ者が來て彼に一策を奉つた。その策といふのは一その事魯が未だ全く國力を恢復しない中に多少の利を喰はせて自國の味方につけてしまつた方が齊の爲めに安全でもあり利益であるといふ事だつた。困りぬいて居た彼はたちまち此の「妙策」に手を打つて賛同した。そして彼は早速急使を走せて兩國の國境にある夾谷どいふ所で會見したいと定公の所に云つてやつた。會見の用向きは「兩國の末長い親善のため」といふ名前であつた。その使を受けとつた定公は直ぐに孔子にはかつて面會承諾の旨を答えた。

夾谷に於ての會見の日は來た。景公はどうかしてその一度の會見で定公を、そしてあはよくば孔子を威服しきつてやらうといふ野心を中に抱きながら、そして内心その自分の野心の完成される事を豫期しながら車上意氣揚々として會見の場所へと向つた。

所が不幸に、今度も彼の此の豫期は見事に裏切られた。當の定公に對しては、彼は彼が豫想 て居た通り段違いの優越を感じ、若し彼が一人で居たならば恐らくは彼が夢想して居たであらう通りの壓迫を與へる事が出來たであつたらう、けれども、その當の定公の側には「彼」が居た。そしてその「彼」から彼は、あたかも彼自身が定公に對して爲し得た如き態度をもつてあしらはれて居る事、そしてその中なる力の差は彼と定公との間に於けるそれよりも數倍、數十倍、否數百倍も大きいといふ事を彼は如何に否認しやうとしても露骨に感ぜさせられずには居られなかつた。彼が頭腦をしぼつてのべる數千百語の外交的言辭、演說は、その人の或るひは鋭く短き一言、或るひは温やかなる一笑の前に力なきもの、效果

なきものとなつて葬られて行つた。彼は驚き、失望し、怒つた、が最後には終にその人の前に頭を下げた。斯くして彼が敵を壓迫しようと思つてたくらんだ此の會合の結果は、全然反對の實を彼にもたらした。彼は衷心より魯を恐れ、どうしてでも魯の好意をとりとめておかなくては自分の國が危いと思つた。そして彼はその會合に際しての引手物といふ様な意味で、先に魯より奪つた鄆、讙、龜陰、汶陽などの諸地を定公に送つたのであつた。

所が彼がよかれかしと思つて爲した此の處置は亦實は彼及び齊の國の位置を一層危くするものに過ぎなかつた。何故とならば、此の會合の一什始終及びその結果が魯の國に傳へられた時、魯の國民は老若男女を問はず皆一齊に孔子をもつて彼等が祖國再興の恩人と爲した。孔子の魯に於ての名聲は朝日の如き勢と、光とをもつて來た。定公も今更の様に、一段と深く彼を信じ切る様になつた。如何なる事に關した事とは云へ孔子の言は一つとして用ひられないといふ事はなくなつた。そうなると同時に又若き孔子は孔子で『今こそ俺の時が來た』といふ自信と意氣とをもつて、その偉大なる力の全部をあげて魯の爲めにつくし、働く様になつたからである。

彼は定公から太夫の役に任じ、國家最高の權力をさづけられると、その三日目にかねてそれが魯の國を横領しようといふ野心のある事を見ぬいて居た所の少正卯といふものを誅した。それから又孟氏といふ權臣が理由なくして己れのものとして居た成城の地を奪ひとつた。それから續いては自分の弟子の子路といふ男を、當時魯の國に於て最も大なる富と權力とを有して居た季氏といふものゝ執事にして、徐々にその根深く喰ひ込むだ惡勢力を奪ふ様にした。かくて段々國家の實力が增加するにつれて彼は總ての税を輕くし、刑罰を正し、萬事の規律、規則を公平なものとし、民意を納れ、人物登用の道を開く等總ての點に於て、その頃には未だ曾て見られなかつた善政をしいた、その結果は著はだつた。即ち彼がかくして政をとる事三ケ月にして魯の國を害して居た總ての弊害はのぞかれ、人民は泰平を唱え、四方の國がやゝともすれば皆魯になびく様な有様になつたのである。

かの夾谷の會合以來一刻もその心を離れる事のなかつた景公の不安は、此處に到つて終に堪へられないものとなつた。「このまゝの狀態で、もう一年、二年とつゞいたなら、それこそ齊は魯の屬國にならなければならない樣な事になるかも知れない。どうかしなければ……」斯くして、今彼の宮殿の一室には重大な祕密會議が開かれたのである。

「あゝ、わしは實にあの男を用ひなかつた事を後悔するばかりだ」他人に殊に臣下のものに弱味を見せる事の大嫌いな景公が終に始めて人の居る前で此の心中の本音をはいて長い間の重苦しい沈默を破つた。然し、もとより誰も此の言葉につゞいて云ふべき言葉をもつてゐる者はない。皆は何物かを恐れる樣に一樣におづつと下をむいて默つて居る。一坐の空氣は益々重苦しくなつてゆく、もうどうにも動きがとれそもない。皆が皆變にしあちこばつた樣になつて、口の中がかはいて緊張して、そのくせだれて、云ひ得るなら、そのまゝでもう二三分もすてゝおかれたら一同があめの化石の樣にでもなりそうな風に見えた。とその時その一坐の總ての人を救ふための樣に一つの聲が響いた。人々は景公までも、夏の眞盛りの眞晝間人や草木が雨を得た時の樣な喜びをもつて一齊にその聲の起つた方を向いた。

「今更、何と申した所で、もう取り返しのつかない事でございます。で、今となつてはあの孔子と云ふ男を魯の國から追ひ出してしまうより仕方がございません」落ち付いた調子でそう云つた聲の主は一番末席にひかえて居た犁鉏といふ者であつた。

皆は喜むだ。といふのは此の犁鉏といふ男は普段から極く口數の少い男なのだが、それで居て變に智謀には長けた人間で、一度何か提案をすると、それが何時も非常な妙計の事が多い、その男が今夜はまだ――その時その一座の人々は今彼が言葉を出したので始めてその事に氣がついたのだが――一度ものを云はなかつたのに、長い沈默の後――その間彼は恐らくいろ〳〵の事を彼一流の頭で考へて居たのだろうと人々は思つた――の今となつて口を切つたのだから、きつと何等かの妙案があみだされたのだろう、從つて此の長たらしくて、もう「あき〳〵」した、その上眠い所をおこされて居るやつかいな會議

も結末がつくだらうと思つたのである。

「孔子を魯から追ひ出す?」と一人だけ例外の景公が本當に犂鉏の言葉に興味と注意とをもつて、やゝせき込むだ高い調子で云つた。

「はい」

「ふむ。勿論さういふ事が出來る事なら、それにこした事はない。然し、いくら魯の奴等が馬鹿だからと云つても今となつてあの男を追ひ出すといふ事は一寸考へられないからな」景公の言葉には多少輕蔑の調子さへある「それともお前に何かいゝ考でもあるのか」

「はい。何もさういふ事をする方法がないならば私はそんな事をした方がいゝなどとは申しますまい」

犂鉏は彼一流の皮肉な調子でさう答へた。景公はこの言葉をきいて一寸むつとしたが急に此の前奏との事件に困りぬいた時、彼の提案で上手くたすかつた時の事を思ひ出して強いて胸をなで下して彼の言葉を待つた。

「私の考へます所では」と犂鉏も流石に今自分の云つた言葉を回想して少し言葉を謹しみながらさう云つた成程、貴郎のおつしやる様に、魯の國の方から孔子を追ひ出させる事は出來ない事だと存じます。けれども反對に孔子の方から魯を捨てさせる様にしむける事は穴勝ち不可能な事でもないかと思ふので御座います」

「ふむ、成る程」犂鉏の雄辯に引き込まれながら景公が云つた。一座のものも果して彼の口から如何なる計が出て來るかといふ好氣心にもえながら段々と本當の意味で緊張して來ながら彼の方を注視しだした。

「御承知の通り、あの孔子といふ男は理想にあこがれて居る人間でございます。あこがれるといふよりも、どつちかと申せばむしろそれに害せられて居ると云つてもいゝ人間でございます。彼には總て如何に一寸した事でも彼の所謂道に外れた事は默過することが出來ないのでございます。自分が理想と思ふ

様な君の下、自分が理想と思ふ様な國にはつかえます、が少しでもその國なり、君なりに對して不滿な所があると、もうそこにぢつとはして居られない人間なのでございます」
「うむ」
「此處でございます、ここが此方のつけ入るべき大事な所でございます。」
「うむ」
「現在の所、孔子はあの定公の下で殆んど絶對の權力をもつて、魯のあらゆる國政を自分の思ふ通りにやつて居ります。從つて彼にとつては定公は卽ち彼の理想の君であり、魯は彼の理想の國である、少くともそうする事が出來るといふ希望があるのです」
「うむ」
「所が今此處にある策略を用ひて、あの愚物の定公に、孔子がそういふ人間の下には居るに堪えられない様な事をさせれば、それで萬事は終りです、あの理想家の、腹の小さい男は直ぐにも魯を捨てて他に去るだらうと存じます」
「妙案だ」と終に喜びに破れて、手をうちながら景公が叫ぶ様に云つた「そしてその策略といふのは？」
「簡單でございます」むつつりとしながら犁鉏が云つた「定公といふ人は人並はづれた好色漢だといふ事でございます」
「ふむ」
「で、私の考えます所では、今此の齊の國中から幾人かの美しい女を選むで、それを定公の所に送つてやつたならば定公は必ずそれらの女の美に魂を奪はれて、今日孔子の命ずるまゝに勵むで居る政事の方をおろそかにするだらうと思ひます」
「うむ」
「そうなればもう占めたもので我が事なれりでございます」

「うむ、實に妙案だ」
「今日となつては、もうかゝる手段をとるより他に我が國をあの魯の壓迫よりのがれしむる道はないと信じます」
「そうだ、それより、他に道は無い。早速此の策計を實行して見よう」
斯くして直ちに廣大な齊の國中幾千萬の女といふ女の中から、處女であらうと、人妻であらうとの區別なく總て美人といふ美人は召し出され、その又中から選りに選つた八十人の美女が景公の御殿に集められた。
萬事の用意が整えられた。
四月のうらゝかに晴れた或る朝、宮廷付きの織工、染工、奏工が手をつくして各々の美人の容姿に似合ふ樣に作つた錦の晴着をまとひ、各々四頭のたくましい白馬にひかれた三十輛の馬車に乘つた八十人の美女は景公の御殿の庭に集つた。その光景を見た男といふ男は、その女等の美に醉はされた。當の景公さえも、それだけの美人を、自國の一流の美人を、あの愚物の定公の妾として送つてしもう事を今更の樣におしく思はずには居られない程だつた。で、彼はかゝる美女の隊が過ぎゆく道々の人民の間から或は起るであらう所の非難――そういふ「おしい」事をする事に對して起る非難をさけるために突然その朝の出發を延期させて、二三日後のある夜、ひそかにその美人隊を出發させるといふだけの用心をしたのであつた。
とにかく、かくして此の八十人の優れた美人は一度それを見た總ての人々におしまれながら國境をはなれて魯の都にと向つた。
此の恐ろしく豊麗な一隊が魯の都の郊外に着いて、附き添ひの役人が景公からの書面を奉つて、その

美人の受納を請願した時、定公は喜むだ。直ぐにも承知しようかと思つた。然し彼は考へなほした。迷つた。そして早速孔子以下の諸太夫を集めて美人受納の可否に就ての意見を問ふた。

人々の意見は二つに分れた。議論はやかましかつた。孔子は勿論「受けない方がいい」といふ方の意見だつた、が既に可なり己れをたのむ事の固くなつて居た、そして定公のそういふ方面の事については餘り深か入りする事をさけて居た孔子は、そうムキになつて意見をのべようとはせず、むしろ多く默つて人々の議論をきいて居た。——が、この孔子が默つて居たといふ事は定公には有難かつた。彼は實は、もしも孔子に强硬に反對されたらどうしようかと思つて居たのだつた。いやそれ所か彼がその事を自分一個の考できめかねたのも實は孔子の思惑をはゞかつての事だつたのである。その孔子が別に强いて反對はしない。定公は『助つた』と思つた。で彼は季氏といふ者に命じて先づその美人隊の下見をさせ、そして、それが『受納すべき價のあるものか否か』をしらべさせる事にした。孔子は何にも云はなかつた。彼はその時既に定公の顔に、いやしい、荒むだ慾望と、それに伴ふ特殊の喜びと、力とが漲つて來て居るのを感じた。が彼は己れをたのむだ。「何にいざとなれば……」彼の心の中の何物かゞ彼にへつらう様にそうさゝやいて居た。彼は一方それを恐れた。然し自分にもそれをどうともする事は出來なかつた。彼はその日不安な寂しい氣持になりながら家に歸つた。そして自分が割に久しく「天に祈らなかつた事」を、「何時の間にか自分の中に或る高慢さが頭をもちあげかけて居る事」を感じた。彼は悲しく思つた。そしてその夜おそくまで一人天に祈りを捧げるべく一人きりで居た。

翌日の朝、季氏は郊外に美人の隊を見た。その美人の美が此の凡人の眼をくらませた事は言葉を費やす必要がない。彼は御殿にかえつて定公に此の「古今に絶した勝景」を定公にも是非見られる必要がある事を傳へた。定公の中なる火は焰えた。

翌日彼は政事を捨てゝ季氏を始め多くの臣下を連れて南門の外に美人を見た。翌日も、又その翌日も

もう彼の前には總てはなくなつた。八十人の美人は迎へられて定公の後宮に入つた。

斯くして犁鉏の謀の第一歩は完成したのである。

それから十數日を經た或る日の夕方、役所を退いた孔子が一人きりで自分の家の一室に默然と坐つて居ると、そこへ一ヶ月も以前に公用で遠く北方に旅して居た子路が突然案内もなく入つて來た。

「おゝ、子路か」と孔子はなつかしそうに子路を顧みながら云つた「御苦勞だつたな」

此の孔子の言葉をきゝ、この孔子の態度を見た時、今の今まで會つたらいきなりなぢり正そうと決心して居た子路の決心はにぶつた。そしてやはりなつかしそうに孔子を見ながら立ち止つた。

「お前はわしに何か不服があつてそれを云はうと思つて來たのだな」と孔子がやがて口を切つた「不平があるなら遠慮なく云ふがいゝ」

そう云はれると子路は反つてます／＼自分の云はうとして居た事が云ひにくゝなつた。けれども終に彼一流の勇氣を奮ひ起してから云つた。

「私は今日の今日まで少しも存じませんでしたが、先程きゝますとあの齊の國から多くの美人が我が君の所に送つてまゐつたといふ事でございますが、それは眞實でございますか」

「むう。眞實だ」

「そして、我が君には、その美人を見られるために三日も政事を休むで郊外に出かけられたといふ事も眞實でございますか」

「眞實だ」

「おゝそれではその美人共が終に我が君の後宮に入り、それ以來といふもの我が君がその女共にうつゝをぬかされて朝廷へは少しも出御にならないといふ事も眞實なのでございますか」

「眞實だ、子路！」

「先生!」と子路が眼を輝かせながら云つた
「私共は、そんな、そんな君の下に默つてつかえて居なければならないのでございますか。そんな君の下につかえて居ていゝのでございますか」
「いゝ事はない」
「では先生はなぜ默つてかうしてゐらつしあるのでございます!」そう云つて子路は、せめる樣な悲しむ樣な眼をしておぢつと師の顏を見た。重い沈默がつゞいた。子路は思はず襟を正して坐つた。孔子はつゞける
「お前は、わしが今此の國に居たいと思つてかうして居ると思ふのか。定公の心は迷ひ亂れた。そしてわしにはそれを再びもとにもどすだけの力はない。わしは悲しい、寂しい、然し仕方がない。わしは此處を去りたいのだ。――むゝ!、然し子路、わしは今は此處を去る事は出來ない」
「それは、それは又どうしてでございますか」のがさじものと子路が追及した。孔子の顏には暗い雲がおほひかゝつた。彼の唇は開かむとして開かれず。しばらくの間小きざみにふるえて居た、が少時くして終に少し思ひ切つた樣にかう云つた。
「今、わしが魯を去るとしたならば、わしはその口實として何と云つたらいゝのか……」然し、子路には師の此の言葉の意味は分らなかつた。で彼は默つて師の顏を見た。孔子の顏には再び暗い雲が走つた。然し彼は直ぐに平常の樣な調子にかえつてかう云つた。
「まあ待て子路!その中に時が來るであらう。與えられた時の來るまでは待たなければならない」
「妥協だ。妥協だ、卑怯な、弱い妥協だ」そう思つて子路は何となく師に對してうとましさをさえ感じた。然し彼はもうそれ以上師につつかかつてゆく程禮を知らない人間ではなかつた。と同時に又彼の心中には一方「やはり先生の心の中には我々には分らない樣な深い考があるのだ」といふ氣もして居た。で彼は多少不滿そうな風ではあつたが、そのまゝ默つて師の前を下つた。

孔子の心が分らなかつたのは、然し單に子路のみではなかつた。景公を始めとしてかの齊の人々は自分達の思惑が見事外れて、美人は受け入れられながらもなほ孔子が平然として魯に居るのを見てすつかり失望した。犁鉏の如きは四方からの攻撃非難に堪えられないで何處かに姿をかくしてしまつた。

齊にかゝる事が起ると同時に一方世間には今度の此事件によつて孔子に對しての非難の聲が起つた。「あいつは普段潔白そうな事ばかり云つて居たくせ、いざといふ場合になつてみると名利に執着し己れの說いた道を實行する事の出來ない奴だ」此の叫びは始めまづ各國にあつた孔子の敵の口から出で、ついでは今までの孔子の尊敬者の口から出で、終には何も關係のない者まで「孔子といふ人間は大食はせものだつた」といふ樣な事を云ふ樣になつた。

親しく師に接して居る少數の弟子達は怒つた。然し孔子は此の事については一言も云はなかつた。それればかりか彼の弟子達にも此の事については一言も辯解がましい言葉を發する事を禁ぜられた。それでは弟子達の中にさえも孔子の心事を疑つて逃亡する樣なものさえ出て來る樣になつた。そういふ事が起るたびに孔子は今更の樣に「優れたものの淋しさ」を味はつた。然し彼はぢつとこらえて何事も云はなかつた。

終にその年の秋は終つて、冬の至る日が來た。と同時に孔子が心中私かに待ちに待つた時が來たのであつた。

冬至の日には魯では南の郊外で天の神を祭る莊厳なる儀式が行はれた。そしてその祭壇への供え物は式が終つた後で必ず總ての太夫の所に分配さるべきが古今の禮であつた。

所が、その年のその儀式の終えた後、何故であつたか、恐らく役人の一寸した手落ちか何かの爲めに

その祭の供物の分配が丁度孔子の所にのみ廻つて來なかつた。そして、これは孔子にとつては彼の所謂「天の與へた時」となつたのであつた。

此の事を知るや否や、朝にあつた孔子は、冠も、着物もとかずにそのまゝそこから魯の國を去る旅路にのぼつたのである。

先に美女の事件で孔子の心が分らなかつた者に今度の彼の處置が分る譯はなかつた。人々の非難は高まつた。或る者は彼を「本末を知らぬ盲人」と云つた。又或る者は孔子が、先の事件から受けた不評判のために目がくらむで、その不評判をとりかへそうために、そんな事をしたのだとあざけつた。

斯くそしる者、笑ふものの聲を聞いた時、孔子は極く親しい少數の弟子を從えて衛の國をさして落ちゆく旅の車上に、淋しい、然し滿足したらしい、おだやかな微笑をもらした。と同時に孔子が魯を捨てて去つたと云ふ報を得た景公は、周圍をとりまく群臣を顧みて我が事成れりと會心の微笑をもらしたのであつた。

(一九一七、一一、一一……一九一九、八、二八、)

戯曲「砂丘」に題す

いつも定期刊行物にあらはれる創作の主要部を占める短篇小説のほかに、最近また詩と劇とにも注目すべき新作の公にせられるのを見る事は、文壇のために喜ぶべき現象である。散文的傾向を離れた純眞の藝術として誰しも詩歌の盛運を希ふ事の切なのは今更いふ迄もないが、この幾年か劇壇がまた餘りに寂寞を極めてゐた事も、私どもの長い間の憾みであつたからだ。新しく創作に指を染めようとする少壯氣鋭の士が、先づ最も多くの讀者を期待し得べき小説を以て自己表現を試みんとする事は固より快心の業だ。さりながらまた、此さびれ果てた詩壇と劇界とに於ても、ここに淸新の氣を皷吹し生氣を與ふるものを求むれば、それはまた必ずやこれら新人の努力を待たねばならぬ。まだ文壇の評價を經ない未知數たる新進の士に、私たちが多くの期待をもつ所以はここに在る。恁かる意味に於てわたくしは高倉氏の此一篇を雜誌『改造』の主筆に薦めた。作者は數年前學窓を出でて後、なほ深く英露の文學を研究し、かたはら眞摯の熱意を傾けて創作の筆を執れる人だ。この作の如きも、劇的(ドラマティク)境遇(シチユエイシヤン)をつくる可く「偶然」を用ひて未だ到らず、またやゝロマンティック・センティメンタリズムに傾かんとする弊を免れずとするも、なほ其表現の上に飽くまでも頑固に自己を守らんとして十分の苦心をした痕がある事は何よりも賴母しい。初舞臺に立つ débutant の足どりのどこかに、たとひ覺束なさはあらうともあらは見られようとも、飽くまで「詩」と「眞」との間を踏み誤らじとする若々しい努力と熱意とには、人を動かすだけの力がこもる。この力は老巧な圓熟した作家には却つて見られない貴い力ではなからうか。

大正八年九月

厨川白村識



戯曲
砂丘

高倉輝

人物。松井。

のぶ子、(妻)

加世。(友人)

れい子。(松井の元の妻)

吉田。(看護婦)

院長。

時。夏。

所。或る海濱の保養地。

海濱療養院の一室。

上手に扉。病室へ通ず。

下手にも扉。これは廊下へ出るのである。正面に硝子の開き戸。中庭へ降りられる樣になつて居る。中庭に、草花の植つて居るのが見える。

開き戸の兩側に窓。硝子戸が明け放してある。

卓、椅子、安樂椅子、其の他。

波高き日の暮れ方。低い形ばかりの垣根を越して、砂濱が見える。砂丘が連なつて居る。其の向うに、黒い海。海面が白く波立つて居る。波の音高く聞こゆ。

加世、卓で茶を飲み乍ら、新聞を讀んで居る。看護婦吉田、窓の近くに腰を掛けて、何か編み物をして居る。

稻光り。

加世。（ふと顔を擧げて、外を見る。）夕立でも來るのかな。雷も何にも鳴らないが。

吉田。（編み物から眼を離して、空を仰ぐ。）厭やな晩ですね。蒸し／＼と暑くつて。

（加世。復た默つて新聞を讀む。）

（吉田、ぼんやり外を眺めて居る。）

（稍や長き間。）

（ピアノの音聞こゆ。誰かが戯れにふと指を觸れたと言ふやうな音である。直きに已む。）

加世。（顔を擧ぐ。）おや。ピアノ。

吉田。ええ。

加世。此處の内ですか。

吉田。ええ。もう這入つたのでせうか。さつき運んで居ましたが。

加世。好いのですか。病院の中でピアノなど彈いて。

吉田。ええ。あすこだけは、離れて居ますからね。

加世。何處です。こつちでしたね。

吉田。離れの特別室です。

加世。ああ。あの華族の令孃だとか言ふ。

吉田。いいえ。御存知ないのですか。あの方はもうとつくに居られないのですよ。

加世。さうですか。もう退院したのですか。

吉田。いいえ。あなたは此の前はいつお越しになりましたのでしたね。

加世。丁度二十日程前です。

吉田。さうですか。それでは、やつぱりね。あの方が亡くなられたのが、丁度二週間ほど前でした。

加世。亡くなられたのですか。さうですか。可愛らし

い娘さんでしたね。それで、もうあとが來たのですか。

吉田。ええ。

加世。いつ來たのです。

吉田。をととひ。いいえ。先をととひでしたか。

加世。今度もやつぱり女の人ですか。

吉田。いいえ。今度は男の方です。でも、美しい女の方が附き添つてお出でです。もとは女優だつたとか何だとかの。

加世。へえ。それは大變なものですね。何と言ふ女優だつたのです。

吉田。何と言つたのですか、とに角、大變美しい方です。前に一度此處へ來て居られた事が有るのだとか言つて居ました。

加世。さうですか。何です。一體。其の男の人は。

吉田。さあ。何ですか。何でも、東京のお金持なのださうですがね。到底駄目なのでせう。

加世。餘程惡いのですか。

吉田。ええ。總體、此處へ入らつしやる樣になれば、もう大抵は駄目なのですからね。

加世。さうですかね。でも、此の前の松井君のやうなことも有るぢや有りませんか。松井君は先に一度なほつて、歸つて居たのですよ。

吉田。さうださうですね。でも、復た入らしつたでせう。(間。)今度はあの方もね。本當にお氣の毒ですよ。

加世。全く氣の毒です。子供の時分から、松井君には今が仕合せだと言ふ事は一度も無かつたのですからね。

吉田。松井さんもですけれど、奥樣がね。何しろまだあんなにお若いのですからね。

加世。一體、何うなのでせう。松井君はあれで餘程惡くなつて居るのでせうか。

吉田。さあ。でも、近頃急に何うしたと言ふ事は無いのでせう。

加世。でも、何だか樣子が變ぢや有りませんか。此の前私が來た時となら、餘程妙ですよ。何分あの通り興奮して居るのですからね。

吉田。さうですね。確かに興奮はして居られますね。

加世。一體、いつからあんなになつたのですか。

吉田。あれはほんの二三日前からの事ですよ。をととひの晩でしたかね。急にあんな風にお成りになつ

て。

加世。何か原因が有つたのですか。妻君と爭ひでもしたのですか。

吉田。そんな事は有りません。奥様はそれは言ひなり次第にして入らつしやるのですからね。私共、いつも感心して居るのです。

加世。では、やつぱり病氣の所爲なのですかね。

吉田。何うもさうなのでせうね。併し、御心配なさる事は無いのでせう。(間)本當にあなたはお友達思ひで入らつしやいますね。院長さんも、いつもさう言つてお出でですよ。

加世。いや。私なんぞ。

(のぶ子、病室より出づ。そつと音のせぬ様に扉をしめる。)

加世。(病室を指して、尋ねる身振をする。)

のぶ子。(傍へ來ながら)今ちよつと休みましたの。

加世。さうですか。それは好い具合ですね。

のぶ子。(看護婦に)吉田さん。何うぞ。

吉田。さうですか。それでは、今の中に食事だけ濟まして參りませう。

(看護婦、編み物を片づけて、出て行く。)

のぶ子。お歸りはやつぱり九時の汽車でございますの。

加世。ええ。さうしようと思つて居りますが。

のぶ子。では、まだ悠くりですね。本當に好く入らして下さいましたね。松井も何んなにか喜んで居ります。本當に何もかもお世話になつて。

加世。(心苦しげに)いや。そんな事は。

のぶ子。もうお訪ね下さいますのは、本當にあなただけなのでございますからね。それはもう、此處へ參りまして以來、松井の所へは他に手紙一本來は致しませんのですよ。

加世。さうでせうね。何分あの通りの性格だし、それに、もうすつかり世間を離れて了つて居るのですからね。

(間。)

のぶ子。(遠くに、汽船の汽笛の音聞こゆ。)まあ。こんな波の日にも汽船が通ふのでせうか。

加世。さうと見えますね。

のぶ子。私あの汽船と言ふのが嫌いで仕様が無いのですよ。あの汽笛の音を聞いただけで、もう變に氣が滅入つて仕方で有りませんの。こんな天氣の日は、特別にさうなのですけれどもね。その癖、私、自分で汽船に乗りましたのは唯つた一度しか無いのです

よ。松井と三崎へ參りました時でした。そしたら、私大變に醉ひましてね。船が港へ着きましても、からだが綿の様になつて居まして、起き上る力が無いのです。それからと言ふものは、あの汽笛の音を聞きますと、直きにその時の事を思ひ出しましてね。そして、今汽船の中で苦しんで居る人達の事が、丁度私自身のやうな氣持がして仕方が無いのです。

加世。（のぶ子の顏を見て）何うしてです。何うしてそんな風に考へるのです。

のぶ子。私こんな風に考へますの。こんな日ですと、船に乘つて居る人達は、きつと船と一緒に波にもまれ拔くのでせう。そして、迚もこれ以上の苦しみは世の中に無いと言ふ風に考へるのですね。船に醉つた苦しさと言つたら、それは本當に無いのですからね。でも、船はいつか港へ着くのでせう。しかし、もう其の時には、船の人達はすつかり疲れ切つて了まつて、起き上つて船を降りることさへ厭やなのです。そして、もう船が動かなくなつて、自分達の苦しむ種が無くなつたのが、何だか却つて、自分の一番大切なものを亡くした様な、一種の物足りない氣持を感じるのですね。そして、只だ凝つと考へるのですね。「とう／＼船は港へ着いた。港へ着くと言ふ事は、前から分かつて居たのだ」と。

加世。（凝つとのぶ子を見て）あなたは松井君の事を言つて居られるのですね。

のぶ子。（加世を見上げて）加世さん。そんな具合に考へるのは惡い事なのでせうかね。

加世。さあ。

のぶ子。（涙組んで）でも、私本當に辛いのを辛抱して居るのですよ。

加世。ええ。それは好く分かつて居ます。看護婦もさう言つて感心して居ました。

のぶ子。（下の中庭を指して）あの花壇も、あれは私が作りましたのです。

加世。あなたが。何うしてです。

のぶ子。松井が庭に花が欲しいと言ふものですから。でも、此處いらは砂地で固いのですから、何にも育ちはしません。私隣りの百姓の所へ土を貰ひに參りました。そしたら誰も持つて來て具れる者が無いと言ふのです。多分、面倒臭かつたのでせう。仕方が有りませんから、私、自分で運びましたの。畚に入れて。一日かかりました。

加世。（眼を見張つて）私がですか。

のぶ子。（頷く）ええ。そしたら、みんな變な顔をして、笑つて居るのです。妙な恰好ですものね。それでも、私辛抱致しましたの。凝つと眼をつぶつて。さうしますとね。何んとも言へない強い力が體の中に湧いて來るやうに思ふのです。もう松井の爲だとか何だとか言ふ事よりも、何かかうもつと勇ましい、丁度素肌で槍の穂先の並んでる中かなんぞへ進んで行くやうな鋭い悦びが身中に溢れて來るのです。そして、本當に嬉しさで胸が一ぱいになつて、涙がこぼれました。そしたら、とうとう其の百姓が見かねたと見えましてね。若い方が可哀いさうにと言つて、手傳つて呉れましてね。

加世。（感激して）のぶ子さん。

のぶ子。（加世の聲調に誘はれる樣に）でも、あなた。松井はもう直き死んで了ふのですもの。（顔にハンカチを當てて泣く）

加世。（凝つとのぶ子の姿を見乍ら）のぶ子さん。松井君もそれはきつと喜んで居りますよ。

（間。）

のぶ子。（涙を拭いて）松井はね。私の事を、何にも感じの無い女の樣に思つて居るのですよ。いつもさう申しますの。「お前は嫉妬と言ふやうな感じを丸で持たずに生れた女だ」って。それは松井が知らないのです。本當は、私ぐらゐ嫉妬深い女は無いのです。私自身でも、何うして斯んなだらうと思ふくらゐ嫉妬深いのですよ。只だそれをさう見せないだけなのです。例へて申しますとね。あの吉田と言ふ看護婦が有るでせう。あの人にでも、私は一種の嫉妬を感じるのですよ。何うかした時に、松井があの人の來るのを待ちかねて居るやうな事が有りますとね。私、それは厭やな氣持になりますの。（間。ふと加世の顔を見上げて）あなた。こんな事を言つて、お笑ひになるでせうね。

加世。（熱心に）いいえ。笑ふなんぞ。

のぶ子。本當に御免なさいね。あなたですから、斯んな事も申し上げられるのですよ。でも、私、他にどなたもお話しをする方が無いのですもの。

（間。）

のぶ子。本當は、私看護婦の事を言つたのでは無かつたのです。れい子さんの事を申し度かつたのです。

加世。れい子さんが何うかしたのですか。

のぶ子。いいえ。何うもしは致しませんのですけれども
ね。（間。）加世さん。松井は今でもれい子さんの事を
思つて居るのですよ。
加世。そんな事は有りません。
（間。）
加世。それであなたが嫉妬を感じると言ふのですか。
のぶ子。ええ。松井は直接にれい子さんの事を申しはし
ませんのですけれどもね。只だ、れい子さんの生んだ
赤ん坊のことをしよつちゆう申しますのです。「あれ
が俺の子だか何うだか分らない。」と申しましてね。
「あの女は俺の子供を生まなくちやならなくなつた
のを知つて、それが厭やさに俺の所から逃げ出した
に違ひない。」と言ふのですよ。でも私、本當は松井が
赤ん坊の事よりも、れい子さんの事を氣にして居り
ますのを好く知つて居りますの。松井は、今でも、私
の何層倍もれい子さんの事を思つて居るのですよ。
加世。そんな事があるものですか。
のぶ子。いいえ。さうなのですよ。松井はね。も一度あ
の砂丘の所まで行つて見たいと近頃口癖の様に言ふ
のですよ。そして、昔よくあの上に坐つて、晴れた
海を見下した氣持が忘れられないと申しますの。私、
そのたんびに、松井の傍に坐つて居るれい子さんの
姿がはつきり眼に浮ぶのですよ。松井はね。今でも、
此の部屋で私の代りにれい子さんが面倒を見て居
た、前の病氣の時分の事を夢見て居るのですよ。
加世。（傷ましげな表情をして）のぶ子さん。
のぶ子。でも、私、もう何でも辛抱する氣になつて居り
ますの。松井は何うせもう長くは無いのですから、
その迹で幾らでも悠くり休息する事が出來るのだと
思つて、何もかも諦めて居りますの。
（間。）
（のぶ子、急に激して泣く。）
のぶ子。（やがて泣きやむ、涙を拭いて）ねえ。加世さん。生き
殘ると言ふことは、本當に殘酷なことでございます
わね。
加世。（默つて、凝つと前を視つめて居る。）
（稍や長き間。）
（ピアノの音聞こゆ。今度は本氣に彈いて居るのである。）
のぶ子。おや。ピアノ。特別室ですね。
（Chopin の Marche funèbre を彈いて居るのである。）
のぶ子。まあ。お葬式の譜ぢや有りませんか。
加世。さうのやうですね。

のぶ子。まあ。縁喜でも無い。何うしたと言ふのでせう。

（長き間。）（曲終る。）

のぶ子。大層上手ですね。

加世。さうのやうですね。素人ぢゃ無いでせう。さつき看護婦が、元女優だとか言つて居ました。

のぶ子。え。もと女優ですつて。

加世。（ふと不安な氣持に誘はれ乍ら）ええ。前に一度此處へ來て居たことが有るのだとかで。

のぶ子。え。前に來て居たことが有るのですつて。

加世。ええ。看護婦がそんなことを言つて居ましたがね。

のぶ子。（非常に緊張して併し低く）れい子さんぢゃ無いでせうか。

加世。（強いて苦笑する）まさか。

（海の上、暮色次第に濃くなる。）

（波の音、更に高く聞こゆ。）

（松井、病院より出づ。痩軀。蒼白なる顔。異常な興奮を強いて押へようと努めて居る。）

のぶ子。あら。もうお眼覺めですか。

松井。うん。ピアノなぞ弾くものだから。

のぶ子。（松井を援けて掛けさせ乍ら）さうですか。それはいけませんでしたね。まあ。ひどい汗ですこと。（額の汗を拭いてやる。）

松井。ばかに暑いね。草花の香がまるで蒸すやうぢゃ無いか。

のぶ子。ええ。ちつとも風が通さなくて。戸を明けませうか。（硝子戸を明け乍ら）波が立つと、いつも斯うですね。

松井。お前。今の間に夕飯を濟まして了ひ。

のぶ子。ええ。ですけども、もう少しあとにしませう。今吉田さんが行つて居るのですから。

松井。そんなことを言つて、お前、停車場へ行くのだらう。

のぶ子。ええ。

加世。奥さん。私なら好ござんすよ。そんな事をして頂かない方が勝手ですから、

松井。（加世に頓着せず）もう間も無く廻診だし、時間が無くなるよ。

のぶ子。さうですね。それではさうしませうか。それでは、加世さん、恐れ入りますが、ちよつとの間。

加世。ええ。では、何うか御悠くり。

（かすかな稲光り。）

松井。（外を眺めて）それでも、何となく秋らしくなつて來た。暑いと言つても、何だかもう一頃とは暑さが違ふやうだ。
加世。さうだね。もう十日もすれば、ずつと涼しくなるだらう。
松井。僕のやうな病人は、菜種の花の散る頃が一番あぶないと言ふのだ。それを持ち堪へれば、今度は秋風の立ち初めが危険だと言ふのだがね。俺もその時分が剣呑だ。
加世。そんな事は無いだらう。
（間。）
松井。君。やつぱり九時ので歸るか。
加世。うん。さうしようと思つて居る。
（間。）
松井。（額の汗を拭いて）實は、君、ちよつと大變なことが起りかけて居るのだ。
加世。（松井の顏を見る。）大變な事だつて。
松井。君。れい子が來て居るのだ。
加世。（愕然とす。やがて、外を指して）やつぱり、あれがさうなのか。
松井。うん。今のピアノがさうだ。あれは、君、僕に對する挑戰なのだ。
加世。何うしてだ。
松井。うん。前に、ショパンを彈いて居たらう。れい子があれを彈いて居る時に、僕が冗談に「俺が死んだら、その時、棺の傍でそれを彈いて呉れるか好い。」と言つたのだ。そしたら、「ええ。好ござんす。彈いて上げませう。」と言つて、れい子が笑つた事が有つたのだ。
（間。）
加世。君。れい子さんに逢つたのか。
松井。いいや。逢はない。併し、見ることは見た。
加世。見た。何うして。
松井。をとといの晩だ。僕が獨りで病室に寢て居るとね。誰だかそこの窓の所へ來て、中庭から覗き込んで居る者が有るのだ。電燈に覆ひが掛けて有るから、僕の方は暗くて、外からは好く見えない。そこの階段の上に上つて、窓の硝子に顏を押つつける樣にして、部屋の中を覗き込んで居るのだ。僕は餘つ程聲をかけようかと思つたのだが、でも、默つて凝つと見て居たよ。そしたら、間も無く庭の方へ降りて行つた。その時には、僕はまだ半信半疑だつた

よ。何しろ、長く逢はなかつた所へ、向うの様子がすつかり變つて居るのだからね。それに、僕はもう餘程視力が弱つて居るらしいのだ。そしたら、ゆうべ復たやつて來た。

加世。ゆうべも。

松井。うん。同なじ時刻だ。僕は時間を計つて見たよ。あれは、廻診の時間に拔けて來るのだ。他には、ちよつと患者の傍を離れる事が出來ないのだらう。そして、のぶ子が食事に行くのを、看護婦か何かに聞いて來るらしいのだ。やはり同じ樣にして、窓から部屋の中を覗き込んで、歸つて行つた。併し、ゆうべも僕は見られずに了つたのだ。聲も掛けなかつた。今夜もきつとやつて來るよ。

加世。ふむ。併し、不思議な事が有るものだね。向うの病人は、無論れい子さんの今の主人なのだらうね。

松井。それは無論さうに違ひないさ。僕はちやんと看護婦に聞いといたよ。向うも、僕と同なじで、もう餘つ程惡いのだと言つて居たよ。

加世。うん。僕にもさう言つて居た。併し、それがれい子さんに關係が有らうとは思はなかつたよ。併し、君、何うも不思議ぢや無いか。何うも君と同じ病氣になつて、やはり此處へやつて來るなんて。

松井。うん。それはまあ偶然だね。併し、れい子が此處へ來たのは、事に依ると偶然で無いかも知れないよ。

加世。なぜだい。何かそんな事を聞いたのかい。

松井。いや。何にも聞きはしないよ。聞きはしないけれどもね。まあ、君、ちよつと考へて見給へ。れい子の今の主人が斯う言ふ病氣に罹つた時にだね。何處か斯う言ふ海濱へ轉地する必要が出來たわけだらう。其の時に、偶然れい子は此處の事を想ひ出したのだね。前に僕と一緒に來て居た時分の事だね。それとも又、れい子がまだあの時分の事を忘れずに居たものだから、まあ半ば必然的に此處の事がれい子の頭に浮んだと言ふ樣なわけなのかも知れない。とに角、さうして此處へ來て見たら、偶然僕が此處へ來て居たと言ふわけなのだね。

加世。なる程、それはさう言ふ事なのかも知れないね。

松井。併しね。僕は、れい子が此處へ來たのはもつと偶然で無い動機からかも知れないと思ふのだ。

加世。ふん。それは又何う言ふわけなのだい。

松井。つまり、れい子は前から僕が此處へ來て居るのを知つて居たのだね。そして、わざわざ主人を連れて此處へやつて來たのだ。

加世。（松井の顔を見る）君。君は今でもれい子さんの事を思つて居るのだね。

松井。（驚いた様に加世の顔を見る）何だつてそんな事を言ふのだい。

加世。だつて。（松井の顔色を覗ひ乍ら）まあ、さうも思へるだらう。

松井。さうだね。さう言つても、嘘だとは言へないかも知れないね。色んな意味で、僕はれい子の事を想ひ出す事が多いからね。今度此處へ來てからは、特別にさうなのだからね。

加世。それはさうだらう。

松井。僕がれい子と一緒に此處に居た頃には、二人で喧嘩ばかりして居たよ。併し、今から思ふと、何うも二人は本當に憎み合つて居たのぢや無い様な氣持がするよ。れい子と僕との間は、世間並の夫婦と言ふ様なものとは餘程違つて居たには相違ないがね。併し、あの頃の二人の間には、何か嘘でないものが有つた様に思ふのだね。正直を言ふと、今ののぶ子との間などよりも、もつと強く二人の間を結ぶ何かが有つた様な氣持がするよ。無論、れい子の方でも、さう思つて居るに違ひないと思ふのだがね。

加世。（松井の顔を覗て、一種の表情をなす）それで、君は、れい子さんが來たのは、も一度君に逢ひに來たのだと言ふのだね。

松井。いや。さうぢや無いよ。僕が今言つたのは、さう言ふ意味ぢや無いのだよ。萬一、れい子が、僕が此處に居るのを知り乍ら來たとしてもだね。それは、君、色んな意味に取れる事だからね。ひよつとしたら、れい子は僕に戰を挑む爲に、わざわざ此處へやつて來たのかも知れないよ。僕は、ゆうべ窓硝子の外のれい子の顔を見た時に、ふとさう考へたよ。れい子は、僕に復讎をする積りか何かで、此處へ來たのかも知れないのだからね。

加世。それもさうだね。あの人の性格としては、随分さう言ふ事も有るかも知れないね。

松井。どちらにしても、只だ斯ふ言ふ事だけは言へると思ふよ。どんな意味でかで、れい子は今でも僕のことを思つて居ると言ふのだね。

加世。ふむ。そして、どんな意味でかで、君もれい子

さんのことを思つて居ると言ふのだね。

松井。　さうだ。殊に、子供の事でだね。僕は、僕の子供が此の世に生れたのか何うなのか知らないのだ。若し生れたとしても、今それが何うなつて居るのか、まるで知らないのだからね。れい子は、其の事に就ては、全然僕に知らさうとしなかつたよ。

加世。　それで、君はれい子さんに逢ふ積りなのかね。

松井。　うん。逢はうと思ふのだ。逢つて、子供のことを聞いて見ようと思ふのだ。れい子は言はないかも知れないがね。併し、今は前とは違ふのだからね。僕はもう間もなく死ぬ人間だからね。

加世。　それで、いつ逢ふ積りだい。

松井。　今夜だ。今夜も、れい子は復たきつとやつて來るよ。そして、やつぱり同じ時刻に來るに違ひない。丁度其の時間に、君とのぶ子が停車場へ行つて居ようと言ふわけなのだ。

加世。　（殆ど無意識に言葉が口を出ると言ふ様な調子で、早口に）君。それは可けない。

松井。　可けない。何うしてだ。のぶ子の留守で逢ふのが可けないと言ふのかい。

加世。　さうだよ。それは、君、あんまりのぶ子さんを侮辱すると言ふものだよ。

松井。　だつて、君、まさかのぶ子の居る所で逢へもしまいぢやないか。

加世。　いや。それはやつぱりのぶ子さんの居る所で逢つた方が良いよ。少くとも、のぶ子さんにさう言つて、逢つた方が好い。それでは、君、あんまりのぶ子さんが可哀さうだよ。取り様に依つては、それはのぶ子さんに對して、「今斯うしてお前と一緒に暮らしては居るけれども、本當は今でも俺はお前よりもれい子の事を思つて居るのだよ。」と言ふ證據にもなるのだからね。

松井。　（考へて）さうかね。

加世。　（松井の方をちらと見て、不快の顏をする。直ぐ他を向く。）

（長き間。）

（暮色せまる。）

（汽車の鐵橋を過ぎる音聞こゆ。）

（のぶ子、這入つて來る。）

のぶ子。　（加世に）何うも失禮いたしました。

加世。　いゝえ。（ちらとのぶ子を見る。直ぐ眼をそらす。）

松井。　（外を眺めて）ばかに暗くなつたぢや無いか。夕立でも來るのかな。

のぶ子。（窓の所へ行つて）もう燈臺に火が點つて居りますね。まあ。波がだん〳〵ひどくなつて。ずつと沖の方まで眞白ですよ。

（院長、看護婦、這入つて來る。）

院長。（松井を見て）起きて居られたのですか。

（院長、松井、のぶ子、看護婦、病室へ這入る。）

（加世、獨り殘る。）

（病室に電燈のともるのが見える。欄間の所から壁に光り映ず。）

（のぶ子、出て來る。）

のぶ子。暗くなりましたね。火をともしませうか。（電氣を捻ねらうとする。）

加世。いえ。此の方が好いでせう。

のぶ子。さうですか。火をともすと、何だか餘計暑いやうに思ひますね。

（間。）

のぶ子。今頃はさぞ街が宜しうございませうね。街路樹に火がともつて、ちら〳〵して。私、日の暮れ方になると、いつもさう思つて、なつかしくて仕方が無いのですよ。

加世。（のぶ子を視て）街へ歸り度いと思ふのですか。

のぶ子。（淋しく笑つて）ええ。でも。

（間。）

のぶ子。向うの女の方、御覽なすつて。

加世。女の人。

のぶ子。ええ。あの特別室の。

加世。（恐れる樣にのぶ子の顏を視つて）いいえ。なぜですか

のぶ子。今し方そこの中庭を歩いて居たでせう。看護婦がさう言つて居ました。それは美しい方ですつてね。

加世。（傷ましげなる表情をしてのぶ子を視る。遂に心に決したやうに）のぶ子さん。

のぶ子。（俯いて）え。

（院長、病室から出て來る。）

のぶ子。（院長の傍へ寄る。）有り難うございました。いかがでございませう。今日は少し加減が惡い樣に思ふのですが。

院長。いや、そんな事も無いのですが、やはりまだ大分興奮して居られますね。

のぶ子。はあ。あれ、何うなのでございませうか。

院長。さうですね。まあ、精々そつとして、落ち着かせる樣にするのですね。

のぶ子。はあ。それから、あの、ちよつとお伺ひ申し度い

のですけれど。

院長。ええ。何ですか

のぶ子。一度あの砂濱まで出て見たいと申しますのですが。可けませんでせうか。涼しい朝の間か何かにでございますね。

院長。さうですね。構はないでせう。なる可く仰しゃる事を聞いてお上げなさる方が宜しい。

のぶ子。（突然、激動を感じて泣く。）先生。宅はもうそんなに惡くなつて居るのでございますか。

院長。（ちよつと狼狽して）いや。さう言ふ意味ぢや無いのです。只だ、氣に逆はない方が良いと言つたのです。何分あの通り興奮して居られるのですからね。

（院長、行く。）

（間。）

のぶ子。ねえ。加世さん。本當に何うなのでございませうね。松井はそんなに惡いのでございませうか。

加世。（堪へ得ざる如き表情をして、のぶ子を見る。）そんな事は無いのでせう。

（松井、看護婦、病室から出て來る。）

のぶ子。起きて入らつしやいますか。

松井。うん。も少し起きて居よう。

加世。無理をしない方が好いだらう。

松井。なに。大丈夫だ（のぶ子に）電氣を點けないか。眞つ暗ぢや無いか。

（のぶ子、電氣をともす。）

（看護婦、出て行く。）

松井。（のぶ子に）四號の患者が死んださうだね。

のぶ子。四號と言ひますと。

松井。そら。あの若い娘さんだよ。（少し笑つて）俺がもし普通のからだだつたら、直ぐにあの人を貰ふのだがと言つて、お前に叱られたあの娘さんさ。

のぶ子。（同じ様に微笑して）ああ。あの人ですか。あの人が死んだのですか。

松井。さうだつて。

のぶ子。いつ死んだのでせう。ちつとも知りませんでしたが。

松井。つい今し方だとさ。看護婦がさう言つて居たよ。

のぶ子。今し方ですつて。さうですか。まあ。可哀いさうにね。

松井。（加世に）君。病院に居てね。一番厭なのは、他の患者の死ぬ事だよ。夜中でも何でも、看護婦や何か

が寄つてたかつて、すつかり迹の部屋を片附けて了ふのだからね、あかりの覆ひを取るものだから、今まで暗かつた部屋が急に明るくなるのだ。そして、まるで空屋のやうに片附けて了ふのだ。それは、君、何とも言へない妙な氣持だよ。俺が死んでも、直きあんなにされて了ふのかと思ふと、あれだけは何うも全く厭やな氣持だね。

のぶ子。あなた。そんな厭な事を仰しやるものぢや有りませんよ。

松井。なに。そんな事を隱して居たつて仕方が無いさ。

(看護婦、這入つて來る。)

吉田。あの、加世さん。恐れ入りますが、ちよつと醫務室まで。あとでも好いのですけれど。

加世。ああ。さうですか。(立ち上がる。)

松井。(皮肉な表情をなす。)俺の病氣の事だらう。

加世。さうかも知れない。

(加世、看護婦、去る。)

松井。(外を見て)燈臺に火がともつて居るかい。

のぶ子。ええ。何ですの。

松井。俺には何うも見えないよ。

のぶ子。(ちよつとあはてて)ええ。今夜は曇つて居るのですからね。

松井。曇つて居たら、尚ほ好く見えるはずだよ。

(短い間。)

(波の音、急に高く聞こゆ。)

のぶ子。まあ。ひどい音ですこと。どこまでひどくなるのでせう。

松井。俺はね。あの音を聞くと、妙に子供の時分の事を思ひ出すよ。俺の生れたのも、丁度こんな海岸だつたよ。やつぱり斯んな砂丘のある砂濱でね。俺は、妙に其の眞つ暗な、丁度こんな具合の夕立だけを覺へて居るよ。

のぶ子。極く極く小さい時分の事ですか。

松井。うん。でも、覺えて居るのは、やはり少しく大きくなつてからの事だね。俺はよく斯んな日の暮れ方に、獨りで海邊に凝つと立つて居たよ。

のぶ子。まあ。心細か無かつたのですか。

松井。心細かつたね。併し、俺はみなし兒だからね。一人ぼつちには慣れて居たよ。友達も何にも無かつたのだからね。子供の時分から、俺は愛情と言ふやうなものを丸きり味はずに育つたのだね。

のぶ子。（熱心に松井の顔を見る。）

松井。或る時、こんな事が有つたよ。俺がそんなにして暗闇の中に立つて居ると、沖の方で少さな光りがちらちら光るのだ。それは舟かなんぞの火だつたかも知れないのだがね。俺達はそれを怪ち火だと言つて、みんなで怖がつたものだよ。俺の所には妙な迷信が有つてね。自分の履いてる草履をぬいで、其の裡に唾を吐つかけて、「怪ち火來おい。」と言つて呼ぶのだね。すると、其の怪ち火が來て、呼んだやつを持つて行つて了ふと言ふのだ。俺はそれをやつたよ。

のぶ子。まあ。何うしてですの。

松井。うん。みんな兩親や何かが有つて可愛がつて貰へるのに、俺だけは誰も可愛がつて呉れるものが無い。何となく、あの怪ち火なら俺を可愛がつて呉れるかも知れないと言ふやうな氣がしたのだね。

のぶ子。（眼を潤ませて）まあ。可哀さうにね。

松井。俺は草履をぬいで、そつと小さな聲で、「怪ち火來おい」と呼んで見たよ。そしたら、ぞつと怖くなつたね。一散に家の方へかけ出したよ。

（稍や長き間。）

（遠くに汽車の汽笛の音聞こゆ。）

松井。おい。お前好い加減に支度をしたら何うだい。汽車が遅くなるぜ。

のぶ子。さうですね。あなた。お一人で好ござんすか。吉田さんを呼びませうか。

松井。なに。大丈夫さ。

のぶ子。さうですか。それでは、ちよつと。

（のぶ子。入る。）

（看護婦、這入つて來る。）

吉田。加世さんは。

松井。加世ですか。加世はまだ事務室から歸りませんよ。

吉田。さうですか。お伜が參りましたのですが。奥さんは。

松井。そちらです。

（看護婦、病室へ這入る。）

（松井、顔を硝子戸の傍に寄せて、中庭を見る。）

（加世、歸つて來る。）

松井。（振り返つて）何と言つたい。いけないと言つたかい。

加世。いや。そんな事は言はない。只だ、のぶ子さん

か君の氣に逆はない樣に、僕から言へと言ふのだ。

松井。へえ。それは妙だね。

加世。君の神經が高ぶつて居るのを、のぶ子さんの所爲たと思つたのだね。

松井。ああ。それでか。（笑ふ）のぶ子こそ好い面の皮だ。

加世。（非常に不快な顔をする。）

（間。）

加世。（時計を出して見る。）

松井。もう時間か。

加世。うん。もうそろそろ行かなくちや。

松井。（手を出す。）全く好く來て呉れたね。本當に感謝して居るのだよ。

加世。（其の手を握つて、感傷的な眼附をする。）君。さつきの事ね。

松井。うん。

加世。あれはも一度考へた方が好いよ。なる可く、僕の言つたやうにしたまへよ。

松井。うん。（只だ前を見て居る。）

加世。（松井を見つめて居る。やがて、極端なる憎惡の表情をなす。）

（のぶ子と、看護婦と出て來る。）

のぶ子。（加世に）あの、俥が參つて居るさうですから。

加世。さうですか。私一人で結構なのですがね。いつも何うも恐れ入ります。

のぶ子。（松井に）では、あなた、ちよつと行つて參りますから。

松井。うん。

加世。（中庭の方を見て居た眼を返して、松井に）では、左樣なら。

松井。左樣なら

（加世、のぶ子、看護婦去る。）

（長き間。）

（前を走る俥の音。やがて、遠くに消ゆ。）

（松井、電燈を消す。病室の欄間から、あかり斜めに入口の壁の上に映ず。）

（すさまじい波の音。松井、窓の傍へ行つて、凝つと外を眺めて居る。）（時々、かすかな稻光り。）

（入口の扉、音も無く靜かに明く。松井の元の妻れい子、靜かに這入る。復たそつと扉をしめる。れい子の袖のあたりに光り當る。）

（松井、氣づかず。やはり外を眺めて居る。れい子、凝つと立つて居る。）

（稍や長き間。）

（稍や强き稻光り、硝子を越して、松井の橫顏を照らす。）

れい子。（初めて松井なる事を認めて）おや。起きて入らつしやるの。

松井。（愕然と振り返へる。）だれ。

れい子。私ですよ。

松井。れい子か。

れい子。ええ。

松井。（立つて來る。）何うしてそつちから來たのだ。

れい子。でも、今停車場へ入らしつたでせう。

松井。うん。何うして分かつたい。

れい子。看護婦に聞いたのですよ。

松井。ああ。さうか。

れい子。何うして暗闇の中に入らしやるの。電氣をつけますよ、好いでせう。

（れい子、電氣をひねる。兩人顏を見合はす。）

（短い間。）

松井。お前さつきピアノを彈いて居たね。

れい子。ええ。

松井。何だつて、あんな眞似をしたのだい。

れい子。なぜと言ふ事も無いのですよ。でも、あなたは私の來て居る事を御存知なかつたでせう。

松井。お前も案外ばかだね。お前、ゆうべ其處の處へ來たらう。

れい子。（殆ど不用意の間に返事を引き出された樣に）ええ。

松井。それから、をととひの晩も。

れい子。（侮辱せられたる如き表情をして、松井の顏を見る。）

松井。俺は、今夜もお前が來るのを知つて居たよ。

れい子。ああ。それで、あなた、其處から外を見て居たのですね。火なんぞ消して。

松井。うん。俺はお前に逢つて聞き度い事が有つたのだからね。

（短い間）

松井。併し、何かい。お前の主人は、お前があんなものを彈いても、何とも言ひはしないのかい。

れい子。ええ。幸ひと、其の方はさつぱりなのですから只だ、私がピアノを彈いて居ると思つて居るだけですよ。

（短い間）

松井。ふん。それでは、今のお前の主人と言ふのは、俺なんぞとはまるでたちの違つた種類の人間だと言ふ事になるね。

れい子。ええ。其の通りですよ。

松井。そして、可なりお前に丸められて居ると言ふわけだね。

れい子。さあ。それは何うですか。まあ、可なりにやつて行けると言ふだけのことですよ。

松井。ふん。それは打たれないと言ふことなのかい。

れい子。ええ。私、もう打たれるのは、あなたで懲り懲りしたのですからね。

松井。（得意らしく笑つて）そんなに打ちはしなかつたぢやないか。

れい子。何でも、私、あれだけは辛抱が出來なかつたのですよ。打たれるほどひどい侮辱は無いのですからね。そしては、あなたの言ひ草はいつも決まつて居るのです。「ニイチエもさう言つた。女の所へ行くのか。鞭を忘れるな。鞭を。」ねえ。其の通りでせう。ニイチエだつて、隨分餘計な事を言つたものだと、私、其のたんびに思ひました。

松井。ふふん。それでも、お前、實は本望なのだらう。そら。覺えて居るかい。あの時分に、今お前の居る特別室に、華族の息子か何かが居て、頻りと贅澤な眞似をして居たらう。お前、ばかにあれを羨しがつて、「今度來る事が有つたら、是非あすこへ來ませうね。」と言つたらう。今度は、望みがかなつたと言ふわけぢや無いか。

れい子。でも、其の時はあなたも、「も一度來なほしてあすこへ這入つても好い。」と仰しやつて笑つて居たぢや有りませんか。

松井。所が、それが俺の方は元の默阿彌で、やつぱり此の部屋へ舞ひ戻つて來たと言ふわけなのだ。お前好い氣味だと思つて居るだらう。

れい子。でも、ちつとも元と違つて居ないぢや有りませんか。（見廻して）、棚や長椅子の位置まで、そつくり元のままで。只だ、下に花壇が出來て居ますね。

松井。うん。あれか。あれはのぶ子が作つたのだ。

（短い間。）

れい子。（獨り言のやうに）のぶ子さんもお氣の毒ですね。

松井。なぜだい。俺はのぶ子を打ちはしないよ。

れい子。のぶ子さんは打つ必要が無いと言ふのですか。打つ必要の有つたのは、私だけだと言ふのでせう。でも、あなた。

松井。うん。俺が今に死んで了ふからと言ふのかい。なに。俺が死んだつて、のぶ子は困りはしないよ。あの加世と言ふのは、まだ獨身で居るのだから。

れい子。まあ。あなたはそんな事を考へて居るのですか。

松井。俺が考へて居るだけぢや無いよ。みんなさう考へて居るのだ。御本尊の加世もそれからのぶ子もだね。只だ、みんなで言はずに居るだけの事なのだ。

れい子。それで、あなたは厭やな氣持はしないのですか。そんな事を考へて。

松井。格別、厭やでも無いね。世の中の事は、さうしたものだと思つて居るからね。けつく、迹に氣にかかる事が殘らなくて好いのだよ。只だ、俺が死んだあとで、みんなで俺の墓詣りなんぞに來るだらうと思つて、それだけが何うも厭やだね。

れい子。なぜそんな事が厭やなのでせう。

松井。なぜと言つて、お前。みんな生きて居るのに、俺だけが死んで居るのだからね。秋の彼岸か何ぞの、好く晴れた天氣の好い日だね墓詣りなんと言ふものは、大抵そんな日に來るものだよ。俺は今でも時々思ひ出すのだが、好くさう言ふ日に、お前と一緒に、あの砂丘の所まで行つたらう。そしては、日光の一ぱい映してる海の空氣を胸一ぱい吸ひ込んだものだつた。丁度あんな具合の日だ。そこへ、花かなんぞを持つてのぶ子がやつて來る。加世が來る。お前なんぞも來るかも知れない。街には電車がちんちんと走つて居る。皆生きて居る。それに、俺だけが、何千だか何萬だかの墓の石と並んで、凝つと地の下に埋まつて居るのだ。さう思ふと。それだけが何うも厭やな氣持がして仕方が無いよ。

（ふとれい子と顏を見合はす。）

松井。お前の主人も、餘つぽど惡いのかい。

れい子。ええ。迚ももう難かしいのですよ。

松井。さうか。妙なものだ。どちらが先へ參るのかね。

（松井凝つとれい子を視る。）

（れい子。それを避ける樣に外を見る。）

（強い稻妻。）

れい子。まあ。大層光りますね。雷も何にも鳴らないのに。もう秋が來たのでせうか。

松井。（凝つとれい子を視つめたまま）れい子。

れい子。（何かを恐れるやうな眼附をして、振り返へる。）

松井。俺はも一度お前に聞かうと思ふのだがね。俺は今斯んなからだになつて居る。今度はお前も本當の事を言つて呉れても好いと思ふのだね。

れい子。（凝つと松井の顔色を覗ひ乍ら）子供の事ですか。

松井。さうだよ。俺はもう此の世に殘すものは何にも無い。俺は生れ立ちのみなし兒だ。父もなければ、母も無い。親戚らしい親戚も何にも無い。のぶ子だつて、加世だつて、俺が死んで了へば、もう赤の他人だ。本當に、俺は裸かで此の世に生れて、裸かで此の世を去つて行くのだ。只だ、何か俺が此の世に殘すものが有るとすれば、それは俺の子供だ。併し、俺はよしんば俺の子供が此の世に生きて居ると知つても、今更逢はうとも何とも思ひはしないのだ。只だ、本當の事實が知りたい。それが今此の世の中の俺に關する總てなのだからね。俺はそれを知つて死に度いと思ふのだ。れい子。言つてくれ。お前の生んだのは、あれは俺の子なのか何うなのか。

れい子。（凝つと松井の眼を見込む。）

（暫く鋭い眼を見合はして居る。）

松井。（突然）れい子。（松井、激しく咳く。）

れい子。（傍へ寄り乍ら）ガアゼはやつぱりあちらですか。

松井。（頷く。）

（れい子、病室へ這入る。直ぐにガアゼを持つて出て來る。）

れい子。（ガアゼを指に捲いて、痰を取つてやる。ふと感傷的な氣持になつて、額の汗を拭いてやり乍ら）もと、好く斯うして取つて上げたものでしたね。

松井。うん。俺はまた、ああやつて今の主人のを取つてやるのだらうと思つて、厭な氣持がしたよ。

れい子。（彈かれた樣に、反抗的な眼を松井の顔に投げる。）

（看護婦、這入つて來る。れい子に對して、全く無關心の態度である。）

吉田。（殆どれい子の居る事を注意しないやうに）俥屋が奧樣のお手紙を持つて歸りました。

松井。（不思議さうに、看護婦の顔を見る。）誰の手紙ですつて。

吉田。奧樣の手紙です。

松井。のぶ子の。

（看護婦、手紙を明けて松井に渡して、去る。）

（松井、手紙を讀む。見る見る、激動す。）

れい子。（愕いて傍に寄る。）あなた。何うなすつたの。

松井。うん。（苦しげに呻く。）のぶ子が行つて了つたのだ。

れい子。（愕然として）え。のぶ子さんが。何處へ行つたのです。

松井。加世と行つて了つたのだ。

れい子。（慄然と立ち竦む。）まあ。一體何うしたと言ふのです。

松井。俺が生きて居る間は、あの二人はとに角俺を通じて繋がつて居るのだと思つて居たがね。とうとう俺を離れて、勝手に二人で繋がつて了つたよ。

れい子。でも、一體、何うしてそんな事になつたのです。

松井。俺が今お前に逢つて居るのそのぶ子が知つたのだ。

れい子。でも、あなた。何うしてそんな事が。

松井。加世が言つたのだ。

（松井、手紙をれい子の前へ投げ出す。）

（併し、れい子は殆ど讀み得ない。）

松井。のぶ子だけは、何でも聞いて呉れると思つたのだがね。死にかけてる人間のする事だから、何でも辛抱して呉れるだらうと思つたがね。それは俺い者へ違ひだつたのだ。（強いて笑はんとして、僅かに顔の肉を動かす。）のぶ子もこれだけは辛抱して呉れなかつたよ。とうとう俺の所から逃げ出したよ。

（松井、激しく咳く。）

（れい子、傍へ寄らうとする。）

（汽車の汽笛の音聞こゆ。）

松井。（椅子の上に跳ね上げられた様に）あれだ。あれだ。あの汽車だ。あの汽車で行つて了つたのだ。これで本當に俺は裸かになり切つて了つたよ。生れ立ちの本當のひとりぼつちに返つたよ。（椅子に身を投げる。）

（れい子、石像の如くに立ち竦んで、松井の顔を見つめて居る。）

（松井、鋭くれい子の顔を覗る。）

（れい子、打ち震ふ。）

松井。れい子。

（つと手を伸ばして、れい子の手を執る。）

（れい子、無意識に手を引かうとする。）

松井。（狂はしい眼附をして、低く）あれは俺の子だらう。ねえ。俺の子だつたらう。

れい子。（只だ唇を震はして居る。）

松井。（同じ様に嗄れた聲で）ねえ。さうだらう。

（れい子、鋭く松井の顔を見る。突然、激しき憎惡の情わく。）

れい子。（極端に殘酷なる表情をなす。松井の手を押し退ける様にして）あなた。本當の事を言つて上げますがね。私はあなたの子なんぞ生んだ事は無いのですよ。

松井。（手を離して、れい子の顔を瞶つめる。）

れい子。それは本當かい。

れい子。（默つて、松井の顔を覗つめて居る。）

松井。（突然、忿怒の絶頂に達す。）嘘を吐け。嘘を吐け。お前は今俺に復讐する積りだね。ばか（無理に椅子から身を起こす。）行け。行け。ばか。出て行け。

（強くれい子を室の外へ押し出す。激しく戸をしめる。よろける様に開き戸の所まで歸つて、戸にもたれて、ぺたりと坐る。苦しげに喘ぐ。）

（看護婦、這入つて來る。）

吉田。まあ。何うなすつたのです。そんな所へ坐つて。おからだにさはりますよ。

松井。（答へず。默つて、只だ顏を見て居る。）

（汽車の鐵橋を過ぎる音、すぐ近くに聞こゆ。）

（松井、思はず身を起こしかける。）

吉田。まあ。ひどい音ですこと。汽車の音があんなに近くに聞こえる樣だと、やつぱり雨になるのですね。

松井。あれだ。今そこを通つて居るのだ。

吉田。ええ。加世さんでせう。

松井。加世ものぶ子もです。

吉田。まあ。奥さんもですつて。何うしてなのです

松井。（答へず。默つて、外を見て居る。）

（稍々長き間。）

吉田。（松井の顏を見て）あなた。何を見て入らつしやるのです。

松井。燈台の火を見て居るのです。私は今夜は餘程視力が弱つて居るのですね。何うしても火が見えない。

吉田。見えない筈ですよ。今火はともつては居ないのですよ。

松井。（振り返つて）嘘でせう。あなたはそんな事を言つて、私に安心させやうと思ふのでせう。

吉田。（冷靜に）いいえ。本當ですよ。本當にともつては居ませんよ。

（激しくピアノを鳴らす音聞こゆ。何かの Cressendo を無茶苦茶に彈いてゐるのである。）

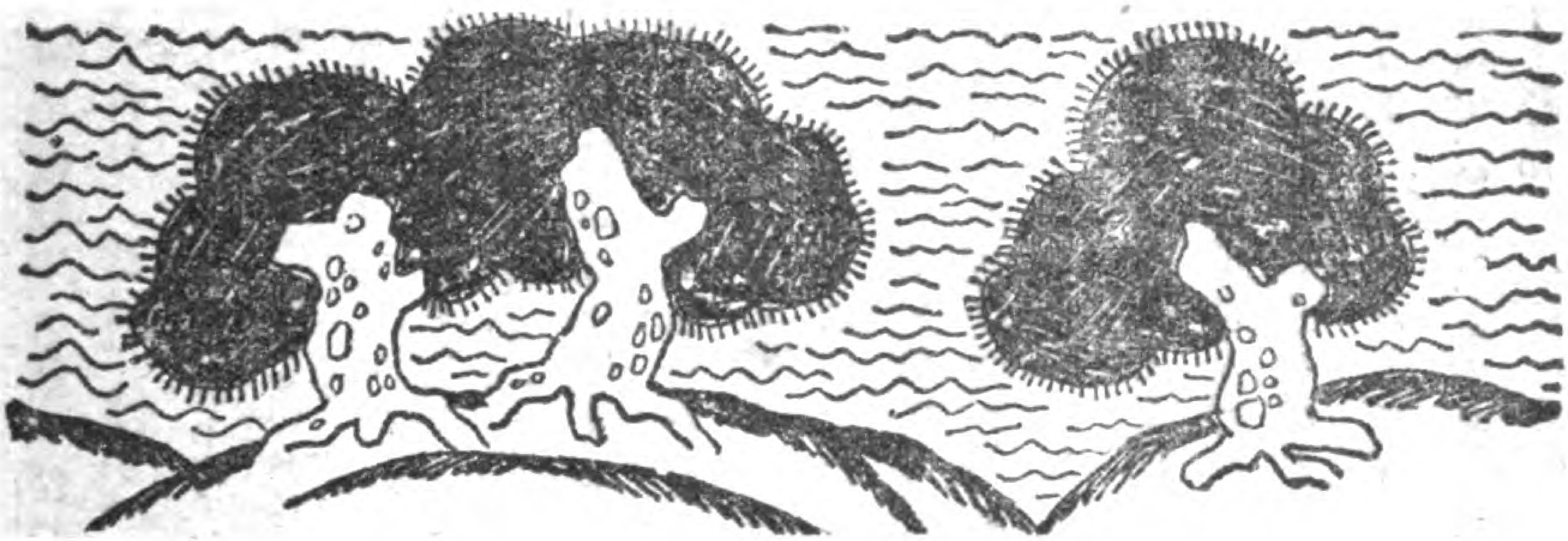
松井。（つと看護婦の手を執る。）吉田さん。のぶ子はもう歸つては來ないのですよ。（看護婦の顏を見つめて居る。）

（稻妻、續け樣に閃めく。）

（波の音、騷然と聞こゆ。）

〜〜〜〜〜〜

——了——



放蕩兒

中戸川吉二

「――それがね、目を醒してみると驚いちやつた。なんだかかうへんにあたりが薄暗いんだ。體が冷つたとしてゐる。筵のやうなものゝ上にねてゐたんだがね、あとで考へてみると、日本橋のね、伴傳の藏の中らしいんだよ……」

食卓を狹んで向ひ合つてゐる山村に、陰欝な口調で語りつゞけてゐた吉川は、好いかげん利いて來た酒も手傳つて、自分自身が誇らしいやうな氣がされて來た。山村と喧嘩わかれになつてから一と月ばかりの間に起つた自分の生活が、どんなに目茶苦茶な、亂暴極まる、先の眞ッ暗なものであつたかと云ふ風な述懷を、幾らか甘えもしながら、思ふ存分に饒舌りたかつたのだつたが、話してゐるうちに、その、無意識のうちに同情を買はうとしてゐた慘めである可き話材が、むしろ彼にとつて享樂の種てゝもあつたかのやうに、浮々とした、あかるい氣持にされて來たのである。

「なんだ。伴傳の藏の中になんぞねてゐたのか。あきれた奴だな。が、それから一體どうしたんだえ……」

山村は赤くなつた顔を、微笑でテカ〳〵光らせながら、盃をとつて、冷

えた酒をぐつと飲みほした。さうして、默つて盃を吉川の方へと押しやりながら、同じその一と月の間の、憔れきつたやうな自分の生活も思ひ較べられて、そこにも又自分の影をみずにゐられなかつた年下の吉川が、抱きしめて、愛撫してやりたいほど可愛いものに思はれた。

「それから、吃驚して藏の中から出た。誰にも氣づかれずに藏を出たのが、舌でも出したいやうに得意だつた。夕方近かつたやうだ。ぴしよ〳〵雨が降つてゐた。ふら〳〵しながら、濡れながら、雨の中を歩いてゐたんだ。と、ふいにどつかの叔父さんがあらはれて來て、傘の中へ俺を入れてくれてゐた。さうして、親しさうにべちやくちや何か俺に話しかけてゐた。ふん、同類だな、と思つたから俺も、不遠慮な調子で話してゐたが、――藏の中にねてゐた一件を得意になつて饒舌つたのは覺えてゐるが、途中何處からか記憶がボーッとして了つて、どうして行つたものかまるつきり覺えがない。氣がつくと、目の前で灯がキラキラしてゐる。吉原なんだ……」

「吉原？、――で、〇――樓でもあがつて了つたんぢやないか」

先が急がれてきて、ぶつ切ら棒に山村は言葉を挾んだ。

「うん。〇――樓へあがつたんだ」

「はゝゝゝは。ぢやもうあとは聞かなくつたつて解つてるよ。翌朝になると、その叔父さんて奴、きれいに君をまいて了つてゐたんだらう。さうして、君はぽかんとしながら、二人分の勘定を拂はされたつて云ふやうな譯けだらう」

「まあさうだ」

「まあさうもないや。馬鹿だなア」

弱者のすることはたいていそんなことだ、と云ふ風な氣がして、自分自身をまでひつくるめて何かに侮辱されたやうな、腹立しい氣持に山村はされてゐた。そこには又酒が働いて、彼は荒々しい氣持になつてゐた。

「君は馬鹿だよ。醉つぱらふと、何時だつてそんな半ん間な、みつともない目にばつかり合つてゐる……
……」

「あゝ馬鹿だ。實際俺は此間中から馬鹿なまねばかつりしてゐたんだ……」

吉川は、思ひ切つて自分を否定して了ふことに一種の快さを覺えて、益々浮々とした、陽氣な口調で饒舌り出して行つた。――その一と月ばかりの間に、如何に自分が、「健全な家庭」に於いて、完全な反抗兒であり得たかと云ふ風なことを……。山村と彼との感傷的な友人關係で、まるで誘惑に對して抵抗力のない人間のやうに、惹かるゝまゝにズル／＼と送つてゐた浮草のやうな一二年來の放蕩生活では何と云つても、充てのことに兄事してゐる山村から、手をとつて導かれたやうな形の彼であつたが、この一と月ばかりの間に、山村さへもしたことのない目茶苦茶を自分はやつたのだ、と云ふ風なところに彼の子供らしい誇りがあつた。彼は山村と喧嘩わかれになつた晩から、家を外にして毎日のやうに飲み歩いたりしてゐたが、まだ二十歳になつたかならない若い彼の心や體は、半月ばかりそんな風な生活が續くと、疲れ果て憔悴し切つた。堪へられなくなつて、嘘をついて母親から金を强請りとつて、逃げるやうにして箱根へ旅立つたのだつた。箱根の宿屋で、彼は自殺することばかりを考へてゐた。「死んで了ふのだ」――から、客觀的な氣持になつて、若くして死んで行く自分の慘めな姿を描いてみたりして、そこに涙ぐましいほどの悲愴な感銘を味つてゐた。弱い彼の氣質では、自省の足らなさを恥じる心も湧き得ないで、只それが、因習と云ふやうなものにひたり切つてゐる父親や母親に對して、家庭に對して、凡ての世の「健全さ」に對して、自分のとり得る唯一の「反抗」である氣がした。――十日ばかりの間と云ふもの、彼は毎日自殺することばかりを思ひつめて、遺書を書いて暮したり、宿の下の崖を傳つて、早川の淵に死場所を探してみたりしてゐた。親兄弟からも、友だちからも、見放されて了つた自分だと云ふ風な、淋しい氣持が、早く死なねばならないやうに彼の氣持を焦らしてゐた。が、彼は焦るばかりで、毎日々々を死ぬことが出來ずに過してゐた。さうして宿屋にぐづ／＼してゐる間に、ふと

した動機で山村と又文通をし始めるやうになつたのである。——山村も又彼と喧嘩わかれになつた晩から、神田の下宿を逃げ出して了つてゐた。さうして料理店も兼ねてゐる、この鎌倉の宿屋に來て了つたが、女中のお京と關係が出來たりして、もう一と月近くも酒色に身を持ち頽してゐた。——一二度、山村と手紙をとつたりやつたりすると、吉川はもう喧嘩した時の口悔しい記憶などは忘れて了つて、矢も楯も堪らないなつかしさだけが、山村に起つて來た。——永久に自分は放浪の旅に出る。必ず自分を探してくれるな。と云ふ風な感傷的な手紙を東京のうちへ出して、彼は箱根を去つた。鎌倉へやつて來たのだつた……。

「——實際俺の馬鹿つちやないよ。だつてね、死んだあとなんてどうならうと關はなさうなものだが、死骸をみつけた人にきたねえ奴だなんて思はれるのがイヤで、わざ／＼小田原まで出かけて、シャッだのサルマタだの足袋だのを買つて來たんだが……」

「ふん、どうせイザと云ふ刑場になりや死ぬことなんて出來もしないくせにね」

山村は毒々しい調子で、吉川の話を遮つて了はずにゐられなかつた。そんな風な氣恥しい經驗を、享樂してゐるやうな氣持で饒舌つてゐる吉川が、齒がゆくて堪らなくなりながら、

「それだから君は駄目なんだよ。そんな見榮坊な氣持のあるうちは死ねやしないよ。第一長つたらしい遺書を書いたりする精神が、そも／＼自殺の出來ない原因だね」

「さりやさうだらう。が、さう云ふけど、君だつて相應にへんな見榮坊でなくもなかつたぜ……」

かう云ひながら、吉川は箱根で、山村から受取つた手紙のことを思ひ浮べてゐた。——毎日自分は濱へ出かける。帽子と、ステッキとを砂ッ原へ投げ出して、ぢつと海をみてゐるのだ。蒼い蒼い海を視詰めては死ぬことを思つてゐるのだ。早く君もやつて來いよ。鎌倉へやつて來いよ。美しい國なら鎌倉の海の底にだつてあるぜ。などと書いてあつたのを思ひ出しながら、

「美しい國なら鎌倉の海の底にだつてあるなんかと……」

「馬鹿！　よせ〳〵」

山村は赤くなつて呶鳴つた。醉が、一時に醒めて了ひはしないかと思ふほどに、彼は恥しい氣持で胸を滿たされた。一寸の間、自分は、吉川を誘惑してゐるんではなからうかと云ふ風な、イヤな考へさへが浮んで來た。つい二三日前にも、年下の吉川などと一所になつて、葬式料だと思つて二百圓送つてくれろなどと、國へ手紙を出さうとしたりした自分が、氣恥かしく思ひ浮べられてきた。が、直ぐ又何時もの弱々しい氣持から、習慣から、酒で誤魔化して了ふより他に仕方がない、と云ふ風に考へた。

「オイ、酒がなくなつたやうだね」

「あゝない。なくなつてゐる」

吉川は未練らしく德利をとつて、ふつてみたりしてから、烈しく手を敲いた。が、階下ではなか〳〵返事をしなかつた。

「またすぐ返事をしやがらない……」

きれいにしてゐない勘定のことなども思ひ浮べられて、途中で酒を途切らかされたりした不愉快が、ふいに山村の額に青筋を浮かせた。お京が來たらとつちめてやる。と、彼は苛々しながら考へずにゐられなかつた。

「お酒のおかはり……」

山村の氣持を感じると、吉川は思はず立ち上つて、障子をあけて半分廊下へ顏をつき出しながら、から、故意と子供らしく、甘つたれた聲で呶鳴り立てた。

「お酒のおかはり……」

「しつ、靜かになさいよ」

だしぬけに、顏をぶつつけさうになつたりしながら、その吉川をさけて、お京がもの〳〵しい樣子で坐敷に這入つて來た。

「たいへんなことになつたのよ」
細い體を鹿のやうに食卓へくねらせる、それが癖の、嬌態をしながら、お京は山村の顔を視守つて云つた。
　山村は默つてゐた。
「たいへんなことつてなんだい……」
　吉川は、ピカ／＼するお京の金齒で、何となく彼女の言葉が信用なりかねる氣がした。
「あなたに一寸あつて話をしたいつて方が、階下に來たんですがね」と、お京は吉川に關はず、山村の顔を視守りつゞけて云つた。「鬼に角「松」へ通しておきましたが、あなたあつてみる？」
「俺にあひたいつて？——刑事かしら」
　怒つてゐるとは云ひながら、山村は、お京のもの／＼しい調子に引きこまれてゐた。
　山村があはて出したのをみると、吉川にも不安な氣持が移つて來て、とりすがるやうにお京の顔をのぞいた。
「どんな男なんだい」
「もう御年輩の、黑い外套を來てゐる、刑事らしくなんてない方ですがね」
「イヤ、刑事だよ」
　山村は不安な自分の疑を、取り消さうとしまいとするもの〻やうに云つた。强い口調でそんな風に、刑事だと二人の手前を我張り切ることによつてのみ、胸の暗さと戰ひ得ながら、
「あひたいつて云ふんだから、ぢや、行つてあつてみやうよ」
　立ちあがつて、浴衣の前を合せたりしながら、山村は荒々しく座敷を出た。
「お酒を持つて來てあげませうか」
　山村が行つて了ふと、お京は口元に薄ら笑を堪えて云つたが、吉川はすぐには酒などをとりよせて飲

む勇氣がなかつた。默つてかぶりをふつた。

「一人で飮んでちやつまらないの」

お京は吉川が、山村とか村木座の淸さんとか云ふ遊び仲間の、支柱棒がとれて一人ぽつちになると、ともするとてれて、やつぱり年だけの價打に子供らしくなつて了ふのを、ふだんさも一人前の無賴漢らしく大言壯語してゐるのと思ひ較べて、可笑しくも、可愛くも思つてゐた。

「つまんないつて譯けでもないが……」

「淋しいんでせう。今ね、すぐとなりに來てるんですから、淸さんを呼びませうか」

「淸さん？――まあ好いや」

鎌倉へ來てから、山村に引き合はされて、吉川はもう三四度淸さんと云ふ土地ッ子の、おとなしい道樂息子と一所に酒を飮んだが、放蕩仲間の常で、三四度のつき合ひでもう非常に親しくなつてゐた。それに、破廉恥な話をし合つてゐても、どつかあたりに軟らかなところのある淸さんと云ふ人が、彼にはたいへん好きであつた。が、今の場合には淸さんと一所に酒を飮む氣がしなかつた。ぼんやりかうして待つてゐても仕方がないから、それでは、一人でチビリ〱酒を飮んでゐやうかな、と考へた。

「やつぱりぢやお酒を持つて來ておくれよ、こゝで一人で飮んでゐるから……」

「さう、ぢやすぐ持つてくるわ」

お京が出て行くと、一寸の間山村のことが又氣になり出したが、へんに落ちついてゐたお京の樣子を思ひ合したりして、例へ刑事だつたにしたところが、たいしたことではあるまいと云ふ風に、吉川は考へた。さうして幾らか呑氣な氣持になつて、酒が來ると、お京を相手に飮んでゐた。――バタ〱と烈しい足音が廊下でした。山村の奴かしら、と思つてゐる間に、

「オイ、やつて來ないか。やつて來ないか」

と云ふ山村の聲がした。襖があけられて、笑に頽れた眞赤な彼の顏が、テカ〱と電氣に光つた。

「君のファザーアだよ……」

「親父が？……」

あまりに突然で、吉川はぼんやり山村の顔を視守つてゐた。

「あゝ、お父うさんがね、直ぐ君にもお出でと云ふんだ。俺と一所に行かないか」

「いやだ」

眞ッ暗なものが、不意に胸を塞げた。吉川は消氣て、盃を抜け出したなり食卓に突ッ伏して了つた。

「大丈夫だよ。怒つてなんてゐらつしやらない。行つた方が好いよ……」

「いやだ」

父――と云ふ名に、吉川の氣持には、少しも親しむことの出來ない、恐ろしい感じだけしか何時も附き纏はなかつた。彼は父と、二人つきりで長いこと話した經驗もなかつた。父と對してゐると、體が固くなつてきて、ギクシャクした氣持になつて了ふのが常だつた。それに、放蕩が始まつてからは、尚更意識的に彼は父をさけるやうにしてゐた。お小遣を貰ふにしても、小言を云はれるにしても、凡て彼の家庭生活では、母ばかりが相手だつた。父などには、自分の生活や氣持は少しも解つてゐまいと云ふ風に、彼は考へてゐた。ほんのたまに、見當違ひの小言を云はれる位な、極く薄い、冷たい關係しか父との間にはないんだからと思ひながら……。

「――行つた方が好いと思ふよ。どうせ一と晩中行かないと我張る譯けにも行かないぢやないか。ちつとも怒つてなんてゐらつしやらないよ。眠り薬をあげるから、一寸こつちへお出でなさいと云ふんだよ。――第一、平氣で、シャンとしてゐたら好いぢやないか。子供みたいにそんな、いやだいやだなんて駄々をこねたつて仕方がない……」

こんな風に、山村に說服されてゐるうちに、弱者らしい反抗心をあふられて、

「ぢや行かう」

と、ヤケ糞になつて吉川は云つた。さうして、山村の尻について、「松」へ出かけて行くことにしたのだつた。――「松」では父が、一人ぽつんとして、淋しさうに酒を飲んでゐた。

「また病氣が起つたね……」

優しい、父の聲を聞くと吉川は、唇を歪めて、眉を怒らせながら、下を向いて了つた。

「今、山村さんからいろ／＼聞いたが、まあ何をしたつて病氣がさせたことだから關はないが、併し、あんまりおつ母さんを心配させるものぢやない。うちぢや此間中からおつ母さんが心配して、夜もろくろくねずにゐる。お前のために、うちの中が陰氣で面白くなくなつてゐる。たぶんこゝへ來てゐるのだらうと思つたから來てみたんだが、お前のその顏はなんだ。すつかり頰がこけて了つて、まるで病人ぢやないか。人間、病氣があると何事も面白くない。面白くないとついいろんな下らないまねがしたくなる。――すんだことなどは私はなんにも云はないが、今夜は眠り藥に酒をあげるから、充分飮んで、ぐつすり眠なさい。そしてあしたはもう心機一轉と云ふ奴をやつて、私と一所に東京へ歸んなさい。東京へ歸つて、好い醫者にでもみて貰はなくちや仕方がありやしない。お前のそれは、神經衰弱と云ふ奴なんだ……」

父の言葉はもの優しいながら、どつか高飛車のところがあつた。吉川は理由もなく、つつかゝつて行きたいやうな氣持を挑發されてゐた。が、口を利くと涙聲になつて了ひさうな氣がして、齒を喰ひ縛つたまゝ、下を向いてゐた。

「山村さん、で、さつきの話のつゞきだが……」と、父は山村の方に向ふと笑ひ顏になつて、ていねいに盃をさしたりしながら、

「私の考へでは、――年よりの古い考へで笑はれるかも知れないが、先づ、家庭と云ふものを平和に、樂しいものにすることですな。それには女の云ふことなどをとりあげてはいけない。女なんてものは、どうせ譯の解らないものなのだから、お母あさんの云ふことなんぞは、氣に喰はないことがあつて

も、道理に違ふと思ふことがあつても、默つて、笑つて、うつちやつて置くやうにしなければいけない。さうして家庭に波風の起らないやうにしておかないと、お互男は、何事仕事をするにも、思ふやうに行くものでない。そりや誰しも不平はある。不平はあるが、それをいち〳〵云ふ段になると家の中が面白くなくなる。で、お互男のことだから、度量をみせて不平などを起さないやうにするのです。どうしてもこの世の中を渡つて行くのに、不平と云ふものゝあるうちは、平和に樂しくすることが出來ない。とかう私は思ふんですがね、君の考はどうです……」

「え丶、別に考つて……」

「君」などと呼びかけられて山村は、赤くなつて、ドキマギして了つた。

「なんてだらしのない山村だらう」と、吉川は悲しく、腹立しい氣持になつてゐた。不平があるから人間に進歩がある。唯平和に、樂しくとばかり心がけてゐたら、世の中は益々因習に囚はれて行くばかりぢやないか。何故反駁することが出來ないんだと、腹の中で山村をせめながらも、只苛々と興奮するばかりで、彼も口を利くことが出來ずに肩をふるはせてゐた。

「考は古くて、平凡だが、併しこれで六十年も世の中を渡つて來た私の云ふことだから、さうたいした間違ひはないと私は思ふ。君は、贊成ではないですか」

「贊成です。……さうばかりも云へないこともあると思ひますが、「それは、あなたのおつしやる意味では、それは確しかにさうに違ひありません……」

山村はぽつとしながら小さな聲で、呟くやうに、自分でも何を饒舌つてゐるかよく解らないで云つてゐた。

「さうでせう。やつぱり君は年だけあつて、よくものが解る……」

父は笑ひながら盃を吉川へもさして、

「どうだ。お前も一杯やらないか……」

二人は、固くなつて、父の相手をして飲み出した。――そこへお京が這入つて來て、直ぐその場の空氣を感じた。お酌をしたり、父へおあいそを云つたりし始めたが、何か下品なことを饒舌りはしまいかと思つて、山村はハラ〳〵してゐた。二人を、殊に山村を、父へ信用させたいつもりから、お京が氣を働かせたつもりで、お銚子の底に殘つてゐる酒を別のお銚子へあけてから下げたりするのをみると、下らないまねをしやがると、山村はムカ〳〵しずにはゐられなかつた。吉川は、山村がすつかり弱氣になつて了つてゐて、父の言葉に何でもかでも合槌を打つてゐるのが、モダ〳〵する不平の種にはなりながら、自分のために、そんな風なハメに陷ちてゐる山村が、氣の毒で堪らなかつた。山村のためにも、すぐ明日父に東京へ連れ返へされたりして堪るものか、と云ふ風な氣がされてゐた。

「まだ飮むかね……」

暫くして、もう好いかげんで切りあげた方が好からうと云ふ意味を、父が反語で云つてくれた時には、二人はホッとして、助かつた氣がした。

「いや、もう澤山です……」

と、山村が云つた。

「さう、ぢや今晩はゆつくり寢たが好いだらう……」

安心と醉とで、脇息にぐたりともたれながら、陶然としてゐる父を殘したまゝ、二人は逃れるやうに自分たちの座敷へ戻つて行つた。

――顏を見合はせたまゝ、暫くの間二人は默つてゐた。口を利き合はなくても、お互にお互の氣持を感じ合つてゐた。弱さから來る共通の、へんちきりんな興奮が、このまゝでは一と晩が過せないのを感じ合つてゐた。モダ〳〵する癇癪を、何かしらでハケ口を求めずにゐられない二人であつた。――二三十分して、お京が來た。瞬間に、お京にとりすがりたいやうな氣持が吉川はした。さつきから不快を感じつゞけてゐた山村さへも、餘裕あり氣なお京の笑ひ顏が、賴もしく、なつかしいものに思はれ

た。

「お床をのべませうね。今晩はおわかれだから、二人御一所にねなさるわね……」

「このまゝでねられるものか」

と、吉川が始めて口を切つた。

「ヤケ糞だ、酒でものんで酔ひつぶれでもしなくちや……」

かう、山村が云つたのでゑたりかしこしと吉川は、大きな聲で、

「お酒だ、お酒だ」と、呶鳴つた。

「靜かにしろよ」

と、山村はまだ「松」の方を氣にしずにはゐられなかつた。

「またお酒をあがるの？」と、お京は山村を睨んだが、すぐ又笑ひ出して、金歯をキラ〳〵させながら、「もう休んだ方が好くはない。――そりや、お飲みになるんなら「梅」に、濟さんが來てゐることは來てますが……」

「濟さんが來てゐるつて……」

「濟さんが……」

二人は思はず歡喜した。もう、お京が何と云はうが、「梅」へ行つて、濟さんと一所になつて、酔ひつぶれるまで飲み明さなくては承知の出來ない氣持になつて了つた。

「濟さんにね、直ぐこれから二人で行くからつて云つておくれよ」

と、吉川が云つた。

「だつてね、「松」の前を通つて行かなくちやならないんですよ……」

山村は、お京に云はれるまでもなく、それを氣にしてゐた。つきあたりの「梅」へ行くには、どうしても「松」の前を通つて行かなくてはならない。が、どんな風にしてその難關を切り拔けるまでも、とても

このまゝこの座敷に、吉川と二人つきりで過す氣持にはなれなかつた。

「なんとかして解らないやうに、そうつと行くよ。だから、「梅」へ行つて淸さんにさう云つておけよ……」

お京が座敷を出て行くと、二人は又意味のない弱々しい笑を堪えて顏を合したが、吉川が浴衣の裾をまくつて帶に挾み、故意と瓢逸な樣子をして拔き足差し足廊下を步き出すと、笑を忍びながら、併し、內心は眞劍な氣持で、山村も續いた。――「松」の前に通りかゝると、云ひ合したやうに二人は立止つて、廊下へへいつくばつて了ひながら、怖る〱這ひ出した。氣は立つてゐながら、晝間から續いた酒で、二人の體は弱つてゐた。呼吸をのみこみのみこみ、額に汗をかきながら、只はるかつきあたりの「梅」ばかりが賴りの思ひで、二人は這つて行つた。這つてゐる。と云ふ意識が又二人の氣持を暗く、弱々しいものにしてゐた……。

「やア、お揃ひでこれは〱」

淸さんは、もうどつかでよほど飮んで來たあとゝ見えて、トロンとした目をしてゐた。

「あゝ苦しい」

「苦しい」

二人は大袈裟にハア〱呼吸をしてから、淸さんに向ひ合つて食卓に坐つた。――吉川がどんな苦心をして自分たちがこゝへ來たかを話すと、山村もハシヤイだ氣持になつて急に、雄辯をとり戾した。――淸さんに訴へでもするやうに、今夜のいきさつをかいつまんで話したりしながら、

「――なにしろ、どうしたつてこの人を誘惑してゐる惡友つて、僕の役だらう。役が惡いやな。それが腹にあるもんだから、何を云はれたつて意氣地なく合槌を打つてたのさ。この人はお父つさんと議論をする氣なんだ。そりや議論は僕にも出來る。が、僕としちやあの場合議論なんてしてゐられる道理のものぢやないぢやないか……」

何を云はれても、嬉しいことを聞いてゐる小娘のやうに、濟さんはニヤ〳〵笑つてゐた。――……――その人の好さに乘じて、山村の雄辯はとめどがなかつた。――お銚子が新らしく運んで來られた。數々の肴が、食卓を滿した。山村の雄辯を中心にして、お酒もりと云ふ言葉に似合しい感傷と、談笑が、三人の間に起つてゐた。

――だしぬけに、全く不意に、重ッ苦しい憂鬱が、吉川の胸に來た。吉川は盃をおいて、居堪らなくなつて立ちあがつた。出窓のところへ行つて腰かけながら、雨戸をあけて空をみた。曇つた空で、星一つ光つてゐない。微風が、悲しく肌に這入つた。彼はさうしてぢつと、二人の飲み友達から離れてゐた。ちやんちやら可笑しい、と云ふやうな氣持で聞いてゐた母の言葉が思ひ出される。――そりやお前は少さな子だつたよ。あんまり少さいんで生れ立てにや女の子かしらと思つた位。泣き蟲で、乳ばなれが惡くつて、ほんとに乳ばなれの惡いにや困つて了つた。芳子がすぐ出來たからだけれども、お前はお父うさんに抱いて寢てもらつてゐたのだよ。ところがお前つたら夜中一と晩、お父うさんのお乳をしやぶり通すものだから、お父うさんのお乳は赤く、爛れてしまつた。シャツを着るたんびにこすれて痛い痛いつて、お父うさんは腰をかゞめて歩いてゐるなすつたんだよ……。空をみてゐるうちに、吉川は堪らなくなつて、わつと聲を立てゝ泣き出した。

「どうしたんです」

と、濟さんがふり向いて云つた。

「馬鹿！　泣くな泣くな」

とつぜんに吉川の襲はれる感傷に、山村はなれてゐた。また始まつた、と思ひながら彼は立ちあがつて、吉川を抱きかゝえるやうにして、食卓の側へ連れ戻した。

「泣くな泣くな。飲みや直る。俺と一と晩飲み明さうよ。な、……」

が、感傷は山村にも移つて、彼も又かすれたやうな、鼻にかゝる聲を出してゐた。

兄貴らしい大きな、油つこい山村の手を肩に感じながら、泣きながら、吉川はヤケ糞に酒を飲みつゞけた……。

朝、父は出立を急いだ。赤く血走つた吉川の目をみると、憔悴し切つた息子の様子をみると、一刻も早く東京へ連れ戻らなければいけないと感じた。吉川はもう反抗する力が自分にないと知りながら、習慣的に、歸るのはいやだいやだと仇な强情を張り通してゐた。お京の列べてくれたわかれのお膳に、山村と父と三人でついた。が、彼は一と箸ものを喉へ通すことが出來なかつた。唇を嚙んでゐた。お膳の上の、田舍料理らしい大きな黄色いふは〱したタマゴ燒が、巴になつてゆれるやうな印象を、クラクラする彼の頭に殘した。御飯がすむと、直ぐ出立することになつた。山村は一と言も物を言はずにゐた。彼は父に引きづられるやうにされて町へ出た。停車場の方へ向つた。陽に向ふと、不意にハラ〱と淚が溢ちた。カーッとのぼせて來た。が、彼自身では冷靜な氣持のつもりであつた。——うちへ戻つたら、でれかくしに、あくまでも病人を氣取つてゐなければいけない。飯なんぞは食べずにゐることだ。もしお腹が空たら、三度々々戸外へ行つてアンパンの買ひ食ひをして過してゐたつて好い。などと考へてゐた。——停車場へ着た。列車の中には、父との他には誰もゐなかつた。父は中折をぬいで、ハンカチーフで顏をふき始めた。吉川は袂からくちや〱になつた敷島の袋を出して、生れて始めて父の前でスパ〱と煙草を吸つてみた……。

（八年九月作）



大西洋、地中海、蘇西運河

――或る人の長い紀行の一部――

三島章道

（一）

「それぢやさよなら……」

「さようなら……」

運動で鍛へられた逞しい叔父の手を、花車な手で強く握りかへした清春は、暫くそれを離さうともしなかつた。清春は淋しい顔で、ぢつと叔父の面差を凝視て居ると萬感が胸にこみ上げて來た。そして眼には早くも涙が浮むで來て、この車窓にわつと泣き倒れたいと思つた。叔父も彼の手を離さなかつた。涙ぐむだ眼で彼の顔をのぞき込むで居た。西洋人なら此時二人は堅く抱き合つて接吻したのであらう。叔父の顔には同情の波が寄せては打かへした。

――可愛さうな此子よ。此子はいつも本統に不幸なのだ。小さい時にはいつも病身だつた。やつと丈夫になつて遙々歐羅巴に勉强に來たかと

思ふ間もなく父を失つた。そして涙に濡れてたつた一人で暗い故郷に歸らねばならなくなつた。此子はいつも誰か親身の者と一緒だつた。こつちへ今度來る時も澤山の叔父や從兄達と來た。しかし今こそ長い〳〵一人旅をするのだ。初めて孤獨になるんだ。しかも涙に濡れたこの一人旅は如何に此の可憐な子に淋しい事であらう。此子は素直な優しい子だ。それだけに此涙の旅は重荷のやうに思はれる。しかし人間は苦しまなければならない。この子にとつて此旅は決して無意義な事はない。此子は苦しみを知らずに育ちすぎた。此苦しみはいゝ藥となるであらう。しかし隨分苦い藥だ、可憐そうに……。可憐な甥よ。さようなら――叔父はこう心に思つた。そうして其心はよく淸春に涙の香で傳へられた。其を知つた淸春は又其心にあまへて泣きたくなつた。自分で自分が可憐そうでたまらなくなつた。

「體をお氣をつけよ。印度洋は熱いからね、ねびえなんかしないやうに……。歸つたらお祖母さんやお母さんに宜しく……」

「えゝ。ありがとうございます。體はもう大丈夫でございます。叔父樣も大切にね。どうも近頃お咳がお出になる樣でございませんか。スパニッシユ風を拗らして肺炎にでもおなりになるといけませんよ。倫敦は本統に嫌な氣候の所ね。氣をつけて下さいましね。おや、さようなら……」

二人は惜しそうに手を離した。そして淸春は其手を大宮夫人の方へさしのべた。

「奥さん。何から何まで大變お世話になりましてお禮の申上げやうもございません。何卒大宮さんにも、お子さん方にも宜しく。……早く日本へ歸つてお出遊ばせね。又日本でおめにかゝりませう。そして直ぐ又今度お出の時は御一緒にお供したうございますね。……御祖父樣やお母樣にはこちらのお話をいたしませう。…… さよなら。……」

「難有う。淸春さん。本統に今度は御一緒だとようございますわねえ。お母樣によろしくね。時々はお便り頂戴ね。さようなら……」

英語ばかりの空氣の中に、銀鈴のやうな大宮夫人の美しい日本語が流れ響いた。大宮夫人の手を離し

た彼は、父の關係して居た會社の人々が見送りに來て居るのを一人々々堅い握手を交はしながら、難有う、さよならと、名殘惜しさうに繰返した。その中には淋しい悲しい彼の一人旅を慰め様とて、優しい心づくしの紀念品を窓の中に投げ込む人も居た。それ等の小さな愛のしるしを、清春は溫かい咽ぶやうな心持で、その品もこゝろも難有くほゝ笑みのうちに受け入れるのであつた。汽車はいつしか動き出して居た。彼は半分體を窓の外にのめき出して、ハンケチを振つた。しかし倫敦の冷たい冬の霧は、いつまでも彼の懷しい人々を見せて置いてくれもせず、ぼうつと直ぐ包むでしまつた。あとはパディングトンの煤つた壯大な停車場の外郭が黑く暈されて見えた。煤つた重々しい石の家々には寒さうな人々が見えた。レールに近いアスファルトの道や、枝ばかりのプラタヌスの並木や、喧しい自働車や黑ずむだ電車や歐羅巴人や、それらのものは後へ〱飛んではすぐ霧の中に葬り去られた。清春は此倫敦が後へ後へと消えて行くのがたまらなく名殘惜しかつた。何となく藝術的な巴里の空氣の好きな彼には、冷たい倫敦は何れかと云ふと嫌いだつた。其倫敦が今となつては去るのが悲しかつた。彼を倫敦嫌いにさしたのは英國崇拜の日本の所謂紳士連であつた。彼が未だ巴里に居た時分、彼の周圍の日本の所謂紳士連は、何でもかんでも英國と云へば感心し、倫敦と見れば賞めた。そして巴里だけならいゝとして何かにつけて又日本の惡口を云つた。彼には巴里はともかくとして、日本人の癖に日本の惡口を云ふのが不愉快であつた。又彼が巴里で勉強したいと云ふのを「巴里は遊ぶ場所だから倫敦へ行け」と御自身達が巴里を遊び場所と心得て居る考へから判斷して、親切ごかしの形式な取越苦勞と、半ば嫉妬的の注意を、しば〱いろ〱の人から與へられる度に不愉快になつた。それで清春はなほ反動的にも「己は巴里でやる」と云ふ其意志を强く增さした。清春は產れてから、未だ遊蕩の味なるものを知らなかつた。それ故巴里は遊び場所と云はれる度に、彼は遊ぶ奴は巴里に居たつて、東京に居たつて、倫敦、北京に居たつて遊ばうと思へば遊ぶ。勿論空氣も大きなものであらう。しかし空氣よりも人間問題だ。又御自身達のかくれてやつてる事を何故若い者にだけいけないと云ふのかと云ふ事も解らなかつた。彼は巴里が自分の

勉强にいゝと思ふから僕は倫敦へは行きませんと云つてゐばつた。しかし英國に心酔した日本の紳士連は、眞面目に彼の事を考へてくれゝばくれる程、一人でも多く英國仕込みの後輩を作るのが國の爲にも、彼の爲にもなるやうに考へて彼を倫敦へやらう〳〵とする力は實に盛んであつた。彼も英國の紳士の中にいゝ人を澤山知つて居て、さういふ人は好きであつたけれども、周圍から攻められゝば攻められる程、なんとなく英國人は型ばかりの上面の淺薄の丁度日本の紳士のそれに似て居る氣がして嫌であつた。彼が父の死の爲に再び倫敦の地を踏むだ時、彼はわざとあらゆる倫敦の惡印象を書きつらねて、英國崇拜の日本の紳士の前へ送つてやつた。人から素直だと云はれる彼は實は其位執念深い意地ばりのきかんきであつた。その倫敦が今はやはり名殘惜しくてたまらなかつた。彼は次第に疎になつてゆく四五階の石の家々を、一寸會つてすぐ親しくなつた友に別れるやうな心持で見送り見送りした。彼が幼い時からの、西洋の文物に對する憧憬が又々彼の心に一ぱいになつて來たやうな氣がした。巴里に來てから未だ一ヶ月程しかたゝなかつた或日、彼を自働車に同乗さして程近い、サンクローの公園に向ふ道々、外交官の一人の小父さんは

『どうだね、日本にかへりたくはないかね？』

ときいた時彼は、

「さう、とき〳〵もうかへりたくなります」

と云つた程、來るとすぐからもう日本を戀しがつて居た彼が、父が死んだと云ふ一言に、如何に彼は慕郷心を削いだ事であらう。彼には明るい樂しい故郷が光も消えた暗い谷底のやうに變つてしまつた氣がして、もう家庭へかへりたくなくなつてしまつた。しかし、二人の男の子を二人共外國にやつた留守に夫に死なれて途方に暮れて居る憐れな母と、杖とも柱とも頼る息子に死なれて迷ひ果てゝ居る老ひた祖母を思ふと、これから五十餘日の航海は如何にまどろつこしい氣が彼にしたらう。西伯利が通れたら……。日本の樣子がもう少し知れたなら……。こんな女らしい愚痴が彼の口から洩れ〳〵した。た

つた一本の電報で父の死を知つて暗い谷底へ蹴落されて行くのは餘りにあつけない氣がした。

倫敦が次第に離れるにつれて霧は次第に乾いて行つた。汽車は小さな停車場に止り止り轉がつた。見渡す限り岡に岡が重つて、其所々には赤い屋根の小さな百姓屋が散らばつて居た。岡の上にはポプラーなぞの林や、名も知れぬ大木が、あして、こゝの寒空に枝を枯して突立つて居た。その中には羊の群がいくつも〳〵遊んで居た。或所には馬の群、或所には牛の群、それは子をつれたり、鈴を首につけたり、嘶いたり、欠伸したり、寢たり、歩いたりして實に平和な豊かな心持が漂つて居た。英國の貴族が垣根を乗越え〳〵ハンテングをする繪をよくみたその垣根が、到る所に續いて、堀も續いて居る、どうしてこんな廣い堀、高い垣根が馬が越え、犬がはね飛ばれるだらうと思はれる位である。畑には太いペルシユロンの馬が重さうな農具を引いて、破れ洋服を着た鬚むじやな百姓や、戰爭の結果、男代りの可憐な女の子に御されて働いて居る。畑でも牧場でもない叢の中からは、幾頭かの野兎が汽車の響に驚かされて、ピヨン〳〵飛び出しては、矢よりも早く逃げて行くのがいつまで小さく見えたりした。清春はこんな自然の景色に、子供のやうな無邪氣な眼を見張つては喜んだ。そして土産話を父にしやうと思つては、あゝ父は死んだのだ、それで歸つて行くのだつけと思ひなほして、又悲しくなつたりした。彼は列車給仕に辨當を誂へたら、冷肉とハムと卵とパンにバタがついたのと、酸いネーブルが一つ付いて、お茶とを持つて來た。「今度の戰には、大英國も餘程きいたな」と行きがけの時、此汽車中で同じ此プアな辨當を食つたとき、ある軍人が云つた言葉を彼は今又思ひ出してほゝ笑むだりした。

朝倫敦を立つた此汽車は大變後れて四時頃リヴアプールに着いた。緯度の高い此地には、早くも黄昏が訪れて來た。彼が黒ずんだ停車場に下車してバゲージを赤帽に頼むで、郵船の大馬四頭挽きの荷馬車に乘せさせて居ると彼はかねて知り合ひになつたS會社の平田氏に會つた。彼は此知人の日本人の側へ走り寄つた。二人づれになつて停車場を出やうとすると、言葉の出來ない支那人が、解らぬ英語で船までつれて行つて呉れと云ふやうな恰好をした。清春は東洋人は兄弟のやうにすきだつた。それですぐ話

かけてみたけれど、英語が一向通じなかつた。兎に角船に乘るのだけは確らしいので一緒につれて行く事にした。二階付の電車からは、煤つた石の家々が薄暗の中にポカリ〳〵と火を浮き出した。大時計を屋根に頂いた有名な大きな建築も見えた。電車から下りて船まで行くうちには、貧乏人の子が荷物を持たせろ〳〵と云つてうるさくついて來た。小さな物を持たしてやると、うよ〳〵と船までついて來た。煤つた小さな荷物船だ。それでも日本の旗を英國の夕風に飜へして居る船は、美しい大きな英國船よりも如何になつかしい船であらう。乘客は一々軍人や官吏に一人々々調べられて、板の斜めに渡してあるかけ橋を渡つて淋しく自分自身の黑い影を船の上まで運むだ。

聽て耳を劈くやうなガンガンと云ふ鐘の音を暗い冷たい異國の空を彷徨ひ散らして、日本の此船は、食堂の第一回を開くのであつた。淸春は此鐘の音を聞くとあの樂しかつた「來る時」の事を思ひ出した。父母も祖母も愛人も、彼の故郷では皆健全であつた。彼は其等の人々の事が念頭から離れもしないし、又いつも心は引かされ勝であつたけれど、彼の心は希望と邁進に燦爛と輝いて居た。彼の心は小鳥の様に自由で、大鳥の様に愉快であつた。太平洋と大西洋の荒波を蹴つて行くその日〳〵を、あの鐘の音に運ばれて、賑はしい食堂へ出る日課は、一日々々と學問の都の戶をたゝいて居るやうな感じがした。學問と知識と最新とに對する憧憬が彼の心を孔雀のやうに輝かした。その同じ鐘の音は今は如何に淸春の心に辛く重々しひ掩ひかぶさつて響くのだらう。そしてこれから、荒い、寒い、暑い、搖れる、もまれる海を、五十何日を三倍して百五十何遍もあの鐘の音で耳を痛め、心を貫かれるのかと思ふと、淸春は實にうんざりした。

食堂で一等船客は出揃つた。日本人は淸春共四人、他に東洋人が三人、あとは皆歐羅巴人であつた。食後彼は三通の電報を受取つた。其は父の關係して居た會社の重役の酒井氏が巴里から下すつた "Bon Boyage!" と同じ會社の倫敦の小泉氏からの同じ文句のと、それから、もう一つは倫敦の叔父から「新嘉坡、香港、上海で自分の友を呼べ」と云ふ英文のとであつた。淸春は三人の暖かい心を皆それ〳〵厚い

感謝を持つて受けいれ、すぐ返事をかいた。彼は人々と云ふものは、どうしてこう親切で温かいものだらうと思つた。彼は酒井氏が好きであつた。彼は「來る時」も氏と一緒に來て隨分世話にもなり愛されもした。古泉氏には倫敦で世話になつた。又叔父が甥い旅を心配して居る愛の心には肉身の感謝が湧くのであつた。清春は一體人なつこい質であつた。誰かれの差別なくすぐ友達になり、少しでも厚意を見せられると、のぼせ上つて喜び、こつちもそれに倍して厚意を持たうとした。それ故よく人々から騙された。しかし又騙されたり、侮辱されたり、いじめられたりすれば人一倍怒りつぽて癇癪持であつた。しかし怒つたり、怨むだりして居る嫌いの人も面と向つて話したりすると、其人の何處かにいゝ所や憐れさを見出しては、大抵の場合怒りも怨みもとけて、「この人はやはりこんなにいゝ人だ。自分はこの人を怨むだりしてすまなかつた。」と思ふ場合が多かつた。そして「世界中の人はやはり愛すべきいゝ人達ばかりだなあ」と思ふのであつた。

暗いキャビンの中に同室の支那人が入つて來た。これはさつき停車場からつれて來た人であつた。清春はにこ／＼しながらこの同室の東洋人を迎へた。すると支那人はポッケットから紙切れを出して「テレグラム、ロンドン、ブリーズ、ブリーズ」と云つた。紙切には「無事上船した安心あれ」と云ふ意味が英文で書いてあつて、倫敦駐在の日本大使館の書記官宛になつて居た。清春にこれを打つてくれと云ふのらしかつた。世話ずきと親切とを持つて自ら任ずる彼は、早速電報用紙にそれを認め、キャビンボーイを呼むで出さした。すると今度は「センキユ、センキユ（Thank you のこと）、マイ、バゲージ、ノー、ファインド、ブリース、ブリース」と云つて、泣面をしては舌打をした。清春は彼が荷物が見付らないで困つてゐるのだなと察した。それで

「それじや己が一つ見て來て上げやう」

と云つて方々勝手のわからぬ暗い船の中を見て廻つたがよく解らなかつた。話によると、とにかく荷物が船にのつてる事だけは確められたので、明朝スチユワードに探させる事にした。すると今度は「ウ

オーター、クロチエット〳〵」と云つた。便所は何處だと云ふのらしかつた。それで彼は又この大きな赤ん坊を便所につれて行つた。暫くすると先生出て來て、顰め顔をし泣聲を出して『ハーディ、ハーディ……うーん、うーん」と云つてきばる眞似をした。ハーディとはハード(hard)のことで通じが堅くて困ると云ふのらしかつた。清春は思はず、プッと吹出して了つた。もう餘程西洋化されて居る彼は「失禮なことを人の前で云つたり、したりする人だ」と思つたけれど、お互ひに東洋人だ、人間の自然を話すのに何の失禮もない筈だと思ひなほしたら、尚ほおかしくつてたまらなくなつた。所へボーイが身元調べの紙を二枚持つて來た。清春は一枚に自分のを書いて、一枚を支那人に渡すと、彼に書いてくれと云つて、パスポートを出して、『シクレタリ〳〵」と云つた。パスポートは佛文で露國駐在支那公使館の書記官らしかつた。彼は支那人が英語は出來ぬが佛語が出來ると云つたので、喜んでこんどは佛語でやつて見たら、やつぱり解らなかつた。すると今度は獨語か露語ならわかると云つたが、それには清春がだめだつた。するとボーイは「仲間をつれて來ませう」と云つて他の二名の東洋人を支那人かと思つてつれて來たら、それはシャム人で倫敦大學を卒業して今歸國する所だと云つた。清春はシャム人に、支那人と間違つたことを謝し、實はこう〳〵で言葉がわからず困つてるなどと話して、その東洋人ともよい友達にならうなぞと云つた。それで今度は清春が得意の漢文で筆談しやうと計つたが、今の若い日本の青年中では得意の彼の漢文も、本家本元の人の前に出したら、みすぼらしい迄貧弱なもので到底筆談などとは思ひもよらなかつた。やはりブロークンの英語と手まねが一番よかつた。仕方なく身元調べにはいゝかげんの事をかいてやつた。又支那人は風ひきで咳をし痰を吐き、明日船醫につれて行つてくれ、金は拂はなくていゝのかなぞと云つた。餘りひつこいので清春はもう世話が嫌になつて來た。それにこの支那人が暗愚、遲鈍、蒙昧なのとが、神經質の清春をいら〳〵さした。親切を持つて自ら任ずる彼は決して本統の親切ではなかつた。彼は都合のいゝ氣まぐれの親切者であることを暴露した。彼は自分の餘りに僞善者である事を申わけなく思つたけれど、いら〳〵する神經をどう喰ひ止める

事が出來なくつて、むら〳〵癇癪が起つて來た。所がいゝ事が二人の上に舞つて來た。それは支那人が『ユー、ヤング、メン、ハッピイ。……アイ、オールド、メン……』と云つて溜息をついて、彼にいくつかと云つた。清春が二十二だと云ふと、支那人は『アイ、アム、ファイフチイファイヴ』と云つた。蓋しこのファイフチイはフヒフチイ（bifty）の誤りで五十五だと知れた。五十五！五十五！この一語は如何に清春の心臓を貫いた事であらう。彼の父は五十五で死んだ。彼はたまらなくこの一聲に支那人が懐しくなつた。可憐そうになつた。此人にも自分のやうな子が何處かに居やう。子供に離れて老年の身を言葉も通じない異國の空に、孤獨の夢を結ぶのは如何に淋しい事であらう。自分は出來るだけこの人を温かにして、よくしてやらねばいけない。あはれな老人よ。この人の死も、もう遠い事ではあるまい。なんだか氣の毒の人だと思つた。彼は父が君と同年でそして一寸前死んで、今國へ歸つて行く所だと云つたら『オウ〳〵』と云つて支那人も同情してくれた。

『さよなら、もう寢ませう。またあした……』彼はこう云つて支那人の手を堅く握つた。支那人は咳をし痰を吐きつゝ寢た。その日な清春の父の誕生日であつた。

翌早朝船は錨を卷いた。舳と艫には、太い綱をつけて、それぞ小蒸氣が引つぱつて、棧橋から離れた。船のブリッヂからはメカホンの鐵の響にふるえた、英國人の水先案内の聲が雷のやうに降つた。岸には數十人の英人の人夫が作業して、海軍服を着けたオフィサーが何かしきりと號令をかけた。船は渦卷をつくり〳〵棧橋から離れて行つた。すぐ脇には英國海軍旗を飜へした飛行機母艦が幾臺かの飛行機を積むで居た。水兵等がしきりとこつちを見て帽を振つた。我々も兄弟のやうな心持でそれに答へた。岸を離れた船は、やつと船が通れるか通れない位の堀を通つてドックみたいな所から出た。リヴアプールは干潮と滿潮の差が甚しいのでそんな所で船は碇泊して居るのであつた。廣々とした川に出た船は、自分のスクリユーを廻轉しだした。兩岸の家々は朝靄の中に濕つぽく暈されて、有名な大時計はその中

に混沌と霞んで巨大な姿で昔を語つた。石の家々は冷たい朝の呼吸を繰返して、靜けさは市の上を掩つて居た。船は泡を掻き立て〳〵川を下つた。川には澤山の船が帆柱で空を突いて居た。兩岸を聯絡する小蒸氣は衝突しそうに側を掠めたりした。その中には滿載された小人(こびと)のやうな歐羅巴人(ヨーロッパじん)が皆靜かにして居た。數多の船舶にはみなカムフラージ（敵艦を恐れ海上で視線をごまかす爲に色々の色に塗りたくつてあること）がしてある。そして艫の方には大砲を具へたりして居る船が多い。それを見ると戰時中の恐怖の中に航海した人々の心が思はれた。船は川口を出てブイとブイとの狹い間を、海鳥の群に掩ひ包まれて走つた。或る所には沈沒した船の帆柱(マスト)だけが海面に出て居たりした。英國の海岸は美しい。岡の上には圓いお城のやうな古い家も見えたり、町の屋根の赤くきらめいた家々は、松などの常綠木(ときはぎ)の中に包まれて、美しい色のコントラストをして、海岸のまばゆいばかり白いコンクリートを壓した。それらの懷しい陸(くが)を、船は刻一刻と離れて、荒波むせぶ大西洋上へ〳〵と乘り出すのであつた。淸春はドプン〳〵と船緣を洗ふ波や、その白い重吹を凝視(みつめ)て、遠い旅の空を仰いでは溜息をついた。海上からはもう何物をも見る事が出來なくなつた。時節帆をかけた漁船などに、鬚むじやな漁師共が乘つて。何か云ひながら船の横を掠めたり、カムフラージをした大船とすれ違つたりする位なものであつた。

美しい夕ぐれ時、船はある島のやうな所へ着いた。それはホリヘッドの島であつた。海面は島がくれの夕凪に油のやうにトロトロととけて居た。船はエンジンを次第に靜かにして、果ては惰力で走つてその油の中に一筋の泡を殘して辷つて止つた。すると島からはボートが迎ひに來た。水夫案内(パイロット)は“Good bye! good bye!”と皆に挨拶しながら繩梯子を猿のやうに、身輕にする〳〵と下つてボートに落つこち、オールの響を靜寂の海面に散らして行つて了つた。村の家々の赤い屋根には强い夕日が反射して、石の白さはくつきりと靑い海の上に浮むで居る。村の脇には大きな〳〵岩石の岡があつて、其上には城のやうな圓い石の家が、がつしりと坐つて居る。その岩石の岡の下部は、恐るべき絶壁で其下には靑く淀むだ海がいねむりをして居た。その前にはたつた一つの雞の頭のやうな形をした岩石が、ニ

ヨツキリ海中から聳えたつて、その小さな岩石の島の上には、幽かな光を放つた燈臺が、ピカ〳〵と光つた。其島と岡とには鐵の釣橋がかゝつて、其邊りには夕日が處女の唇のやうに赤く匂つて、海上には黃金(こがね)の粉沫を散布した。船は再び動き出した。燈臺のある岩石の小島の下の邊りには小さな砂のやうな浪がペチャ〳〵と石をしやぶつて居るのさへ手に取るやうに見せつゝ通り過ぎて、其島を迂回し、又大西洋上へと乘り出した。淸春はこのホリイヘッドをイングランドの西南の端(はし)にある島かと思つたら、まだ〳〵其處までは、今迄來た二倍も行かなければ達せぬ事を海圖(チャーター)で見せられて、又うんざりした。

船はそれからは一點の陸地をも見る事の出來ない大海原を、晝となく夜となく、ガタゴトと云ふエンヂンの音のみたてゝ、黑煙と水の線とを殘して搖れて行つた。ビスケ灣を通る頃は俄に寒氣が加つて、波は高く海は大荒れに荒れた。トランクがベットの下から轉がり出すやら、棚から色々の物か落ちるやら、果ては波の手が、ひどい拳骨でキャビンの扉(ドアー)をぶん擲つたりした。多くの船客は皆青い顏をして仲々食堂へ出られなくなつた。廣い〳〵此大海に、船はけし粒より餘りに小さすぎて、一つの波のうねりが、これを飮み込まうと思へば容易に飮込める運命の中に弄ばれた。しかし船に强い淸春は一向平氣で、同室の支那人が「シック、シー、シック」と泣聲を出し顰め面をして居るのを、一つには氣の毒に思ひ、一つにはその姿や顏が滑稽なのをおかしくつてたまらなくなつたりした。こんな日が二三日續いて、ホルトガルの沖を通る頃には又平穩の日が舞つて來た。廣い〳〵海の中を船は平常が這うより遲(のろ)く、幽かな歩みを續けて居るばかりであつた。船はキラ〳〵光る春の光を浴びて、舳に切る浪の重吹(しぶき)に、美しい七色の虹をつくり〳〵、或時は魚などの群と競爭して歩みを續けた。淸春はよく船の舳に只一人立つて、果のない大海の行手をもどかし相にながめたり、ドブン〳〵、ザア〳〵と浪を切つてゆく舳の尖端を凝視たりしては上へ下へと搖れるピッチングに輕く體をゆだねては溜息をついた。こんな時彼の頭は父の死で一ぱいになつた。このむら〳〵と頭上に浮き漂ふ雲の中、又もう〳〵と立ちのぼる脚

下の重吹、これらの白い朦朧としたものゝ中に、父のあの優しい〳〵顔が見えはしないだらうか。こんな非現實的な考へが病的になつた彼の頭の中に浮び〳〵した。それらの朦朧の中よりは、すでにさう思ふ彼の涙のゆげの中に父の優しい笑顔はこぼれて居た。彼は父の好きだつた小唄などを歌つては、ぞうつと戰慄した。たまらなく父が戀しくなつた。色々な古い〳〵懷しい、とりとめもない思ひ出が彼の眼の前に現れ〳〵した。中にはこんなのがあつた。彼が二ッ三ッの子供の時、疊の上に小便をしたいとだゞをこねたのを、父が婆やに命じて緣先へさしたと云つて癇癪を起して泣きやまなかつた。父母は困つて「それならしてもいゝからしろ」と云ふと、もうしてしまつたので出ないと云つて今度はわめいた。すると父が土瓶の中に水を入れ、黄色の繪具を混じて、彼の小さな股の間から、土瓶の口をだして、ジャア〳〵と云ひながら疊の上についだので彼はやつと納得したと云ふ話をよく父がしてくれたあの幼い美しい思ひ出も中に混つて居た。それから〳〵と色々な思ひ出が毎日々々思ひ出された。そして終にはもうどうしていゝのか、何が何だか、わけが解らなゝ頭が亂れた。

皆が健全だと云ふ日本からの手紙に安心しきつた巴里の或日、たつた一本の日本からの電報で父の死を知つて、その電報を持つたまゝ、寒い〳〵凍るやうなフラスド、ヴァンドホムのペイヴメントの上を宙をとんで、叔父達の居るオテル、ブリストルに狂氣のやうになつて、自分自身の體をたゝき込むだあの日の恐ろしかつた事や、オテル、コンチネンタルの一室に父の手紙を頰にあてゝいつまでも〳〵、夜が更けゆくまゝに泣いて居て、その手紙が涙でびつしよりになつたことなどもつい昨日のやうな氣もした。日本を立つ時、父が涙をかくして居たあの嚴かな氣高い顏も思はれて、父が彼の洋行を如何に淋しがつて居たかと思ふと氣の毒の氣がした。淸春は二三年前日本で書いた「夏の日記」を出版した本を、常に離さず持つて居た。それには彼が洋行前、父とその相談をする所の事が小說風に一寸かいてあつた。其時は勿論彼はある筆の惰力で、そんなことをかいてしまつたので、其の作に自信があるわけでもなかつたが、今となつて見るとその一節が如何にも懷しいありのまゝの記念の氣がした。どつちかと云

ふと仕事至上論者の彼は學問の爲に愛する人々と別れて旅立つのは武士が戰場へ行く樣な勇氣はあつたが、彼はよくその一節をよんでは、父に淋しい思ひをさしたまゝで死なしたことを何よりもすまなく思つた。其時は未だ歐洲戰爭のすまぬ前だつたので、彼は一先づ渡米してしかる後、戰でもすんだら目ざす巴里へ渡る心算で居た時だつた。その一節にはこんな事がかいてある――「自分は歸る道々も、父に逢つたら直ぐにもアメリカ行の船をきめて貰はうと思つて居た。自分は早く米國へ行きたい。（中略）しかし父の顏を見た時、自分は又例の如く此話は口へ出なかつた。父は一日の仕事ですつかり疲れて居た（父の體は弱いのと非常の多忙とで毎日殆んどへと／＼になつて遲く歸つて來る）のを見るともう、こんなに父が働き母は又其お附合に暑い東京に止つて居るのに、僕等は勝手に飛んで歩き贅澤をして居るのがすまないとつく／＼思つた。そしてこんな疲れて居る父の頭に、心配問題（自分にはさうでなくとも父には確かにさうだ）を投げ込みたくないと思つた。そして咽喉まで出るのを堪へた。其堪へ方は如何にも自然に出來た。そして明朝云はうと思つた。（又明朝になれば澤山來客があつたり、切角父の氣持のいゝ朝の頭を煩はせたく無く思ふのを知つてながら）。父は米國の大學出なので小さい時から僕にも米國の大學へ行つた方がいゝと云つて居て、今秋行く事に僕のせびりによつて今春許したのだ。しかし父は醫者も大丈夫だと云つたのに未だ僕の體の餘り丈夫でないのを心配して居る。父は非常の心配性の取越苦勞屋である。何事につけても大事に大事を取らなくては仲々我慢が出來ない。其は父の長所で又短所である。殊に自身の身内の者の體の事は先の先迄安全を計らねば承知出來ない。父は今僕が米國の大學に入つたら病氣になりはしないかと云ふ事を心配し出したのだ（尤紐育は非常に氣候が惡くて、父の行つた頃も一緒に行つた人の中、體の弱い人は皆病死したさうだ。父は其頃は非常に健全であつた）祖母は自分の米國行は初めから反對である。其は自分を離すのが嫌が其大原因であるが、父にも母にも自分はそれを見出して居る……。父母は久しぶりの對面を喜むだ。自分はそれでなるたけ二人の好き相な話ばかりした。自分は兩親に逢つて居ると心が何となく溫かになつた。何か溫かなものが三人の胸の

中を流れ〳〵て居る樣な氣がした。「あゝ僕はこの二人を如何に愛して居るだらう。其愛は餘りに盲目かもしれぬ。しかし盲目なら盲目でいゝ。僕は此温い氣持を壞したくはない。僕は此中に浸つて居る間幸福だから」と思つた。父は實際いゝ人間だ。顏は隨分こわい顏だが心は優しい。自分等には殊に優しい。何れかと云へば甘過ぎる。（しかし甘い事はちつとも惡かない。寧ろ美しい。）自分は物心がついて未だ父に怒鳴られて怒られた事がない。（小さい時叱られた事はある）しかし諭された事はある。自分は一體年長者のお說法は大嫌いで、されると怒るが、父にだけはへこたれた。其は父がきつと愛の雰圍氣の中に僕を置いて諭すからであつた。或時は父の眼には愛の涙が堪へられた事もあつた。そういふ時自分は毎時も父に只同情して了つた。又父は理屈で解いて呉れるので、成程と感心させられ、惡かつたと思はせられる。そして僕の思想と一寸位違つた事でも（父と僕とは時代故如何しても思想はいくらか違つてる事は否まれぬ）自分は父の愛に動され同情し、父の爲に父の方へ從ふ事もあつた。（中略）自分は世間の奴が不幸者を罵倒するに反し、其多くは不孝者に同情する。何故なら親が子を本統に沒我的に愛せば、子は又いつかは親を愛せずにはいられなくなる樣な氣がする。不孝者の多くは其親も惡いのだ。「子は親の所有物」「親々たらずとも子々たれ」なんと云ふ事が惡いのだ。世に孝行を說く敎育家はもう少し親に自然なるべき沒我的の愛を說いたらどうだ？」――

こんなことがまだ〳〵かいてあつた。濟春は人知れずこゝを讀むのがすきであつた。彼は傲慢な我儘息子であつたが、一方父を人一倍敬愛しても居た。これを讀むで居る時は、父がどうしても死んだと思へなかつた。けれど彼が船に乘つて居る事に氣附くと、いつも其長閑な夢は果無い現實の暴露で破られた。しかし彼の悲哀はまだ〳〵抽象的のものなのだ。未だ〳〵リアライズされては居ない。日本に歸つて父の居ない家に着いたら其處は如何に悲しい淋しい所だらう。彼はそう思ふと日本は暗い陰氣な谷底に思つた。そして其谷底に落ちて行く我身が氣の毒の氣がした。しかし母や祖母を思ふとたまらなくなつた。どうしていゝのかわけが解らなくなつた。いやもう一人彼にとつて忘れられぬ人が居た。それ

は、戀愛を罪惡蛇蝎視する舊弊な片意地な、そして世間と云ふ影坊師ばかりを氣にする虚僞的なる社會の中で、自分達のして居る事は決して罪惡ではないと云ふ堅固な自身のもとに、只一人彼を頼りにして一人で戰つて、彼の歸朝を一日千秋の思ひで待ちわびて居る、彼の小さな愛人であつた。彼は父の在世中は何かにつけて愛人の事ばかりを考へた。しかし父が死むで急に歸らねばならなくなつてからは、なるたけこの「思ひ」は胸の奥底にしまつて置うとした。しかしやはり時々は此胸の箱の蓋を開けて覗き込むだ。其が如何にも父にすまない氣がした。それは彼が愛人の事を思ふ時、彼の歸朝がこんなにも早められた事を一方心のどこかで喜んではしないかしらと云ふ懸念からであつた。しかし決してそんな事はない。愛人の居る日本へ歸る喜びと、父の死で日本へ歸る悲しみとは全然二つの別のアイディヤである。しかし彼は理由なくつとめて「愛人の居る日本へ歸る喜び」を消さうとした。彼は巴里を去る時、愛人に長い〳〵手紙を書いて亞米利加經由で出した。それには彼が父の死を如何に悲しみ、もうすべてを忘れて了つて居ると云ふやうな事や、又切角勉強に來た巴里を、すぐ去るのは如何に殘念であるかと云ふ事なぞをホテルのレターペーパーに五六枚も細かく〳〵書いて、そして「私は日本に歸つて凡ての後始末をつけて又すぐ巴里に引かへす心算です。私はやりかけた事を、惡い事だと思はぬ限りは中途でよした事はこれまでに一度もありませんでした。私は此頃如何に我々が勉強をしなければならないかと云ふ事を、以前にも增して自覺し出しました。我々はもうぐづ〳〵して居る時ではありません。生活に餘裕を與へられた人は、それだけ多くの仕事をしてお禮をしなければ人類に對してもすみません。たとへ無能力者でもよろしい。それだけの心掛けが必要なのです。私もどこまでも初志を貫徹さす心算です。あなたにも日本でゆつくり又會へるかどうか解りません。日本の舊弊な間違つた社會は、二人が逢ふ事を、又きつと邪魔をして許さないでせう。あなたは私が再び外國の長い旅へ立つ事を、どうぞ淚の中で勵して下さいね。武士が傷ついて家へ歸り、傷がなほるやいなや再び戰場へと出て行く勇ましい出立を健氣な妻が淚も見せじと勵すやうな勇敢な妻に、あなたはなつて下さいね……」こんな事を淚を浮べなが

ら彼は細々とかき添へた。それは清春は「決して父の死で日本へ歸る事を、愛人に逢へると云つて一方に喜んでは居ない。自分は仕事至上論者だ。倒れるまで戰ふ勇者だぞ。」と自分自身に辯明し證據立てゝ居る心理でそう書いたらしかつた。彼女は其を見し如何に彼を怨むで居るであらう。只おとなしい彼女は怨むなぞと云ふ事は惡い事だと無理にこうゆう感情を壓しつぶして居るに違ひない。柔順な彼女に殘酷な事を云つたものだと清春は後で後悔がこみ上げ〳〵した。

けれども其手紙の最後に「私はもう何もする元氣が今ありません。あなたにも何かお土產を買つて歸るべきでせうが、そんな物を買ふ氣にもなれないのです。しかし私は只一つ誇るべき御土產を持つて歸ります。それは「純潔」と云ふものです。」と結むだ事を思ふと、彼の心は晴々した。危險な戰場を勇敢に驅け通つて來た勇者のやうな誇が湧いた。彼はお土產は買はぬ心算であつたが其後思ひなほして巴里を立つ前日、とう〳〵旅費をさいて、祖母と母と二人の妹とそれから彼女と五人にとう〳〵お土產を買つてしまつた。彼女のは彼が巴里のリユー・ド・ラペーの寶石屋で氣に入つた腕時計であつた。彼が巴里について、十日目位から彼はもう日本の女より佛蘭西の女の方がずつと〳〵美しいと思つて了つた。黃金の浪うつた房々した毛、林檎のやうな頰、雪のやうな肌、薔薇のやうな唇、彼は本統に巴里の女は美しいと思つた。彼は道ゆく若いお人形のやうな、燕のやうな巴里女をみとれてながめた。清春は一般的には「男は志のほうを女よりも大切としたい」論者だつたし、又自由の考へも持つて居たし、又生理學に知識の無い事を自覺しても居たから一般的に絕對的純潔論者になることを此頃恐れだして居た。そして元のやうに遊蕩に耽る者を罵倒するのも止めにして了つた。或人はそれを徹底して居ないと云つたが、それでも彼はそう強く云ひ切る自信を失つて來た。けれども彼は彼自身に純潔なることを熱望した。又彼自身は志とラヴとを調和させようともした。若し清春に愛人が日本に殘して無かつたなら……清春が嘗て「昔氣質の人は卑怯だ、自身が純潔でない癖に妻には純潔を求めるのだから」と云つてかゝる人々を罵倒した事がなかつたなら……清春が「妾の膝を枕にして學生調を高く

やうな外面ばかりの明治時代の道學者」のやうに書きものに對して責任を考へない男であつたら……濟春が巴里で勉强することとの女難を心配する周圍の人々に大丈夫だと云つて劇論をして居なかつたら……彼も或は遊蕩をしたかもしれない一人であつた。彼は彼の年長の友に、面白半分によく「遊び」に誘はれると、彼はいつも頭が痛いなぞと云つて一緒に行くのを恐れた。又オペラやテアートルの歸途には、薄暗い街燈の下で、美しい小鳥のやうな巴里女に不意に腕を組まれたりした。其時いつも彼の若い心臟の血は煮えくり返つて、彼の心に謀叛を起さうとしたが、彼はいつも哀れな愛人の事を思ふと苦しくなつた。それに初心な彼はきまりも惡かつたのは確かである。いつも振り離してどん／＼と逃げた。或時はペイヴメントの上を一二丁も、可愛らしい人形のやうな子に傘に捕まつてぶらさがられて、離さないので引きずつて了つた事もあつた。其時は彼は口では傘を離せと云ひつゝ、心ではいつまでも傘をこの女が離さない事を望むで居た事は絶對的に否定は出來なかつた。彼の心はその淺黄の眼と黄金の睫にどんなにチャームされて居たらう。しかし彼は遂にその女も退けた。彼はあらゆる誘惑に打勝つて、彼女との約束を守つた。彼の心は「本統の自由」に輝やいて居た。

濟春は「一人の男が一人の女と本統に愛し合つてそうゆう行動をとる事」は決して日本の今の世間の人々が思つたり云つたりするやうな罪惡でも浮いた事でもないと思つた。從つて濟春は自身のして居るかなり遠慮深いこの事はなほさらそんな罪惡でも浮いた事でもないもつと自然な道だと信じて居た。來し方四年の年月を振返つて見ると、彼は如何に苦鬪を續けて來た事であらう。自己を尊重しない意志の弱い人ならもう根氣負けをして居たであらう。時代後れの世間の人々は男女が愛し合へば不潔の事かと思つた。其癖世間の人々は本統の愛が如何に人を眞面目にし、人により强い力を湧かせ、より勉强家にさせるかと云ふ事を知らないで、こそ／＼とかくれ、噓をつき／＼浮ついた遊び半分の戀に耽溺した。そして自分の汚れた心を持つて判斷しては、新時代の若人が、淸い心のかくさない戀をするのを見ては、あらゆる嫉妬的の迫害と、饒舌な罵倒と、卑劣なる恐喝とを浴びせかけて、若人を傷つけやうとした。

清春もそんな迫害を度々受けかゝつた。又周圍の人はそれの自身にまで及ぼさん事を恐れて清春を責めた。しかしそんな外面的の迫害は彼等二人の心を寧ろより強く結ばしめただけで毛筋一本も彼等の心にふれては來なかつた。清春は、虛僞と僞善とでまかしと形式でかたまつた世間をあまり輕蔑して居た。しかし清春や愛人の周圍の人はそうではなかつた。その卑屈な世間を恐れ敬つて居た。世間から嘘の事でゝ責められるのなら得意になり、本統の事でも惡口の形式をとつてくるときはいやがつた。清春にはそれは馬鹿氣た事に見えたけれども、周圍を愛す清春は又周圍の人にも同情もし遠慮もして居た。清春は理性的な非常に强い一面と、感情的な非常に腰の弱い一面とを持つて居た。そして其が衝突する時は毎時も感情か勝つて理性が負けた。そして或時は恥づべき事や、まにあはせもやつた。彼はそして其馬鹿氣た世間に屈辱しい〳〵した。けれど彼はいつかは新らしく生れてくる若い彼等の徒と――純な人間らしい人々と、この世間の虛僞の面の皮を剝ぎ、形式の隱れ家をあばいてやりたいと、何かにつけて思ひ思ひした。

又清春はよく彼の仲のいゝ親友達の事を思つた。彼はいゝ友達を澤山持つて居る事をいつも感謝して居た。中にも忘れられない一人の親友は、彼が日本を去つてから度々彼に長い手紙を絕へず呉れて、それにはきつと彼の愛人の樣子も書添へてあつた。この友には彼は隨分お互ひに世話になりつこをした。恩にも着せず恩も着ずとか云ふ言葉によくあてはまる程、二人はお互ひに理解し合ひ、お互ひの個性と自由を尊重し合つて友達になつた。その友から寄越した手紙の中に、彼が日本を去る時、及び去つてからも彼の愛人の態度及覺悟が實に心持がいゝ位立派であると云ふ事などが細々と書いてあつて、そして又日本の事は自分達も及ばずながら引受ける。やれるだけは皆で協力してやる。君は勉强をして早く歸つて來いなぞと云ふ意味が云ひ含めてあつた。彼は涙ぐみながら感謝しい〳〵した。そして理解し合つた友は、なまじつか、間接にまはつてくる自身への世評を氣遣つて、彼に勝手な注文をする肉身よりも、どれだけ愛も深く義勇的でもあるかと思ふと、彼はそんな友達を一人でも持つて居る事を感謝して

は實に〳〵難有いと思つた。しかし彼は周圍の人も勿論憎めなかつた。けれどかう思つて來る時、彼は今迄の彼の行爲をどうして誇れるであらう。彼は周圍をうるさゝに、少も噓をつかなかつたらうか。少もごまかしを云はなかつたらうか。彼は何と云ふ卑怯な人間であつたらう。正しい事をして居る自信があるのなら、何故まともに正直にしなかつたらう。彼はまにあはせ屋の、やつぱり意久地なしである。彼はこんな事に氣がつかぬでもなかつた。そして其度に恥しいと思つた。しかし彼はこの「うるさゝ」から破り出る程勇敢な眞正面な男でもなかつた。彼はやはり僞善者と云はれても仕方のない人間であつた。彼はこんな事を思ふとき彼が敬愛する兩親にまで噓をついた事があるのを恥かしくて〳〵身にしみて責められた。彼は凡ての彼女とよりよき愛の美しさも、この兩親に噓をついた事によつて汚される氣がして苦しかつた。彼は或日遂に意を決して、彼が日本を船出する一二日前、これらを凡て兩親の前に打明けた。叱ると思つた父は、にや〳〵笑ひながら、彼の噓をついたと云ふ慚愧の涙を決して責めも怒つてもくれなかつた。すべてを許して呉れた。それで淸春はなほ苦しくなつた。そして、最後に父は「お前の愛する女は、又私の愛する女だ。お前は何も心配しないでいゝ。私はお前の人格を信じて來た。お前はゆつくり勉强してくるがいゝ。何も心配する事はない。」と云ふ意味のことを云つた。そして「お前が望みなら、プロポースして、ちやんとエンゲージした方がよくはないか」と云つた。彼は意外な父の言葉に嬉しさと驚ろきとに泣き出して了つた。そしてこんないゝ父を持ちながら、何故自分は噓をついたり、こそ〳〵とかくれて何かやつたりしたらうと苦しくてたまらなくなつた。そして彼は感謝の涙の中からプローポースやエンゲージなら私が勉强をすませて無事に歸朝してからにして下さいと云つた。人間はどうして未來の事がきめられやうぞ。次の瞬間をすら約す力があらうか。それは恐ろしすぎた事だ。父はそれなら歸朝してからでもいゝと云つてくれた。けれど淸春には只未來をきめる事を恐ろしいとばかり思へてさう云つたのだらうか。淸春は嘗て或年とつた女から、彼等の愛の事で、ひどい侮辱を受けた事などを執念深くも忘れずに居て、あとになつてすべてに外面的にも成功したとき、それみ

ろと云つてやりたい心持がありはしなかつたか。其は全然ないとは云へなかつた。けれど又彼は父にそうまで云はなかつた。けれど、彼は彼女が如何に彼の父母を愛し、彼の父母が病氣だつた時なぞは如何に小さな胸をかけながら痛めて心配して居たか。そしてそれを見て居るのは如何に美しく心持がよかつたかと云ふことなぞを明確に父母に云ひ切る事が出來るのを喜びもした。又彼が如何に彼女の父母をもかげながら愛して居るかと云ふ事もついでに云つて置いた。これらの事は、やれ婿とか嫁とか舅とか姑とかそんな形式ばつた考へて、お義理にするやうな、しかたなしにするやうなそんな昔式のやり方とは違つて、もつと〳〵愛人の愛し愛される人として心の底から湧き出る自然の喜びの愛であつた。これは戀が強くなれば強い程これらへの愛も正比例して増すのであつた。そして今の父のこの優しい言葉を彼女に傳へたなら、彼女は如何に涙にむせびながら、彼の父をいやが上にも尊く思ひ、又自身の本統の父のやうにも難有く思ふ事であらうと思つた。清春はこんな事を思ふにつれ、彼の父が理解のある總明な情愛の深い人である事をしればしる程、世俗の父親達の馬鹿さ、利己的さが痛切に思はれた。何故なら自身が金が欲しいと娘を金持の所へ嫁にやつたり、又財産付の女を息の嫁にしたり。華族と云ふものに娘をやるのを世間に發表することを虚榮心的に光榮と考へたり、親自身が氣に入つて居るからと云つて、趣味も思想も違つた二人の男女を物品でも取扱やうに結婚さして、今に好きになるだらうと考へて自身達だけで喜んでみたりする、世俗の親達の下に居る若い人々――それ等はもう眼覺めて居る――に同情したくなつた。自由意志にこそ責任もあり、愛も湧くのだと彼は思ふのであつた。

清春は船にゆられ〳〵、海を凝視、空を仰いでは、こんなとりとめもない回想の、色とり〳〵の胸の糸を、ほぐしのべてゆき〳〵した。彼はどうもそれが父にすまないやうな氣が何故かした。けれども彼は盜むやうに胸の中に忍び入つてはこの綺麗な玉手箱の蓋をそつと開けては我を忘れた。しかし其哀れな姿を父は、眼に見えぬ雲の上から「可愛らしい我子よ。彼女も丈夫だよ」とほゝ笑みつゝ見て云つて、一緒に喜んでくれて居る氣もした。彼は時々この玉手箱へ手をかけた。

船はもう海鳥にまで見離された淋しい大海原を通つて居たが、軈てある夕邊、ポルトガルのリスボンの沖の邊りを通つた。何か夕日の彼方に仄紫いものが見えた。それは陸地であつた。甲板には「岡の動物」が歡喜の聲を上げて集つた。そして手に手に望遠鏡を翳して、その岡を、久しぶりに逢つた戀人のやうに懷かしがつて見た。

「あゝ僕は岡ぼれいしちやつた」

淸春までがこんなだぢやれを出して、岡を見ては小鳥のやうに騷いだ。仄紫のものは鳥のやうな所で、ひどい斷崖絶壁で下は白波が立つて居るのが望遠鏡のレンズに寫つた。海鳥が又何處からともなくやつて來て、ピォー、ピォーと帆柱（マスト）を掠めて舞つた。その翌日の眞夜中に船はジブラルタル海峽を通つていよ〳〵地中海に入るとの事で、船客の過半は夜の目を寢ないでその美しい景色に憧憬（あこがれ）て待つて居た。淸春はとう〳〵ねむくなつて寢て了つたが、いよ〳〵其時には起して貰ふやうにボーイに賴むで置いた。起された淸春は寢卷の上から巴里仕立の外套を着て甲板に現れた。

何と云ふ靜けさ。何と云ふ美しさだらう。あの廣く果しなかつた海は、いつのまにやら左も右もすぐ側まで陸地がつめよせて、細い所を通つて居た。海の水は羊羹のやうに靜かに黑くおどんで、船は白い泡をたて〳〵水の音を幽かに響かして辷つた。歐羅巴（ヨーロッパ）の大陸と亞弗利加（アフリカ）の大陸とがこゝで對立しィ居るのだなと思ふと如何にも雄大な氣がした。亞弗利加側には重なり重りあつて家々の火が豆粒の層をなして、歐羅巴側にはいくつもいくつも燈臺が黑い岡々に光り、家々は亞弗利加側より少い。船の帆柱の上と亞弗利加側の黑い〳〵羅紗のやうな山の上とでは盛んに光の信號で何かを話し合つて居た。それらの美しい青黑い世界を、又銀色の星の粉沫が寶石のやうに掩ひ包むだ。水も岡も天も空氣も皆青黑い色で、彼等は、下を見れば海の底でもあるいて龍宮へでゝゆくやうな心持がした。そうかと思つて上を見れば夜の星の國へ登り登つてゆくやうな氣がした。淸春の右にも左にも美しい英國のお孃さんが居た。

そして清春と體をくつゝけて話し合ひ、美しい景色に酔つた。首や手や足には冷たい風がひや〳〵と身にしみた。何でも美しいものを見るともうすぐ清春は父を思ひ出して居た。すると彼の後ろで初めて日本語が響いた。

「清春さん。寒いでしよ。風をひきますよ。もういゝかげんにして寝たらいゝでしよ。」

それは平田氏の聲であつた。彼は何か非常に温かいものを胸の中へ投げ込まれた氣がした。それは彼には父の聲のやうな氣がした。彼は熱い感謝の心を、其言葉に從ふ事によつて表さうとした。その頃船はもう美しいジブラルタル海峽も通り過ぎて、只星のまたゝき中を走つて居た。彼は平田氏が今迄ねて居たソファに寝に行き、平田氏は彼のベットに行つた。それにはこんな理由があつた。それは支那人が上船した翌日から醫者につれて行つたりしてやつたけれど咳が止らず、毎日痰を吐き、手ばなをかむだ。支那人は清春と共有の洗面器にペッペッと痰を吐くので痰がそれにこびりついて穢くて清春は顔があらへない。又或朝彼が眼を覺すと、ジャア〳〵と云ふ妙な音がした。それでカーテンから顔を半分出して覗くと、それは彼の髭剃の湯の入れものゝ中に、支那人が小便をして居る音であつた。彼がもう少し知らずに寝過したら、彼は支那人の小便の湯で髭を剃る所であつた。流石の彼も、

「それは己の髭剃り湯だ！そんな事をしては困る！」

といきなり怒鳴つてベットから飛起きた。又支那人は食事中、カーッ、ペッペッとハンケチと痰を吐いては、西洋の女をいやがらせ、お嬢さん達が笑ふと本氣になつて怒つた。そして其ハンケチをキャビンの洗面器で洗つて、キャビンのなかじゆうに乾した。それではキャビン中に黴菌を散布するわけだ。それを見て彼は又怒つた——上船した夜、父と同年ときいて出來るだけ親切にしてやらうと思つたが氣短な我儘な清春はとう〳〵自分の心を裏切つて怒つて了つた。所が支那人も怒つて二人は喧嘩をして了つた。其夜彼は平田氏にその事を訴へて、そんな黴菌室に寝るのがこわいと云ふと氏は、彼と代つてやらうと云はれたが、それではすまないと云つて其夜は消毒用のユーカリプタスの消毒藥を貰つて、キャ

ピンに歸つた。するともう支那人はカーテンを下して寢てゐるので〆たとばかり、彼は霧吹器でユーカリプタスの油をキヤビンの中にチユー〳〵やつた。すると支那人は强い刺戟的の匂ひに眼をさまし、カーテンの中で鼻をクスン〳〵やつた。淸春はおかしいやら氣の毒やらで、何とか云つてやらうかと思つたが、又怒るとうるさいから止めた。所が翌日平田氏は「僕はバースが取れないでソフアにねて居るので體が大きすぎて苦しいし、僕は咳には無神經だから」と云つて、神經家の彼の困つてる樣子を察して代つて下すつたのであつた。それから彼は每日平田氏のソフアに安心して寢られた。支那人がジブラルタルをインドかときいて、普通敎育もない事を暴露して皆から笑はれた今夜の事も、氣の毒やら滑稽やらで淸春は、おかしくつてたまらなかつた。

（二）

船が地中海に乘り出してからは、暖かい小春日和が舞つて來て、アルボランの燈臺の島を朝凪ぎの中に見過してからは段々と暑さへ加つて來た。淸春は倫敦から買つて來た近代劇の新しい本を、甲板の長椅子にひつくり返つては讀み耽つた。そして讀み終ると其本を英國の美しいお孃さん達に貸しては批評し合ふのを樂しみにして居た。或時は本を持つたまゝ、すや〳〵と寢て了ふ事もあつた。そんな時眼を覺すと、平田氏が「いゝ、おめざがとつてありますよ」と云つて彼の顏を小さな子供の顏を覗き込むやうに見た。彼があほむくと頭の上には冷茶（コールテイー）と菓子が置いてある。それは平田氏がとつて置いてくれたのである。淸春は再び子供になつた樣な心持になり、にこ〳〵して菓子を頰張り、冷茶を飮むで平田氏へ甘へたい心持になつた。又或時は彼が一人ぼつねんとして居ると平田氏は「何を考へ込むで居るのか」と云ふ「父の事だ」と云ふと「いけない〳〵何か皆でして騷ごう」と云つて、彼の手を引いて西洋人の美しいお孃さん達の群れや、日本人を呼び集めたりした。平田氏は故鄕に殘した奧さんが病氣の爲歸國するので氣の毒であつ

た。又或時は船中のつれ〳〵に彼が油繪をかいて居ると、平田氏は彼の好きなハミルトンと云ふ十七の美しいお孃さんを連れて來て「繪をみろ〳〵」と云ふと、ミス、ハミルトンが"I love painting!"などと云ひつゝ、みとれて居るのを、清春が得意になるのを見て面白がつたりした。

船はマインフィールドをよけて伊太利のシヽリイ島の海岸の方へ迂回した。シヽリイ島は綠と赤と樺と灰紫の島であつた。眠つたやうな綠の山、綠の岡、またゝくやうな赤い人家の斑點、老へ込むだやうな立派な開墾された灰紫の畑地、喧嘩腰のやうな突兀とした斷崖の海への突出、それらの静かな美しい島と我々は、望遠鏡のレンズを仲人として一日お友達になつた。けれどそれからはフロテイング、マインがこわくて皆緊張した氣分で居た。船の舳にはマイン、スヰーパーがつけられた。一人の水夫が帆柱の上に登つて、フロテングマインがありはしないかと海面を睨めつけた。夜は扉を開け放して眠る客も出來た。我々は皆びく〳〵した。日本人は船長室に毎日集つては、風流船長と云ふ綽名さへある面白い船長の話をきいた。戰時中はまるでこんなものではないときいて清春は尤だと思つた。戰時中は船客は皆洋服を着け、金と食料とをポッケットに入れて、浮袋をつけたまゝで夜もろく〳〵眠れなかつた。それらの人の子數百人の命の綱を握つた船長の心配は又一しほであるべきだつた。船長は一番心配な時は便所に入つて、ズボンをぬいで居る時だ、眠つて居る時の方が着物を着けたまゝ故まだ安心だと云つた。婦人の船客なぞは餘りにナーヴァスになつて發狂する人も出て來る。其等の世話も又しなければならず。無線電信には今、先の船がやられたとか後の船が沈められたとか、或は救助に來てくれとか云つてくる。「船長マインが浮いて居ります」と云ふ報告に『どこに?』「ほらそこ」と足の下にポクリ〳〵と浮いてる奴をさゝれると誰でもぞつとする。マインは見付り次第大砲で打こわす。マインならまだしもネヴア、マインドだが恐るべきは敵艦だ。頭のいゝ風流船長は戰時中わざと英國の海軍の命令に背いた航路をとつたので助かつた事がしば〳〵あつたそうだ。それは即ち敵の裏の裏をかいてやるのである。と云ふのは英國海軍の通知は餘りにぐづだから、其報告が來る頃には敵はもう、計畫をかへて居るからで

あつた。そんな危險を冒し、職務とは云ひながら命がけで働らいて居る幾多の船乘りの人々を、汽船會社の重役株主乃至一般國民は餘りに冷酷ではなからうか。陸に居て海の、しかも何等抵抗力のない危險の中の幾日は、實際其場合に立つた人でなければ解るものではない辛さであらう。清春は今マインフールドの脇を通つて居るだけ同情も湧いた。恐らく其同情も其立場に立つたものからみれば小さなものであらう……。此船長も戰時中には幾多の友を失つたさうだ。又は港で友達の他の船長にあつて「己は今度こそやられる氣がするから國へかへつたら暇を貰ふ」と云つて居て、遂に休むだら案の定、その次の航海に船はやられその船長は助かり、代つた人は死むだ。又切角國へ歸つてほつと一息つく暇もなく「おい君御苦勞だが倫敦までも一度行つて來てくれ」と命令を受ける時の心持はない。と云ふやうなそれからそれへと船長の面白い話はつきなかつた。彼等は同情しい〳〵きいた。そして今や世界の平和の光もさしかけて、海上に行き逢ふ船の人々は、お互ひに同胞のやうにハンケチを振つたりして喜び合ひ戀しがるのを、一度戰と云ふ聲をきくと其同じ人間が大海原の上で沈めつこをして、鱶や鯨の餌とさせつこをするのは何と云ふ奇異なことだらうと思はれた。そして又此方面で我國の海軍が如何に世界の人民の幾多の生命を美しく保護し、又必要品の運搬を助けたか其偉大な力を船長からきいて彼等日本人は皆飛び上つて喜んだ。この危險區域に於て日本の海軍のコンボーイ程確かなものはなかつた相である。どつちかと云へば英國海軍あたりでは肝心なみはりが居ねむりをして居て直ぐ近くに敵艦が來たのも知らなかつたと云ふ失敗もした相だ。日本の海軍程忠實に眞面目によく働く海軍はなかつた相である。だからどの國の商船も日本海軍のコンボーイを願つた。日本海軍はそれだけ責任を感じた。そしていつも成功した相だ。實に我海軍は太平洋印度洋は勿論、遠くケープタウンの果の町までも守つたのだ相であつた。船長等の船が熱い危險な航海を續けてケープタウンに入つて日本海軍旗を南の果の風に飜へして居るのを見る程嬉しい事はなかつた相である。然るにこんなにも陰で日本人が努力して居ても西洋人も日本人もこれらの人々の熱暑と危險の中の苦心を殆むど認めてくれなかつた。それは一つには英國あ

たりは針小棒大のプロパガンダをするのに反し日本人は餘りに英國の「仰せ」かしこしと順守して、何事も秘密々々と口をつぐむ爲でもあらう。又一つには黄色い人間が世界的の仕事をする事を、海の王を以て自ら任ずる國が世話になつて居るので嫉妬を起したのも當然であつた。船長の話によればケープタウン其他の港に――其等は我海軍旗の下に守られて居ながら――日本の商船が着くと、西洋人だけ上陸さしても、日本人は上陸させない。これは國に居る人が聞いても何とも思はぬだらうが、實際海の熱暑と荒風と戰ひ危險をくゞつて、ゆられ〳〵て來て港に入つた喜びは實に大きなものであらう。そして「岡の動物」は如何に岡を戀しがり上陸を望むで居るか其意志は實に大きなものであらう。中には毎日百何十度の酷暑の中で眞裸體で眞黒になつて石炭ばかりくべて居る哀れな火夫も居る。其等の人々の意志を無慈悲にも踏にじつて、世話になつてる國のフレンドだけを疑視して上陸させぬとは餘まりである。ケープタウンで船長の船から上つて了ふ英人があつて其人が日本人の女中をつれて居たらどうしても英國の官憲がその女中だけを上げさせないので、其英人は困り、又船長は怒つて役人と談判し、其處に三十年も住んで居る或日本人の證明をつけて、歸途に必ず日本につれかへると云ふ條件の下に上げて貰つた事もあつた相である。平田氏等は戰時中倫敦に入國の時は西洋人だけすぐ上陸さして、日本人と支那人は一晝夜調べてから上げられるとか、倫敦で日本語で電話をかけて居ると "What language are you speaking?" とか "Speak English please!" とか云つて交換手から叱られた。こんな事若し日本でやらうものなら、それこそ在留外國人からこつちが叱られるなぞと云つて、實に英米のやり方の滑稽なのを、たか笑ひをして愉快な涼しい夜を更かし〳〵した。又船長の俳句や歌や繪や字を感心してながめて更かす事もあつた。これらは船中の又一興であつた。

リヴアプールを出帆して十三日目の夕邊、我々は樂しみにして居た坡西土（ポートセッド）が見え初めた。何か大きな煙突のやうな物が冬の雜木林の樣に細く海の中に突立つて、其下には幽かな家々がレンズを透して見え

た。其町は靑い水の、だん〳〵と白く暈けた遠方に、幽かに蜃氣樓の様に浮むで見えた。我々は小島の様に喜んでブッヂに集つた。その蜃氣樓は仲々長い間蜃氣樓で一向に近づかなかつた。我々は足をばたばたさしてもどかしがつた。しかし日が西へ傾き灰紫の夕靄が掛る頃、其蜃氣樓はすぐ眼前迄つめよせた。町の前には大きなレセップスの銅像が海を壓し、風を切つて立つて居た、それ迄に岩石の防波堤が突兀と續いて居た。餘り其が突兀として居るので清春は波で壞れたのですかと聞いて人々に笑はれた。大きな龜が船緣の脇にヒョクコリ浮んで船と並むで走つた。澤山の魚共も見えた。船は防波堤と添つて走つた。そして川の様な所へ入つた時は、もう夜の帷がどつぷりと下りて居て、エジプト式の石の家々には黄色の光が重り合つて居た。右にも左にも澤山の船が見えた。そして盛んな大きな聲で荷役をして居た。食後彼等は上陸する事を許された。もう平和になつたので大變規則がゆるくなつたからであつた。彼等は皆いそ〴〵と着物を着換へて、士人のボートに乘つた。ボートは妙な掛聲を出して櫓がれて向ふ岸に辷つた。オールからは月の雫がたれた。彼等は十三日目に陸地を踏む嬉しさに、心も身も宙に飛んで居た。土に接吻したい程、土に戀して居た。コッコッと石の上へ飛び上つた時は、雲を踏むやうな心持がした。日本人四人は集つて的もなく歩き出すと、支那人がついて來た。先刻彼に清春はパスポートを調べる英國軍人が來て居るから早く行つて調べられて上陸の仕度をなさいと親切ににこ〳〵して云つてやうたら、鼻でフンと返事をして禮も云はぬので、清春はむつとした。此支那人はキャピンを平田氏とかへた事を心持惡く思つて居るらしい。皆は支那人がうるさいから何處かで置いてきぼりにして見やうか、言葉が出來ないで滑稽をするだらうなぞと云つて笑つて、彼も先刻の腹立ちで皆にこの惡戲を贊成したが、人のいゝ親切な井田氏がそれは可憐だいけない〳〵と云つて何處迄も連れて行つた。士人が出て來ては彼等に「コンニチハ」と云つた。彼等は久し振りに日本語で外人から挨拶されたので吃驚し喜びもした。波止場の近所の賣物屋で賣つて居る雜貨は殆むど全部和製であつた。もう此邊は此頃いよ〳〵日本の勢力が張つて來たのだと考へられた。

石の冷たい家々、圓筒狀、圓錐狀、紡錐狀の頭をのつけた眞四角の石の家々、こんなエジプト式の大きな石で疊み上げられた家々はもう殆ど戸がしまつて、町には英、佛、伊の軍人とうるさくついて來る土人とがごろ〳〵して居た。カツフエーのコンサートを一寸覗くと、下品な佛蘭西女が踊つて居て、兵隊がわい〳〵云つて居た。巴里でリファインされて來た日本人は一秒でたまらなくなつて飛び出した。そして彼等は案内の解らぬ町を、只土を踏むと云ふ嬉しさで歩いた。だん〳〵暗い町へ行くと、石の家から黄色い灯がもれて居た。そこにはエジプトのものばかり店先に並べてあつて一人の爺さんと若者が居た。『何があるの？』と淸春は佛語できくと『へい〳〵色々でございます。どうぞ入つて見て下さい』とエジプト爺さんが流暢な佛語で答へた。こゝでは英語より佛語が主に使れるのが、出來ない癖に佛語好きの淸春を喜ばせた。五人は小さい暗い店に入つた。すると爺さんは突然『コレヤシイヨ』と日本語で云つた。四人は飛上つて驚ろいた。こんな薄暗いエジプト人の石の家の、黄色の灯の下で、こんな爺さんから日本語をきかされるとは何と云ふ奇蹟であらう。『誰から日本語を習つたか』ときくと日本の海軍の人から習ひました。私は日本最屓だなぞと云つた。彼等は喜んで色々のエジプト土産を買つた。そして暗い道をとぼ〳〵と波止場へ向つて、又月の隼の舟で本船へ歸つた。

翌朝は淸春は五時過に起きて井田氏と二人で、二人乘の土人のボートに乘つて向岸に渡つた。埃及の朝は實に美しかつた。岸にはトゲ〳〵ある木、厚ぼつたい葉の木、濃い〳〵緑に眼覺むるばかり赤い花の咲いた木、眞黄色な花の木、そんな熱帶植物が、白や薄赤やの石造りの家々の間に匂つて居た。空はいや深くまつ靑であつた。稅關みたいな所で、英國の軍服をつけた埃及(エジプト)人にポッケットの中まで調べられて彼はカッとなつた。二人は買物した。ある店で日本人のやうな顔をした美しい埃及の十七八の娘の顔が淸春の印象に刻まれた。それからスクウエーヤみたいな所で、濃い綠の下で土人の子を集めて寫眞を撮つた。土人の子等は、明日此處へ午後二時に來るから其時出來た寫眞を持つて來てくれなぞと、いやにRを響かした發音の英語で喧しく云つた。それから二人は穢い腐つたやうな馬車に乘つて、市中見物

に出かけた。だん〳〵と大きな家々の所を拾て、鐵道馬車の通る道を過ぎて、狭い土人の町の中へ入つた。家々は大抵石の二階造りでその上には鳥小屋のやうに穢い板でぶつゝけた小屋が乗つかつて、其中から赤ん坊が顔を出したりした。町をゆく女の中には頭から黒い布をかぶり、眼だけ出して、鼻の所には筒みたいなものをくつゝけ、鼻から下には又ダラリと白い布をぶら下げたりして居るのが澤山居た。そして町には到る處に、牛、水牛、馬、驢馬、豕、犬、猫、羊、山羊、鷄、鶩、鵞、そんな家畜が道狭しとまでにうよ〳〵して、土人の子供と一緒に遊んだり、又往來の眞ん中で、鷄の首をたゝき切つて、其けたゝましい叫聲と共に、サツト迸しる眞紅の血染が、眞白い道路の乾ききつた砂の上に流れ出て、それに熱い太陽がカツカツと照りつけるのを、土人は鷄の首だけ置きざりして、さつ〳〵と胴を家の中に運びさると、我々の御者は又平氣な顔をして、その鷄の首を車の輪にかけて通つたりした。土人の多くはぶら〳〵と何もしないでごろ〳〵道路に寢轉んだりして居た。アラビヤ人の町を過ぎて、モハメツト教の面白い石の殿面の前を通り、それから海岸の英軍の陣營（キャンプ）の脇を走つて大砲の据付けてある波止場に歸つた。清春は埃及人の帽子を買ほうと探したがわからないで困つてると、運よく日本水兵が來て、彼を案内してくれた。水兵は『もう私しやすつかり此處にあきちやつた。こんなつまらねえ所はねえ。熱くて閉口だ。早く國に歸りたい。だがもうじきだ』などと云つた。彼は何物かをこの水兵に感謝したい心持になつた。國から何千里も幾山海離れたこんな土人の町で、二人の同胞が逢つて話をして又すぐ別れて、そのまゝ知らぬ他人にかへるのは妙な氣がした。何時しか井田氏とはぐれ帽子屋から出てくると、平田氏と藤宮氏と船長が來て獨逸からぶん取つて日本へ廻航中の潜航艇を見に行かうと云ふから、はぐれた井田氏を探してる間に又平田氏等ともはぐれて了つた。と其處へ船の事務長（パーサー）が來てエジエントへ一緒に行かないかと云ふから一緒にぶらついて、いざ歸らうと、土人の舟にのつて中途まで行くと、清春は寫眞機を何處かに忘れて來た事に氣がついて、大いに困つた。未だ出帆には少し時間があるので、事務長にかくと話すと、それおやもどりませうと云つてくれたので岸までもどり、事務長はパス

ボートを持たぬから此處で待つて居ると云ふので彼は宙を飛んで陸に飛上り、走り出した。税關で又兵隊に調べられ、萬年筆の蓋まであけさせられたので、彼は癇癪を起してその軍人に『パスポートを見ろ、あやしい者ぢやない』とどなりつけた。そしてエジエントに息を切つて走つて行くと、寫眞機はない。それぢや帽子屋だらうと行つて見るとあつた。彼は帽子屋の埃及人に金をやらうとしたら、いらないと云つて、お前の物をお前が持つてくのだと云ふ顔をした。彼は禮を云ひ、又宙を飛んで海岸にかへり、事務長に厚く禮を云つて船に歸つた。すると甲板では一人のアラビヤ人の手品師が船客を圓く集めていろんな不思議な事をやつて居た。其處へ船長が通りかゝると"Good Morning Captain."と云つて船長の懐からヒヨツコをつまみ出したりした。其他不思議なことばかりをやつた。清春はアラビヤンナイトを讀むやうな心持で、それをみとれた。アラビヤ人はそれから志（シルリング）の銀貨でさん／＼又手品をやつて最後に、ある船客の前に行つて、あなたの志の銀貨をこの中に入れて、"Go away!"と云つてくれと云つた。船客は云はれるまゝに銀貨を入れものゝ中に入れてそう云ふと、アラビヤ人は"Thank you!"と云つて其まゝその金を持つて行つた。人々はどつと笑つた。アラビヤ人はそれから、其入れものを圓くなつた、船客に持つて廻つた。入れものゝ中には銀貨が、銀の雨のやうに降つた。清春も一箇の銀貨を降らした一人であつた。

（三）

船は十時頃に錨を巻き上げ、ガンガンと云ふ鐘の波動に乘つて出帆した。今朝入港したと云ふ大きな英國の商船の脇を通つて、林なす帆柱や煙突の脇をぬけて、いよ／＼船は運河の入口へさしかゝると、其處には日本海軍旗を埃及の沙漠の風に飜へした軍艦や、獨逸からぶんどつて日本へ航行する潛航艇が並んで居た。お互ひの船の同胞は船客も海員も軍人も皆一様に、平等な同胞となつて、熱い空氣の間を隔て、お互に手あたり次第のものを振合ひ、聲のかれる迄も呼びあつて名殘を惜しんだ。熱い／＼この

海の中の大浪にゆられてあの小さな潜航艇の體を充分まつすぐにして居られないやうに小さな所の、惡い穢い空氣の中に、縮まつて働らいて居る同胞に彼は同情した。そしてそんな苦しみを身に受けつゝおとなしく眞面目に働いて「これが國の爲なのだ」と滿足して居る人々を彼は氣高くも見えた。そして又働らくと云ふ事の美しさを思ふのであつた。船はその懐しい人々も見捨てゝ、いよ〳〵狹い運河に入つて行つた。澤山の海鳥が行手の細い川みたいな運河に浮むで居るので、我々の船が行くと驚いてパッと飛立つ様は、まるで吹雪が風に狂ふやうであつた。左は茫々とした砂漠で、遙か遠方には海のやうに銀色に輝やくものが見えた。右手には白い道と、レールがあつて、熱さうな汽車がマッチ箱のやうな車を連ねて黒い煙を一筋に吐いて、船と競爭をして走つた。そのレールの脇には濃い綠の熱帶植物が茂り茂つて、その枝と枝との間からは、その先の沙漠が見え、その又先にはやはり海のやうなものが見えた。それで運河は三角州について居ることが領かれた。食事の爲に食堂に入つて淸春は、朝食ぬきなので大いにバクついた。船の圓窓から右手の綠の樹々の頭のみが見えた。それで淸春は『まるで陸地を船が走つて居るやうですね』

と向ひ側で、にこ〳〵しながらフォークを働して居るミス、ハミルトーに云ふと

「まつたくそうね」

と答へて、美しい顔を、いつまでも若い青年の顔を見てゐる。若い青年はそれが嬉しかつた。船の中で一番若い青年の淸春と、レディーの中で一番若いこのお孃さんとは此頃益々いゝお友達になつた。淸春は何となく英國が嫌ひであつたが、この英國のお孃さんと話す時だけは英國好きになる程現金であつた。シャム人の若い友達はよく淸春に「お前はこの船の紳士中で一番若くて、日本の貴族で、この船は日本の船だからお前はもてるのだ。この船中のレディーはみんなお前を好いて居る。殊にミス、ハミルトンはお前を好いて居る。あの子はいゝ子だ。實は己もあの子が好きなのだ。……間違つてはいけないよ like なので love なのではないよ。しかし己の顔は黒いから皆に嫌はれる。お前はうらやましい、お前

もあの子がすきなのだらう。」などと云ては彼におだてのやうなお世辭のやうないやみのやうな事を云ひ云ひした。食後此の女の人と彼は船の舳に鼠海豚(ポーポイス)が三つ居るから見に來いとある西洋人から云はれたので一緒に見に行つた。水を掻き分け〳〵行く先に、大きな鼠海豚が三匹、赤い船の腹に燃かされてか、ぐん〳〵と水を切つて泳いで行くのが、清い澄むだ水を透して見えた。鼠海豚はザブン〳〵と、ときどき空中に飛上つては、又水の中にもぐり〳〵した。彼等は面白がつて寫眞機を持つて來て撮つた。狹い運河は、向ふから大船が來ると、會圖によつて、土人が船からボートを下ろして、舳と艫とに綱をつけて、左手の岸にピツタリとゆわへつけておいて、又會圖をして來る船を右側に通したり、又向ふの船をゆわへつけて待たして、こつちが通つたりした。右手の樹々は次第に少く、もう遠方(おちかた)の海は見えなくなり、茫々とした沙漠が無限に續いた。

荷役の喧(やかま)しさに、昨夜よく眠れなかつたのと、今朝の早起と、暑いだるさとで眠くなつて淸春は夕方まで甲板の長椅子にすや〳〵と眠つて了つた。眼が覺むると船は今しも英軍の陣營(キャンプ)を通つて居た。其は驚くべき巨大なものであつた。歐羅巴の戰場の跡を歩いて來た淸春にでさへそれは少からず驚愕の眼をむけざるを得なかつた。入口には右岸と左岸を連絡させる爲に、船が來ると開く仕掛けになつて來る鐵橋がかゝつて居た。運河は又船の幅さ位切り廣げられて、其處には數多の汽船がピツタリと横付にされ蜘蛛の樣に集つた土人の人夫は、何かしきりとかけ聲をかけつゝ船から運び上げた。そして茫々たる兩岸の岡にはバラックが見渡す限り立てられて、其處にはカーキー色の軍人が蟻の樣に居た。ガーカスと大きく砂の山の上に書かれた所には、眞黑の印度兵(ガーカス)が鈴成りであつた。幾つとなくバラックを過ぎると、工場があつた。煙突は林の樣に雲を突いた。其脇には飛行機や大砲や自働車の壞れが山なして捨てゝあつた。次には大砲の彈丸が山の如く積まれて見渡す限り並むで居た。次には二かゝえもありそうな、カンヴアスに食料が包むで山の如くうづ高く積れて見渡す限り並むで居た。次には飛行機、自働車大砲の列があつた。大きな〳〵停車場もあつて、汽車のレールは到る所に通じて居た。此汽車は兵隊を

乘せては運んで戰はせ、進むとすぐ後からレールを敷設して遂にはエルサレム迄續いて居るのだ相である。又其他にはアスファルトの自働車の爲の道もついて居た。YMCA、YWCAのバラックもあつた將校の婦人連が肥馬を驅つて砂地に煙を上げて飛して居る群もあつた。暑さの爲にすつぱだかになつて運河で泳いで居るのを、船が來たので逃げてゆく軍人を、レディーが笑つて見たりした。船のレディーはこんな人々に力の限りハンケチを振り接吻を送つた。兵隊からも接吻を送つた。牧場には見渡す限り牛と馬とが柵の中に蟻の集合のやうにうよ／＼した。こんな巨大な陣營の中を船は非常な速力で、四時頃から、太陽が沒して仄紫の夕靄が訪れ月が輝くまで通つた。それでその大きさも想像出來やう。船長の話によれば　此邊は元、石ころも無かつた沙漠だつたそうである。清春はこんな所にこんな巨大なものを作り上げる人の意志と科學的物質文明の力とに驚かざるを得なかつた。この物質の力にどうして哀れなトルコが勝ち得やう。遂に敗亡の悲慘を見たのであらう。しかし此大軍は全部濠洲兵と印度兵で、この大軍を此處まで送つたのは實に我が海軍のコンボーイと守備のお蔭だときいて清春等は又驚いた。一方に嬉しく一方に恐ろしい感じもした。そしてその濠洲のデッゲが今度の講和會議に於て如何なる事を喋つて居るかと思ふと、清春は癪にさわつた。あの獸類に任された豐かな廣すぎた空地に、自然の勢ひと、人類の進歩とによつて、人口調密の地から溢れ流れて行く人の子を、只獨り英國のみが獨占して拒むのは、いつも人道主義を標榜する英國人にも似合ないと思つた。しかも其濠洲は如何なる手段で英國が哀れな土人の夢から奪つたものだらう。そして其人道主義の人のいゝ日本人はいつも騙される、一部の學者の言葉は別だが、一般の殊に外交官の英國の人道主義の如きはさん／＼世界を貪食をしてその食つたものを吐き出すのが嫌さの方便の人道主義に過ぎぬのだ。彼は埃及で土人が餘りに英人からひどいめにされて居るのに同情した。人の話によれば印度や支那もそうで、これから其處へ行つたら清春は又同情するであらう。歐米に居る日本の勞働者は、日本の所謂紳士に向つて「貴様等に何がわかるもんけい。貴様等は日本から金を持つてきやがる。そして戰々兢々としてこつちの風俗に從はうとし

やがる。だから氣に入られる筈だ。考へてもみろよ。同じ日本中だつて他人の家へ金を持つて行つて、其處の家風に氣に入るやうに〳〵すれば、誰からだつて氣に入られらあ。そしてこつちでちやほやさせられやがつて歸朝しては外國崇拜になりやがる。馬鹿な奴等だ。己達はそうぢやねえぞ。一文も國からは捨る金は持つて來ねえ。だからやれ有色人種だのジャップだのとあらゆる迫害と侮辱の中に生活するんだ。擲られたり蹴られたり何かにつけてひどいめに會ふ。それでこそ日本の難有みも解るんでい。國からどつさり金を持つてきやがる貴樣等に何がわかるもんけい！」と云つて居るのをきいては、此哀れな同胞の言葉にも一面の眞理はあると思つた。そして自分等が餘りに金をまきちらしに外國に來た事を恥しく思つたこともあつた。西洋人と云ふと一がいに敵視して了ふのは一番いけない。西洋人だつて同じ人間だ。人の居ない無人島や獸の居る山の中で會へばお互ひに助け合ふべき懇しい人間だ。しかし西洋人と云ふと何でもかんでも豪い者と思つて崇拜して了ふ奴も又いけない。そして日本だと日本人の癖に何事でもけなす人が居る。大馬鹿である。一體西洋〳〵と云ふが、それには英米佛伊獨露、それ〳〵いろ〳〵違ふ。それなのにひつくるめて西洋と云つて、それに日本と對すから馬鹿にこつちが小さい者に見える。こんな解りきつた事を得て我々は忘れ勝である。又清春は佛蘭西で、佛蘭西人が澤山集つたりした時、おとなしく列でもつくらぬと「これは佛蘭西の仕方ではない」と云つてお互ひに戒め合つて居るのを見て感じた。若しこれが日本ならお互ひに「これだから日本人はいかん、西洋人ならすぐ列を作るのに」と云ふだらう。即ち同じ戒め言葉でも人眞似的と自覺的と二色ある。我々は何も西洋人の眞似をしなくつても日本人の謙讓な美點によつて列なんかわけなく作られるべきの方が寧ろ本統で、そうない方が嘘なのだと云ふ所が氣かつかなくてはだめだ。又清春は歐羅巴でやれ獨逸の音樂はしないとか獨逸人の屍にはお辭儀をしてはいかんとか、罪もない獨逸の女や子供迄いじめるとか、獨逸語を使つてはいかん、獨逸の學問はいかんとか、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」やり方を遺憾なく發揮して居るのを見ていやになつた。そして振かへつて日本は何と云ふ寛大であらうと思つた。この誇るべき寛大さは今度、今初

つた事ではない。もうずつと昔の武士時代からあつた事のやうに思はれた。謙信が信玄に鹽を送つたとか、又昔の武士が女や子供を助けたり敵の屍に禮をつくしたりする澤山の話はよく彼が好きで子供の時お伽噺でよみ〴〵した。彼は餘りに贔屓眼で日本を見て惡い方を見ないで居る。成程彼は日本人の中には輕薄な野蠻な利我的な侵略的な人も居たし又居る事も認めない事はない。しかし彼は何んだか日本人は一般に本質的には人のいゝ人種のやうな氣がした。ひどく傑出した人もないかはりにひどく極惡無道の人も又ない氣がした。平凡ではあるが人のいゝ人達が多い氣がした。そして人道主義などは寧ろ世界中で日本人が一番はぐゝむで行ける人種のやうな氣がした。それは未だ日本では政治家などが餘り人道主義を方便に使はぬせいもあらうが、日本人の云ふ一般の人道主義もかなり心の底のいゝ美しい部分から迸り出て居るやうに見えてならなかつたからでもある。彼が米國邊りでトルストイの芝居を見た時、餘りにトルストイを一部の人をのぞいては、役者にも觀客にも理解されず、寧ろ嘗て彼が日本でこの芝居をみた時の方が、下手ながら理解して居た人が多さうな氣がした。しかし又日本人は感心する段になると今度はすつかり首つたけになつて、すつかり眞似になるから困る。例へばトルストイに感心するのは、こつちにも其素質を持つて居るから共鳴するのだのに、全然トルストイから敎へられるのだと早飲込みをして、人間であるトルストイを神と間違つて了ふ事である。そしてトルストイを出したロシヤを皆トルストイだと思つて崇拜し、ユーゴーを出した佛蘭西は皆ユーゴーばかりかと思ひ込み、亞米利加はホイットマンで立つて居るかと想像し、英國は又 Lord Avebury 位の平凡な道學者あたりでうづまつて居るかと早合點して、今度はもう色眼鏡(いろめがね)をかけて物を見るから何をみたつて其眞價は解りはしない。そして自分が解らなくなつて、他人だか自分だかわけがわからない人間が出來上る。そして人眞似ばかりをやりたがる。同じ說でも日本人のだと云へば批難し、西洋人のだと云へば感心する。どうしてこう西洋が好きなんだらう。尤もこう思ふ淸春は決して舊思想の頑迷なる人がするやうに、日本だからと云つて偏狹排他的に無意味な贔屓や自慢をしやうとするのではない。彼は世界のよき事に接して感激し共鳴するやうな公平な心持で、故郷にあるいゝもの、自分等のうちにあるいゝ者を靜かにながめて喜びたいと云

ふやうな心持からであつた。人が故郷を愛すのに何の不思議があらうぞ。人は自分を愛し、自分の家を愛すのに何の不思議があらう。故郷の中のいゝ者があるのを知つてそれをのばす喜びは、他郷(ひと)のものを眞似する喜びに數百倍の價があらう。自己を知らずにどうして故郷が知れやう。故郷を知らずにどうして他郷が知れよう。世界が知れよう。人は本統に自己を自覺し、ひいては故郷を自覺し、それからひいては世界を知るべきであらう。自己と、故郷の自覺のない、人眞似のコスモポリタンは、纒足した支那婦人の様に、あぶなつかしい足どりで、すでに人の踏み來つたつまらぬ道を、人眞似の猿のやうな姿で歩ゆむであらう。しかしそう思ふ淸春は餘りに故郷の事をいゝ事も惡いことも知らない。そして何れかと云ふと他郷の事の方をよりよく知つて居る。それを淸春は恥かしい事だと思ふのであつた。

　其夜は實に〳〵美しい月夜であつた。玲瓏たる滿月は帆柱の上高く、靜かな輕い足どりで左右した。天からは星の雨がバラ〳〵と降つた。船はやはり細い運河(キャンネル)を靜かに辷つた。兩岸には幾つも〳〵の砂山が重なり〳〵つて果しがない。その砂山に皡々たる月が照り輝いて、砂山は銀色に、まるで雪でも降りつもつたやうである。そして陰の部分は黑く墨を流して、くつきりと黑白只二色の色わけをした。彼が舳(トツプ)に行くと其處にはミス、ハミルトン等が居た。そしてそよ風はこの美しい處女(をとめ)の香(かをり)を心持よくそよそよと淸春の若い臭覺にまで送つた。淸春は酒に醉つたやうな心持で、其香、其靜寂、其薄暗其靑い空氣に醉つた。船はやがてイスマイエールの町の脇を通つた。家々の光が美しく、又黑い英軍の陣營もあつた。それから小さな湖水を渡つて再び運河に入り、淸春が湯から上つて來た頃には、いよ〳〵ビターレイクに船は入つた。湖面にはずうつと光るブイが浮んで道しるべがしてあつた。あかりをつけて美しい船が向ふからやつて來て靜かにすれ違つた。この船にはカムフラージかしてあるのを明るく電氣が見せた。遠方の黑い山々は次第に見えなくなつて、湖はいよ〳〵廣つた。小浪が、月の影をくだいて、銀色の粉沫が潑溂と飛び散つた。船は蛇のやうに黃色の探海燈の火を舳(へさき)からペロリ〳〵と舌のやうに出して、銀色の湖面をのたくり進んだ。湯上りの湯氣を體から立てながら、淸春はいつまでも甲板に團扇を翳した。この夜の國の神秘を靜かに恐る〳〵呼吸して居た。

　淸春の行手にはこれから暑い〳〵紅海や廣い〳〵印度洋が展開されやうとして居た。

(一九一九、九、五)



二階の客

加能作次郎

一

緣側の障子際に炬燵を寄せ、部屋の片隅に、丁度床の間を負ふやうな位地に身を置いて、私は餘念もなくペンを動かして居た。障子の外はこの旅館の建物の端から端に通ずる長い緣側で、そこに雨戸代りの硝子戸がずつと閉めきられて居たが、雪をはらんだ痛さうな北風が、時々がた／＼とその硝子戸を揺り動かした。私は閉めきつた部屋の中に居ながらも、その緣側の硝子戸を透して、眼下に遠く雪の大野が擴がり、その果てに、眞白に雪に掩はれた雄偉なA山が、巍然として四邊の野をも山をも壓して、灰色の雪空に聳えてゐる大景を眺めることが出來た。――最う夕暮に近かつた。

ふと二階で前日から聞き慣れた三味線の音が起つた。

「あゝ、また始めたな!」

私はさう呟いて嫉ましさに焦々しながら、炬燵の側の小机の上にペンを投げるやうに置いた。

年の暮から正月にかけての休日を利用して私はこの温泉に來たのであつた。そこは有名なH山の中腹にあつて、避暑地として、また春の花や若葉

の頃、秋の紅葉の頃の遊覧地として、また功顯の著しい溫泉場として、東京附近に名高い所であるが、冬は寒さが嚴しいので、誰も出掛けて行く者のないやうな所であつた。私もそれを知つて居たが、いや、知つて居たが故に態とやつて來たのであつた。何故ならば、其處はさうした季節外れの頃でゝもなければ、私のやうな貧乏な者には容易に寄りつけさうでない高等な贅澤な溫泉場であつたからだ。謂はゞ空巢狙ひのやうに、特に客の込まない冬を選んで行つたのであつた。その方が夏の盛り場の半分位に安いといふことも聞いて居たし、また靜かで仕事も出來ると思つたのであつた。

私は其の溫泉場に緣故のある或る人の紹介狀を貰つて、其處で一番大きなK旅館へ行つたのであるが、客室の百もあらうかと思はれる三階建の大きな本館の方には、一組も客がないと見えて、二階も三階も階下も、雨戶がすつかり閉めきられて居た。私はたつた一人、その閴寂として音もなき大きな建物の一室に、寂しく一夜を明したが、翌くる日の朝番頭が、別館の方には二三組客があつて、こんなに寂しくもあるまいから、そこへ案內しようと言つて吳れたので、私は其の方へ移つたのであつた。

別館は町の入口に近い所にあつた。まださう古くない二階建で、見晴らしのよい高い崖の上に建てられてあつた。私は階下の一室に案內されたが、中一つ隔てた隣室には客があるらしく、赤い鼻緖の麻裏草履が二足きちんと廊下の敷居際に並べられてあつた。私は自分のがスリッパであることから推して、多分女の客であらうと思つた。

私は湯から上つて來て、稍ゝ落ち着いた氣持で炬燵に入つて、茶を啜りながら室の中を見まはした。矢張り家の中は森閑として居た。客は何處に居るのか時々雨戶を掠める風の音の外物音一つ聞えなかつた。

私は暫くの間、凝と身動きもせず、その靜けさを味ふやうにして居たが、ふと其の靜寂を破つて、私の頭の上の部屋からカチッ、カチッと碁石の音が聞えて來た。

「碁を打つてる。」

私はつり込まれる樣に天井を見上げながら聲を出して呟いた。人聲もなく、只だ氷の凍みわたるやうな堅い冷たい石の音のみ間を置き〳〵聞えるばかりであつた。不思議にもある寂しさが、私の心に湧いて來た。自分が獨りぼつちであることを、一層はつきり意識したからであつたらう。

暫くすると、ふと同じ二階の遠くの方に、恐らく左右何れか一番端の部屋であらう、思ひがけない三味線の音が起つて來た。

「おや！」

私は思はず叫んだ。そしてその方へ注意を奪はれて耳を澄した。其の道に疎い私には、調子はよく聞き分けられなかつたが、流暢な、明かるい感じのするもので、玄人らしく、撥の音も冴え〳〵として居た。

「何者だらう？　きつと女だ、美しい女に違ひない」

私は心の湧躍を感じた。碁の客といひ、この三味線の主といひ、また一室隔てた隣の女らしい客といひ、何れか獨りぼつちの私の心を唆らずに居よう。私はその人達はどんな人達だらうかと思つた。醉興にか、人眼を避けたか、或はまた矢張り私と同じ氣持かで態と寂しい地を選んでやつて來て居るのに相違ないと思つて、それらの人達と知合になることに深い興味を覺えた。そしてお互に寂しいと感傷的な氣持から、すぐに知合になりさうな氣もした。

私は急に人懷しさに襲はれた。そして妙に落ちつかぬ氣持になつた。考へれば其の前の日東京の下宿屋を出てから、宿の番頭と女中と一寸用談したばかりで、まだ誰とも一言も口をきかないのであつた。今かうしてこの部屋に落ち着いたものゝ、そして他にも客があつて、その意味では彼の方に一人居た時よりは寂しいことはないとはいふものゝ、それらの人達が皆なそれ〳〵連があつて、而も女と連らしく、睦しく樂しく、自由な艶めいた氣持で、歡樂にひたつて居るのでないかと思へば思ふほど、一層自分の獨りぼつちなのが强く意識され、寂しくもまたやるせなき嫉ましさを感ずるのであつた。私はその時そ

つと足音を忍ばせて二階へ上つて行つた。梯子段を界にして、左右に部屋が分れて居て、長い廊下が部屋の兩方に通じて居た。そして梯子段を昇つた正面は、階下(した)と同じく硝子戸が閉めきられて、眼界の雄大な山野の雪景が居ながらに眺められた。

私はその大景を眺めてる様な風を裝ひながら、手欄に凭れて三味の音に聞き入つた。矢張り左手の一番奥の部屋で、閉めきつた障子の外には、同じ色形の二足のスリッパが並んで居た。部屋の中には、男の太いバスの聲が、三味線に合せて長唄の何かを歌つて居た。そして間々に、女らしい掛聲が交つた。私は誰かゞ好きな女を連れて來てゐるのであることを疑はなかつた。右手の方の二つ目の部屋（それは丁度私の部屋の上だつた）の障子の外には、（多分他の側の廊下の方に置いてあるのであらう）スリッパは見當らなかつたが、そこに置かれた椅子の凭れに、多量に鐵分を含んだ湯の色に染つた手紙がかけられてあつた。そして矢張り碁を打つ音がしてゐた。その外には何の部屋にも客はないらしかつた。

私は何れの部屋からでも、誰かゞ顔を出して私の存在を認めて呉れゝばよいと願ひながら、かなり長い間そこに立つて居たが、遂に誰も出て來なかつた。

その日もまだ私は誰とも顔を合さないのであつた。朝起きて湯に入つて居ながら、誰か入つて來さうなものだと心待にしつゝ長い間浸つて居たが、時間が早くて皆なまだ曉の夢に耽けつて居たのか、中々やつて來なかつた。私は輕るい失望を感じながら部屋へ戻つたのであつた。それから後、私は五六回も湯に入りに行つた。前の日から過度の入湯に湯負けして強い逆上(のぼせ)を感じて居たが、あまりに冷氣が強いので、入らずに居れないのであつた。湯から上つて部屋へ戻るまでに手にぶらさげた手拭が凍るほどの冷えかたで、當座暫く身體がほて／＼して居たが、炬燵に入つて居ても膝先と顔とがほてるだけで、背から腰にかけてすぐ冷えきつて了つて、不快な痛みをさへ感ずるほどになるのだつた。それで私は仕方なしに惡るいとは知りつゝ、他方には誰かに會はれさうな氣もして、度々湯殿へ行くのであつた。けれども始終かけ違つては、誰とも一緒になることがなかつた。只だ一度女湯の方に誰か入つて居るらしい氣

配がしたが、戸が閉め切つてあつたので、氣が咎めて入つて行くことが出來なかつた。

私は物足りなくて仕方がなかつた。孤獨の寂しさと嫉ましさとが、私の心を妙に落ち着かせなかつた。で、午頃に一度、そつと二階へ上つて、十分あまりも手欄に凭れて居たが、閉めきられた白い障子の外に、前の日と同じ樣にスリッパが冷かに並んで居るばかりであつた。

「どんな人達だらう？　愉快さうだな！」

私は前の日から幾度も聞きなれた三味線に耳を澄ましながら獨語つた。徒然のあまりにか、彼等は前の日も其の日も朝から何度となく繰返して居るのであつた。そしてそれを聞く度に、私はやり所のない孤獨の寂しさに惱まされるのであつた。

「あゝ！」

私は嘆息しながら、再びペンを取りあげたが、亂れかけた心は容易に落ちつかなかつた。で今度は立ちあがつて、緣側に出て外の雪景色を眺めて居たが、寒くなつて來たのでまた何度目かの湯に入りに行つた。

湯殿は廊下の突當りを左に曲つた所にあつて、そこから裏梯子を上ると、かの三味線の部屋の前に出られるやうになつて居た。で、湯に入つて居ると、三味線は一層手近にはつきりと、すぐ頭の上の方に聞かれた。手の込んだ間の手のところに來たらしく、俄かに調子が高く且つ急になつて來て、その流暢な微妙な旋律が、聽く耳をもたぬ私の心をもすつかり奪つて了つた。私は溫かい湯がひた〳〵と溢れ流れる湯槽の緣に、身一ぱいに伸々と仰向けに寢たまゝに、腰をまとふた手拭の上に、片手にちやぶ〳〵と湯を掬つてはかけながら、蕩け心地になつて聞き入つて居ると、やがて、「ぱらん！」と大きな強い撥の音がして、「や、おうい！」と掛聲がかかつた。すると男の低い調子がまた歌ひ出した。

と、間もなく、湯殿の方へ人の入つて來た樣子がしたので、私は起きなほつて、入つて來る人を待つ心持で、靜かに湯の中に身を沈めながら樣子を伺つて居ると、やがてがら〳〵と戸が開いて、板拼て仕

切られた隣の女湯の方へ入つて了つた。而も一人ではなく、男と女との二人連であつたことが、呼くやうにも聞えた其の話聲によつて知られた。私は今度はその方へ注意を奪はれた。

「中々うまいのね？」

若い女の聲が言つた。

「うゝ、本職だね。」

男の方が答へた。

「何者でせう？」

「何者だかな、兎に角素人(しろと)ではないね。」

「さうよ、勿論素人ぢや、あれだけ彈けないことよ。」

當然だといはんばかりの女の聲だつた。

「藝者にしても中々うまい方だらう。」

「ほんとね。ひよつとしたらお師匠さんか知れないわ。——でも一度もまだ出會はないのね。お湯の中でも廊下でも。」

こんな會話が途切れ〳〵に聞えた。彼等もまた三味線の客の噂をして居るのであつた。

「何者だか知らないが、樂しさうだな。浮世はなれた片山里に、好いた同志の侘住ひといつた風だね。お安くないね。」

「おほゝ。」と女も笑つたが、急に「あら、いやァよ！　お止しなさいよ。」と、でも艶めいた聲で女は言つた。

「は、は、は——」

私の心は異常な緊張を覺えた。私は仕切の板にくつつける様にして聞き耳を立てた。

「隣の客だな。——夫婦か、戀人同志か？　この人達も樂しさうだ、お安くない。」

私は暖かい湯の中に浸つて居る二人を想像しながら、さう心の中で呟いた。

二

やがて私は湯からあがつて、いゝ心持でふら／＼と自分の部屋の前まで來て、そこに暫く立つたまゝたそがれかゝつた外を眺めて居た。やがて湯から出て來るであらう二人の男女を待つやうな心持で。――三味線の音はいつの間にか止んで居た。

ふと私は湯殿の方へ振り向いた拍子に、一人の若い男が、――と私は其時思つた――ちよろ／＼とまるで鼬の走る樣に湯殿の方へ逃げ隱れたのをちらと認めた。彼は今迄私の方を見て居たのらしかつた。私は別に氣にも止めなかつたが、暫くしてまたその方を振り向くと、何時の間に顏を出して居たのか、その男は――たしかに男だつた、而も若い色白の――また私を見るや否や急に姿をかくして了つた。

私は變に思ひながら稍々久しく其の方へ眼をやつて居たが、それきり彼は姿を見せなかつたので部屋へ入つた。

三十分ばかり經つて、前の日からの出來事や、この變挺な寂しい心持を日記に書いて居ると、ふと私の部屋の前を忍び足の樣に人が行つたり來たりしてゐるのに氣がついた。部屋は六疊と四疊半の二室續きで、その四疊半と控室との界には襖が立つて居り、その先きにまた障子が閉つて居るので、廊下の方の樣子ははつきり分らなかつたが、よく注意して居ると、その人は時々立ち止つては、障子の隙間から此方の部屋の中を覗き込まうとしてゐるらしい氣配が感ぜられた。私はそつと立つて行つて襖の間から逆に覗き返すと、彼は襖に遮ぎられて居るに拘らず、一生懸命に障子の隙から覗き込んで居た。私は何だか氣味も惡るかつたが、ある好奇的な興味にかられながら襖をあけて次の室へ出ようとすると、その男は慌てゝばた／＼と逃げ走つて行つた。そして私が障子を開けた時には、もう何處にも人の影がなかつた。

私はさつと先刻の湯殿へかくれた男に違ひなからう、と思ひながら、暫く廊下を眺めて居ると、今度は湯殿の方とは反對の方の突き當りの廻り縁の陰から、ちらと顏を出した。と思ふと、また前の樣にちよろつと姿を隱して了つた。何者だらう？　妙な男もあるものだ、必然此邊に居る白痴か氣狂かに違ひなからうと怪しみ且つ薄氣味惡く思ひながら、障子を閉めて中へ入つた。が、今度は間の襖を開けたままにして置いた。彼の男は再び忍び足にやつて來た樣子だつたが、今度は覗かずに、袖で障子をさつと擦つて行つたゞけであつた。

女中が晩飯を運んで來た。晝間註文して置いた牛鍋で、私は一本つけさせて女中の酌で寂しくちび〳〵飲み始めた。

「お連さんが無うてお寂しいでせう。」と土地の者らしい田舍じみた朴訥さうな女中が言つた。でも言葉使ひは東京辯であつた。

「あ、寂しいね。」

「でも書き物をなさるのには、その方がよろしいでせう。」

「それはさうだけれども、矢つ張り一人はつまらない。それにお安くないお客さんが居るもんで、嫉けてねえ。」と私は笑ひ〳〵言つた。

「この上で御座いますか？」と女中は銚子を持つたまゝ天井を見上げた。

「うん、それもだが――」と私は三味線の客のことを言ひ出さうとしたが、「何者だい？　若い夫婦らしいね、さつきお湯で――」

「御一緒におなりなさいまして？」

「いや、女湯の方へ二人で入つて居たらしかつたよ。僕は隣の男湯の方で、大に見せつけられた、いや、聞かされちやつたよ。」

「隨分お仲がよさゝうですわ。」

「そりやさうだらうよ。かうして餘り人の來ない時に、しんねこで二人でやつて來て居るんだらうもの。また特別だよ。炬燵に差向ひて、甘い蜜の樣な話をしてさ、時々碁なんか打つたりしてさ。下で聞いてゐる僕は堪つたもんぢやない。とんだ部屋へ入れられちやつた。」と私は笑つて、「別嬪さんかえ？」

女中はそれに答へないで、微笑してゐた。

「ぢやあの二階の奥の方のお客さんはどんな人？」

「何處かの會社員の方ですつて。」

「で、女は？」

「女？　女のお方なんかゐらつしやいませんわ。あちらは男の方ばかりですわ。」

「でも君、時々三味線を彈いてるぢやないか。あのお客さんだよ。」

「え、」と女中は平然たるものであつた。

「でも變だな。」

私は尚ほ腑に落ちないで、さう獨りごつた。

「何でもお稽古にゐらつしやいましたんですつて。三味線をお彈きなるのが、「お師匠さんださうですわ。東京から連れてお出になつたんです。」

「へえい！」

私は少し張合拔けがした。今迄いろ〳〵と獨りで色をつけて想像して居たのが、一寸幻滅の形になつて了つた。

「そしてそのお師匠さんてが男なのか？」

「え。」

「なアんだ！　僕はまた綺麗な女の人だとばかり思つて、大に嫉いて居たんだ。この上の人達も、さつきお湯の中で、藝者か何か玄人(くろうと)の女だらうと噂してゐたぜ。」

「さうですか、ぢやまだお知りにならないんでせう。一寸も外へ出なさらん方ですから。」

「ぢや、こちらのお客さんは？」と私は一室隔つた隣の室の方を指した。

「あちらさんは、夏からずつと湯治に來てゐらつしやるんです。本館にゐらつしやつたんですが、他にお客さんが無くなつて寂しいからつて四五日前に此方へ來らつしやいましたんです。」

「女の人らしいね？」

「え、女の方お二人さんです。」

「綺麗かい？」

「そりや綺麗な方よ！若い色の白い、おほゝ」と女中は私をからかふ樣に笑つて、「ならいゝんですけれど、お氣の毒樣、お婆さんですの。女中さんと二人でゐらつしやるんです。」と眞面目に言つた。

「こりや、いけない！」

　私はすつかり興ざめて了つた。

「こゝに變な男が居るね。馬鹿みたいな。」私は更にさつきの若者のことに持つて行つた。「ありやこの家の人？」

「どんな人？」

「若い、色の生つ白い、うそ〳〵した男だよ、先刻何度も僕の部屋を覗きに來るんだ。そして僕の顏を見ると、にたつと笑つて慌てゝ、逃げ隱れて了ふんだ。」と私は細かに先刻の顚末を話した。

「誰でせう？」と女中は怪しみながら、首を傾げた。「そんな人家には居ませんわ。」

「たしかに居るよ、まさかお客さんでもあるまい。近所の者か何かでないかね。兎に角氣味の惡い男だよ。」

「へえい、妙ですわね。」と女中は暫く考へるやうにしてゐたが、「ぢや、あの二階のお客さんぢやなくつ

て？」

「二階の？　だつて君、十六七の子僧つ子みたいな男だよ。

「え、きつとさうでせう。お師匠さんですわ。その方が、」

「えッ！お師匠さん？」

私は驚きの眼を瞠つた。

「え、色の白い圓顔の、女の方みたいな。その人が三味線をお彈きになるんですわ。」

「さうか？」私は容易に信じられなかつた「不思議だね！」

「きつとさうです。」と女中は最早確信したらしく言ひきつた。

「でも、變ぢやないか、その人があんなにうそ〳〵と僕の部屋を覗いたり、僕を見て逃げ隠れたりしてさ。」

「……」女は暫く考へるやうにしてゐたが、「そりやあなたの所へ遊びにゐらつしやりたいんですよ。だけどきつと氣まりが惡るいんでせう。まだお若い方ですから、年寄りの旦那さんと二人きりで居らつしやるのが窮屈なんでせう。」

私はどう考へても腑に落ちなかつたが、外に何等判断のして見ようもなかつた。

「もしさうだつたら、遠慮なく遊び來るやうに言つて呉れ給へ。僕も寂しくて困つてるんだから。」

女中との話はそれで終つたが、私はまた更に新しい疑惑と興味とにぶつかつたのであつた。

三

その夜十時頃、私は床に就く前に湯に入りに入つた。女湯の方には、例の女中と二人連れのお婆さんのお客が入つて居るらしかつたが、男湯の方には相變らず誰も入つて居なかつた。私は寂しい充たされない、氣持で湯槽の中に浸つたが、暫くすると、五十を五つも六つも越えたかと思はれるがつしりと肥

つた男が入つて來た。私はこれが例の三味線のお客かしらと思ひながら、默つて湯槽の片隅へ身を寄せた。

「御免なさい。」とその男は言つて湯の中へ入つて來た。そして「あゝ、」と心地よさうに欠伸して じやぶ〳〵とタオルで顏を洗つた。

「いゝお湯ですな。」

その人がかう言つて私に話しかけようとした途端、がらつと入口の戸が五寸ばかり開いて、男の顏が現はれたと思ふと、すぐまたがらつと閉められた。私は朦朧と湯氣でぼかされた薄暗い電燈の光でちらと見たゞけではつきり分らなかつたが、それは例のお師匠さんだといふ怪しい男に相違ないと直覺した。彼は湯に入りに來たのであるが、私が居たので逃げたのだらうと思つた。それにしても何故彼はさう私を避けるのであらうと不思議でたまらなかつた。

「失禮ですがいつお出になりました？」と其の人は私に尋ねた。

「昨日來たばかりです。——長く御滯在ですか？」と今度は私の方から問ひ返した。

「私もつい二三日前に來たばかりです。——矢張り東京ですか？」

「はあ。」

「お一人ですか？——それはお寂しいでせう。」二言三言溫泉に關する話を交してから、「ちつとどうか遊びにお出で下さい。このすぐ上の部屋です。」と其の人は湯槽の緣に腰かけた。

「はあ、有り難う御座います。」と私も湯槽の緣に腰かけて「お連さんは……？」

「一人妙なものを連れて來て居ますんで、——」と一寸笑つて「えい、嘸御迷惑で御座いませう、時々妙な聲を出して怒鳴りますので。」とタオルで湯をすくつて肩から胸にざあとかけた。

「あゝ、さうですか、——貴方で御座いますか。」と私は始めて氣がついた樣な風に、「時々素敵にいゝ三味線が聞えますので、どんなお客さんかしらと、實は內々大に羨ましく思つて居たんでした——それは

お樂しみですな。」
「どう致しまして、道樂に一寸やつて見たんですが、一向まだものにならないでお恥しい次第です。」
「長唄で御座いますか？　一向私には聞き分けられませんが。」
「まあ、さういふ譯ですが、——實は正月の休みを利用して、少し稽古したいと思ひ立ちましてね。それにどうも御案内の通り、一人ではやれないものでしてな、どうしても三味線を彈いて吳れるものがなくてはならぬものですから、厄介なものです。」と其の人は絲の師匠を連れて、かうした所へ來てゐることに、幾分得意を感じて居るらしい調子で言つた。
「寒稽古といふ譯ですな。」と私は輕く笑つた。
「はつは。」と相手も笑つて、
「實は伊豆あたりの溫泉場へ行けば、暖かくて宜しいんですが、避寒客が込んでゝ、迚も私のやうな下手なものが、うなるわけには參りませんから、態と人の居さうでない所を選つて、寒いのを覺悟でこんな方角違ひの所へやつて來たんです。恐らく誰方もお客さんはないだらうと思つて來ましたが、矢張り他に幾組かゐらつしやるので、實に大に恐縮してゐるんです。」と彼は湯の中へ入つた。
私も誘はれるやうに彼の後につゞいて、湯の中へ入つて、矢張り空巣狙ひ同樣にやつて來たのだと話した。
二人は「あつは」と笑ひ合つた。そして私は明日彼の部屋を訪れることを約して別れた。

四

頭の上の、例の若い男女の客が、夜更けるまでひそ〱と話して居るのが途切れ〱に洩れて來て、妙に私の神系を刺戟し、いろ〱の妄想までも起させて、其夜私を容易に寢つかせなかつた。やつと夜明近くなつて、とろ〱と眠りに入つたが、翌くる日はいつになく朝寢をした。十時頃になつてやつと

朝飯を終つたが、頭が霧がかゝつたやうに惘然として、身體もふら〳〵するやうだつた。過度の入湯と炬燵這入りとで、疲れが出たのであらうと私は思つた。私は緣側の障子を開け放ち、雨戸の硝子戸も一枚だけあけて、寒風に面を吹かれながら、暫くの間眼前の大景に眼を放つて居た。その日は始めての好晴で、空は碧々と高く晴れ、雪に掩はれたA山や、其の廣い裾野やは、きら〳〵と陽光に輝き、眼も眩しいほどだつた。

二階の方では、つい今まで聞えて居た三味線も止んで、すぐ上の部屋ではぱちりぱちりと骨牌でも引くやうな音がして居た。私は幾らか爽かな氣分にもなり、昨夜湯殿で逢つた二階の客の所へ遊びに行かうと思つて居た。すると私の出て居る方の緣側の端に、例のお師匠さんだといふ男が、またちよろ〳〵と――實際さう形容するのが最も當つて居た――姿を現はしたが、私を見るとまたちよろ〳〵と鼬のやうな、また矢守のやうな敏捷さで隱れて了つた。

「鼬男」

ふとそんな言葉が浮んだ。私は最早氣味惡くも感じなかつた。私はいつとはなしに、昨夜湯殿に會つた男の長唄の師匠だといふことを信じて居た。そして昨夜女中が話したやうに、矢張り私の所へ遊びに來たいのかも知れない、あの若さでは、あの年老の長唄の男と二人きりで差向ひに居るのが窮屈でならないのだらう。師匠とは言ふものゝ、實はお伴に過ぎないんだから。寒くて外へも出られず、他に氣のまぎれるやうなこともなく、あの男も矢張り寂しいんだらう――私はこんな風に同情的に推察して、今度姿を見せたら是非呼び入れやうと思つて心待にして居たが、それきり顏を見せなかつた。

そこで私は思ひきつて、今度は私の方から出かけて行つた。

「御免下さい、一寸御邪魔に――」

私がさう自分に向つてのやうに小聲で言ひながら障子を態とがた〳〵と言はせると、

「あ、――さあ、どうぞ、ようこそ。」

から言ひながら部屋の主人は自ら立つて來て私を招じ入れた。私の所謂「鼬男」も居合はせたが、彼は一寸面喰つたやうに、まごまごして居たが、炬燵を隅へ押しやるやら、三味線を床の間へ持つて行くやらして周章てゝ、そこらを取片附け、火鉢の前に座蒲團を出して、無言のまゝ丁寧に挨拶した。彼は耳の根元まで顔を赧めて居た。

「いゝお天氣になりました。」と主人は火鉢から湯沸を下ろし、火を掻きひろげながら「丁度いゝところでした。退窟して困つて居たところです。」

「でも、いゝお樂しみがありますから結構です。」

私は一寸眼の遣り場に困つて、的もなく部屋の中を見まはして居た。

「いやはや、これも毎日やつて居ますと飽きて了ひましてね。仕方なしです。」

其の間に「鼬男」は私に茶をすゝめたが、主人の方は、一寸眼で合圖して、別に湯沸から黒いコーヒのやうなものを湯呑に汲んで出した。私は不思議さうに見て居ると、主人はそれを察してか、

「どうです、こんなものを飲んでるんです。何だか御判斷が出來ますか」と主人は湯呑を一寸傾けて見せながら打解けた調子に言つた。

「……………」私は不審の面地でそれを覗き見た。

「これは黒豆のお湯なんですがね。はゝは。」と笑つた「聲が出るさうでして、いや飛んだものを持つて歩かなくてはなりません」と自ら興がつた。

「なるほど！　それはお咽喉にいゝでせうな。」と私は感嘆するやうに言つた。

「煎つてありましてな、お砂糖を入れますと一寸コーヒの様な味がします。」と主人は一口ぐつと飲んだ。

私が用意して來た名刺を出して始めて自分を紹介すると、主人も後の床の間にあつた小鞄の中から大形の名刺を取り出して、

『どうぞよろしく。』と火鉢の猫板の上に載せた。

『×××水力電氣株式會社技師工學博士、高橋　毅』――かうその名刺に印刷されてあつた。

　電氣會社の技師、工學博士――私は一寸度膽を拔かされたやうな氣持で、相手の顏を見守つた。大分白くなりかけた濃い頭髮を綺麗に櫛目正しく七分三分に分けて、血色もよく、油ぎつて、てら〳〵と艶光りのした顏は、昨夜湯殿の薄ぼんやりした光で見た時よりは、ずつと若く見えた。それにしても、この堂々たる肩書にも似ず、少しも豪がつたやうな尊大な所がなく、旅先であるとはいへ私のやうな年少の書生つぽをも、同等に取扱つて居るのが、私に或る尊敬の念を抱かせた。が、また上流の紳士で、いい年をした男が、黑豆の煎じたのを飲んで、聲を張りあげて唄の稽古をしてゐるのを思ふと、滑稽な感もしないではなかつた。

　氣がつくといつの間にか、かの『鼬男』のお師匠さんの姿が見えなくなつて居た。愈々鼬だなと思つた。

『お師匠さんはまだ大變お若いやうですな。』と私は聞いた。

『え、まだやつと十八になつたばかりです。あれは私の家の向ひの米屋の息子でして、出入りの者ですが、子供の時から不思議に藝事に達者だつたもんで、半ば私が勸めて師匠につかしたんですが、大變上達が早くて、今ではもう一人前で、つい先達てまで師匠の代稽古をつとめて居ましたがね。この新年から杵屋の看板を貰つて、自分で弟子を取ることになつてるんですが、その準備が出來るまで遊んで居たもんですから、一寸私が相手に連れて來たんです。』

　高橋技師は尙ほ續けて小柳――彼はさういふ性だつた――の性格について語つた。それによると彼は男だが、その性情や行動等、何から何までまるで女も同然であることを、いろ〳〵の例を擧げて語つた。子供の時から女とばかり遊ぶといふことや、東京では女の樣に八つ口のあいた赤い裏の着物を着て居ることや、その自分の着物や兄弟姉妹の着物などを縫ふことや、女の髮を結ふことが上手で、母親のや姉

妹達の髪はみんな彼が結ふのであることや、料理も女よりは上手な位で、高橋氏の家でも、時々客でもあつた時には賴んで來ることなど。

「妙な人間もあつたもんで、實際不思議です。まあ、九分通り女だといつてい丶やうなもんですな。それに御覽の通り含羞家で、知らない方の前には滅多に出ないんです。私とは子供の時から親子のやうにしてゐるのですが、かうして此處に居ても、一緒にお湯に入ることもない位ですからね。」

高橋技師はさう言つて皮肉な微笑を浮べた。私は半信半疑のやうな妙な氣持で聞いて居た。そして彼と知合になることに強い好奇的な興味を覺えた。

五

その日の午後、私は例の如く炬燵に入つて書き物をしてゐると、副室の彼方の障子外へ、「鼬男」の小柳が、足音も立てずにやつて來た。私はそれを直感して、態とそつと立つて行つて、「お入りなさい。」と言ふと同時に障子を引きあけた。すると彼は慌てた樣にばた〳〵と一方に走つたが、もう其の時私が部屋の外へ出て居たので、彼は隱れることも出來ず、(或は態とかも知れない。)二つ三つ向ふの部屋の障子にぴたつと顏を伏せてくつついて了つた。

「いらつしやい。」

私が再びかう言つて二三歩その方へ近くと、小柳はちらと此方を向いて、首を傾げながら女の樣な嬌態を作つてにつこりと微笑んだが、すぐまた袖で顏を掩うた。しかし彼はもう逃げ隱れしないで、顏を掩うたま丶此方へそろ〳〵と歩いて來た。

「さあ、お入りなさい。」

私が先に部屋へ入つて、障子際に身を開いて彼を迎へると、彼は入口に、ぽつと顏を赤くして、色氣づいた女の樣な含羞方をしながら、首を柔かく捻ねる樣に垂れて丁寧に挨拶した。そして入つて來た。

幾度も勸めたにも拘らず、彼は座蒲團を横に押しやつて、しづ〳〵と火鉢に手をかざした。

私は高橋氏から聞いてゐるので、特別の興味をもつて彼のすべての物腰を見守つた。始終打俯き勝にして居るので顏はよく分らなかつたが、圓顏の鼻筋の通つた、眼の美しい男だつた。紅い唇や、圓味を帶びた頤なども、思ひなしか女の樣な感じを與へた。色が白く肌理もこまかく、手の甲も女の樣にふつくり膨らみ、柔かい初毛が肱のあたりまで生えてゐさうなのが、袖口から覗かれ、肩から胸にかけての柔かい曲線も、何となく官能的な感じを與へた。

私は彼の身の上について高橋氏から聞いた風をせずに、彼の住所や姓名を聞いたり、三味線の巧いことを賞めたりしたが、彼は多くは答へず、時々眼をあげて私を見ながら、嫣然と笑つてはまた耻かしさうにさし打俯くのであつた。けれど彼は私の前に居ることが何となく嬉しさうであつた。恰も戀する乙女が、相手の男の前に出た時に、何も語らなくても、心が嬉しさで充ちて居ると同じ樣な風があると私には思はれた。私は彼の柔かさうな身を抱き締めてやりたいやうな不思議な感能の刺戟を感じた。

二十分ばかりもそんな風に何を話すともなくもぢ〳〵して居たが、やがて彼は、

「また寄せて頂きますわ。」と言つて立ちあがつた。

私は引き止めたが、

「旦那に言はずに參つたんですから。」と言つて、秋波を送る樣に斜眼に私を見ながら出て行つた。

私は呆氣に取られたやうな氣持で、「小柳絲」と行書で書いた木版刷の極めて小さな、藝者などが持つと同じい、散らし模樣のある名刺が机の端に殘されてゐるのを見つめた。

「旦那？　變だな。」

暫くして私は首を傾けた。あの種の職業の者が、高橋氏の樣な人を旦那と呼ぶのに別に不思議はないとは思つたが、それでもその時の私には何だか妙にその言葉が響いた。

あの女の樣に嬌羞を帶びた媚態は、そしてその小さな女持の名刺は——？

「もしや女では？」

私はそんな疑までその時起したのであつた。

二度目に小柳が來たのは翌日の午前中であつた。その時は彼はもう昨日のやうな羞らひは見せなかつた。もう深く馴れ親しんだもの〻様に、遠慮なく話した。彼の言葉使ひはまるで女のそれであつた。

「先生は（彼は何を根據としてか私を先生と呼んだ）私を隨分變な奴だと思召したでせう。」

「いゝえ、そんなことはありませんよ。」

「きつとさうですわ。最初の中先生は隨分恐い顏をお爲になりましたわ。だから私、一寸お顏を見るとすぐ逃げ出したのですよ。」

「さうでしたか、僕はまたどういふ方か分らなかつたもので、あなたが逃げ隱れなさるのを變に思つたのですよ。」

「さうでせう？――こんなことを申しちや失禮ですけれどね、先生、私何だか先生のお側へ來たかつたんですのよ。一度遠くの方から御様子を伺つて、すぐ好きになりましたの。それで……」と彼はそこで言葉を切つて、「時々寄せて頂戴な。私、あの旦那と居るのが厭で仕様がないんですの。」と別のことを言つた。

「どうしてゞすか？」

「どうしてゞも――。此處へ一緒に來るのも厭だつたんですけれど、無理に行けと仰有るもんですから。」といつて、高橋氏の長唄の極く下手であることを貶して、「でもよう御座いましたわ、先生のお目にかゝれて」。

私は何と言つてよいか分らなかつた。こんなことを、まるで男に岡惚れした女の言ふ様なことを平氣に言ふ彼の心持を、どう判斷していゝか全く分らなかつた。

六

その後彼は、ほんの暫くづゝではあつたが幾度もやつて來た。そして三度目頃からは私の爲に茶を入れて呉れたり、『お掃除してあげませう』とそこらに散らばつて居る紙屑を集めたり、机の上や床の間の上の亂れたのを整へたり、私に後から褞袍を着せかけたり、炬燵の火を直して呉れたり。まるで女房氣取りで居るやうだつた。私は一方に非常に强い好奇心を抱きながら、また一方には以前と違つた意味での氣味惡るさを感じた。彼はまた、

『先生はお酒は召しあがるでせう。いつか一度先生のお酌して見たいわ。』とか、『あの旦那でなくて、先生と一緒に居るんなら、どんなに嬉しいでせう。』とか、『先生は奥樣があるんでせう、（私が獨身で下宿して居ると言ふと）さう？　ぢやいゝわ。東京へ歸つたらきつと遊びに參りますわ。下宿屋なら外に誰も居なくていゝわね。』とか、そんな風な奇怪な挑發的なことをも言つた。

また炬燵に入る時には、決して私の向ひ側に入らないで、隣の座に入つて、妙に私にしなだれかゝる樣な素振りをも見せるのであつた。

或る夜、それは彼と知合になつてから四日目で、私はもう來てから一週間も經つので、一二日したら東京へ歸らうと思つて居た時分だつた。もう十時過ぎて居たが小柳は珍らしく夜分にやつて來た。（彼が夜來たのがこれが始めてゞあつた）。彼は妙に打ち悄れた樣子をして居たが、

『暫くお側に置いて頂戴ね。』と言つて炬燵に入つた。そして、

『今、やつと旦那を寢させて來たの。』と意味ありげに私の顏を覗き込んで嫣然した。そして膝を搖り動かしながら私の方へにじり寄つた。私は一種言ふべからざる壓迫を感じて膝を引込ませた。

『まだお寢みにならないの？』と、彼は炬燵布團の上に片頰をくつつけて、一寸顏を赧らめ媚びるやうに言つた。

『寢てもいゝが、まあア悠くりしなさい。』と冷かに私は言つた。

暫く沈默が續いた。

「旦那が眼を覺まさないかしら！」と彼は何故か氣遣はし相に言つた。

「今寢なすつたばかりなら大丈夫さ。眼をさましたつていゝじやないかね、」

私はもう彼に對してそんな言葉使ひをして居た。

「でも、變に思はれないかしら。」

「どうして？　旦那の寢た後で、君が僕の所へ遊びに來たつていゝじやないか。」

「でも、私今旦那と一緒に寢床に入つてたんですの。そして旦那が眠つたやうですから、そつと出て來たんですわ。」

私は不快な氣持がした。厭な執こい女につき纒はれて居るやうな氣がした。そして私は彼を追ひ拂ふつもりで、

「おや、もう寢ようか。」と言つた。

「寢みませう。」

併し彼はすぐに立ち上らなかつた。炬燵臺の上に顏を伏せて、何か思ひに耽つてゐる樣子だつた。やがて彼は急に何か思ひついた樣に立ちあがつた。そして

「おやお床を延べてあげますわ。」と言つた。

「いゝよ、いまに女中が來るから。」

「でも私に延べさして頂戴な。私でもいゝでせう？」

から媚び笑ひしながら次の室の押入から夜具を運んで來た。

床を延べてから彼は暫くもぢ〳〵その側にしてゐたが、

「私、暖めてあげてよ。いゝでしよ？」いひながら、その儘寢床へ入つた。そして夜着の襟に顏を埋めた。私は彼のさうした痴態を苦笑しながら眺めた。やがてまた彼は顏を出した、

「あゝ、かうして先生とこゝに泊れるといゝな！」と自烈たさうに布團の中で身を搖がした。

「ぢや泊つて行き給へ。」

「泊めて下さる？――あゝ矢張り駄目！旦那が……」

私ははつと吃驚した。思はず身が震ふやうなショックを感じた。

「男をんなだ！　そしてあの高橋技師が……」

かう私は心の中で叫んだ。

「きつとさうに違ひない！」

私はかつて學生時代に物好きに、日本橋の濱町で或る家の二階を借りて住んで居た時に、もと其の同じ部屋に、近くの小劇場へ出る或る新派の女形の俳優が下宿して居たが、彼は男でありながら女の感覺を持つてゐるといふのが評判で、よく男の客が來て泊つて行つたといふことを、その宿の主人が言つて居たことを思ひ出した。

「やはりそんなことが實際あるのだな。」

私はさう思ひつゝ、私の寢床の中に顔を埋めて寢て居る小柳の姿を見つめた。私はぞつとするほど氣味が惡く、且つ恐くなつたが、さりげなく、

「ぢやお湯に暖まつてから寢よう。一緒に行かう。」と誘つた。私はかうして彼からうまく逃れるつもりであつた。

「お湯に？　先生と？」と彼は一寸躊躇したが、「先生となら一緒に入るわ。」と言ひながら寢床から出た。

私は怖れを抱きながらも、祕密を知らうといふ好奇心がこの時むら／＼と起つた。そして私達は部屋を出た。しかし二階へ上る梯子段の所まで來ると、小柳は一寸立ち止つた。そして言つた。

「矢張り私お湯よしますわ。先生だけお入りなさい。」

ある不安の影がその顔色に浮んで居るのを私は認めた。

『何故？　いゝぢやないか。』

私は一寸張合抜けがした。

『いや！　後で一人で入つてよ。そして矢張り泊ることよしにしますわ。お寢みなさいね。』

かう言つて彼は殘り惜しげに私を見返りながら梯子段を上つて行つた。私はぼつうとした。が同時に、寶を獲そこなつたやうな惜しさを感じた。そして未練らしく彼の後姿を見送つた。

翌くる日の正午頃、小柳は高橋博士に伴はれて東京へ歸つて了つた。

——大正八年九月作——

發賣禁止と値上につきて

前號は山川均氏の「勞働運動の戰術としてのサボターヂユ」の一篇が當局の忌諱に觸れ、發賣禁止の危に逢ふた。不敏の結果なりしを天下に謝するの外途がない。

我社同人は何れも三十前後の靑年のみ。同人に産あるものなく、財力者の味方なく、官邊の威に賴む所も更にない。發賣僅か一日にして、この一大痛手の見舞を受けたる、我が社にとりては決して輕き刑科ではなかつた。同人は少からず經營に困憊した。しかも家あるものは家を售り、同人の報酬の如きも、皆無として前進すべく決心した。

宜也、天下の人心は翕然として我社に歸し、發行部數の激増せる近代雜誌界の驚異である。而も紙價の奔騰、印刷費の倍加はこの勢を以てしても尙ほ未償。

出來るものなら、弱者の味方である我社は本誌を實費以下で頒ちたい。そして弱者の權利のためにとも〳〵に戰ひたい。しかし悲しいことには、それに對應すべき經濟上の基礎がない。已むを得ず一誌五拾錢に改正した讀者是を諒せられよ。

改造定價　每月一日發行　一回

冊數	定價	郵税
壹冊	五十錢	二錢
半ケ年	二圓九十錢	不要
壹ケ年	五圓八十錢	不要

外國行郵税また一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候
▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受、前金切の時は發送を停止す
▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待って雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし
但し郵券代用一割增の事
▼御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

▼新刊書寄贈其他編輯上の事は編輯所へ申出られ度し

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北隆館　良明堂　上田屋　至誠堂

大正八年九月二十七日印刷納本
大正八年十月一日發行

本號限八十五錢

編輯發行兼印刷者　東京市南品川東淺間臺二四六　横關利藤太
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番　秀英舍
編輯局　東京南品川東淺間臺二四六　改造編輯所　電話高輪一一九〇
發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社　電話新橋一五〇五　振替東京八四〇二

（改造第一巻第七號）（大正八年九月二十七日印刷納本、大正八年十月一日發行）



東京秀英舍印刷